

# 山陽自動車道建設に伴う 発掘調査 3

亀山遺跡  
西光坊遺跡  
沢寺遺跡  
道口遺跡  
唐津池北遺跡  
上竹西の坊遺跡

1988・10

建設省岡山国道工事事務所  
岡山県教育委員会



1. 1号窯窯体内遺物出土状況（西から）（亀山遺跡）



2. 1号窯最終窯体焚口部分（東から）（亀山遺跡）



1. 2号窯北側から南方平野部を望む（北西から）（亀山遺跡）



2. 2号窯窯体断ち割り状況（南東から）（亀山遺跡）



1. 3号窯分焰柱検出状態（南から）（亀山遺跡）



2. 4号窯窯体溶融部分（南西から）（亀山遺跡）



1. 6号窯窯体内遺物出土状態（南東から）（亀山遺跡）



2. 1号墓検出状態（南東から）（亀山遺跡）



1. 須恵器窯最終床面検出状態（上竹西の坊遺跡）



2. 須恵器窯最初の床面と断面（上竹西の坊遺跡）

## 序

山陽自動車道は、吹田市を起点とし、瀬戸内海沿岸の主要都市を結び、下関市に至る延長約490kmの高速道路で、中国横断自動車道、本州四国連絡道路等の接続により、山陰地方および四国地方と連絡する広域幹線道路網の中心となる高速自動車国道であります。

建設省岡山国道工事事務所では、岡山県浅口郡船穂町から同県笠岡市までの建設を担当し、昭和63年3月1日に供用開始となりました。この間の道路予定地内にある埋蔵文化財の保存に努めるため、文化庁及び岡山県教育委員会などと協議し、昭和54年度から発掘調査を行い記録保存しております。

本書は、一連の発掘調査を行う中で、倉敷市、浅口郡金光町、笠岡市に所在する遺跡について、昭和56年度及び昭和58年度から昭和63年度にかけて実施したものであります。

この調査記録が、弥生時代から中・近世にかけての人々の生活等を解明するうえで貴重な資料となり、郷土の埋蔵文化財として、教育、学術のために広く活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査及び本書の編集は、岡山県教育委員会に委託し実施したものであり、ここに関係各位のご尽力に対し深甚なる謝意を表わすものであります。

昭和63年10月

建設省岡山国道工事事務所

所長 村田正信

## 序

山陽自動車道は、瀬戸内海に沿って建設される交通の大動脈であり、その経済的波及効果は大きいものと期待されております。岡山県においては、昭和63年春に山陽自動車道（早島インターチェンジ～福山東インターチェンジ間）と瀬戸中央自動車道が相次いで開通しました。これらは早島インターチェンジにおいて接続しており、中国・四国を結ぶ幹線としての役割を担うものであります。

発掘調査をした遺跡は広大な面積となるものでもあり、工事との調整に苦慮することもしばしばありましたが、調査も予定通り完了しました。

報告書には、倉敷市、金光町、笠岡市に所在する遺跡を2分冊に分けて収載しております。第1分冊は、倉敷市玉島から金光町にかけての遺跡であり、第2分冊は笠岡市の遺跡で、この報告書は山陽自動車道建設に伴う発掘調査報告書の第3冊目にあたります。これらの地域にあっては、これほど大規模な調査がなされたことがないこともあって、まとまった資料として呈示できる数少ない機会かと思われれます。中でも、亀山遺跡は「亀山焼」の生産地として有名ではありますが、窯跡を含む中世集落跡の発掘調査は今回が初めてであります。また、上竹西の坊遺跡は玉島陶から金光須恵にかけて広がる須恵器生産地の一端を窺わせるものであります。園井土井遺跡は中世館跡の様相を見せてくれます。鍛冶屋遺跡は弥生時代から中・近世までの各時代の遺構が重複する遺跡であります。とりわけ、ここで検出された古墳時代・鎌倉時代の製鉄関連遺構は、岡山県南部における鉄生産を考えるうえで貴重な資料となるものであります。このように、それぞれに特色を持ったこれらの遺跡の報告が、今後の調査研究の資料として、また、文化財保護の一助として活用されることを希望するものであります。

発掘調査にあたっては、建設省中国地方建設局、同岡山国道工事事務所、関係各市町の御協力と山陽自動車道埋蔵文化財保護対策委員の諸先生方の御教示と御指導を得ました。関係各位に対し、記して感謝の意を表します。

昭和63年10月

岡山県教育委員会

教育長 竹内 康夫



## 例 言

1. 報告書は、山陽自動車の建設に伴い、建設省中国地方建設局の依頼を受け、岡山県教育委員会が発掘調査を実施したものである。
2. 報告書に記載する遺跡は、亀山遺跡、西光坊遺跡、沢寺遺跡、道口遺跡、唐津池北遺跡、上竹西の坊遺跡である。
3. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、山陽自動車道埋蔵文化財保護対策委員会の助言を得た。
4. 石材の同定は、岡山理科大学三宅寛教授、陶磁器の鑑定は、九州歴史資料館亀井明德氏の手を煩わし、有益な教示と助言を得た。
5. 獣骨、貝類の同定は、早稲田大学 金子浩昌先生、鉄滓の分析は、新日本製鉄株式会社 大澤正己先生、 $C_{14}$ による年代測定は、京都産業大学 山田治教授、熱残留磁気による年代測定は、島根大学理学部 伊藤晴明教授・時枝克安助教授、樹種の同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、報文及び測定値の報告を得た。報文については報告書に記載している。
6. 報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センターで整理作業を実施した。
7. 報告書に記載された高度値は海拔高であり方位は特に示さぬかぎり磁北である。
8. 報告書に掲載する遺構、遺物の縮尺比率は基本的には共通するが、細部は各遺跡ごとに統一を計った。
9. 報告書で用いた時代区分は、一般的な政治区分に準拠し、それを補うため文化史区分、世紀を併用した。
10. 報告書に関係する遺物、実測図、写真、マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

## 目 次

I	収載遺跡の地理的・歴史的環境	1
II	調査に至る経緯と調査体制	4
III	発掘調査報告	
1	亀山遺跡	11
2	西光坊遺跡	351
3	沢寺遺跡	361
4	道口遺跡	379
5	唐津池北遺跡	399
6	上竹西の坊遺跡	423

## 図 目 次

第1図	調査遺跡と周辺遺跡の分布図 (1/50,000)	2	第3図	山陽自動車道と調査遺跡位置図 (1/50,000)	4
第2図	天王山古墳 (1/600)	3	第4図	発掘調査遺跡位置図	5

## 表 目 次

発掘調査遺跡一覧表	5
-----------	---

## 巻頭カラー図版目次

巻頭カラー図版 1-1	1号窯窯体内遺物出土状況 (西から) (亀山遺跡)
2	1号窯最終窯体焚口部分 (東から) (亀山遺跡)
巻頭カラー図版 2-1	2号窯北側から南方平野部を望む (北から) (亀山遺跡)
2	2号窯窯体断ち割り状況 (南東から) (亀山遺跡)
巻頭カラー図版 3-1	3号窯分焰柱検出状態 (南から) (亀山遺跡)
2	4号窯窯体溶融部分 (南西から) (亀山遺跡)
巻頭カラー図版 4-1	6号窯窯体内遺物出土状態 (南から) (亀山遺跡)
2	1号墓検出状態 (南から) (亀山遺跡)
巻頭カラー図版 5-1	須恵器窯最終床面検出状態 (東から) (上竹西の坊遺跡)
2	須恵器窯最初の床面と断面 (東から) (上竹西の坊遺跡)

## I 収載遺跡の地理的・歴史的環境

倉敷市玉島から浅口郡金光町付近の状況について概要を述べることにしたい。この地域は岡山県の南西部に位置している。高梁川河口部の西岸にあたり、低丘陵に挟まれた沖積平野が東西に長く続いている。沖積平野の大部分は近世以降の干拓によって形成されたもので、それ以前は海が入っていた地域である。遥照山・弥高山などからひろがる山塊がつづき、小さな支丘が派生していて、その間に谷が入り込んでいる。干拓地の南には七島と呼ばれるかつての島々が連なっている。古くは「もたいの泊」といわれた港が玉島八島にあったといわれ、海上交通上重要な地域であったと考えられる。「もたい」とは襲のことで、亀山焼の襲との関連が推定されており、あるいは亀山焼の積み出し港であったと思われる。奈良・平安時代には備中国浅口郡に属し、後に、富田庄、佐方庄などの荘園もおかれている。

旧石器時代の遺跡としては、高梁川に近接した福島と呼ばれる独立丘陵上からナイフ形石器が出土しているが、余り知られていない。高梁川河口部西岸の倉敷市玉島地区はかつて入海で、島も多く、縄文貝塚の密集する地域である(註1)。周辺部の著名な遺跡としては、船穂町里木貝塚・島地貝塚しまじがあり、縄文時代前期以後の遺物を出土している。その他に、長尾神社南遺跡・山の神西遺跡・岸本遺跡・道口川川床遺跡・畑の前遺跡・阿原遺跡・みなと橋東遺跡・加賀池遺跡などが知られているが、今回の調査によって、玉島道口遺跡においても、縄文時代早期～晩期の遺物を出土している。

弥生時代の遺跡は、従来、あまり知られていなかった。島地貝塚から弥生時代前期の土器が出土しているほか、玉島富・桜遺跡は弥生時代中期の遺跡である。今回の山陽自動車道関連の調査によって、玉島道口遺跡、同唐津池北遺跡、浅口郡金光町上竹西の坊遺跡で、中期の集落や遺物の状況が明らかになりつつある。倉敷市玉島平松からは表採資料であるが、弥生時代中期の土器片とともに、銅鏃1点が発見されている(註2)。

古墳時代の遺跡としては、島地貝塚で古墳時代の土器を出土している。今回の調査においても玉島道口遺跡で、竪穴住居跡等も検出された。古墳の分布についてみると、他の地域と比べると比較的少ない。丘陵部を越えた北側の小田川水系では多数の古墳が分布しているのとは対照的である。その中で、玉島八島天王山古墳の存在が注目される。古くから知られていたようであるが、大正年間に県道工事のため、一部が削られた。墳形は前方後円墳と認識されていたが、規模等については明らかにされていなかった。1985年に墳丘実測が行われて、少し詳しく知ることができるようになった(註3)。墳丘は表土がかなり流失し、上部には神社が建ち、周



第1図 調査遺跡と周辺遺跡分布図 (1/50,000)

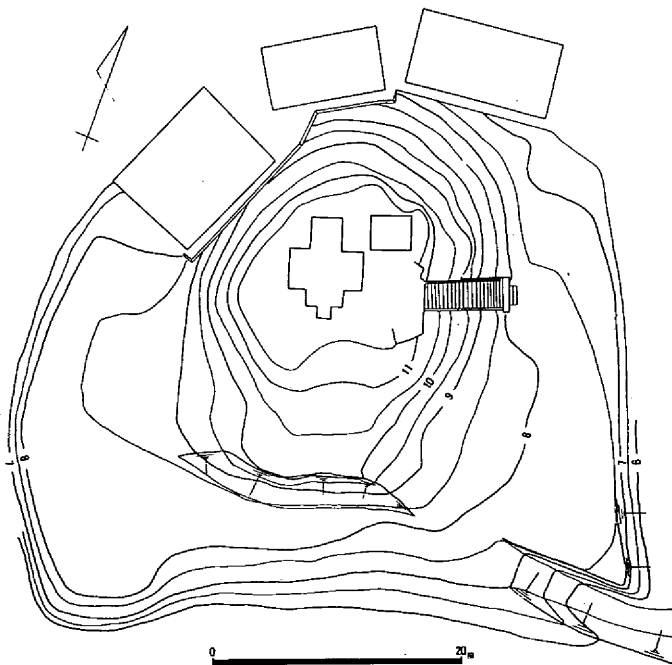
- |              |              |            |             |             |
|--------------|--------------|------------|-------------|-------------|
| 1 亀山遺跡       | 2 西光坊遺跡      | 3 沢寺遺跡     | 4 道口遺跡      | 5 唐津池北遺跡    |
| 6 上竹西の坊遺跡    | 7 大石古墳       | 8 中世墓地     | 9 中世墓地      | 10 横内上池西奥窯跡 |
| 11 横内上池北銀鉾跡1 | 12 横内上池北銀鉾跡2 | 13 横内上池西窯跡 | 14 奥池南窯跡    | 15 黒土窯跡     |
| 16 石間崎窯跡     | 17 陶神社南窯跡    | 18 山の辻窯跡   | 19 陶山城跡     | 20 真菜窯跡     |
| 21 大堂窯跡      | 22 道木遺跡      | 23 檜村西窯跡   | 24 寒田北貝塚    | 25 寒田北窯跡    |
| 26 寒田南窯跡3    | 27 寒田南窯跡1    | 28 寒田瓦窯跡   | 29 寒田南窯跡2   | 30 船岩山古墳    |
| 31 寒田南古墳     | 32 鶏尾貝塚      | 33 田の内古墳   | 34 長尾百々遺跡   | 35 明地北2号墳   |
| 36 明見貝塚      | 37 明地北3号墳    | 38 明地北1号墳  | 39 長尾後貝塚    | 40 長尾神社南遺跡  |
| 41 長尾幼稚園西遺跡  | 42 水溜1号墳 2号墳 | 43 補陀山門通寺  | 44 住吉神社石積遺構 | 45 龜崎城跡     |
| 46 東元浜貝塚     | 47 西元浜貝塚     | 48 七島東貝塚   | 49 乗越貝塚     | 50 島地貝塚     |
| 51 島地北貝塚     | 52 要害山城跡     | 53 阿原貝塚    | 54 道越城跡     | 55 新地遺跡     |
| 56 竜王権現西古墳   | 57 龜山前田下池西遺跡 | 58 一つ塚古墳   | 59 北川遺跡     | 60 大日宝篋印塔   |
| 61 神前神社窯跡    | 62 天王山古墳     | 63 浜貝塚     | 64 浜遺跡      | 65 惣堂様貝塚    |
| 66 月の木貝塚     | 67 龜山薬師西古墳   | 68 惣堂様貝塚   | 69 惣堂様古墳    | 70 道口古墳     |
| 71 とうし山城跡    | 72 均南遺跡      | 73 桜地窯跡    | 74 桜地西遺跡    | 75 道口窯跡     |
| 76 雁ヶ谷下地遺跡   | 77 木の山神社裏古墳  | 78 陶谷窯跡    | 79 大木池古墳    | 80 平松遺跡     |
| 81 東谷古墳      | 82 国境石       | 83 原ヶ市遺跡   | 84 池神社南遺跡   | 85 八幡神社南遺跡  |
| 86 散布地       | 87 城跡        | 88 寺尾貝塚    | 89 東郷遺跡     | 90 西元浜古墳    |
| 91 釜屋敷遺跡     | 92 窯跡        | 93 小西原貝塚   | 94 厄神塚古墳    | 95 奥迫遺跡     |
| 96 清明塚古墳     | 97 散布地       | 98 加賀谷5号墳  | 99 加賀池遺跡    | 100 宮地池遺跡   |

囲には児童公園がつくられている。墳形は前方後円墳であるが、前方部は県道のため削られている。規模については変形された部分もあって、明確ではないが、現存長30m、後円部径26m、同高3.84m、くびれ部高2mである。前方部は、県道より東へ延びるのではないかといた推測もなされていたが、比較的短かく、全長40mくらいと推定される。墳丘は地山を削り出した上に、現存高2mの盛土を行っている。墳丘の斜面には葺石が一部残っている。円筒埴輪の破片も少量採集されているが、主体部についてはわかっていない。時期は5世紀後半頃と推定される。当時の海に突出した丘上に位置することから海上交通等に深くかかっているのであろう。その他には、古い時期の古墳はわかっていないが、後期古墳が少数分布している。

高梁川河口部西岸では、須恵器の窯跡群があり、浅口郡金光町須恵、倉敷市玉島陶といった地名も残っている。玉島陶では20か所余の須恵器窯跡がある。7世紀初頭以降のものが知られており、須恵器の他に瓦を焼成した寒田<sup>さまた</sup>3号窯跡(倉敷市指定史跡)もある。寒田5号窯跡(7世紀)、黒土1・2号窯跡(8世紀)の発掘調査が近年実施されている(註4)。今回の調査で、金光町上竹西の坊遺跡においても須恵器窯跡が調査された。中世の焼物としては、今回一部を発掘した須恵器系の亀山焼窯跡群が玉島八島にあり、早島式土器と呼ばれる土器の窯跡も浅口郡鴨方町で調査されている。山裾部には中世貝塚も多く、集落遺跡が多数分布している。

## 註

- 註1 藤田憲司・中山頼夫  
「倉敷市玉島地区とその  
周辺の新発見縄文時代資  
料」『倉敷考古館研究集  
報』第18号 1984年
- 註2 藤田憲司「倉敷市玉  
島富平松発見の銅鏃」『倉  
敷考古館研究集報』第9  
号 1974年
- 註3 正岡陸夫・福田正継  
・古谷野寿郎で実測を  
行った。
- 註4 柳瀬昭彦他『黒土窯  
址・寒田窯址』岡山県教  
育委員会 1979年



第2図 天王山古墳 (1/600)

## II 調査に至る経緯と調査体制

### 1. 発掘調査の経緯

山陽自動車道は1971年に基本計画が策定された。翌年にはルート決定し、予定ルート周辺の文化財の分布状況についての協議が建設省で行われた。これに基づき、県教育委員会は1972年に国庫補助を受け、岡山県遺跡保護調査団の協力を得て、兵庫県境から広島県境に至るまで発表された路線の約500m幅内の遺跡分布調査を行った。その結果181か所の遺跡が予定路線内に存在することが判明した。1973年には姫路～備前八木山インター間の路線発表、施工命令が出



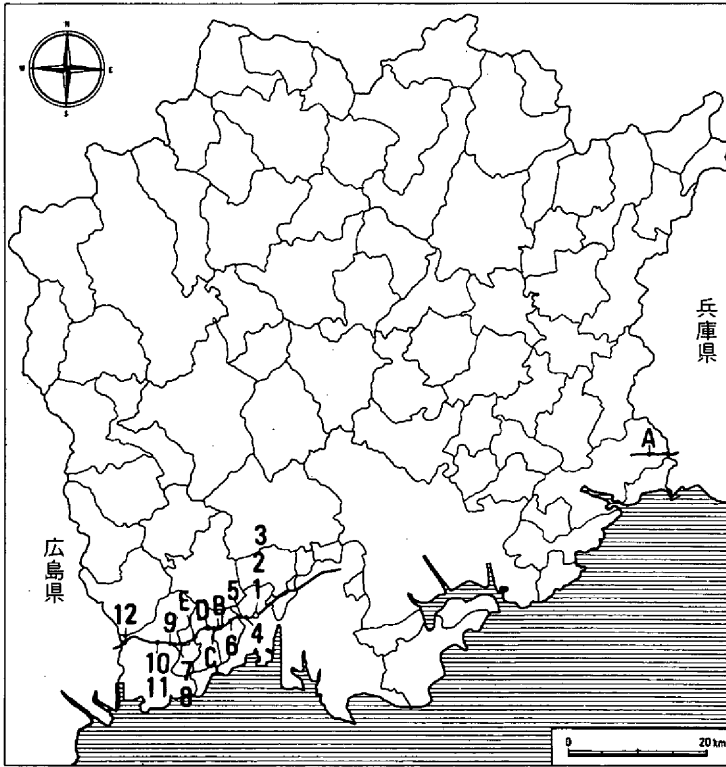
1. 龜山遺跡 2. 西光坊遺跡 3. 沢寺遺跡 4. 道口遺跡 5. 唐津池北遺跡 6. 上竹西の坊遺跡

第3図 山陽自動車道と調査遺跡の位置図 (1/50,000)

II 調査に至る経緯と調査体制

され、日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所と協議を重ね、1972年に変更ルート上で発見された荒神社東遺跡の発掘調査を実施し、報告書を刊行した（註1）。

1972年には福山市～倉敷市玉島間のルート決定が行われ、日本道路公団から委託を受けた建設省中国地方建設局岡山国道工事事務所と協議を行い、1979～1980年度にかけて、浅口郡鴨方町内の5遺跡の発掘調査を実施し、



第4図 発掘調査遺跡位置図

発掘調査遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	担当者	番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	担当者
1	龜山遺跡	倉敷市玉島八島	58.10～58.12	960	正岡	10	鍛冶屋遺跡	笠岡市小平井	59.10～59.11	344	福田
			59.12～63.3	4,000	正岡・古谷野				60.8.19～60.8.31	120	福田
			60.4.1～60.9.21	5,200	岡田・福田・田中・武田				60.10.1～61.3.31	5,157	岡田・武田
2	西光坊遺跡	倉敷市玉島八島	58.10～58.12	210	正岡	11	中畦遺跡	笠岡市小平井	60.2	98	福田
			59.11～59.12	270	正岡・福田・古谷野				12	内山遺跡 内山古墳	笠岡市森坂
3	沢寺遺跡	倉敷市玉島八島	58.10～58.12	1,390	正岡	A	荒神社東遺跡	備前市福石			
			59.9～59.11	1,550	正岡・福田・古谷野						
4	道口遺跡	倉敷市玉島	59.2～59.3	800	正岡	B	阿坂古墳	鴨方町益坂	54.10.15～54.12.18	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告42	
			59.6～59.7	1,030	正岡・福田・古谷野						
5	唐津池北遺跡	倉敷市玉島道口	59.1～59.2	1,200	正岡	C	向原遺跡	鴨方町益坂	54.5.10～54.7.11		
			59.4～59.6	4,030	正岡・福田・古谷野						
6	上竹西の坊遺跡	金光町阿坂	56.10.1～57.3.31	2,750	井上	D	和田遺跡 宮の脇古墳	鴨方町地頭上	54.4.1～54.12.19		
			58.4.1～59.3.31	6,900	井上・武田						
7	本谷遺跡	笠岡市今立	59.8～59.10	200	福田	E	沖の店遺跡	鴨方町小坂西	55.4.24～55.7.31		
8	柳宜ヶ軒遺跡	笠岡市園井	59.11～59.12	460	福田						
9	園井土井遺跡 (諏訪神社裏遺跡)	笠岡市園井	59.12～	850	福田						
			60.9.2～61.3.31	4,720	福田・田中						

報告書を刊行した（註2）。

その後、1981年度は浅口郡金光町内の第1次調査を実施し、上竹西の坊遺跡において須恵器窯跡と弥生時代の集落跡を検出し、範囲を確定した。1982年度は倉敷市玉島地内の用地買収が遅延していたことから、発掘調査を中断した。1983年には浅口郡金光町上竹西の坊遺跡の全面

## II 調査に至る経緯と調査体制

調査を実施するとともに、倉敷市玉島地内の第1次調査を実施した。倉敷市玉島地区の用地買収はさらに遅れたため、玉島八島地内の調査に着手できたのは10月に入ってからである。玉島八島地内では3地区に遺跡のひろがりを確認した。東側では亀山焼窯跡群と中世集落跡、その西側では西光坊において中世建物、西方の沢寺においては中世集落跡がそれぞれ確認された。

1984年1月から倉敷市玉島道口地内の第1次調査に着手した。大規模農道より北側の丘陵部用地内全域を対象にトレンチ調査を行い、唐津池の北で弥生時代の集落跡を確認し、範囲を確定した。大規模農道の南側の丘陵上においても第1次調査を実施したが、きわめて少量の遺物を出土しただけで、遺構は検出されなかった。ところが、この東側の道口川に面した山裾部に集落跡が確認され、道口遺跡とした。

1984年4月から倉敷市玉島道口唐津池北遺跡の全面調査を実施し、6月に完了した。ひきつづいて、新たに確認された道口遺跡の全面調査を実施し、7月に完了した。9月から玉島八島地内の調査に着手した。まず、沢寺遺跡を9月～11月、西光坊遺跡を11月～12月、亀山遺跡の東斜面を12月～1985年3月まで実施した。

1984年度には笠岡市内に所在する6か所の遺跡についても第1次調査を実施した。その結果、本谷遺跡（禰宜ヶ峠遺跡を改称）、園井土井遺跡（諏訪神社裏山遺跡を改称）で、中世の集落遺跡を確認し、範囲を確定した。鍛冶屋遺跡は当初の遺跡範囲より東の丘陵部にも鉄滓の散布がみられ、トレンチ調査によって製鉄遺跡を確認した。さらに北側斜面部にも全面的にひろがっているのが確認され、最終的には約28,000㎡の広大な面積となった。禰宜ヶ峠遺跡（中川遺跡を改称）、中畦遺跡、内山遺跡、内山古墳は第1次調査の結果、若干の遺物散布がみられただけで、遺構はまったく検出されなかったことから、第1次調査をもって調査を終了した。

1985年4月からは亀山遺跡の丘陵部を調査し、亀山焼窯跡6基と集落跡などを検出し、9月に調査を完了した。園井土井遺跡の調査は9月から開始し、1986年3月で完了した。鍛冶屋遺跡は8月から全面調査に着手し、北斜面への遺跡のひろがりについても調査を行った。1986年4月からは前年にひきつづいて、鍛冶屋遺跡の全面調査を実施し、1987年1月には現地調査を完了した。その後、1988年3月まで、1981年度以降の発掘調査の報告書作成作業を行い、1988年度において報告書を印刷・発刊することとなった。

笠岡市園井土井遺跡では、中世の有力者の居館と推定される遺構が検出されたことから現地説明会を開催した。

### 2. 調査の体制

発掘調査は建設省中国地方建設局と岡山県の委託契約に基づき岡山県教育委員会があたり、調査の専門的指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた下記の方々に



「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」（以下、対策委員会）の委員を委嘱した。なお、1984年11月1日には文化課から独立して岡山県古代吉備文化財センターが設置され、発掘調査を担当することになった。

山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員

鎌木義昌	岡山理科大学	高見周夫(1985年から)	岡山県遺跡保護調査団
新納 泉(1985年から)	岡山大学	西岡憲一郎	岡山県遺跡保護調査団
西川 宏	山陽女子高校	根木 修	岡山市教育委員会
間壁葎子	倉敷考古館	水内昌康	岡山県文化財保護審議会委員
近藤義郎(1984年まで)	岡山大学	藤田憲司(1984年まで)	倉敷考古館

昭和56年度

岡山県教育委員会文化課

課 長	早田憲治	課長代理	吉光一修
文化財主幹	高原健郎	埋蔵文化財係長	河本 清
主 任	田中建治	文化財保護主査	井上 弘
主 事	金尾一志		

昭和58年度

岡山県教育委員会文化課

課 長	早田憲治	課長代理	橋本泰夫
課長代理	吉本唯弘	課長補佐	河本 清
主 任	遠藤勇次	文化財保護主査	正岡睦夫
文化財保護主査	井上 弘	主 事	武田恭彰
主 事	楢原充二		

昭和59年度 4月1日～10月31日

岡山県教育委員会文化課

課 長	松元昭憲	参 事	橋本泰夫
課長代理	逸見英邦	文化財主幹	佐々木清
課長補佐	河本 清	文化財保護主査	正岡睦夫
文化財保護主査	福田正継	文化財保護主査	古谷野寿郎
主 任	古瀬 宏	主 任	遠藤勇次
主 事	楢原充二		

昭和59年度 11月1日～3月31日

岡山県教育委員会文化課

II 調査に至る経緯と調査体制

課長	松元昭憲	課長代理	逸見英邦
課長代理	吉本唯弘	課長補佐	河本 清
主任(兼)	遠藤勇次		

岡山県古代吉備文化財センター

所長(兼)	松元昭憲	次長	橋本泰夫
総務課長	佐々木清	主任	古瀬 宏
主任	遠藤勇次	主事	檜原充二
調査課長(兼)	河本 清	文化財保護主査	正岡睦夫
文化財保護主査	福田正継	文化財保護主査	古谷野寿郎

昭和60年度

岡山県教育委員会文化課

課長	松元昭憲(4月1日～12月15日)	課長	高橋誠記(12月16日～3月31日)
課長代理	逸見英邦	課長代理	吉本唯弘
埋蔵文化財係長	正岡睦夫	主査(兼)	遠藤勇次

岡山県古代吉備文化財センター

所長(兼)	松元昭憲(4月1日～12月15日)	所長(兼)	高橋誠記(12月16日～3月31日)
次長	橋本泰夫	総務課長	佐々木清
主査	遠藤勇次	主任	花本静夫
主事	檜原充二	調査課長	河本 清
文化財保護主査	岡田 博	文化財保護主任	福田正継
文化財保護主事	田中 寿	主事	武田恭彰

昭和61年度

岡山県教育委員会文化課

課長	高橋誠記	課長代理	逸見英邦
埋蔵文化財係長	正岡睦夫	主任	仁宮秀博

岡山県古代吉備文化財センター

所長	橋本泰夫	総務課長	佐々木清
主査	遠藤勇次	主任	花本静夫
主事	片山淳司	調査課長	河本 清
文化財保護主査	松本和男	文化財保護主査	岡田 博
文化財保護主任	福田正継	文化財保護主事	田中 寿

### 3. 調査上の問題点

1972年度にはルート全域の遺跡分布調査を実施し、成果を得ていたが、その後の分布調査等によって新たに発見された遺跡も多い。分布調査時には草木が茂っていることから発見しにくいといった点も今後の課題である。繰り返し分布調査を実施し、さらに樹木伐採後の綿密な分布調査が必要である。また、分布調査によって発見されていた遺跡については、範囲が著しく拡大したものもある。笠岡市園井土井遺跡では丘陵部を遺跡としていたが、水田地帯が主要な遺跡であることが判明した。笠岡市鍛冶屋遺跡では、当初推定していた範囲よりも数倍にひろがることが明らかとなった。遺跡範囲の推定についても、十分な事前調査が必要であることがあらためて認識された。

供用開始の時期が瀬戸大橋の開通にあわせて行うことが決定されたにもかかわらず、用地買収は著しく遅延し、発掘調査の着手が遅れた。笠岡市内の遺跡については、やむをえず用地買収が完了しない前に地権者の了解を得て、第1次調査を実施した。そのため、トレンチ設定場所や本数についても制限せざるをえない状況も生じた。

笠岡市本谷遺跡の調査では、第1次調査を県教育委員会で実施したが、鍛冶屋遺跡の調査面積が莫大なものとなったことから、他の担当職員1名を配置転換して4名で対応することとした。しかし、県教育委員会だけの対応では、十分な調査期間が確保できないことから、建設省、岡山県教育委員会、笠岡市教育委員会などで協議を行い、笠岡市が直接建設省から委託を受けて発掘調査を担当することになった。

従来、山陽自動車道建設に伴う発掘調査は県教育委員会で担当してきたところである。したがって、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会にも諮った。このことに関して、岡山県遺跡保護調査団からは県教育委員会に対して次のような主旨の申し入れが行われた。

笠岡市へ発掘調査を委託しないで、県教育委員会で実施されたい。今回の事例は前例とはしない。山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会は従来通り、山陽自動車道全体の埋蔵文化財について検討すべきである。同委員の欠員については補充してほしい。岡山県遺跡保護調査団との覚え書きや慣行は尊重されたい。

県教育委員会では岡山県遺跡保護調査団に対し、申し入れの主旨には十分留意する旨を伝え、委員の補充を行うとともに、本谷遺跡についても笠岡市教育委員会からの報告や現地視察等も行われた。笠岡市教育委員会では本谷遺跡の発掘調査を完了し、報告書を刊行している（註3）。

#### 註

註1 岡山県教育委員会「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」1 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』

## II 調査に至る経緯と調査体制

註2 岡山県教育委員会「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」2 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』  
42 1981年

註3 笠岡市教育委員会「山陽自動車道建設に伴う本谷遺跡」『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告』1  
1987年

かめ やま  
亀 山 遺 跡

## 例 言

1. 本書は建設省の委託により、山陽自動車道の建設に先がけて、昭和59・60（1984・85）年に岡山県教育委員会が実施した倉敷市玉島八島（やしま）所在の亀山（かめやま）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の実施は、県文化課分室（昭和58年度）および岡山県古代吉備文化財センター（以下センター）があたり、昭和58年度の確認調査を正岡陸夫、昭和59年度の発掘調査を正岡・古谷野寿郎、昭和60年度の発掘調査を岡田 博・福田正継・田中 寿・武田恭彰が担当した。
3. 発掘調査の実施にあたっては、埋蔵文化財保護対策委員会の指導を受けた。また、窯の調査ならびに出土品については、奈良国立文化財研究所 西村 康・上原真人氏の調査指導を受けた。さらに倉敷市教育委員会 福本 明氏には、発掘調査ならびに報告書作成に助力をいただいた。
4. 発掘調査における写真撮影は、担当調査区ごとに調査担当者があつた。報告書収載の遺物写真の撮影は岡田が担当した。
5. 出土遺物の整理については、水洗作業等は現地調査事務所ではほぼ完了し、復元・注記作業等については昭和62年度、センターで実施した。
6. 遺構図の作成は年度ごとに調査担当者があつた。センターで実施した遺物実測図の作成および、遺構図を含めたトレースは、正岡・岡田・福田がおもにあたり、田中・武田がこれを助けた。
7. 本書の掲載図のうち平面図は、磁北を使用し、断面図等を示すレベルはすべて海拔高を指標としている。
8. 収載遺物にはすべて通し番号を付し、土器・瓦類は数字のみ、土製品にはC、金属製品にはM、石製品にはSを付した。
9. 陶磁器、石製品および自然科学分野における鑑定・分析等については、下記の諸先生方のご教示を得、一部の成果は玉稿にしたためていただいた。記して深謝の意を表する次第である。
  - (1) 1号窯～6号窯窯体の考古地磁気法による年代決定 島根大学理学部 伊藤晴明・時枝克安
  - (2) 液体シンチレーション<sup>14</sup>C年代測定 京都産業大学 山田 治
  - (3) 出土獣骨（動物遺存体）の同定 早稲田大学 金子浩昌
  - (4) 石製品の石材同定 岡山理科大学 三宅 寛
  - (5) 輸入陶磁器の産地同定 九州歴史資料館 亀井明徳

10. 発掘調査ならびに報告書の作成については、下記の方々の助言・ご教示を受けた。また、本書の編集は岡田が行った。

間壁忠彦・白井洋輔・狐塚省蔵・伊藤 晃・上西節雄・亀田修一・福本 明・網本善光（順不同）

11. 亀山焼の製作技術・焼成窯の構造等については陶芸家好本宗峰氏の懇切なご教示・ご指導を賜った。記して深謝の意を表す。

12. 発掘調査ならびに報告書作成にかかるすべての記録は、センターに保管し収蔵している。



播鉢をこぐ

「病草紙」(平安末期)より

## 目次

第1章 発掘調査の経過と概要	21
第1節 発掘調査に至る契機と経過	21
第2節 発掘調査の体制	23
第2章 地理的・歴史的環境	26
第1節 地理的環境	26
第2節 歴史的環境	29
第3章 西調査区発掘調査の概要(1985年度)	31
第1節 窯業生産関連遺構の調査	31
1. 窯跡	
2. 灰原	
3. 土壙	
4. 土器溜り	
第2節 生活関連遺構の調査	177
1. 建物・柱穴群	
2. 埋甕	
3. 土壙	
4. 溝	
5. 墓址	
6. 貝塚	
7. 包含層出土遺物	
第4章 東調査区発掘調査の概要(1984年度)	199
第5章 自然科学分野における成果	211
1. 亀山古窯址群の考古地磁気年代 時枝克安・伊藤晴明	
2. 亀山遺跡出土の動物遺存体 金子浩昌	
第6章 総括	229

## 図目次

第1図 発掘調査区域図(1/2500)	22	第13図 1号窯出土遺物(3)(1/4)	40
第2図 遺跡の位置	25	第14図 1号窯出土遺物(4)(1/4)	41
第3図 遺跡周辺地形図(1/10000)	27	第15図 2・3号窯周辺図(1/200)	42
第4図 遺跡周辺字名(1/5000)	28	第16図 2号窯実測図(1/40)	43
第5図 周辺主要遺跡分布図(1/25000)	30	第17図 2号窯床面実測図(1/40)	44
第6図 発掘調査区検出遺構全体図 (1/500)	33—34	第18図 2号窯出土遺物(1)(1/4)	45
第7図 1号窯周辺図(1/150)	35	第19図 2号窯出土遺物(2)(1/4)	46
第8図 1号窯実測図(1/40)	36	第20図 2号窯出土遺物(3)(1/4)	47
第9図 1号窯窯体断面図(1/40)	37	第21図 2号窯出土遺物(4)(1/4)	48
第10図 1号窯出土遺物(1)(1/4)	37	第22図 2号窯出土遺物(5)(1/4)	49
第11図 1号窯窯体実測図(1/40)	38	第23図 3号窯実測図(1/40)	50
第12図 1号窯出土遺物(2)(1/4)	39	第24図 4号窯周辺図(1/150)	51
		第25図 4号窯実測図(1/40)	52



第26図	4号窯出土遺物(1)(1/4)……………53	第67図	土器溜り1出土遺物(2)(1/4)…87
第27図	4号窯出土遺物(2)(1/4)……………53	第68図	土器溜り1周辺出土遺物(1/4)88
第28図	5・6号窯周辺図(1/150) ……54	第69図	土器溜り1北側工事用道路部分出土遺物(1/4)……………89
第29図	5号窯実測図(1/40)……………55	第70図	土器溜り2出土遺物(1/4)……90
第30図	5号窯出土遺物(1/4)……………56	第71図	土器溜り3出土遺物(1)(1/4)…91
第31図	5号窯周辺出土遺物(1/4)……57	第72図	土器溜り3出土遺物(2)(1/4)…92
第32図	6号窯実測図(1/40)……………58	第73図	土器溜り3出土遺物(3)(1/4)…93
第33図	6号窯出土遺物(1)(1/4)……………59	第74図	土器溜り3出土遺物(4)(1/4)…94
第34図	6号窯出土遺物(2)(1/4)……………60	第75図	土器溜り3出土遺物(5)(1/4)…95
第35図	6号窯出土遺物(3)(1/4)……………61	第76図	土器溜り3出土遺物(6)(1/4)…96
第36図	6号窯出土遺物(4)(1/4)……………62	第77図	土器溜り3出土遺物(7)(1/4)…97
第37図	6号窯出土遺物(5)(1/4)……………62	第78図	土器溜り3出土遺物(8)(1/4)…98
第38図	6号窯周辺出土遺物(1)(1/4)…63	第79図	土器溜り3出土遺物(9)(1/4)…99
第39図	6号窯周辺出土遺物(2)(1/4)…63	第80図	土器溜り3出土遺物(10)(1/4)…100
第40図	灰原1・4号窯・土器溜り3配置図 (1/150) ………………64	第81図	土器溜り3出土遺物(11)(1/4)…101
第41図	灰原1・4号窯・土器溜り3土層断面図 (1/40)……………65	第82図	土器溜り3出土遺物(12)(1/4)…102
第42図	灰原1出土遺物(1)(1/4)……………66	第83図	土器溜り3出土遺物(13)(1/4)…103
第43図	灰原1出土遺物(2)(1/4)……………66	第84図	土器溜り3出土遺物(14)(1/4)…104
第44図	灰原1出土遺物(3)(1/4)……………67	第85図	土器溜り3出土遺物(15)(1/4)…104
第45図	灰原1出土遺物(4)(1/4)……………68	第86図	土器溜り3出土遺物(16)(1/4)…105
第46図	灰原1出土遺物(5)(1/4)……………69	第87図	土器溜り3出土遺物(17)(1/2)…105
第47図	灰原1出土遺物(6)(1/4)……………70	第88図	土器溜り4出土遺物(1/4) ……107
第48図	灰原1出土遺物(7)(1/4)……………71	第89図	土器溜り5出土遺物(1)(1/4)…108
第49図	灰原1出土遺物(8)(1/4)……………72	第90図	土器溜り5出土遺物(2)(1/4)…108
第50図	灰原1出土遺物(9)(1/4)……………73	第91図	土器溜り5出土遺物(3)(1/4)…109
第51図	灰原1出土遺物(10)(1/4)……………74	第92図	土器溜り5出土遺物(4)(1/4)…110
第52図	灰原1出土遺物(11)(1/4)……………75	第93図	土器溜り5出土遺物(5)(1/4)…111
第53図	灰原1出土遺物(12)(1/4)……………75	第94図	土器溜り5出土遺物(6)(1/4)…112
第54図	灰原1出土遺物(13)(1/4)……………76	第95図	土器溜り5出土遺物(7)(1/4)…113
第55図	灰原1出土遺物(14)(1/4)……………77	第96図	土器溜り5出土遺物(8)(1/4)…114
第56図	灰原1出土遺物(15)(1/4)……………77	第97図	土器溜り6出土遺物(1)(1/4)…115
第57図	参考図(1/4)……………77	第98図	土器溜り6出土遺物(2)(1/4)…116
第58図	土壙1実測図(1/60)……………78	第99図	土器溜り6出土遺物(3)(1/4)…117
第59図	土壙1出土遺物(1)(1/4)……………79	第100図	土器溜り6出土遺物(4)(1/4)…118
第60図	土壙1出土遺物(2)(1/4)……………80	第101図	土器溜り6出土遺物(5)(1/4)…119
第61図	土壙1出土遺物(3)(1/4)……………81	第102図	土器溜り7出土遺物(1)(1/4)…121
第62図	土壙1出土遺物(4)(1/4)……………82	第103図	土器溜り7出土遺物(2)(1/4)…122
第63図	土壙1出土遺物(5)(1/4)……………83	第104図	土器溜り7出土遺物(3)(1/4)…123
第64図	土壙2実測図(1/60)……………84	第105図	土器溜り7出土遺物(4)(1/4)…124
第65図	土壙2土層断面図(1/60)……………85	第106図	土器溜り7出土遺物(5)(1/4)…125
第66図	土器溜り1出土遺物(1)(1/4)…86	第107図	土器溜り7出土遺物(6)(1/4)…126
		第108図	土器溜り7出土遺物(7)(1/4)…127

- 第109図 土器溜り7出土遺物(8)(1/4)・128  
 第110図 土器溜り7出土遺物(9)(1/4)・129  
 第111図 土器溜り7出土遺物(10)(1/4)・130  
 第112図 土器溜り7出土遺物(11)(1/4)・131  
 第113図 土器溜り7出土遺物(12)(1/4)・132  
 第114図 土器溜り7出土遺物(13)  
 (1/4・1/2)……………133  
 第115図 土器溜り8出土遺物(1/4) ……133  
 第116図 土器溜り9出土遺物(1)(1/4)・134  
 第117図 土器溜り9出土遺物(2)(1/4)・135  
 第118図 土器溜り9出土遺物(3)(1/4)・136  
 第119図 土器溜り9出土遺物(4)(1/4)・137  
 第120図 土器溜り9出土遺物(5)(1/4)・138  
 第121図 土器溜り9出土遺物(6)(1/4)・139  
 第122図 土器溜り9出土遺物(7)(1/4)・140  
 第123図 土器溜り9出土遺物(8)(1/4)・141  
 第124図 土器溜り9出土遺物(9)(1/4)・142  
 第125図 土器溜り9出土遺物(10)(1/4)・143  
 第126図 土器溜り9出土遺物(11)(1/4)・144  
 第127図 土器溜り9出土遺物(12)(1/4)・145  
 第128図 土器溜り9出土遺物(13)(1/4)・146  
 第129図 土器溜り9出土遺物(14)(1/4)・147  
 第130図 土器溜り9出土遺物(15)(1/4)・148  
 第131図 土器溜り9出土遺物(16)(1/4)・148  
 第132図 土器溜り9出土遺物(17)(1/4)・149  
 第133図 土器溜り9出土遺物(18)  
 (1/4・1/2)……………150  
 第134図 土器溜り10出土遺物(1)(1/4)・152  
 第135図 土器溜り10出土遺物(2)(1/4)・153  
 第136図 土器溜り10出土遺物(3)(1/4)・154  
 第137図 土器溜り10出土遺物(4)(1/4)・155  
 第138図 土器溜り10出土遺物(5)(1/4)・156  
 第139図 土器溜り10出土遺物(6)(1/4)・157  
 第140図 土器溜り10出土遺物(7)(1/4)・158  
 第141図 土器溜り10出土遺物(8)(1/4)・159  
 第142図 土器溜り10出土遺物(9)(1/4)・160  
 第143図 土器溜り10出土遺物(10)(1/4)・161  
 第144図 土器溜り10出土遺物(11)(1/4)・162  
 第145図 土器溜り11出土遺物(1)(1/4)・162  
 第146図 土器溜り11出土遺物(2)(1/4)・163  
 第147図 土器溜り11出土遺物(3)(1/4)・164  
 第148図 土器溜り12出土遺物(1)(1/4)・165  
 第149図 土器溜り12出土遺物(2)(1/4)・166  
 第150図 土器溜り12出土遺物(3)(1/4)・167  
 第151図 土器溜り12出土遺物(4)(1/4)・168  
 第152図 土器溜り12出土遺物(5)(1/4)・169  
 第153図 土器溜り12出土遺物(6)(1/4)・170  
 第154図 土器溜り12出土遺物(7)(1/4)・171  
 第155図 土器溜り12出土遺物(8)(1/4)・172  
 第156図 土器溜り12出土遺物(9)(1/4)・173  
 第157図 土器溜り12出土遺物(10)(1/4)・174  
 第158図 土器溜り12出土遺物(11)(1/4)・175  
 第159図 土器溜り12出土遺物(12)(1/4)・176  
 第160図 土器溜り12出土遺物(13)(1/4)・176  
 第161図 土器溜り12出土遺物(14)(1/4)・176  
 第162図 土器溜り12出土遺物(15)(1/2)・176  
 第163図 掘立柱建物・土器溜り8～12配置図  
 (1/300)……………179  
 第164図 掘立柱建物周辺図(1/80) ……180  
 第165図 掘立柱建物実測図(1/80) ……181  
 第166図 掘立柱建物出土遺物  
 (1/4・1/2)……………182  
 第167図 C-8下位柱穴列(1/50) ……182  
 第168図 P-6実測図(1/30) ……182  
 第169図 C-8下位柱穴群(1/150)……………183  
 第170図 P-1出土遺物(1/3) ……184  
 第171図 柱穴群出土遺物(1/4) ……184  
 第172図 埋甕1実測図(1/20) ……184  
 第173図 埋甕1(1/4) ……185  
 第174図 埋甕2実測図(1/20) ……186  
 第175図 土壇3実測図(1/50) ……186  
 第176図 埋甕2(1/4) ……187  
 第177図 埋甕2出土遺物(1/4・1/2)187  
 第178図 土器溜り7下部溝状遺構実測図  
 (1/80)……………189  
 第179図 1・2号墓位置関係図(1/100)190  
 第180図 1号墓実測図(1/30) ……190  
 第181図 1号墓出土遺物(1)(1/4) ……190  
 第182図 1号墓出土遺物(2)(1/4) ……191  
 第183図 2号墓実測図(1/30) ……192  
 第184図 2号墓骨蔵器(1/4) ……192  
 第185図 9ライン東側貝塚群(1/200)…193  
 第186図 第185図貝塚群土層断面図  
 (1/60)……………194  
 第187図 包含層出土遺物(1)(1/4) ……195  
 第188図 包含層出土遺物(2)(1/4) ……196

第189図 包含層出土遺物(3)(1/4) ……197  
第190図 包含層出土遺物(4)(1/4) ……198  
第191図 亀山遺跡東調査区全体図  
(1/300) ……199  
第192図 建物—1(1/80) ……200  
第193図 墓墳—1(1/20) ……201  
第194図 貝塚—1出土遺物(1)(1/4) ……202  
第195図 貝塚—1出土遺物(2)(1/4) ……203  
第196図 貝塚—2断面図(1/80) ……204  
第197図 貝塚—2出土遺物(1)(1/4) ……204  
第198図 貝塚—2出土遺物(2)(1/4) ……205  
第199図 貝塚—3・4断面図(1/80) ……205  
第200図 包含層出土遺物(1)(1/4) ……206

第201図 包含層出土遺物(2)  
(1/4・1/2・1/3) ……207  
第202図 包含層出土遺物(3)(1/4) ……208  
第203図 包含層出土遺物(4)(1/4) ……209  
第204図 亀山焼変遷図(1/10) ……231—232  
第205図 亀山焼甕参考図(1/4) ……234  
第206図 笠岡市本谷遺跡出土亀山焼  
(1/4) ……235  
第207図 参考図(1/4) ……235  
第208図 土器溜り—9上面出土遺物(1/4)  
……………236  
第209図 新見市横見墳墓群出土亀山焼甕  
(1/4) ……239

図版 目次

図版1 亀山遺跡昭和60年度調査区遠景(南から)  
図版2—1 遺跡遠景(昭和60年度調査区;東から)  
—2 遺跡から旧玉島市街地を望む(北から)  
図版3—1 神前神社(南東から)  
—2 倉敷市指定亀山焼窯址(神前神社境内;南から)  
図版4—1 遺跡付近に残る宝篋印塔(北から)  
—2 遺跡付近に露出する窯体断面(北西から)  
図版5—1 1号窯検出状況(東から)  
—2 1号窯焼き口(矢印は土師質土器碗;東から)  
図版6—1 1号窯焼き口南側土層断面(北東から)  
—2 1号窯焼き口北側土層断面(南西から)  
図版7—1 1号窯窯体内土器出土状態(西から)  
—2 1号窯窯体内土器出土状態(東から)  
図版8—1 1号窯窯体(西から)  
—2 1号窯窯体(東から)  
図版9—1 1号窯焼き口(東から)  
—2 1号窯完掘状況(東から)

図版10—1 2号窯・3号窯とその周辺(南東から)  
—2 2号窯・3号窯とその周辺(西から)  
図版11—1 2号窯検出状態(南東から)  
—2 2号窯窯体検出状態(北東から)  
図版12—1 2号窯窯体(北東から)  
—2 2号窯窯体と土器集中部分(北から)  
図版13—1 2号窯窯体(東から)  
—2 2号窯土器集中部分(北から)  
図版14—1 2号窯窯体内土器集中部分(北から)  
—2 2号窯焼き口部分と土器集中部分(南から)  
図版15—1 2号窯焼き口付近の窯体(北東から)  
—2 2号窯窯体(南東から)  
図版16—1 2号窯窯体断ち割り断面(東から)  
—2 2号窯窯体中央部断ち割り断面(東から)  
図版17—1 2号窯完掘状況(南東から)  
—2 3号窯検出状態(東から)  
図版18—1 3号窯窯体(北から)  
—2 3号窯分焰柱(南から)  
図版19—1 3号窯分焰柱(南から)  
—2 3号窯断ち割り断面(南東から)

- 図版20—1 4号窯検出状況(北西から)  
           —2 4号窯窯体土層断面(東から)  
 図版21—1 4号窯窯体内土層断面(南東から)  
           —2 4号窯窯体検出状況(北西から)  
 図版22—1 4号窯窯体(南東から)  
           —2 4号窯窯壁(南西から)  
 図版23—1 4号窯窯体断ち割り断面(南から)  
           —2 4号窯窯体断ち割り断面(東から)  
 図版24—1 4号窯一次窯体検出状態(南東から)  
           —2 4号窯完掘状況(北西から)  
 図版25—1 5号窯窯体検出状態(南東から)  
           —2 6号窯検出状況(東から)  
 図版26—1 6号窯窯体内遺物出土状態(東から)  
           —2 6号窯窯体内瓦並置状態(南東から)  
 図版27—1 6号窯窯体検出状態(南東から)  
           —2 6号窯窯体断ち割り断面(北西から)  
 図版28—1 灰原1土層断面(4号窯西;南東から)  
           —2 灰原1土層断面(4号窯西;東から)  
 図版29—1 土器溜り1((東から)  
           —2 土器溜り1 青磁出土状態  
 図版30—1 土器溜り1北測, 1号窯下方土層断面(東から)  
           —2 1号窯下方土器溜り(東から)  
 図版31—1 土器溜り2(南から)  
           —2 土器溜り2土層断面(南から)  
 図版32—1 4号窯(手前)と土器溜り3(南西から)  
           —2 土器溜り3土層断面(4号窯東;南から)  
 図版33—1 2・3号窯と周辺の土器溜り(南東から)  
           —2 土器溜り4(東から)  
 図版34—1 土器溜り7・3号窯周辺(南西から)  
           —2 土器溜り5土層断面(東から)  
 図版35—1 土器溜り7上段部分(南東から)  
           —2 土器溜り7上段土層断面(東から)  
 図版36—1 土器溜り7下段土師質土器536出土状態(東から)  
           —2 土器溜り7下段軒丸瓦455出土状態(南東から)  
 図版37—1 土器溜り7下段土層断面(南から)  
           —2 土器溜り7下段土層断面(東から)  
 図版38—1 土器溜り7除去後の状況(南東から)  
           —2 土器溜り7下位C-9上位部柱穴群(南から)  
 図版39—1 土器溜り9検出作業(東から)  
           —2 土器溜り9検出状況(東から)  
 図版40—1 土器溜り9検出状況(南西から)  
           —2 土器溜り10検出状況(南から)  
 図版41—1 土器溜り10検出状況(北から)  
           —2 土器溜り11と貝塚(東から)  
 図版42—1 土器溜り12北側集中部分(東から)  
           —2 土器溜り12北側集中部分(南東から)  
 図版43—1 土壌1上面検出状況(北から)  
           —2 土壌1土層断面(北から)  
 図版44—1 土壌2土層断面(東から)  
           —2 土壌2完掘状況(東から)  
 図版45—1 掘立柱建物(北東から)  
           —2 掘立柱建物柱穴内根石(南東から)  
 図版46—1 下位(7-8ライン)柱穴群(北から)  
           —2 下位柱穴群(東から)  
 図版47—1 下位柱穴群柱穴内銅鏡出土状態(南から)  
           —2 C-9付近貝塚検出状況(南から)  
 図版48—1 土器溜り12上面貝塚(西から)  
           —2 土器溜り12上面貝塚上層断面・獸骨出土状態(西から)

- 図版49—1 埋甕1検出状況(東から)  
—2 埋甕1完掘状況(東から)
- 図版50—1 土器溜り8土層断面と埋甕2検出状況(南から)  
—2 埋甕2内部(南西から)
- 図版51—1 埋甕2使用の亀山焼体部(南西から)  
—2 埋甕2使用亀山焼内面(南西から)
- 図版52—1 1・2号墓検出状況(東から)  
—2 1号墓検出状況(南東から)
- 図版53—1 1号墓検出状況(北西から)  
—2 1号墓青磁碗・平瓦(南西から)
- 図版54—1 1・2号墓(北から)  
—2 工事用道路建設に伴う追加発掘調査区(Bライン東端・北から)
- 図版55 発掘作業風景
- 図版56 出土遺物(1号窯)
- 図版57 出土遺物(1号窯)
- 図版58 出土遺物(2号窯)
- 図版59 出土遺物(2号窯)
- 図版60 出土遺物(2号窯)
- 図版61 出土遺物(5号窯)
- 図版62 出土遺物(6号窯)
- 図版63 出土遺物(灰原1)
- 図版64 出土遺物(灰原1)
- 図版65 出土遺物(灰原1)
- 図版66 出土遺物(灰原1)
- 図版67 出土遺物(灰原1)
- 図版68 出土遺物(灰原1)
- 図版69 出土遺物(灰原1)
- 図版70 出土遺物(灰原1・土壌1)
- 図版71 出土遺物(土壌1・土器溜り1)
- 図版72 出土遺物(土器溜り1ほか)
- 図版73 出土遺物(土器溜り3)
- 図版74 出土遺物(土器溜り3)
- 図版75 出土遺物(土器溜り3)
- 図版76 出土遺物(土器溜り3)
- 図版77 出土遺物(土器溜り5)
- 図版78 出土遺物(土器溜り6・7)
- 図版79 出土遺物(土器溜り7)
- 図版80 出土遺物(土器溜り7)
- 図版81 出土遺物(土器溜り7)
- 図版82 出土遺物(土器溜り7)
- 図版83 出土遺物(土器溜り7)
- 図版84 出土遺物(土器溜り7・9)
- 図版85 出土遺物(土器溜り9)
- 図版86 出土遺物(土器溜り9)
- 図版87 出土遺物(土器溜り9)
- 図版88 出土遺物(土器溜り9)
- 図版89 出土遺物(土器溜り9)
- 図版90 出土遺物(土器溜り9)
- 図版91 出土遺物(土器溜り9)
- 図版92 出土遺物(土器溜り10)
- 図版93 出土遺物(土器溜り10)
- 図版94 出土遺物(土器溜り10)
- 図版95 出土遺物(土器溜り9・10・11)
- 図版96 出土遺物(土器溜り11・12)
- 図版97 出土遺物(土器溜り12)
- 図版98 出土遺物(土器溜り12)
- 図版99 出土遺物(土器溜り12)
- 図版100 出土遺物(土器溜り12)
- 図版101 出土遺物(柱穴群・埋甕1)
- 図版102 出土遺物(埋甕2・1号墓)
- 図版103 出土遺物(1号墓・2号墓)
- 図版104 出土遺物(包含層)
- 図版105—1 東調査区斜面テラス全景(南から)  
—2 東調査区斜面テラス南半(西から)
- 図版106—1 東調査区建物(西から)  
—2 東調査区墓壇(南西から)
- 図版107 出土遺物(東調査区)
- 図版108 出土遺物(東調査区)
- 図版109 出土遺物(東調査区)  
・亀山焼甕参考品(第205図)

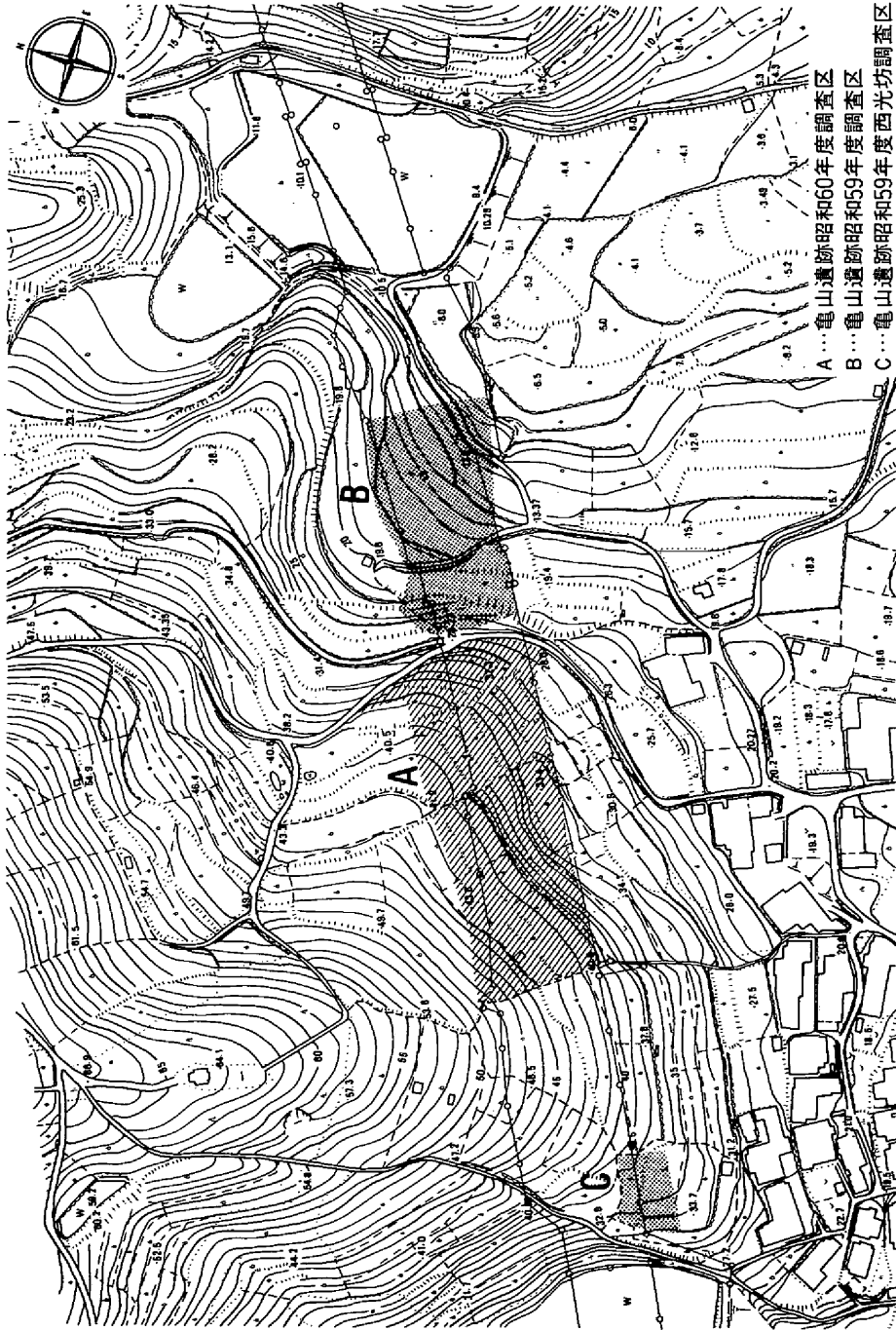
## 第1章 発掘調査の経過と概要

### 第1節 発掘調査に至る契機と経過

遺跡所在地周辺では、古くから須恵器の系譜をひく「亀山焼」が焼造されたことが先学の研究(註1)により明らかにされている。今回の調査地点の南約300mに位置する神前(かんざき)神社境内には、倉敷市指定の亀山焼窯跡が存在している。また、民家の周辺の大半は畑や桃畑に開墾され、部分的に窯体が露出したり、おびただしい土器片の散布や灰原が観察される地点もある。一方、中世に比定される貝塚も各所に点在しており、ハイガイを中心とする貝層が道路の断面などでしばしば見かけられる。いずれも、かなり広い範囲に亀山焼成窯が分布していることが知られてはいたが、かつて学術的な発掘調査が実施されたことはなく、倉敷市教育委員会による昭和46年以降の分布調査成果(註2)や、地道に現地踏査を重ねた研究者による成果(註3)によって、ある程度の遺物分布のひろがりや、窯跡所在地などが推定されていたにすぎなかった。

昭和46年、山陽自動車道の建設計画が策定され、まず路線周囲幅約500mにわたる分布調査が実施された(昭和47年)。ついで、昭和55年、ほぼ路線が確定した段階で、再度の分布調査が実施され、大半が桃畑を主体とする果樹園に開墾されていた現状ではあったが、亀山焼などの出土が確認され、窯跡・灰原等亀山焼の生産に関連する遺構の存在が予測された。昭和57年度、遺跡地の遺跡発見通知が提出され、山陽自動車道建設を前提として、文化庁長官から建設省に対して発掘調査による記録保存が指示された。ついで、昭和58年度、遺跡の範囲をより一層明確にすることを目的とするトレンチ調査(昭和58年10月～12月)が実施され、数基の窯と、貝塚や土器溜りが確認されるに及んだ。(註4)その後、遺跡への保護、保存についての協議が重ねられたが、路線内の遺跡地は、橋脚の位置・構造等から設計変更は不可能であり、やむなく記録保存を目的とする全面発掘調査が実施されることとなった。まず、農道の東下位の集落址を中心とした東調査区を昭和59年度(昭和59年12月～昭和60年3月)(註5)、確認調査によって窯跡の存在が確かめられていた丘陵斜面部分を、昭和60年度(昭和60年4月～同年9月)に実施した。(註6)

東調査区は、桃を主体とする果樹園を中心とした谷部分の西斜面にあたり、掘立柱建物・貝塚・柱穴群・墓址などが検出され、西調査区から流れ落ちた多量の亀山焼のほか、土師質土器・土壙・獣骨・貝・銭貨が出土した。西調査区では、やはり階段状に桃や梨の果樹園として開墾された・南面する緩斜面に遺構群が検出され、6基の窯跡のほか、灰原・土器溜り・貝塚・掘立柱建物・柱穴群・墓址などが検出され、甕・瓦・鉢などを主体とするおびただしい亀山焼(コンテナ箱約1000箱)のほか、陶磁器・土師質土器・獣骨・銭貨などが出土している。



第1図 発掘調査区域図 (1/2500)

いずれの発掘調査もエンジン付ベルトコンベアーを用いたが、斜面での発掘であるため作業は困難をきわめた。西調査区の発掘では、パワーシャベルを用いて、表土除去作業を実施したが、石垣・階段状の畑などの地形的な制約により、排土の移動・運搬に難渋することがしばしばあった。

発掘調査の実施に際しては、地元発掘作業員ならびに整理作業員の方々の献身のご協力をいただいた。また、地元の果樹園経営者の方々には、特に梅雨時期は、多大なご迷惑をおかけした。しかし、その都度、発掘調査にご理解をいただき、種々の便宜をはかっていただいた。深甚の謝意を表する次第である。また、玉島北農業協同組合および、地元水利組合にも多大なご協力を賜った。あわせて深謝の意を表する次第である。

## 第2節 発掘調査の体制

〈昭和59年度〉

### 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

鎌木義昌（岡山理科大学 岡山県文化財保護審議会委員）

西岡憲一郎（岡山県遺跡保護調査団）

西川 宏（山陽女子高校）

間壁菫子（倉敷考古館）

根木 修（岡山市教育委員会専門職員）

### 県教育庁文化課

課長 松元昭憲

課長代理 逸見英邦

埋蔵文化財係長 河本 清

主任 遠藤勇次

文化課分室（昭和59年10月31日まで）

参事 橋本泰夫

主任 古瀬 宏

岡山県古代吉備文化財センター（昭和59年11月1日から）

所長 松元昭憲（県文化課長兼務）

次長 橋本泰夫

総務課

調査課

課長 佐々木 清

課長 河本 清



主任 古瀬 宏 文化財保護主査 正岡陸夫 (調査担当)  
主事 橋原充二 文化財保護主事 古谷野寿郎 (調査担当)  
〈昭和60年度〉

**山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会**

水内昌康 (岡山県文化財保護審議会委員)  
鎌木義昌 (岡山理科大学教授 岡山県文化財保護審議会委員)  
西岡憲一郎 (岡山県遺跡保護調査団)  
西川 宏 (山陽女子高校)  
間壁葎子 (倉敷考古館)  
根木 修 (岡山市教育委員会)

**県教育庁文化課**

課長 松元昭憲  
課長代理 逸見英邦  
埋蔵文化財係長 正岡陸夫  
主査 遠藤勇次 (センター本務)

**岡山県古代吉備文化財センター**

所長 松元昭憲 (昭和60年12月15日まで)  
所長 高橋誠記 (昭和60年12月16日から)  
次長 橋本泰夫

**総務課**

課長 佐々木 清  
主査 遠藤勇次  
主任 花本静夫  
主事 橋原充二

**調査課**

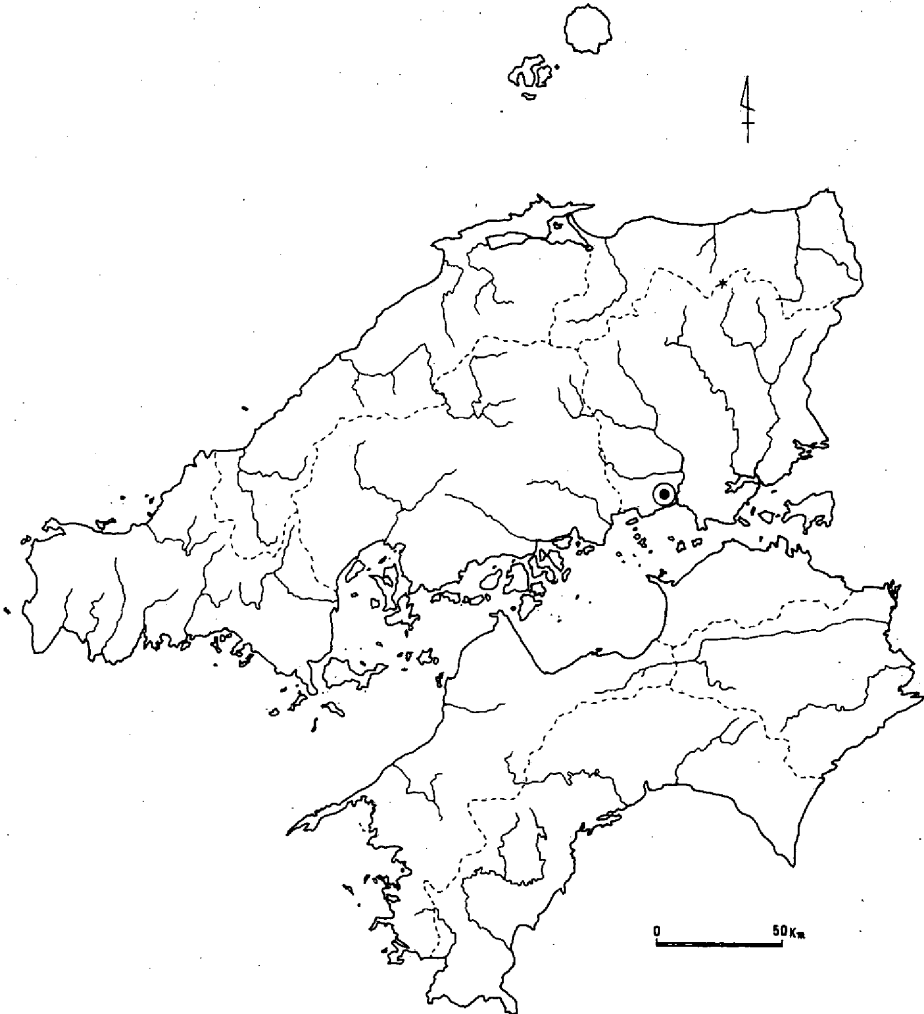
課長 河本 清  
文化財保護主査 岡田 博 (調査担当)  
文化財保護主任 福田正継 (調査担当)  
文化財保護主事 田中 寿 (調査担当)  
主事 武田恭彰 (調査担当)

**註**

註1 快舟散史 (水原岩太郎)「考古行脚(二)―甕江ノ一日」(「吉備考古第5号」所収 1930年)。宗沢夔亭 (節雄)「亀山式土器に就いて」(吉備考古第46号所収 1940年)。宗沢節雄「郷土風土記(四) 亀山焼」(「玉北農協だより第4号」所収 1974年)。以上の文献のほか、西川宏氏による「亀山焼の再評価」(考古学研究第11巻43号 考古学研究会 1965年)は亀山焼の即物的観察のみならずその生産の歴史的意義について初めて評価を与えた論考である。以上のような研究史をまとめたものに、伊藤晃「窯業『亀山焼の変遷』」(「岡山県の考古学」所収、吉川弘文館 1987年)がある。また、

遺跡地周辺の窯跡、灰原等の分布・位置については、西川宏・伊藤晃・狐塚省蔵・西岡憲一郎・福本明の各氏のご教示をいただいた。

- 註2 倉敷市文化財分布調査委員会「倉敷市文化財分布図」倉敷市教育委員会 1976年。  
註3 註1に記した、西川宏・狐塚省蔵・伊藤晃・西岡憲一郎の各氏らが綿密な踏査を行なっている。  
註4 正岡陸夫「亀山遺跡の確認調査」岡山県埋蔵文化財報告14所収 岡山県教育委員会 1984年。  
註5 古谷野寿郎「亀山遺跡発掘調査」岡山県埋蔵文化財報告15所収 岡山県教育委員会 1985年。  
註6 岡田博「亀山遺跡——山陽自動車道建設に伴う発掘調査・全面調査」岡山県埋蔵文化財報告16所収 岡山県教育委員会 1986年。岡田博「亀山遺跡の発掘調査」(所報「吉備」第1号所収)岡山県古代吉備文化財センター 1986年。



第2図 遺跡の位置

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

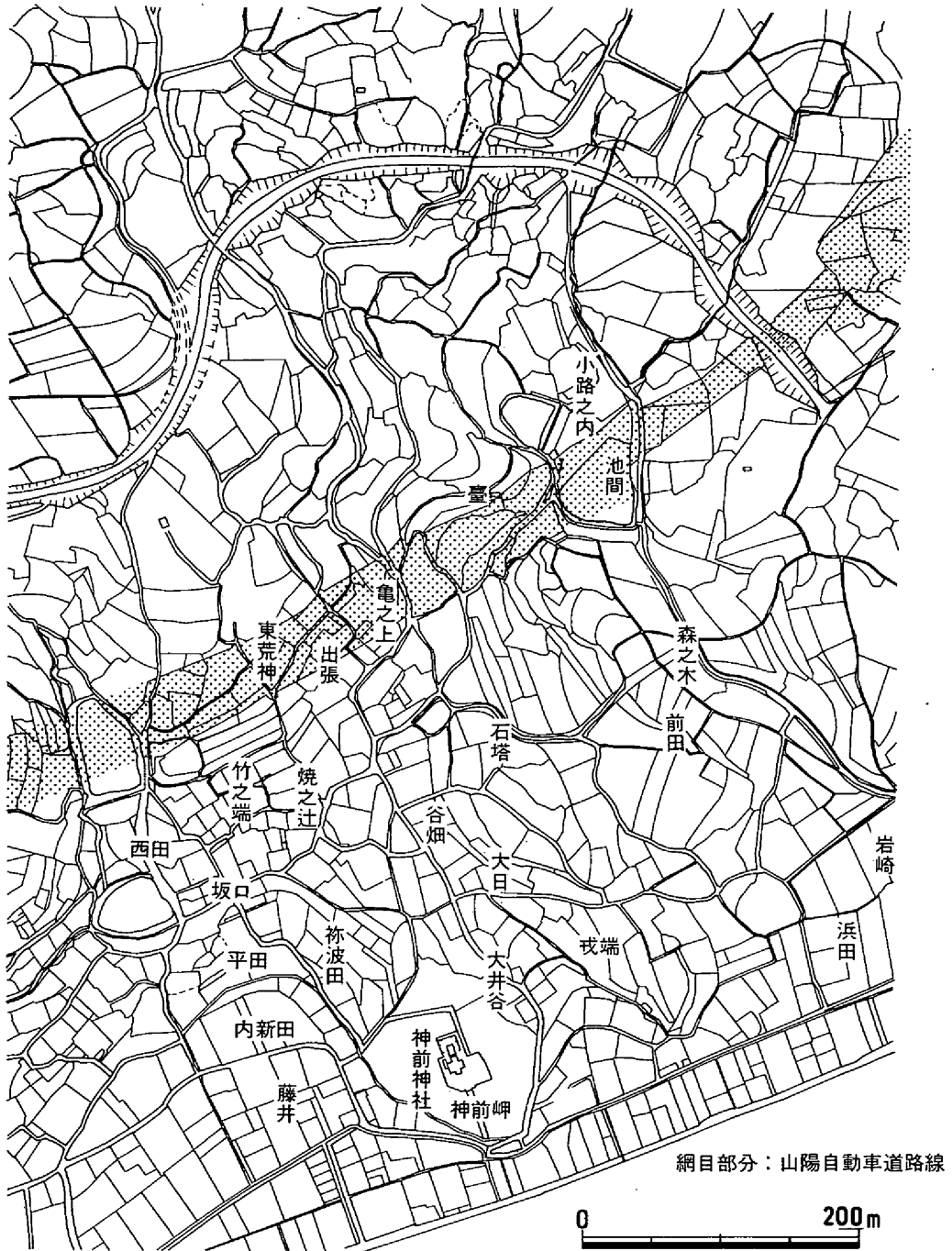
遺跡は、山陽新幹線新倉敷駅の北西方約1.5kmの南面する丘陵斜面に存在する。近世以降干拓によって形成された、水田部との比高は、およそ15～45mを測り、遺跡は海拔15～47mの範囲に存在する。玉島は、近世以降高梁の外港として栄え、高梁川や「高瀬通し」の開さくによって備中の南北を結ぶ要路が位置していた。「高瀬通し」の名残りは、遺跡の南東方約1kmに残っており、往時をしのばせている。中世以前には、旧玉島市街地は、島嶼部で、遺跡地との間は瀬戸内海の一部となっており、縄文時代以降の貝塚が島や海岸線の位置を示唆している。遺跡地の東下方は、浅い谷状地形をなし、東調査区の所見では、海拔16～18mにかけて中世の貝塚が形成されている。また神前神社の位置する舌状丘陵は「神前岬」の字名が残されており、その東方の低丘陵あるいはさらに東の丘陵縁辺部にはさまれた谷状地形を呈する部分が、入江となっていたと考えられる。宗沢節雄氏の研究によれば(註1)、「此地甕をつくりし故に甕山(かめやま)と称す。亀山は借字なり。甕の泊(もたいのとまり)之に基けり。」と『名勝考』という書物に紹介されているとされ、泊すなわち港として栄えたことが推察されている。しかも、甕という用語が用いられていることで、亀山焼との関連が密接であったことは想像にかたくない。また、平安時代の貴族、藤原朝臣家経による「はこび積む 甕の泊舟出して 漕げともつきせぬ 貢ものかな」(後令泉院永承三年(1048年))の歌にも詠まれているように、「甕の泊」がそのまま地名となっていることが推察され(註2)、当時の瀬戸内海の海上交通の隆盛とともに、港として知られていたことがわかる。加えて、近辺で焼造された亀山焼の積出し港としての性格も色濃くうかがえよう。

遺跡地からの景観は、南東方には遠く児島を望み、水島コンビナートの現在の海浜部から旧玉島市街地の、かつての島々を眺望することができる極めて良好な位置にある。背後は開墾された果樹園が海拔100m近くの頂部にまでひろがっている。この丘陵地帯をぬけて北方約2kmには著名な玉島陶古窯址群がひろがっており、亀山焼の生産の起源や背景を考察する上で、地理的・歴史的に重要な位置を占めているといえる。

「亀山」の地名は、先述のように「甕山」が起源と思われるが、遺跡地の周辺の小字では存在しない。明治4年の時点では、「上竹村ノ内亀山」とあり(註3)、後に富田村となった時点で大字亀山西・亀山東とわかれたようである。亀山東は、神前神社の西約200mから、北川の旧長尾村との村界まで、亀山西は七島川尻付近までと、ほぼ南北方向に境界が設定されている。また、第4図に示す地図による地名をみると、「亀之上」・「焼之辻」など亀山焼生産に関わる可能性のある名称も見出せる。これらはいずれも今回の調査地および南方に位置する。遺跡地は東



第3図 遺跡周辺地形図 (1: 亀山遺跡発掘地点, 2: 神前神社, 3: 天王山古墳; 1/10000)



第4圖 遺跡周辺字名 (1/2500地籍図より作成; 1/5000)

調査区が「臺」、西調査区は「亀之上」・「東荒神」から成っている。

遺跡地は、近世には水田あるいは後述の灰原1・4号窯付近で検出されている「野つば」などによって想像されるように、当然畑作が行われていたと考えられるが、近代以降、特に大正年間には、品種改良が重ねられた桃の栽培が急速に普及し、近年では、岡山県下の他地域をしのぐ有数の産地となっている。さらに梨の栽培も加わり、地の利を生かした果樹栽培の一大中心地となっている。

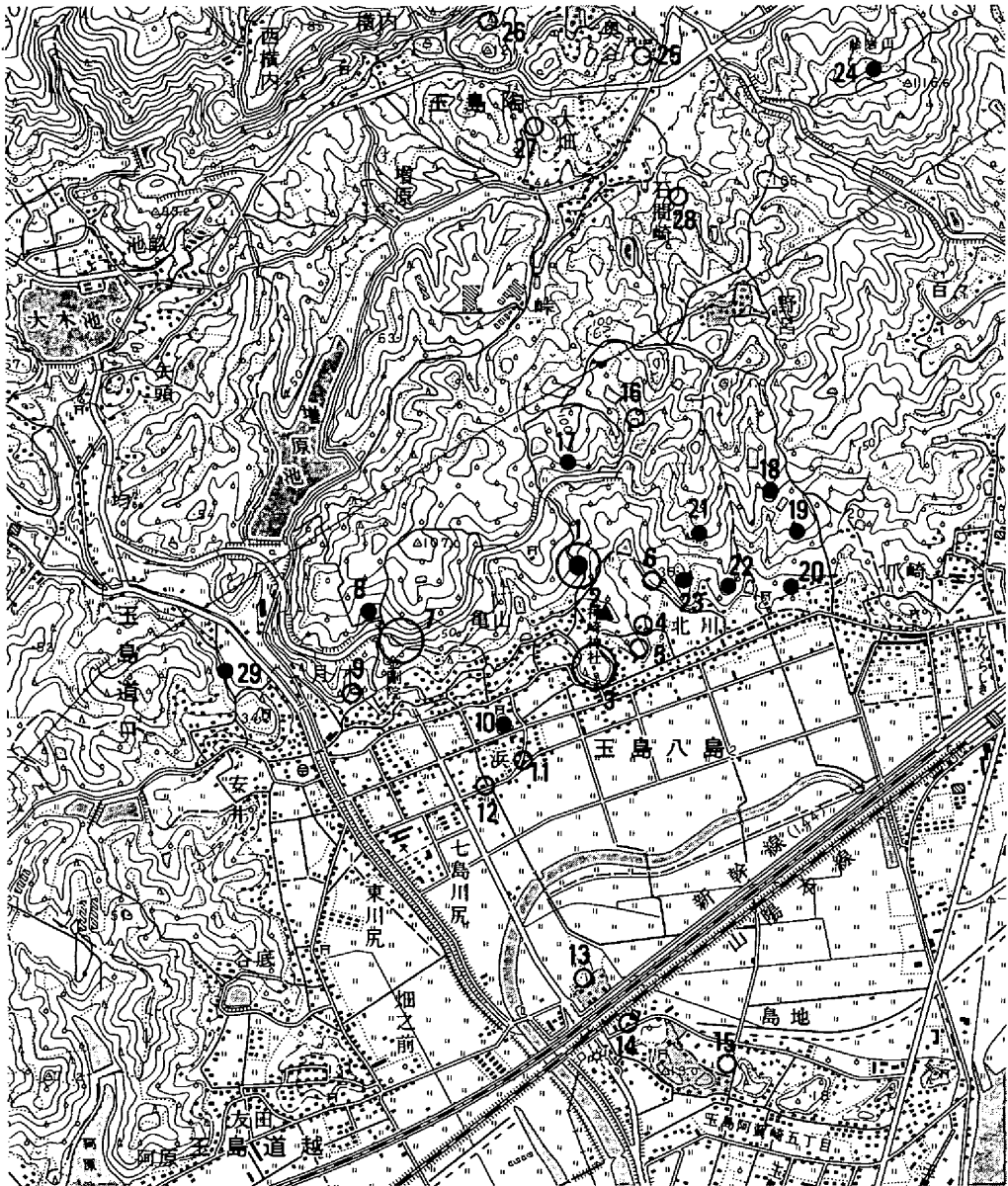
以上、地理的環境について概略を述べた。地名の調査など、倉敷市教育委員会 福本明氏の協力によるところが多い。記して深謝の意を表する。

## 第2節 歴史的環境

遺跡地は、「和名類聚抄」によれば(註4)、備中国浅口郡に所在する。船穂郷に比定され、古代～中世においては、瀬戸内海に面する海岸線が形成されていたことが知られる。

遺跡周辺で、もっとも古い遺跡は縄文時代に形成された貝塚である。特に浜貝塚は、当時の汀線近くに所在していたと考えられる。また、前期から弥生時代前期にかけての島地貝塚は、遺跡の南約1.5kmに所在し、文字どおり島嶼部に位置している県内有数の貝塚である(註5)。遺跡の周辺では、弥生時代の遺跡としては大規模なものは少なく、見るべきものはないが、古墳時代では、遺跡の南西方500mに位置する天王山古墳が注目される。埴輪片も採集されており、全長40mの前方後円墳である。近くにはこのような海浜に近接した位置に古墳はみられず、当時の傑出した有力者の存在をうかがわせる。また、横穴式石室を主体とする後期古墳は、遺跡の東方丘陵に散在し、大規模な古墳群は形成していない。これらは、いずれも当時の海上交通、漁業と密接な関係をもった豪族の墓と考えられよう。

一方、遺跡の背後丘陵の北約2kmには、奥池南窯・黒土窯などをはじめとする玉島陶古窯址群が存在する(註6)。おもに七世紀初頭から中世に至るまでの須恵器を主体とし、瓦なども焼造されたことが知られている。また、中世には石間崎窯など亀山焼が焼かれた可能性が指摘されている。備中国では、浅口郡金光町所在の須恵古窯址群(註7)とならぶ、有数の窯址群が形成されている。この背景には、すぐれた工人の存在とともに、原料である陶土や、薪材の入手が至便であったことに加え、供給地への瀬戸内海交通につながる搬出地に恵まれたことが考えられる。古代末から、中世に至ると遺跡地周辺では、亀山焼の生産が開始され、瓦をはじめ甕、鉢を主体とする須恵器の伝統をひきついだ特徴がみられる生産品が知られている。明確に平安時代に比定される窯跡は知られていないが、今回の発掘調査によって得られた瓦の中には、鬼瓦や蓮華文を瓦当文様のモチーフにしたものもみられ、その上限は、やはり平安時代後期に遡ることが推定される。内陸的な位置を占めている玉島陶古窯址群と、海岸線に近い亀山遺跡と



第5図 周辺主要遺跡分布図 (1/25000)

- |           |             |            |           |            |
|-----------|-------------|------------|-----------|------------|
| 1. 亀山遺跡   | 2. 大日宝篋印塔   | 3. 神前神社窯址群 | 4. 亀山貝塚   | 5. 大日窯址    |
| 6. 北川遺跡   | 7. 亀山薬師貝塚   | 8. 亀山薬師西古墳 | 9. 月の木貝塚  | 10. 天王山古墳  |
| 11. 浜貝塚   | 12. 浜遺跡     | 13. 島地北貝塚  | 14. 島地貝塚  | 15. 乗越貝塚   |
| 16. 新池遺跡  | 17. 竜王権現西古墳 | 18. 四ツ塚古墳  | 19. 犬塚古墳  | 20. 伏越古墳   |
| 21. 大谷塚古墳 | 22. 一本松古墳   | 23. 北川古墳   | 24. 船岩山古墳 | 25. 陶神社南窯址 |
| 26. 奥池南窯地 | 27. 黒土窯     | 28. 石間崎窯   | 29. 道口遺跡  |            |

の時代的関連や、生産の変遷については、今後大きな研究課題ではあるものの、緊密な関係があったことは十分に理解できよう。

註

- 註1 宗沢節雄「亀山焼一郷土風土記（四）」（玉北農協だより所収）。
- 註2 他に「貢物はこぶ千舟もこぎ出でよ もたいのとまり 潮もかなひぬ」（建久9年 前中納言資実）、「大宰府の任に下りたるに船酔起きて、もたいというにとまりて、大宰大貳 高遠 ころ舟に、酔う人ありとききつるは、もたいにとまるけにやあるらん」の2首が紹介されている。
- 註3 岡山県「岡山県市町村合併誌一総編一」 1960年。
- 註4 池邊 彌「和名類聚抄郡郷里驛名考證」吉川弘文館 1981年。
- 註5 浅倉秀昭「島地貝塚（玉島バイパス）」（「岡山県埋蔵文化財報告11」所収）岡山県教育委員会 1981年。平井 勝・藤田憲司・柳瀬昭彦「縄文時代」・「弥生時代」（近藤義郎編「岡山県の考古学」所収）吉川弘文館 1987年。
- 註6 柳瀬昭彦「黒土窯址・寒田窯址」（「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（31）」——広域営農団地農道整備事業（備南地区）に伴う発掘調査Ⅰ）岡山県教育委員会 1979年。
- 註7 永山卯三郎「陶の瓦窯址」（「吉備郡史」上巻第2編中古所収）吉備郡教育委員会 1937年。



### 第3章 西調査区発掘調査の概要（1985年度）

はじめに

発掘調査は第1章で述べたとおり昭和59年度と60年度の2か年にわたって実施された。遺跡の主体となる窯跡・灰原・土器溜りなど窯業生産に関係の深い遺構群は、昭和60年度にその調査が行われた。そのため、遺跡全体の理解を深めるためには、この西調査区より記述を進めるのが最善と考えられ、昭和59年度の東調査区の発掘調査概要については、第4章でふれることとしたい。

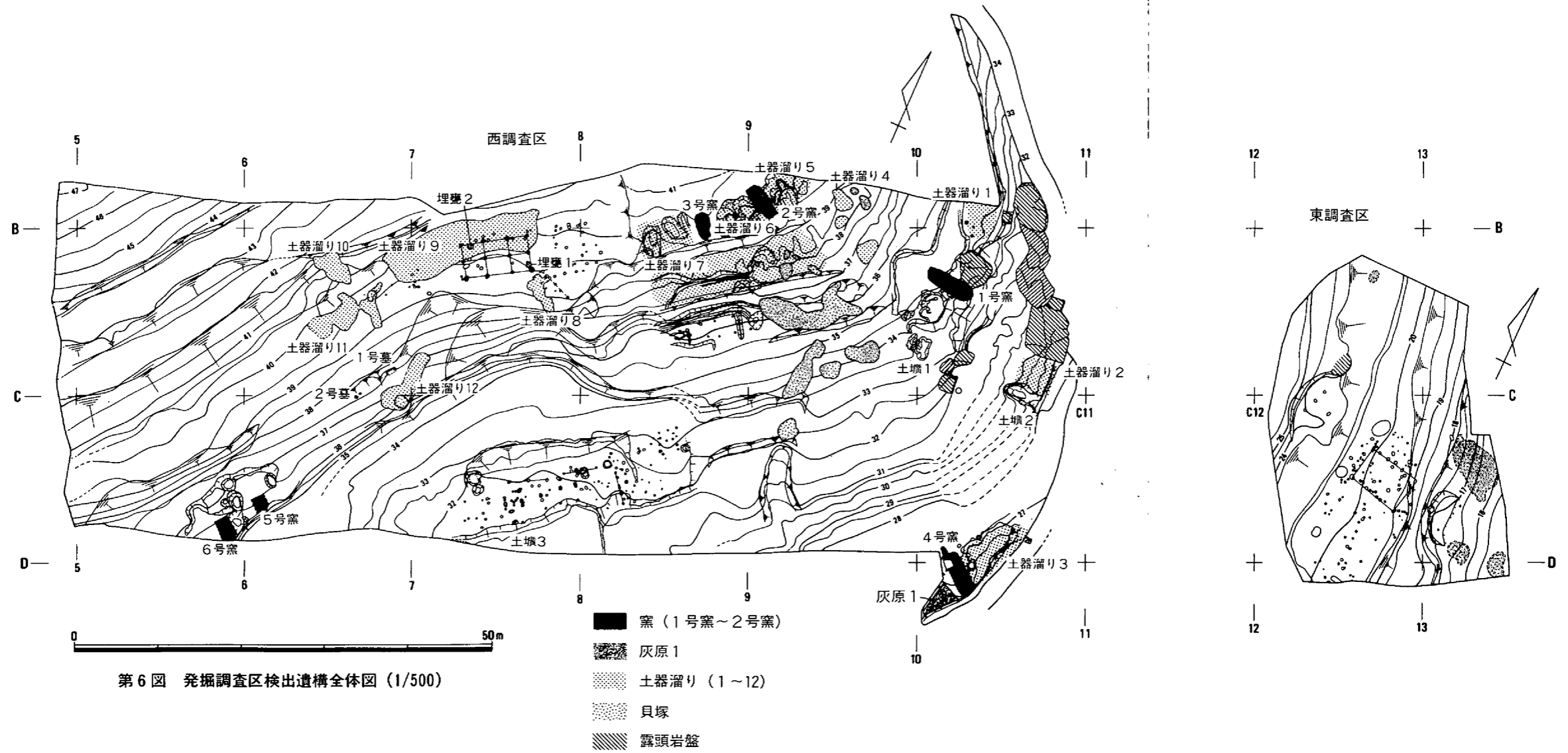
#### 第1節 窯業生産関連遺構の調査

##### 1. 窯跡（第6～50図、図版5～26、56～62）

遺跡の各所で6基の窯跡を確認することができた。1～6号窯は、検出順序にしたがって番号が付けられたもので、ほぼ遺跡の東から西に向かっていて、もっとも高位部に位置するのが2・3号窯、ついで5・6号窯、1号窯、4号窯となる。いずれも等高線に直行する半地下式の登り窯で、焚き口から煙道部まで完存するものは確認されなかったが、後世の開墾による大規模な削平を考えてみれば、予想外に残存度が高かったとみてよいだろう。一方、それぞれに本来伴っていたはずの灰原は、平面的に明確な状態では発見されなかった。いわば「物原」の状況を呈する土器溜りが各所に検出されたが、ブロック状に灰原の一部が観察されるものの、二次的に移動・堆積したものが過半を占めているようである。それらについては、後節でふれることとし、各窯について、その所見を述べる。なお、1～6号窯については、すべて熱残留磁気による年代測定を実施し、その結果については第6章に掲載するが、推定される年代については、個々の窯の記述の末尾に参考のため付記することとしたい。（岡田）

##### (1) 1号窯（第7～14図、図版5～9、56・57）

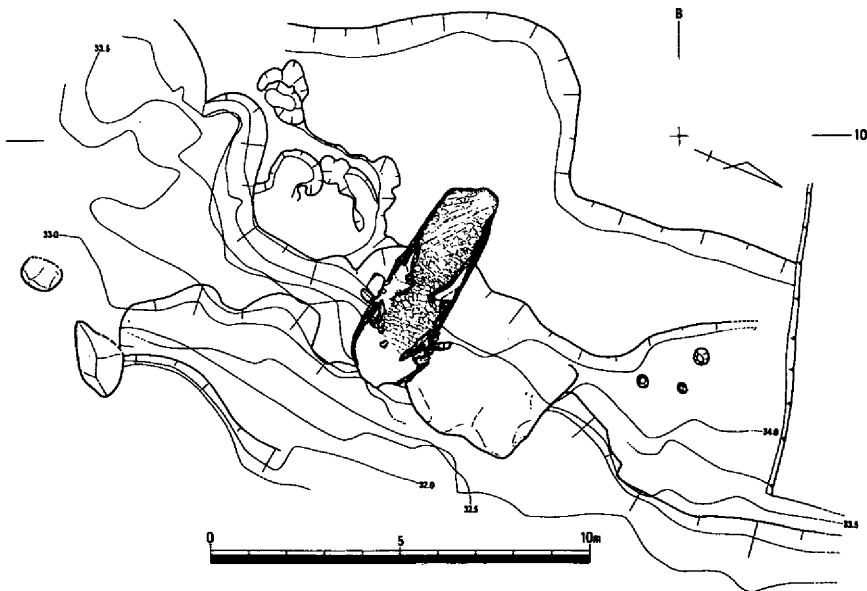
1号窯はB-11グリッド西辺の東向きの急斜面に等高線に直交して構築されている。焼成部と煙道部は削平されてテラス状を呈している。残存長は約6m最大幅2mを測り、中軸線はN85°Wを示す。窯の周辺は天然の岩石が露頭し、南側が若干くぼんで多量の土器が堆積している。窯体の平面形は焼成部にかけて若干しばむ葉巻形を呈する。焚き口は少なくとも3回構築され、その都度上方へ後退している。この場合、それに合わせて奥壁も後退しているかどうかは不明であるが、2次の床面の残存長は5m、3次は3.6mを測る。断面の観察から床面は補修の痕跡はなく地山を掘り下げて利用し、約10cmの厚さで青く還元し硬く焼き締まっている。1次の焼成部は舟底状にややくぼみ2次の焚き口付近からやや傾斜をもつ。3次の焚き口でやや段



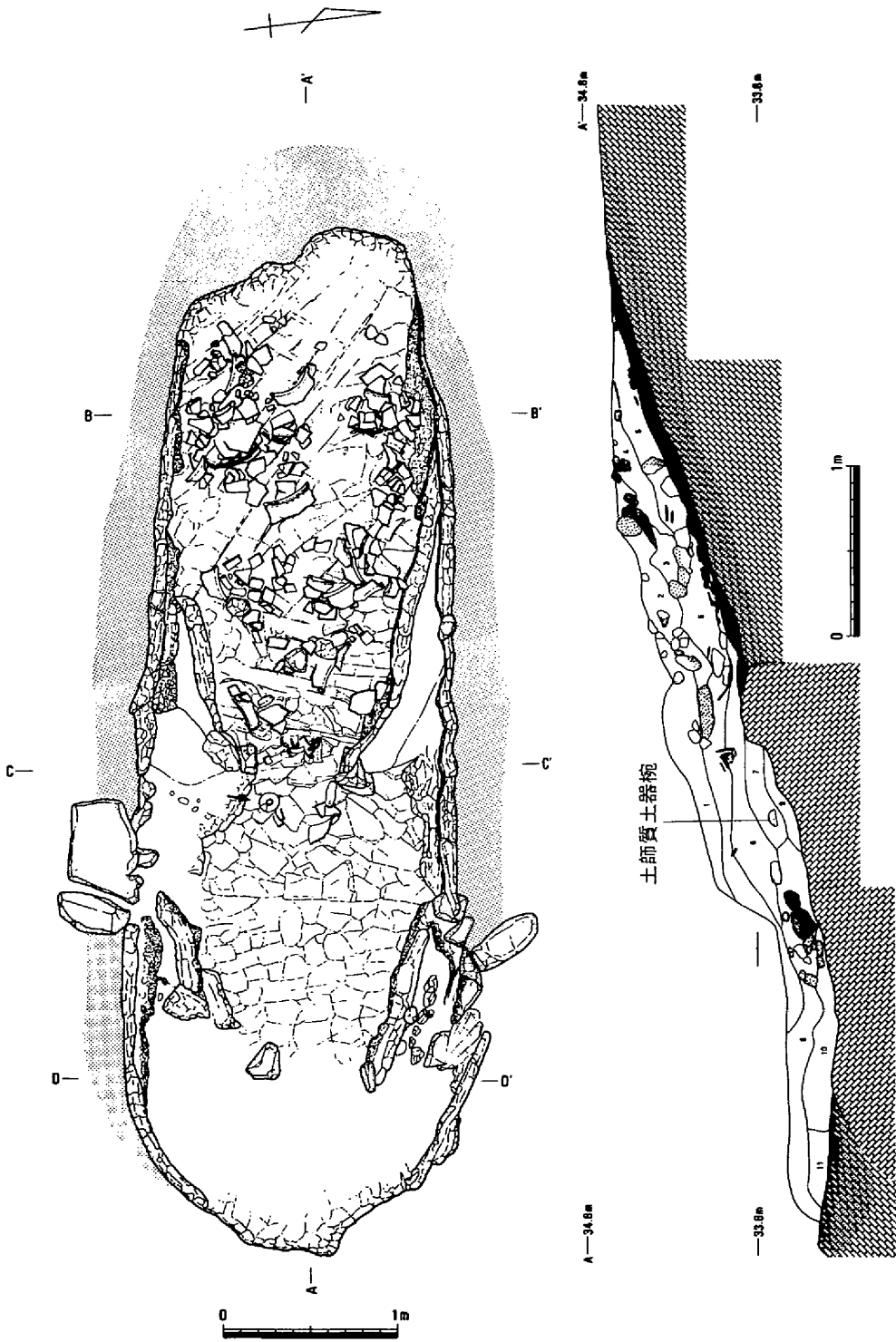
状を呈し焼成部で約20°の傾斜を示す。壁は3枚が確認でき1次のは床と同じでまったく粘土を貼らずに地山をそのまま利用し、硬く焼き締まっている。2次・3次は、1次の内側に粘土を貼り、焚き口に向って徐々に狭めている。焚き口は扁平な石を門柱状に立て、壁のすき間には焼土や窯壁片を含む土を裏込めしている。2次、3次の補修された壁は焼成部付近では鉛状に溶解し非常に硬い。窯体の覆土はブロック状の窯壁片と炭・焼土を多く含む褐色土が流れ込んだ状態である。また天井が崩落したような状態は確認できなかったことから天井は、製品の取り出し時に取り壊され、その後周辺の灰原から土器や窯壁片が流れ込んだ可能性が考えられる。3次の焚き口付近では掻き出された焼土を多量に含む灰が厚く堆積し、その中から土師質土器碗21が検出された。遺物はほとんど3次の床面上に廃棄された状態で検出された。主として甕の破片であるが、口縁部から多数の個体が確認できたことや、二次的に被熱したものもあり、焼成時の破損品だけではなく焼台としての再利用や後からの流入も考えられる。また1次の焚き口より前方を大きく削平されているため本窯に伴うと思われる灰原についてはまったく不明である。

遺物

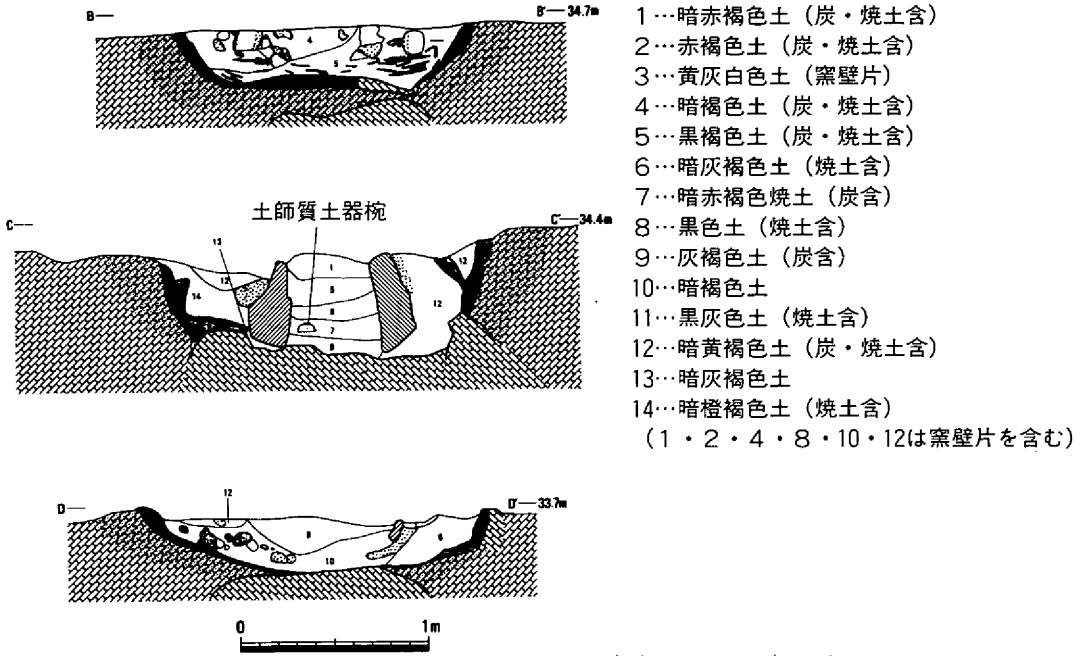
1号窯の遺物は21以外3次の床面上から検出されたものである。量的にはコンテナ7箱分あるが図示し得たものは多くない。いずれも破片で甕・播鉢・平瓦片がある。1は小型の甕で口径19.5cmを測りなだらかな丸い肩部から頸部は80°で折り曲げられ口縁部は、丸く短くヨコナデ



第7図 1号窯周辺図 (1/150)

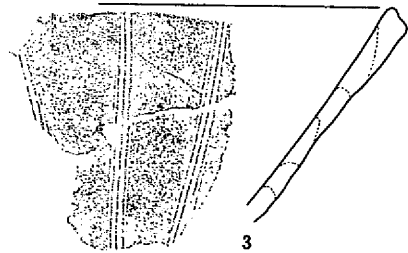
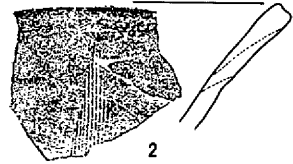


第8図 1号窟実測図 (1/40)

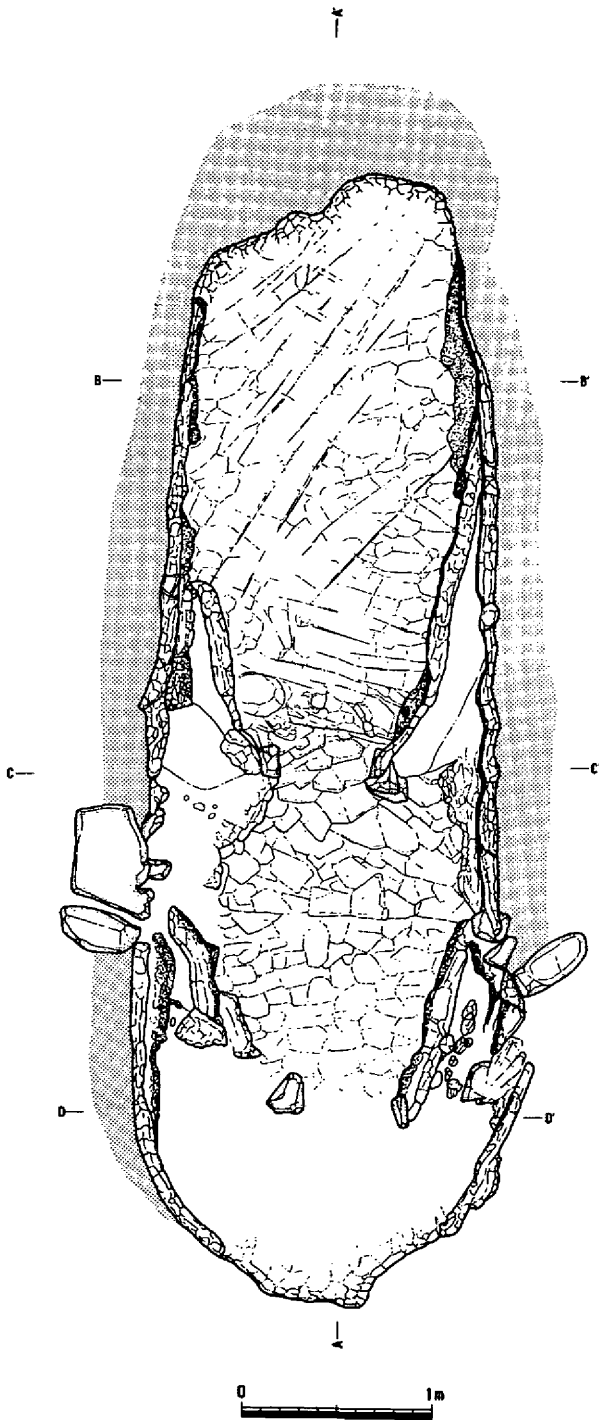


第9図 1号窯体断面図(1/40)

で仕上げられている。外面は格子目タタキ、内面はナデである。2～5は口径27cm～35cmを測る。頸部は緩やかに60°～70°で屈曲し、口縁部はあまり垂れ下らない。端部はヨコナデによって凹線状になったものもある。また口縁部は指頭圧の折り返しの後ヨコナデで端部に成形時の格子目タタキが残るものもある。内面は横方向のヘラケズリの後ヨコナデで4には斜め方向のハケが加えられている。体部の外面は格子目タタキで、内面は2が同心円タタキの後ヘラケズリで他はナデである。いずれも焼成は不良で瓦質あるいは土師質に近いものもあり、胎土は1mm以下の砂粒を多量に含む。6～14は口径37cm～59cmを測り丸くならかな肩部から頸部は55°～45°で屈曲する。口縁部はやや垂れ下がり気味に外反する。口縁部は外面が指頭圧による折り返しの後ヨコナデで、端部には面を成形す

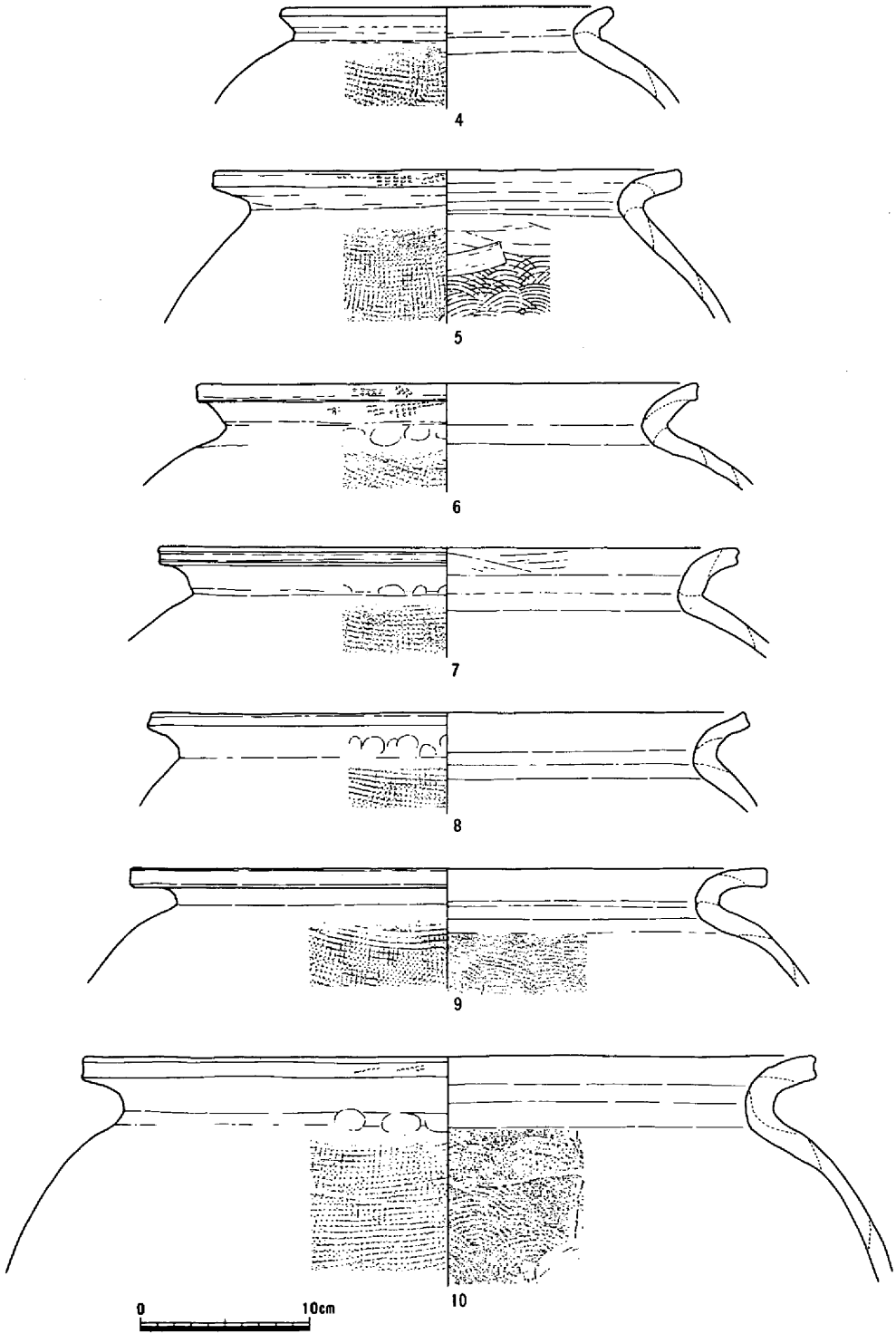


第10図 1号窯出土遺物(1)(1/4)

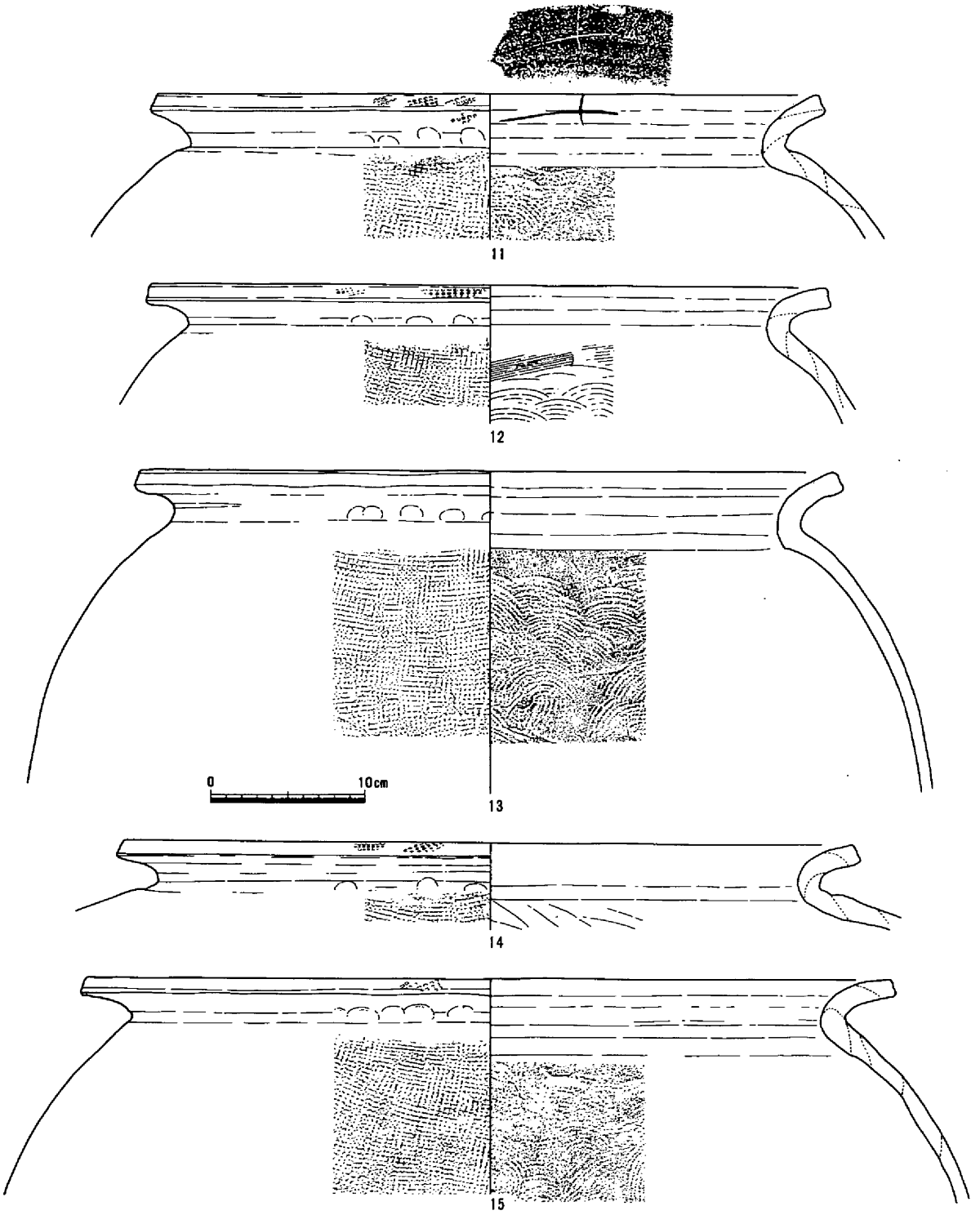


第11図 1号窯窯体実測図 (1/40)

る時に叩いた格子目が残るものが多い。内面はヨコ方向のヘラケズリの後ヨコナデで8には「×」のヘラ記号が描かれている。体部はほとんど欠損したものが多いため不明であるがほぼ球型を呈すると思われる外面はヨコ方向の格子目タタキ、内面は同心円タタキの後ナデで頸部近くに斜め方向のハケ調整を施したものもある。焼成は不良のものが多く胎土はいずれも1mm以下の砂粒を多く含む。15~17は甕の底部の破片である。いずれも平底で体部の外面は斜め方向の格子目タタキの後、下端に横方向のヘラケズリを施し、内面はナデで底部付近に横・斜め方向のハケを加えている。底部外面は不整方向のヘラケズリの後、ナデを加えている。いずれも焼成不良で1mm以下の砂粒を多く含む。これらは中型の甕となるものであろう。18・19は播鉢の破片である。体部から口縁部はやや肥厚しながら直線的に外傾して立ち上り端部は若干凹線気味に仕上げられている。外面は指頭圧の後ナデで内面はナデの後18は12本、19は5本の条痕が端部近くから施されている。焼成は不良で胎土は1mm大の砂粒を多く含む。20は平瓦の破片である。端縁はヘラ切りで成形し凸面は布

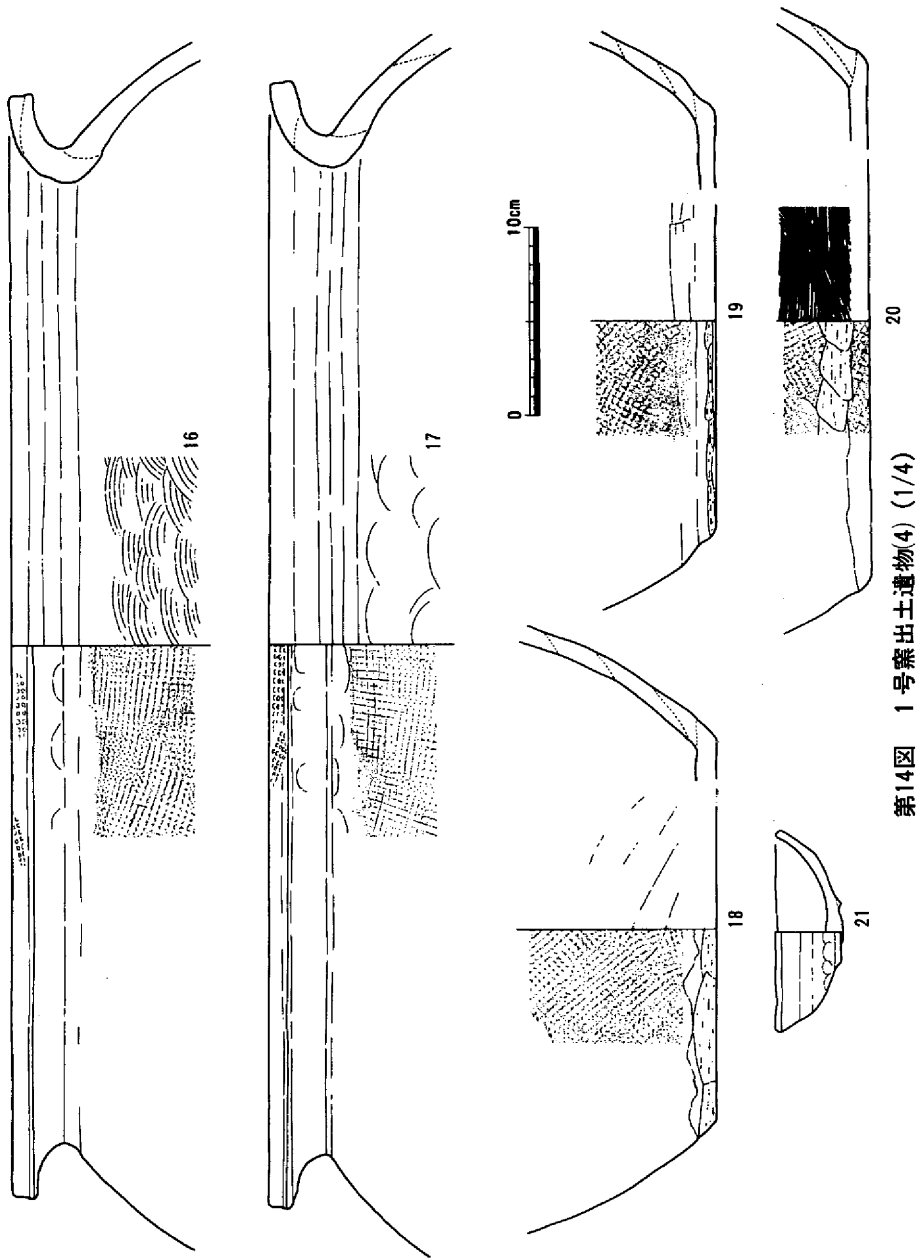


第12図 1号窯出土遺物(2) (1/4)



第13图 1号窯出土遺物(3) (1/4)





第14図 1号窯出土遺物(4) (1/4)

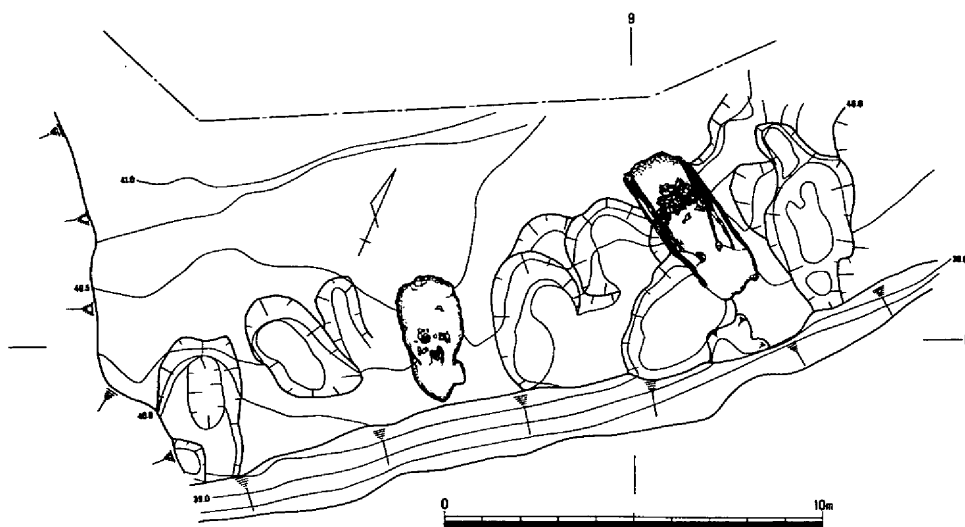
目痕が明瞭に残る。焼成は不良で、胎土は1mm以下の砂粒を若干含む。21は土師質土器碗で、3次の焼き口で掻き出された灰層中より出土した。口径10.6cm、底径3cmを測る。内面と口縁部の外面はヨコナデで仕上げられ、体部の外面は指頭圧痕が残る。高台は断面が三角形の小さなものが貼付され、底部がやや突き出る。焼成は良好で胎土は1mm以下の砂粒を少量含み白灰色を呈する。出土状態から、この碗は作業時の遺物の可能性が高く、時期は県下の他の遺跡の出土例から14世紀前半に比定される可能性が高い。なお、本窯の考古地磁気年代測定ではA.D

1220+15年という年代が測定されている。この窯の操業初期の年代を示している可能性がある。

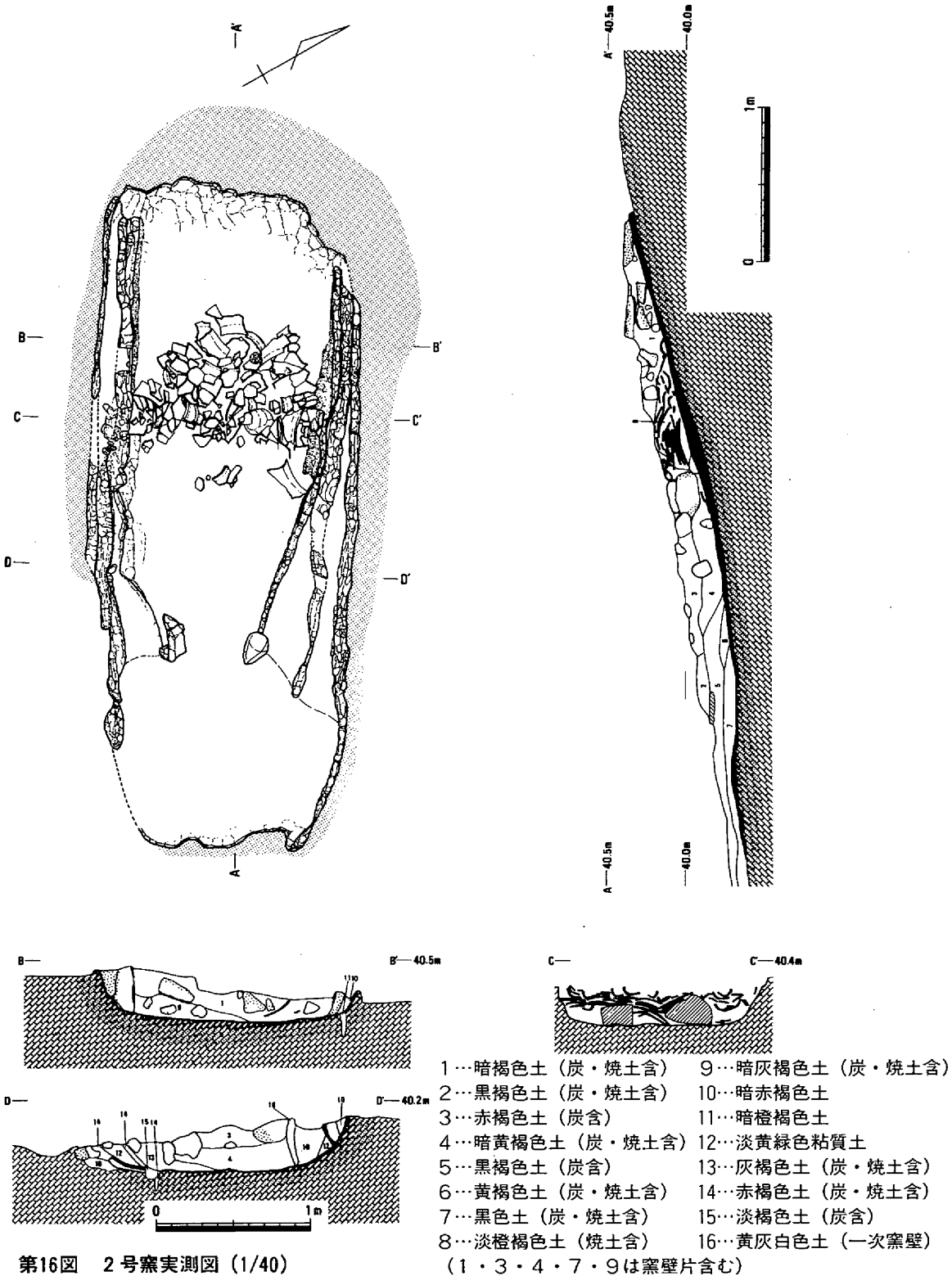
(2) 2号窯 (第15～22図、図版10～17・58～60)

2号窯は今回検出した窯の中でも3号窯と並んでもっとも高所にあり、B-11グリッド南西隅の南向きの緩斜面に位置する。窯体の両側は土壙状にくぼんでおり多量の土器・窯壁片が堆積し、下方1.5mで大きく段状に削平されている。焼成部と煙道部は削平されているが、残存長4.3m、最大幅1.8mを測る。中軸線はN59°Wである。焚き口は一号窯と同様、少なくとも3回は構築されたと思われる、その都度徐々に後退している。1次、2次の焚き口の形状は、正確には不明であるが、2・3次の床面は補修の痕跡はなく、1次の焚き口付近が1部灰原を切って貼られている以外は地山をそのまま利用している。床面はさほど硬く還元された状態ではなく黄灰色を呈しやや軟質である。また床面下約10cmまで被熱酸化層が及んでいる。1次の燃焼部と考えられる部分は舟底状に若干くぼみ、焼成部は15°の傾斜をもって緩やかに立ち上る。壁は最高3枚確認でき1次のもは床と同様地山を利用したもので、焼成部付近では硬く還元された状態であった。2次、3次の壁はスサ混じりの粘土で貼られ、焚き口に向かって挟まっている。3次の焚き口には扁平な石を門柱状に立てているが、2次の焚き口も同じ構造であった可能性が高い。補修された壁は全体的にあまり硬く焼けた状態ではなく表面が若干還元された部分がある程度である。また3次の焼成部の壁では粘土を指で塗りつけた痕跡が観察できた。最終的に2次、3次の壁を除去して床面を精査したところ、床面上に16個の小孔の痕跡を確認した。

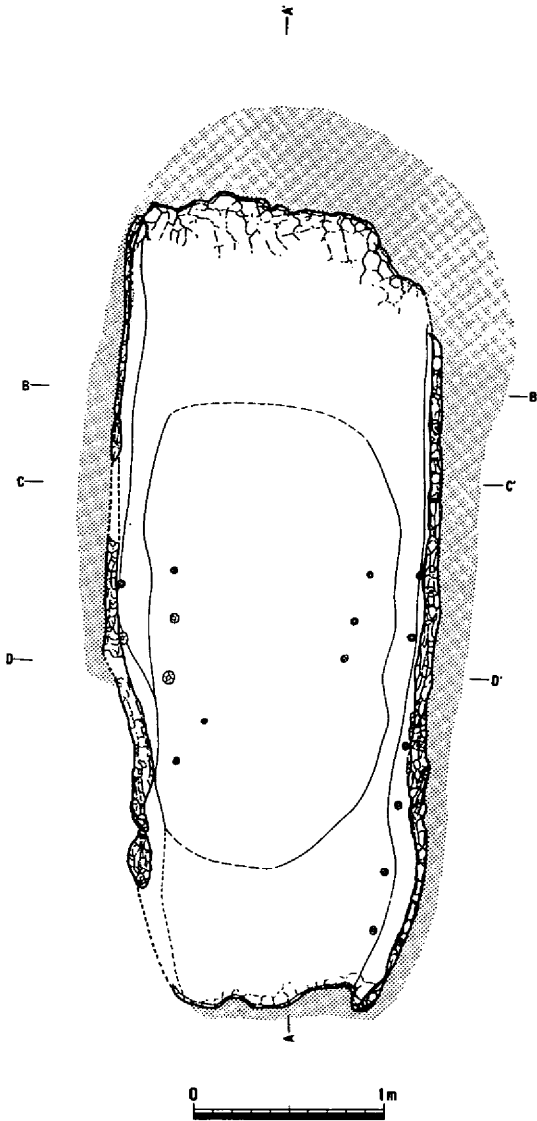
(第17図) 小孔は1次の壁に沿ったものと2次、3次の壁に沿ったものにわかれるが、いずれも直径5～3cm、深さ10～15cmを測り炭が残存していた。この小孔は壁構築時の骨組と考えられる。以上のことから1次の壁も残っているのは地山の部分のみであるが立ち上る部分は粘土で



第15図 2・3号窯周辺図 (1/200)



第16図 2号窯実測図(1/40)



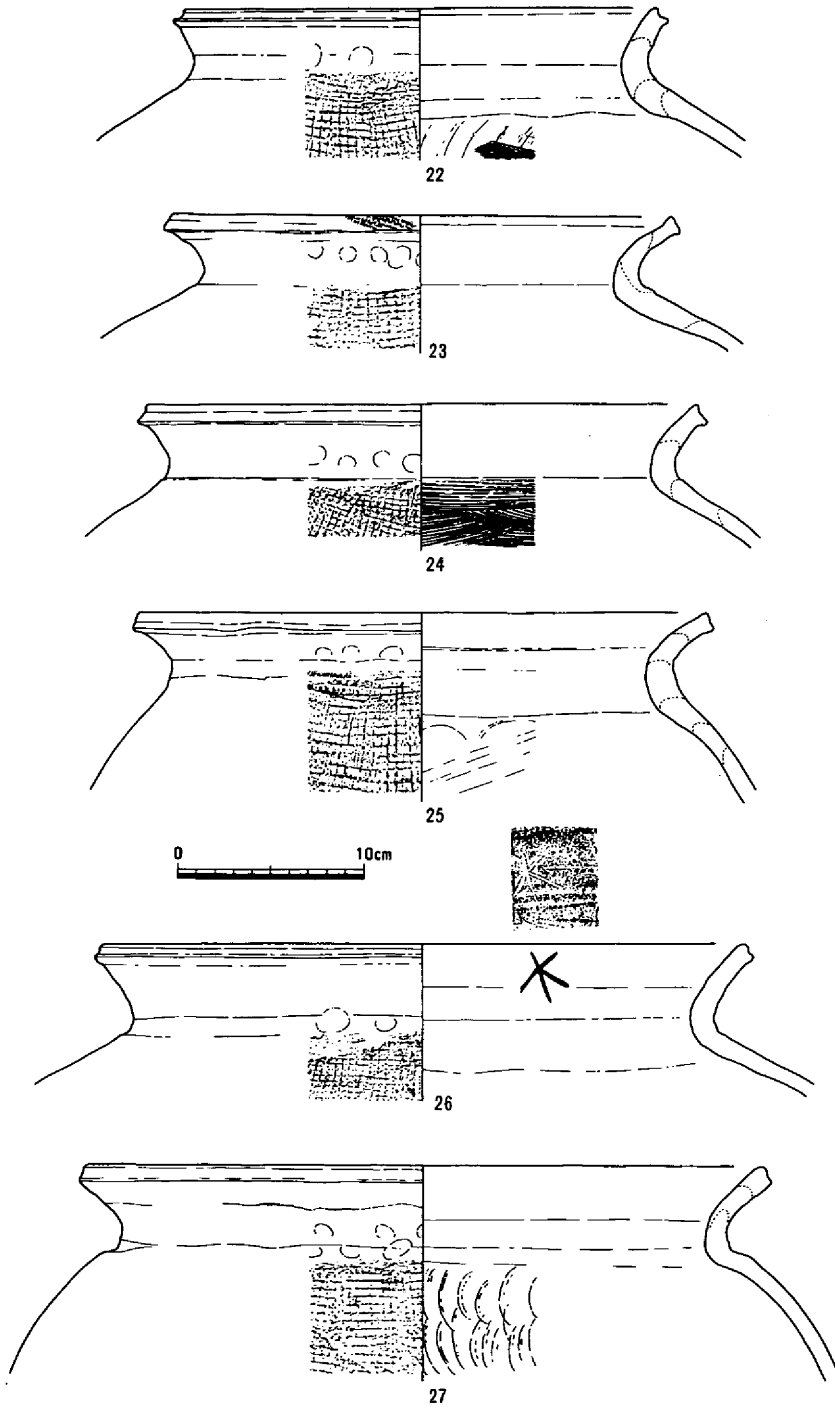
第17図 2号窯床面実測図 (1/40)

んでいる。23は端面に成形時のタタキ目が残っている。体部外面は斜め横方向の格子目のタタキである。内面は同心円タタキの後ナデのものと横方向のハケ調整を加えたものがある。焼成はいずれも良好で青灰色を呈し胎土は1mm～2mm大の砂粒を多量に含んでいる。26～38はやや大型の甕である。口径35cm～46cmを測り口縁部の形状は前記のものとまったく同じである。肩部は丸く、頸部は90°～70°で「L」字状に屈曲し、口縁部はやや外反する。頸部から口縁部には折り返しの指頭圧痕が残り、ヨコナデを加え端部には凹線状の稜線が巡る。また28と31は端面成形時の格子目タタキが残っている。そして口縁部のヨコナデは雑で粘土帯痕や指頭圧痕がよ

構築されていたと思われる。3次の燃焼部と焼成部の境の床面上から(C-C')角礫を2個並列し、その上に主として甕の口縁部の破片を重ねたものが検出された。土器の間には粘土が若干詰められていたが、これは段差を設けて燃焼・焼成効果を大きくしたものと思われる。遺物が熱を二次的に受けた痕跡がなく、構築されたものの操業はされていない可能性が考えられる。同様の状況は後述の6号窯でも確認されている。窯体の覆土は窯壁のブロック・炭・焼土が流れ込み、天井が崩落した状態ではない。また3次の焼き口付近には掻き出されたと思われる灰が薄く堆積していた。

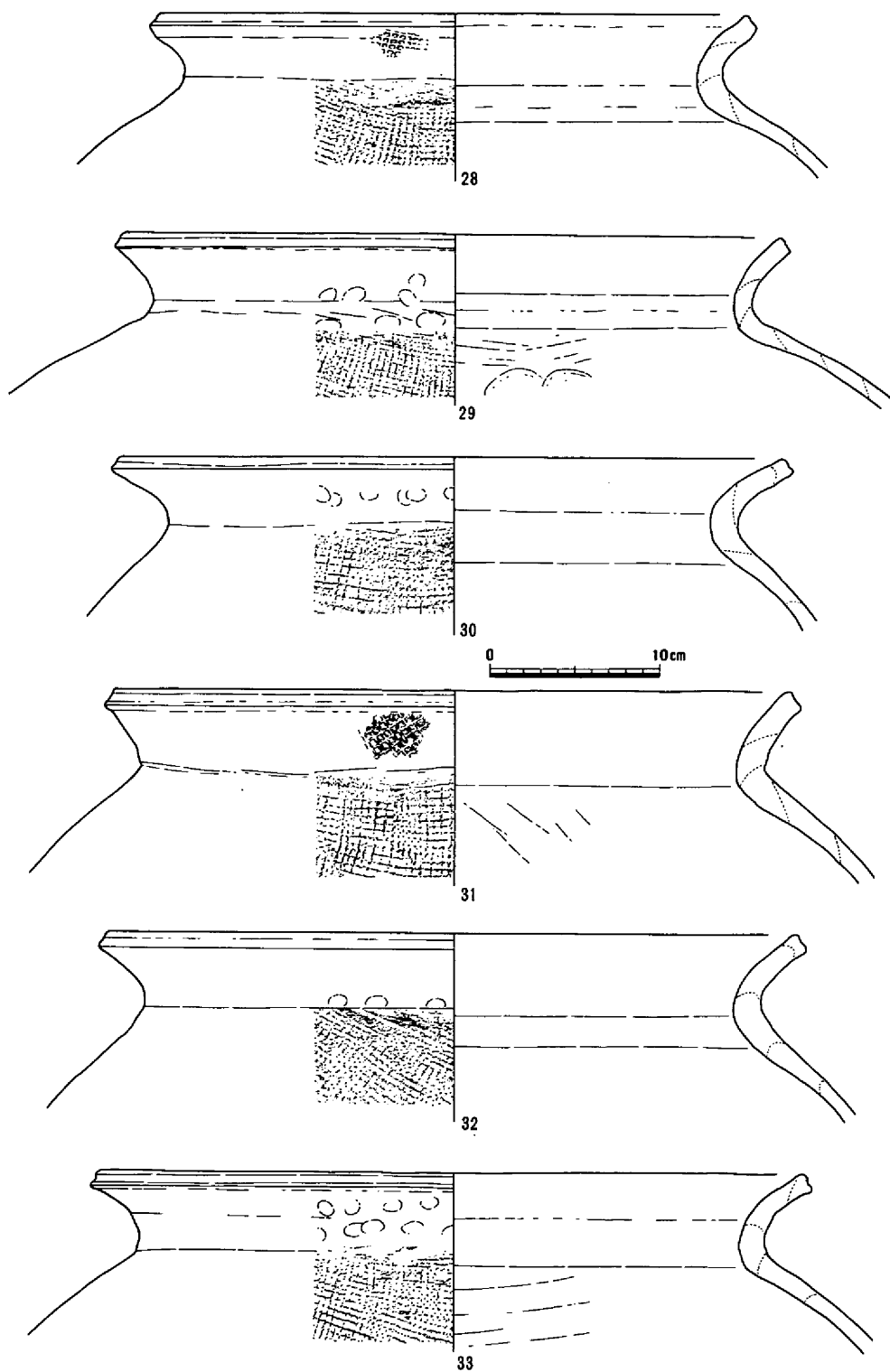
#### 遺物

2号窯の遺物はすべて甕の破片で床面上の障壁に使用されていたものである。そのため直接2号窯の遺物かどうかは不明であり、周辺の灰原から再利用された可能性も否定できない。22～25は口径26cm～31cmを測り丸い肩部から頸部は90°～80°で屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。端部は若干垂れ指頭圧で折り返した後ヨコナデを加え端面が凹線気味にくぼ

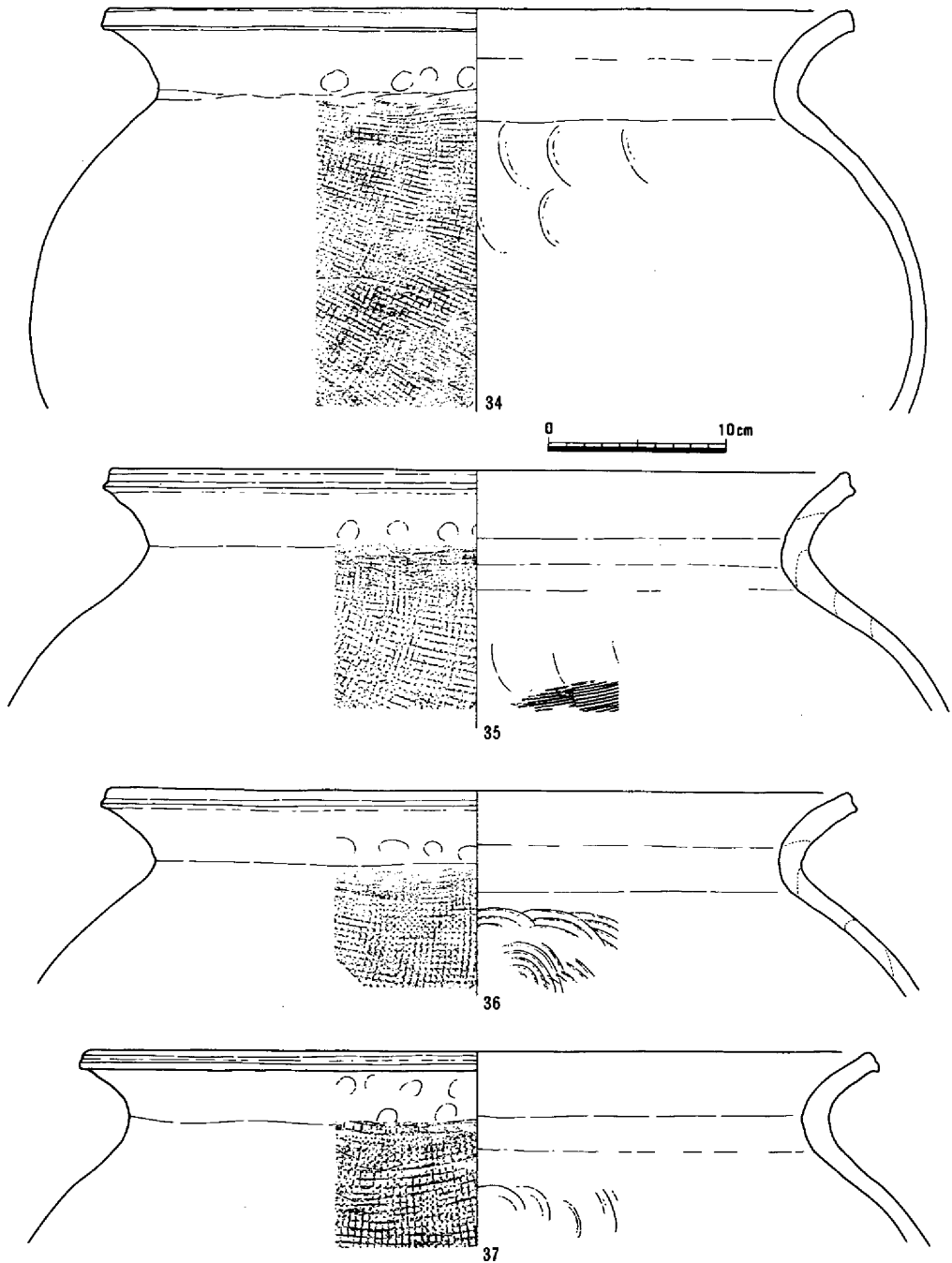


第18図 2号窯出土遺物(1) (1/4)

く残っている。体部の外面は格子目タタキで内面は同心円タタキの後ナデ調整のものと、横・斜め方向のハケ調整のものがある。38は唯一体部がほとんど残る。肩部から体部にかけてほぼ

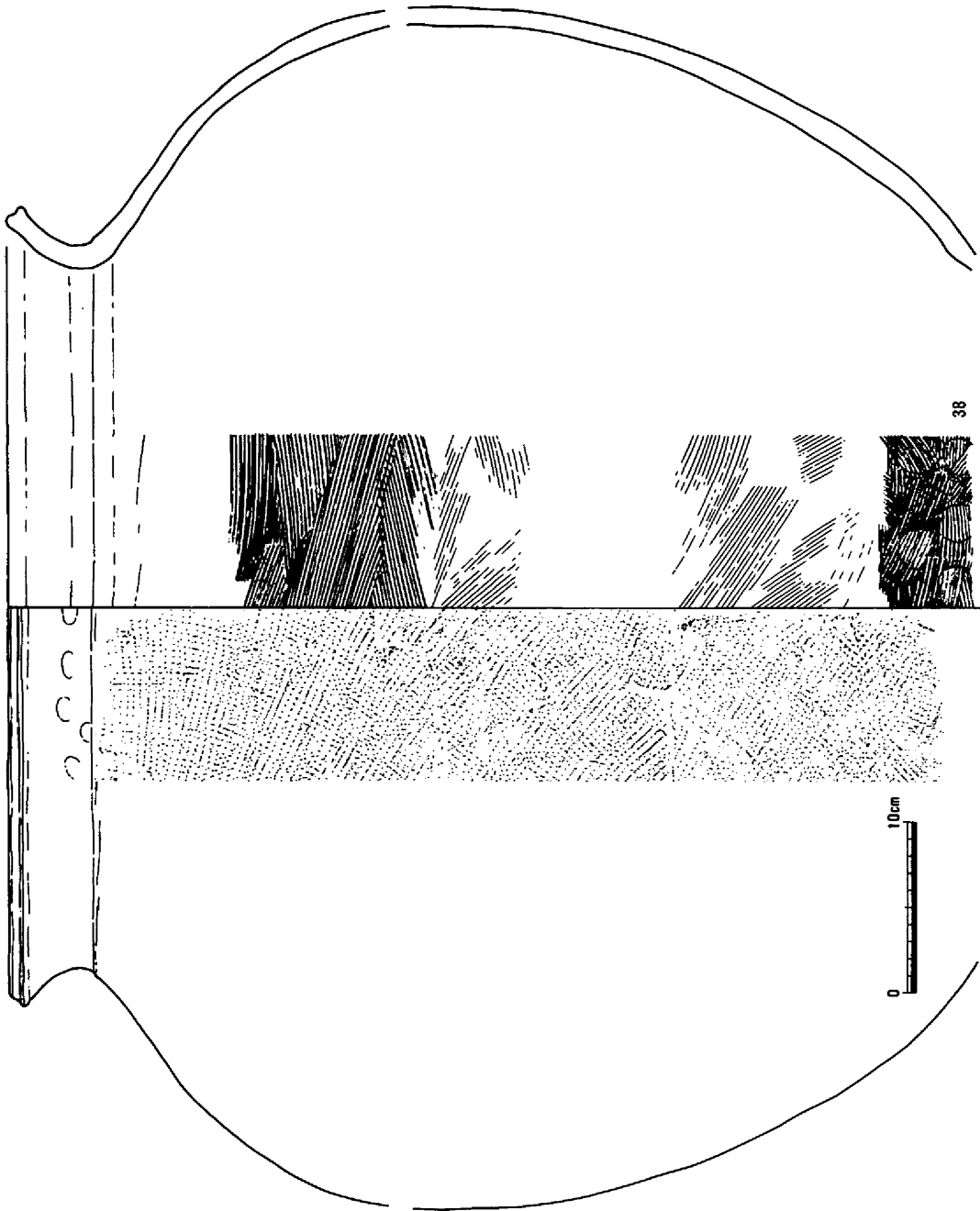


第19図 2号窯出土遺物(2) (1/4)



第20図 2号窯出土遺物(3) (1/4)

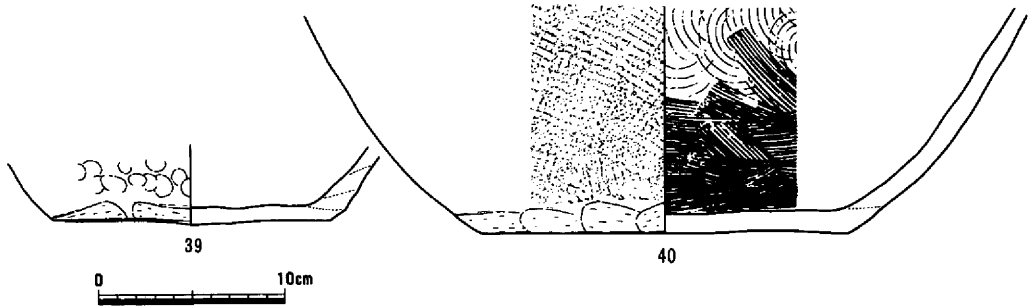
球形を呈し、底部は平底か平底気味のものになると思われる。焼成が非常に良好であるが焼け歪みが甚だしい。外面は肩部付近がヨコ方向の格子目、体部が斜方向の格子目タタキである。内面は斜め方向のハケ調整で仕上げるが底部近くでは指頭圧痕を消すことを意図したかのよう



第21図 2号窯出土遺物(4) (1/4)

に細い入念なハケ調整が加えられている。また26には口縁部内面に「大」のヘラ記号が見られる。39・40は平底の底部の破片である。39は外面が指頭圧の後、下端に横方向にヘラケズリを加えている。内面はナデで、底部の外面は不整方向のヘラケズリの後ナデである。40は体部外面が格子目タタキの後、下端に横方向のヘラケズリが施され、内面は同心円タタキの後、底部





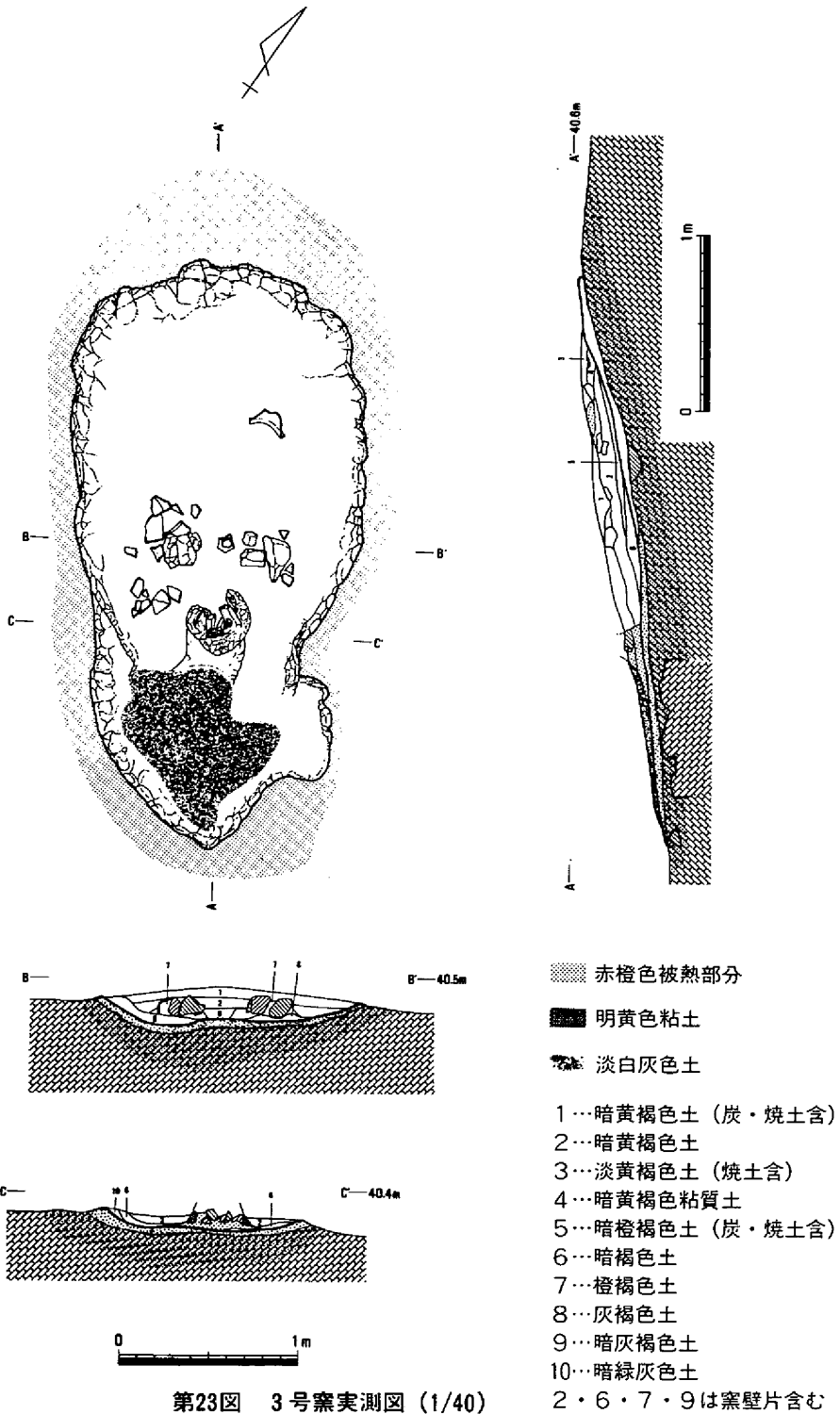
第22図 2号窯出土遺物(5) (1/4)

付近のみ横位・斜方向のハケ調整を加えている。底部外面は不整方向のヘラケズリの後、ナデ調整を加えている。いずれも焼成は良好で青灰色を呈し、1mm～2mm大の砂粒を多量に含む。出土した遺物はすべて亀山焼で、1号窯のように年代を知る手がかりとなる土師質土器の出土はみられない。窯体の考古地磁気年代の測定によると、A.D1240+15年という年代が得られているので、付記しておく。概ね13世紀中頃に操業され始めたと考えてよいだろう。

### (3) 3号窯 (第7・23図、図版17-19)

3号窯は2号窯の南西方約7m、B-9グリッドの北辺の緩斜面に位置する。後世、大幅な削平を受けているため正確な窯体の規模、形状は不明である。残存長約3.3m、最大幅1.6mを測り主軸はN32°Wである。残存しているのは燃焼部と焼成部の一部と考えられ、その境に高さ約10cm、直径約40cmを測る分焰柱基部を確認した。分焰柱はあまり硬く焼けた状態ではなく、割石を明黄色の粘土で巻いて構築されていた。また焼成部にも2か所焼けた石を並列して集中したものが検出され、粘土で被った痕はないが、分焰柱に類似したものの可能性が考えられる。燃焼部には約5cmの厚さで硬く焼け締った灰が堆積している。床面の傾斜は約10°で焼成部上方1.5mで傾斜が緩くなり段状を呈している。断面の観察から床面は厚さ約5cmの粘土によって構築され補修した痕跡は認められない。また燃焼部の床面はやや軟質で黄白色を呈し、焼成部は淡青灰色で硬く焼け締り、還元された状態であった。床面上には遺物は少なく図示し得ない甕の小片が数点存在したのみである。3号窯に伴うと思われる灰原は焚き口より前方が大きく段状に削平されているため全く不明である。また窯体の両側に土壙状のくぼみがあり多量の遺物が堆積していたが、窯との関係は不明で、さらに上方に位置する窯の灰原の可能性が考えられる。そして3号窯の位置する段状部下方の段状に削平された斜面に堆積する遺物も直接的には関係のないものと思われ、時期的には窯が削平された後に堆積したものと考えられる。本遺跡で調査された6基の窯跡の内、構造的にはっきり分焰柱と確認できたのは3号窯だけであり、その存在は特筆される。なお、考古地磁気年代測定によると他の窯より信頼度が低い測定結果とされながらも、A.D1210+15年を示している。

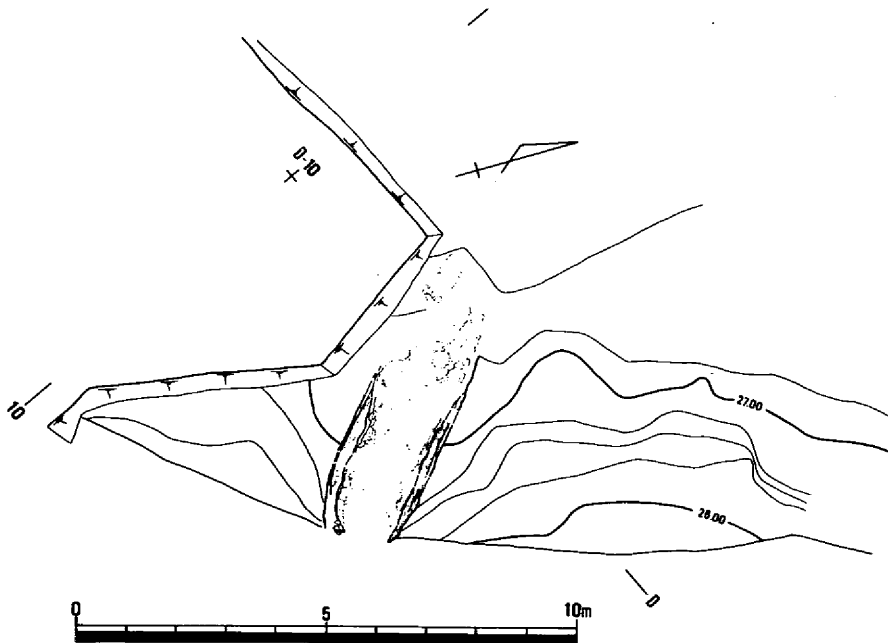
(武田)



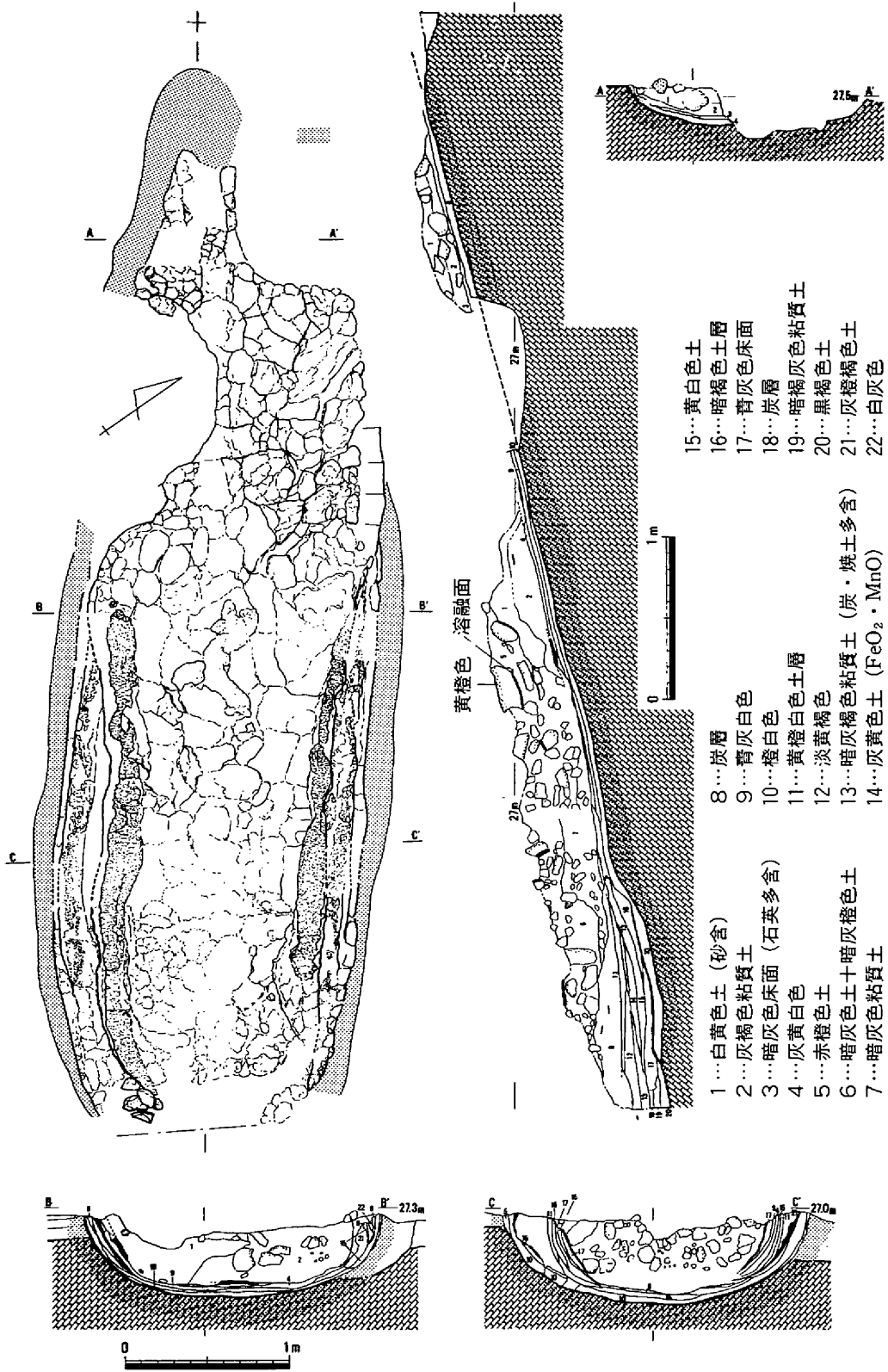
## 4号窯 (第24～27図、図版20～24)

D-10の東約3mに位置し、残存長約6m、最大巾約1.8m、中軸線は、N51°30'Wを示す。窯体は部分的に近世の野つばあるいは、野井戸状の掘りこみによって損壊をうけており、一部窯壁も失われている。窯体の構築は、ほぼ等高線に直行する。傾斜角約8°の緩斜面上、半円形の断面形を呈する窯体部分を直接地山を掘りくぼめてつくられたもので、半地下式の構造をもつ、無段・無階の登り窯の形状を示す。窯体の東から南東方にかけては、その時点では土器溜りは形成されておらず、東側へ下降する斜面となっていたようである。窯体の南から南西方にかけては、灰原1が形成されており、緩やかに窯体部分に向けて地山面は高まるが、灰原の一部は4号窯構築の際切られている。それによって、灰原1の出土遺物の一群が4号窯に先行することが明らかとなっている。

窯体の床面傾斜角度は、13.5°を測り極めて緩やかな傾斜を示す。窯体は第25図に示すように大きく2度の修復が行われており、徐々に巾を減じている。これは1・2号窯と同様、焚き口も上方へと移動したことをも意味している。焚き口部分の南端部には、数個の角礫が立てかけられており、1・2号窯などと同様、門柱状をなしていたことが推察される。これは、おそらく第3次窯体に伴うと考えられよう。燃烧室にあたる部分は、第25図の第10層・第16層の部分に窯体築成の段がみられ、特に木炭が集中して検出されており、その可能性が強い。焼成室の壁体は、やや多孔質の鉛状に熔融した灰黄緑色を呈し、まさに自然釉の状態を示して堅硬であ



第24図 4号窯周辺図 (1/150)

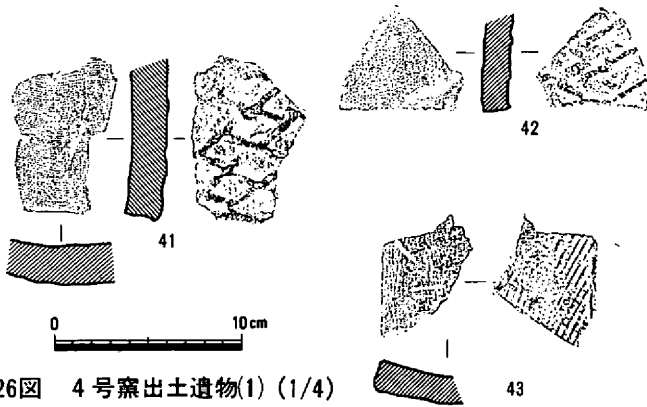


る。床面は白灰色を呈し溶融面をなしてはいないが還元焰焼成によって極めて堅硬な面が形成されている。この面は、1～3次にかけては、床面としては共通面をなしている。

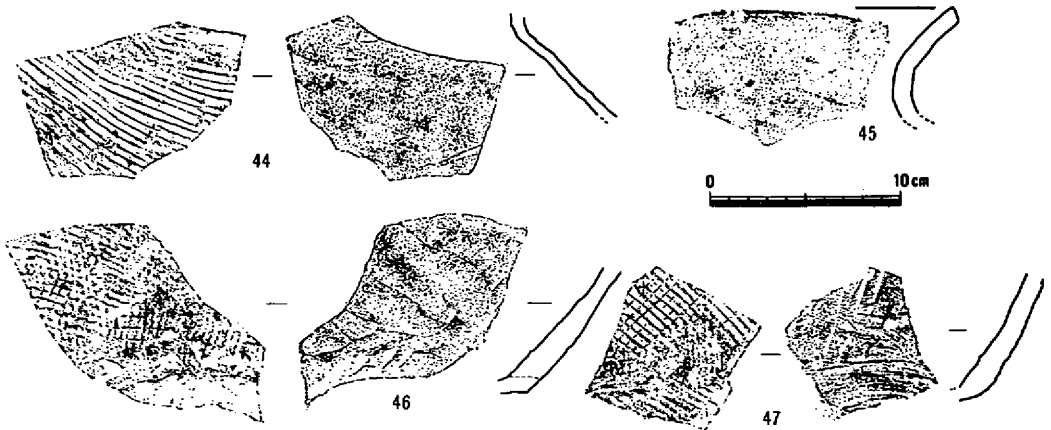
遺物

窯体内には、天井部の一部とみられる窯壁片や亀山焼の破片が出土しているが、最終的に窯が機能しなくなってからの二次堆積と考えられる。そのため、床面に密着して出土した土器片は少なく、作業中に埋没・廃絶された状況を示していない。出土遺物は第26図に示す瓦と、第27図に示す、燃焼室付近で出土した甕片がみられる。41・42はやや粗大な斜格子タタキ目が凸面に施された平瓦片で、いずれも凹面に布目が残る。焼成は須恵質で暗灰色を呈している。43は、凸面に甕にみられる格子目タタキと同様の約4mm方格の格子目タタキが施された平瓦片である。焼成は須恵質で青灰色を呈する。44～47は甕片で、44は体部上位、45は口縁部片である。44は、一見平行タタキ目のようにみえるが、やや細い軸線が直行してみられる格子目タタキが斜方向に施されている。内面は、同心円タタキを丁寧にナデ消している。45は体部と口縁部との

の屈曲は約75°を測り、立ち上がりはかなり急である。内面にはかすかなヨコハケ調整がみられる。46・47は、いずれも甕の底部片であるが、平底に移行することが看取される。外面は3～4mm方格の格子目タタキが施され、底部に近い部位では、ヘラケズリがめぐる。内面は46がユビナデ、47



第26図 4号窯出土遺物(1) (1/4)



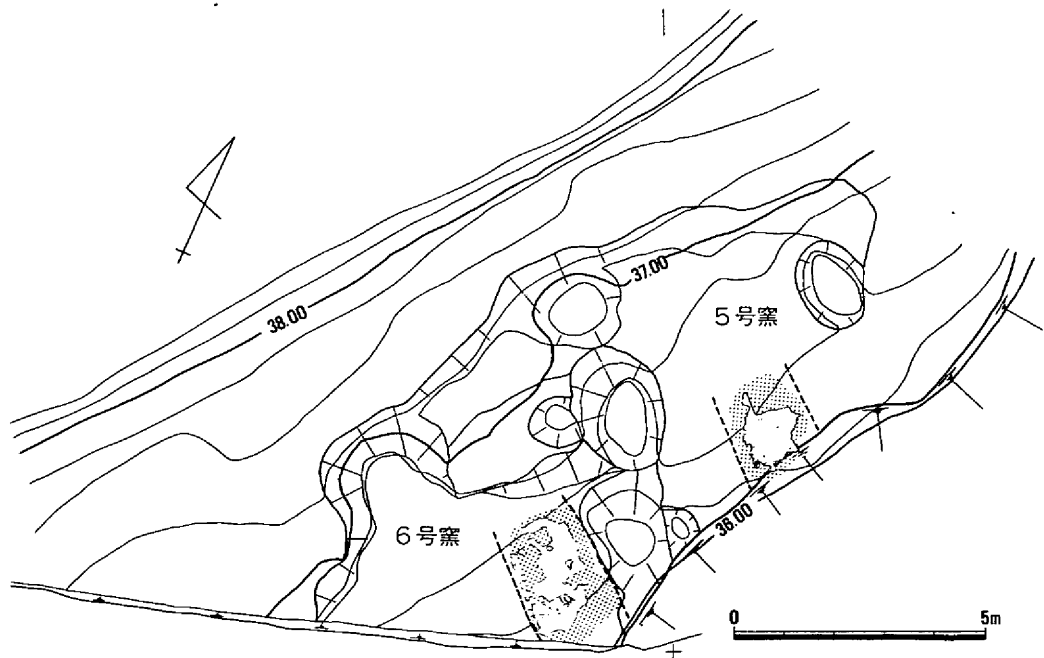
第27図 4号窯出土遺物(2) (1/4)

は荒いハケ調整によっている。これらの甕片は、いずれも灰青色を呈し、焼成は良好である。なお、1次～最終窯壁の隙間には、わずかな亀山焼片が含まれており、1次壁と2次壁の間では、甕片12点のうち平行タタキが施されたもの3、格子目タタキ3、不明6点となっており、平行タタキの亀山焼が焼造された時期から、格子目タタキへ移行した過渡期に存続した窯であることが注意される。44のような格子目タタキもまた、やはり過渡期的な格子目タタキの一つといえるかもしれない。

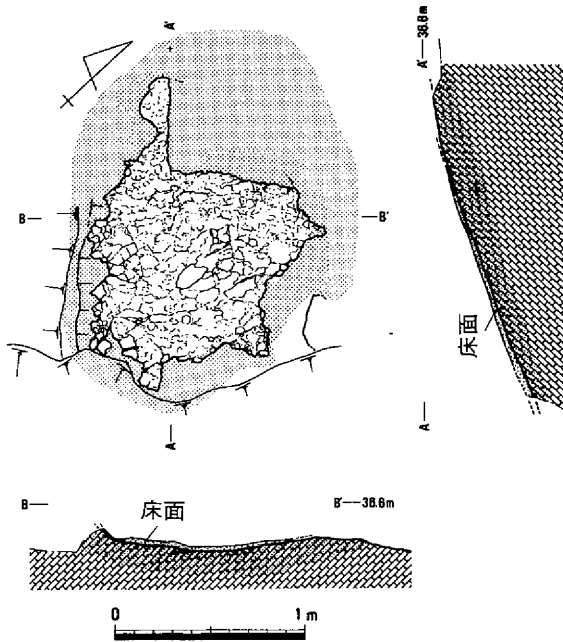
なお、窯体の熱残留磁気による年代測定ではA.D1220年+20年の年代が与えられている。また、燃焼部出土の木炭による液体シンチレーション<sup>14</sup>C年代測定によれば、910±80年B.Pの年代が得られ、10世紀後半～12世紀前半と測定試料が少量であったため測定値に巾がある。

(5)5号窯 (第28～31図、図版25・61)

調査区の最西端に近い、6ラインの東側に接して検出された。南西3.5mには6号窯が検出され、ほぼ平行して、2基の窯が検出されたことになる。窯体の残存度は、検出窯中もっとも悪く、検出長わずかに1.8m、巾1.3mを測るのみである。窯体の傾斜角度は18°30'で他の窯と同様、緩やかである。中軸線の方法はN46°40'Wを示す。窯体は、地山を浅く掘りくぼめて、下部を築成し、半地下式の構造をとっており、基本的に他の窯と同様の形態を示している。厚さ約5cmを測る床面は、白っぽい黄灰色を呈し、堅硬に焼きしまってはいるが、比較的表面はもろい。また、残存する土層断面の観察の限りでは、窯の修復・再利用は認められない。



第28図 5・6号窯周辺図 (1/150)



第29図 5号窯実測図(1/40)

ことを示唆している。この痕跡については、類例がしばしば認められ、亀山焼甕の特徴として注意される手法と考えられる。53・54はいずれも底部は平底で、体部下端には、横方向のヘラケズリがめぐる。これは播鉢・捏鉢には必ずといってよいほど看取される手法でもある。残存度が悪い窯体であるため、熱残留磁気による年代測定による結果は得られなかった。

また、第31図は本窯の周囲から出土した遺物で、平瓦と甕片である。55は、凸面に先端が丸味を帯びた長方形の格子目のタタキ板の痕跡が明瞭に残り、巾約6cmの板が使用されていることが観察される。56～59はいずれも体部外面に格子目タタキが施された甕口縁部片で、内面には同心円タタキがみられる。

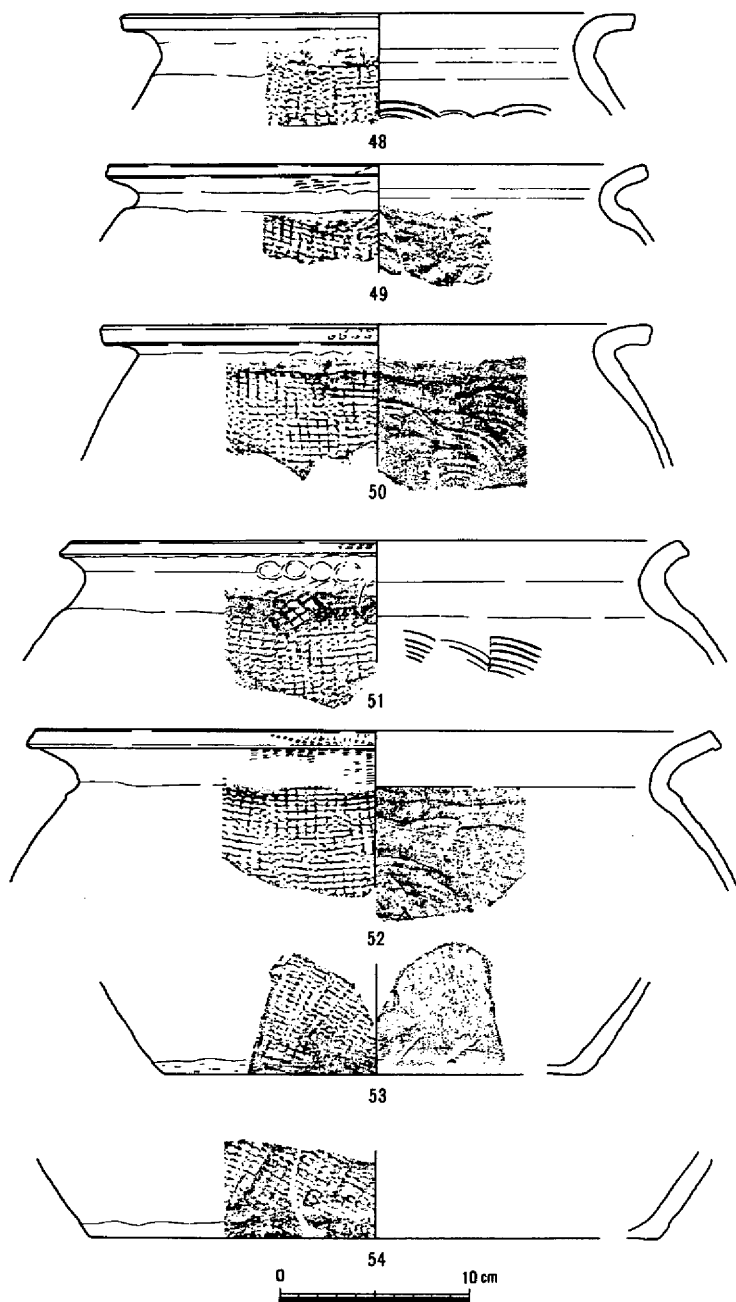
(6) 6号窯(第28・32～38図、図版25～27・62)

5号窯の南西3.5mに位置する。周辺には、凹地がみられ、廃絶前後の粘土採掘などの目的で掘られた可能性もある。5・6号窯ともに、等高線に沿って掘りくぼめられたテラス状の緩斜面に築かれているようである。

窯体は、残存長約2.1m(被熱部分の長さは2.7m)、巾1.3mを測り、南西側の壁体のみ、約20cmの立ち上がりが認められる。窯体の傾斜角度は11°を測り緩やかで、中軸線はN49°30'Wを示す。窯体下位には、平瓦・軒平瓦が窯体主軸方向に直行して並べられ、高さ10cmの土手状をなしている。この下層はやや硬く叩き締められた淡灰黄褐色土が築かれている。2号窯でも甕片による同様の状況が認められたがその性格については明らかではない。本窯の場合、平瓦・軒

遺物

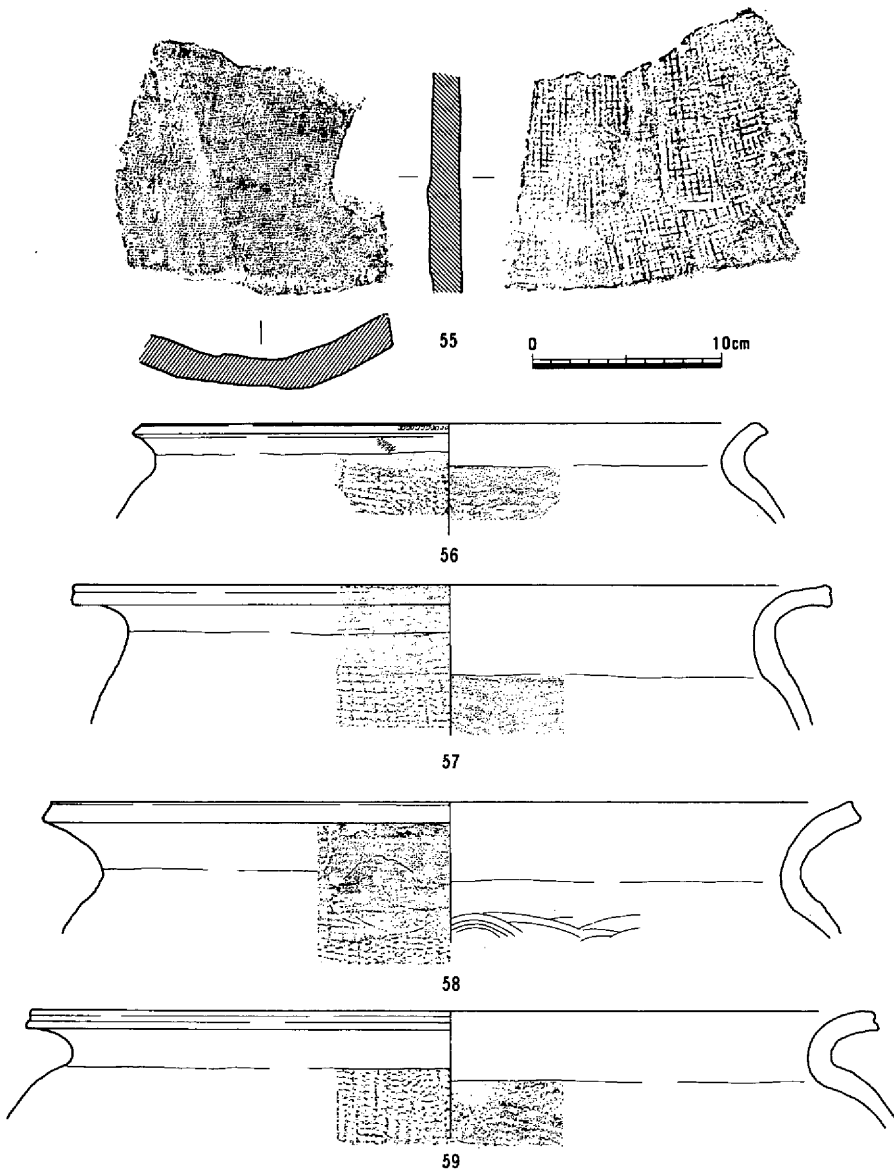
窯体内からの遺物としては、第30図48～54の甕片が出土している。いずれも、屈曲度が強く短い口縁部をもち、体部の肩は張らない。体部外面は小さな格子目タタキがみられるが、53・54はやや長方形を呈している。体部の内面は同心円タタキが施され、ナデ消されていない。これらの甕は、すべて焼成は悪く器表は暗褐色～黒褐色、断面は明橙褐色を呈している。5号窯で焼成された残存遺物(破損品)の可能性もある。49～52には口縁端部にもつぶれて細長くなった格子目タタキが観察され、成形の際の叩き締めが行われた



第30図 5号窯出土遺物 (1/4)

平瓦はくすんだ灰褐色～黄褐色を呈し、部分的に黒色を呈し、二次的被熱による色調とも理解され、焼成中に必要な構築物であった可能性も考えられる。しかし、2号窯の場合、瓦片は淡灰青色を呈する須恵質そのものであり、高火度による被熱は考え難い。陶芸家好本宗峰氏によれば、実用的な面からの推定という前提で、製品を焼成する最中に焚き口から燃焼室へ薪材を





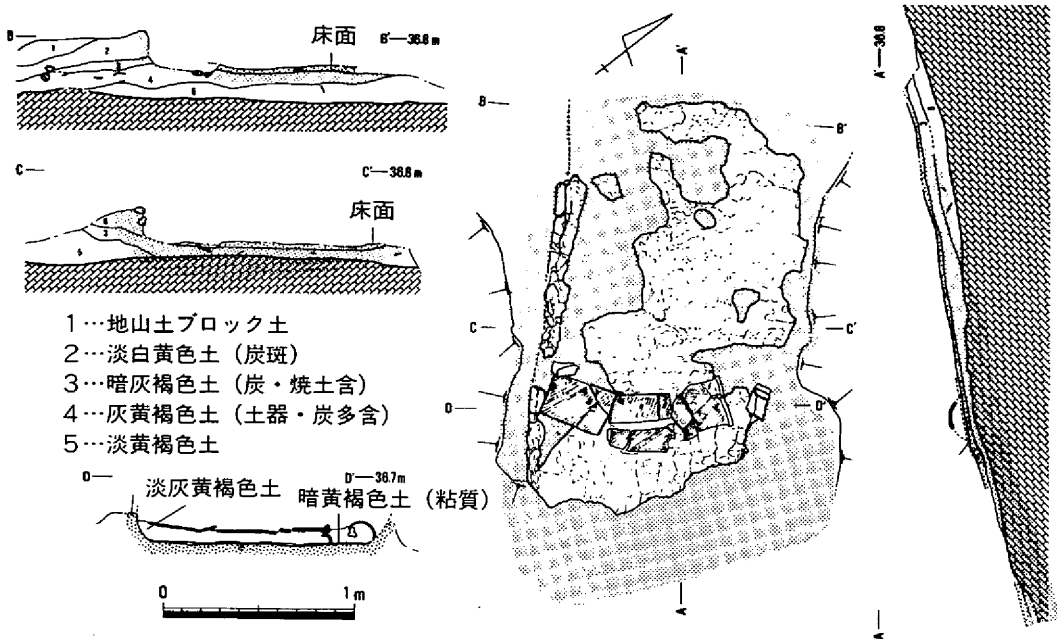
第31図 5号窯周辺出土遺物 (1/4)

投入する際、奥の焼成室の製品を傷つけないよう薪材の先端をとめるよう配慮された構築物ではないかとの教示を受けた。

残存する窯体部分では、窯体の修復・再利用は認められないが、上方のB-B'断面の西側では、包含層の上位に窯体が築成されており、1・2号窯のように数次にわたる修復を重ねて、窯体そのものが上方にせり上がっていった結果とも考えられる。

#### 遺物

窯体の周辺および、覆土中からは比較的多量の遺物が出土している。まず、先述の土手を形



第32図 6号窯実測図 (1/40)

成する瓦について説明を加えよう。60は玉縁をもつ丸瓦で、巾13.4cm、全長27cm以上を測る。玉縁の長さは約3cmで短かく、基部の凹部では段差がつく。凸面は平行条線状のタタキの後、斜方向のナデ調整が加えられている。凹面は、同心円タタキが施され半円形に凹んだ内型に粘土を詰めて成形された一枚づくりの瓦であることを示唆している。なお、玉縁部分はナデ調整で仕上げられ、端縁・側縁は鋭利な刃物で切り放されている。色調は、灰黒色を呈する。61は軒平瓦で、瓦当の文様面はやや左に偏っており、浅い。蓮華文と車輪文を交互に配した独特の文様が表現されている。凸面は約4mm方格を基本とする格子目タタキ、凹面には布目痕が認められる。瓦当面から28cmの位置に径6mmの釘穴が穿孔されている。この部分で破損しているが、割れ口断面は被熱によって凸面と同じ黒色を呈しており、割れた後、二次的焼成を受けたことを物語っている。62は瓦当部分が故意に取り外されたとみられる軒平瓦と考えられる。凸面は小さ目の方格で2~2.5mmの格子目タタキが認められ、凹面は布目痕が認められる。布目は3cm四方、横糸21本、縦糸18本を数える。鋭い刃物で切り放された側縁は長さ30~33.5cm、色調は全体的にくすんだ黄褐色~灰色を呈する。63は完形の平瓦で、凸面は4mm方格の格子目タタキ、凹面は、3cm四方縦・横約40本の布目痕が認められる。端縁巾22~22.3cm、側縁長34~34.8cmを測るが、いずれも鋭い刃物で切り放されている。色調は、凸面黒灰色~暗黄灰色、凹面は暗灰色を呈している。以上の瓦はいずれも焼成は比較的良好であるが、須恵質の状態とはなっていない。おそらく二次的被熱を十分受けたことが推察される。胎土中にはいずれも石英粗砂を

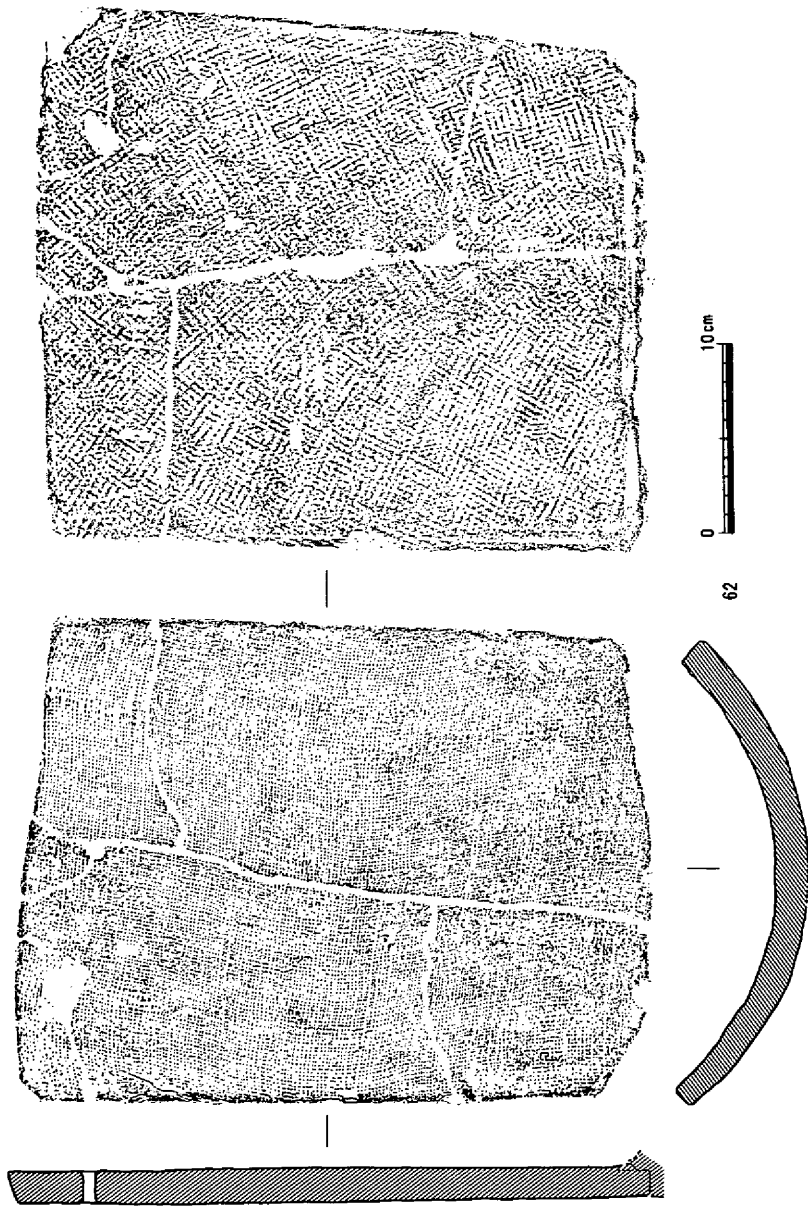
含む微砂粒が多く含まれている。

第36・37図は窯体内覆土中から出土した遺物である。64は土師質土器碗の高台部片でいわゆる早島式の碗である。黄白色を呈する。65は土師質の甕口縁部片で、やや肥厚する口唇端部に



第33図 6号窯出土遺物(1) (1/4)

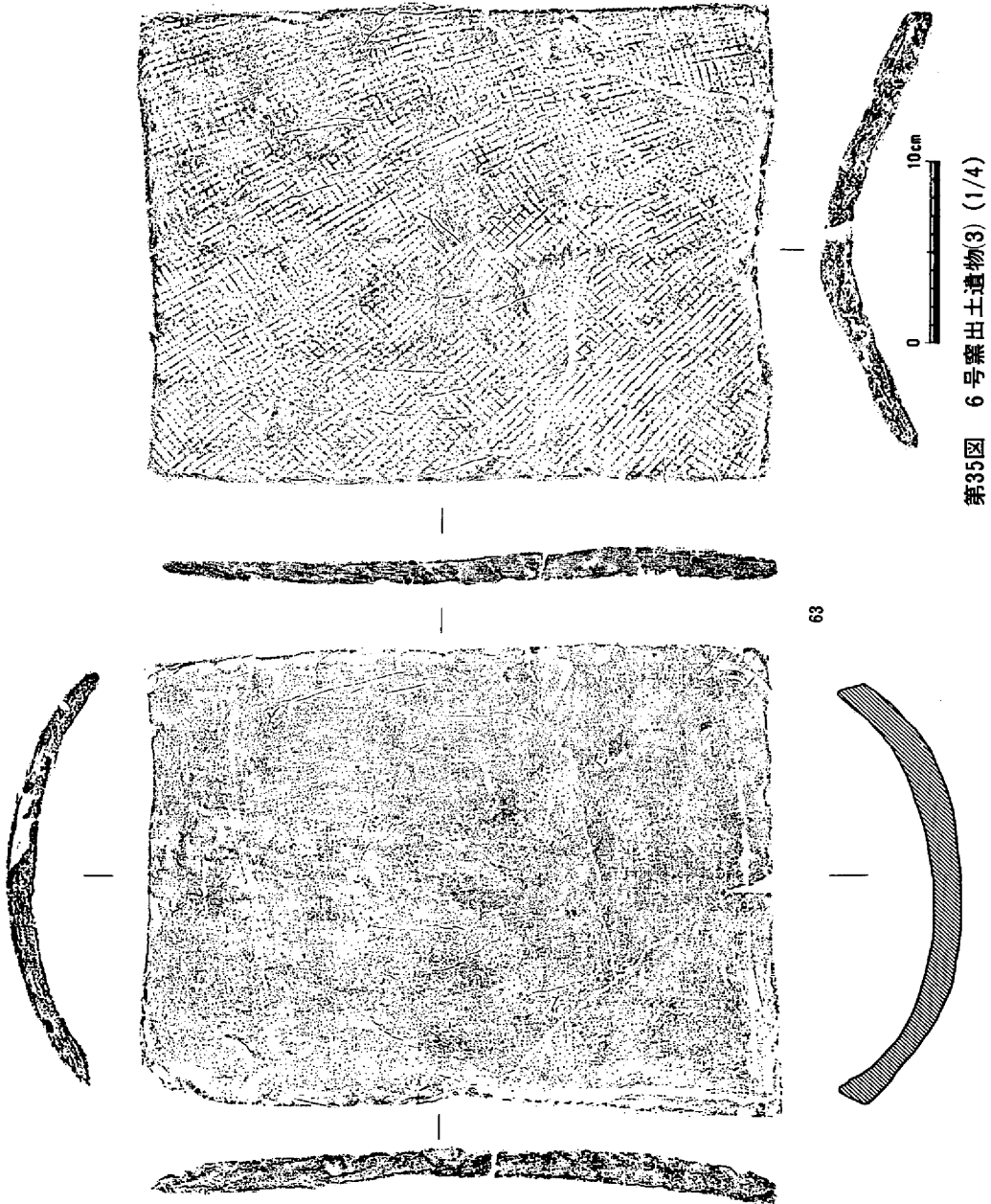
特徴がある。66・67はいずれも亀山焼の鍋片と考えられ、灰黒色を呈している。68は平瓦で、凸面にはやや粗大な斜格子タタキ、凹面には布目痕が認められる。69～73はいずれも亀山焼甕で、体部外面には格子目タタキ、内面はやや細かい同心円タタキが施される。口縁端部の格子目タタキ痕跡が69・71・73にもみられる。これらは、いずれも焼成は軟質で灰黒褐色～橙褐色を呈する。また、本窯の周囲では、第40図77～80の亀山



第34図 6号窯出土遺物(2) (1/4)

焼甕が出土している。体部外面にはいずれも格子目タタキが施されており、内面は同心円タタキあるいはそれをナデ消したものが含まれる。74は口頸部が極めて短い形状を示し、あまり多く出土例が認められないものである。これらの甕はいずれも体部と口縁部の屈曲の度合は小さく、短い。

本窯の時期は、直接的な遺物によって知ることができないが、窯体覆土中の出土遺物などにより、ほぼ13世紀代に比定される。なお、熱残留磁気による年代測定によればA.D1220年+30

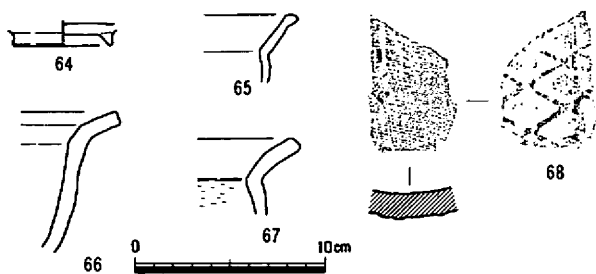


年の数値が得られている。

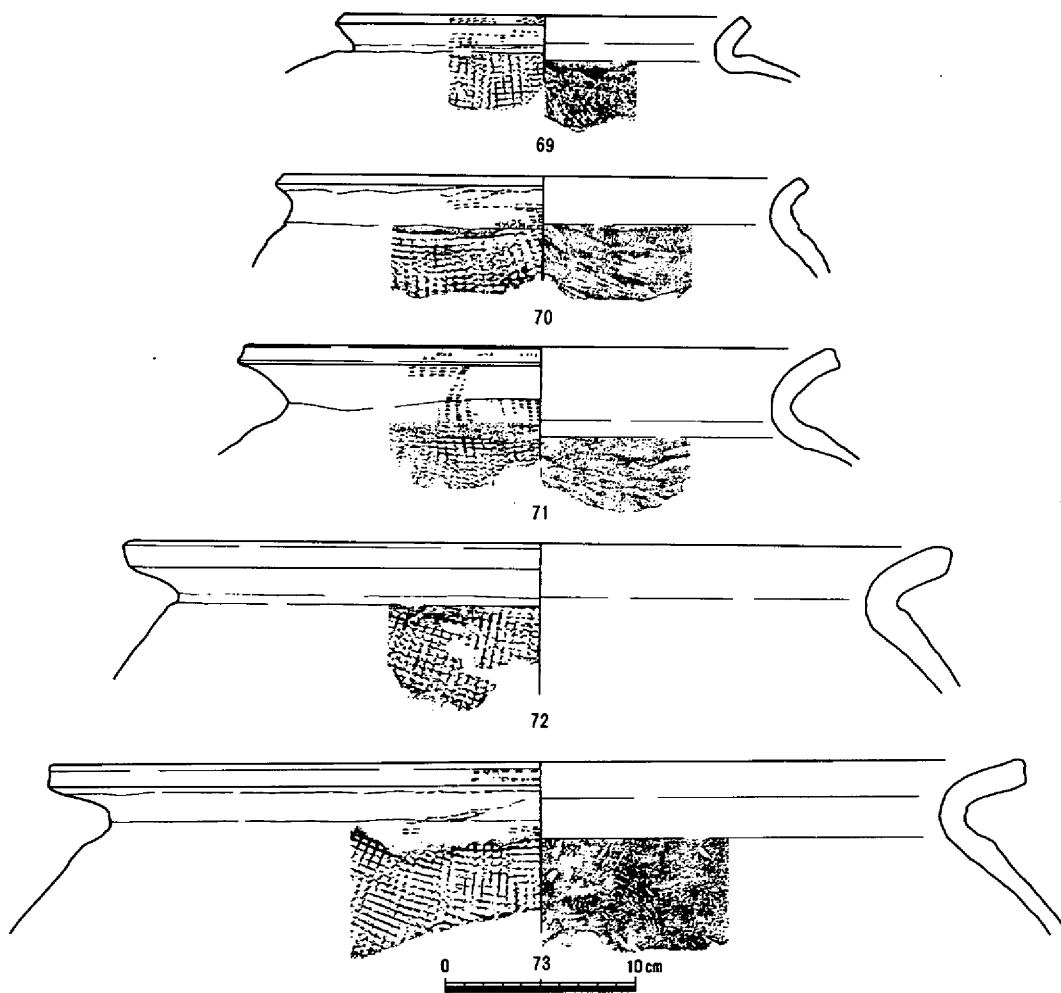
(岡田)

## 2. 灰原

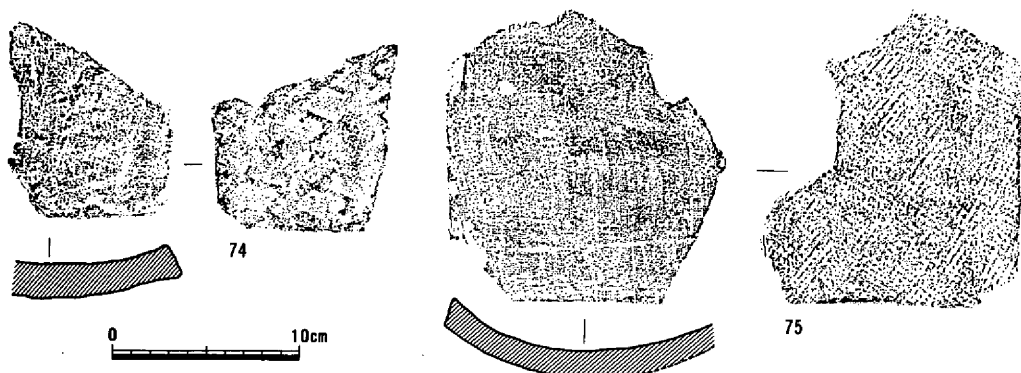
本遺跡で確認された灰原は、確実なものとしては、4号窯に切られた灰原1のみであるが、本来伴うはずの窯は確認されていない。また、検出された1～6号窯の各窯も直接的な灰原を伴っておらず、窯で焼造された製品を知る手がかりが極めて少ない。しかし、後項で述べる土



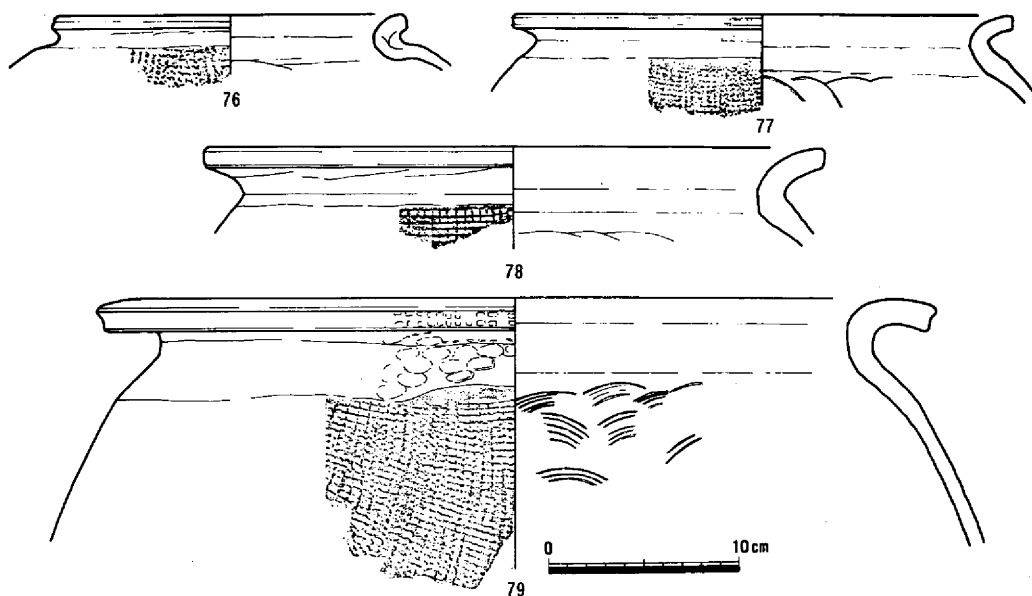
第36图 6号窟出土遺物(4) (1/4)



第37图 6号窟出土遺物(5) (1/4)



第38図 6号窯周辺出土遺物(1) (1/4)



第39図 6号窯周辺出土遺物(2) (1/4)

器溜りあるいは、土壙1などの遺構では、明らかに灰原の一部の流れこみや、堆積が看取されるものもあるので、それらのもつ出土遺物の一括性に比重を置いて各項で概説を加えることとしたい。

(1)灰原1 (第40～57図、図版28・63～70)

4号窯の南西に近接して検出された灰原で、わずか5.6㎡ほど検出できた狭小な範囲である。緩やかな斜面に、厚さ15cmほどの木炭、灰層(第41図-11層)が堆積しており、この中から多くの亀山焼が出土している。この上層の第3層・第3'層からも焼土や窯壁片が出土しており、窯の存在を間近に感じさせる灰原の状況を呈している。出土している木炭は、コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一種と同定されるものが多く、他にマツ属(複雑管束亜属)の一種と同定

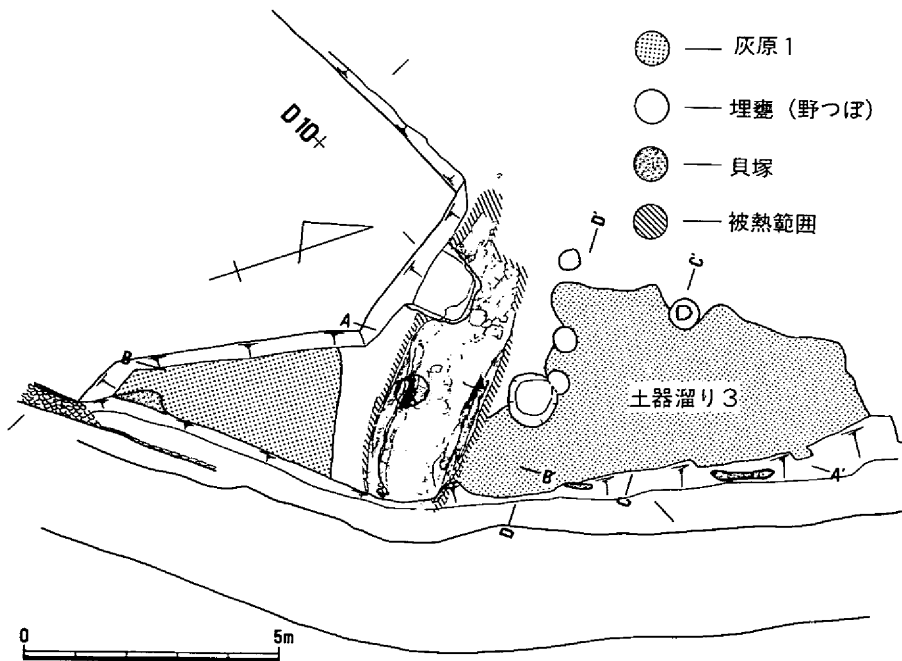
されるものもある。(註1)

出土遺物は、若干の混入はあるものの、ほぼ一括の資料と考えられるが、第56図に示すように、土師質土器の破片も少なからず散見し、2号窯の焚き口付近で出土した、土師質土器の出土状態をみても、亀山焼の焼造に関わる工人が使用していたものではないかと考えられる。土師質土器をも焼造した可能性は、全くないとはいえないまでも検出された構造の窯体では、焼造不可能とみてよいだろう。

亀山焼は、従来もっとも重要かつ普遍的な特徴として、甕の体部外面に格子目タタキがみられるという点があげられていた。しかし、今回この灰原1では、平行タタキが施された甕が数多く出土し、これらとともに瓦や、体部下位に格子目タタキが施された鍋あるいは、壺の破片も共伴して出土している点が特筆される。層位的に、4号窯に先行する灰原であることは確実で、4号窯の窯壁中に平行タタキをもつ甕片が出土した事実と照らし合わせてみても、平行タタキそのものが、格子目タタキに先行することは明らかである。しかし、灰原1の甕片すべてが平行タタキではなく、格子目タタキも伴っており、平行タタキから格子目タタキへと移りかわる過渡期の生産品と考えてよいだろう。(註2) 以下、器種ごとに概述を加えてみたい。

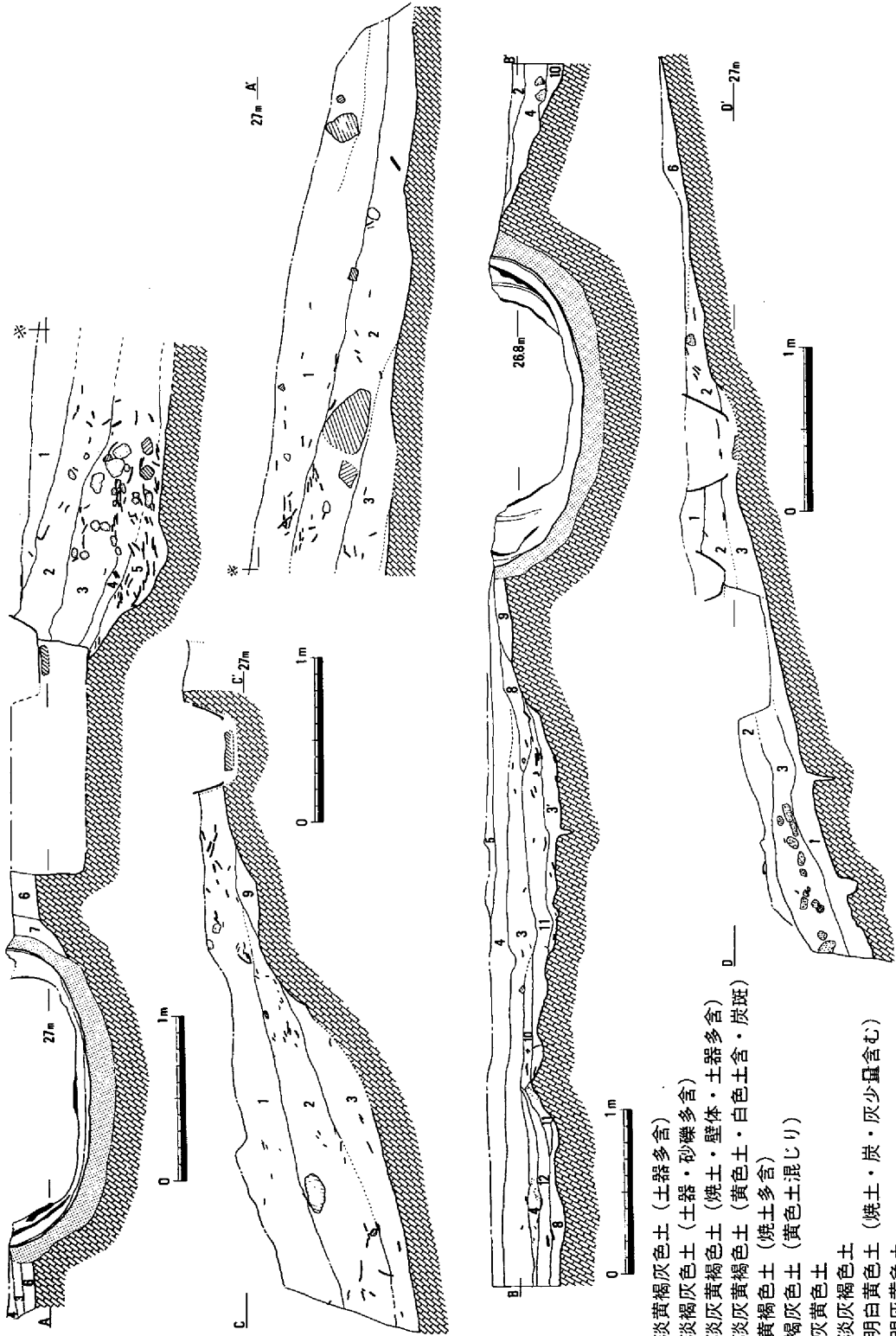
#### 瓦 (81~88)

81・82は丸瓦と考えられ、前者には玉縁がとり付けられる。凸面には、小さい斜格子タタキがみられ、内面には布目痕が残る。83~88はいずれも凸面に粗大な正格子タタキが施された平



第40図 灰原1・4号窯・土器溜り3配置図 (1/150)



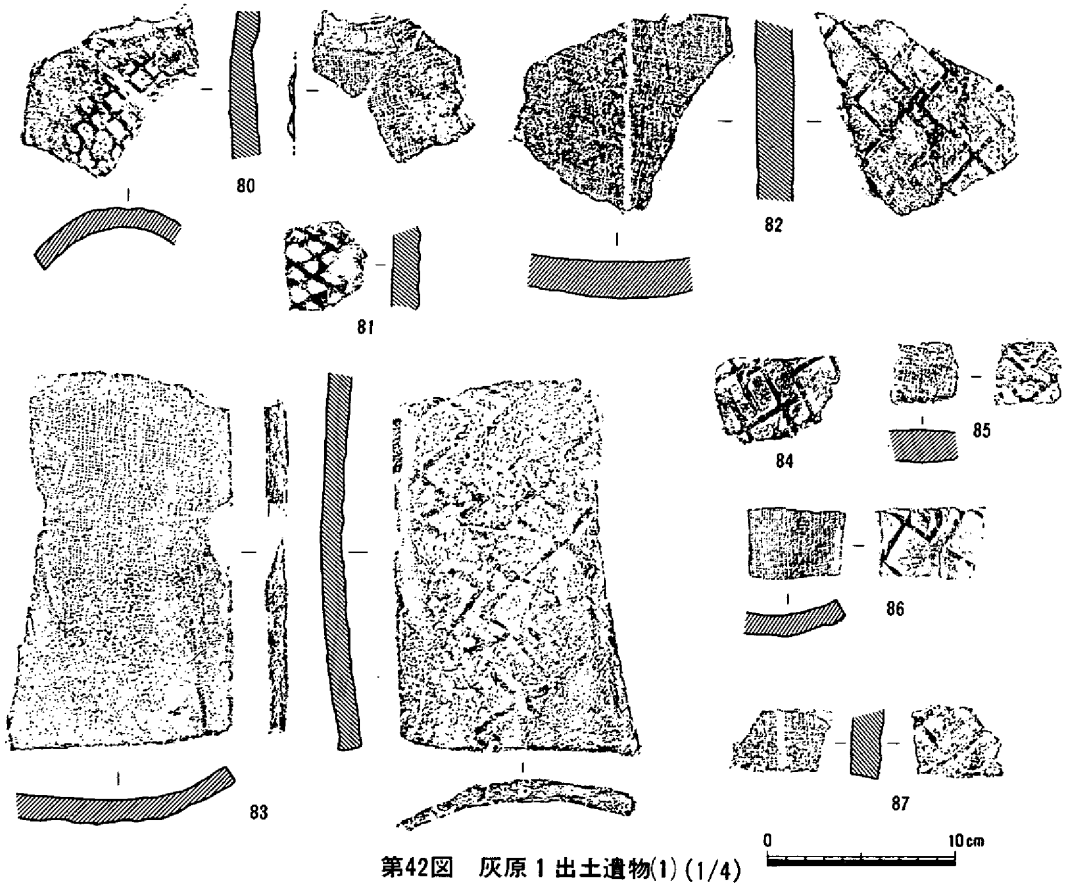


第41図 灰原1・4号窯・土器溜り3土層断面図(1/40)

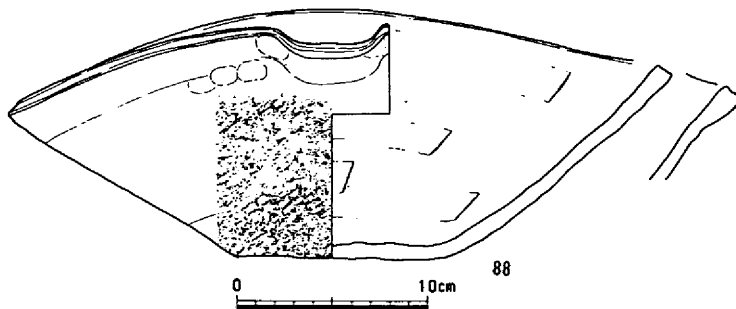
- 1…淡黄褐色土(土器多含)
- 2…淡褐色土(土器・砂礫多含)
- 3…淡灰黄褐色土(焼土・壁体・土器多含)
- 3…淡灰黄褐色土(黄色土・白色土含・灰斑)
- 4…黄褐色土(焼土多含)
- 5…褐灰色土(黄色土混じり)
- 6…灰黄色土
- 7…淡灰褐色土
- 8…明白黄色土(焼土・炭・灰少量含む)
- 9…明灰黄色土
- 10…灰褐色土
- 11…炭・灰層(木炭片・平行タタキ片多含)
- 12…暗灰褐色土(黄色ブロック多含)

瓦である。いずれも、側縁に対して斜行しており、83は、薄手なつくりで、焼けひずみも著しく、凸面の格子目もやや不鮮明である。これらは、すべて須恵質に焼成されており、黒色ないし灰黒色の瓦質のものはみられない。

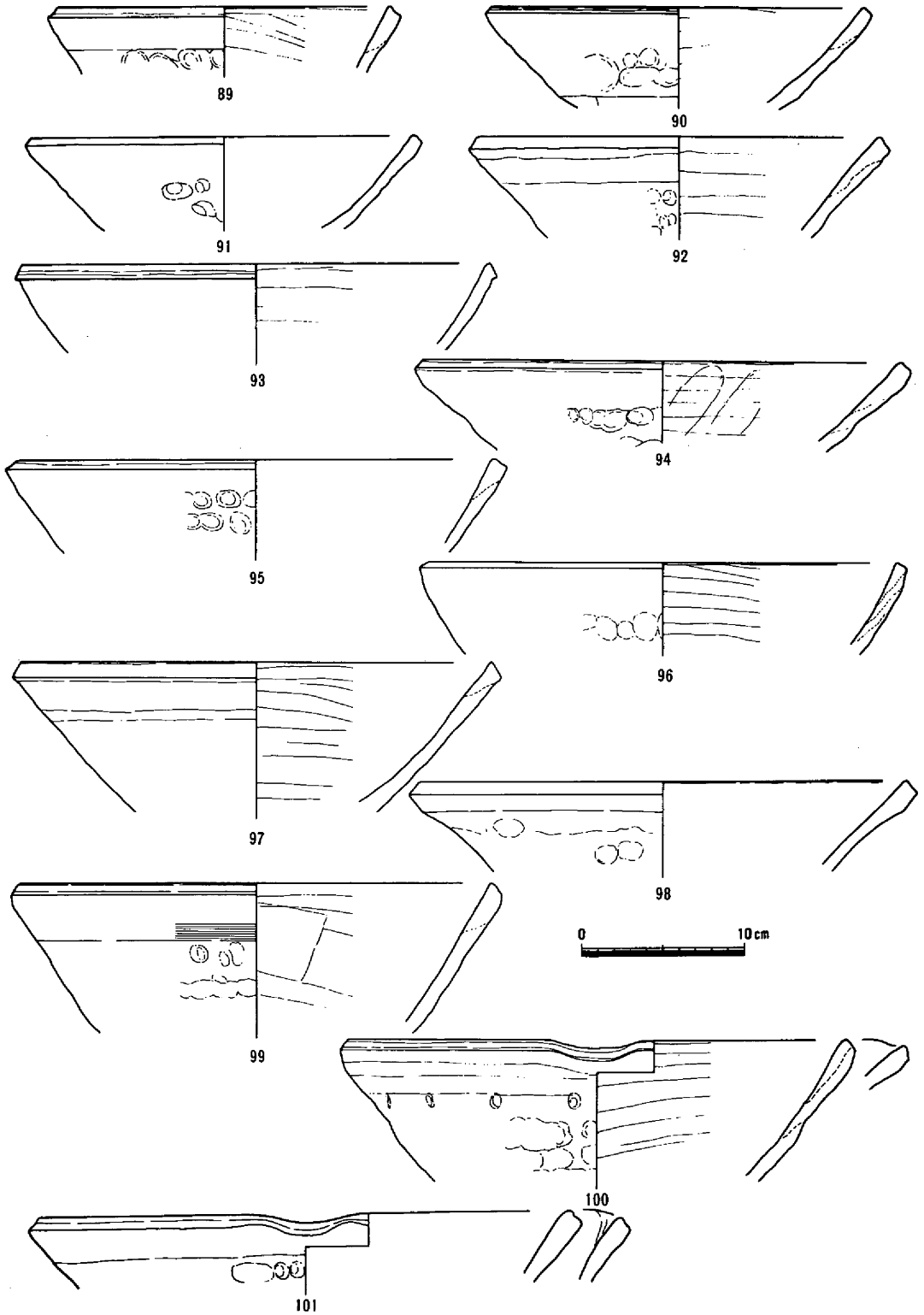
鉢 (89~107)



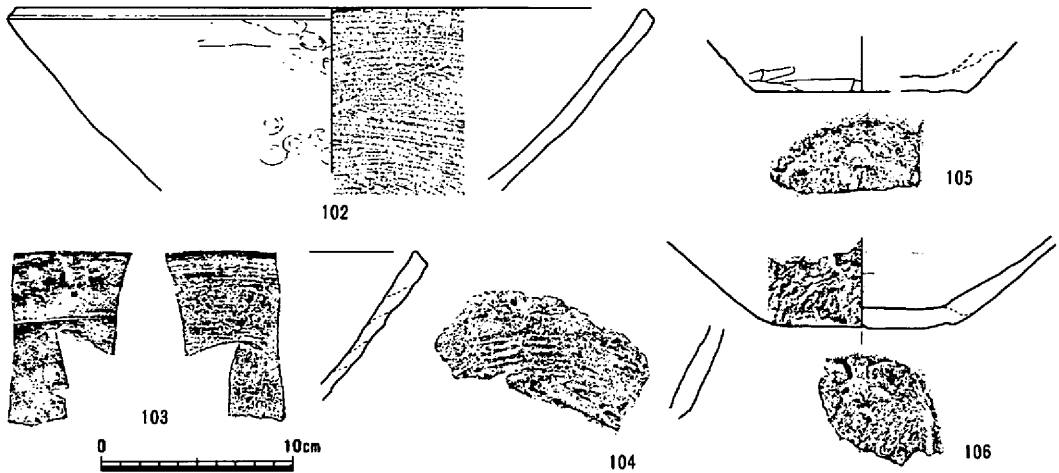
第42図 灰原1 出土遺物(1) (1/4)



第43図 灰原1 出土遺物(2) (1/4)



第44図 灰原1出土遺物(3) (1/4)

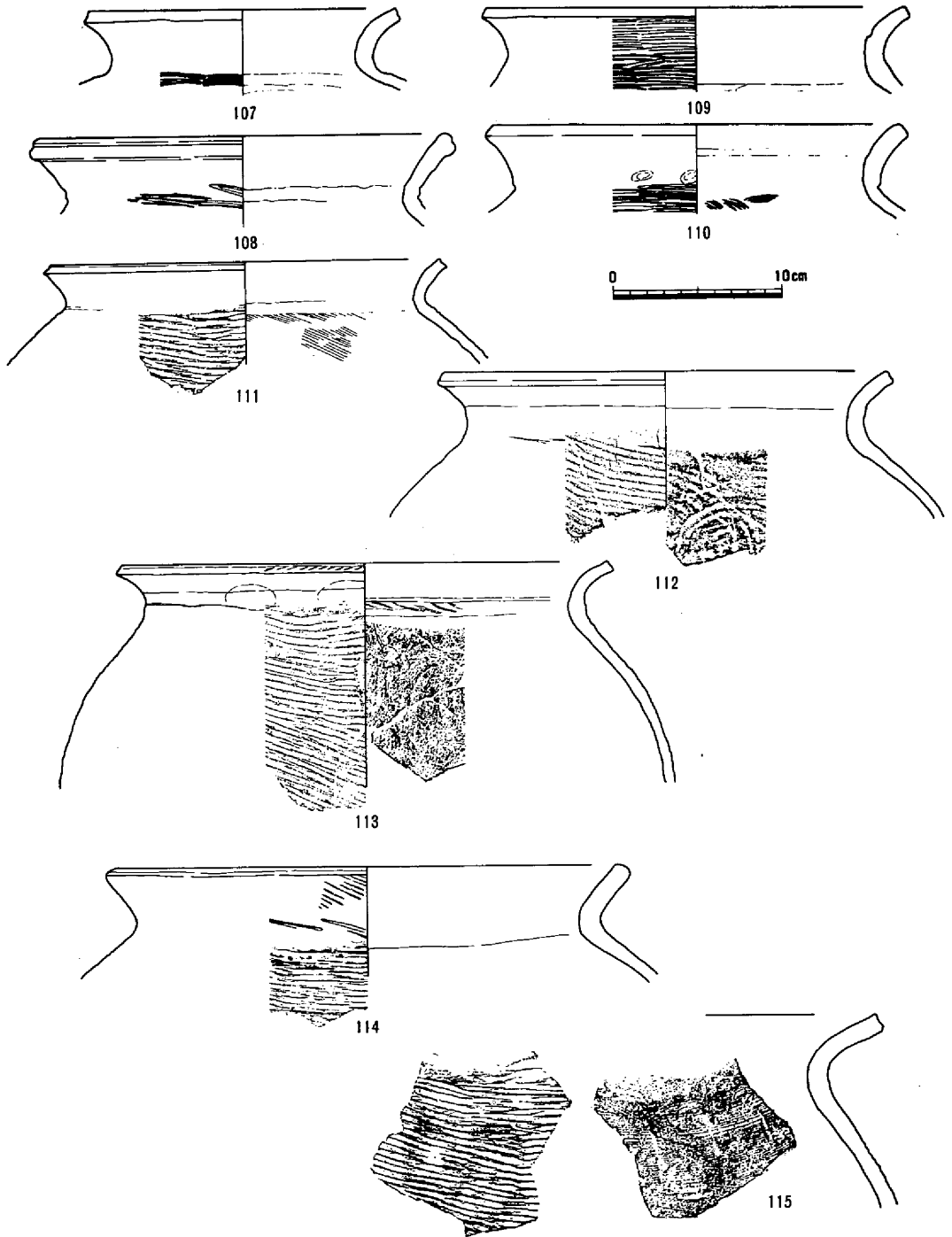


第45図 灰原1出土遺物(4) (1/4)

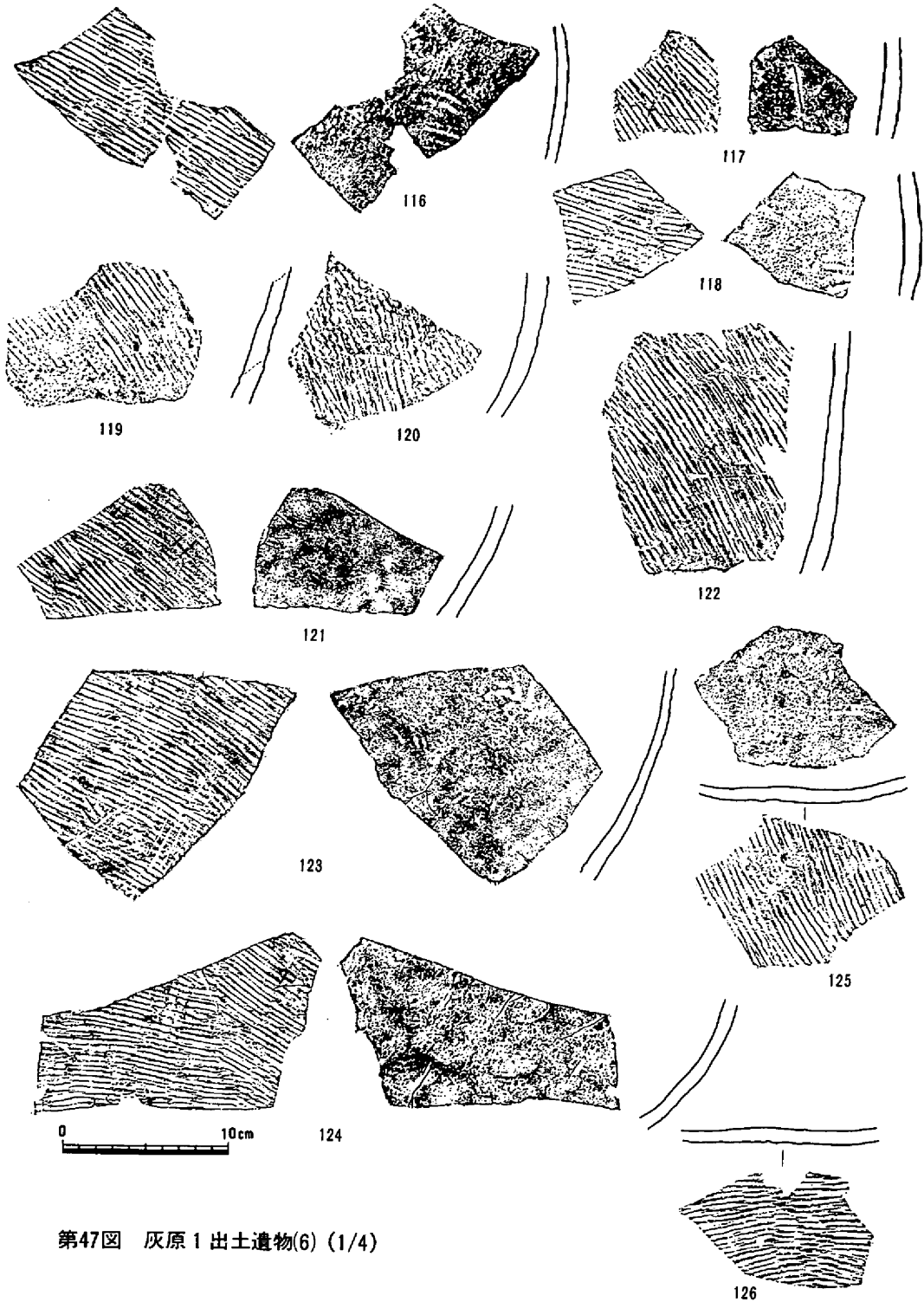
完形に復することができたのは、881点のみであるが、焼けひずみが大きく、図に掲げる状態では、口径がやや大き目となっている。体部外面下位には、長方形を呈する格子目タタキの痕跡が観察され、上位部には指頭によるオサエ痕跡が認められる。口縁部は、わずかに肥厚し端面はややくぼんでいる。片口は巾約5cmで、丸味をもってつくりだされている。体部内面は、横位の板状工具によるナデ調整が施されている。色調は暗灰色を呈し、胎土中には石英を多く含む砂粒が認められる。89と107以外の鉢はいずれも、体部外面にタタキ痕跡は看取されず、特徴的な指頭押圧痕が認められるものが多い。また内面は、布びき風のヨコナデ調整が丁寧におこなわれている。これらは、捏鉢として用いられたと考えられるが、第45図102～104は内面に横位の荒い櫛目調整が施され、機能的には播鉢と呼称してもよいように思われる。また、106・107は底部片であるが、外底部には、下駄印の跡が一部に残されている。これらの鉢のほとんどは、暗灰色～灰青色を呈しているが、94は灰黒色を呈し、断面素地は白色、器表面は瓦質風の暗い色調を呈している。

#### 甕 (108～167)

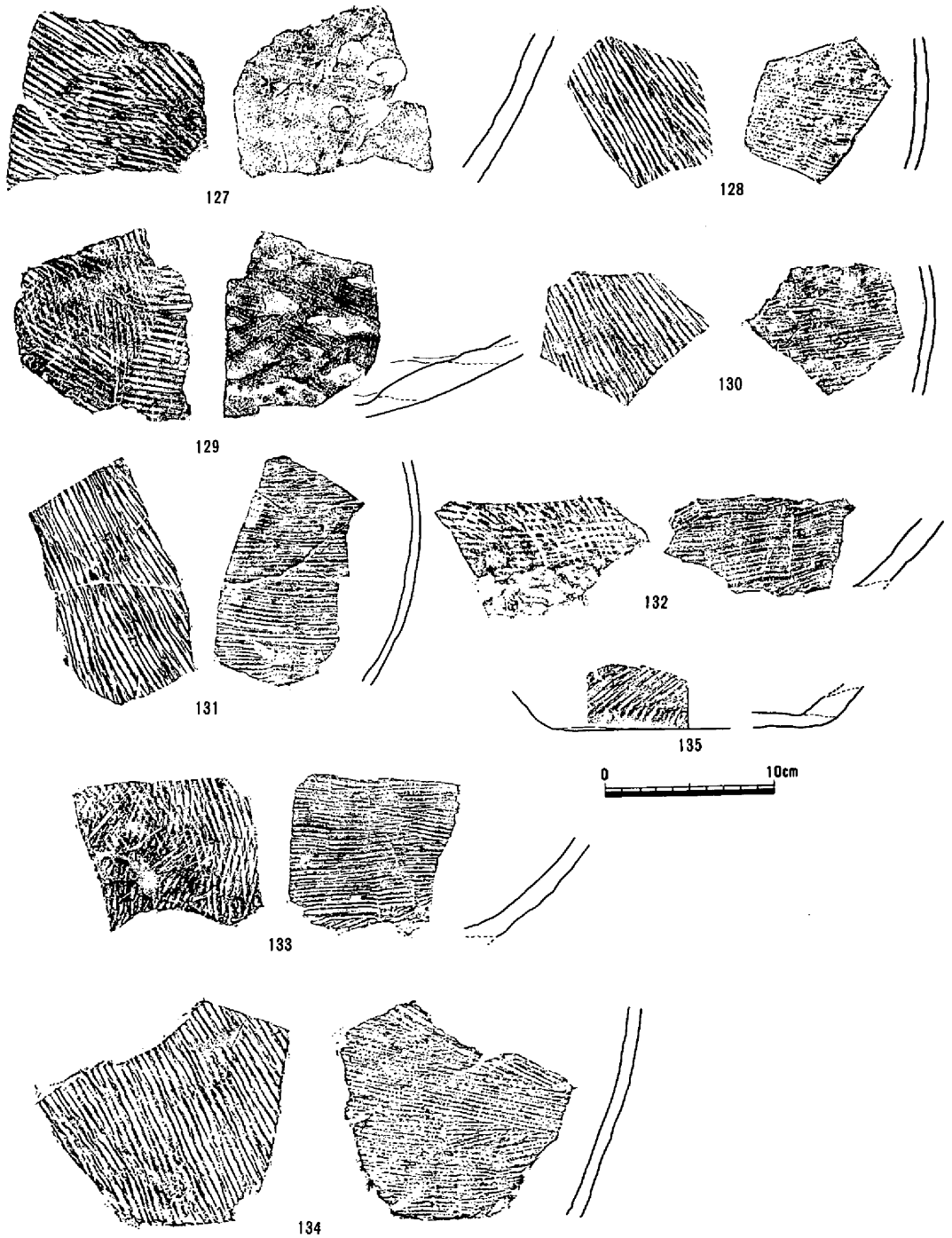
出土した遺物の中でもっとも多いのが甕で、出土遺物の約70%を占めている。全形を知ることのできる遺物は認められていないが、実測遺物の口径はほぼ正確に復元できるものである。体部外面の平行タタキと格子目タタキによって大きく分類することができるが甕の形態そのものは、大きな相違点はない。出土甕片のうち前者は約46%、後者は約50%を占める。いずれも口縁部は体部から緩やかに外方するが、屈曲の度合は、80°～100°を測る。また体部は肩が張らず、緩やかな弧を描く。口縁部は、長目で、わずかに肥厚して終る。端面はややくぼんで、内傾する。



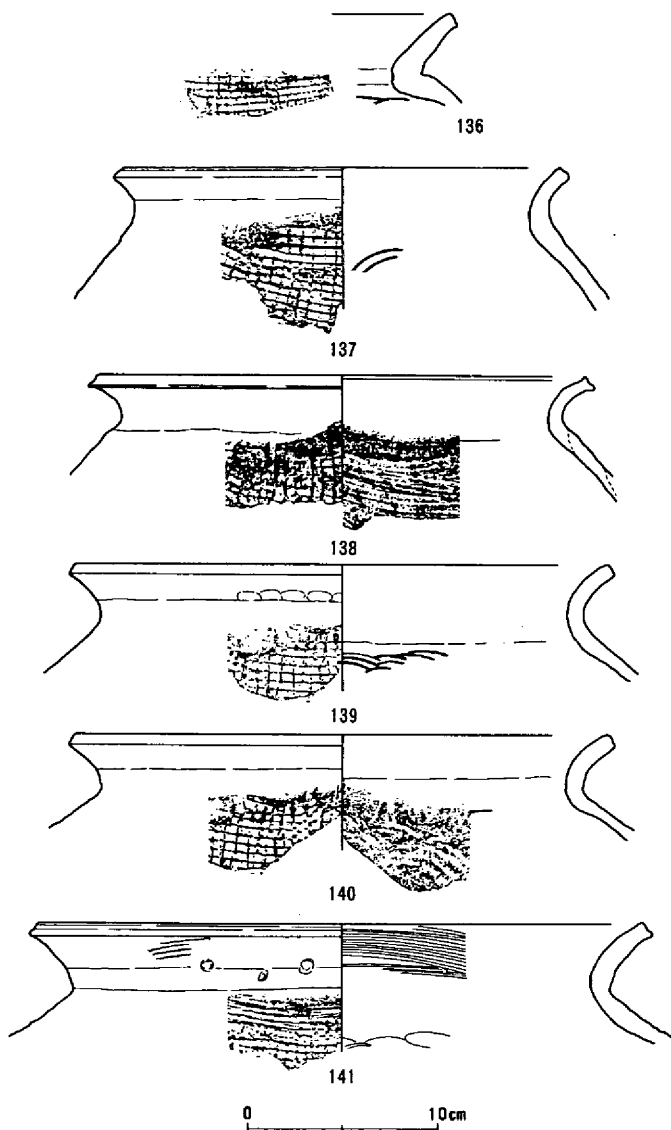
第46図 灰原1出土遺物(5) (1/4)



第47圖 灰原1出土遺物(6) (1/4)



第48図 灰原1出土遺物(7) (1/4)



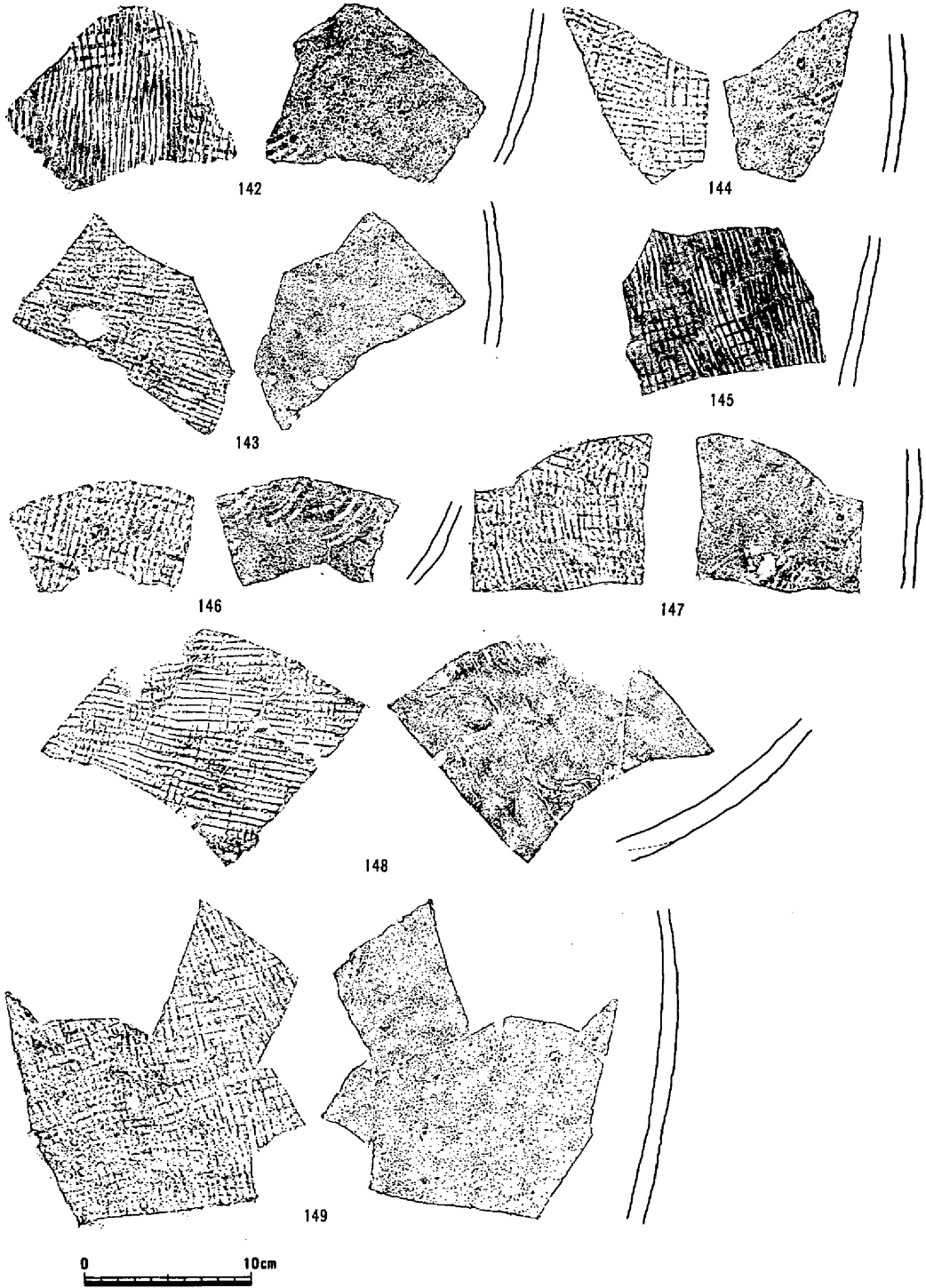
第49図 灰原1出土遺物(8) (1/4)

平行タタキは、巾が概ね4mm前後を測り、体部正面に対して右下がりの斜行して施されるものが多い。また、口縁部や口縁端部に平行タタキの痕跡が残される113・114などがあり、格子目タタキによる類例と同様、口縁部を最初は円筒状につくられた際の叩き締め痕跡と理解される。そして、後に口縁部分が屈曲してつくられたようである。体部内面は、同心円タタキがそのまま残されたものと、ハケ調整やナデによって消されたものとに大別される。このハケ調整は前述の捏鉢の一部にみられる櫛描き風のハケ調整である。体部下位および底部の破片を

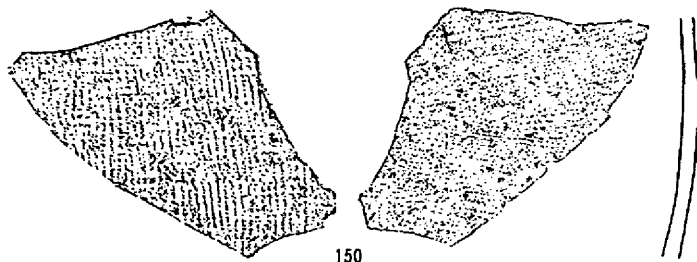
みると、丸底の底部に、平行タタキが及んでいるものもあり(125・126・129)安易に丸底か平底かを断定することができない。135は明らかに平底で、底部は比較的薄手である。

格子目タタキについてみると、格子目は3.5～4mm方格のものももっとも多く、中にはいずれかの軸線が太く、一見平行タタキ風にみえるものがある。(145・148)また、明らかに平行タタキと格子目タタキが併用されているものもみられ(141・142)、注目される。内面の調整は、平行タタキのものほとんど変わりはなく、同様の同心円タタキと、荒いハケ調整やナデ調整がみられる。一方、165～167のように長方形を示す格子目タタキもみられる。概ね、格子目は8

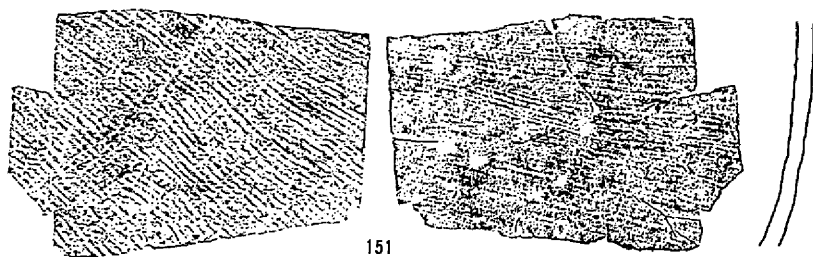




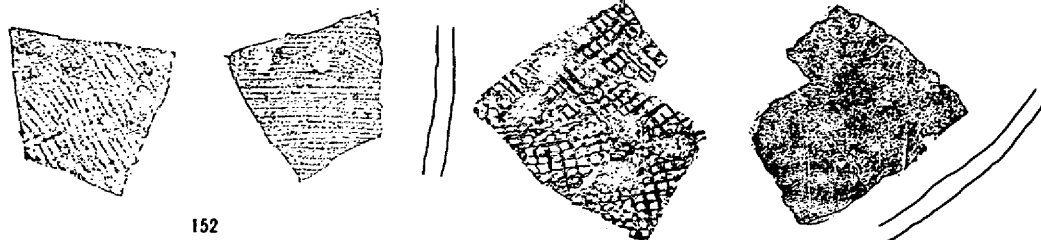
第50図 灰原1出土遺物(9) (1/4)



150

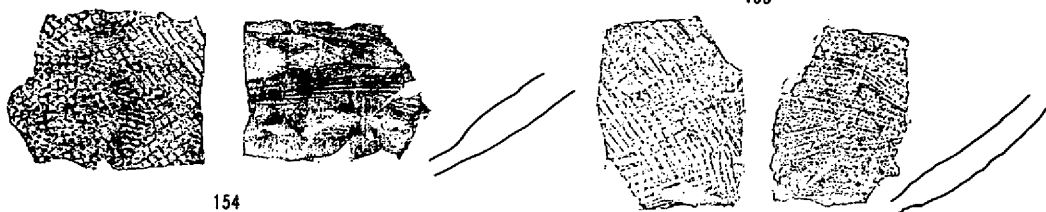


151



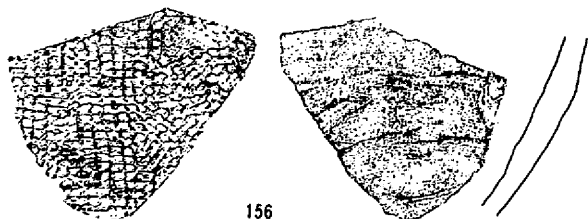
152

153

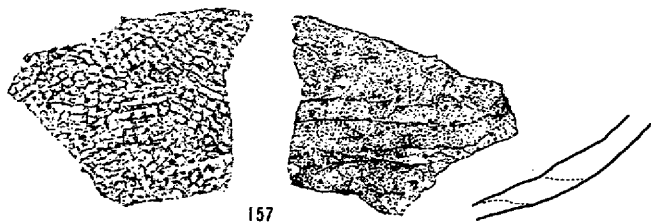


154

155

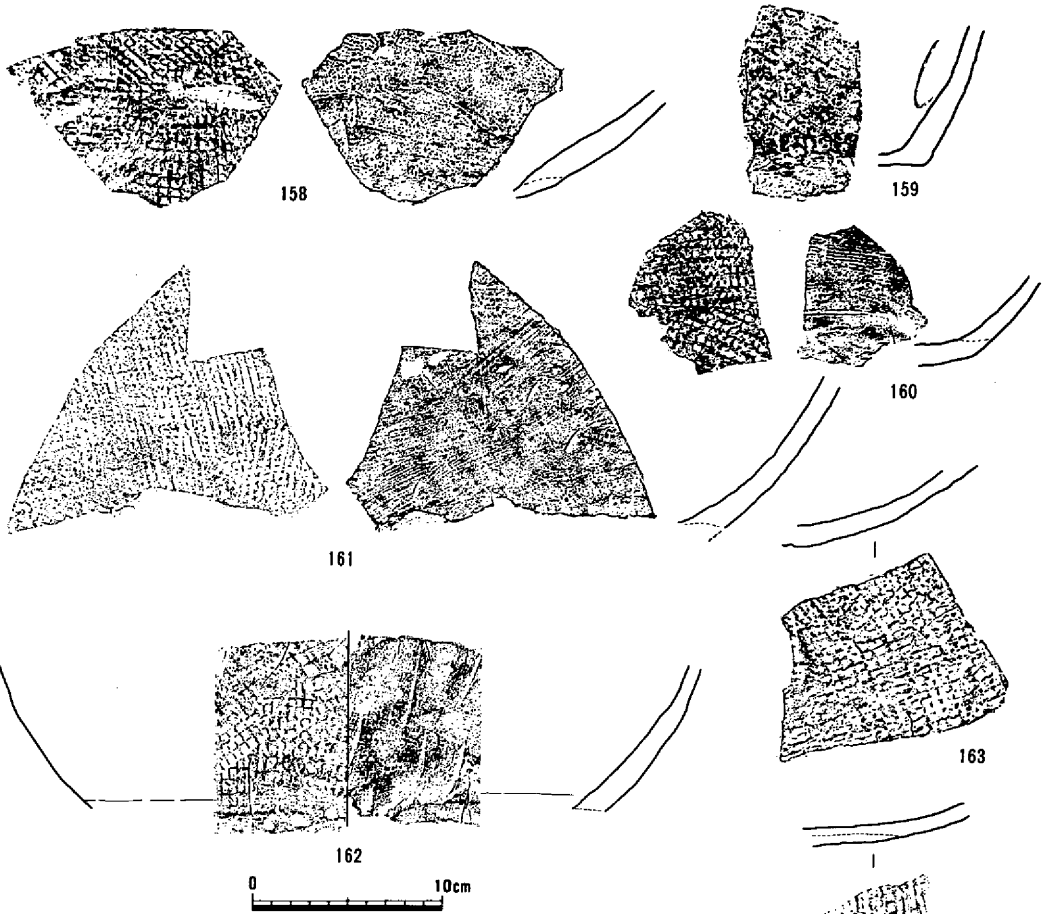


156

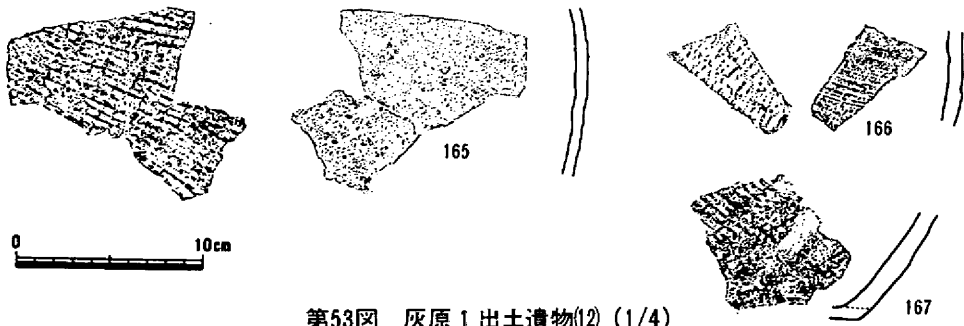


157

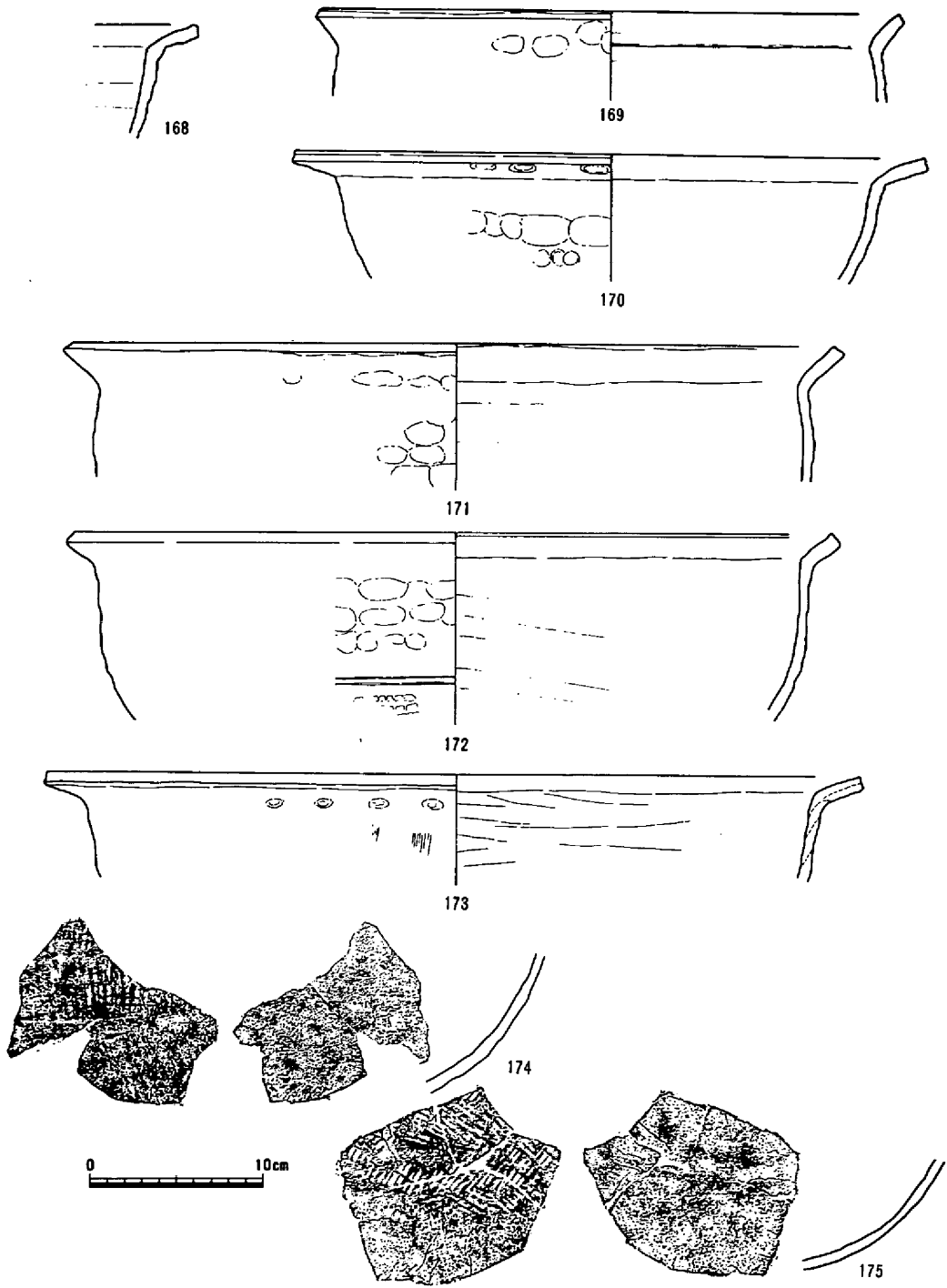
第51図 灰原1出土遺物(10) (1/4)



第52図 灰原1出土遺物(1) (1/4)



第53図 灰原1出土遺物(2) (1/4)



第54圖 灰原1出土遺物(13) (1/4)

～10mm×4～5mmを測る。類例は少なく、他に後述の鍋や、前述の捏鉢89にやや長方形の格子目タタキが認められる以外、土器溜り3からわずかに出土しているのみである。

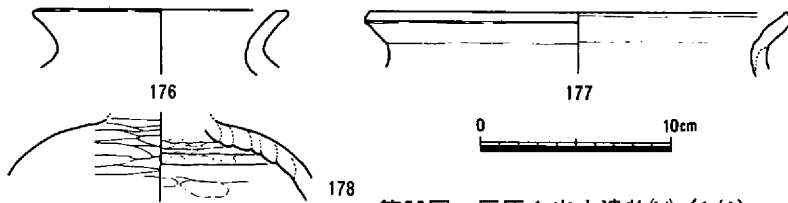
以上の甕のほとんどは、灰青色～灰色を呈する須恵質のものが大半を占める。中には、生焼けの状態出土したものも認められるが、143のように二次的被熱(高温)によって器表が破損して、窪みが生じているものが多いことは、従来の亀山焼のイメージとやや異なっている。

鍋(168～175)

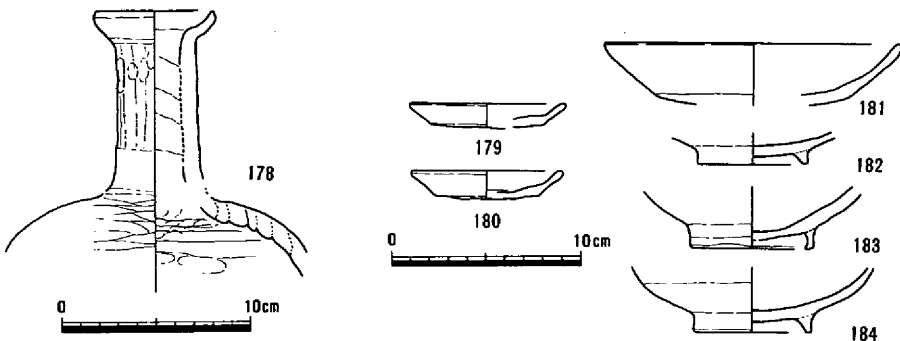
土師質土器の鍋に似た形態を示す一群の土器で、168・169・171・173のように直線的な体部が形づくられるものと、肩が張らずに緩やかに底部に至る170・172などの二つのタイプがある。口縁端部はやや肥厚しておわる、甕のそれと形状が似る。体部の器壁は極めて薄く、亀山焼製作工人のすぐれた技術がうかがえる(註3)。173～175には体部下半の外面に長方形の浅い格子目タタキが認められ、大きな特徴となっている。なお内面は、ナデ調整で仕上げられており、土師質土器でみられるハケ調整は認められない。これらの鍋の焼成は、あまり堅緻なものはないが、青灰色～淡黄灰色を呈するものが多い。

その他(176～184)

176は壺の可能性のある口縁部片で、体部外面の調整は不明である。177は、鍋と同様の口縁部が観察されるが、やや長胴化する可能性がある。178は、体部外面は丁寧なミガキ風の仕上げ、内面には粘土の輪積痕を明瞭に残した壺の破片で、外面は灰黒色、内面は白色を呈する瓦



第55図 灰原1出土遺物(14) (1/4)



第57図 参考図(1/4)

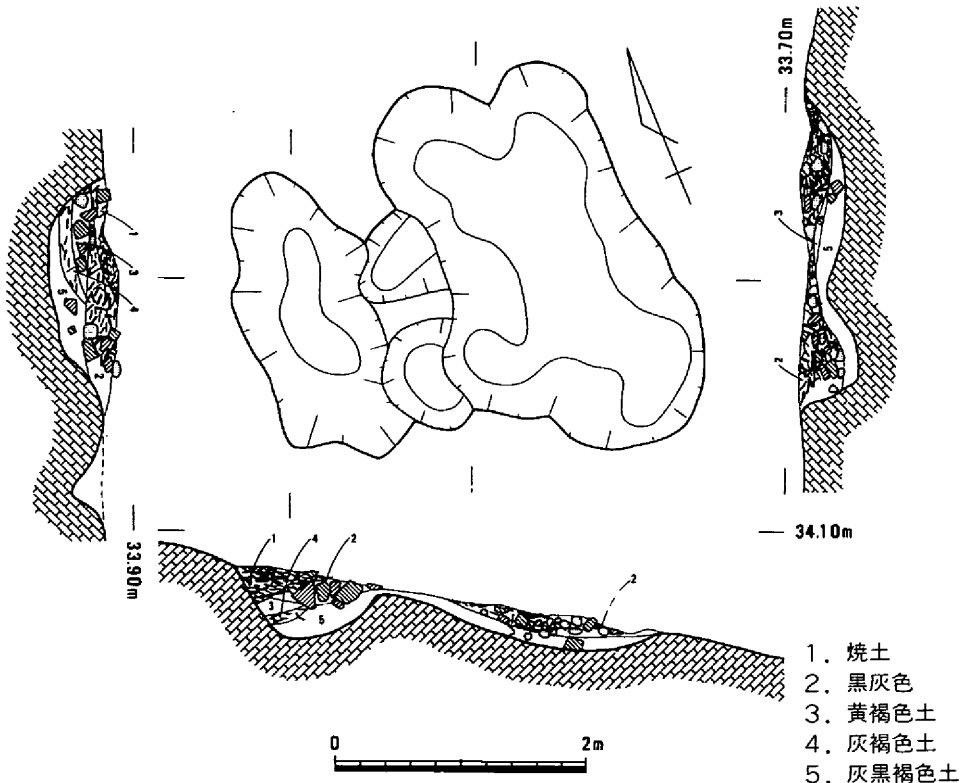
第56図 灰原1出土遺物(15) (1/4)

質焼成となっている。包含層出土の同様の形質を示す頸部片によって第57図のように推定復元され、花瓶のような仏具的な雰囲気がある。179～184は土師質土器で179・180は底部へラ切りの皿、181～184は椀である。椀の口径は約15.4cm、比較的大きくしっかりとした高台は径5.8～6.3cmを測る。これらの椀は早島式の椀と呼称されているものである。いずれも、淡黄橙色を呈し石英・白色砂粒が目立つ胎土が観察される。

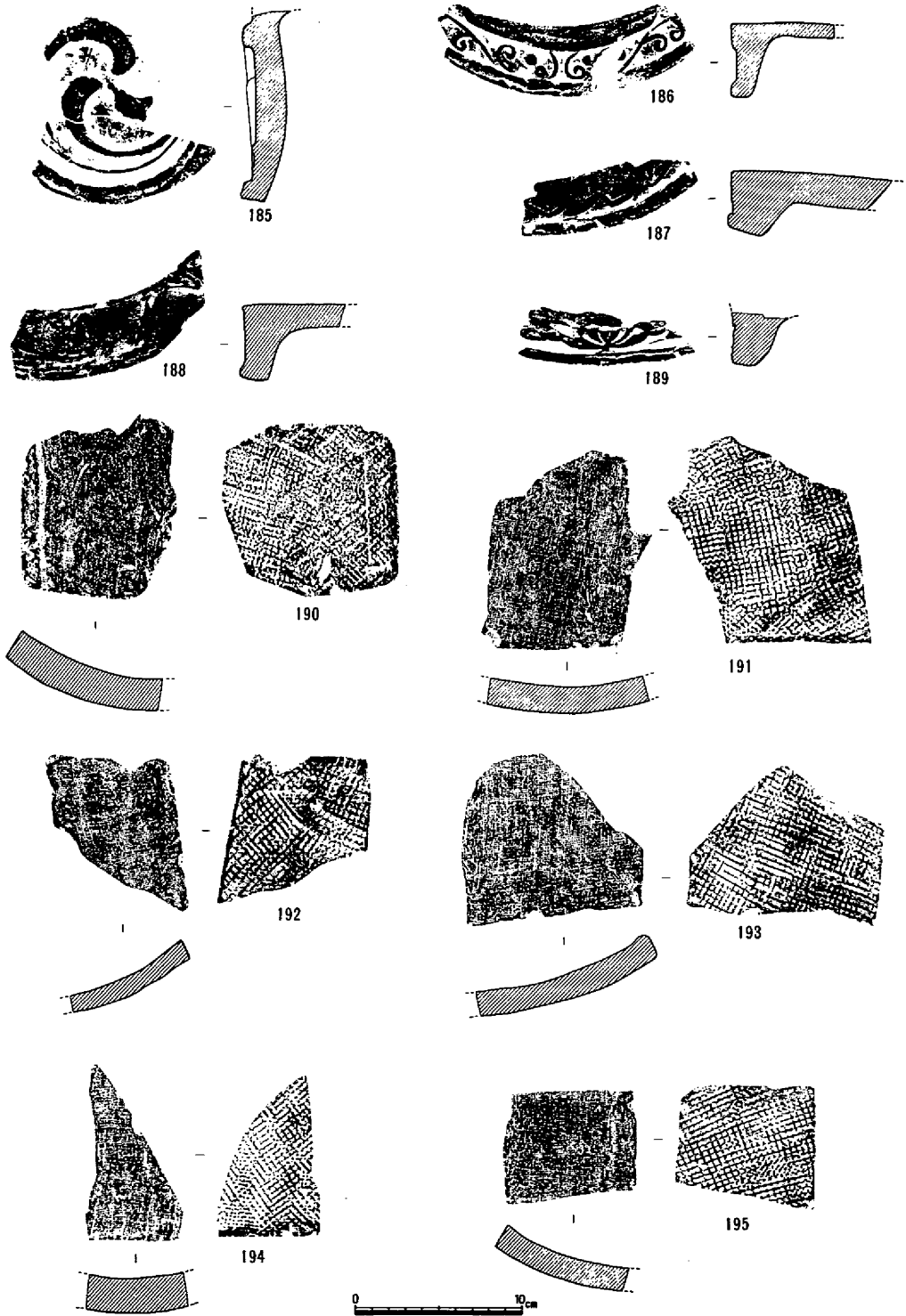
以上灰原1の出土遺物について概略を述べた。これらの示す時期については、最後に記した、早島式の椀によると12世紀末～13世紀前半に比定される可能性が強い。なお、多量に出土した木炭による液体シンチレーション<sup>14</sup>C年代測定によると、870±25年B.P(年輪年代A.D1100年相当)という結果が得られている。(岡田)

### 3. 土壌

本遺跡で検出された土壌は、明瞭な掘方をもつ用途の明確なものは極めて少ない。1号窯の周囲あるいは、2・3・6号窯の周囲にも不整形な窪地が数多く検出されてはいるものの、窯壁や亀山焼焼造のための粘土の採掘場とも思われる。本項で概説する土壌1はむしろ灰原あるいは、土器溜りとして扱うのが適当と考えられるが、いずれにせよ出土遺物の一括性を評価することができる数少ない遺構として重視される。また、土壌2は先述の粘土採掘場状の土壌と



第58図 土壌1 実測図 (1/60)



第59図 土壌1出土遺物(1) (1/4)

考えられる遺構である。以下、これらの概要を述べておこう。

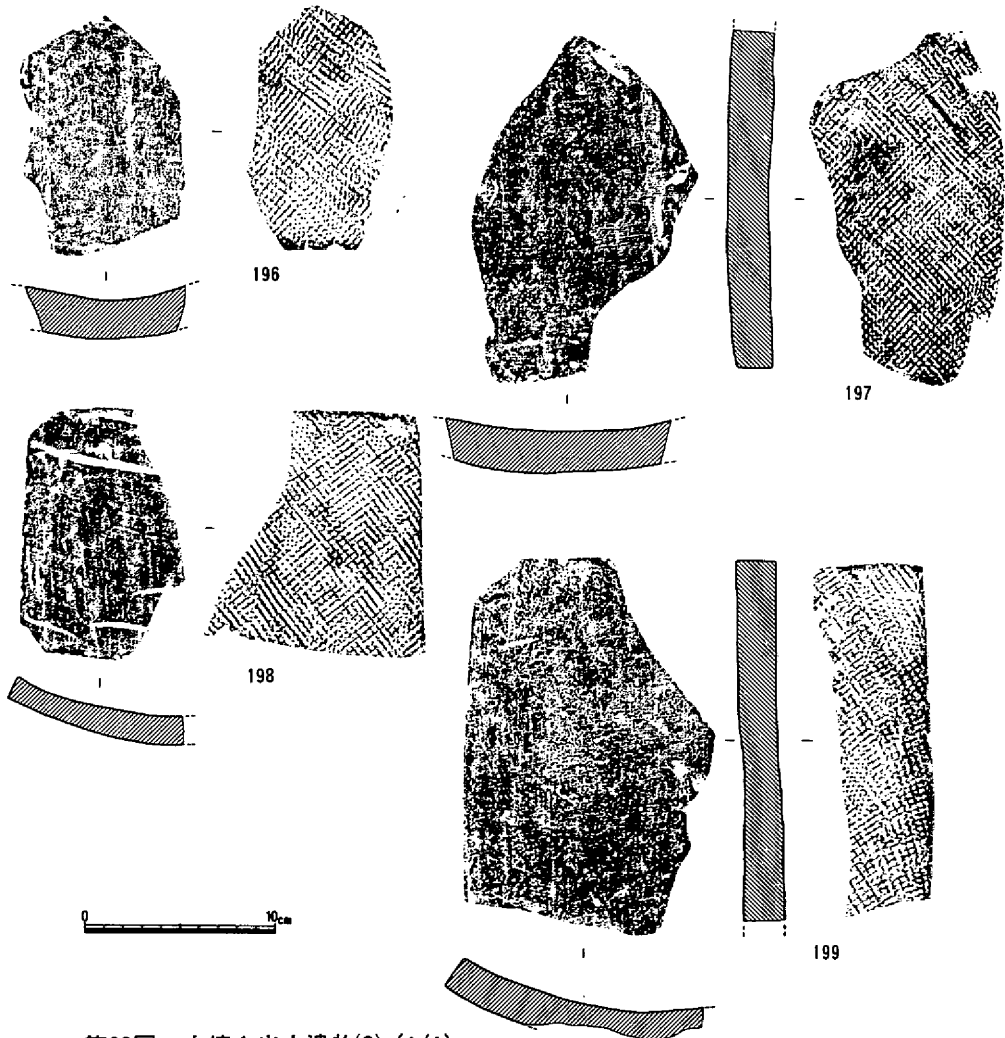
(1) 土坑 1 (第58～63図、図版43・70・71)

C-10の北約5mに位置する。2つの不整形な長円形を呈する土坑が接続して形成されている。深さ40～50cmの坑底には遺物を含まない灰黒褐色土が埋積しているが、上層には窯壁片や灰・炭・焼土を含む灰原が形成していたと思われる二次的な埋積土がみられ、黒灰色土・黄褐色土・灰褐色土・灰黒褐色土が堆積している。最下層を除く埋積土の中からは、多量の亀山焼片が出土しており、瓦・鉢・甕などは比較的まとまった一括性の高い遺物と考えられる。

(福田・岡田)

遺物

瓦 (185～199)



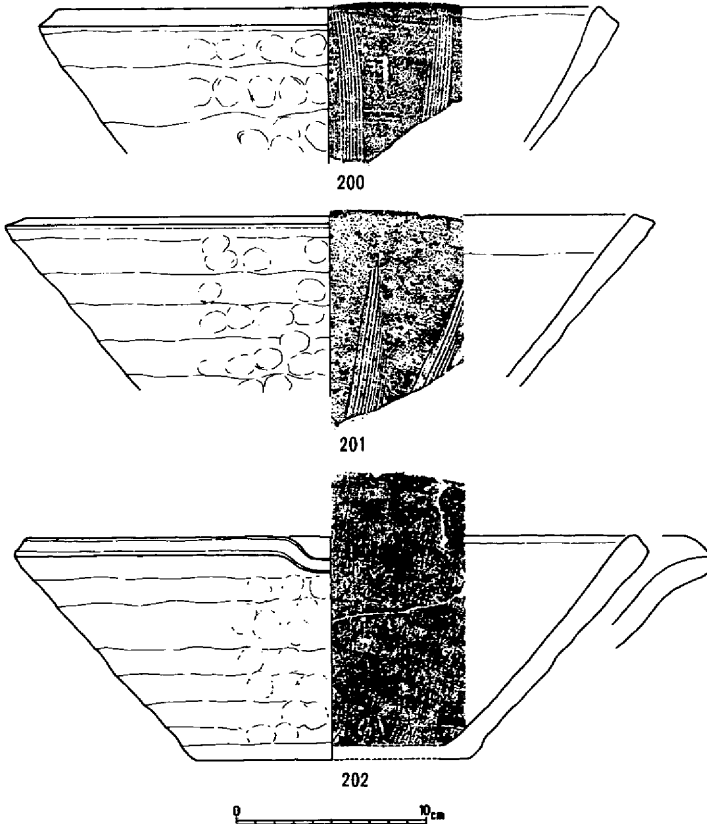
第60図 土坑 1 出土遺物(2) (1/4)



185は右まわりの三巴文軒丸瓦である。尾部は長く、その末端にあたる位置に細い圈線がめぐる。186は均整唐草文軒平瓦で、2個の珠文が加飾される。平瓦部分の厚さは薄く、瓦当上端の周縁は分厚い。倉敷市浅原安養寺境内の出土品中に同じ瓦当文様の瓦がみられるが珠文はない。(註4)187は唐草文様が極めて単純化しており、文様も不鮮明である。188は、文様は不鮮明であるが、車輪文と単純化された唐草文が組み合わされた文様と考えられる。189は、中心飾の部分の顎部片で、蓮華文をモチーフとしている。平瓦の先端部分に帯状の粘土を盛りあげて付着し、瓦当としたことがよくわかる破片である。190~199はいずれも凸面は格子目(3~4mm方格)タタキ、凹面には布目痕が残される平瓦である。端縁・側縁は鋭利な刃物で切り放されており、凹面などの形状から、一枚づくりを基本としていたようである。凸面の格子目タタキは、側縁・端縁に対して斜行しており、大きな特徴の一つといえる。また、後述の甕の体部に用いられている格子目タタキと全く同一である点で、製作・焼造時期の同時性が考えられる。

鉢 (200~202)

いずれも播鉢である。202のように本来は片口があったと考えられる。体部外面は、いずれも、横位の指頭押圧痕が顕著に認められ、下端はへラケズリが行われている。このへラケズリ

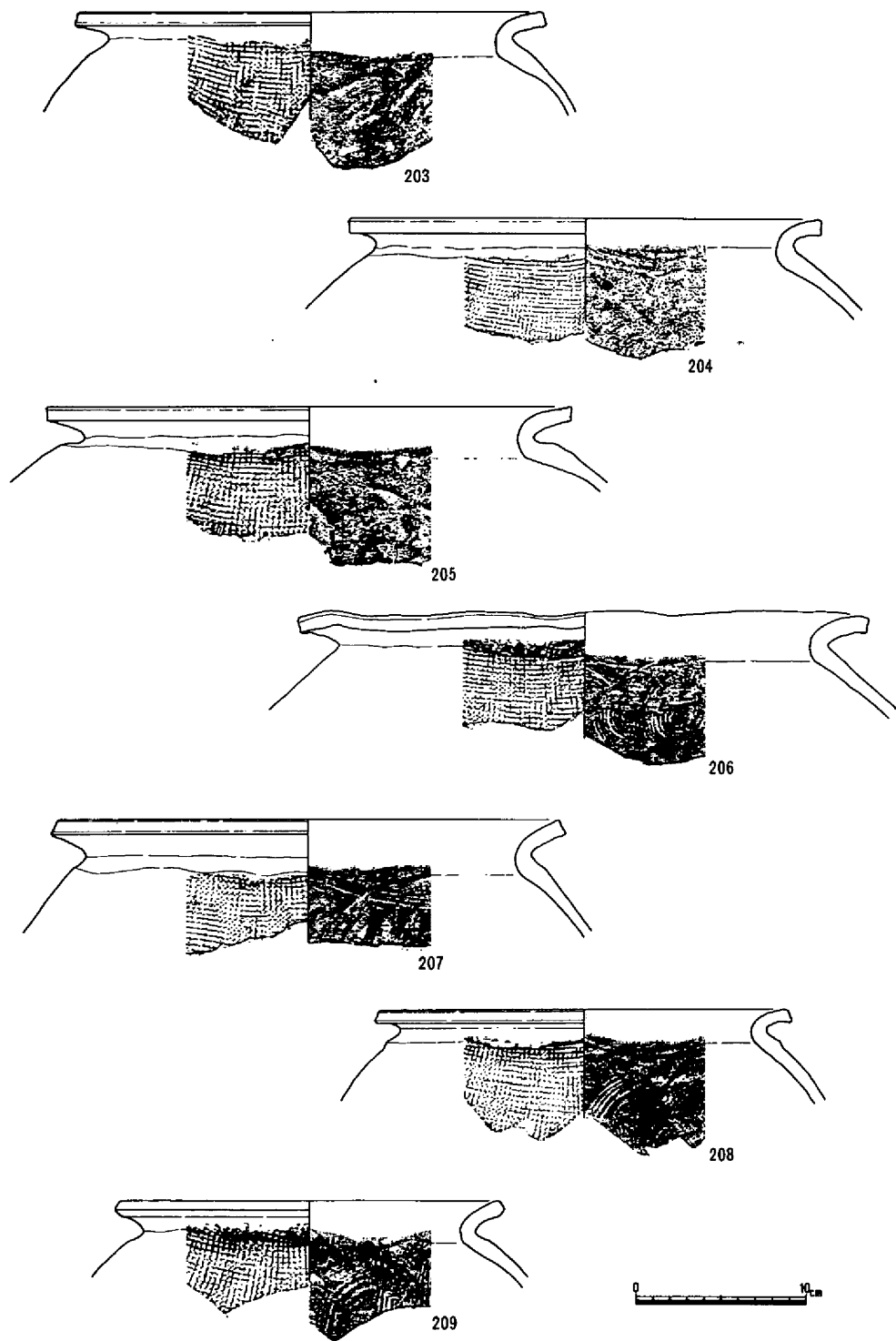


は、大形・小形を問わず平底の甕や鉢のすべてに行われている技法で、亀山焼の大きな特徴でもある。これは強い叩き締めや押圧の成形によって生じた体部下位の「へたり」を掻き取った痕跡と理解している。播鉢の内面には放射状の板状工具による卸し目があり、1条10数本を単位としている。202は楯描き風で卸し目条痕の深さも浅い。口縁端部は、灰原1出土の捏鉢に比べるとやや肥厚しており、端面はややくぼんでいる。

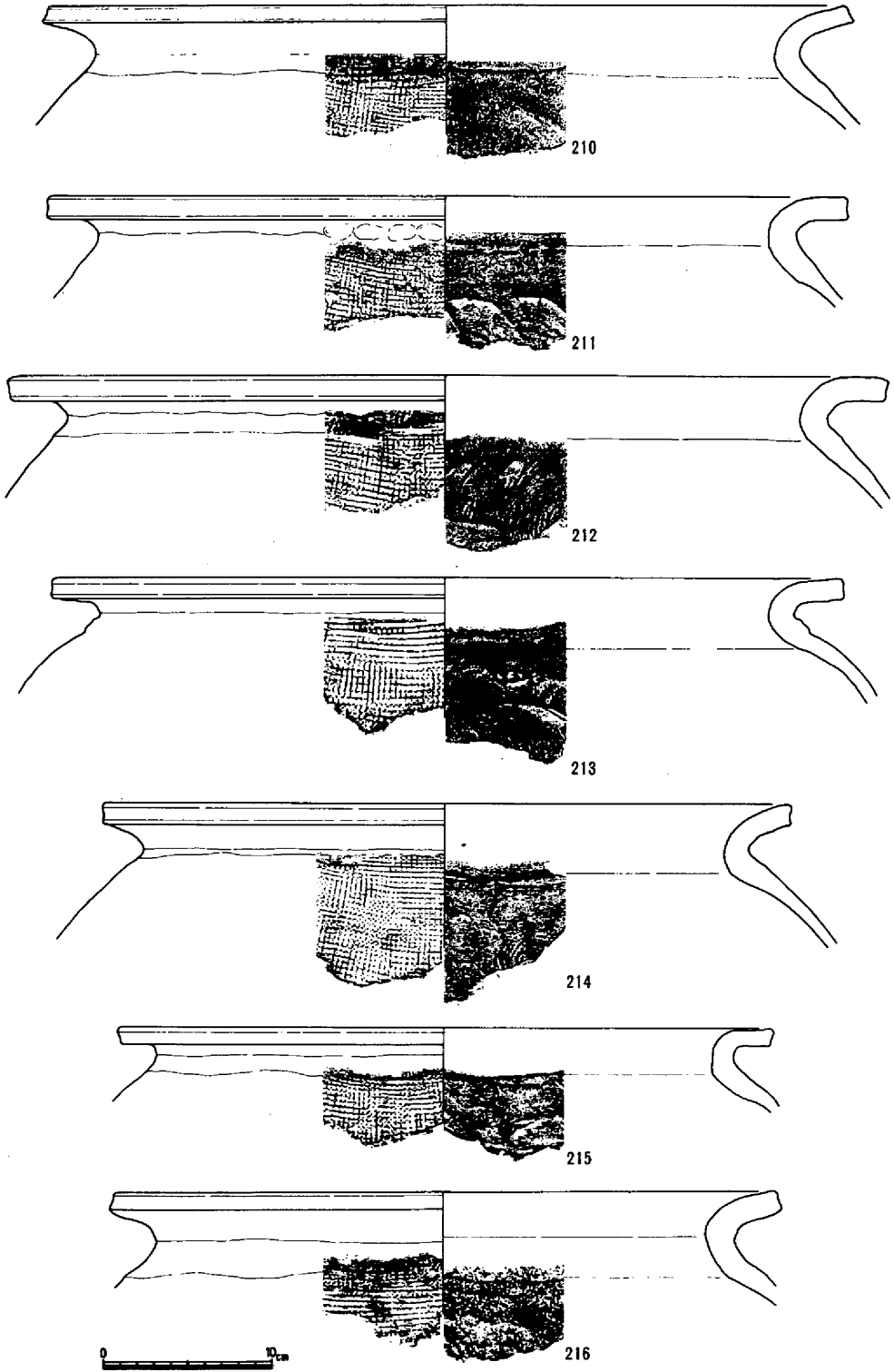
甕 (203~216)

口径22~50cmを測る。体

第61図 土塚1出土遺物(3) (1/4)

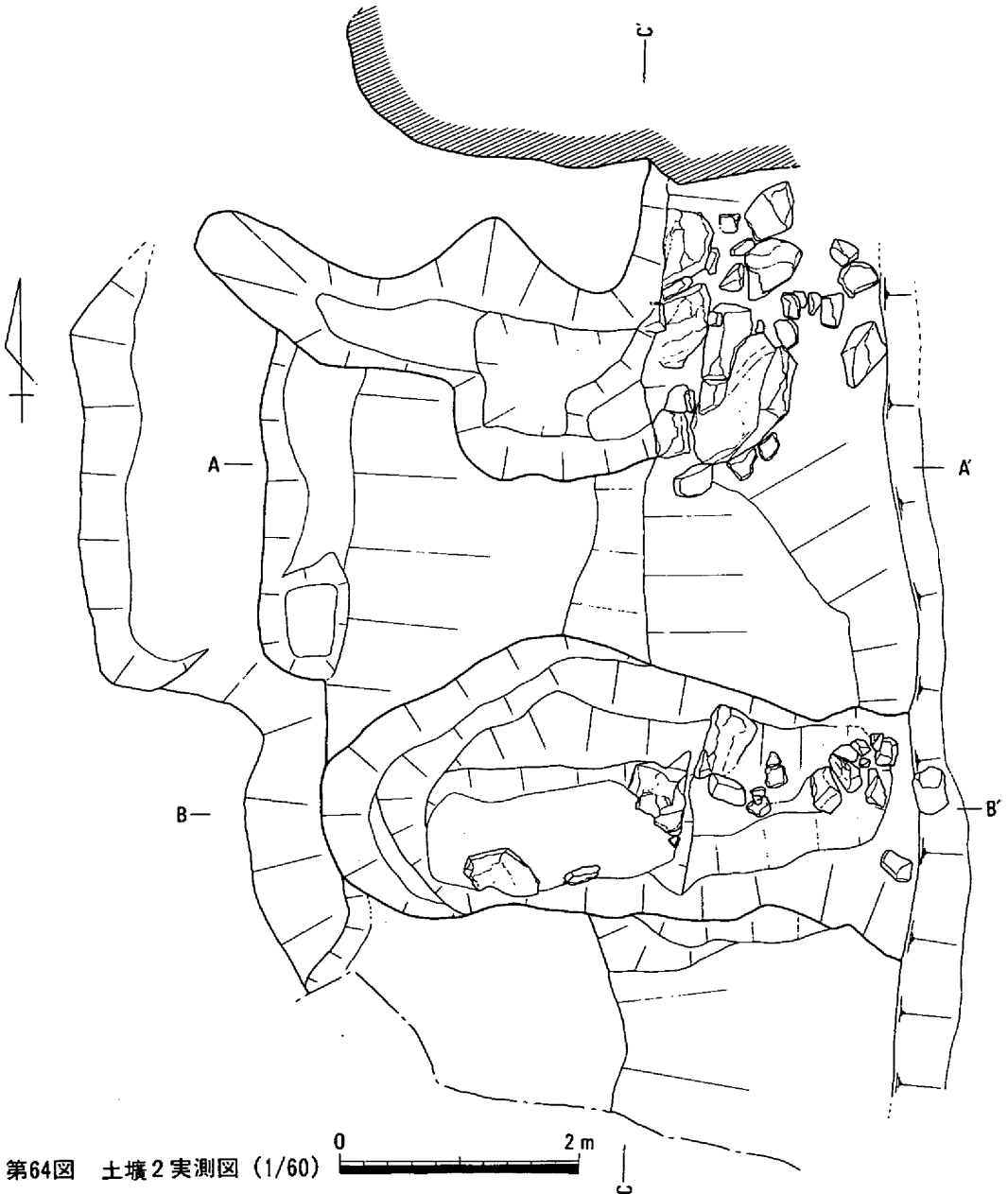


第62圖 土壙 1 出土遺物(4) (1/4)

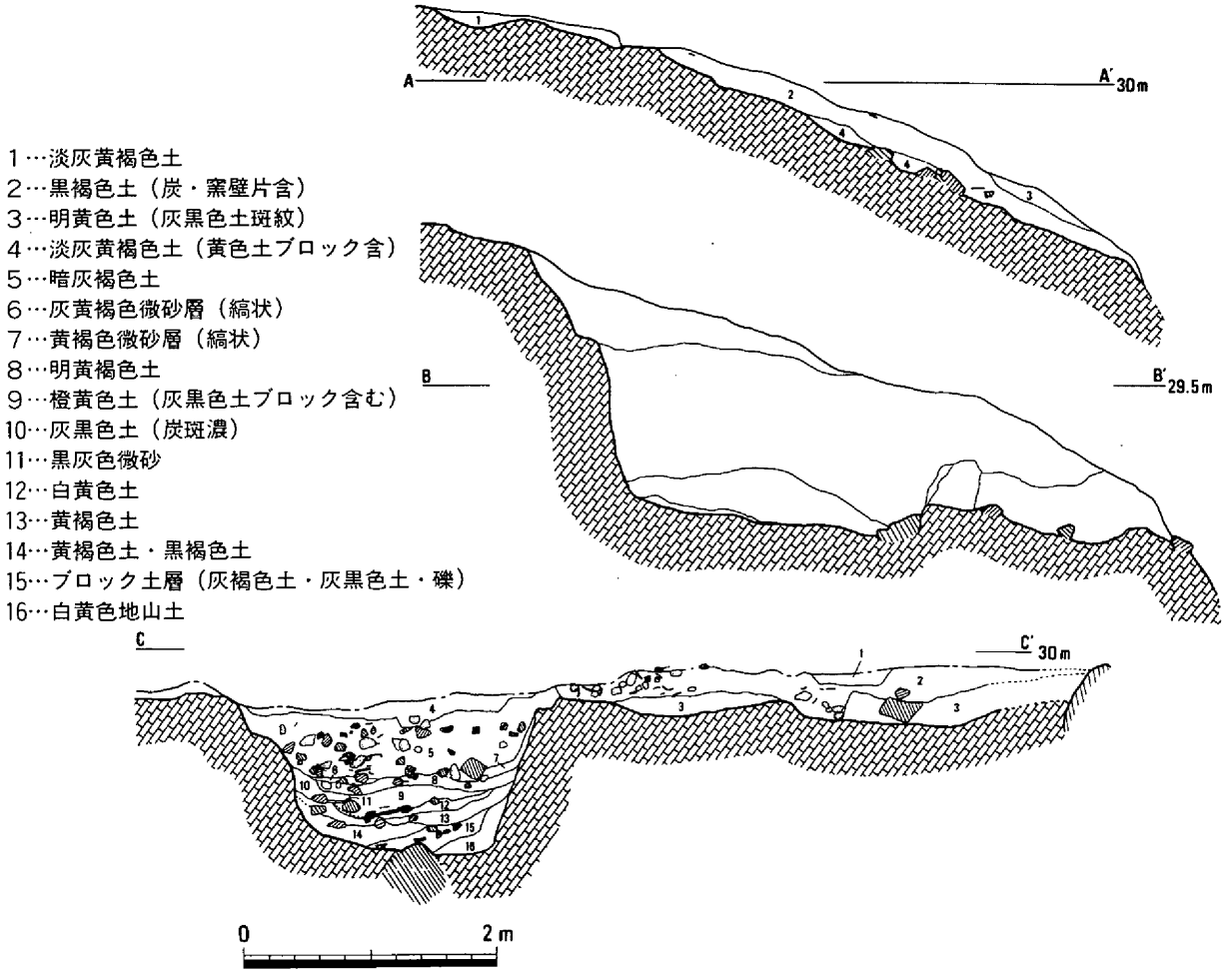


第63図 土壌1出土遺物(5) (1/4)

部外面は格子目タタキ、内面は同心円タタキもしくはそれをわずかにナデ消すものもある。格子目タタキは、3～4mm方格を示すものが多く、先述の平瓦の凸面とほぼ同一である。内面の同心円タタキは、比較的細い同心円が看取される。明らかに、灰原1出土のものとは異なり、棒状の心持ち材を用いた場合、刻線が明瞭に彫られなくてもその春材部分の同心円が描かれていると理解している。使用頻度によっても左右されるかもしれないが、後節でもこのような例が数多くみられ、時期的にその技法（当て具）が変化する可能性が強いであろう。口縁部は、



第64図 土壌2実測図 (1/60)



屈曲の度合が強く、体部とは平均すると約45~70°の角度を示すが、212・215などのように、ほぼ水平となるものもある。口縁部は短かく、折り曲げて外方したのち、内面・上面は横位のナデ(布びき風)調整が施され、弱い稜線がめぐる。口縁端部は、やや肥厚してほぼ直立するもの(204・205・211・214など)とやや内傾するもの(203・207・208・210・216など)とに大別されるが205や207のように、端部が上方へつまみあげられたように突きだすものもみられる。また212などの頸部には、格子目タタキが観察され、口縁部が屈曲して形成された後ではタタキを施すことができない部位にあたることから、体部から叩き締めながら一気に筒状に成形された上端部を外方に折り曲げることによって、口縁部が形づくられたことを物語っている。

(岡田)

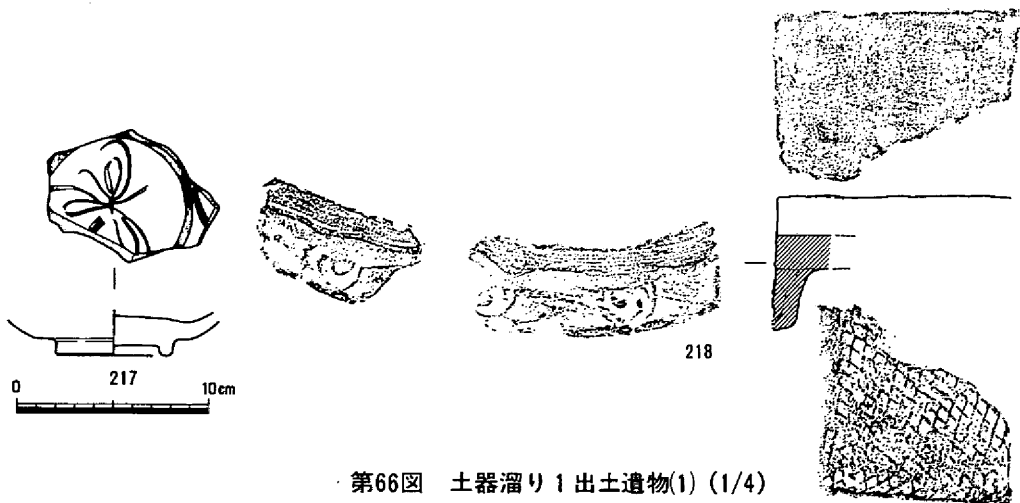
(2)土壌2(第64・65図、図版44)

C-10の東約10mに位置し、山寄せの状態で検出された大きな土壌である。東に開口する形状を示しているが、自然の露頭岩がそのまま残されており、その部分はやや高まっている。長軸は約5m、もっとも深い部分の巾約2.3m、深さ1.2mを測り、徐々に埋積した経過を示す複雑な層位を示している。埋積土中には、拳大から人頭大におよぶ角礫が多く含まれ、亀山焼片も細片が混じっている。大半は、体部外面は格子目タタキが施されているものである。またわずかながら、播鉢片なども出土している。したがって時期的には、亀山焼が焼造あるいは、使用された時期に比定される。この土壌の機能については、粘土の採掘場である可能性が考えられる。この付近の地山土は明黄色を呈する砂質の土壌で、俗に「はがね土」とも呼ばれ、池などの堤防をつき固める際にもしばしば用いられるということである(註5)。したがって、直接的に陶土として用いられたか否かは即断できないにしても、窯体の築成などに用いられた材料粘土として混ぜられたことが考えられる。この土壌2の下方(南方)約30mの4号窯付近では、同じ土層が認められるがやや粘性が強くなっている。また、雨上がり後などかなり粘性が増しており、水瀝し作業を経れば、かなり良質な陶土となった可能性もある。(岡田)

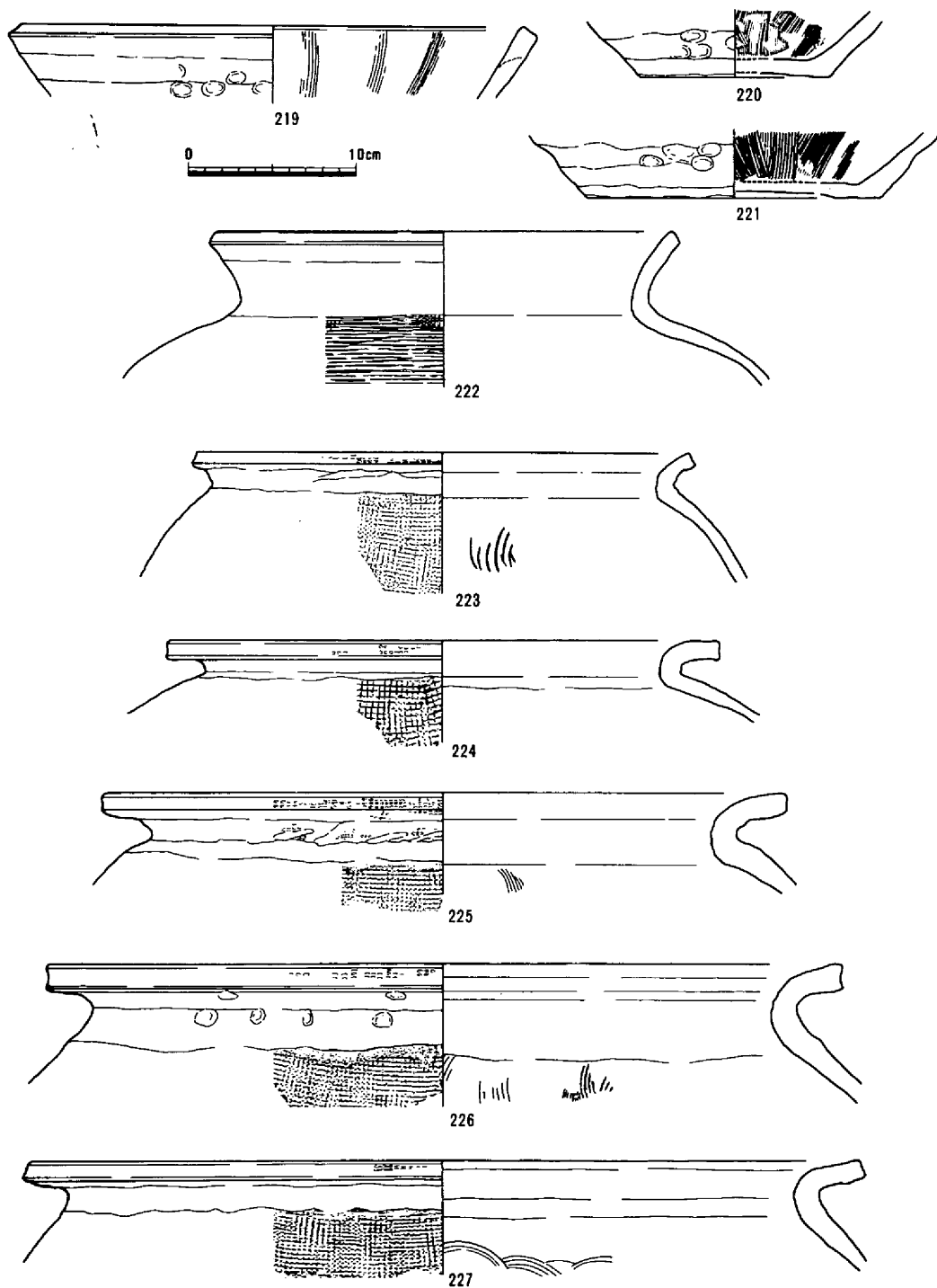
#### 4. 土器溜り

遺跡の各所には、貝塚と共に土器溜り状をなす土器片の集積部分が散見される。これらは、灰原とは異なった、焼成に失敗した破片などが廃棄された物原状を呈している部分と、灰原の一部も含まれるが、二次的移動によって形成された部分も含まれている。本項では、既述の灰原1と土壌1を除く、これらの概念にあてはまるものを土器溜りと総称し、これらの周辺出土遺物を含め、おもに遺物に関する説明を加えておきたい。

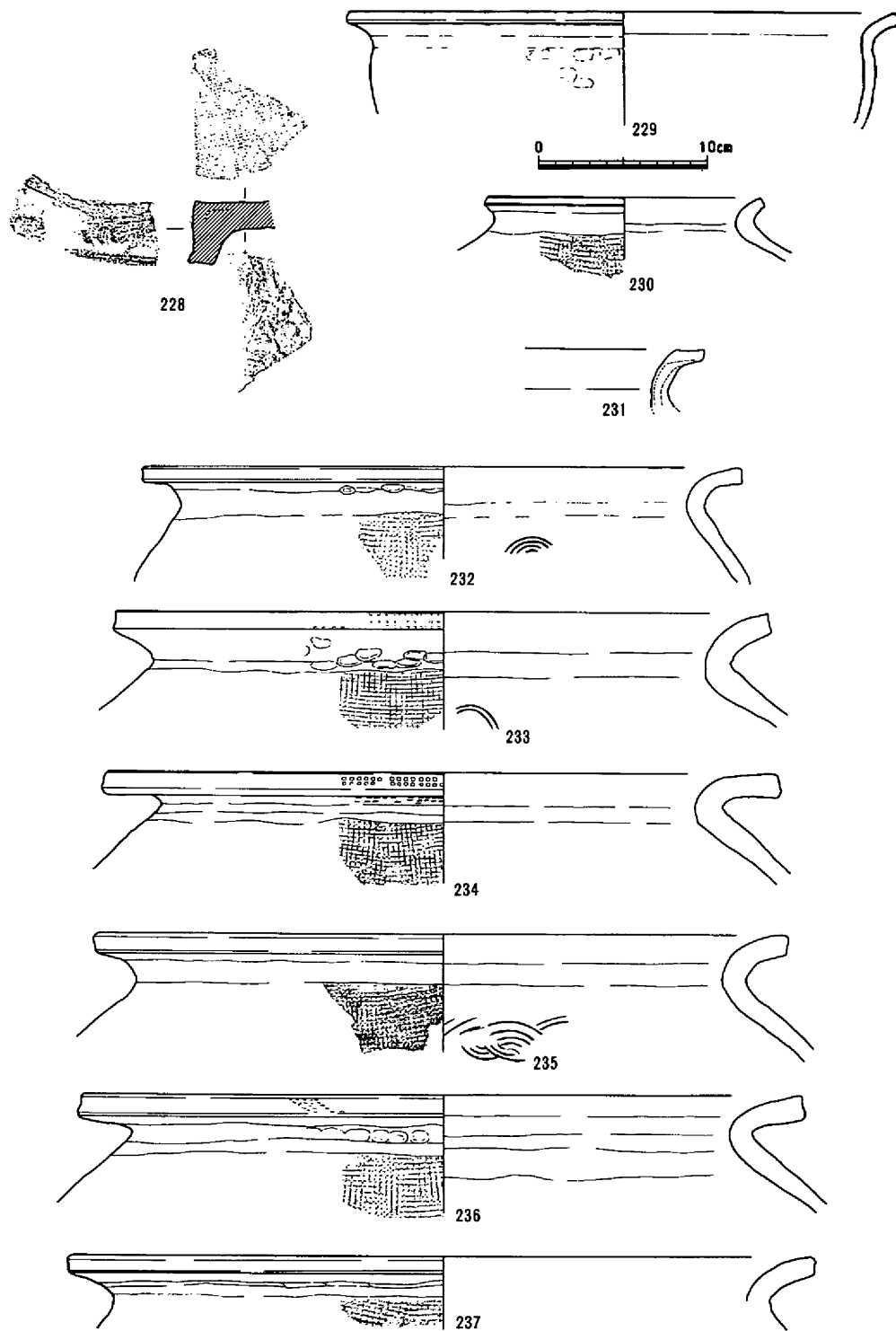
##### (1)土器溜り1 (第66~69図、図版29・30・72)



第66図 土器溜り1出土遺物(1) (1/4)

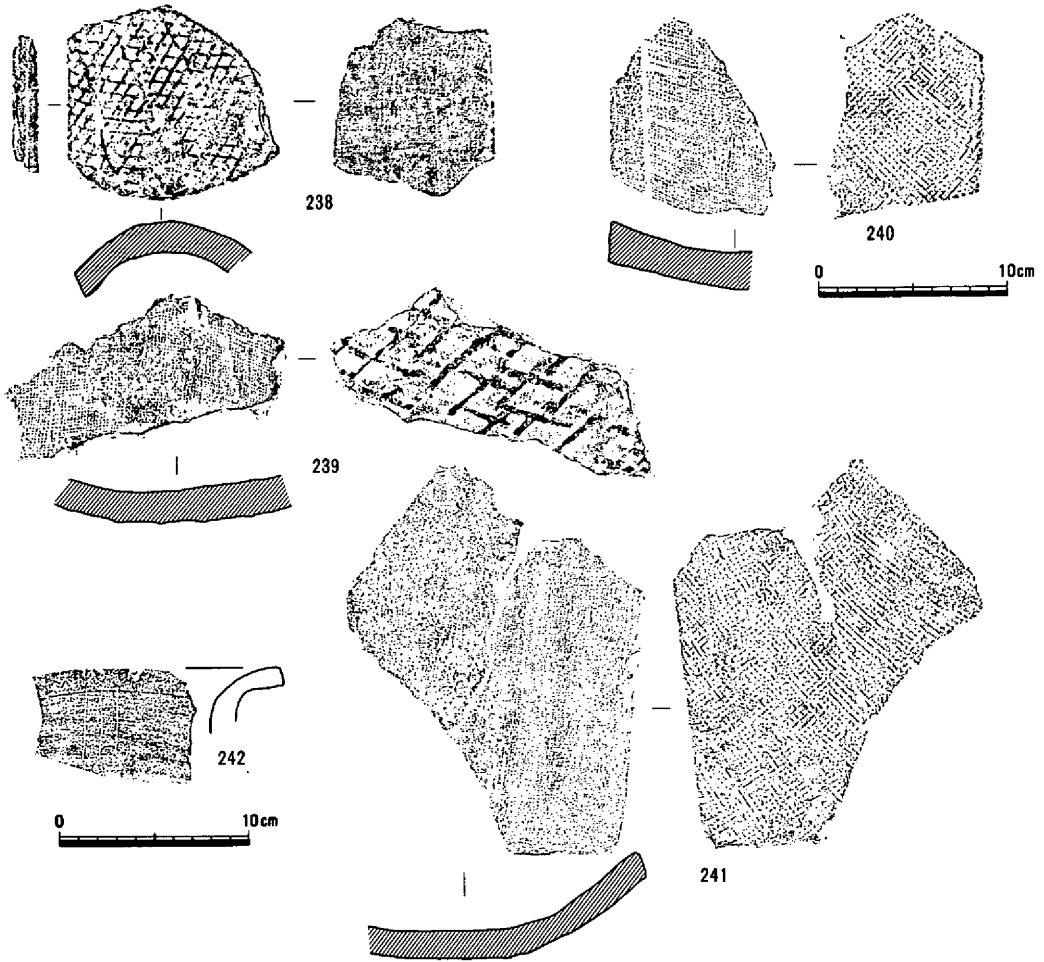


第67図 土器溜り1出土遺物(2) (1/4)



第68図 土器溜り1周辺出土遺物 (1/4)

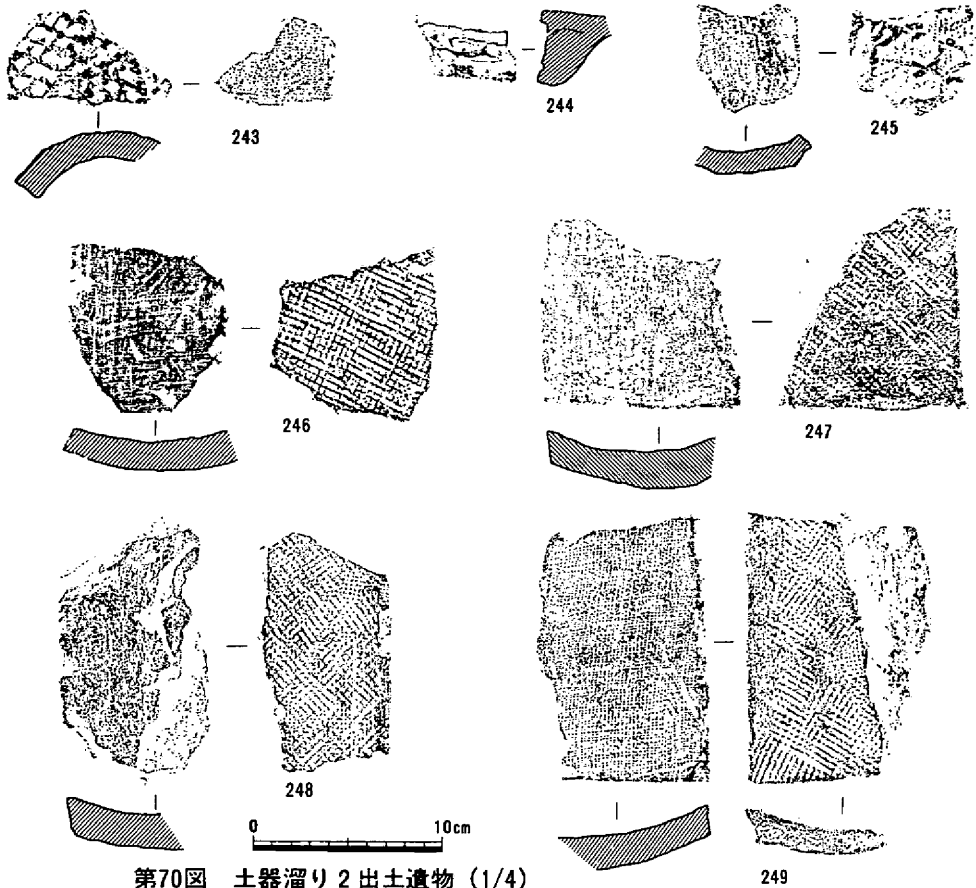




第69図 土器溜り1北側工事用道路部分出土遺物(1/4)

1号窯の北方約8mに位置し、用地内では約3×3mの範囲を検出したにとどまった。地山の直上に数10cmの厚さで堆積する土器溜りで、窯壁片はほとんどみられない。

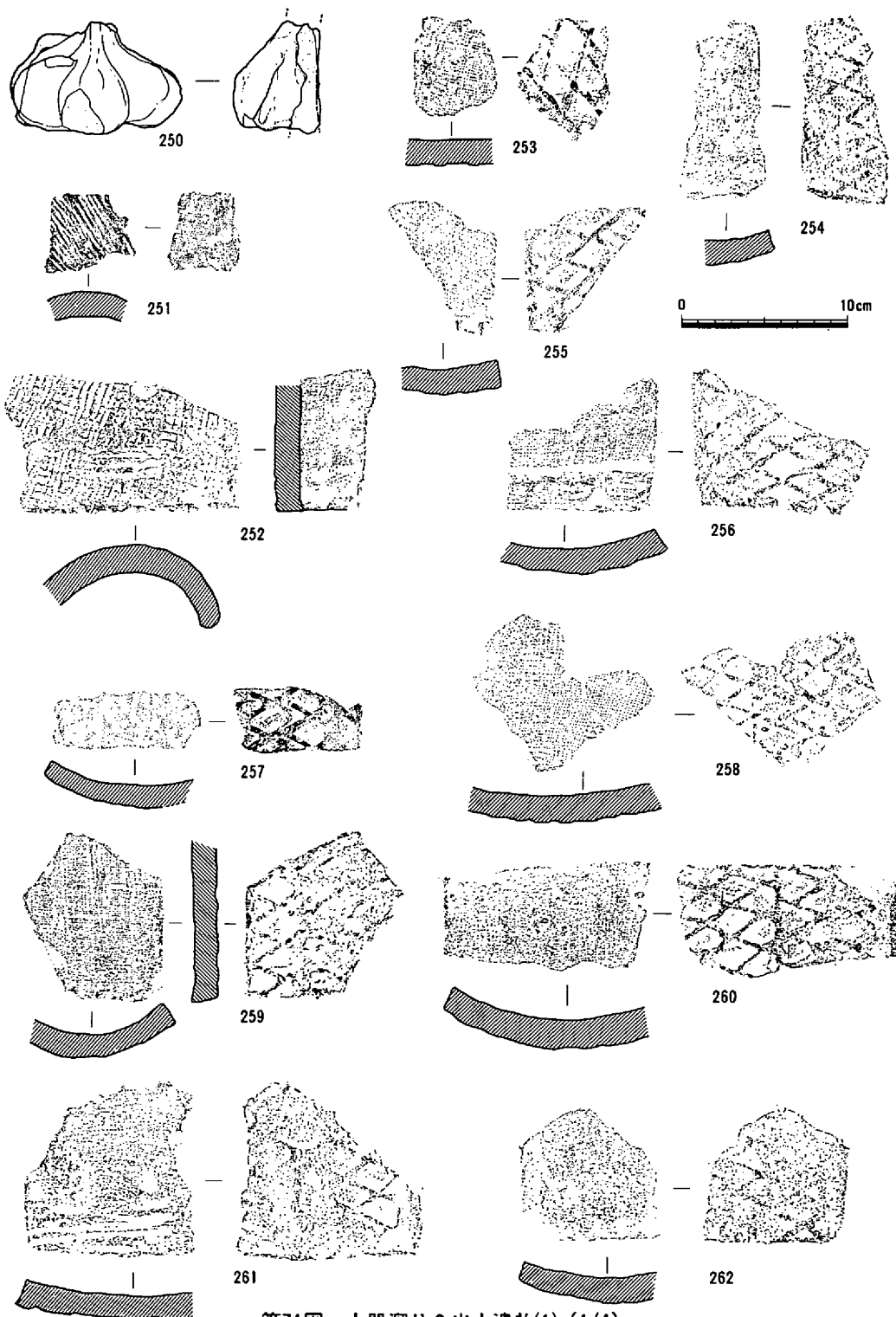
出土遺物には青磁碗のほか瓦・播鉢・甕がみられる。217は、淡緑色を呈する龍泉窯系の青磁碗の底部で、見こみには片彫りによる花文が描かれる。外底部は露胎である。218は瓦当に径3cmの二巴文が飾られた軒平瓦で同一個体の2片を復元配置したものである。平瓦部分の凸面は小さな斜格子タタキ、凹面には布目痕が残され、先端に粘土を盛りあげて接合し、その部分を瓦当としている。瓦当上端の周縁は削りとられている。色調は灰黒色の瓦質を示す。219～221は播鉢である。外面体部には、特徴的な指頭押圧痕が認められる。内面には、放射状の卸し目があり、219では、およそ20条認められる。220は櫛描き風の細くて条線の多い卸し目が認められる。221は、やや強くて深い卸し目で、これもまた密度が高い。いずれも淡灰色～青灰色を呈



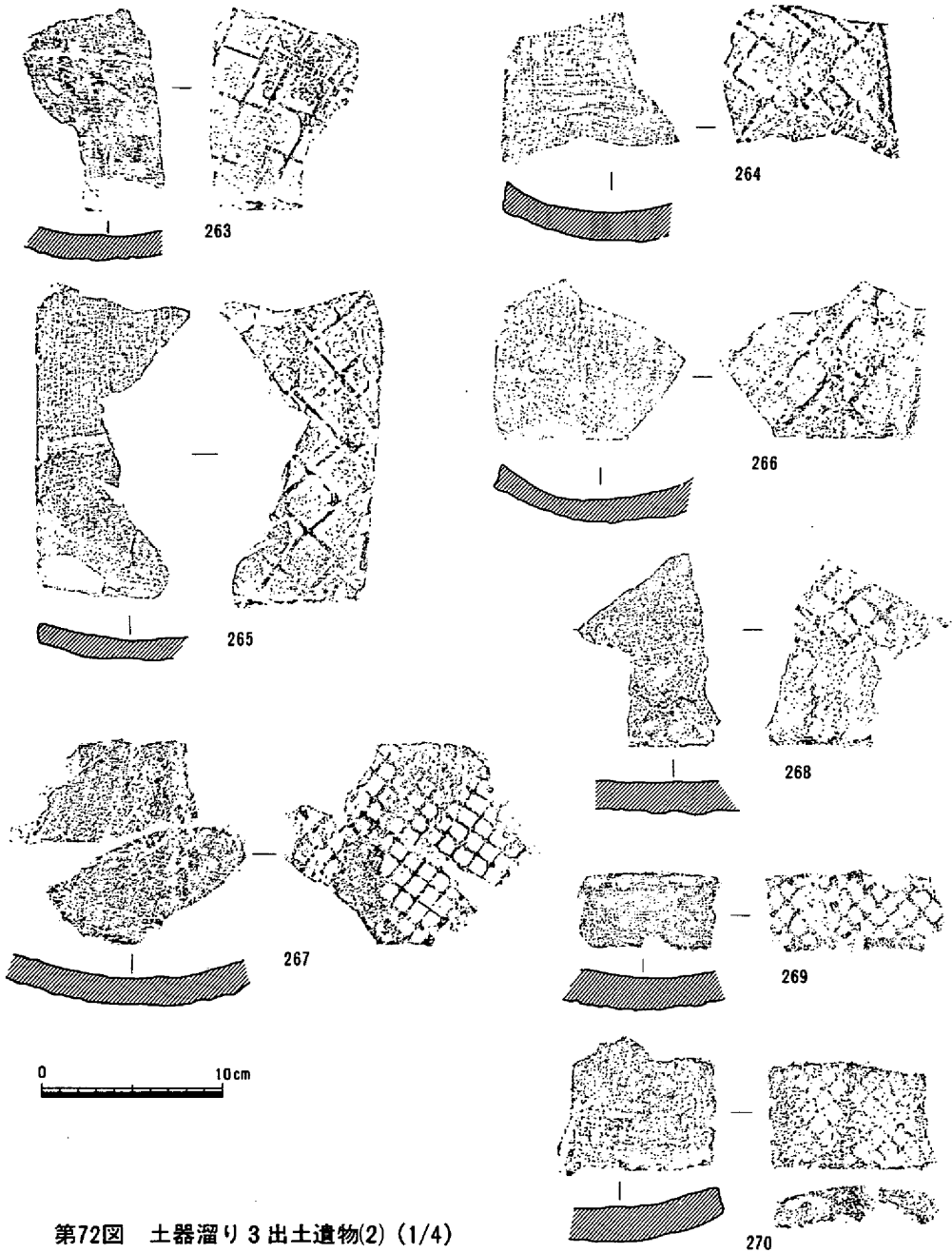
第70図 土器溜り 2 出土遺物 (1/4)

する。甕は222に平行タタキが認められる以外、大半は格子目タタキである。222は口縁部と体部の屈曲が約 $84^\circ$ を測り、口縁部の長さもやや長目である。口径は223・224などより小さいが、より大型となる形状を示している。なお、体部内面はナデによって同心円タタキが丁寧に消されている。223～227は、体部外面にはほぼ同様の格子目タタキが施され、口縁端面にもその痕跡が認められる。口縁端部はやや肥厚して、直立あるいは内傾する。223などの小型品では、比較的口縁端部が鋭い稜をなしておわるものもみられる。口縁部内面には、横位の弱い稜線が数条めぐり、口縁部形成後の板状の硬い工具による横位調整の後、布びき風の調整仕上げ痕跡と理解される。

第68図228～237は、土器溜り 1 の周辺から出土した遺物である。228は二巴文の軒平瓦片で、218と同様のモチーフが妥当に認められる。229は、鍋である。灰原 1 の出土品と異なり、体部は厚目で、タタキ痕跡は認められない。230～237は甕である。230は口縁部の短い小型甕で、亀山焼の甕の中でもっとも小さいタイプを示す。231は口縁部上端に段がつき、平坦面をなす



第71図 土器溜り3出土遺物(1) (1/4)



第72図 土器溜り3出土遺物(2) (1/4)

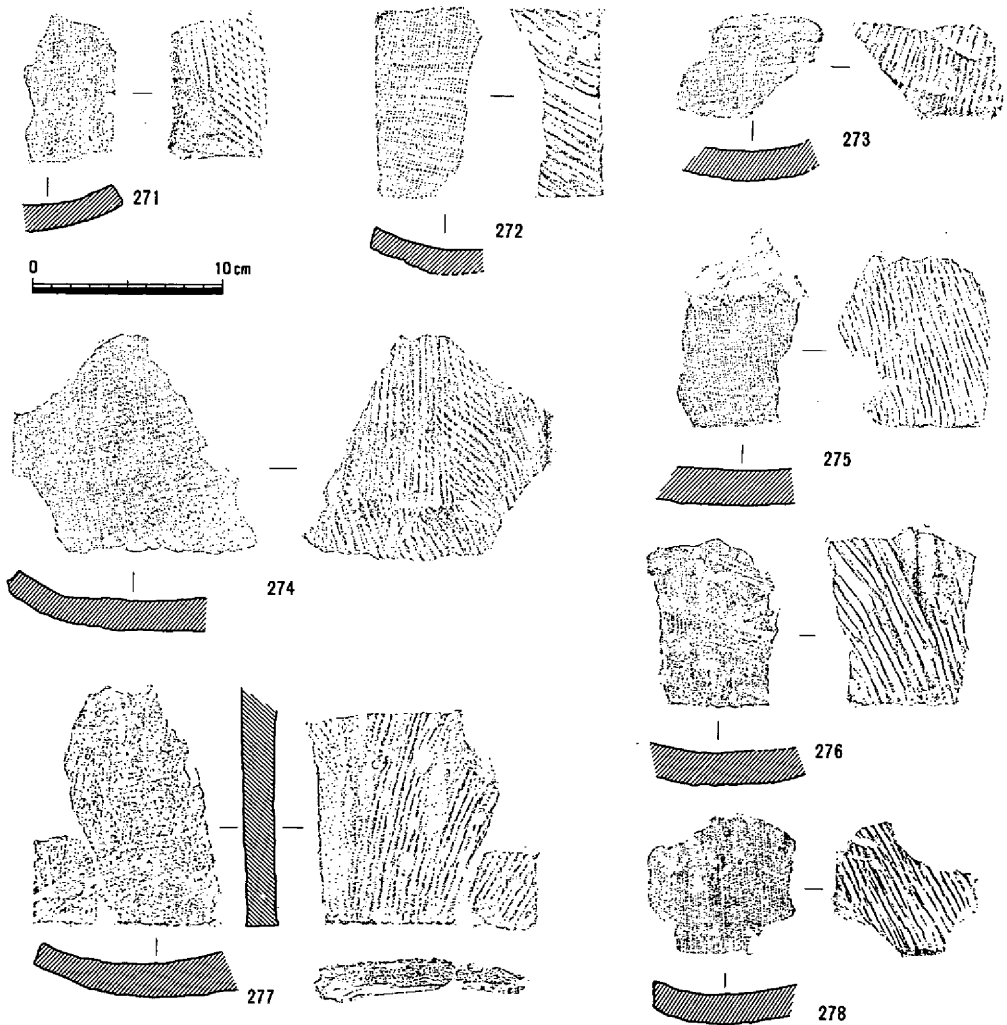
もので、類例はほとんどみられない。

第69図は、土器溜り1の北側、工事用道路部分となるため発掘調査を実施した際出土した瓦である。238は凸面に小さな斜格子タタキが施された丸瓦で、青灰色を呈する凹面には布目痕が

残る。239は、やや粗大な斜格子タタキが重複して観察される灰色を呈する平瓦である。240・241はいずれも凸面に小さな正格子目タタキが施された平瓦で、凹面には布目痕が残る。242は甕の口縁部片であるが、へら状の施文具により、口縁内面に直線を3本ずつ組み合せたへら記号(カマジルシ)が描かれている。黒褐色～橙褐色を呈する、やや焼成不良な破片である。

(2)土器溜り2 (第70図、図版31)

1号窯の東方約10mの発掘区東下端部分にあたり、南側は土壌2に接している。土器の散布範囲は上方で中約4m、下端で約6m、全長約5.5mを測る。灰原の一部と思われる炭・焼土などを含む埋積土も認められ、二次的な移動や再堆積を経たものが多い。灰原の一部は、上方の1号窯のそれとする可能性がもっとも強い。



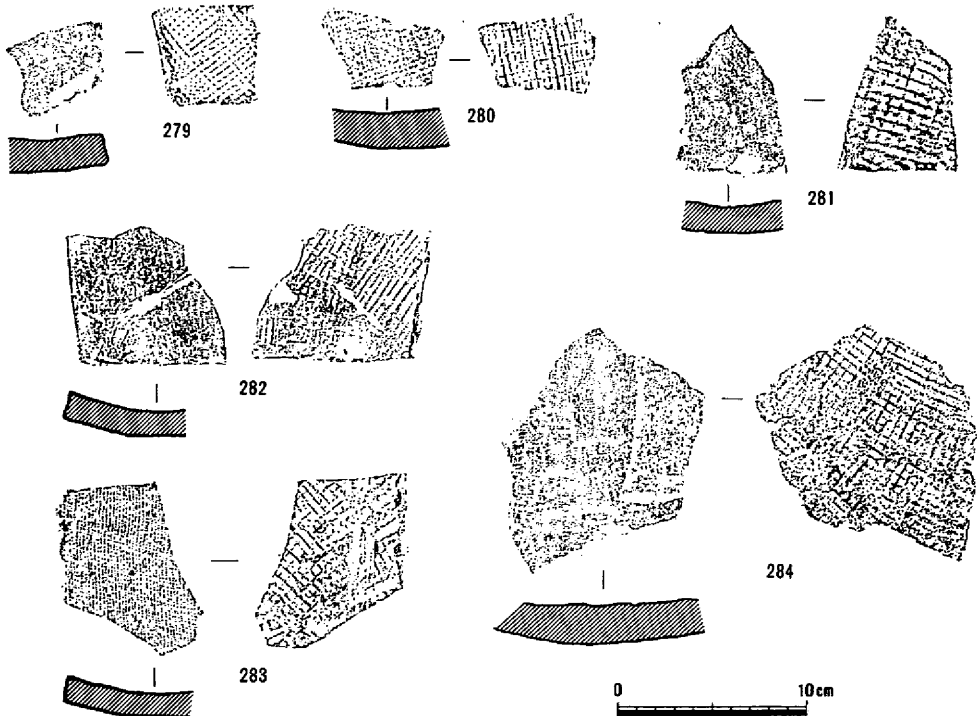
第73図 土器溜り3出土遺物(3) (1/4)

出土遺物には、甕・鉢を主体とする破片が多量に出土したが、計測・作図に耐える個体は極めて少ない。甕の大半の体部は格子目タタキ、内面は、細い同心円タタキで調整されるものである。鉢は、捏鉢はほとんどみられず擂鉢がほとんどを占めている。第70図に掲げる瓦は、以上の遺物と共に出土したもので、243は小さ目の斜格子タタキが凸面に施された丸瓦、244は頸部のみの残された軒平瓦である。瓦当文様は明瞭ではないが、唐草文の主茎から延びる蕨手の一部が看取される。245は凸面に粗大な斜格子タタキが施された平瓦である。246～249はいずれも甕の体部外面と同じ、小さ目な格子目タタキが凸面に施され、側縁の方向に斜行するタタキ板の移動が明瞭に観察される。これらの瓦の凹面は、すべて布目痕が残され、3 cm四方20～30本の平織りの布目が看取される。

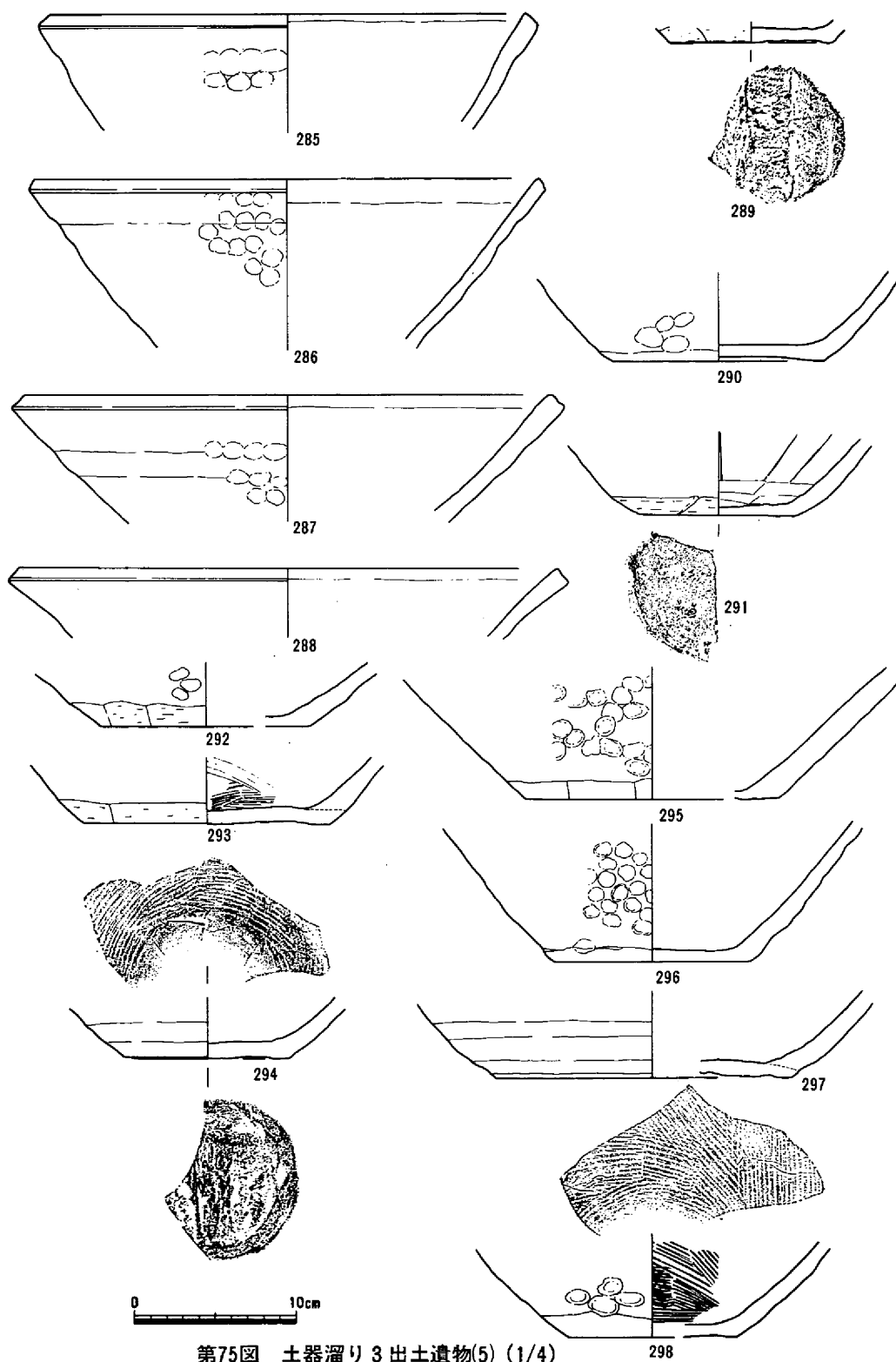
この土器溜り2の下方では、東調査区となり、そこから出土した遺物とも比較検討すべき出土遺物である。 (岡田)

(3)土器溜り3 (第40・41・74～87図、図版20・32・72～76)

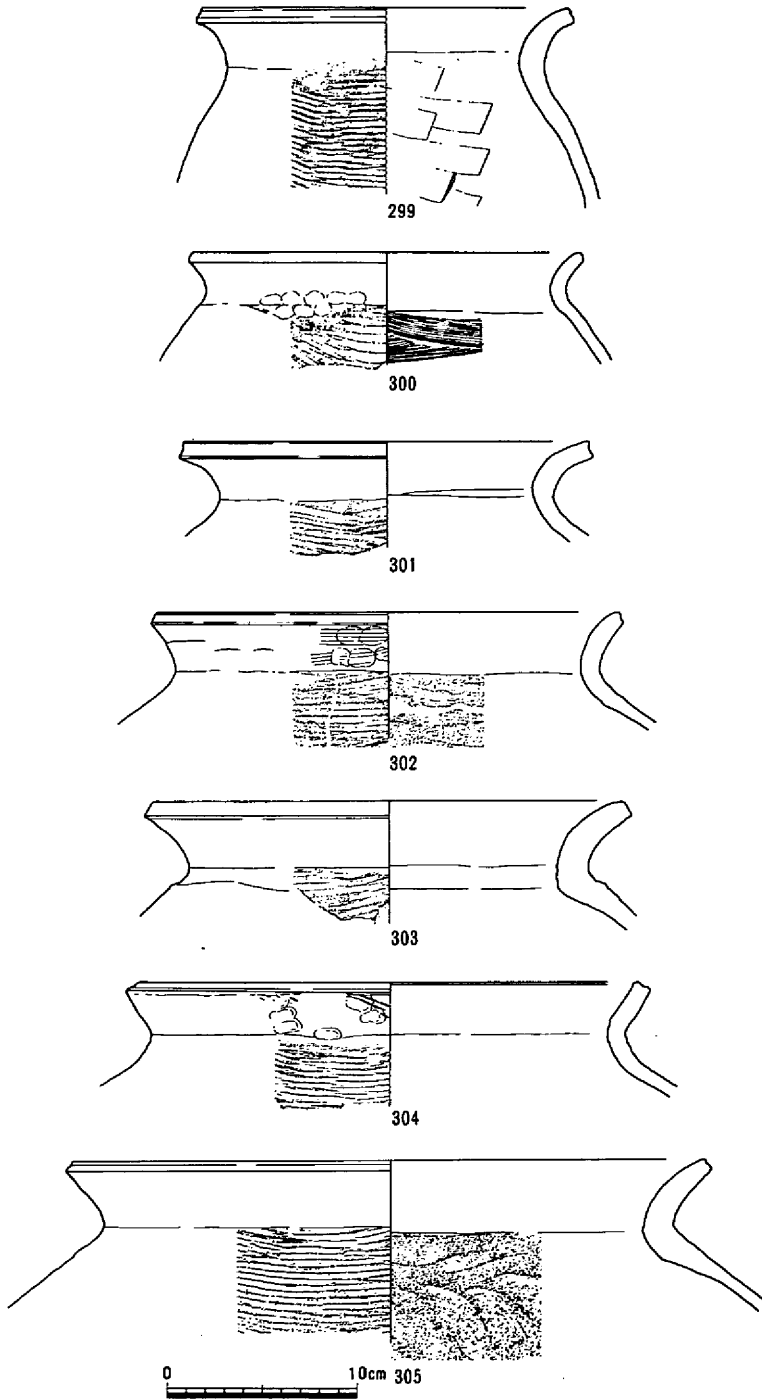
4号窯の東側に接して存在する斜面堆積の状況を示す土器溜りである。長さ約5 m、幅約10 mにわたって広がりが見られるが、土層中には貝層も含まれている。第41図の第3層以下では窯壁片などが多く含まれ始め、土器片の出土も顕著である。北西側の上位部と、断面に示す第2～3・3'層とは本来同一の層をなしていた可能性が強く、水平堆積を呈していない。4号窯



第74図 土器溜り3 出土遺物(4) (1/4)



第75図 土器溜り3出土遺物(5) (1/4)



第76図 土器溜り3出土遺物(6) (1/4)

251・252は丸瓦で、251には玉縁部分で、凸面には平行タタキが施される。252はかなり焼けひ

との層位的な直接関係は上面が後世に攪乱されて不明であるが、4号窯の廃絶後に形成された可能性が強い。この土器溜りの下部、地山斜面の上層では、小児頭大から二人持ち大の石が埋積しているが目立っている。

出土遺物は第71～87図に示すように、亀山焼では瓦・甕・鉢・鍋が出土しており、青磁・土師質土器・銭貨などが共伴している。まず、亀山焼から説明を加える。

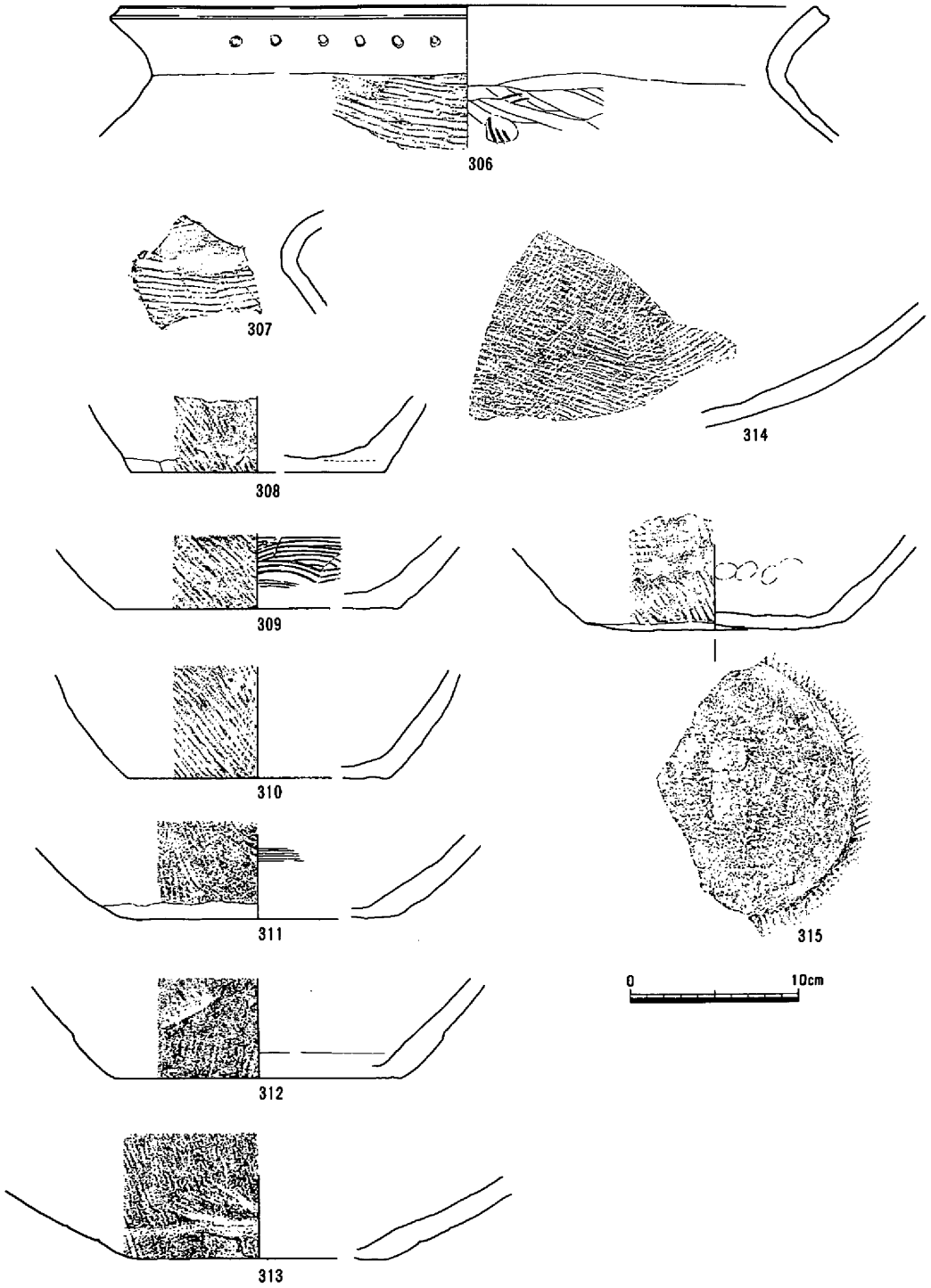
① 亀山焼

(250～370)

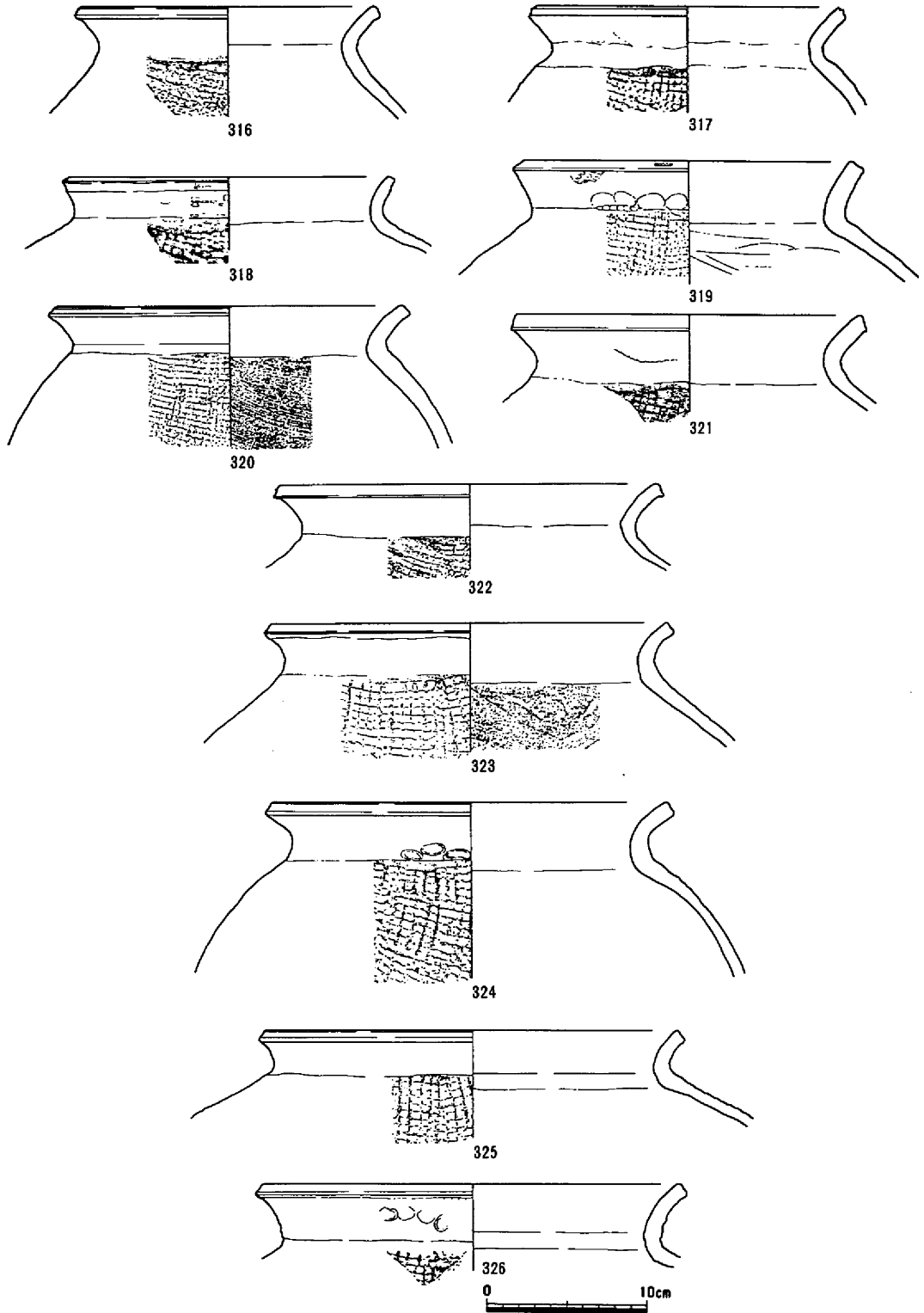
瓦 (250～284)

250は鬼瓦の鼻の部分で左の部分には、わずかに眼臉を表現した部分が残される。黒灰色を呈し、やや薄手のつくりを示す。出土瓦中、唯一の鬼瓦の破片である。

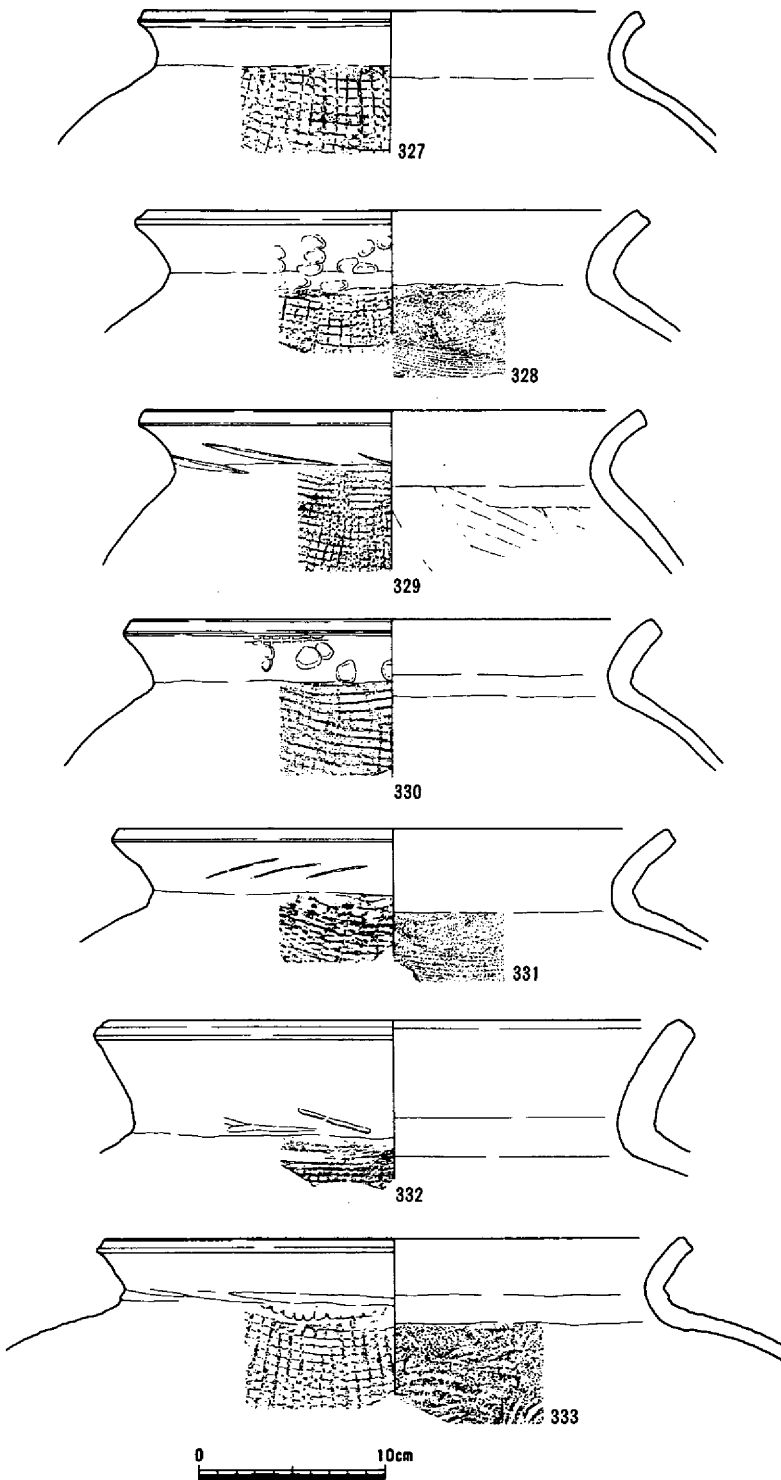




第77図 土器溜り3出土遺物(7) (1/4)

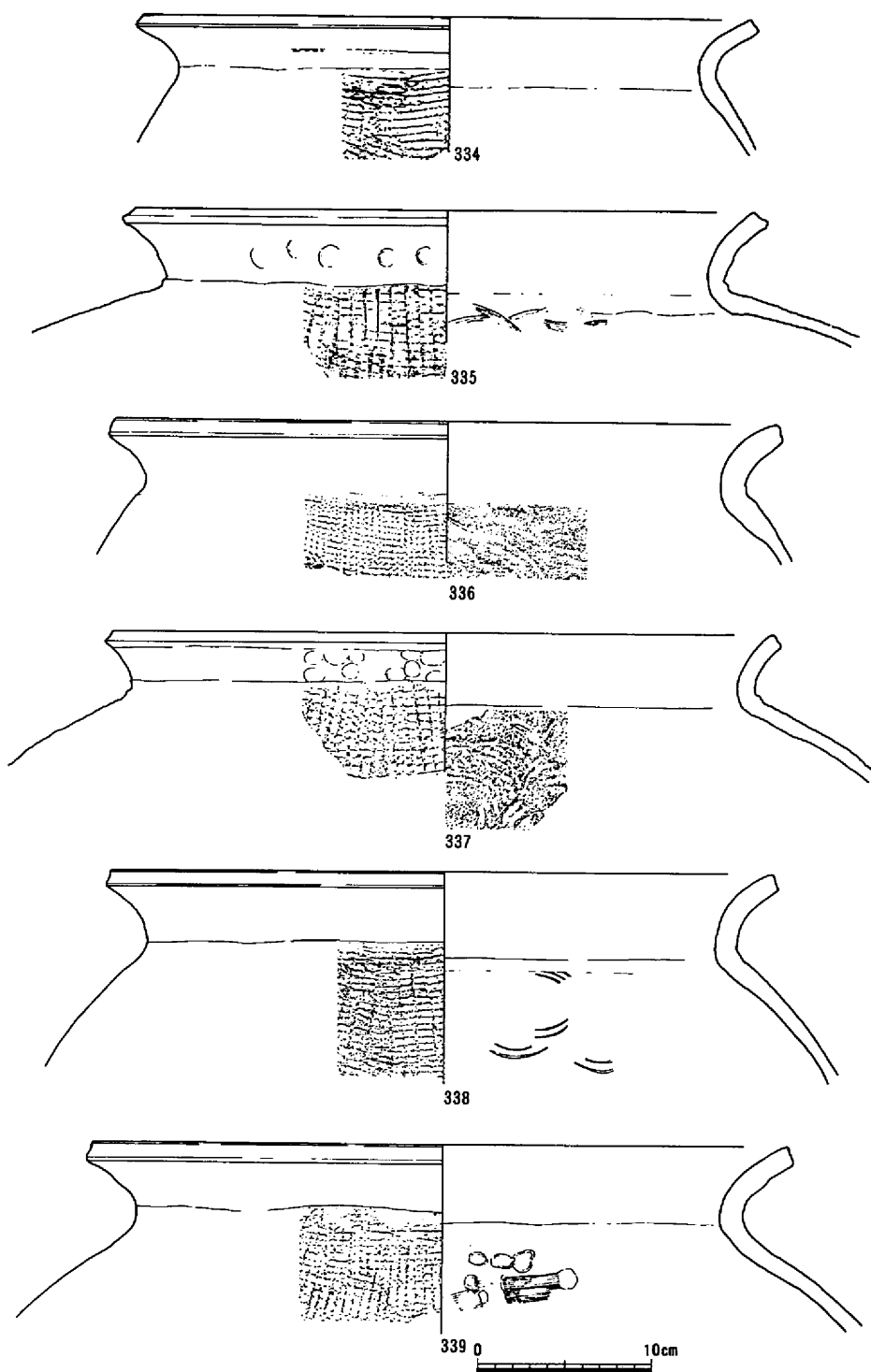


第78図 土器溜り3出土遺物(8) (1/4)

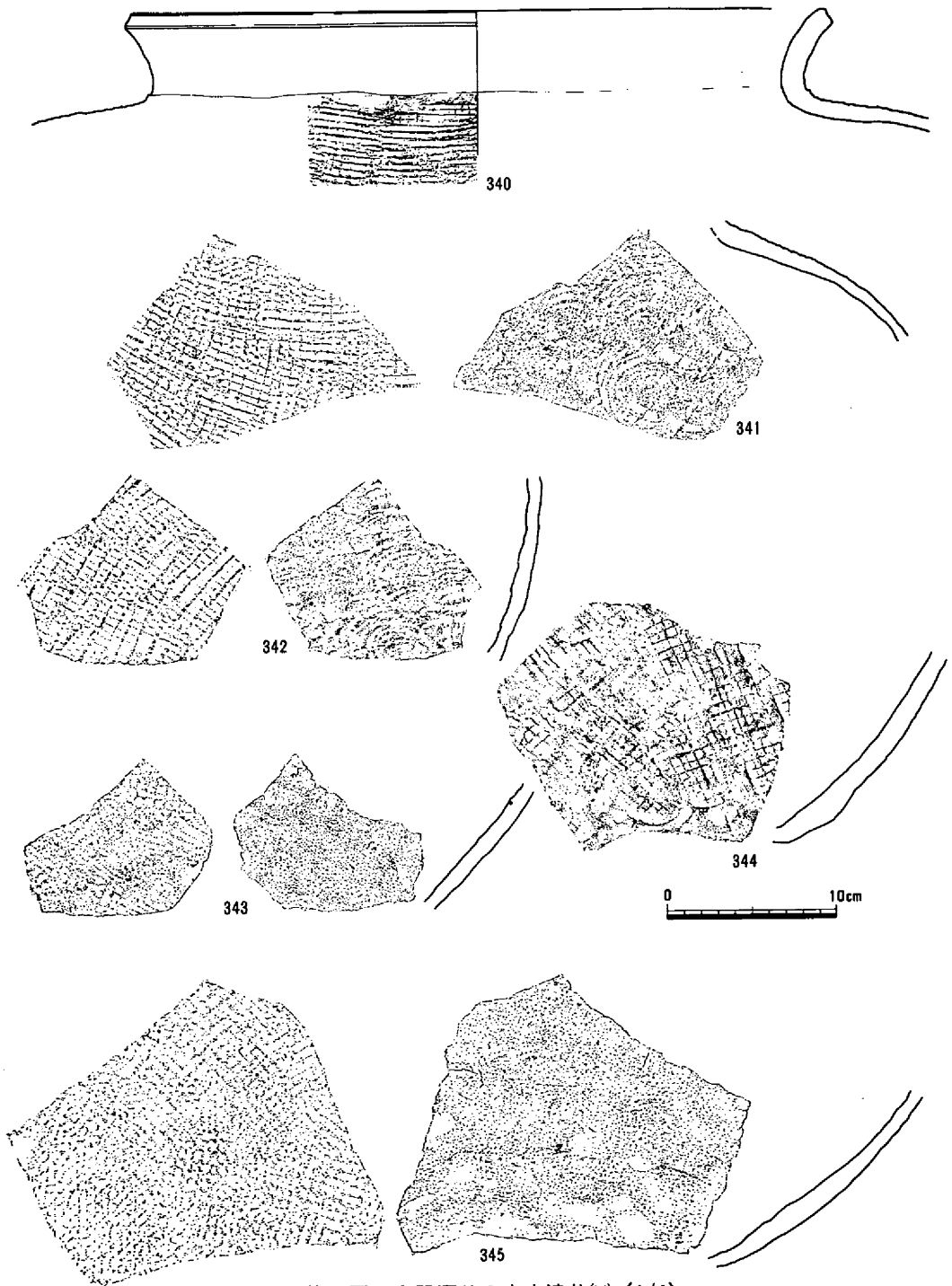


第79図 土器溜り3出土遺物(9) (1/4)

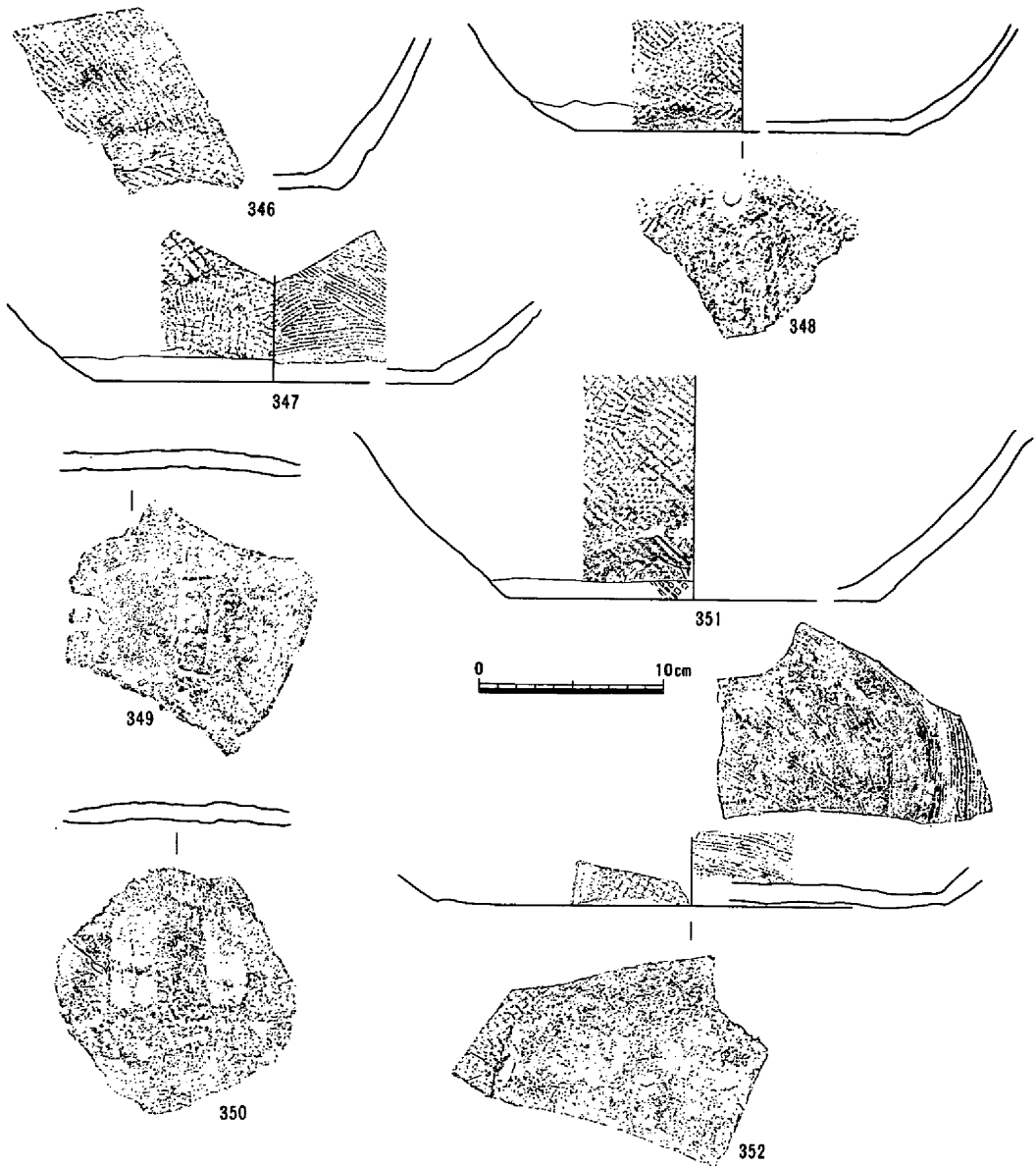
ずみがみられる。凸面には小さな格子目タタキが施され、凹面には布目痕が残される。253～262はやや粗大な斜格子タタキが凸面に施されており、菱形に近いものである。いずれも凹面には布目痕が残されている。263～266は1辺約2.5cmほどの粗大な正格子タタキが凸面に施されたもので、概して薄手なつくりを示すものが多い。267～270は約1cm方格の格子目タタキが凸面に施されたものであるが、268は1.8×1.2cm方格で、やや長方形を示す。これらの軸線はやや太目である。271～278は灰原1出土甕



第80圖 土器溜り3出土遺物(10) (1/4)

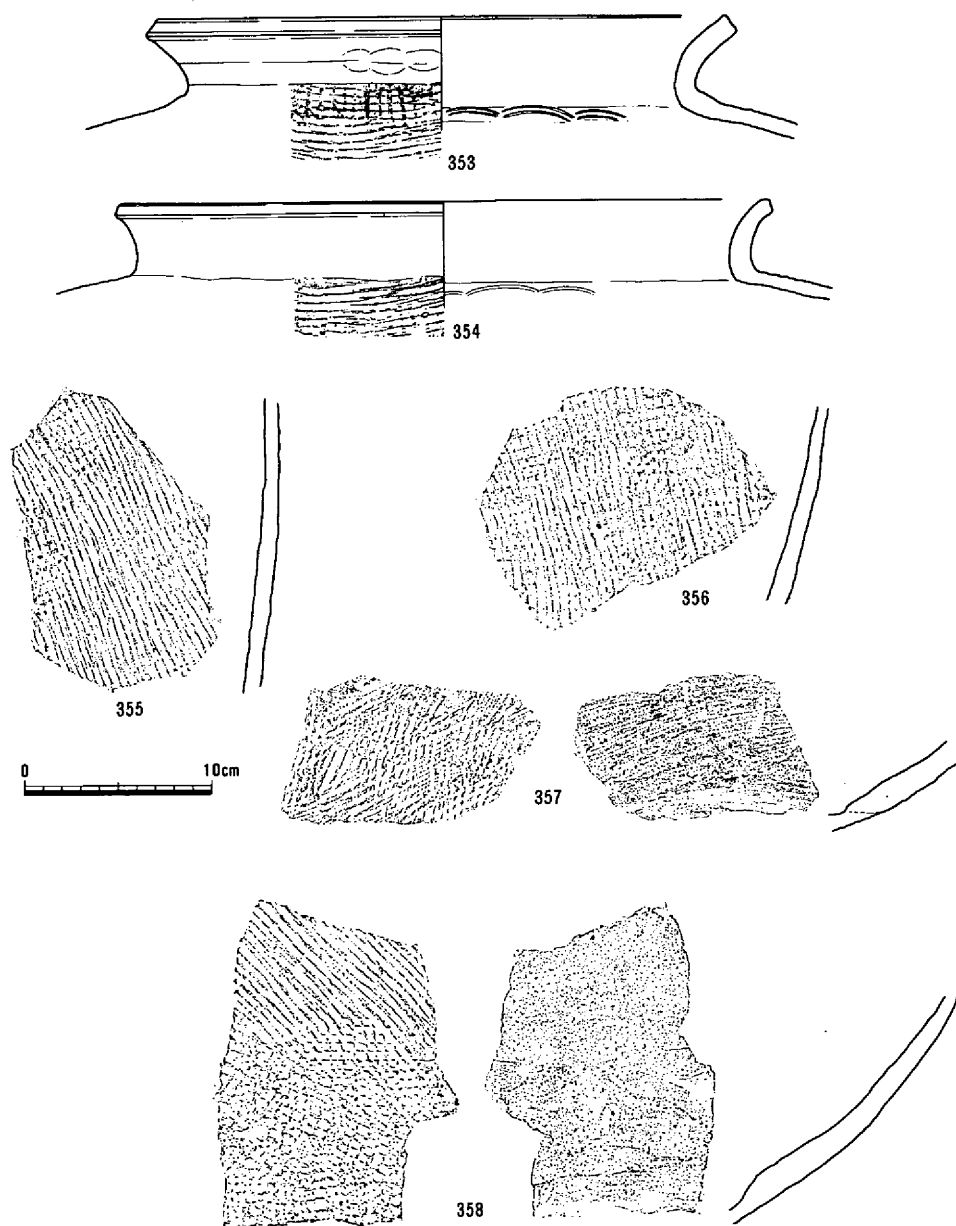


第81図 土器溜り3出土遺物(1) (1/4)



第82図 土器溜り3出土遺物(12) (1/4)

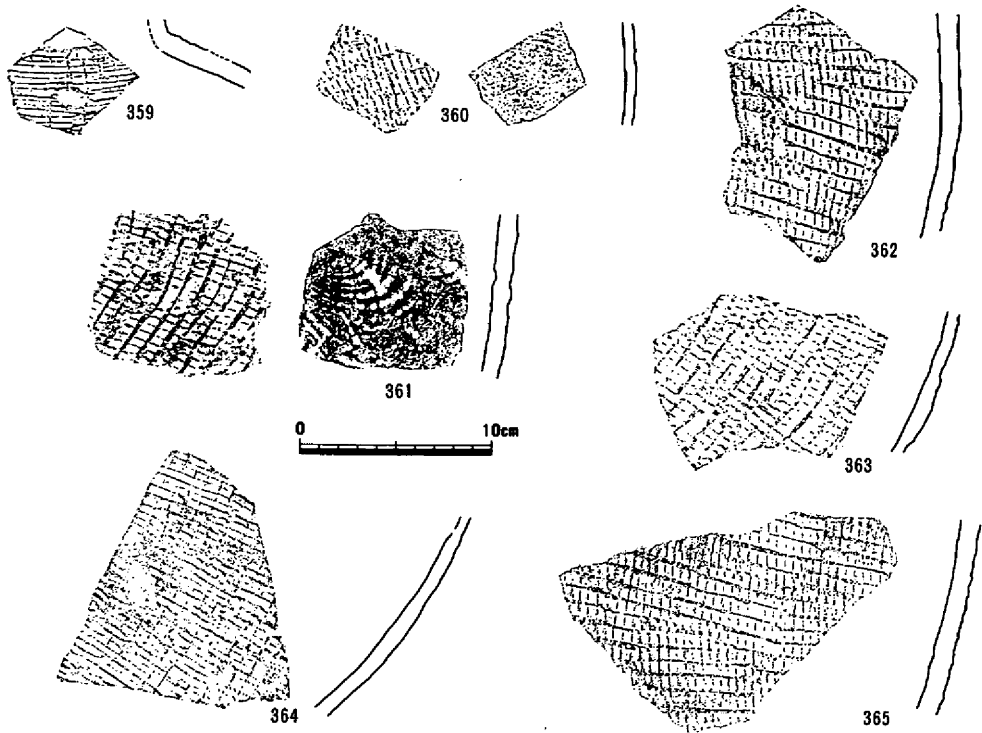
に顕著にみられた、平行タタキが凸面に施された一群の瓦である。側縁に対して斜行しているが、違う方向のタタキと重複するものもみられる。279～284は普通の甕にみられるのと同様の格子目タタキが施されたもので、3～5mm方格の格子目を主体にしている。側縁に対して斜行してタタキ目が施されるものが多い。以上の瓦の大半は、青灰色～灰色を呈する須恵質の焼成を示す。



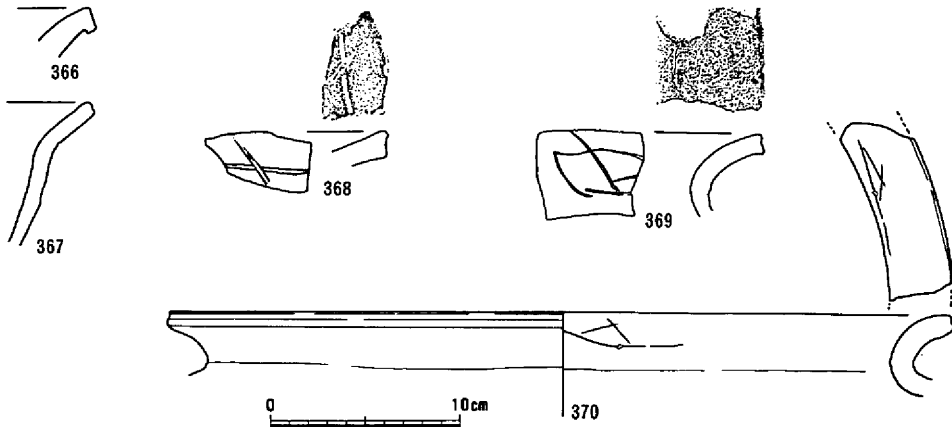
第83図 土器溜り3出土遺物⑬(1/4)

鉢 (285~298)

捏鉢が大半を占め、放射状卸し目が施された播鉢はほとんどみられない。294や298のように横位の荒い櫛描き風の調整を施すものが、播鉢と同じような機能を果たした可能性がある。この点については、今後消費地等における出土例と、使用痕跡の検討が必要であろう。捏鉢の大半は、体部外面には特有の横位の指頭圧痕がめぐり、下端は292・293や295に目立つように横方向



第84図 土器溜り3出土遺物(14) (1/4)

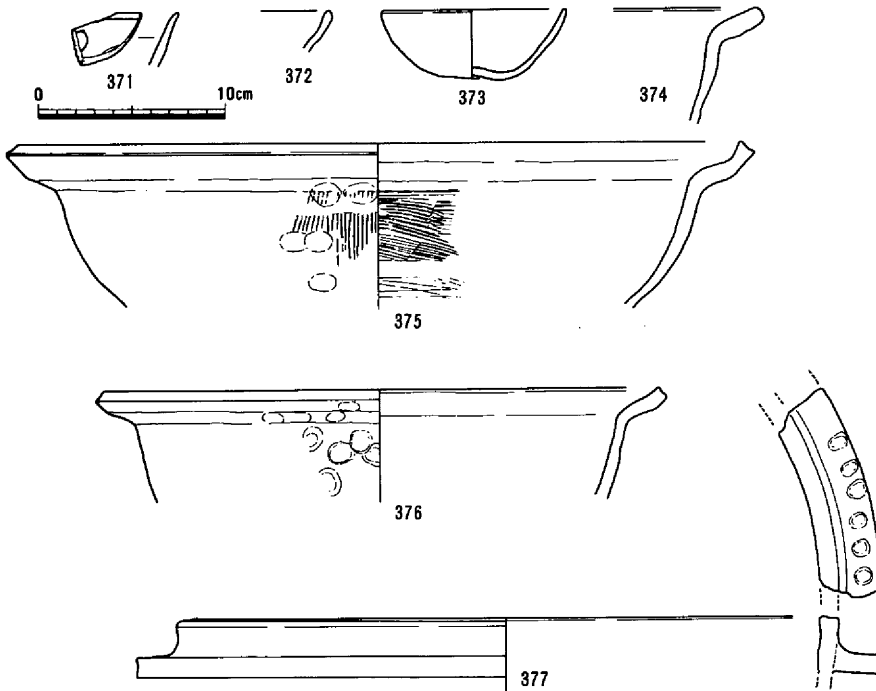


第85図 土器溜り3出土遺物(15) (1/4)

のヘラケズリが行われている。口縁部はわずかに肥厚して終るものが大半で、端面はやや窪む。灰原1の出土品に比べると総じて、器壁は厚目である。外底部には、289・294のように明瞭な下駄印が残されているものがみられる。

甕 (299~370)





第86図 土器溜り3出土遺物(16) (1/4)



第87図 土器溜り3  
出土遺物(17) (1/2)

299～315は体部外面に平行タタキが施されるもので、口縁部の屈曲の度合が小さいものが大半を占める。口縁部は器体の大きさに比べ、やや厚手で、端面はやや凹む。体部内面は、同心円タタキによって調整されているが、299のように横位のナデや、300のように横位のハケ調整で消されているものもみられる。体部上位では、平行タタキは横位を示すが、下位に移行するにつれ、斜行(右下がり)する傾向がある。これは灰原1出土遺物と共通する。体部下位内面では、315のように押圧痕や309のような横位のカキ目風の調整痕を残すものがみられる。また、314のように丸底に近い体部外面では、平行タタキは重複して交叉している。315には外底部に明瞭な下駄印が認められる。316～352は格子目タタキが外面に施されたものである。4～5mm前後の方格を示すものが多く、口縁部の形状や体部内面の調整など、平行タタキのものと大差はない。ただ、格子目タタキの器体の方が、口径の大きいものの占める比率が増加する傾向があることを指摘しておきたい。体部下位の破片をみると、指頭押圧痕を明瞭に残す345や、ハケ調整痕を残す347・352などが認められる。また、346のように体部の立上りが急なもの、347のように緩やかにひろがるものがみられる。348～350には外底部に下駄印が残されている。

353～358は、格子目タタキと平行タタキが併用されている甕である。小型品にはあまりみら

れず、むしろ大型のものに多い。実際に消費地での出土があるのか明確ではないが、きわめて少数の生産品と考えられる。359～360・363・364は長方形の格子目タタキが施されている。出土総数もわずかで、時期的に下降すると全くこのタタキはみられない。361・362・365はいずれも、方格が平行四辺形を示すようにゆがんでおり、一方の軸線が斜行する点に大きな特徴がある。366は口縁端部の下方がやや拡張したものである。出土例は他に認められない。367は灰原1でも出土している鍋片である。この土器溜り3では、出土例は多くみられない。368～370は、ヘラ記号（カマジルシ）が描かれた口縁部片である。いずれも、口縁部内面にその描かれる部位が限定されている。いずれも鋭いヘラ状工具により描かれ、368・370は×印、369は長方形を描きこの中にさらに2条の線が描き加えられてる。

### ②陶磁器・土師質土器その他（371～377）

371は龍泉窯系の青磁碗片である。片彫りの花文が描かれ、淡灰緑色を呈する小片である。372・374は土師質土器碗である。いずれも小形で高台はない。これらは、出土層位から前述の亀山焼と直接的な同時性を示さず、むしろ土器溜りが形成された、二次堆積の際の最終時期を示していると考えられる。375・376は土師質の鍋である。口縁端面は、肥厚して稜をなしている。375には内外面ハケ調整痕が残される。377は瓦質を示す羽釜で、口縁部と同じ形状を示す、鏝が付けられる。亀山焼の可能性もある。

### ③銭貨（M—1・2）

2枚の宋銭が出土している。M—1は、皇宋通宝（初鑄年A.D1039年）、M—2は政和通宝（初鑄年A.D1111年）である。時期的に、この土器溜りは、12世紀以降に形成されたことを示唆している。

### (4)土器溜り4（第88図、図版33）

2号窯の東方下位約5m付近で検出された、小規模な土器溜りである。周囲には、ハイガイを中心とする小貝塚も検出されている。

378～383は甕で、いずれも体部外面には、小さな格子目タタキが施される。口縁部の屈曲は大きく、短い。379は、口縁部は極めて短く丸味をもって肥厚して終る。体部内面は、381のように細かい同心円タタキが残されるものもみられるが、図に掲げるものの多くは、横位のナデで消されている。いずれも青灰色～淡灰色を呈する焼成を示す。これらの甕のほか、瓦片や播鉢片がわずかに出土している。瓦は凸面に格子目タタキが施されたもので、平瓦が多い。

### (5)土器溜り5（第90～96図、図版10・34・77）

2号窯のすぐ東側に近接して検出された、土器溜りである。土採り等によってやや窪んだ部分に炭片などと共に、亀山焼や陶磁器片などが多量に出土した。およそ5×6mの範囲に土器溜りはひろがるが、北側は用地外となっている。また、部分的にはハイガイを主体とする貝層

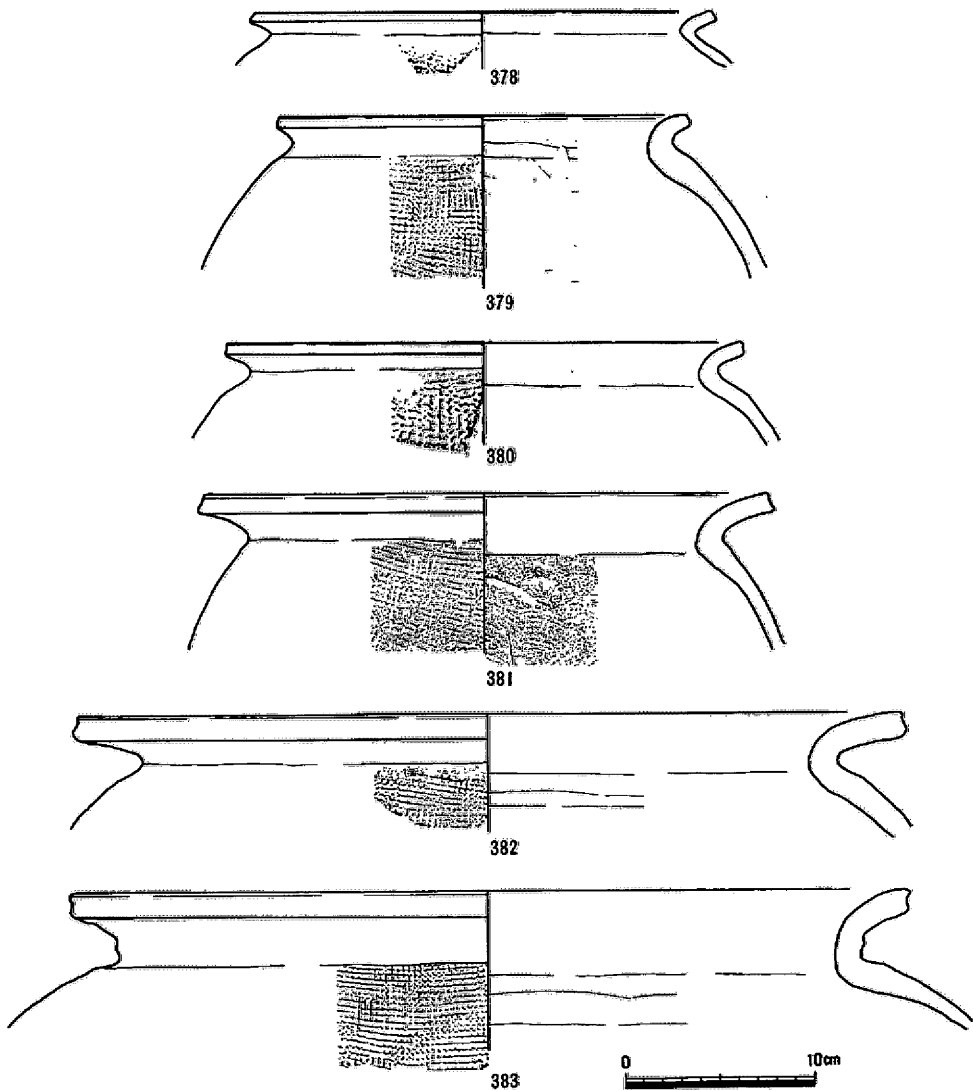
が認められる。

①亀山焼 (384~419)

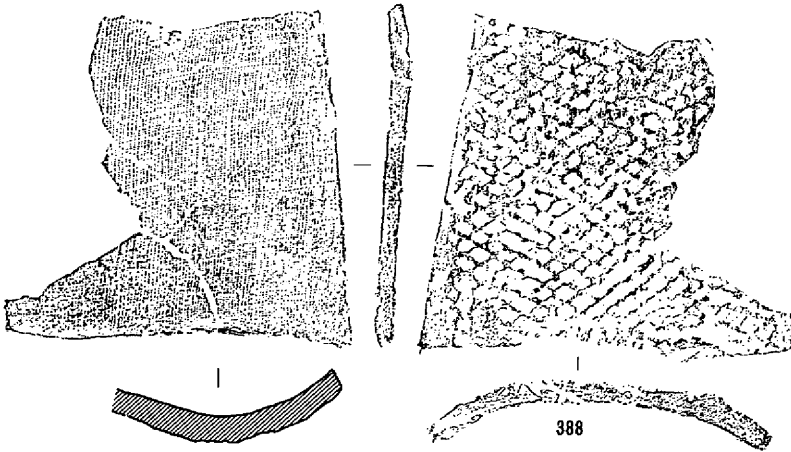
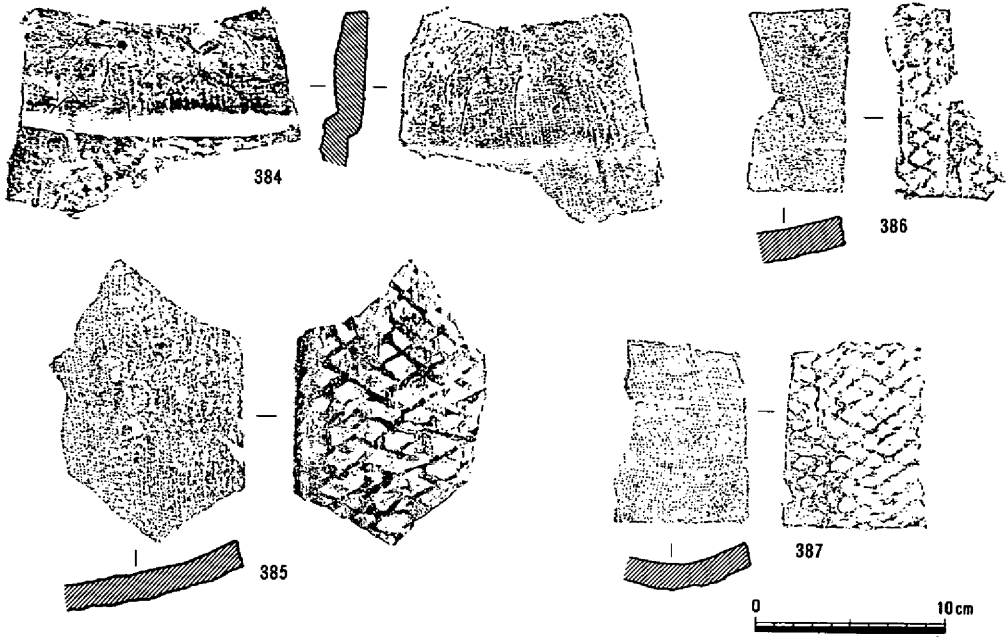
瓦 (384~388)

384は玉縁部分が何らかの衝撃によって圧延された状態の丸瓦である。凸面には小さな斜格子タタキ、凹面には布目痕が残される。385はやや粗大な斜格子タタキが凸面に施された平瓦である。386~388は、385よりもやや小さい斜格子タタキが凸面に施された平瓦である。これらは、いずれも凹面には布目痕が残る。焼成は、暗青色~灰青色を呈し、堅硬な、須恵質である。

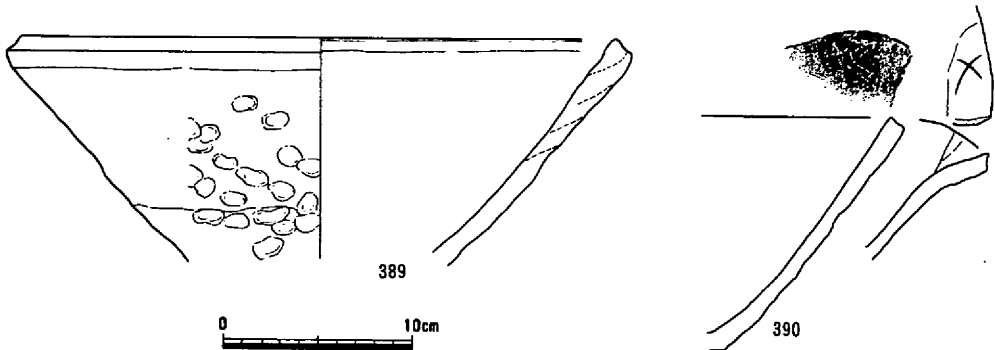
鉢 (389・390)



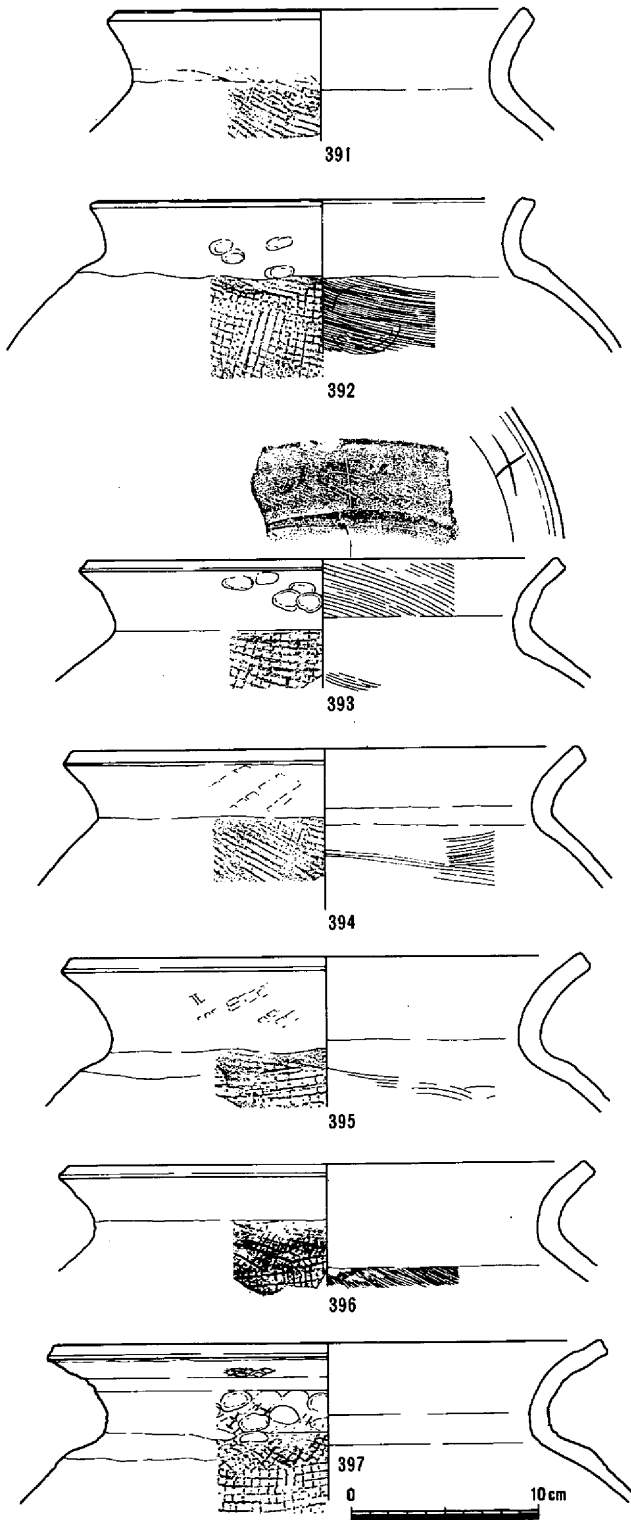
第88図 土器溜り4出土遺物 (1/4)



第89図 土器溜り5出土遺物(1) (1/4)



第90図 土器溜り5出土遺物(2) (1/4)

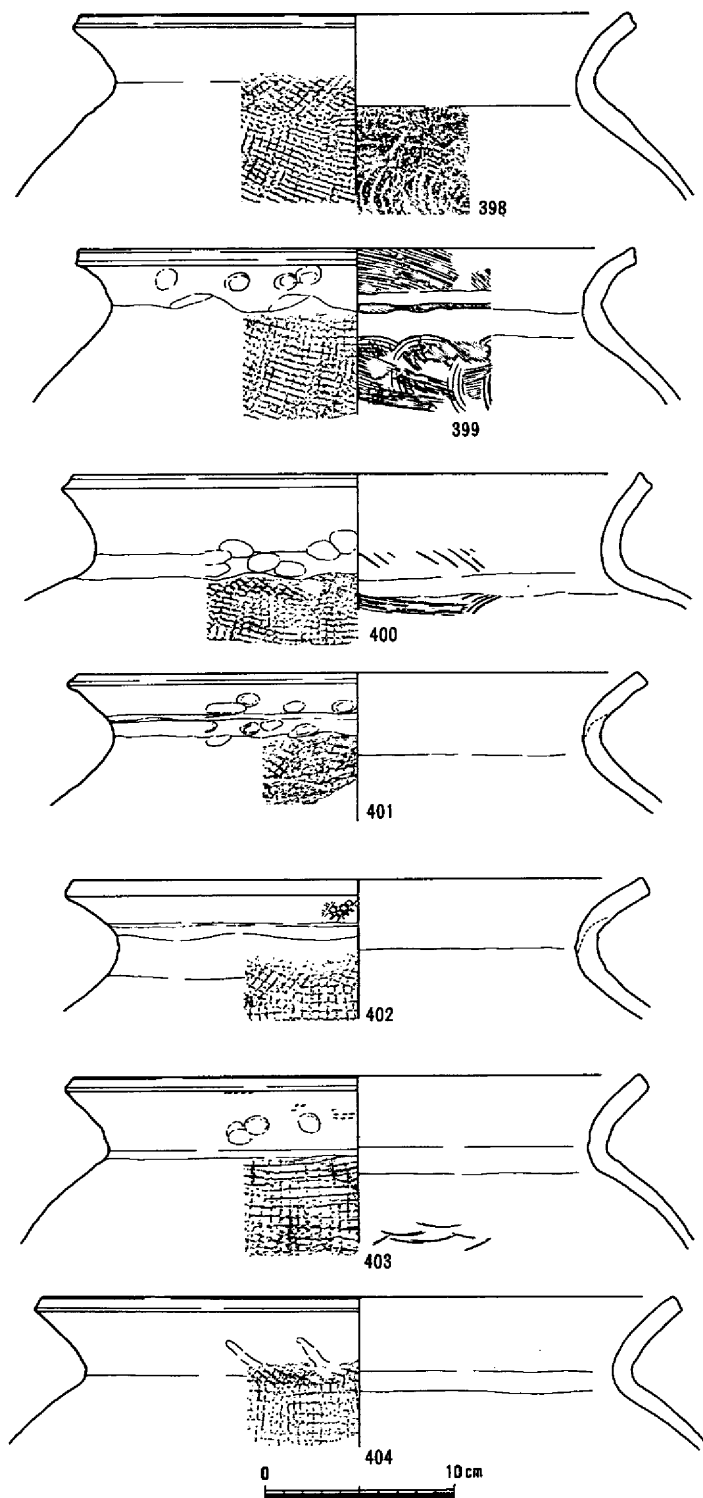


第91図 土器溜り5出土遺物(3) (1/4)

捏鉢が2点出土している。389の体部外面には、特有の指頭押圧痕がめぐる。内面はナデ仕上げである。灰原1の出土捏鉢に比べるとやや器壁が厚く、口縁部の肥厚が増すが、390は、比較的薄手の体部である。片口部分に、×のヘラ記号（カマジルシ）が描かれている。亀山焼では播鉢・捏鉢を問わず、この部位にヘラ記号が描かれることが限定されている。これは、備前焼などには全くみられない特徴でもある。

甕 (391～419)

体部外面に、格子目タタキが施されたものがすべてである。口縁部の屈曲の度合によって、小さいグループ391～410、大きいグループ413～419に大別される。前者は格子目の方格が、器体によって不揃いで4mm前後を測るものが多く、後者は3mm前後の方格で、どの器体によってもほぼ同じである。また前者は、タタキが浅かったり、あるいは深かったりしているが、後者は斉一性がある。さらに体部内面の同心円タタキは前者の方が、やや太目で、後者は細い。前者の方が、ハケあるいはナデ調整によって消される比率が高い特

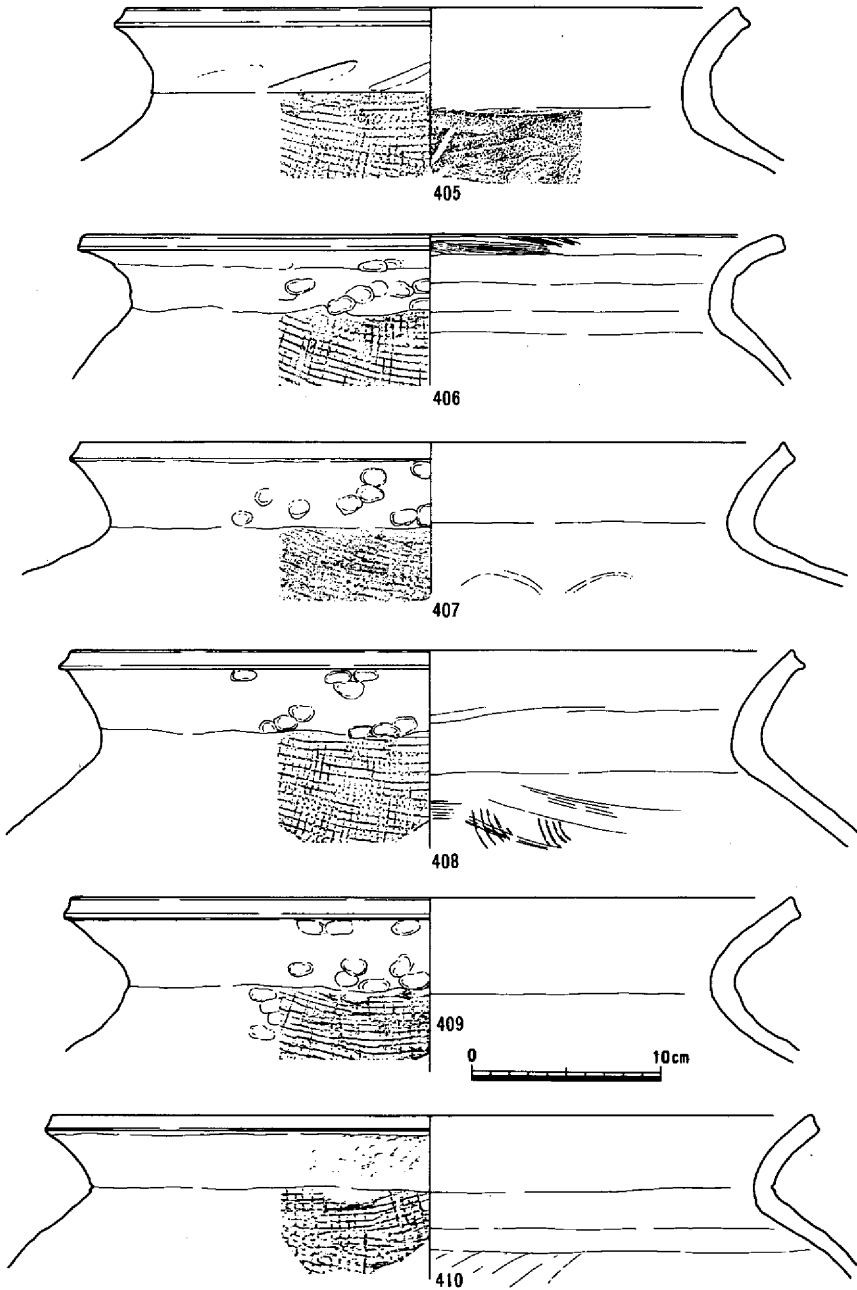


第92図 土器溜り5出土遺物(4) (1/4)

徴がある。このように、口縁部の屈曲の度合いが弱いにもかかわらず、平行タタキが全く含まれていない点で、2号窯窯体内出土の甕と共通しており、格子目タタキがほぼ、亀山焼甕に使われるタタキの大勢を占めた時期の所産に比定されるだろう。なお、393の口縁部内面には×のヘラ記号（カマジルシ）が認められる。また、395のように頸部ともいえる直線的な部分が認められ、やや特異な形態として注目される。

② 土師質土器 (420-422)

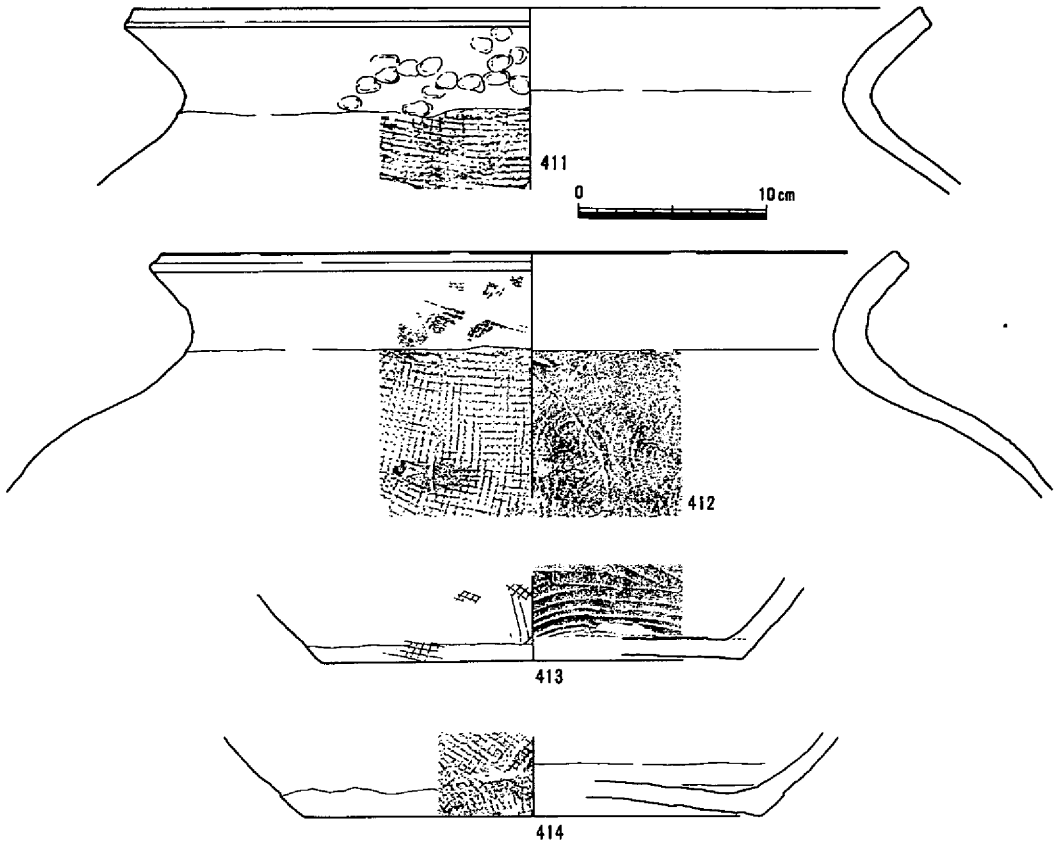
いずれも早島式と呼称される土師質土器の椀である。高台は貼付けで、421・422はやや径が大きい。422は完形片で、口径12.8cm、器高4cm、高台径6.6cmを測る。体部の中ほどに屈曲



第93図 土器溜り5出土遺物(5) (1/4)

部があり、下方に指頭押圧痕が残される。内面は、平滑な仕上げが認められる。これらはいずれも白っぽい膚色ないしは黄橙白色を呈し、石英・長石微砂をわずかに含む精良土が胎土となっている。灰原1出土の土師質土器椀に比べると時期的にはやや下ることが注意される。

423・424は龍泉窯系の青磁碗である。いずれも見こみには片彫りの草花文が描かれている。



第94図 土器溜り5 出土遺物(6) (1/4)

425の高台部畳付は露胎である。423はやや鈍い光沢を呈する灰緑色、424は光沢がある淡灰緑色の釉調を示している。素地はいずれも暗灰色を示す。

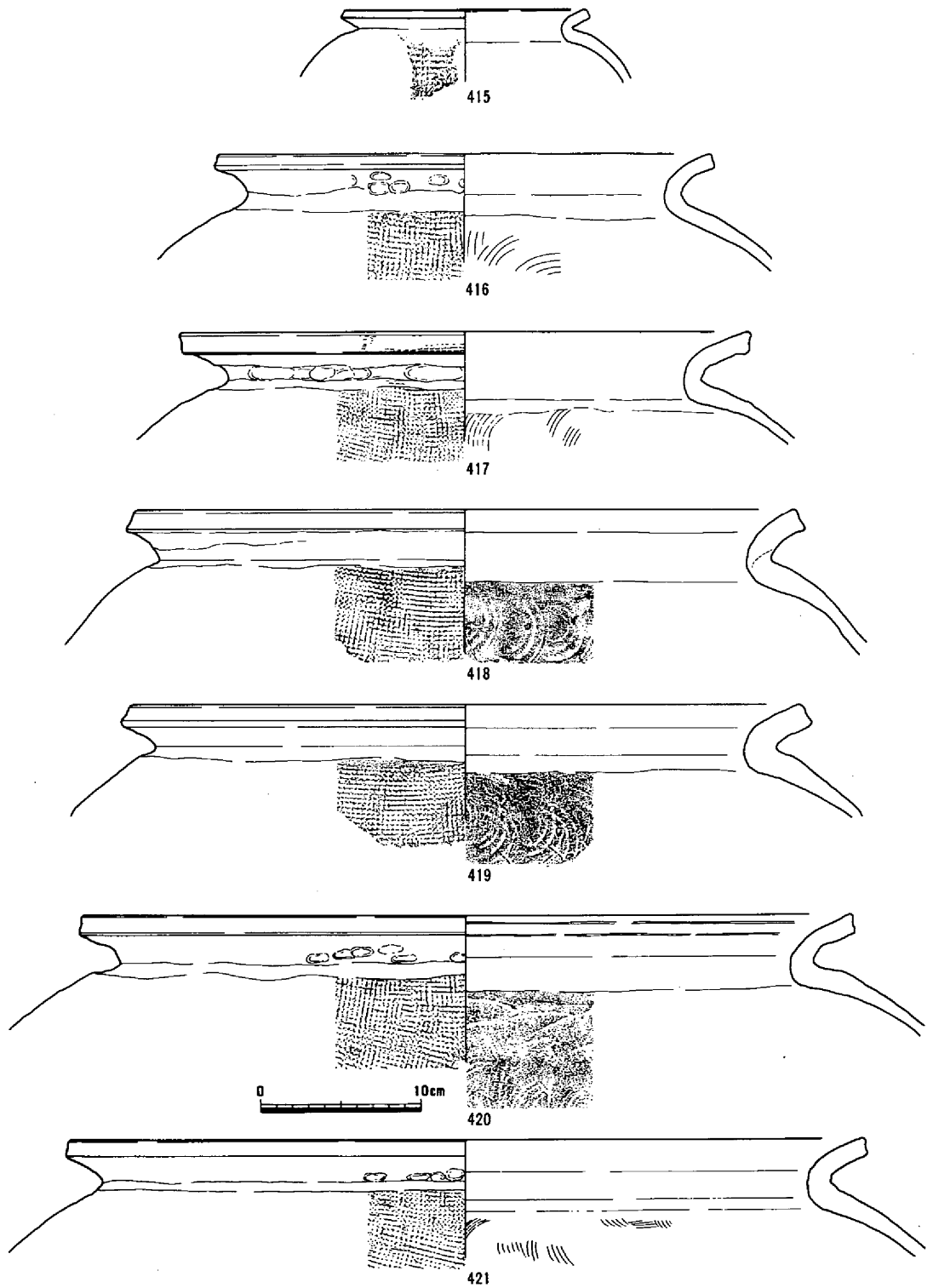
(6)土器溜り6 (第97～101図、図版10・33・34・78)

2号窯の西側に近接して検出された土器溜りで、3号窯の間近に及んでいる。約5～6mの範囲のひろがりを示し、下面は地山面となっており、土採りによって大きな窪地となっている。この窪地は2号窯の築造よりも古い段階と考えられるが、出土遺物を比較してみると、2号窯出土甕と類似するものもみられるが、やや口縁部の屈曲度が増し、格子目タタキが小さ目で、体部内面には細目の同心円タタキが施されたものが多い。したがって、上層部分は2号窯廃絶後に形成された土器溜りである可能性が強い。出土遺物はすべて亀山焼であるが、窯壁片なども多くみられる。

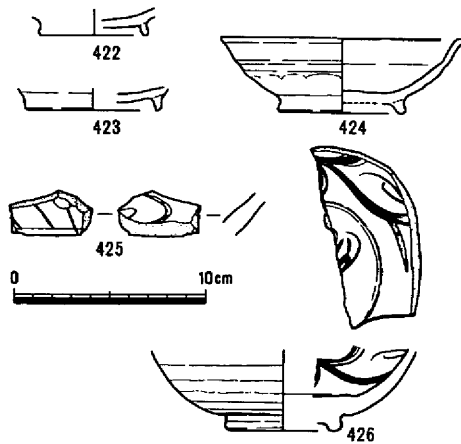
瓦 (427～433)

427がやや粗大な斜格子タタキが施されている以外、すべて小さ目な格子目タタキが凸面に施された平瓦である。格子目タタキは、側縁に斜行しており、方格は整然としている。甕の体部





第95図 土器溜り5出土遺物(7) (1/4)



第96図 土器溜り 5 出土遺物(8) (1/4)

外面に施されている格子目タタキと同一である。

凹面には、すべて布目痕が残されている。

#### 鉢 (434)

434は播鉢である。卸し目は櫛描き状をなし放射状に施されている。他に播鉢細片がみられる以外、捏鉢は認められない。

#### 甕 (435～453)

口径27cm～56cmまでの甕が出土している。体部外面はすべて格子目タタキである。口縁部が長く、屈曲の度合が小さいものは少なく436のみ図化できたものである。ほぼ同じ口径の435と比べても、口径の割に器壁が厚い特徴もある。442

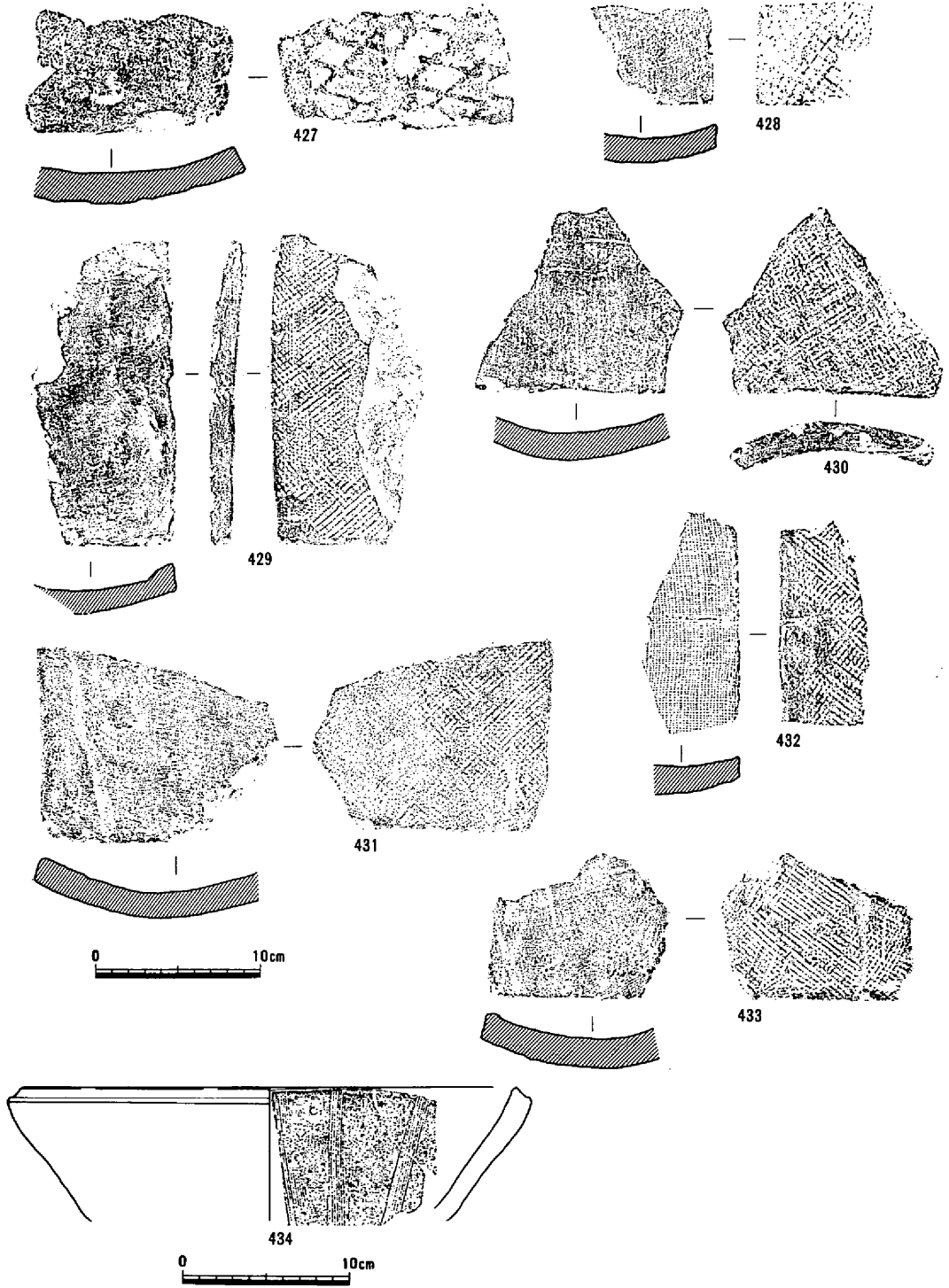
には、口縁部上面には灰緑色を呈する自然釉がかかっており、かすかに格子目状の条線がみられるが、タタキ痕跡か否か識別できない。口縁端部や短い頸部には、しばしば格子目タタキの痕跡が認められ、亀山焼の特徴の一つとしてすでに触れたとおりである。体部内面の調整は、おもに同心円タタキが行われているが、ハケ調整(437・450)やナデ調整(441)で仕上げるものもみられる。

大きさからみると、435・437・438の口径30cmの小型品と、439～443の口径40cm前後の中型品、444～453の口径46cm以上55cm前後を測る大型品に分類できる。これらは、いずれも器体の大きさにかかわらず、格子目タタキの方格は3～4mmを測り、一定の大きさを示している点に特徴がある。

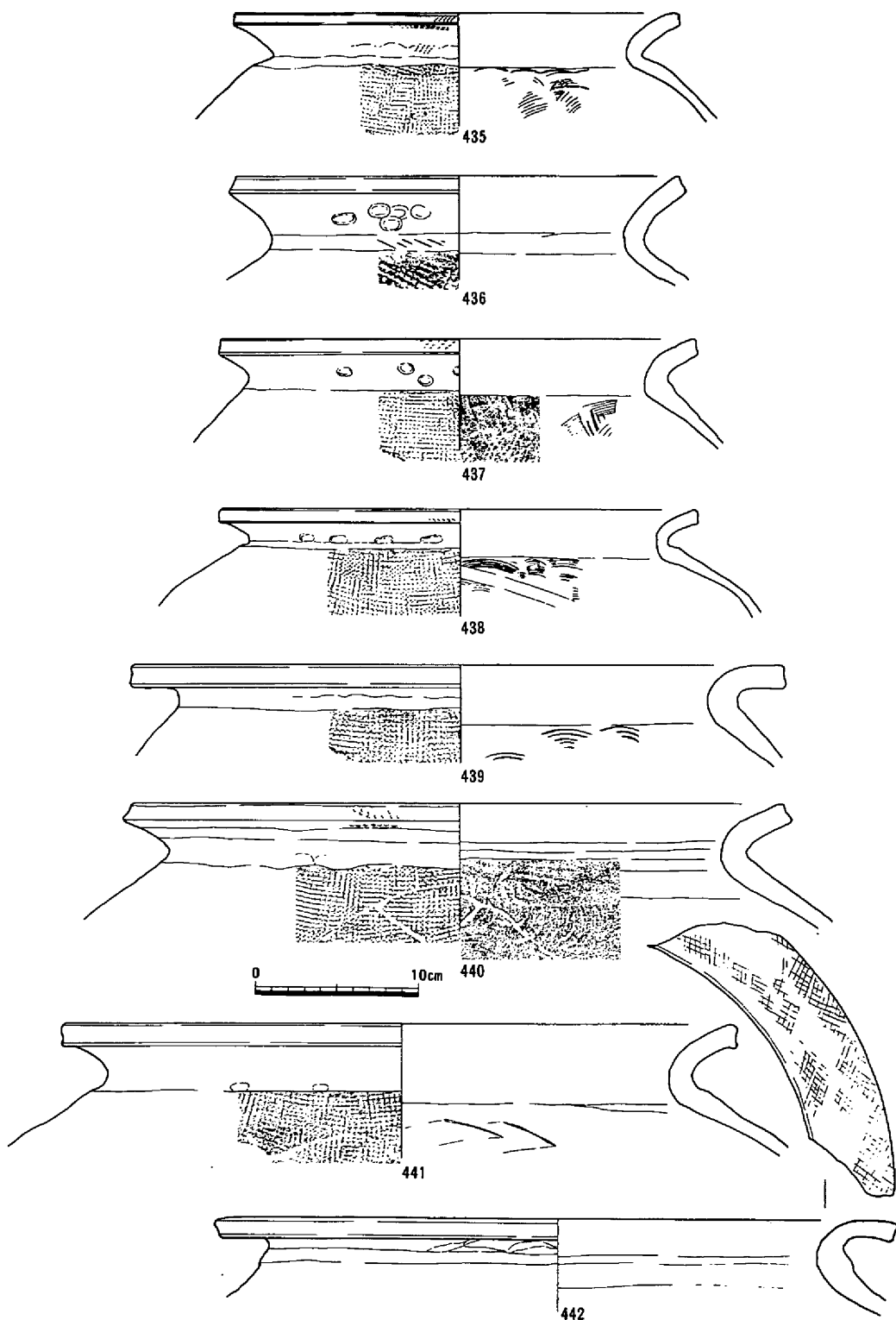
以上の出土遺物は、土器溜り 5 と比べてみると、口縁部の屈曲度の小さい甕片の占める比率は極めて小さく、明らかに時期的に後出的な様相を示している。また瓦も、甕の体部に用いられる格子目タタキがおもに用いられており、土器溜り 5 出土瓦が、斜格子タタキを主体とする点で、様相を異にしている。しかし、平行タタキ目が施された甕はもはやみられず、2号窯の窯体内出土の一括性を示す甕に、一つの画期を見出すことができ、土器溜り 5 もまた、この時期に相前後する時期であることを指摘できる。さらに、下がってこの土器溜り 6 の遺物にみられる様相は、格子目の小型化と斉一性が特徴といえる。

#### (7)土器溜り 7 (第102図～114図、図版10・35～38・78～84)

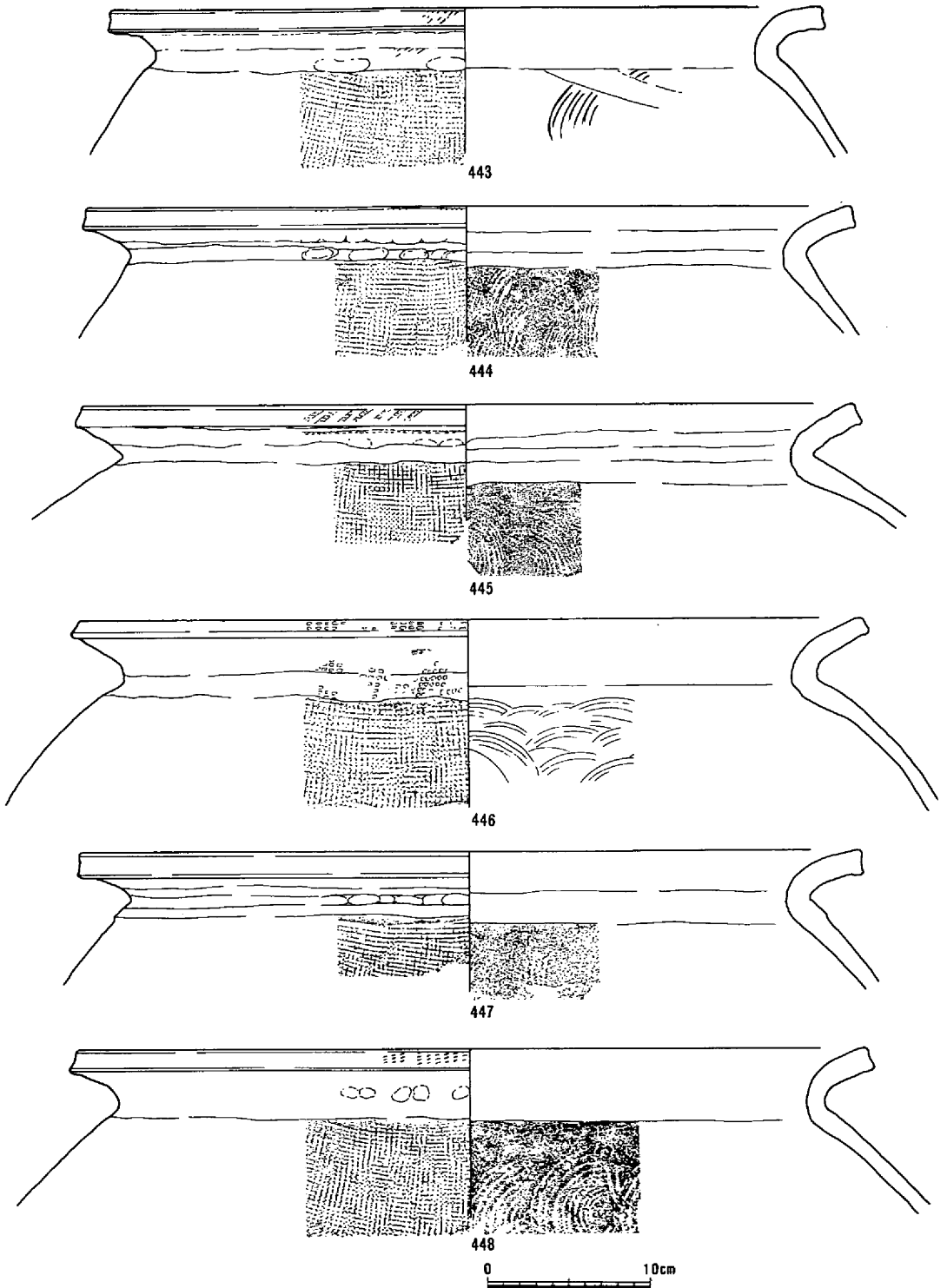
東は2号窯の下位、西は3号窯下段よりさらに10m西までの広い範囲にわたる土器溜りである。3号窯のすぐ西側の土器溜りの出土遺物も便宜上、この土器溜り出土遺物に加えて説明しておきたい。土器溜りの形成は、灰原の一部の再堆積や二次的移動によるものとみられるが、



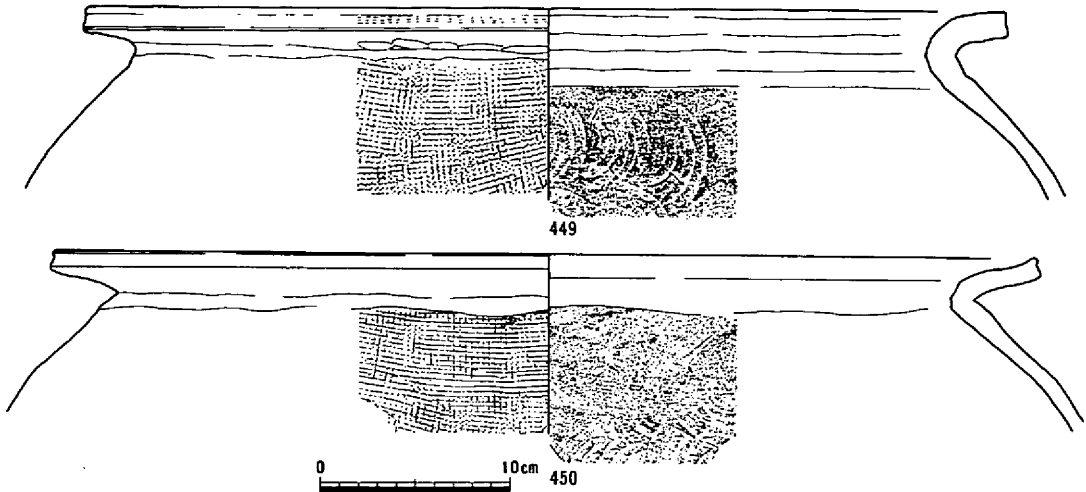
第97図 土器溜り6出土遺物(1) (1/4)



第98図 土器溜り6出土遺物(2) (1/4)



第99図 土器溜り6出土遺物(3) (1/4)



第100図 土器溜り6出土遺物(4) (1/4)

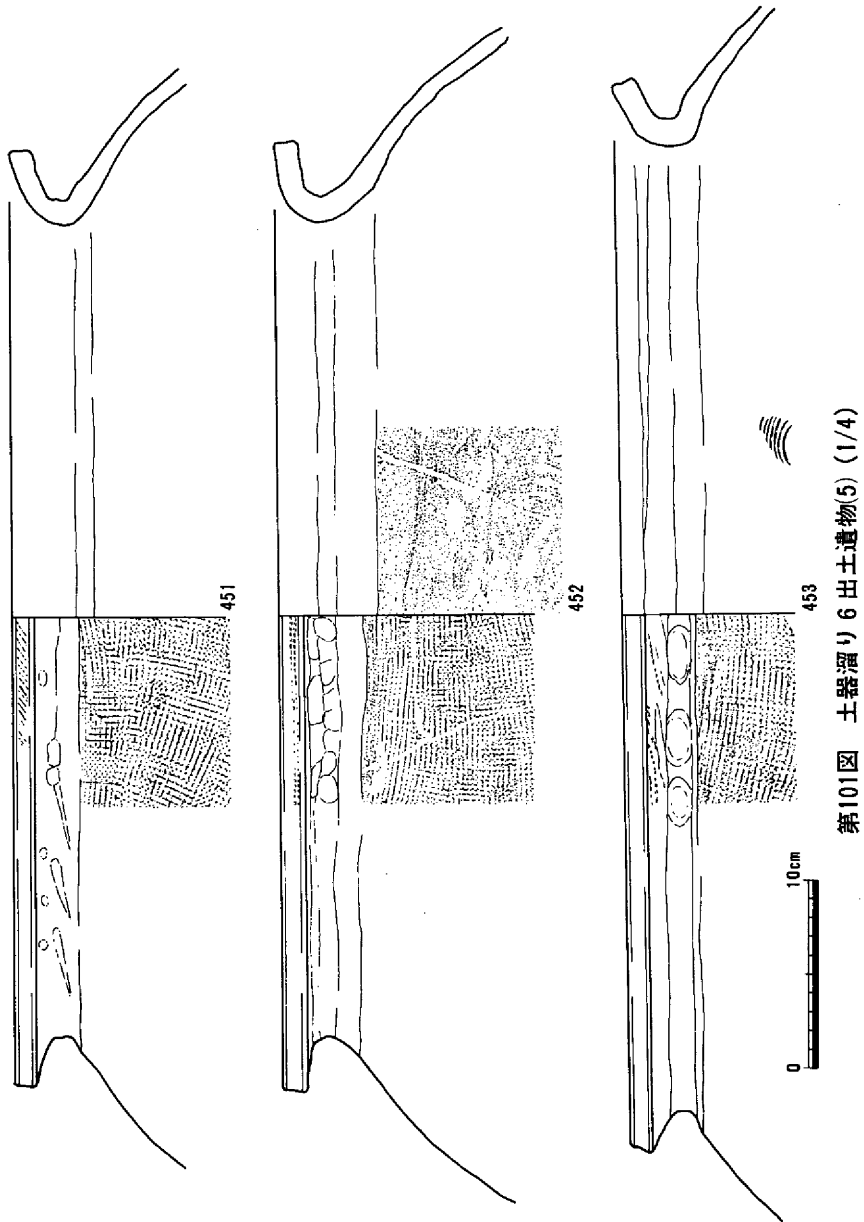
2・3号窯の占めるテラス状緩斜面からは約1.5mの落差があり、地山面は、不規則に掘削を受けた痕跡が残り、2・3号窯の前庭部が、削りとられた後に、多くの遺物が灰原の形成土や、炭・焼土・貝層などと共に埋積したものと考えられる。したがって、2・3号窯の操業が、検出した地形で行われていたとは考えられず、平面的にそれぞれの窯の下位に灰原が形成され、この土器溜りが該当するとは考えられない。しかし、少なくともこの土器溜りの上位部で焼造された亀山焼が大半を占めることは確実で、2・3号窯を含め、さらに高い場所に窯跡が存在することを示唆している。

出土遺物は、亀山焼をはじめ輸入青磁碗や、土師質土器・宋銭などがある。順を追って説明を加えておこう。

#### ① 亀山焼 (454～530)

##### 瓦 (454～492)

軒丸瓦・軒平瓦をはじめ、丸瓦・平瓦が多数出土している。454は左まわりの三巴文をモチーフとしている。巴頭は丸味をもたず鋭く終る。尾部は細長く延びて外縁のない周縁に達している。瓦当および瓦当裏はナデ調整で仕上げしており、全体的に明るい橙褐色を呈し、土師質の色調を示す。455は、単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、蓮弁の間には、のぞき花卉が配される。中房には、1+4+8の蓮子がみられる。外縁と蓮弁との間には、わずかに界線の一部が観察されるが全周しない。456は単弁十一葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当径に比べるとやや大き目の中房には、1+6+7(?)の蓮子が配されている。細い外縁との間には細くて鋭い界線がめぐる。いずれも、やや軟質の焼成を示す須恵質である。457～461は軒平瓦である。457は鋭い斜線文を交叉させた文様で、周縁は細い。青灰色を呈し、焼成良好である。458・459はいずれも、瓦当



に右まわり三巴文を配し、周縁は鋭い工具で削りとられている。灰黒色を呈する。460は、蓮華文と車輪文を交互に配したもので、やはり周縁部は明瞭でない。461は頸部を残すもので文様は不明瞭である。462は玉縁付の丸瓦で、長目の玉縁の凸面にかけて格子目タタキが施され、凹面には布目痕が残る。463は、薄くて短い玉縁が付けられた丸瓦で、やや長方形を呈する大き目の格子目タタキが凸面に施される。凹面には、布目痕が残る。灰黄褐色を呈し、やや軟質の焼成を示す。464も凸面に玉縁に達する格子目タタキが施された丸瓦である。本遺跡から出土して

いる丸瓦は、その大半が本瓦葺のもので、行基葺丸瓦はほとんどみられない。465は、やや粗大な斜格子タタキが、凸面に施された丸瓦で、凹面にはよじれた布目痕が残される。466～469は、凸面に格子目タタキ、凹面に布目痕が残された丸瓦で、平瓦と同様格子目タタキは側縁に対して斜行する。これらは、平瓦に比べるとやや厚さが薄いものが多い。470～474は粗大な斜格子タタキが凸面に施された平瓦で、凹面にはいずれも布目痕が残される。475はやや正格子に近い粗大な格子目タタキが施される。476は、やや小さ目な斜格子タタキが凸面に施され478・479などと同様である。477は凸面に平行タタキが施されたもので、中央部で綾杉状に分かれる。側縁に対して斜行する平行タタキで480も同様である。481～492は、小さ目の格子目タタキが施された平瓦である。484・486などのようにタタキ板の輪郭が残るものもある。485の凹面には布目痕の上から指頭によるとみられる、×印風の記号がナデで描かれているのが注意される。これらの平瓦は総じて須恵質のものが多いが、灰褐色ないしは橙褐色を呈する軟質のものもみられる。

#### 鉢 (493～495)

493・494は捏鉢、495は擂鉢である。493はほぼ全形を知ることができるが、やや焼けひずんでいる。口縁部はあまり肥厚せず、体部も器壁は薄い。体部の内外面には、平行条線の痕跡を残す調整のあと、ナデによって仕上げられている。体部下端は横方向にヘラケズリが施され、外底部には、下駄印が認められる。色調は暗灰青色を呈し、焼成は良好である。

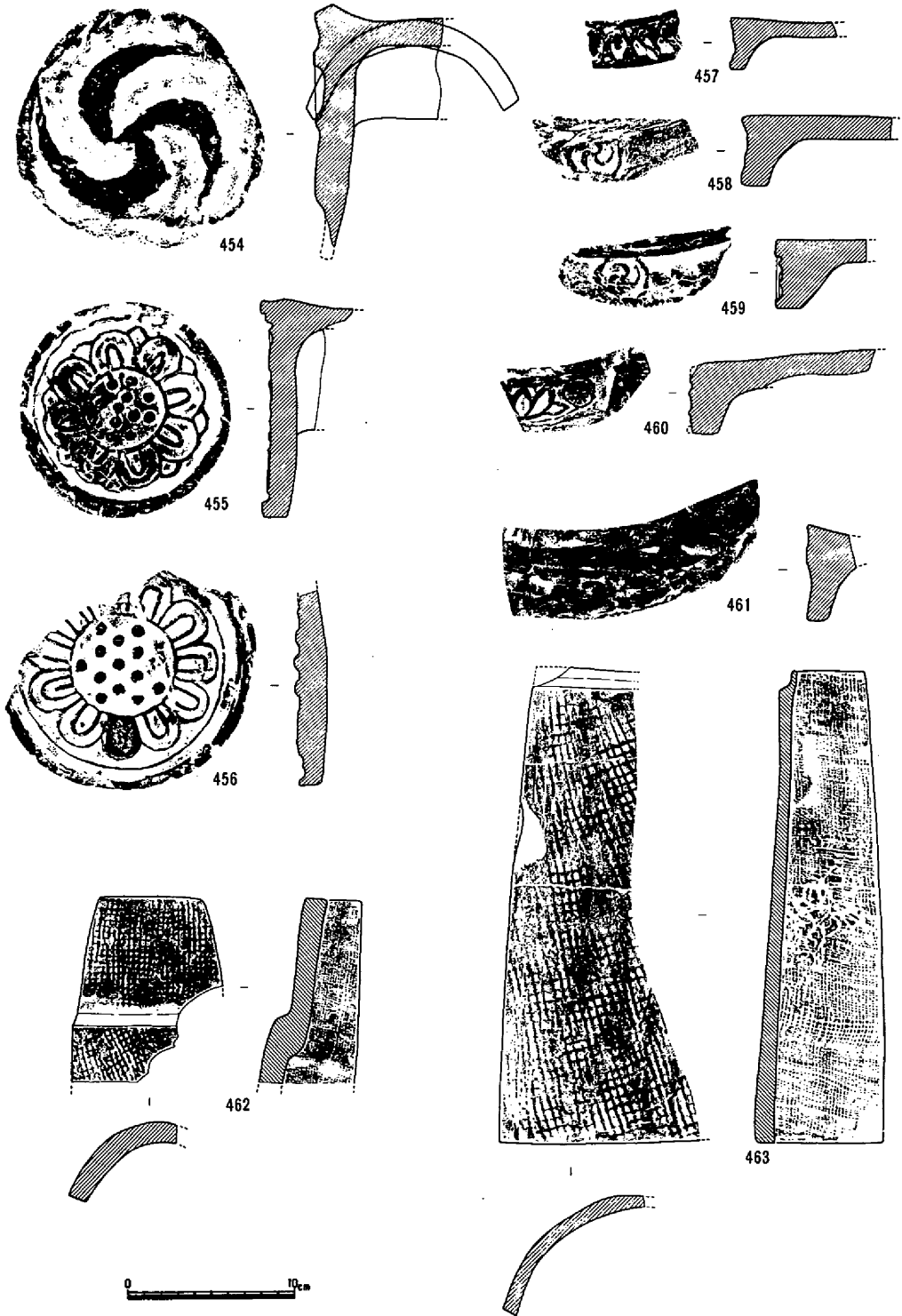
#### 甕 (496～533)

口径17～60cmを測る甕が出土している。概ね、口縁部の屈曲が弱く逆「ハ」字形に上方に開くものと、屈曲度が大きく短いものとは大別できる。前者の甕は、口径35cm未満のものの中では大半を占め、後者は502が該当する程度である。前者は、口径が増すにつれ、口縁部の長さも比例して長くなる傾向がある。口径40cmを越えると後者の、「く」字形を呈する口縁部の屈曲の度合いが強いものが多い。体部外面にはいずれも格子目タタキが施され、内面には同心円タタキが認められるものが多い。格子目タタキは、494が小さ目な方格であるのに対して、口縁部の屈曲度が弱い甕では、やや不揃いで大き目な傾向がある。同心円タタキはそのまま残されるものもあるが、503・510・512のように荒いハケ目で消されたり、506・517・520のようにナデ調整で消されるものも多い。大型品では、529のように細目の同心円タタキが残されており、口縁部の屈曲が強いものの中に占める比率が高い。なお、521の口縁部内面にはヘラ状工具による「×」印のヘラ記号（カマジルシ）が描かれている。

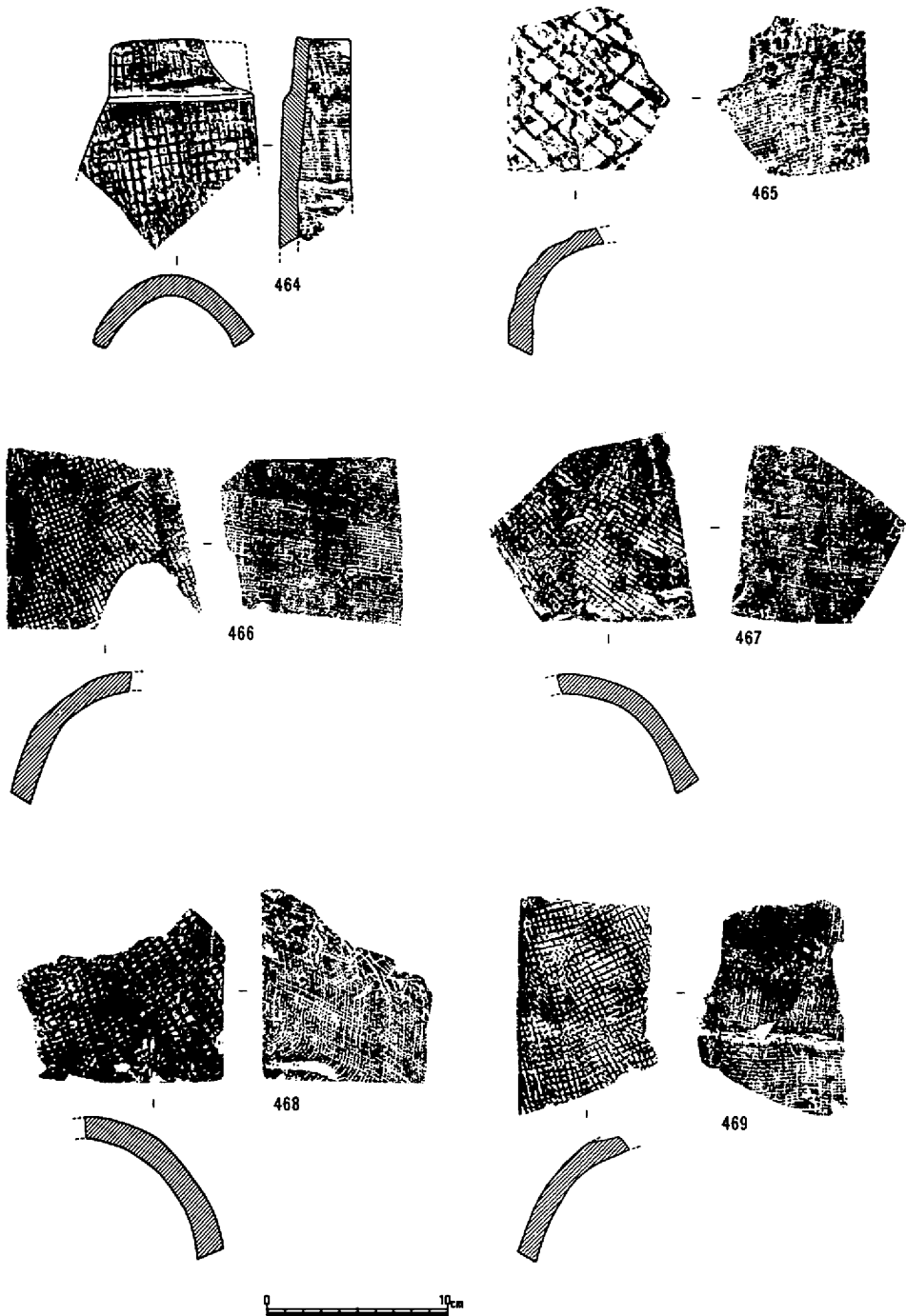
#### ②陶磁器 (534・535)

2点の青磁碗が出土している。534には見こみに片彫り風の花文が描かれている。釉調は、淡青灰色を呈する。畳付から外底部にかけては露胎である。535は、ややくすんだ灰緑色の釉調を示し、鈍い光沢を放つ。見こみは無文である。いずれも龍泉窯系の青磁である。

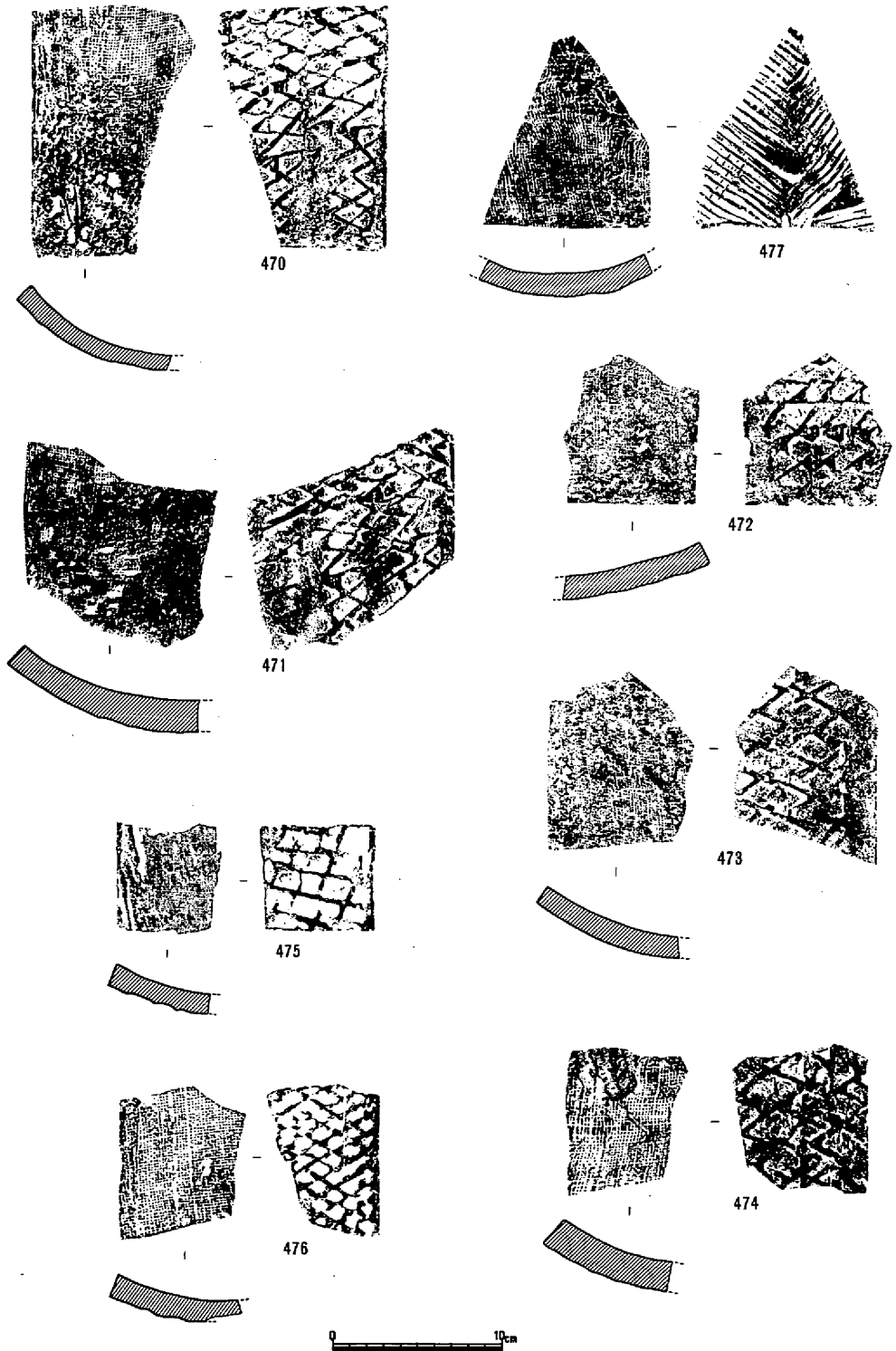




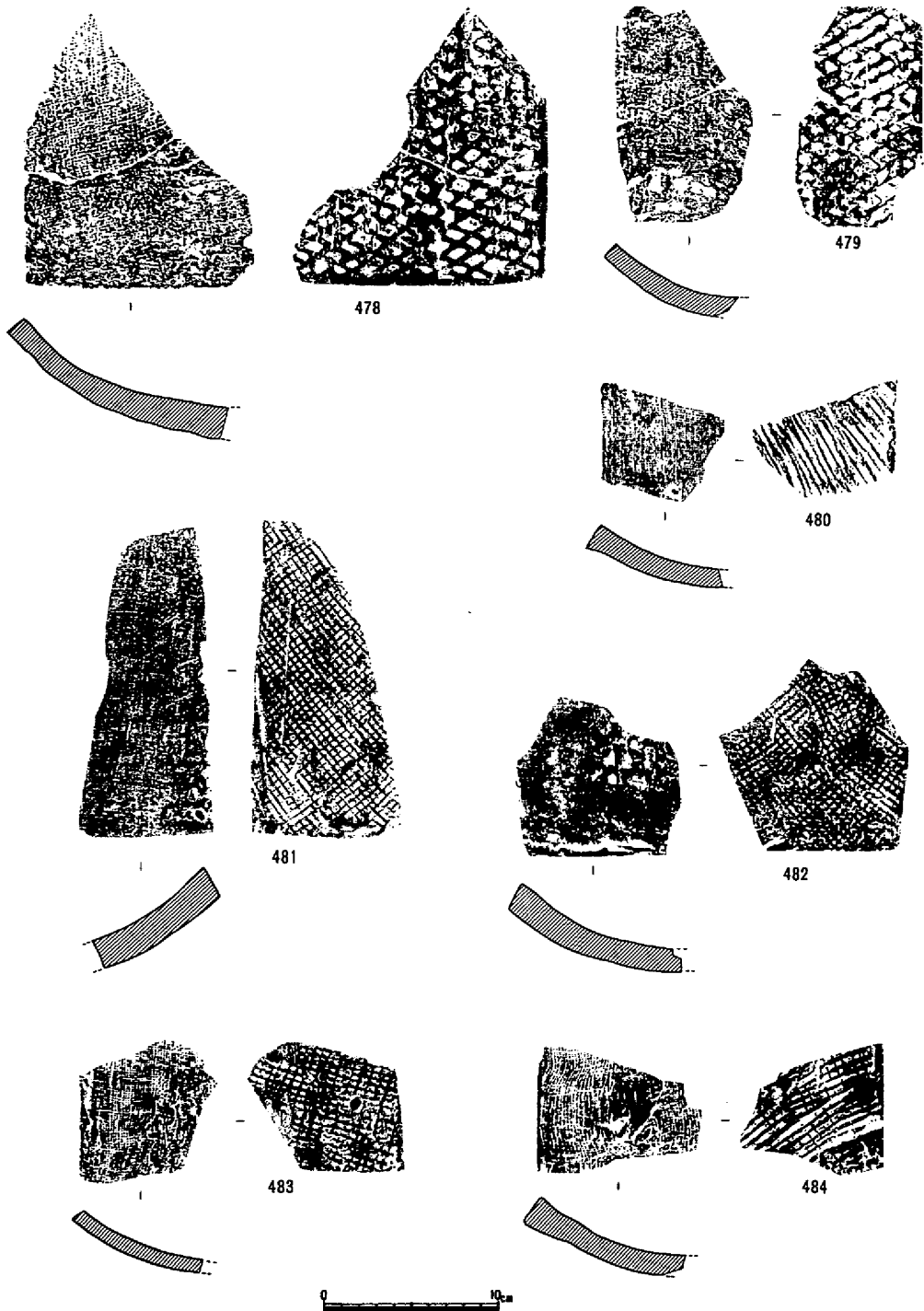
第102図 土器溜り7出土遺物(1) (1/4)



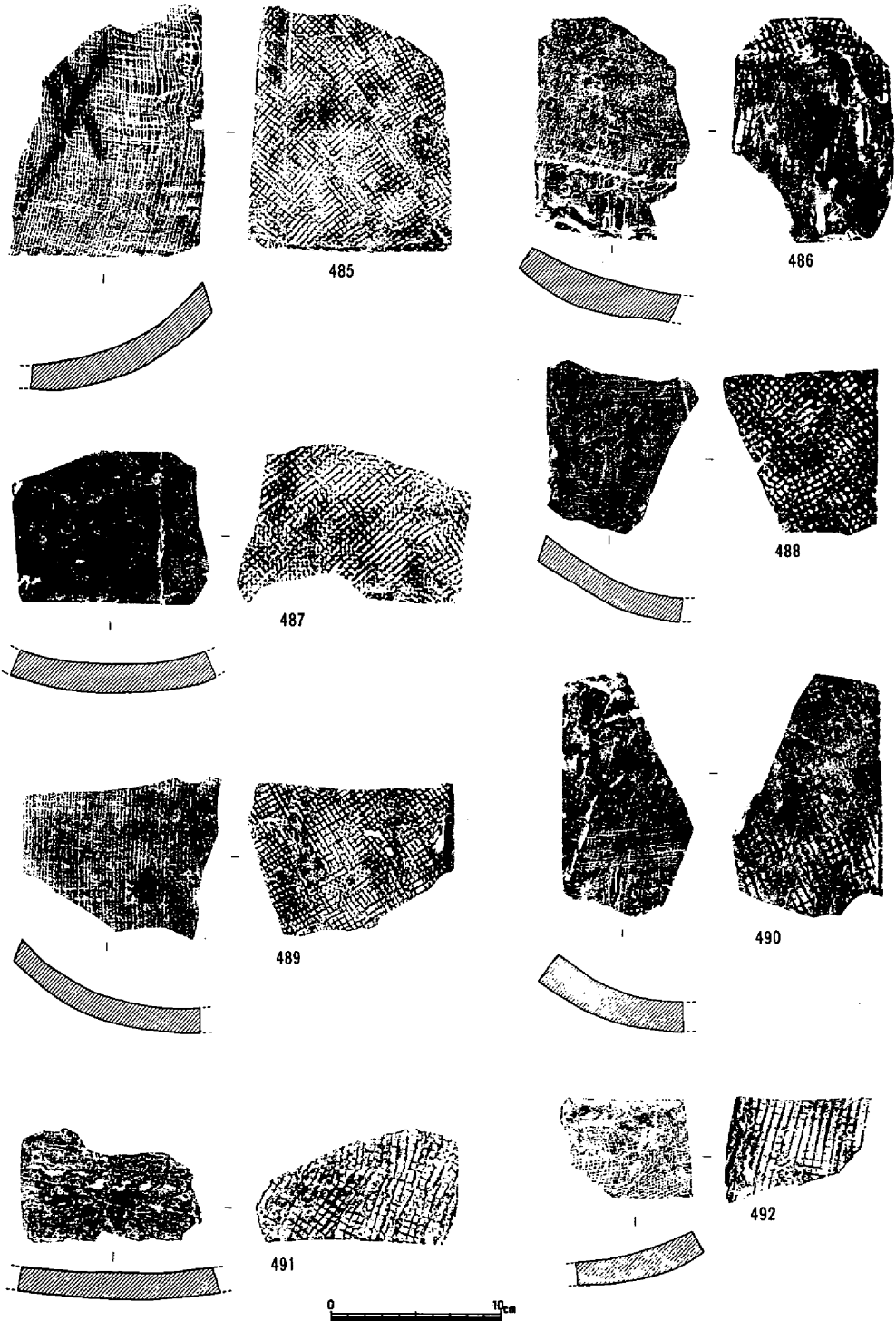
第103図 土器溜り7出土遺物(2) (1/4)



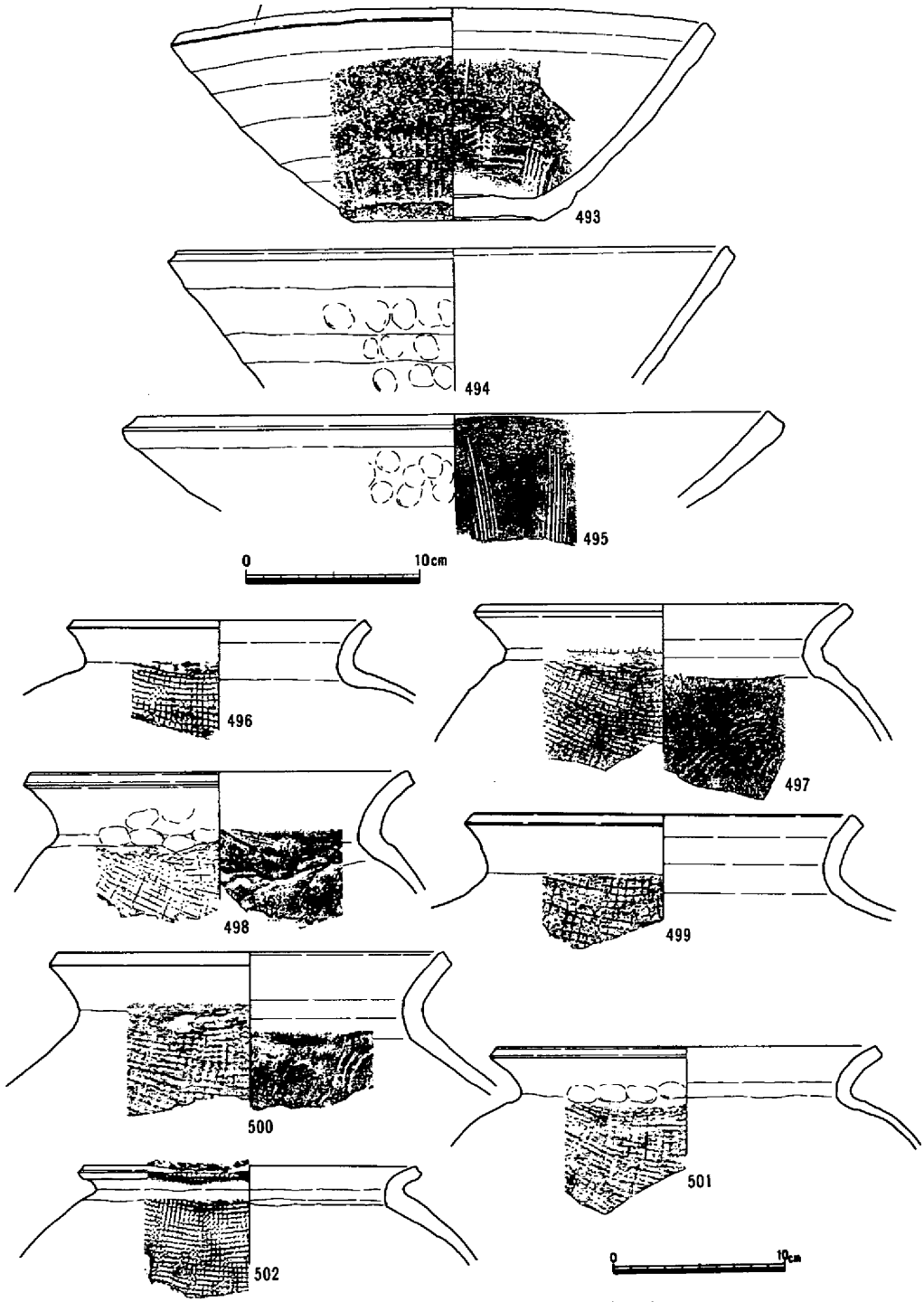
第104図 土器溜り7出土遺物(3) (1/4)



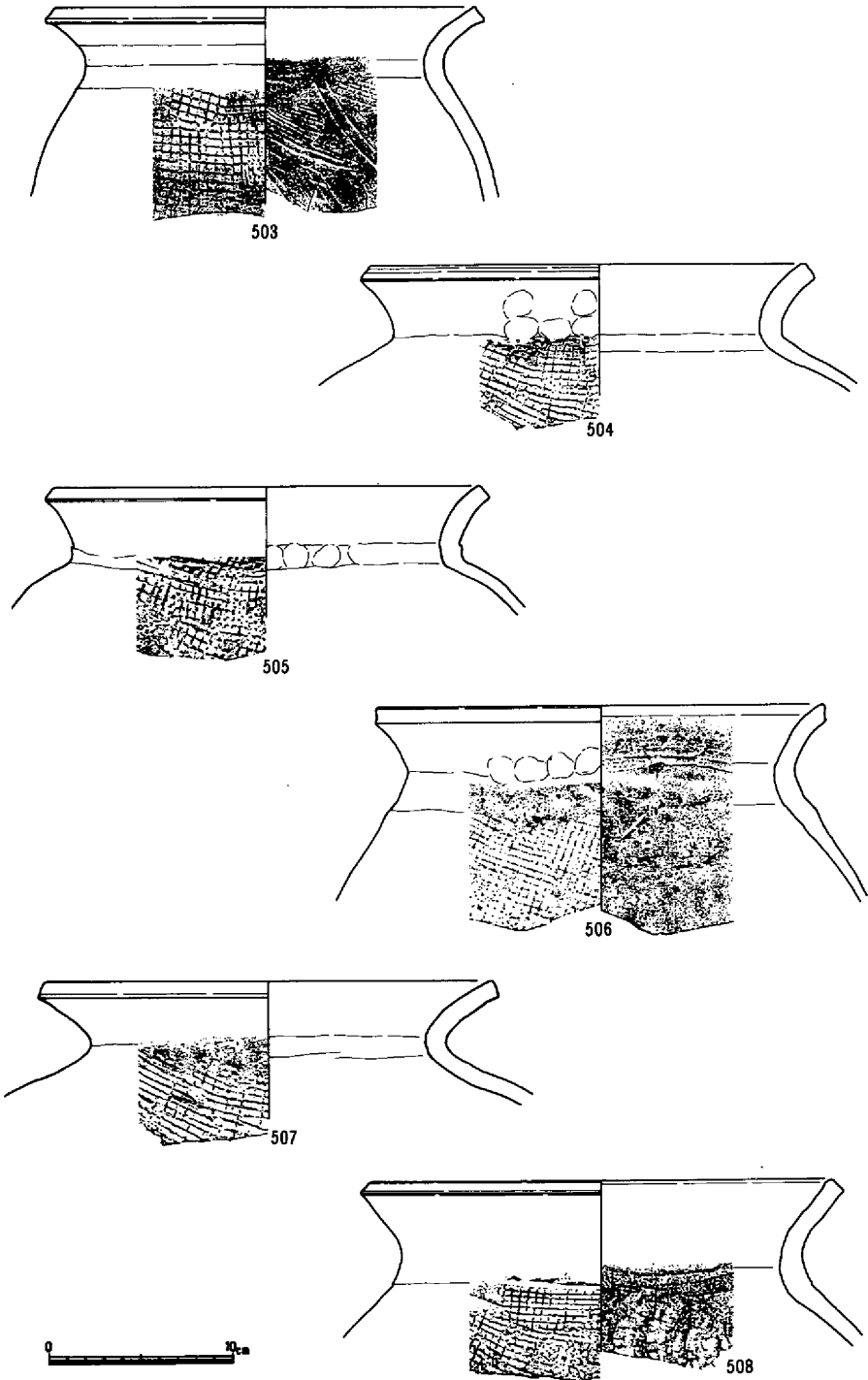
第105図 土器溜り7出土遺物(4) (1/4)



第106図 土器溜り7出土遺物(5) (1/4)



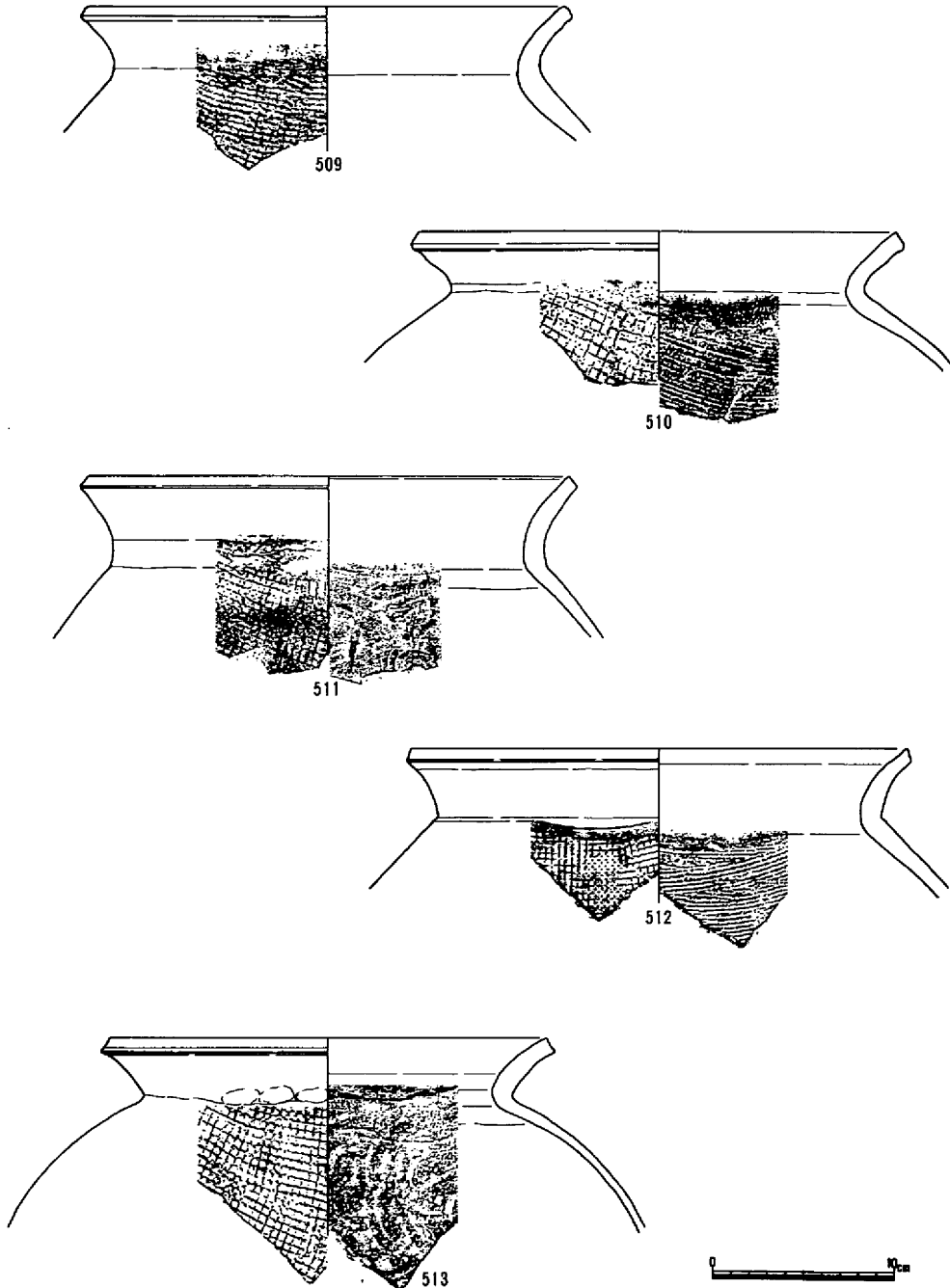
第107図 土器溜り7出土遺物(6) (1/4)



第108図 土器溜り7出土遺物(7) (1/4)

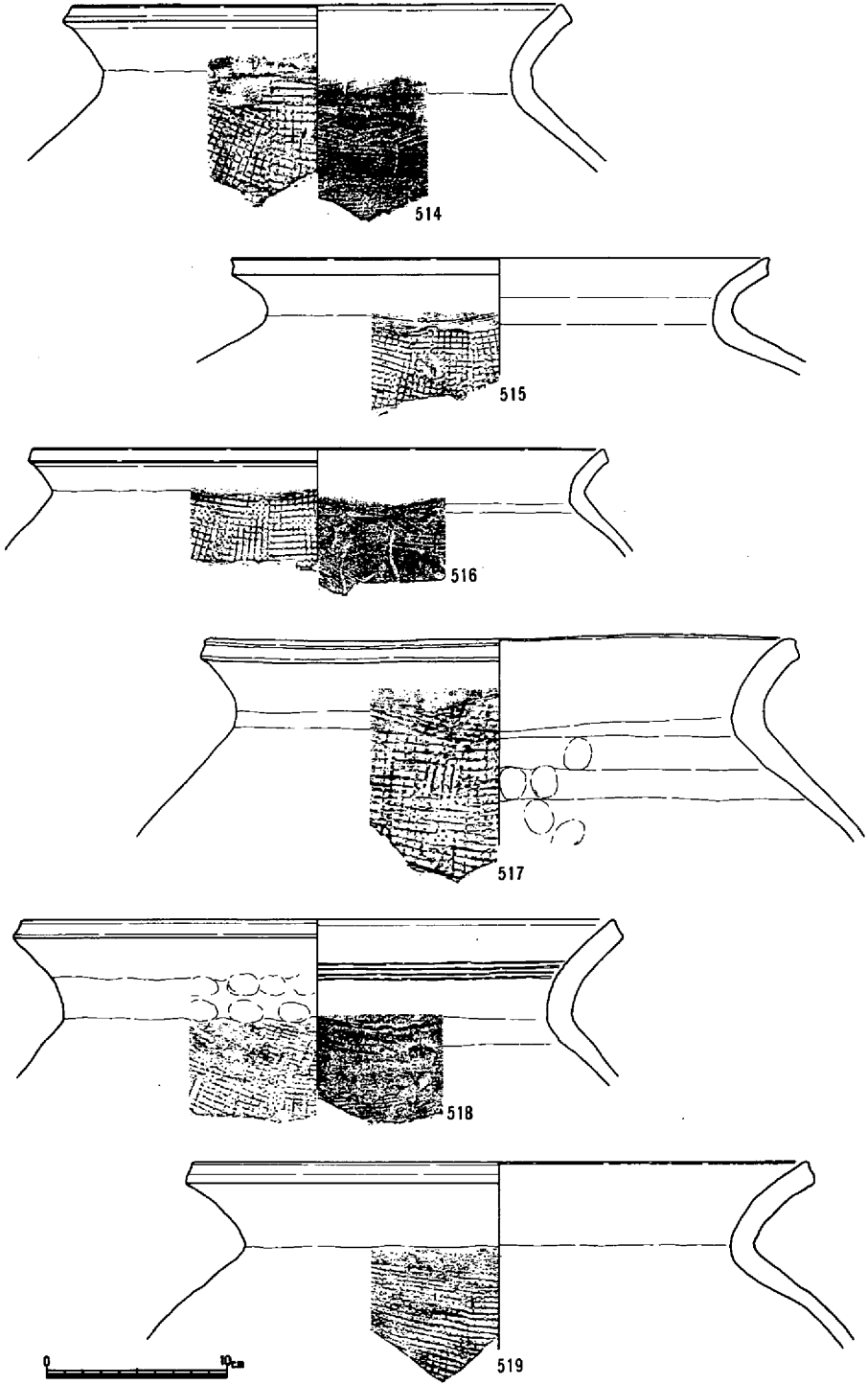
③土師質土器 (536~539)

いずれも椀の高台部と、ほぼ全形を復する計5点が出土している。高台径は6~6.5cmを測り、ほぼ同時性を示している。539は口径14cm、器高4.3cm、高台径6cmを測る。これらは早島

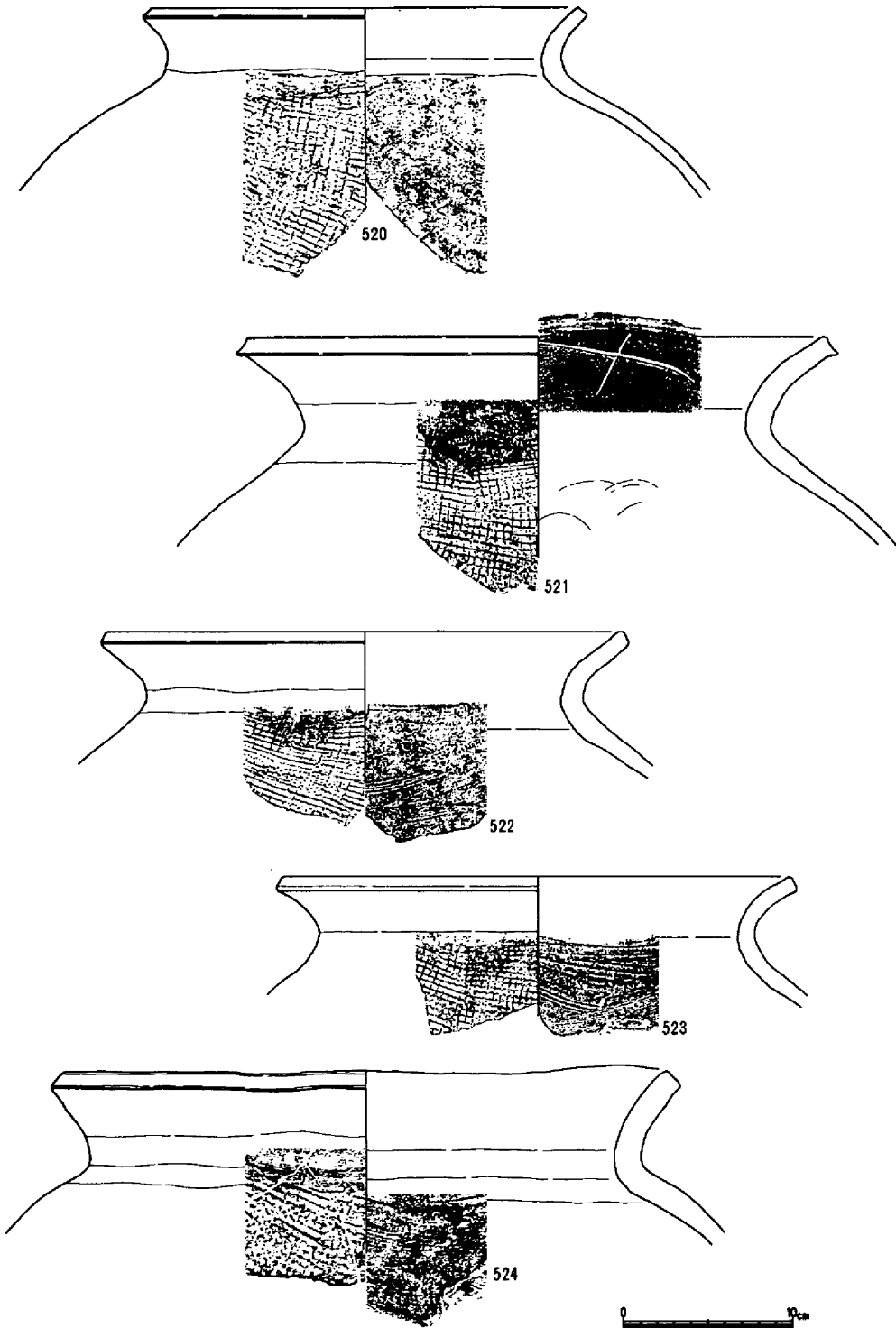


第109図 土器溜り7出土遺物(8) (1/4)

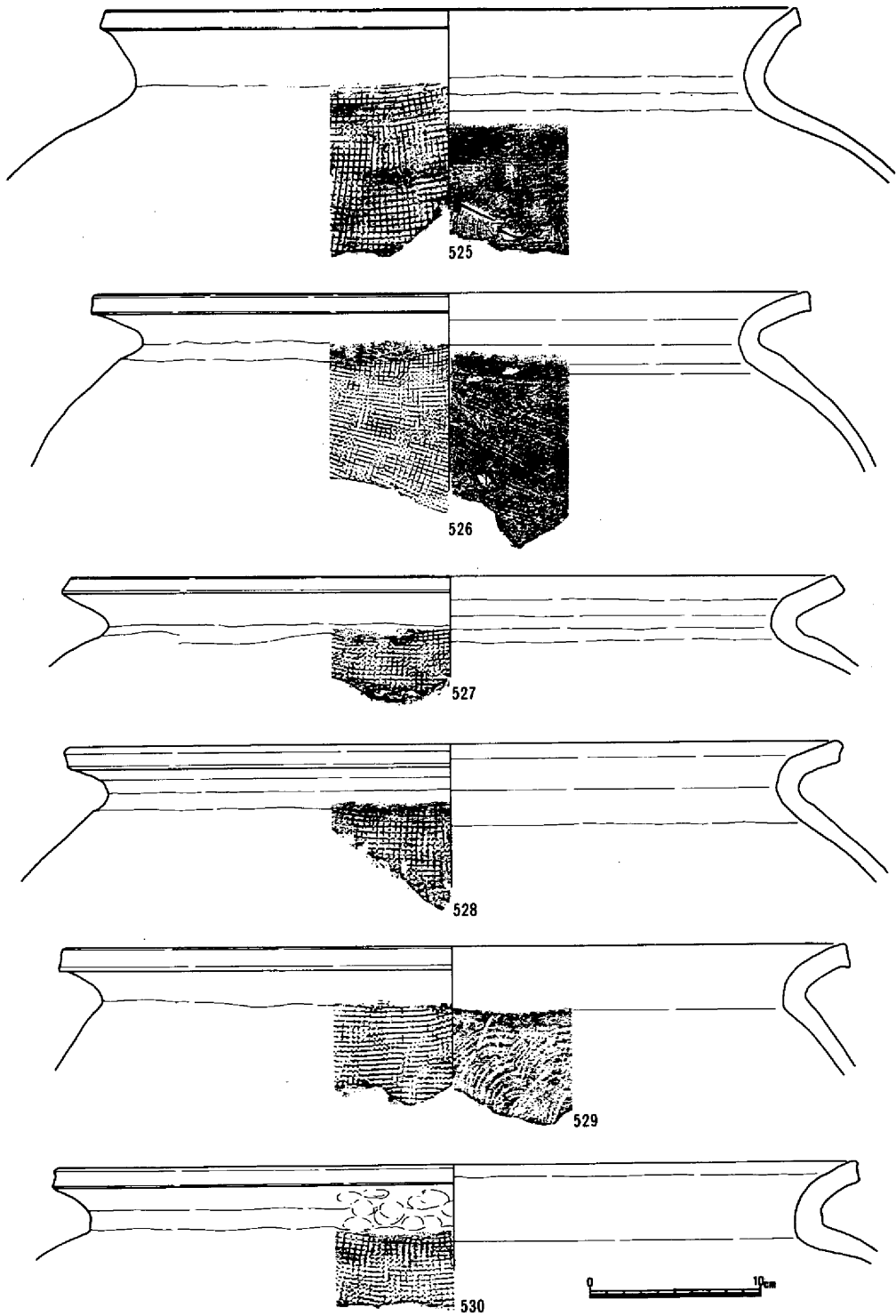




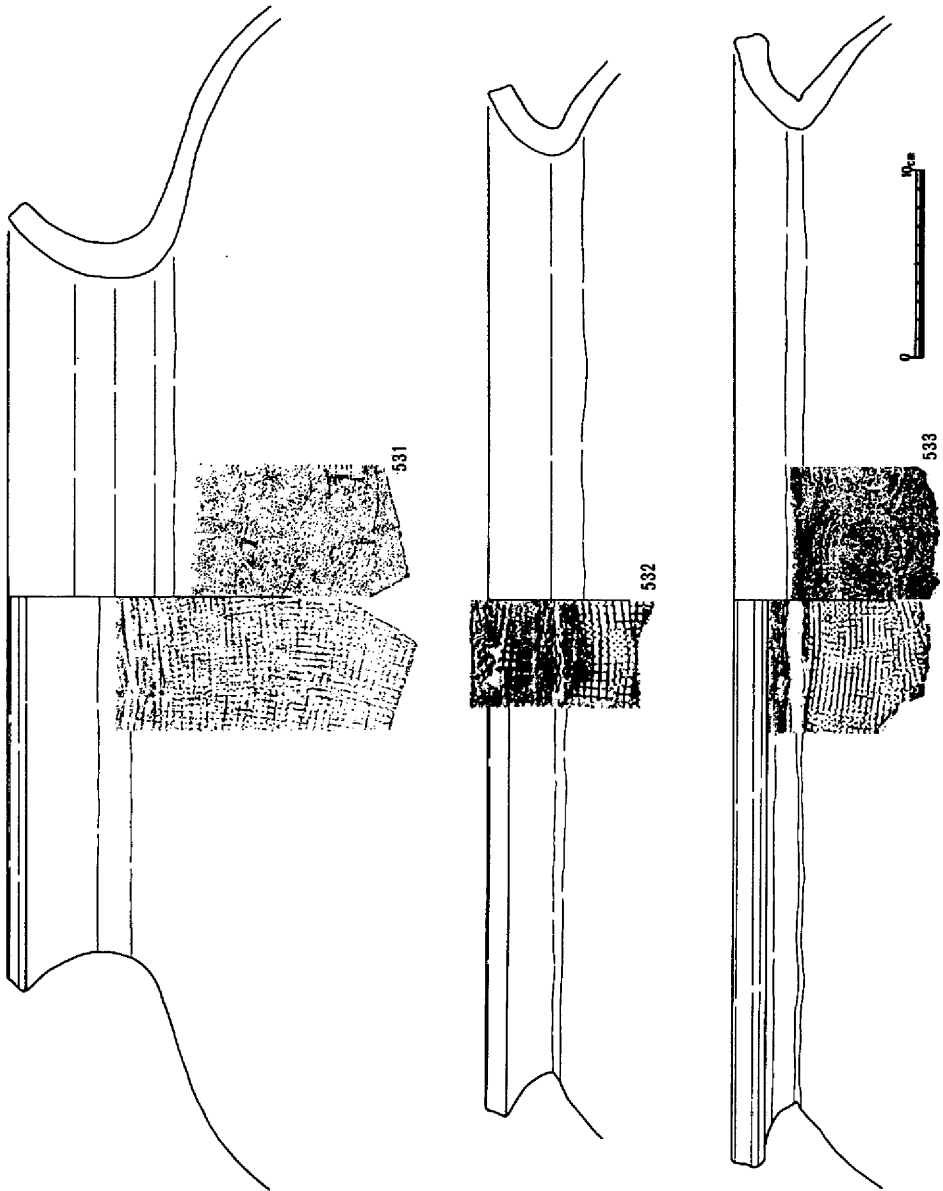
第110図 土器溜り7出土遺物(9) (1/4)



第111図 土器溜り7出土遺物(10) (1/4)



第112図 土器溜り7出土遺物(1) (1/4)



第113図 土器溜り7出土遺物(2) (1/4)

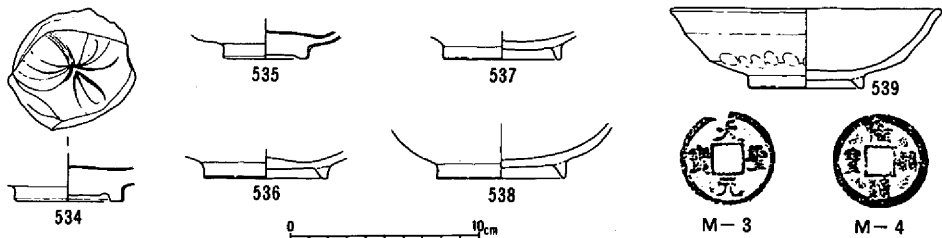
式碗で、概ね13世紀初頭から前半に比定される時期を示している。

④銭貨 (M-3・M-4)

M-3は天聖元宝で、初鑄年はA.D1023年、M-4は元祐通宝で、初鑄年はA.D1086年である。  
いずれも、宋銭である。

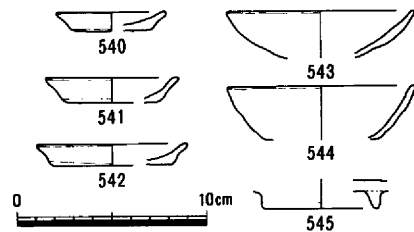
(8)土器溜り8 (第115図・163図)

B-8の南約6mで検出された、極めて小規模な土器溜りである。掘立柱建物の南東隅、埋



第114図 土器溜り7 出土遺物(13) (1/4・1/2)

甕1に近接して検出され、地山面が浅く窪んだ部分に、亀山焼片と540～545の土師質土器が出土している。540～542は皿で、外底部はいずれもヘラ切りである。543・544は口径9.6cm前後を測る椀で、底部は残存していないが、おそらく低平な高台が貼り付けられていたものと推定される。後述の土



第115図 土器溜り8 出土遺物 (1/4)

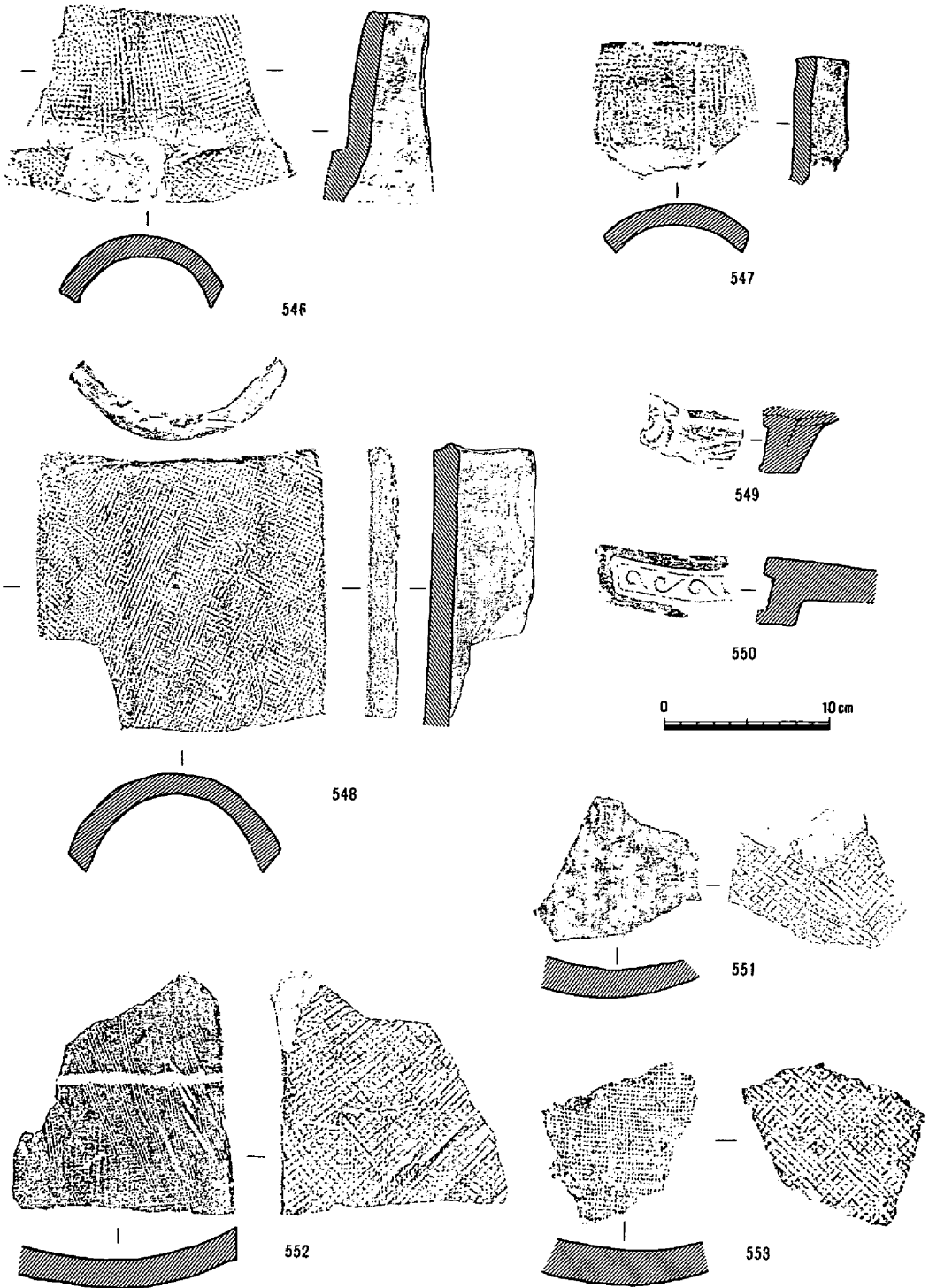
器溜り9より類品が出土している。545は椀の高台部片であるが、543・544に貼り付けられていたと推定するものより大きく、径6cmを測る。これらと共伴する亀山焼は播鉢・甕細片が大半で、後者には平行タタキのものは全く含まれず、小さな格子目タタキが施されるものが大半を占める。周囲の柱穴群の存在などから、当時の日常生活に用いられた什器と考えられる。

(9)土器溜り9 (第116～133・163図、図版39・40、84～91)

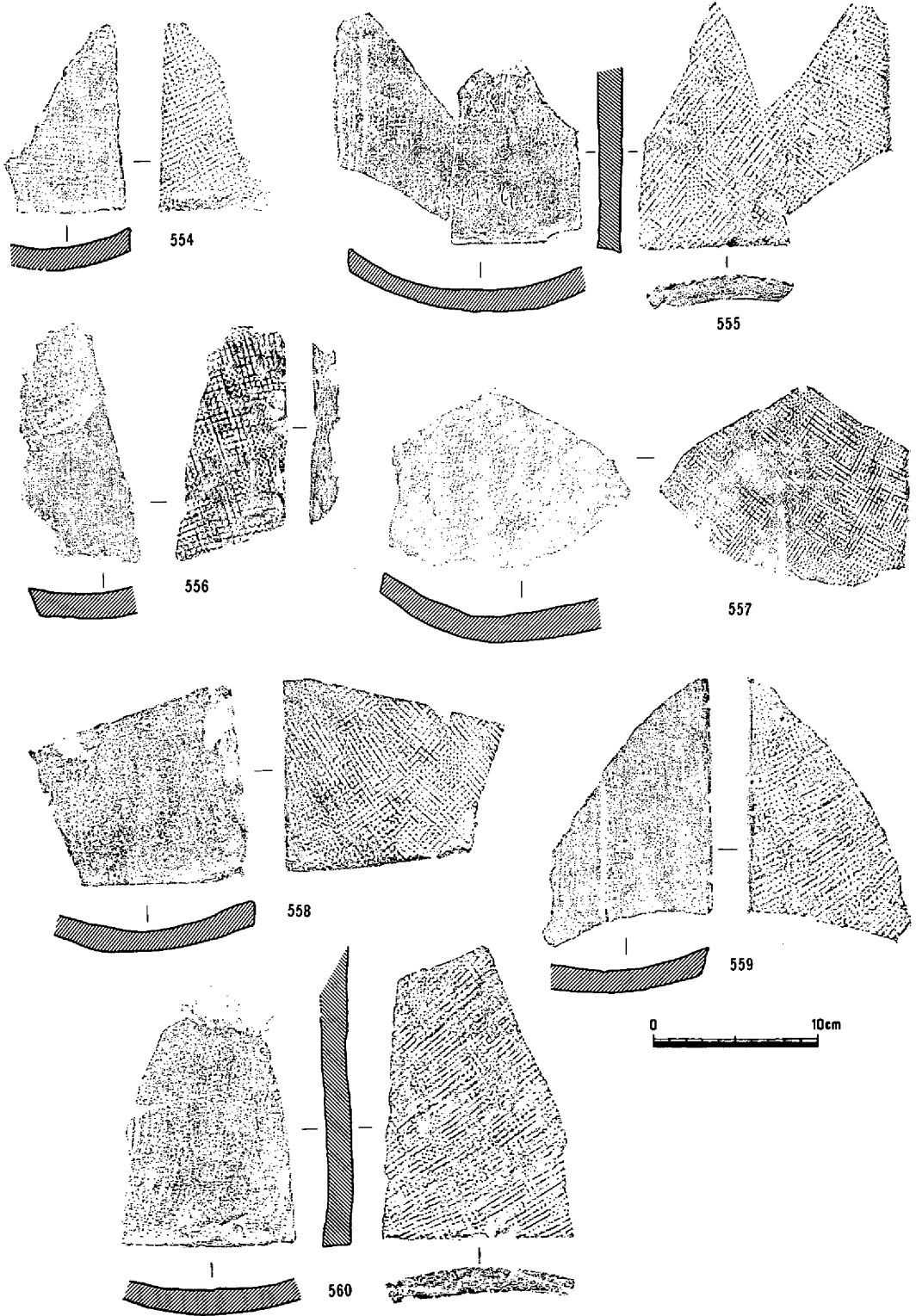
B-7からB-8にかけての斜面に広がる、幅約5.5m×約19mの帯状の土器溜りである。下端は埋甕2や掘立柱建物と重複する。上位部における窯あるいは、集落址の存在を示唆する遺構で、亀山焼の中でも使用痕のみられるものや土師質土器・備前焼など日常生活に密着した土器類の出土が特筆される。また、これらの土器類と共に人頭大あるいは小児頭大の角礫が多量に出土しており、絵巻などに描かれた、当時の小規模な家屋の屋根の上に置かれた石の可能性もある。これは遺跡地が高台にあることも一つの理由である。他に、土器溜り10～12にも同様な角礫が多く、小規模な石垣や屋外炉の構築などの使用目的も考えられる。石は花崗岩質のものが多い。

出土遺物は、多量の亀山焼をはじめ、土師質土器・備前焼・銭貨が出土している。窯壁片や窯の存在を間近に感じさせる炭・焼土の出土は少なく、亀山焼生産の場所に近いというよりむしろ、生活の場の至近性を示唆する遺物の出土状況を示している。したがって、瓦の出土量は、比較的少ないことが注目される。

①亀山焼 (546～652)



第116図 土器溜り9出土遺物(1) (1/4)



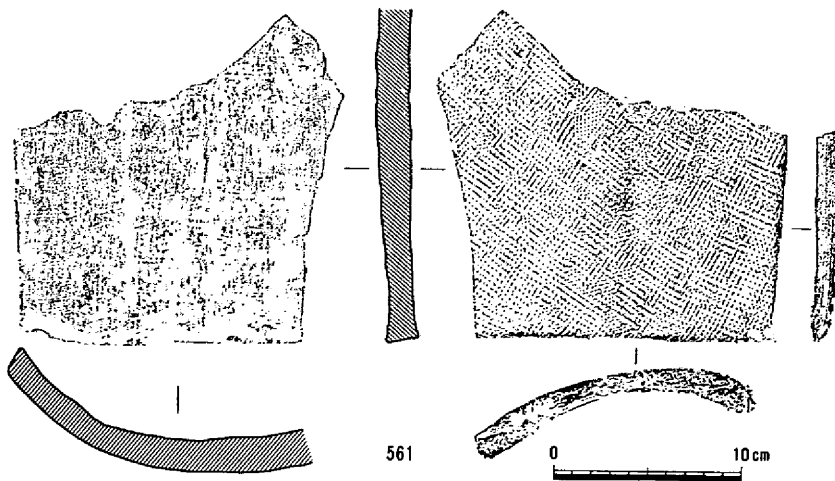
第117図 土器溜り9出土遺物(2) (1/4)

瓦 (546~560)

546・547は玉縁付の丸瓦である。凸面には小さな格子目タタキが施され、玉縁部分に達している。凹面には、布目痕が残る。548は行基葺の可能性もある丸瓦で、凸面には側縁と斜行する格子目タタキが施され、凹面には布目痕が残る。これらの丸瓦はいずれも白灰色~白黄灰色を呈し、焼成良好である。549は三巴文を瓦当に配した軒平瓦で、顎部の小片である。平瓦の先端に粘土を厚く盛って瓦当とした簡単な接合が看取される。550は均整唐草文軒平瓦で、範の押しつけは比較的深目である。左半分の残存部では細くて巻きの強い唐草文が三転し、文様の外側には界線がめぐる。周縁はやや中広である。暗灰色を呈し須恵質焼成である。平瓦部分の凸面は小さな格子目タタキが施される。551~561はすべて小さな格子目タタキが凸面に施された平瓦で、側縁に対して斜行してタタキ板が移動する。基本的に一枚づくりである。凹面には布目痕が残されるが、552のようにカキ目風の、条痕状の調整痕が認められるものもある。また、561には布目痕の上に浅いへら描きで、「×」(5×10cm)が記されている。土器に描かれるへら記号と同じモチーフである点に注意される。

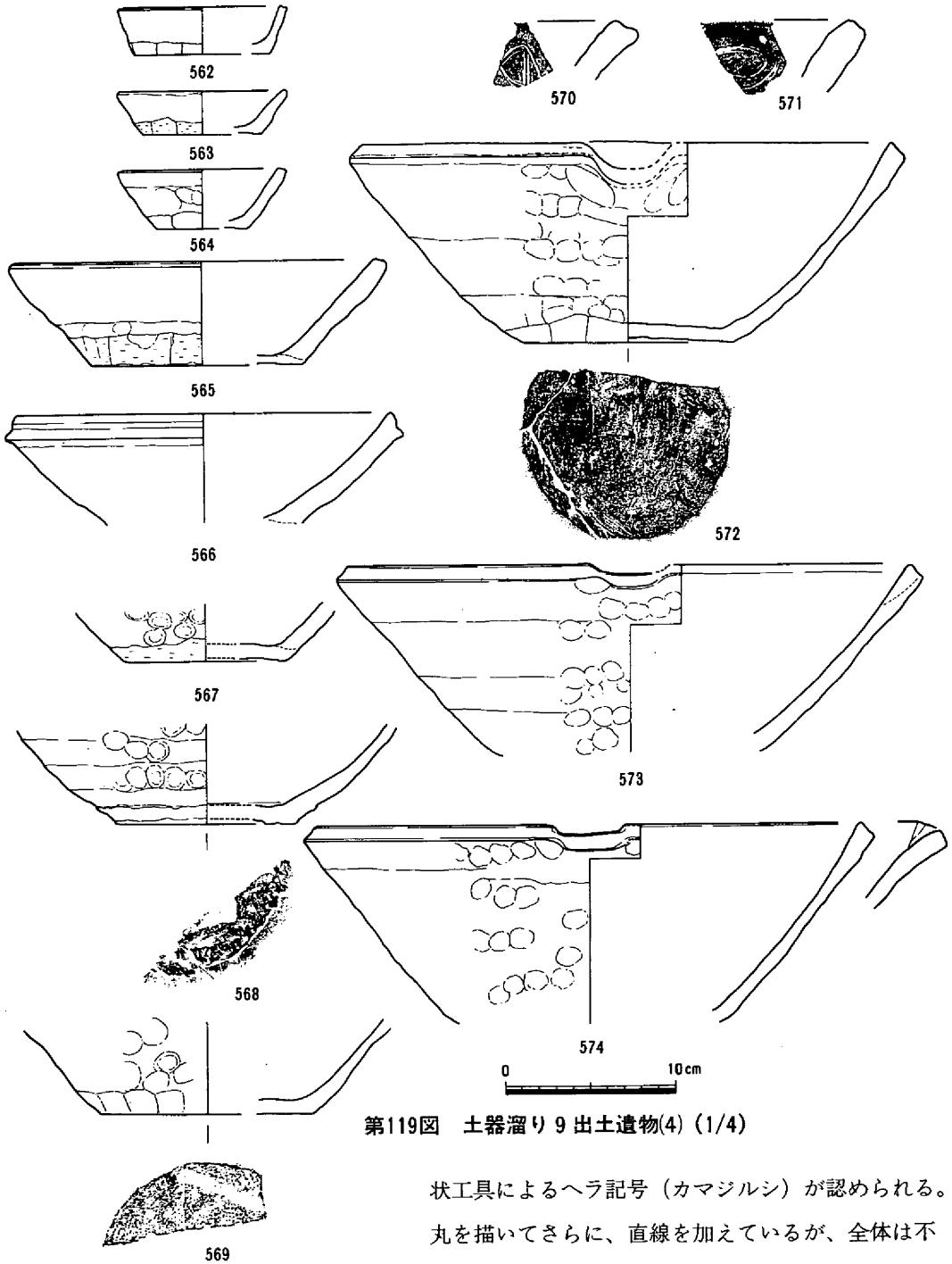
鉢 (562~605)

捏鉢 (562~574) と播鉢 (575~605) に大別される。前者には、562~564のように小鉢ともいべき小型の捏鉢があり、体部下位の横位のへらケズリなど、通常捏鉢・播鉢と同じ手法がみられる点が特筆される。565・566はやや大型化したもので、566は口縁端面が上下方に拡張する特徴があり、備前焼などの影響も考えられる。568~572の外底部には下駄印が看取される。568はやや揚げ底で、体部下位が丸味を示す点で、他の器形とやや異なる。570・571には、へら



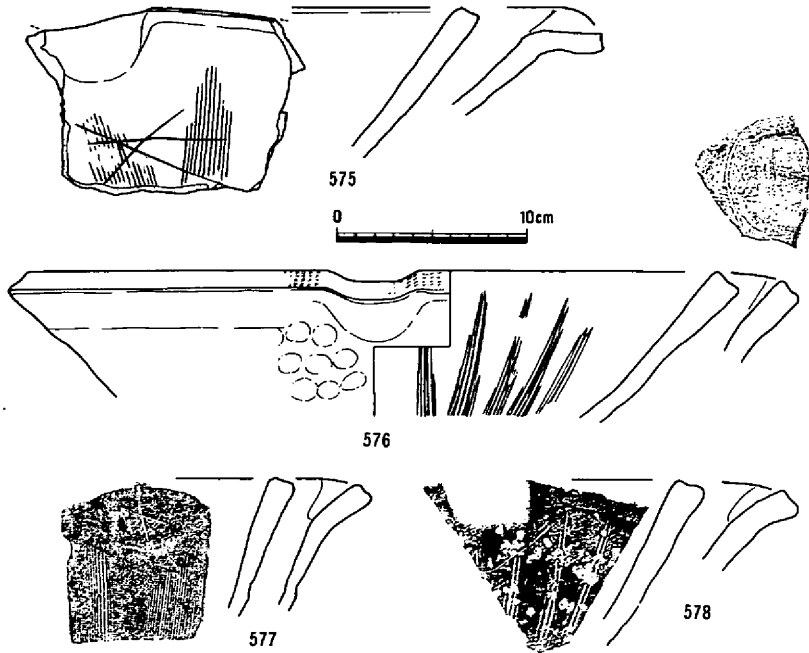
第118図 土器溜り9出土遺物(3) (1/4)





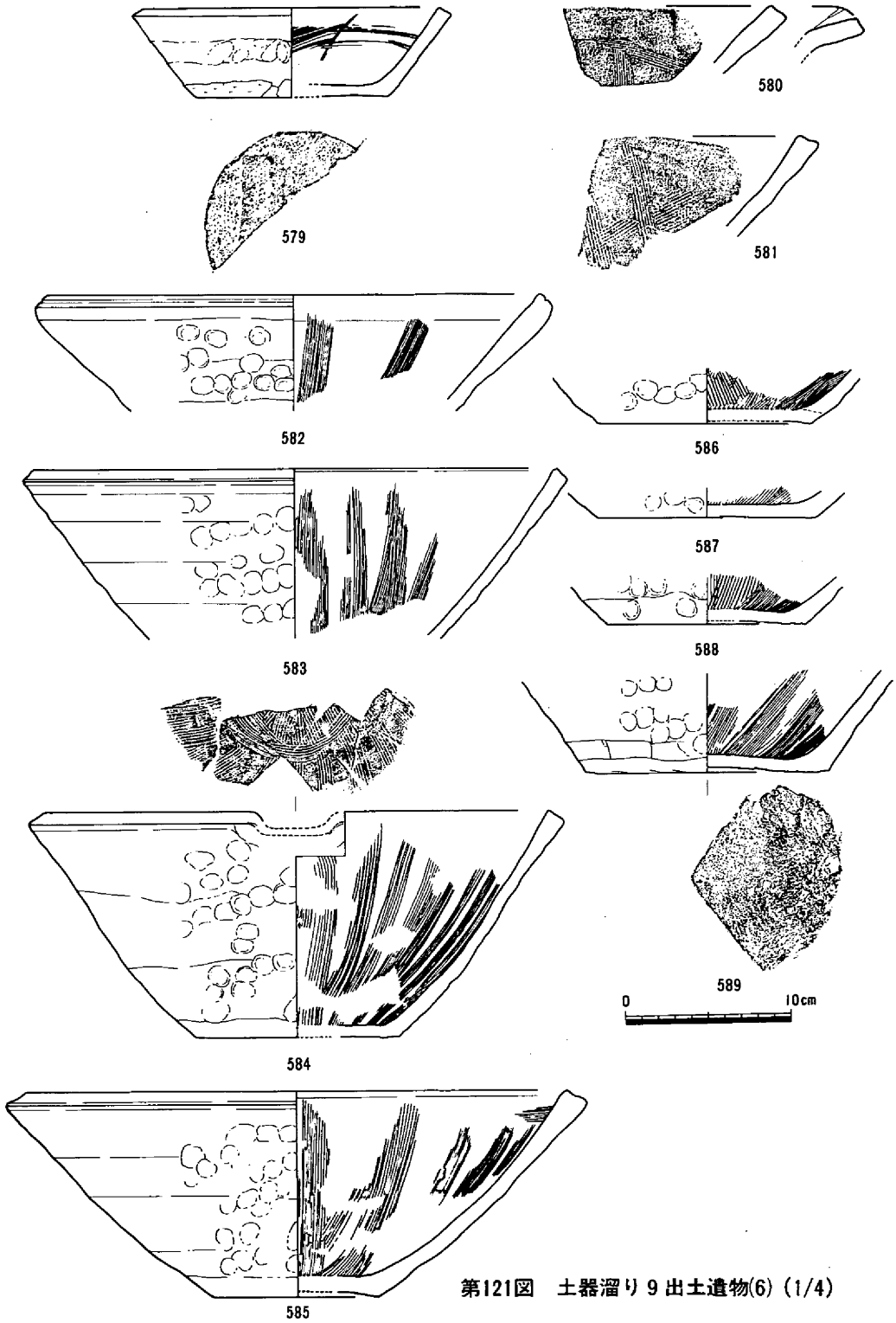
第119図 土器溜り9出土遺物(4) (1/4)

状工具によるへら記号(カマジルシ)が認められる。丸を描いてさらに、直線を加えているが、全体は不明である。572の口縁端面には、格子目タタキの痕跡が残されており、播鉢と同様鉢の器体の成形・叩き締め、甕の外面部部に用いられるのと同様な格子目のタタキ板が用いられたことを示している。しかし、灰原1出土の捏鉢88に認めら

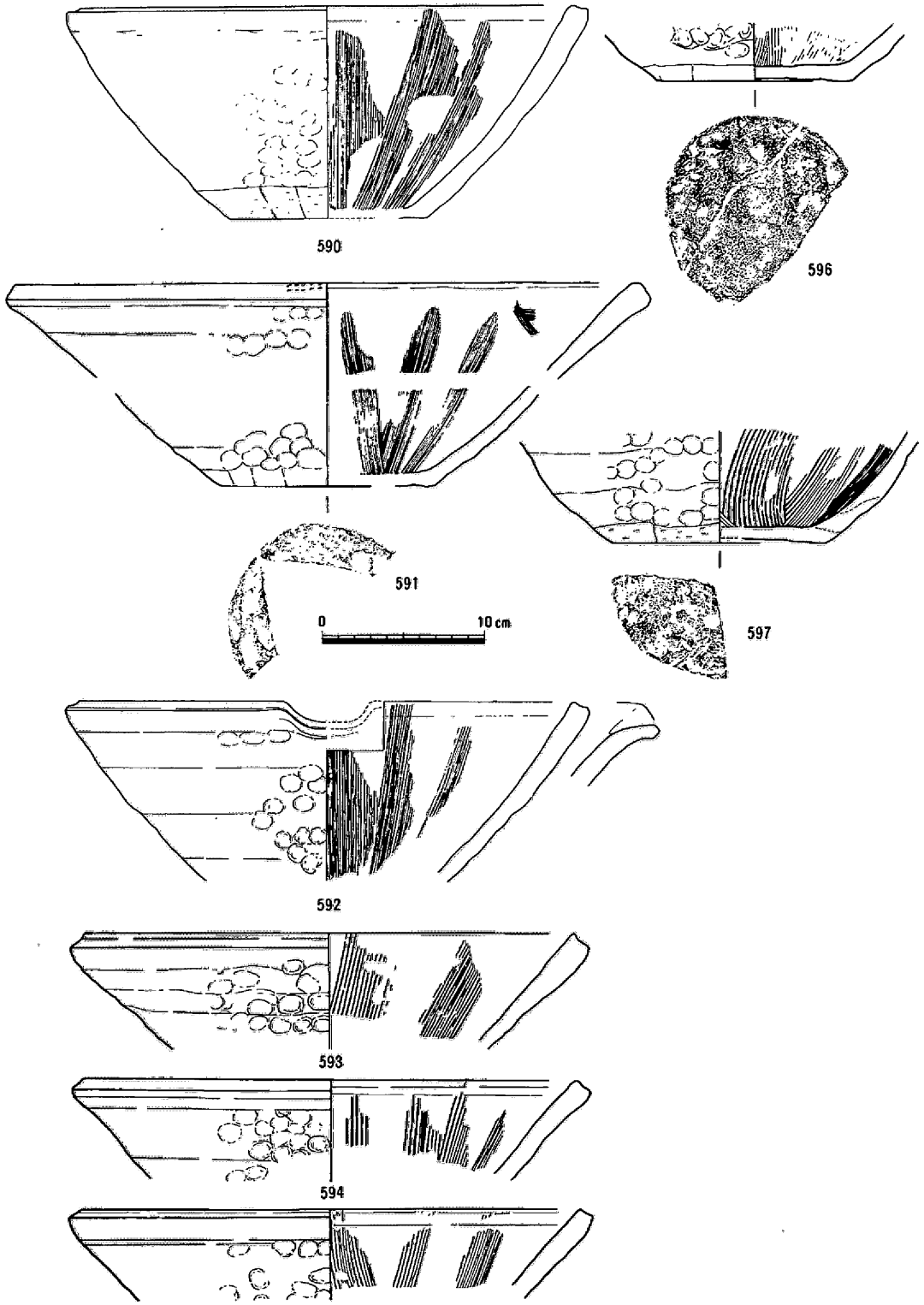


第120図 土器溜り9出土遺物(5) (1/4)

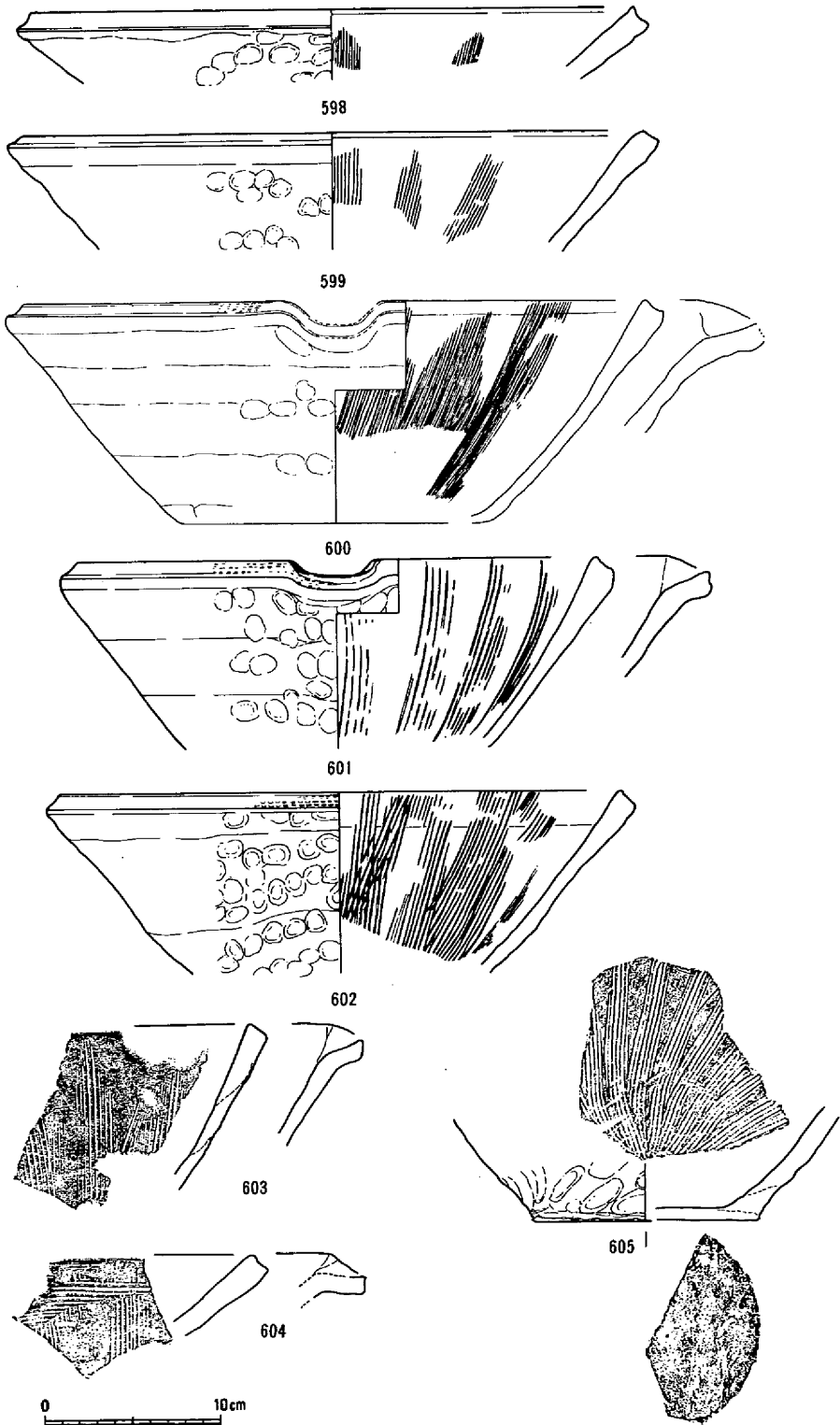
れたように、体部には、その痕跡が認められない。以上の捏鉢の大半は、灰白色～黄白色の白っぽい須恵質を呈するものである。575～578は片口近くあるいは、片口部分に「×」や円弧状のへら状工具によるへら記号（カマジルシ）が描かれた摺鉢である。576～578は、条線が二又あるいは三又状となった工具を使用して描かれている。摺鉢では、卸し目が放射状に施されるものが多いが、横方向あるいは、斜方向の櫛描き風の卸し目のみみられるやや小型の579や、放射状の卸し目の上加えられる580・581・585などがみられる。卸し目は、内底部に達し底面で円周を描くものが多い。また、櫛描き風の細かい卸し目が施されるものと、条線が太くて深い板状工具による卸し目とに大別される。後者は597～605で、卸し目の数は大体20～28条くらいのものがもっとも多い。また、後者の摺鉢にも、横位の卸し目を加えた604などもみられる。底部から体部に至る角度は40°前後を測るものが多いが、口径の小さい579などでは、底径は大き目で、それに伴い角度は増している。体部外面には、横位の指頭押圧痕が顕著にみられ、凹凸が甚しい。体部下端は横方向のへらケズリによって鋭い稜をなして終わる。口縁端面はやや肥厚して内傾するが、甕の口縁端部と同様、ややくぼんでいる。口縁端面に格子目タタキの痕跡を残すものがしばしばみられ、591・600～602が特徴的である。また片口はちょうど口縁部の内側に左右の拇指をそろえて置き、外方へ押し出す方法で作られており、成人の2本の拇指の痕跡が残されている。外底部には下駄印が認められ、596は特に明瞭である。これらの摺鉢は全体的に白



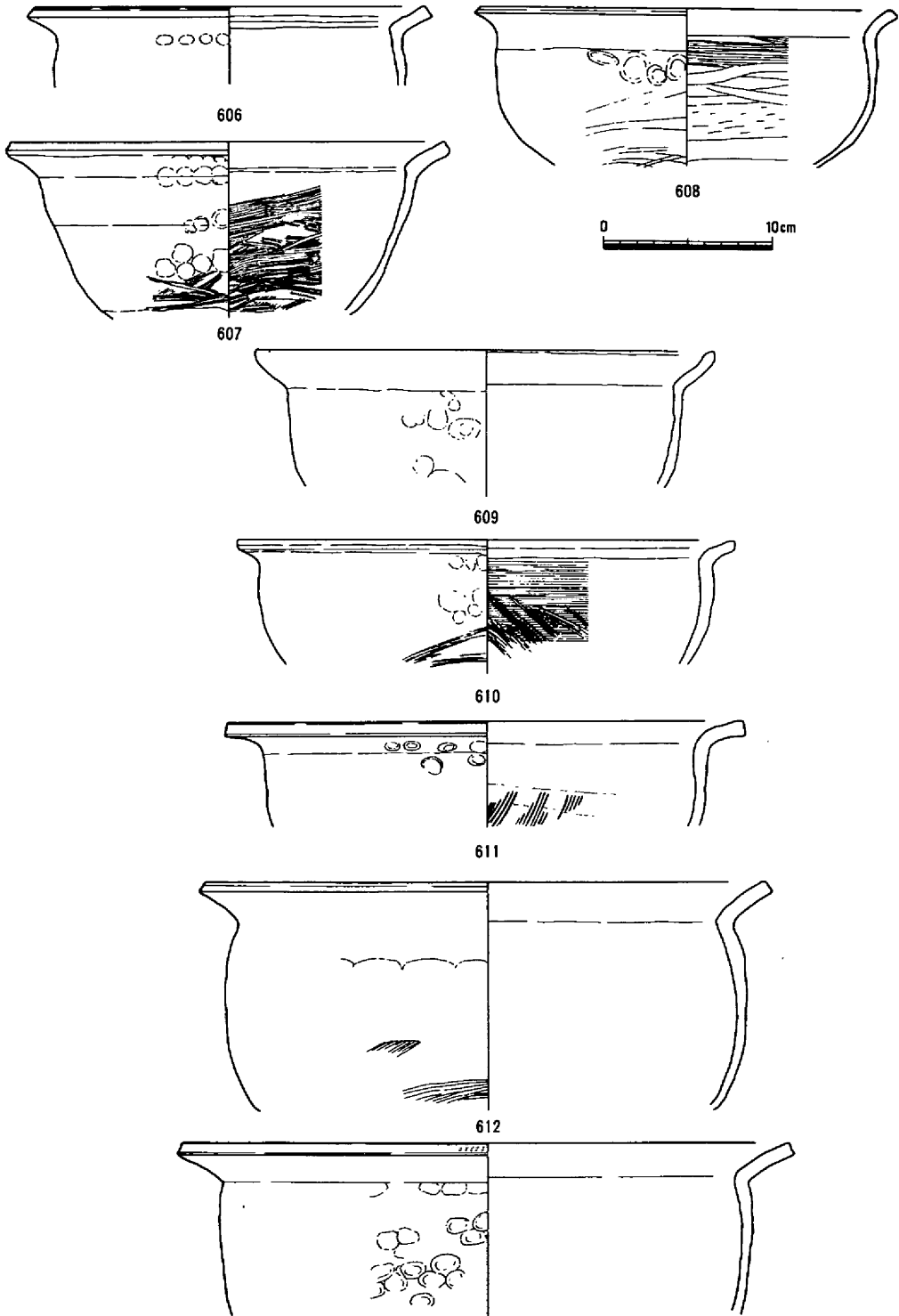
第121図 土器溜り9出土遺物(6) (1/4)



595 第122図 土器溜り9出土遺物(7) (1/4)



第123図 土器溜り9 出土遺物(8) (1/4)



613  
第124図 土器溜り9 出土遺物(9) (1/4)

灰色～暗灰色を呈するものが多く、比較的焼成は良好である。

**鍋 (606～613)**

口径23～36cm、器高10～15cm内外を測るとみられる鍋形を呈する一群の土器は、遺跡内の各所で出土している。この器種のもっとも古い祖形ともいえるものは灰原1で出土しているが、窯の調査ではその出土は多く認められていない。口縁部は甕のそれに近く、やや肥厚して端面がくぼむものが多いが、丸味をもって終ったり、やや上方につまみ出されるものもみられる。器壁の厚さは薄く、肩は張らず緩やかな弧を描いて丸底の底部にいたる。体部外面には、鉢にみられる押圧痕がみられるが、口縁端面には613のように小さな格子目タタキの痕跡が認められるものもある。体部外面下位

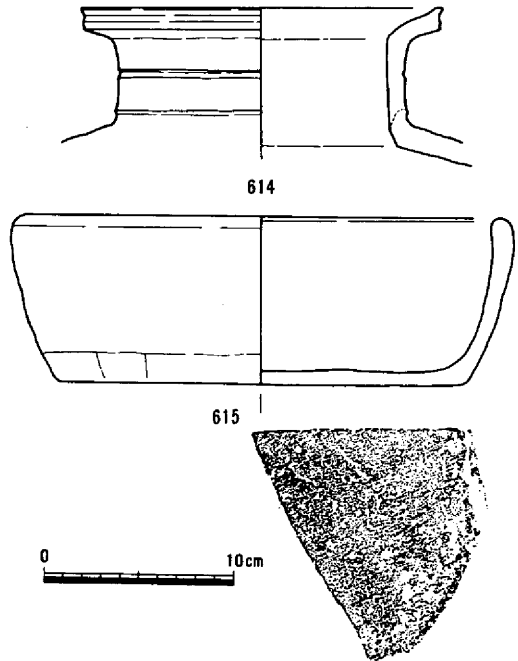
では、横位のナデやハケ調整を施すものがみられる。内面には、ヨコハケやヘラケズリ、櫛目調整が行われている。色調は淡灰色～褐灰色を呈するものが多いが、中には灰黒色の瓦質を示すものもみられる。いずれも焼成は良好である。

**壺 (614)**

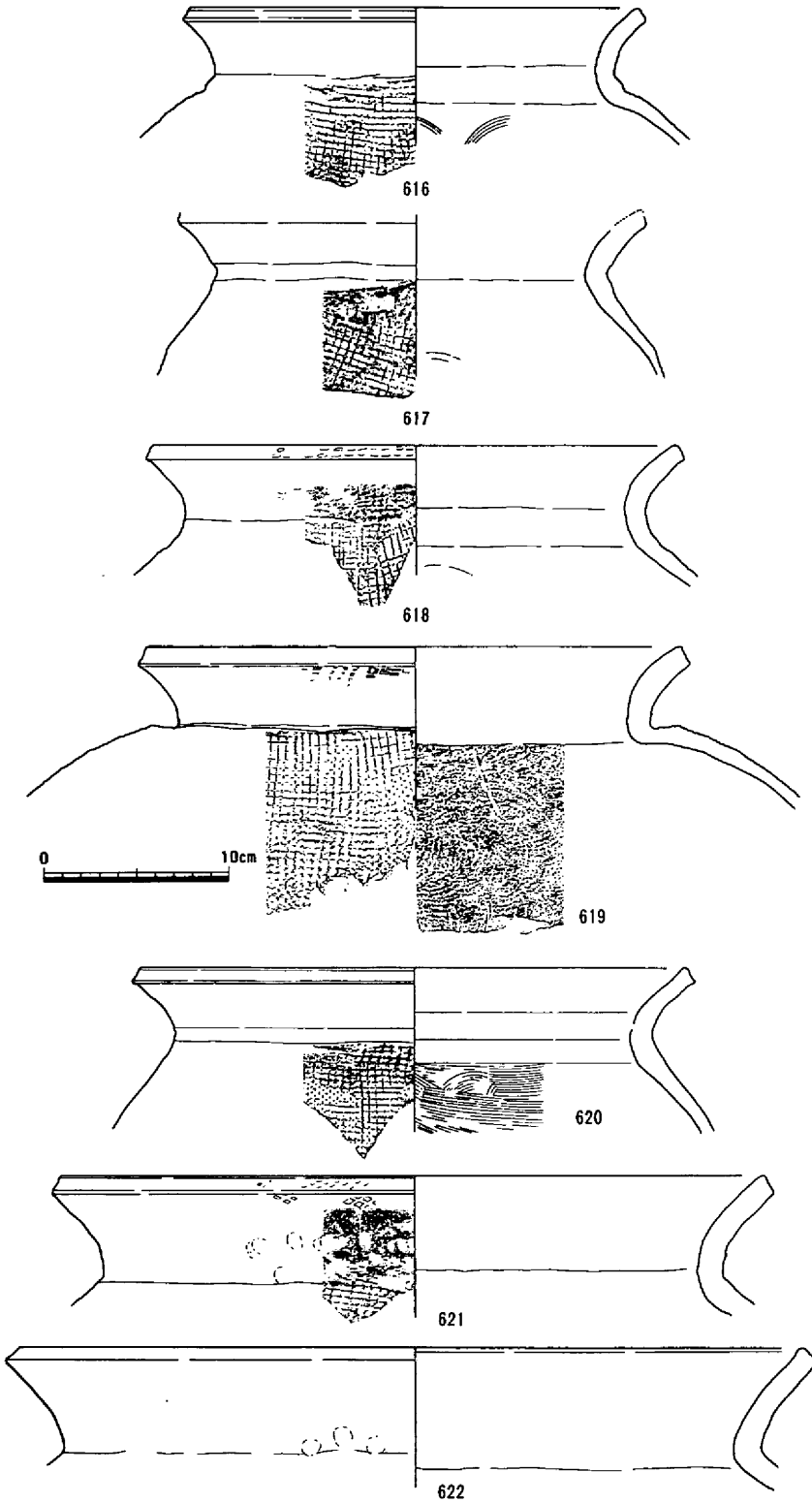
口径19cmを測る壺で、2条の沈線をめぐらした筒状の頸部から、肩の張る体部へ屈曲する。口縁部は上方に拡張し、端部は上方につまみだされている。口頸部の内外面や体部内面は共にヨコナデ調整で仕上げられる。体部内面は細くて浅い同心円タタキと指紋が看取される。胎土中には粗砂粒は多く含まれず、淡青灰色を呈する、焼成堅緻な須恵質焼成を示している。特徴的な同心円タタキから亀山焼と考えられるが、出土例をみない。おそらく瓦の供給と密接な、寺院向けの仏具として生産されたのではないかと考えられる。

**浅鉢 (615)**

口径25cm、器高8.7cm、底径21.5cmを測る浅い鉢形の容器である。全体にヨコナデ調整によって仕上げられ外底部も平滑である。体部外面下位には横位のヘラケズリが施される。口縁部はやや肥厚して丸くおさまり、わずかに内傾する。焙烙のような用途が考えられる可能性もある。白灰色を呈するが、部分的に黒灰色を呈する瓦質を示す。

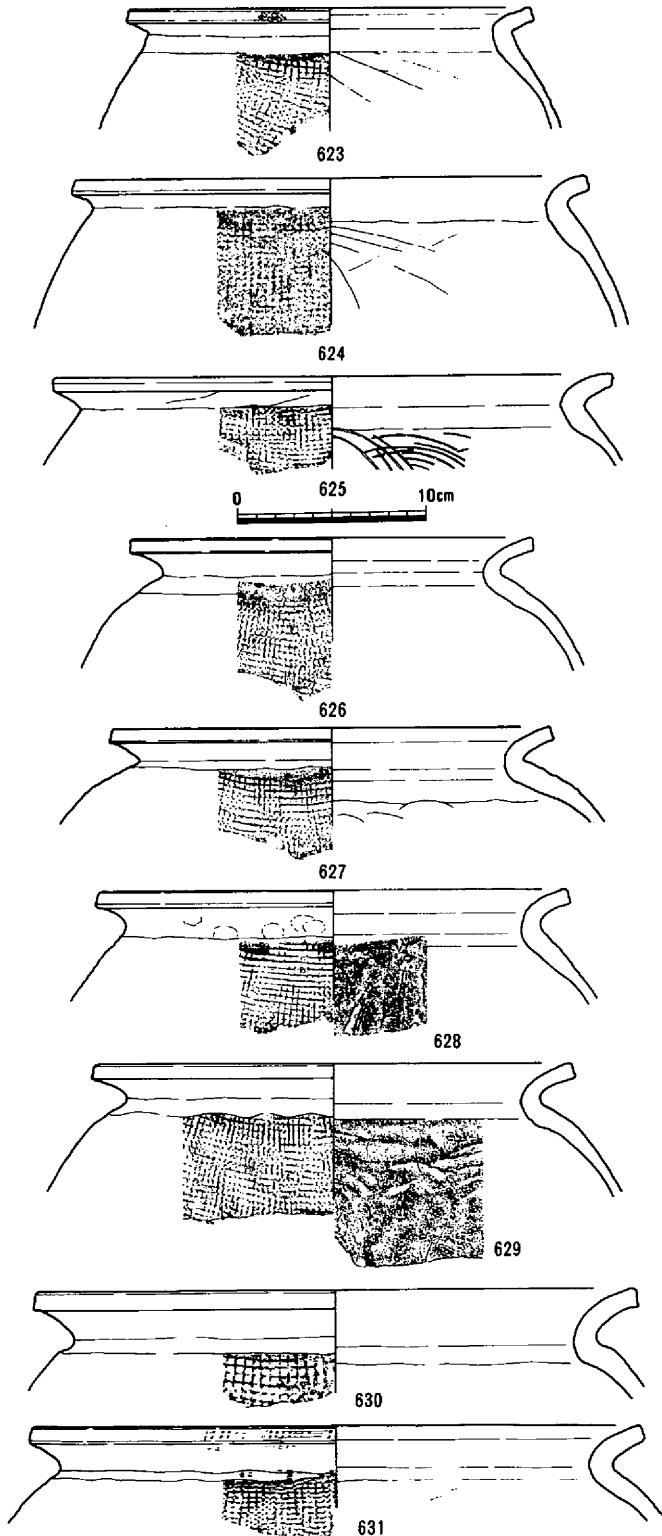


第125図 土器溜り9出土遺物(10) (1/4)



第126図 土器溜り9出土遺物(1) (1/4)

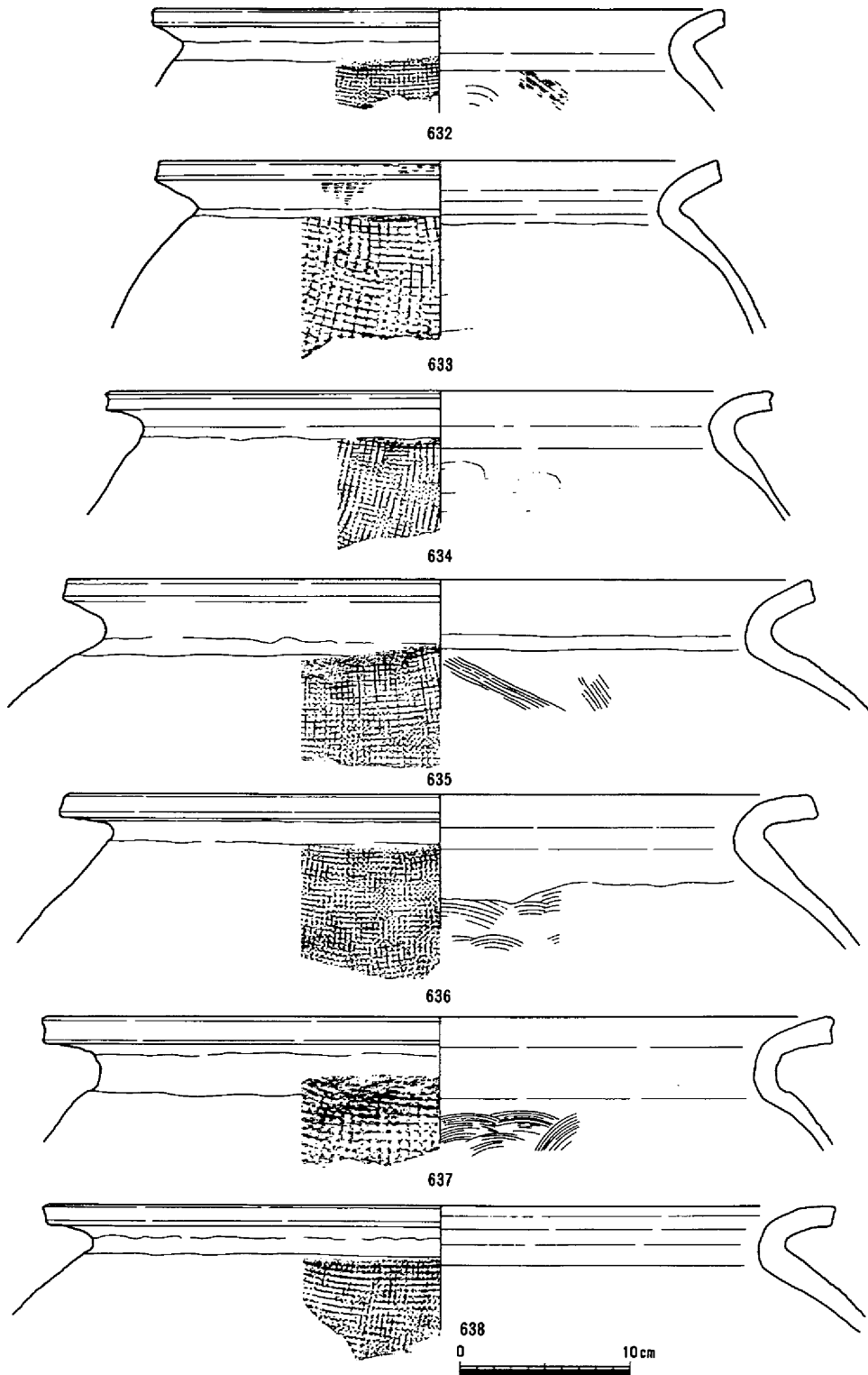




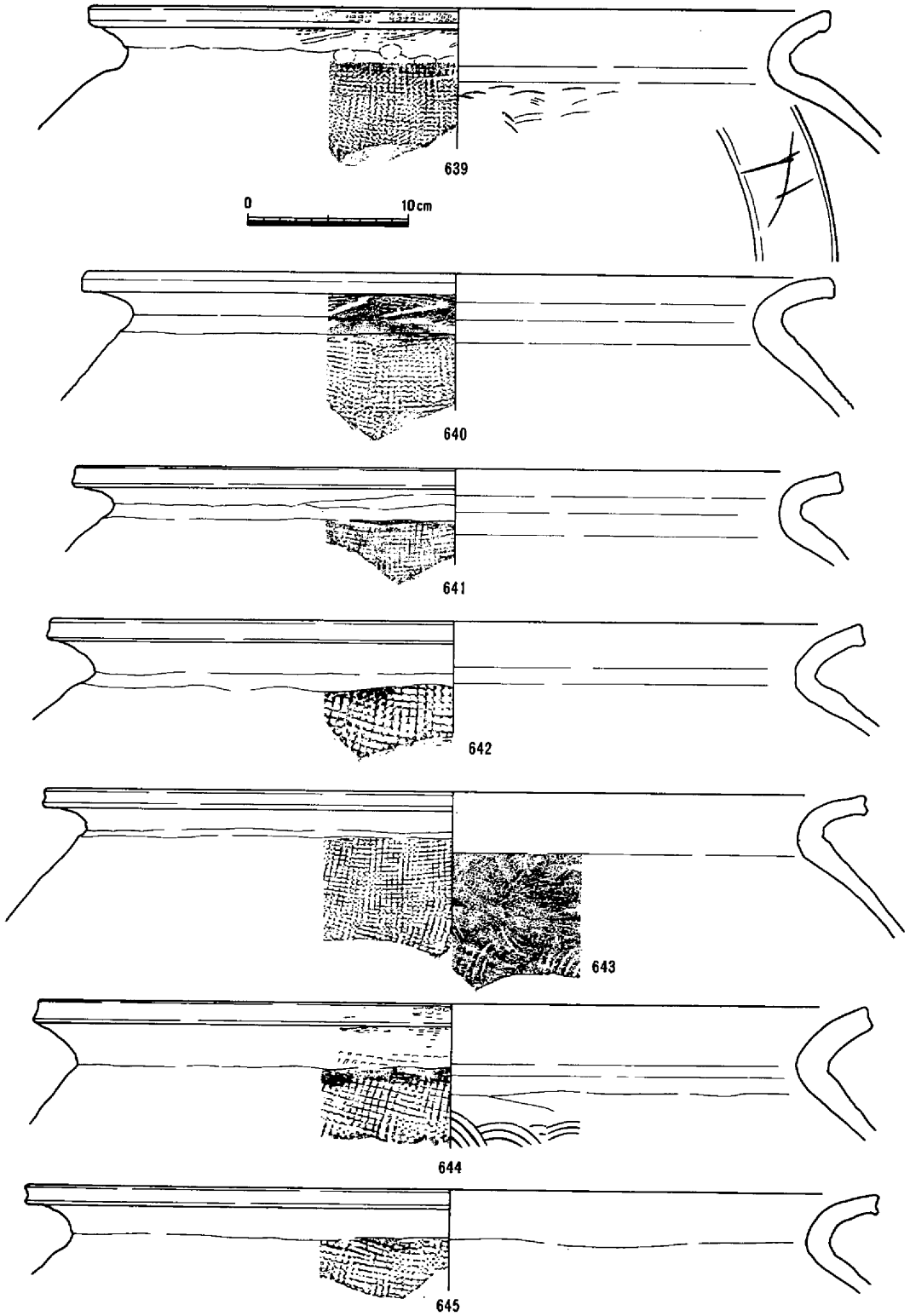
第127図 土器溜り9出土遺物(12) (1/4)

甕 (616~652)

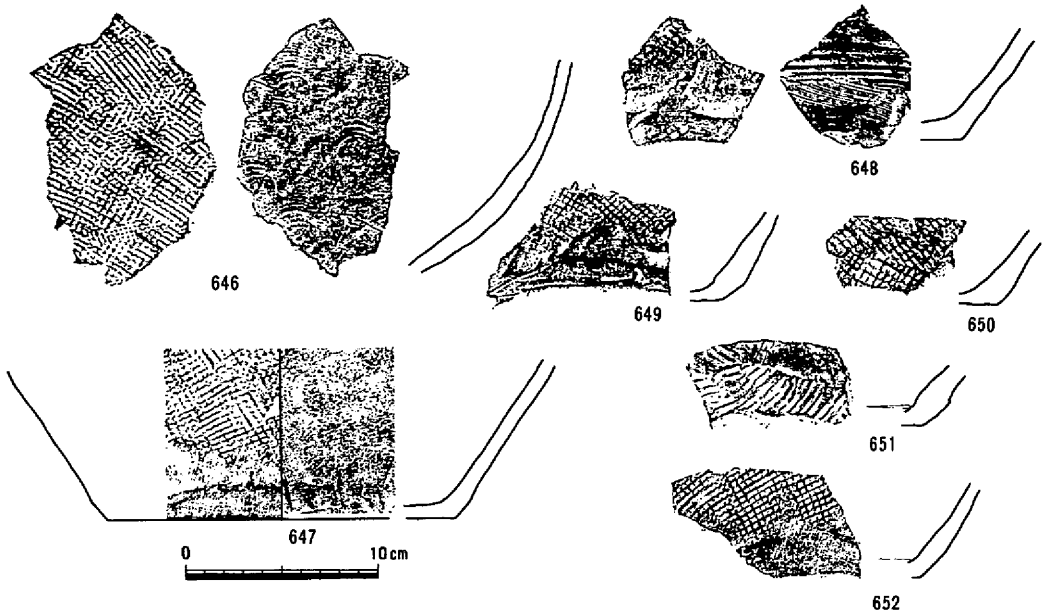
体部外面に平行タタキが施されたものは全く出土していない。すべて格子目タタキが施されており、これらは体部と口縁部の屈曲度が大きいものと小さいものに大別されるが、出土量は後者の方がはるかに多い。616~622は口縁部が長く、体部との屈曲の度合も80~95°を示すほど立ち上がるものが多い。格子目はやや不揃いで、器体によって異なる。体部内面は同心円タタキで調整されるが、620のようにヨコハケ調整で仕上げられるものもみられる。概して、焼成良好で、灰青色を呈する。623~638は口縁部が短く、体部との角度は60~70°前後のものが多い。格子目タタキは、3~4mm前後を測るものももっとも多いが、口縁部のやや長い630などでは、5mm方格を示すものもある。口縁部は、小型品では623・624のように極端に小さく短かいもの



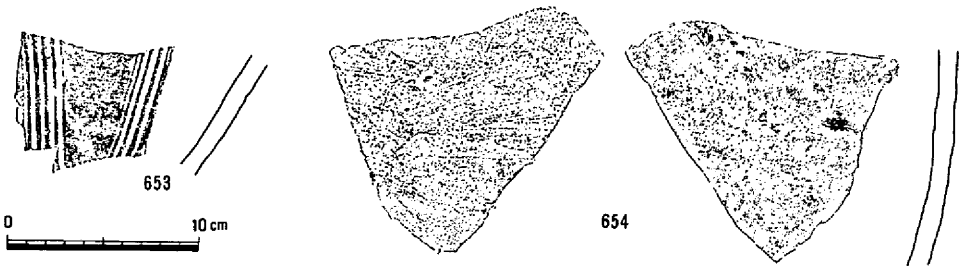
第128図 土器溜り9出土遺物(13) (1/4)



第129図 土器溜り9出土遺物(14) (1/4)



第130図 土器溜り9 出土遺物(15) (1/4)



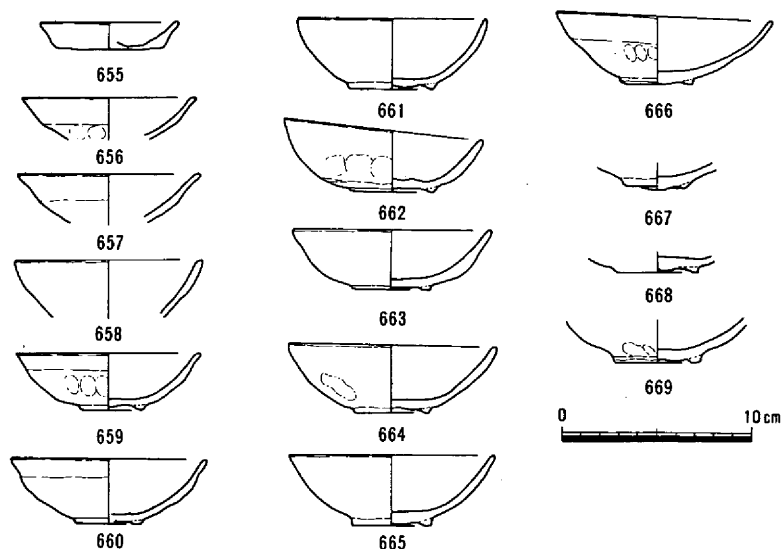
第131図 土器溜り9 出土遺物(16) (1/4)

もみられるが、口径40cmを越えるものには、類例はない。体部内面は基本的に同心円タタキで仕上げられ、623・624のように斜方向のナデ調整や、635のようにハケ調整が加えられるものもある。639には、口縁部内面に2条の直線に斜線を1条加えたヘラ記号(カマジルシ)が認められる。647～652はいずれも甕の底部(平底)である。体部外面下端にはヘラケズリがめぐり、内面下位にはハケ状の調整を施すものが多い。これらはいずれも大型の器体の底部は含まれていない。

#### ② 備前焼 (653・654)

653は摺鉢の破片である。体部内面には備前焼特有の太くて深い放射状の卸し目がみられる。654は甕の体部破片で、内外面共にナデ調整で仕上げている。いずれも備前焼特有の赤褐色の色調を示し、焼成堅緻である。

#### ③ 土師質土器 (655～674)



第132図 土器溜り9出土遺物(17) (1/4)

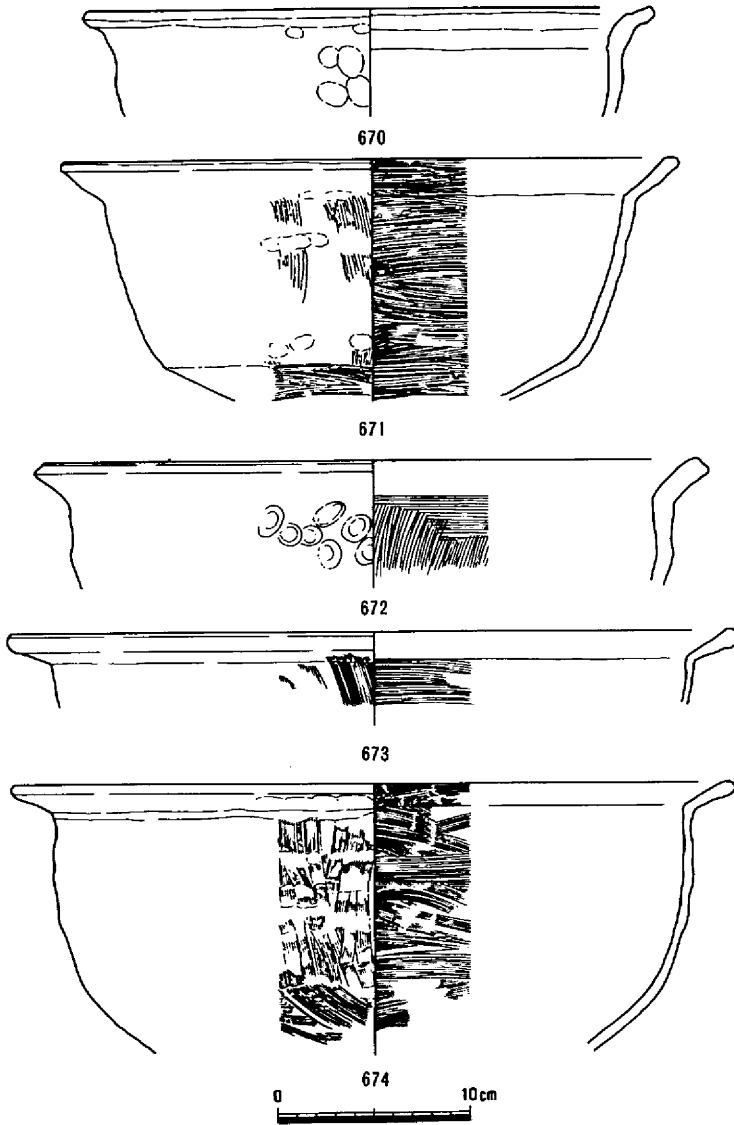
655は皿、656～669は椀、670～674は鍋である。これらは、日常生活用具として用いられた雑器と考えられ、他の中世集落遺跡出土遺物と比較対照できる好資料である。皿655は、外底部はへら切り底である。口縁端部は丸味をもっておさまる。636～669の椀は、口径9～11cm、器高3～4cmの小型の椀で、いずれも径3～4.5cmの低平かつ不整な高台が貼付けられる。体部は直線的に外方するものと、やや丸味をもって弧を描くものとに大別されるが、後者の方が口径は大き目である。いずれも白っぽい膚色～黄橙白色を呈する。体部外面には、指頭押圧痕が残され、いわゆる早島式椀の伝統を継承する技法が踏襲されている。

670～674は鍋形土器である。670・672はやや器壁が厚く、体部外面に指頭押圧痕も看取され、亀山焼の鍋に類似するが、焼成は土師質である。671・673・674は内外面の器壁の調整にハゲが多用される。器壁は薄く、体部外面に煤が付着している。胎土中には砂粒が多く含まれ、黄橙色～橙褐色を呈する。口縁部は丸味をもって肥厚している。

#### ④ 銭貨 (M-5～7)

M-5は土器溜りの中央部で出土した天聖元宝である。初鑄年はA.D1023年の北宋銭である。M-6はこの土器溜り周辺で表面採集されたもので、景德元宝である。初鑄年はA.D1004年で、やはり北宋銭である。M-7はこの土器溜りの西方上位部で表面採集された嘉祐通宝で、初鑄年A.D1056年の北宋銭である。これらの銭貨はいずれも、鑄上りは悪く、風化も加わって表面は鮮明さを欠く。

以上、土器溜り9の出土遺物について、概述した。土器溜りが形成された時期は、幅があるが、備前焼(註6)や土師質土器(註7)から推定するとほぼ13世紀後半～14世紀代にかけての



年代すなわち、鎌倉時代に比定される。



第133図 土器溜り9出土遺物(18) (1/4・1/2)

(10)土器溜り10(第134~144・163図、図版40・41・90~93)

土器溜り9の南西方約5mに位置し、土器溜り11の北西方上位部にあたる。約2.5×5mの範囲にひろがる土器溜りで、亀山焼が大半を占めているがわずかに土師質土器なども出土している。以下出土遺物について説明を加えよう。

①亀山焼(第134~143図)

瓦(675~684)

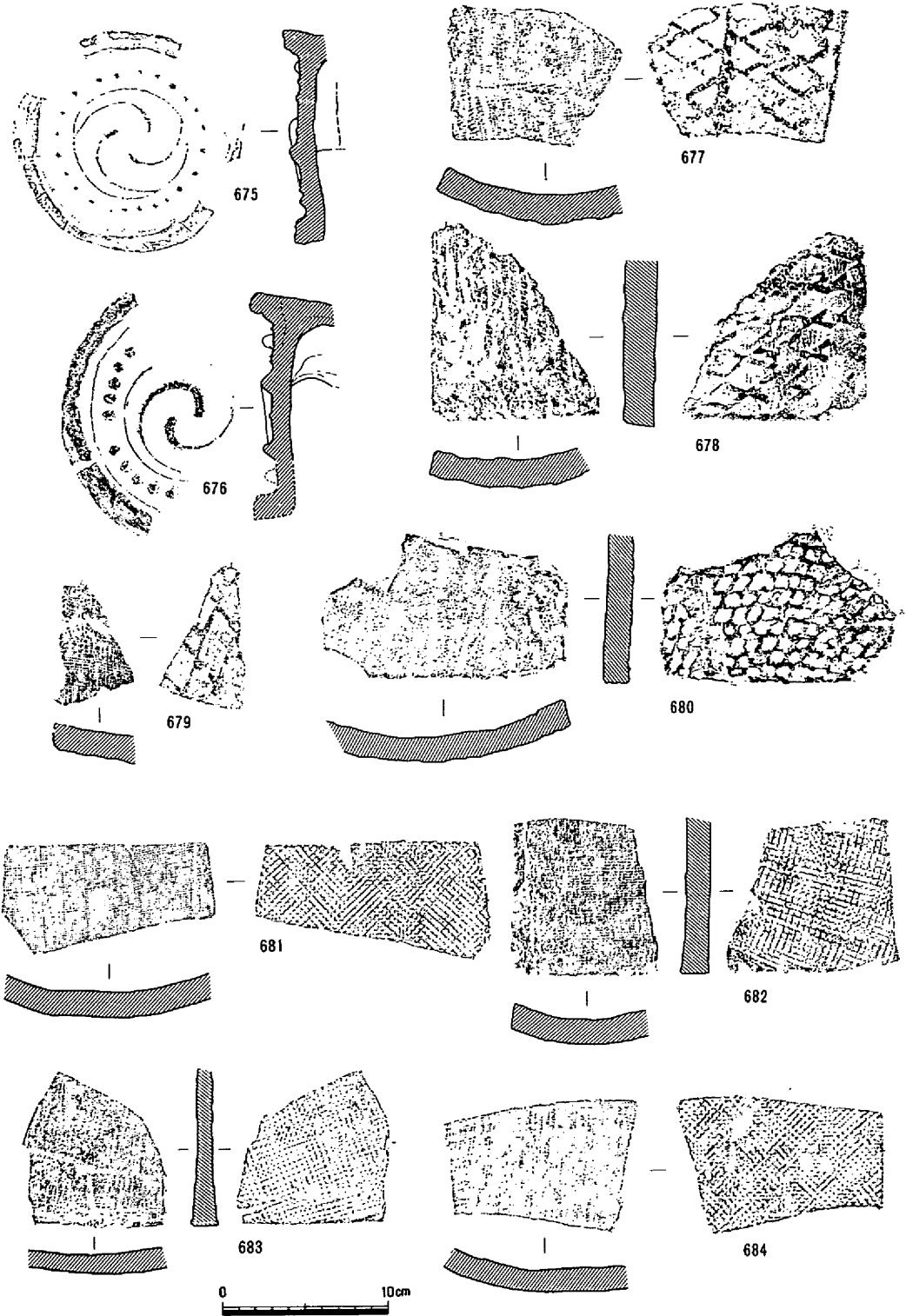
675は瓦当に三巴文が描かれた軒丸瓦である。三巴文は右まわりで頭部は比較的小さい。尾部は1本につながって細くて鋭い界線を形成し、周縁との間には珠文が飾られている。瓦当裏および外周はナデ調整によって仕上げている。淡青灰色を呈し、焼成良好である。676は、瓦当に、右まわりの二巴文が描かれた軒丸瓦で、頭部はやや太目である。尾部の末端は不明瞭であるが675と同様、1本となって界線を形成するものと思われる。周縁との間に2条の界線にはさまれた珠文をめぐらしている。瓦当裏および外周はナデ調整によって仕上げられているが、周縁の中は一定でなく不揃いである。灰色を呈し、焼成良好、須恵質の焼上りを示している。677~679は、凸面に粗大な斜格子タタキが施された平瓦である。凹面にはいずれも布目痕が残されている。680はやや小さな斜格子タタキが施されたもので、凹面にはやはり布目痕が残されている。681~684は、凸面に甕の体部外面にみられる小さな格子目タタキが施された平瓦である。凹面にはいずれも布目痕が残る。格子目タタキの方向は、側縁・端縁に斜行するが、布目痕はほぼ平行している。

鉢(685~697)

685~687は捏鉢である。685は土器溜り9出土の562~564などよりひとまわり大きく、外底部には下駄印が残されている。体部外面下位は、成形時の「へたり」による皺が認められ、下端部分を横位のヘラケズリによって削りとっている。686・687は、686・688以下の擂鉢よりは小型の大きさを示し、686の外底部には下駄印が残されている。687には体部中央部に横位の指頭押圧痕が、擂鉢と同様にめぐる。688~693は、擂鉢である。口径は29.5~43cmを測り、最大器高は約14cmを測る。691・694・695のように卸し目が櫛描き状を呈するものと、硬い板状工具による690・696のような卸し目の二種類が認められる。これらの卸し目はいずれも、内底部に及び、中央部で円弧を加える694・696などが多い。693~696には、外面底部に下駄印が認められる。これらの鉢は淡灰色~青灰色の須恵質を呈するものが多い。

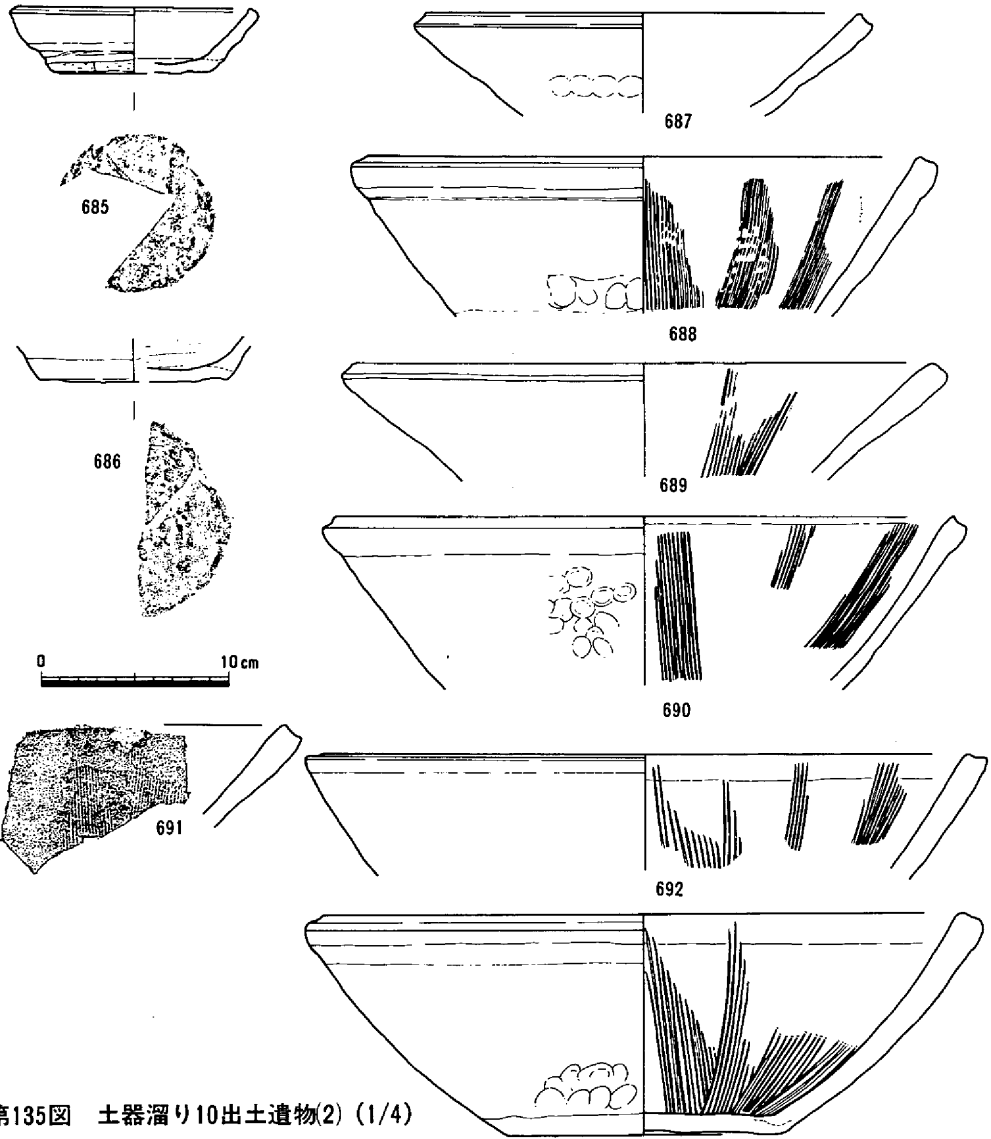
甕(698~730)

口径約23~45.5cmを測り、短い口縁部が大きく外方に屈曲するものが大半を占める。口縁端部が上方につまみあげられたように突出する698・702なども散見する。また、口縁端部が大きく屈曲して、下方に垂れるような714などもみられる。体部外面には、平行タタキが施される



第134図 土器溜り10出土遺物(1) (1/4)

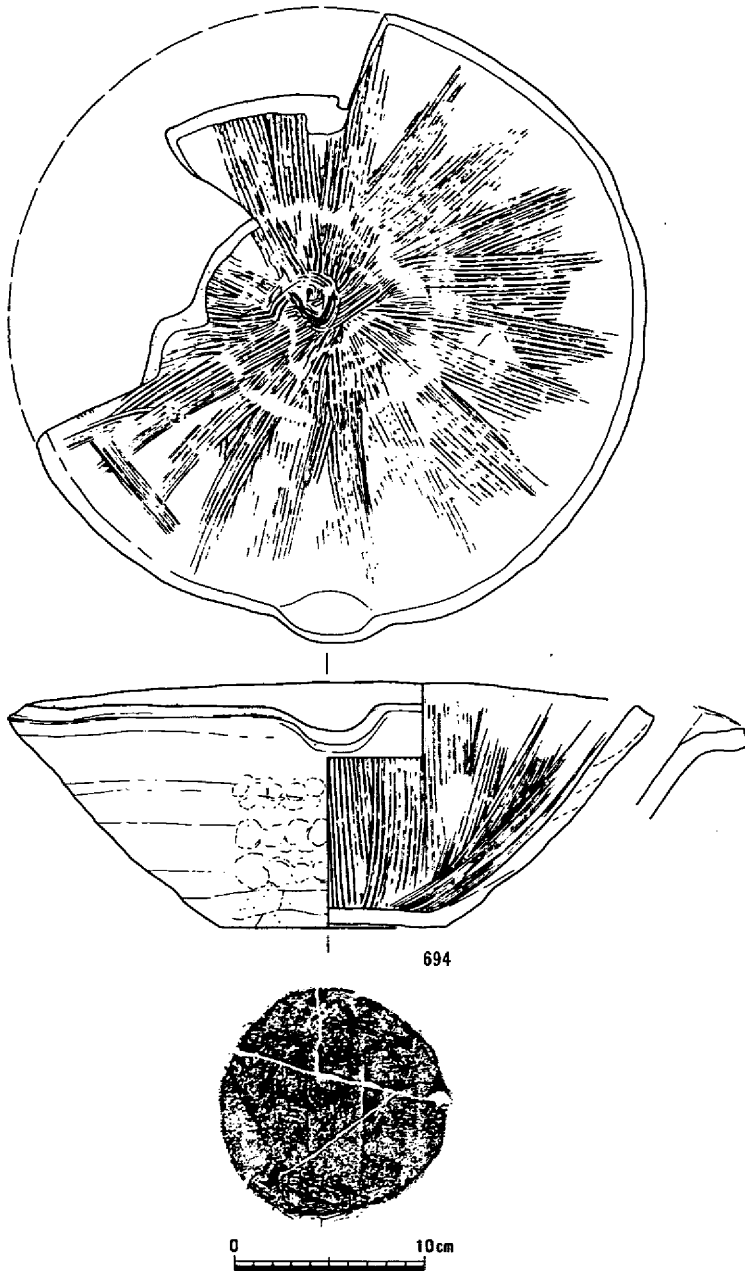




第135図 土器溜り10出土遺物(2) (1/4)

ものは皆無で、すべて小さな格子目タタキである。体部内面は、きめの細かい同心円タタキが施されるものが大半を占める。699・704・719などは特に明瞭で、拓影に示す、723・725～729なども同様である。中には、心持ち材の当て具が乾燥してヒビ割れたために放射状の筋がみられる同心円タタキも残されている。また、同心円タタキの後、ナデ調整を加える705などにもみられるが、ごく少数である。口縁部内面にみられる、ヘラ記号(カマジルシ)は、711・706・715のように「卍」と描かれたものや、712・710のように「×」と描かれたものなどきわめて単純な記号風なもの



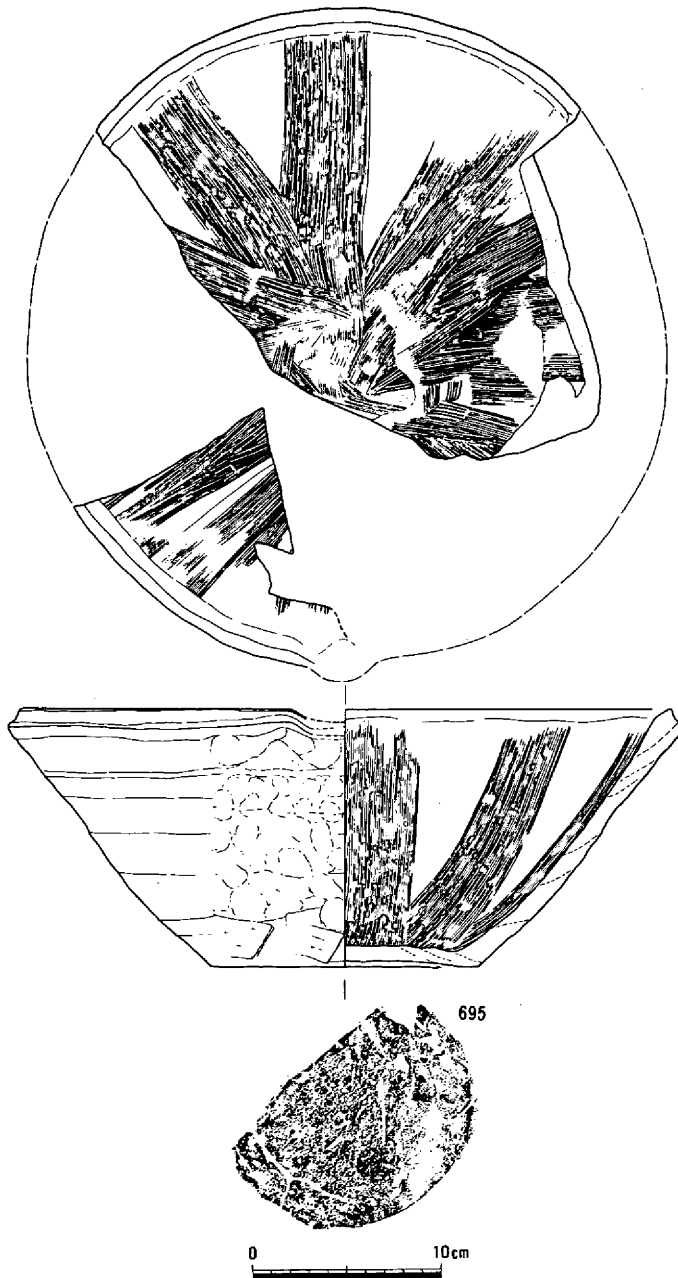


第136図 土器溜り10出土遺物(3) (1/4)

が多い。717～719は、平底の底部片である。体部外面下端には、横位のヘラケズリが施され、鉢の調整と同様な点は特筆される。内面下位では、荒いナデや、719のようにカキ目調整で仕上げられるが、大型品の体部内面下位では、721や730のように丸底となり、指頭押圧痕を消すように強いカキ目風の荒くて強い楯調整が加えられる。この調整は、大型の甕の内面下位には必ずといってよいほど加えられている調整技法であり、後述の埋甕1・2に使用されている甕にもみられる。これらの大型甕はほぼ同じ時期に比定されるが、やや古い時期の2号窯窯体出土の大型甕38にもこの手法がみられる点は注目される。38では、

この押圧痕を横位の楯描き風のカキ目調整痕が体部内面上位にまで達している点が大きな相違点である。大型の720などの甕でも、口縁端部の格子目タタキ痕跡が看取され、小型品とは基本的に同一の手法で成形されたことがわかる。

②土師質土器ほか (731・732)



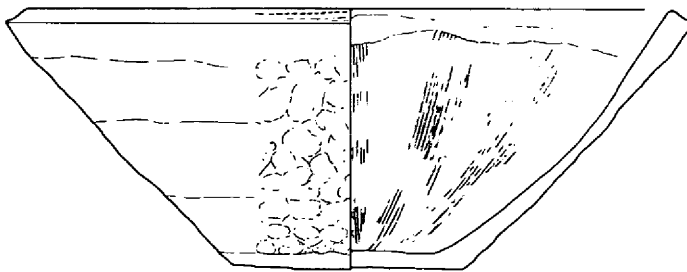
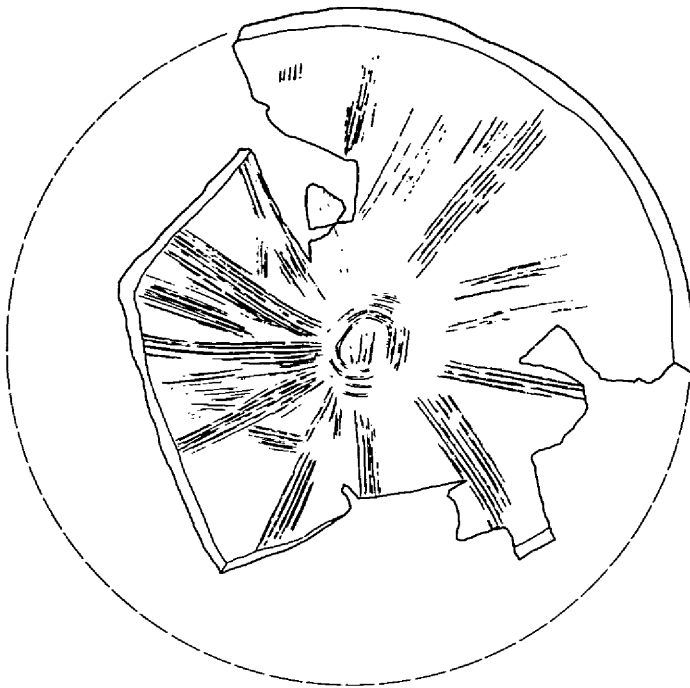
第137図 土器溜り10出土遺物(4) (1/4)

731は土師質土器皿である。小型の灯明皿とは異なり、器肉はやや厚めで体部は低く、底径も大きい。体部の内外面は、おもにナデ調整によって仕上げられ、平坦な外底部も同様である。Cライン下位の柱穴群中より類似する皿が出土している

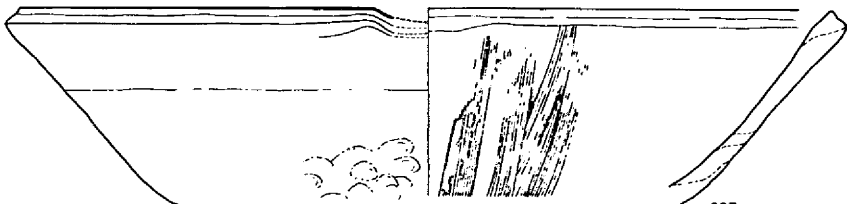
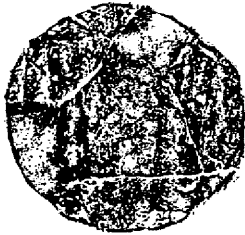
(831)。淡橙褐色を呈し、微砂を多く含む胎土が観察され、比較的焼成は良好である。732は羽釜である。瓦質的な灰黒色を呈するが、素地胎土は黄橙褐色を呈する。罫部分は、口縁上端から貼りつけられ、分厚い。内外面共に、ナデ調整によって仕上げられる。形態は滑石製の石鍋に似ており、用途など興味深いものがある。

以上の出土遺物の示す時期は、位置的な面から観察しても土器溜り9とほぼ重複すると考えられ、次に述べる土器溜り11もほとんど同一時期と考え

られよう。軒丸瓦からみると、口縁部の屈曲が弱い、すなわち、立ちあがり急で長い甕を伴う土器溜り7の素朴な三巴文(454)より、やや定型化した瓦当文様の出現期と考えてよいだろう。これらの瓦が瓦質というよりむしろ淡灰色の須恵質である点が、亀山焼の瓦が、甕・鉢な



696



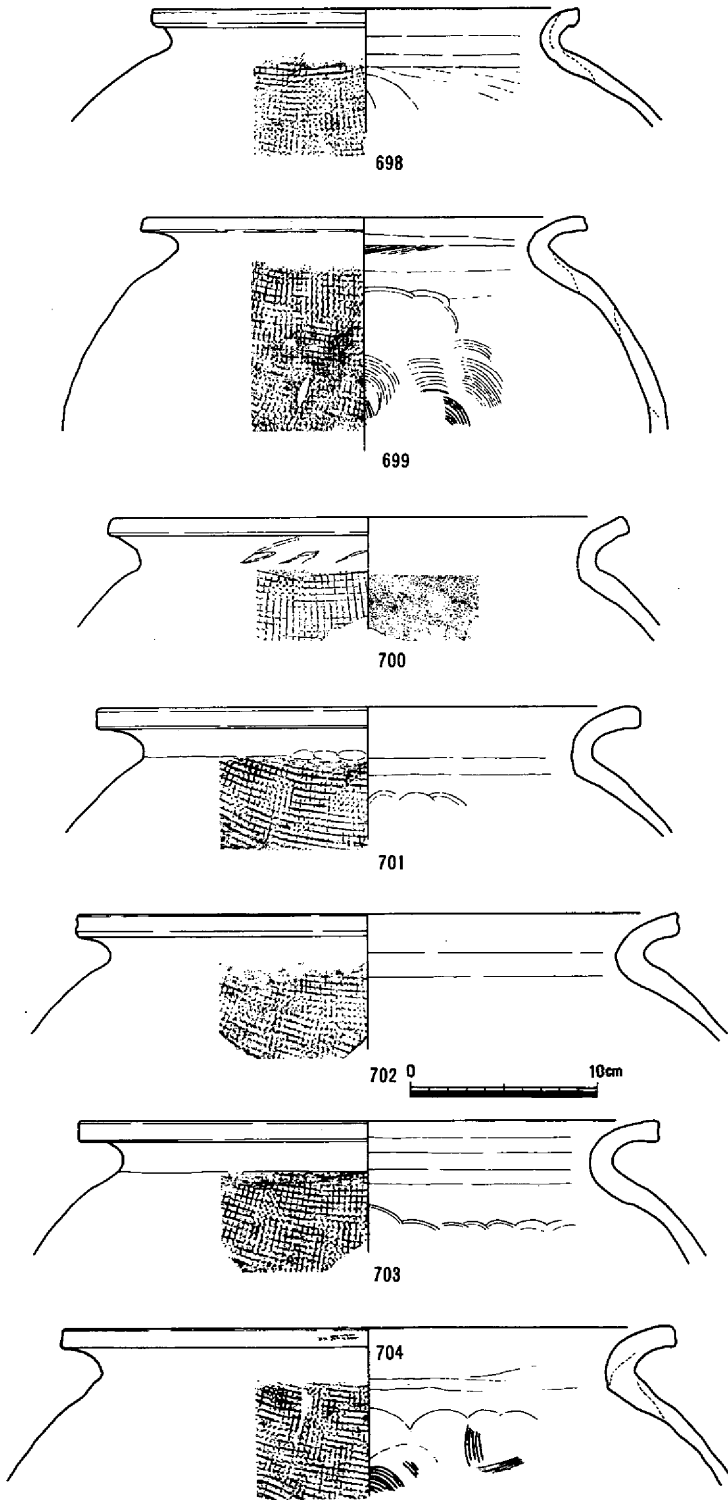
697

第138図 土器溜り10出土遺物(5) (1/4)

どの土器類と共に焼造されたことを示唆しているものと理解してよいだろう。したがって土器溜り9で出土している土師質土器や備前焼などを手がかりに、時期を考えてみると、ほぼ13世紀後半から14世紀前半にかけての時期が比定されよう。

(II) 土器溜り11 (第145～147・163図、図版41・96・97)

土器溜り10の南東下方約4.5mに位置し、土器の集中部分は4×10mの不整な帯状をなしている。北東端部には、他の貝塚と異なりハマグリを主体とする小貝塚が上面に堆積している。出土遺物の大半は亀山焼で、わずかに753の青磁が出土している。以下、器種ごとに概要を述べる。



第139図 土器溜り10出土遺物(6) (1/4)

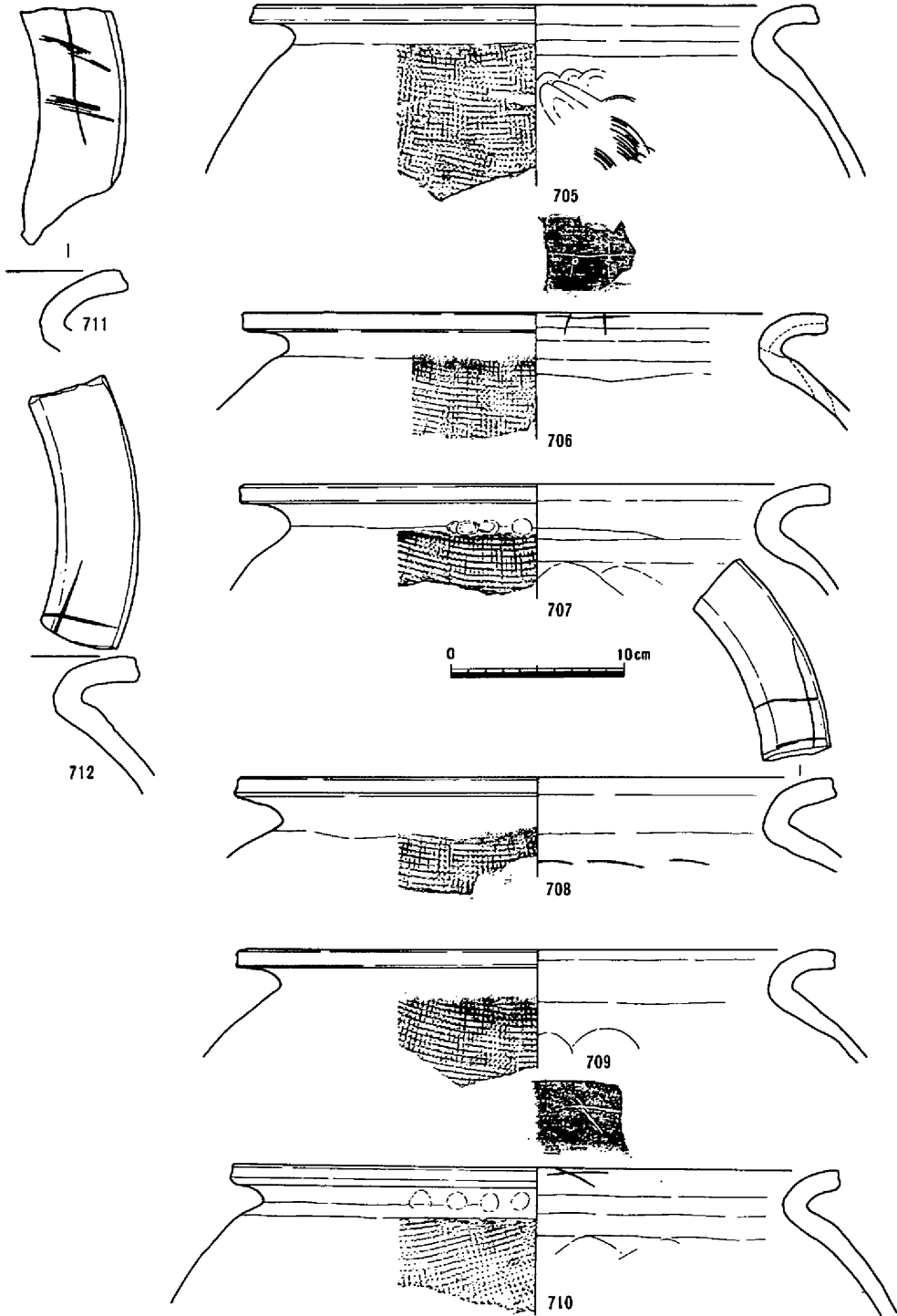
①亀山焼 (735~752)

瓦 (735~737)

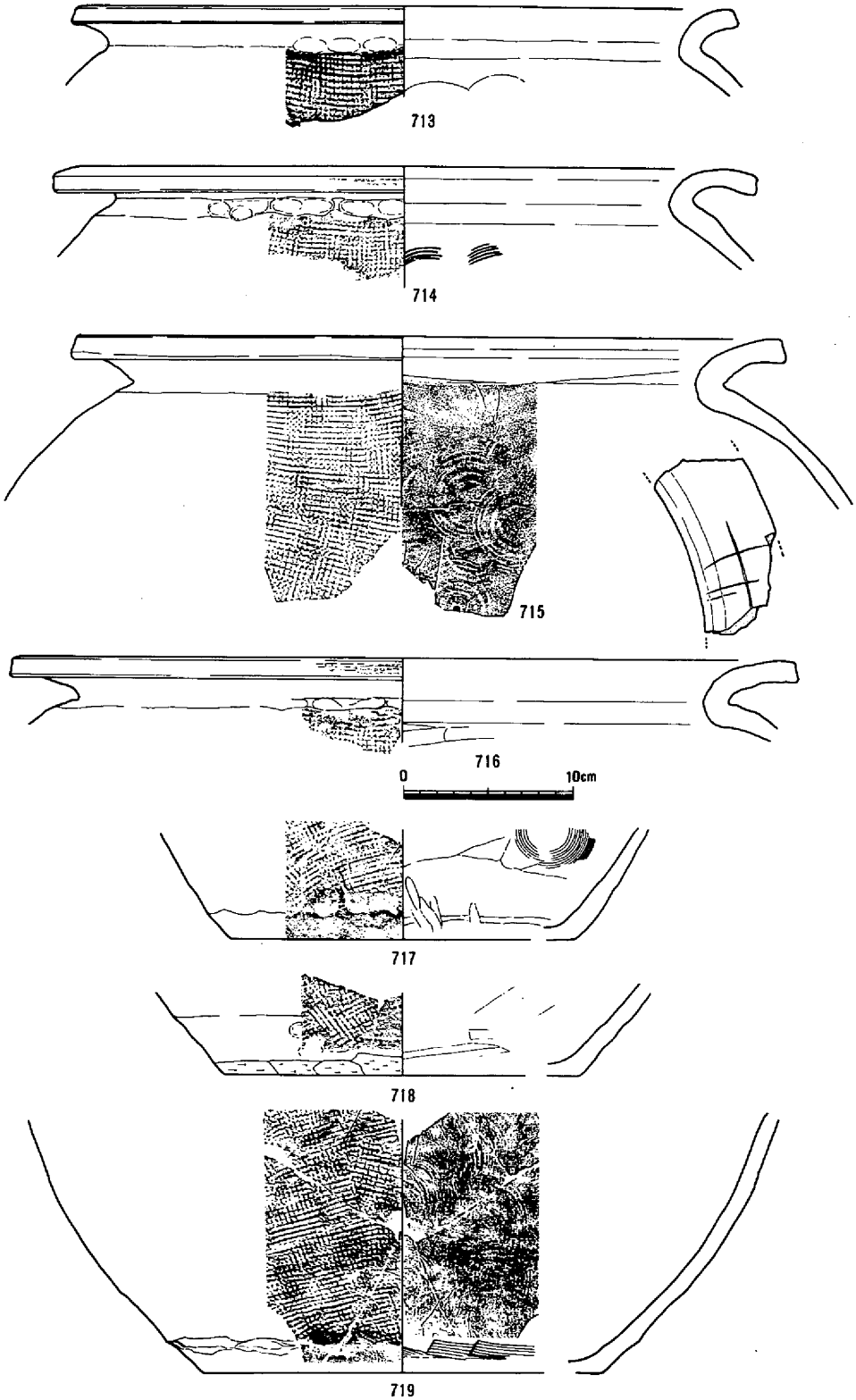
他の土器溜りに比べると瓦の出土量は極めて少ない。734は、玉縁が付けられた丸瓦の破片で、凸面のほぼ全面に格子目タタキが施される。凹面には布目痕が残される。735は、小さな斜格子タタキが凸面に施された平瓦で、凹面には布目痕が残る。736・737は、凸面に甕の体部外面と同様の小さな格子目タタキが施された平瓦で、凹面には、布目痕が残る。736には瓦釘を用いるための釘穴が凹面・凸面の両方から穿孔されている。おそらく、軒平瓦と考えてよいだろう。

鉢 (738~743)

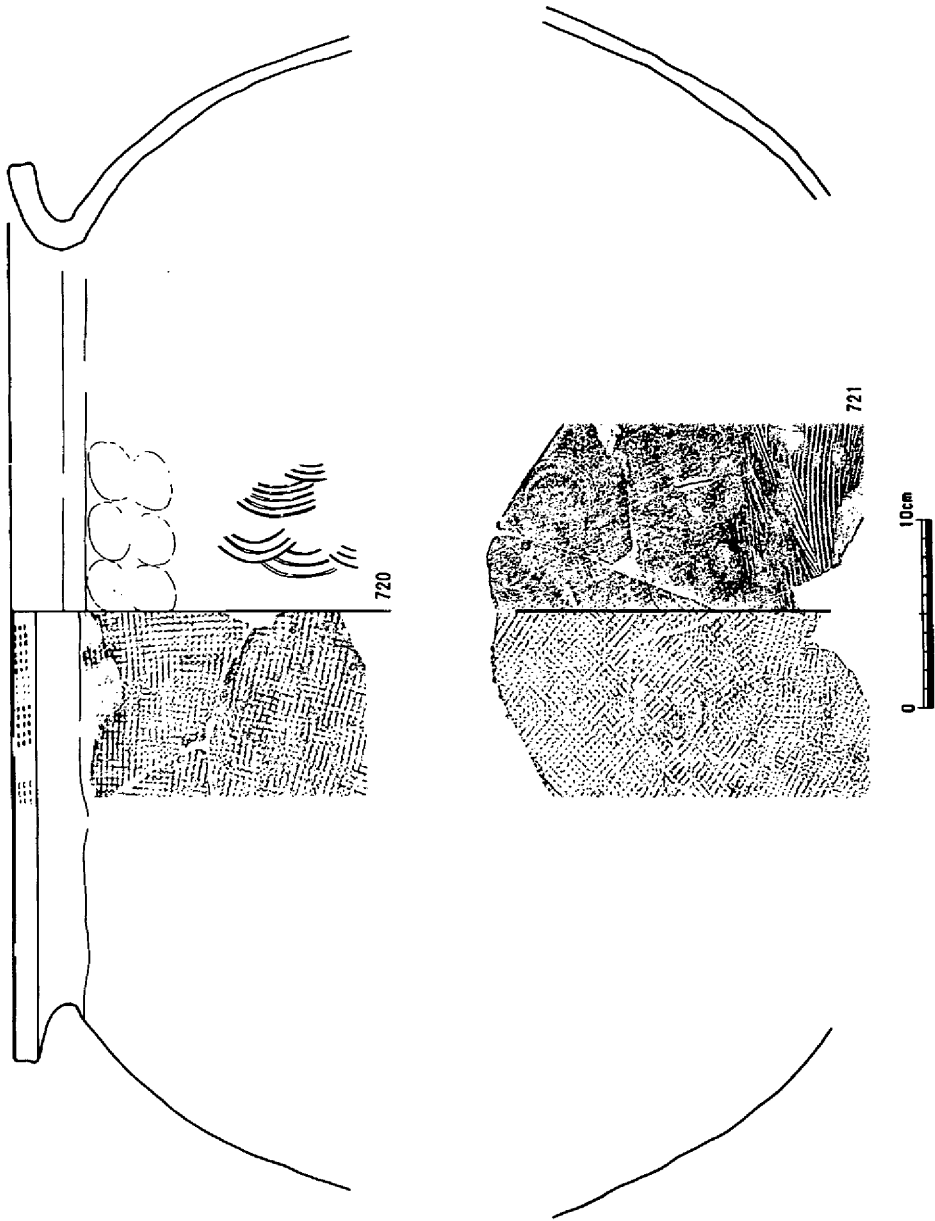
すべて播鉢である。口縁部がやや窪んで肥厚する点は共通する特徴であるが、742は体部の器肉がかなり薄い。体部外面の、指頭押圧調整は、すべてにみられ、口縁端部の格子目



第140図 土器溜り10出土遺物(7) (1/4)



第141図 土器溜り10出土遺物(8) (1/4)

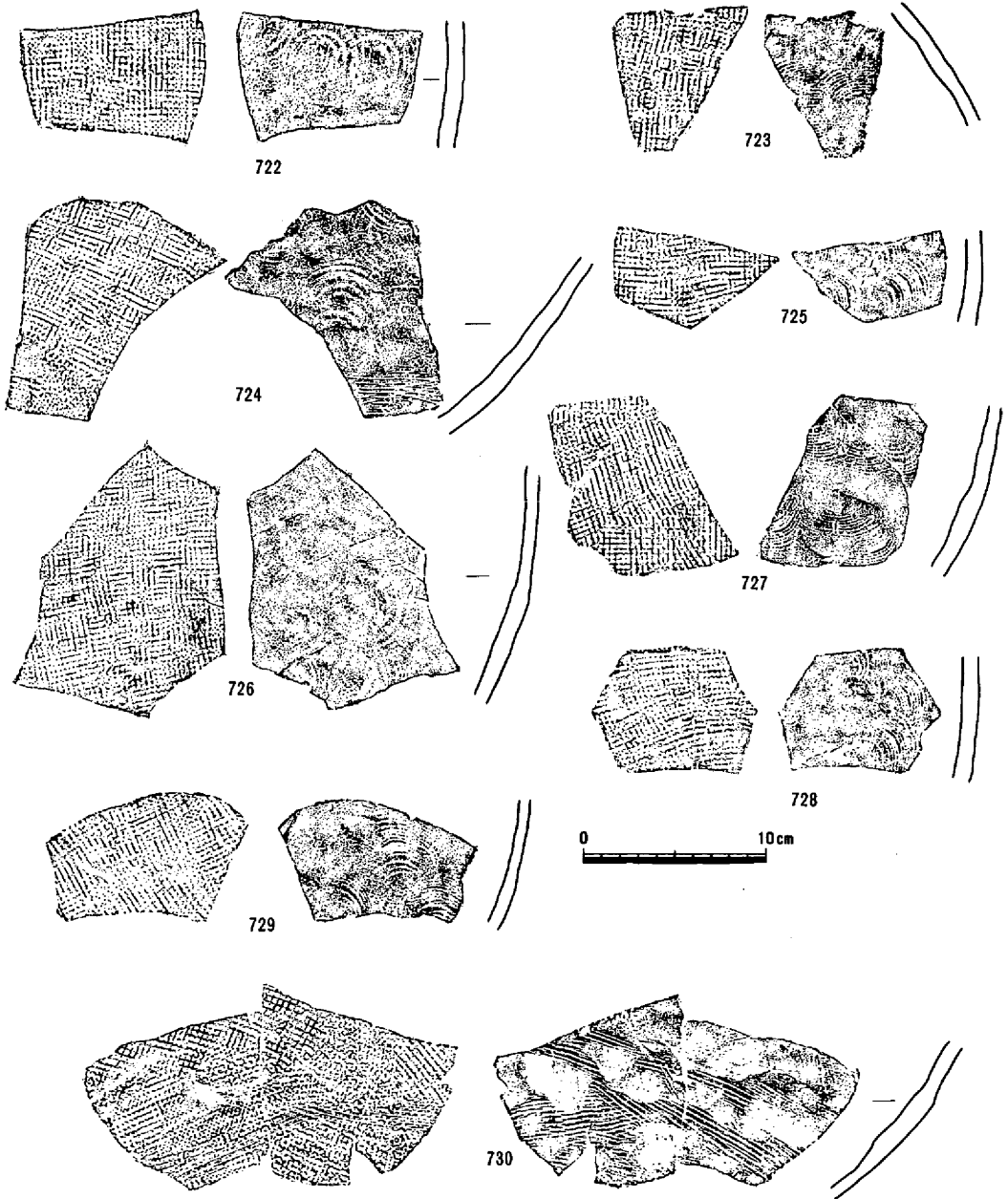


第142図 土器溜り10出土遺物(9) (1/4)

タタキの痕跡も顕著である。卸し目は、対射状をなし738～742のように櫛描き状で細い条線と、743のようにやや太目の条線が看取されるものの二通りがある。また、740のように、放射状の卸し目の上からさらに、体部内面上位部で横位の卸し目を加えるものも認められる。739には、片口部分に「井」字形のへら記号（カマジルシ）が描かれる。焼成は瓦質で、色調は灰黒色を呈する。他の鉢はむしろ淡灰色系の須恵質のものが多い。

鍋 (744)

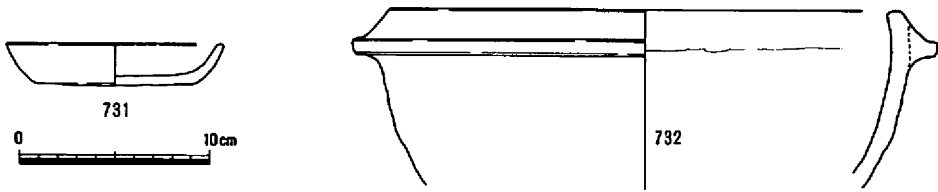




第143図 土器溜り10出土遺物(10) (1/4)

1点のみ小片が出土している。口縁部はわずかに肥厚し、直線的である。体部も弧を描かず直線的に下降する。須恵質焼成で、淡青灰色を呈す。内外面共にナデ調整を主体とし、体部内面の口縁部と体部の屈曲部は弱い稜をなしている。

壺 (745~752)

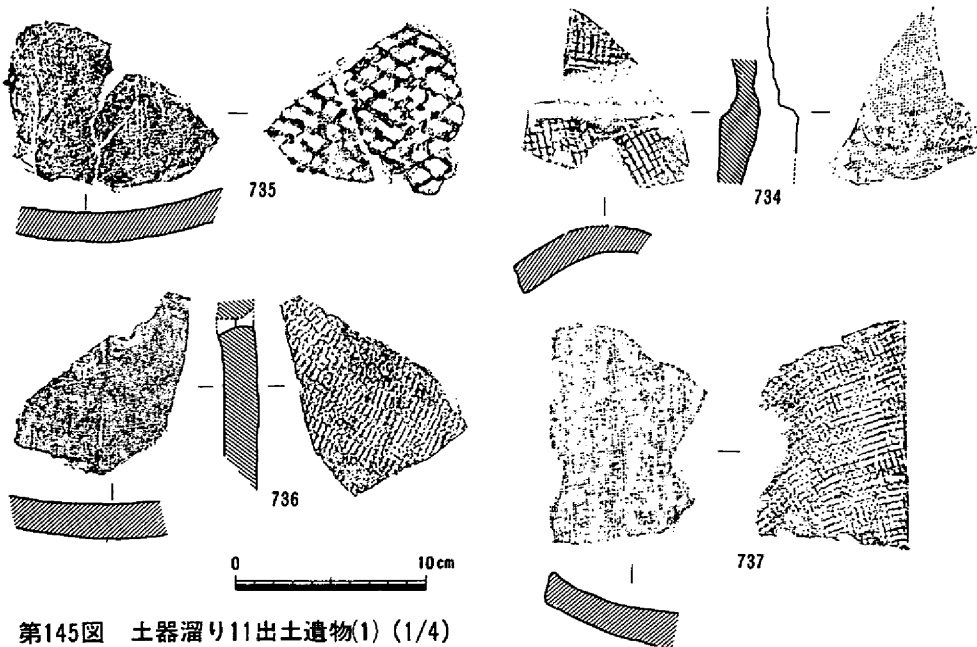


第144図 土器溜り10出土遺物(1) (1/4)

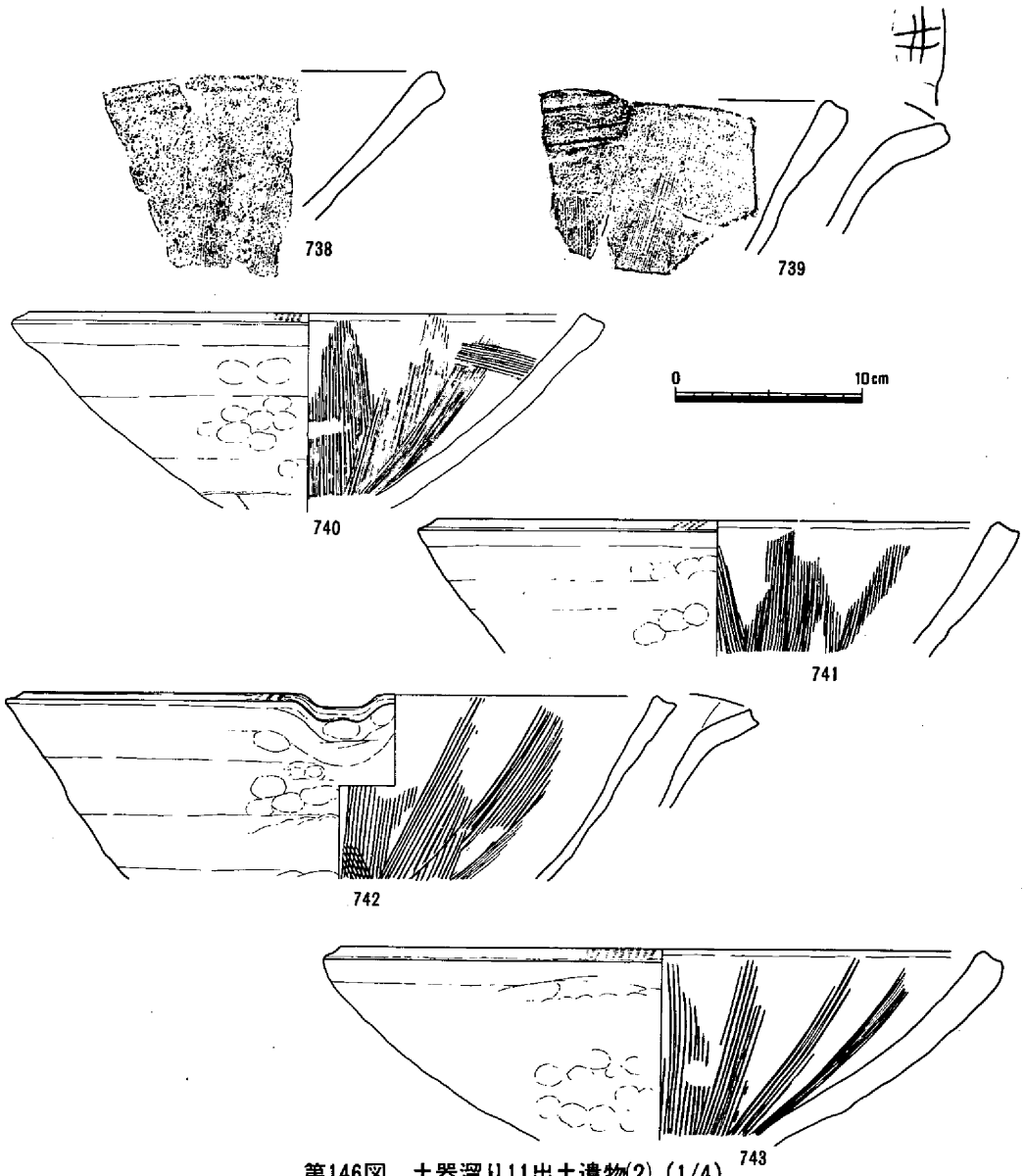
図化可能なものは少ない。体部外面に平行タタキが施されたものは全くみられず、すべて格子目タタキである。747・750のようにやや方格の大きい格子目タタキもみられるが多くは小さい方格のタタキである。体部内面の調整は745のようにやや太目の同心円タタキや、細い749のような同心円タタキの両方がみられる。この同心円タタキは、747・748のようにハケ調整によって消されるものもある。752は口縁部内面に2か所「+」字形のへら記号（カマシジルシ）が描かれている。体部内面では同心円タタキはナデ消されている。

②陶磁器 (753)

753は龍泉窯系の青磁碗である。外面は、片彫りによって蓮弁が描かれ、楯描き線が加飾される。内面は、上位に1条の横方向の沈線がめぐり、片彫りの花文が描かれる。釉調は淡灰緑色を呈しにぶい光沢を放つ。時期的には、概ね13世紀中葉前後に比定される。



第145図 土器溜り11出土遺物(1) (1/4)



第146図 土器溜り11出土遺物(2) (1/4) <sup>743</sup>

以上の出土遺物は、他の土器溜り出土のものとは比べ、量的に少ないが、確実に龍泉窯系青磁と共伴する点で、13世紀中葉以降に形成された土器溜りと考えてよいだろう。

(12)土器溜り12 (第148～162・163、図版42・96～99)

土器溜り11の東方下位約10mに位置し、巾2～3m、南北検出長約8mを測る土器溜りである。また、1号墓とは約2m下位に位置し、極めて近い。C-7の南側には、ハイガイを中心とする径約1.3mほどの小貝塚が形成されており、その下部地山面からは第5章で触れる牛の顎

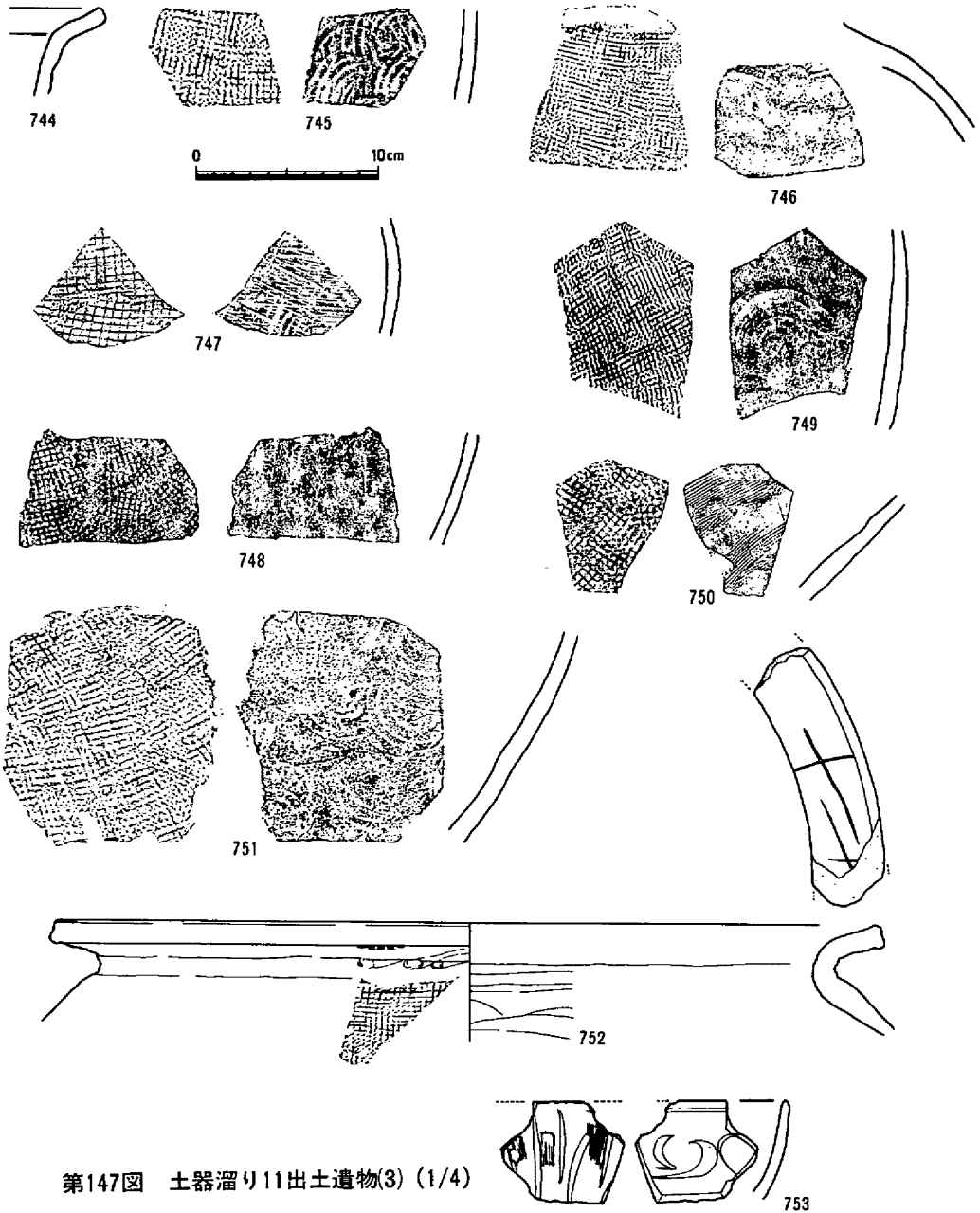
骨が出土している。

出土遺物は、大半は亀山焼で、瓦・鍋・鉢・甕のほか、土師質土器、銭貨が出土している。

以下、概略を述べる。

① 亀山焼 (754~821)

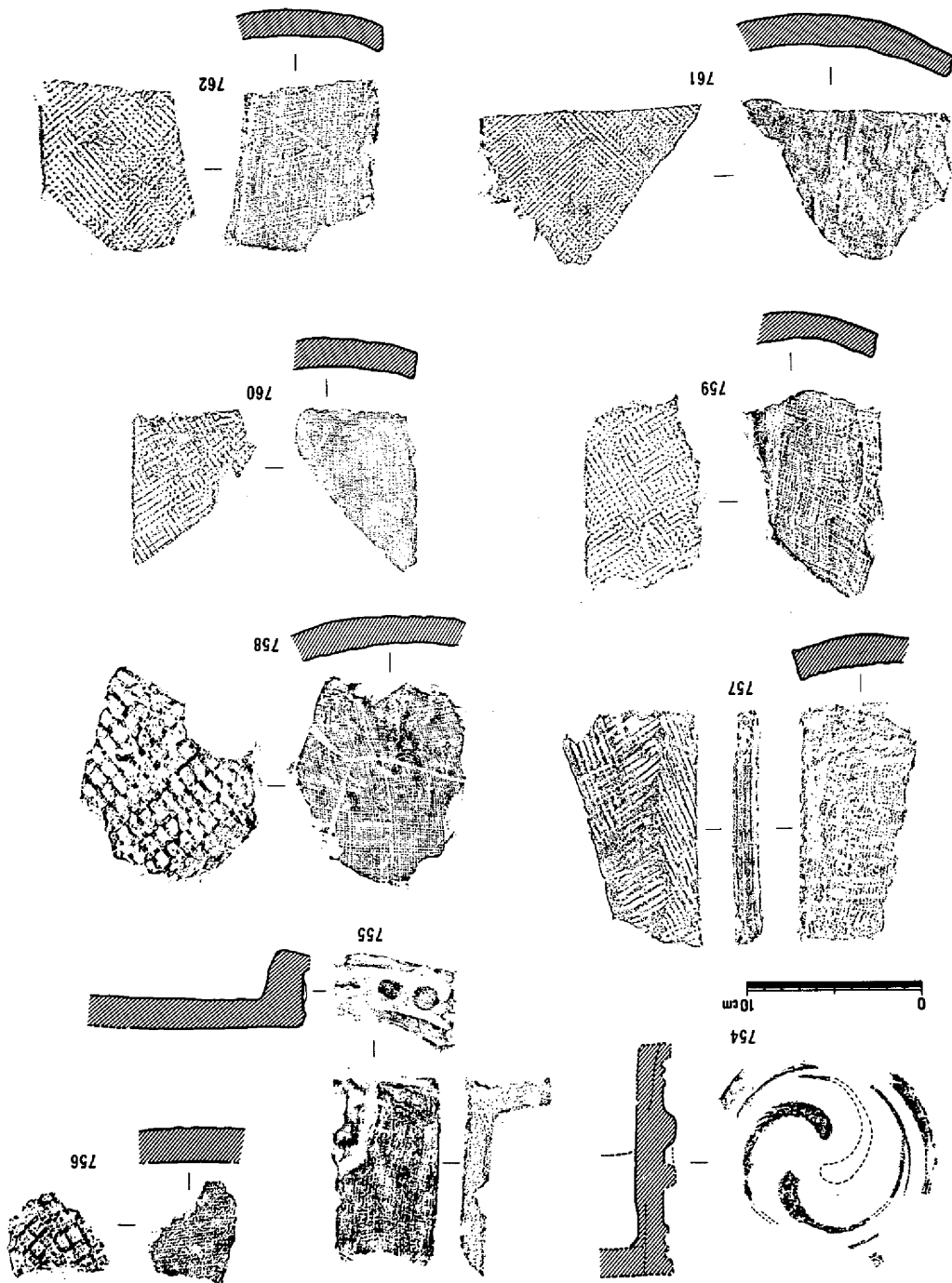
瓦 (754~762)

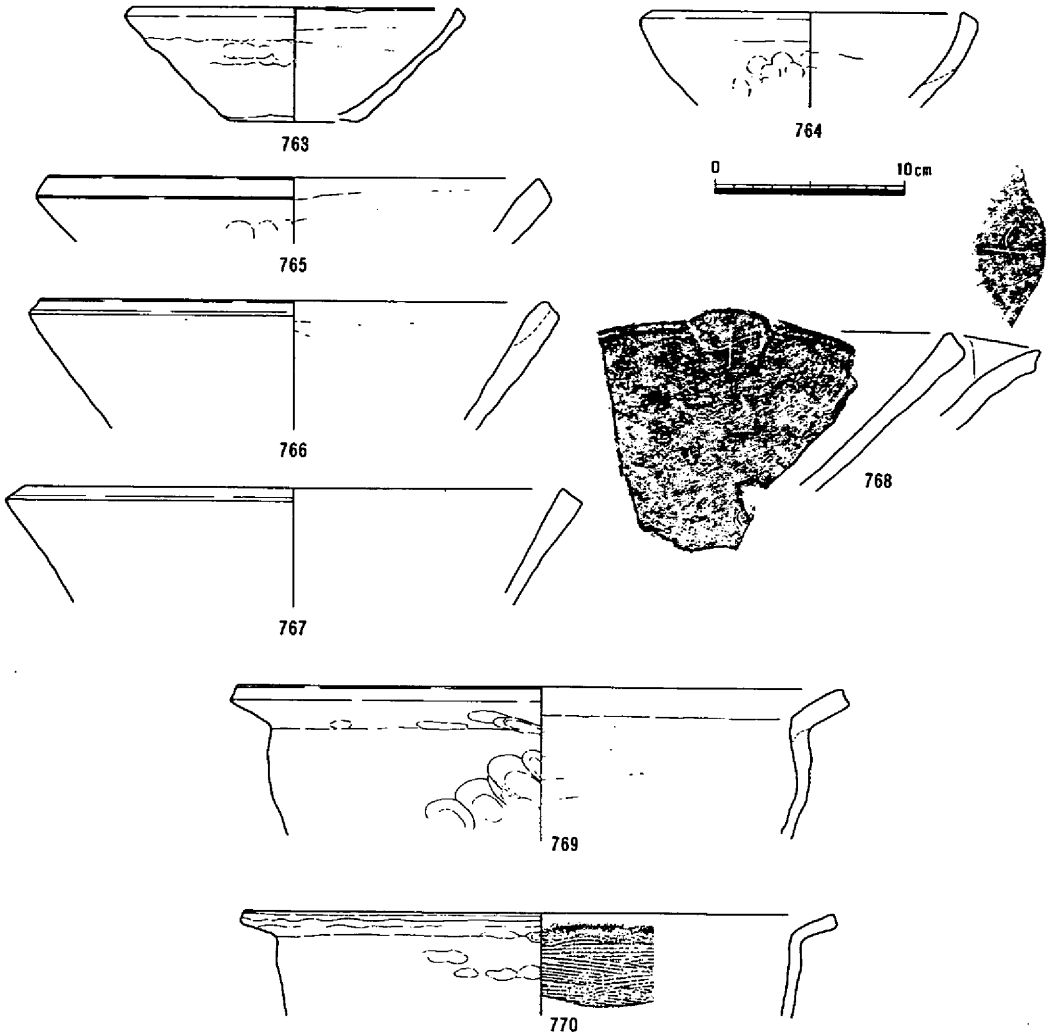


第147図 土器溜り11出土遺物(3) (1/4)

754は、右まわりの三巴文を瓦当文様とした軒丸瓦である。巴の頭部はさほど肥厚せず、尾部は細長く延びて界線を形づくる。周縁は比較的中が狭く、瓦当周縁や裏面は、ナテ仕上げが行

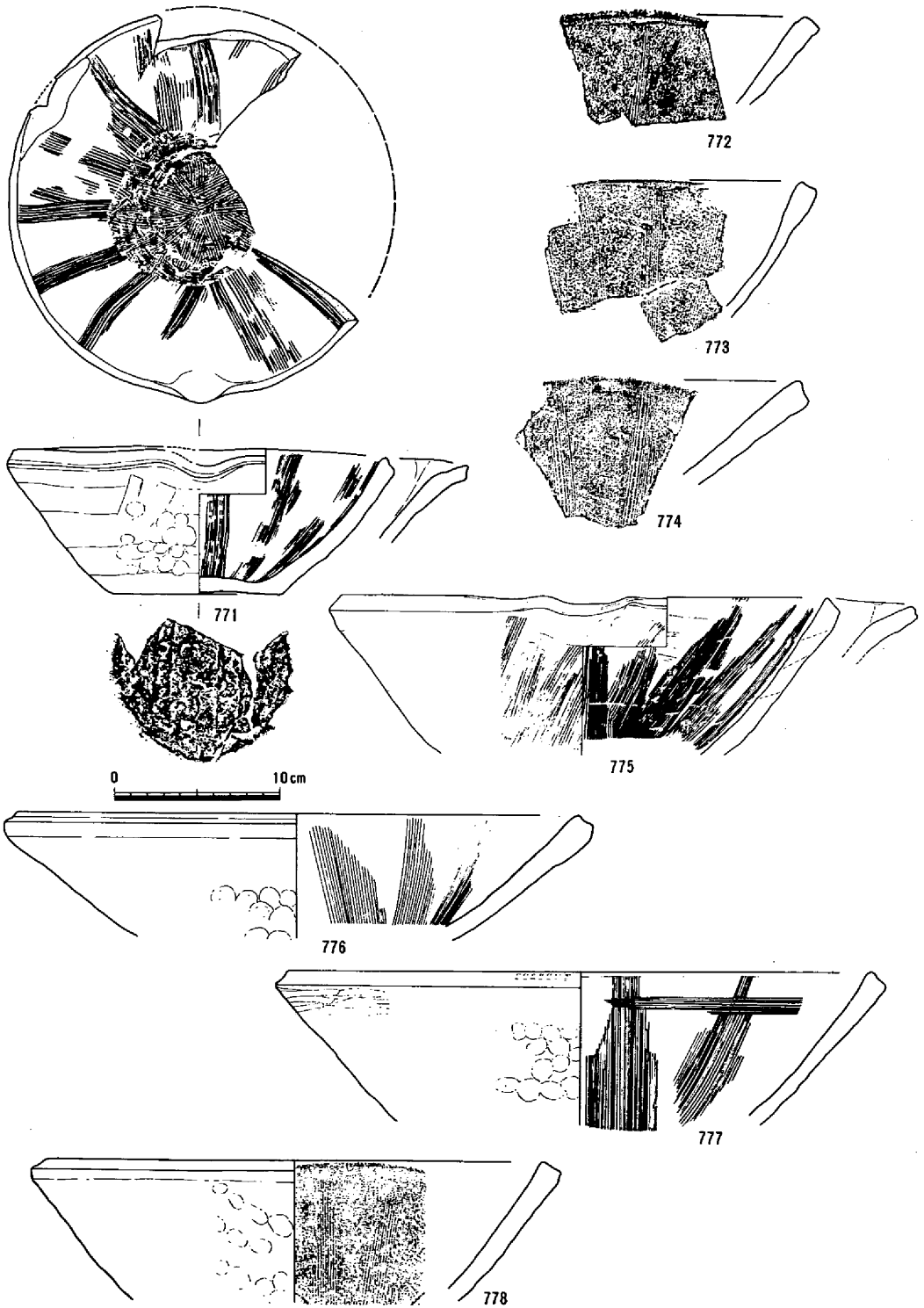
第148図 土器溜り12出土遺物(1) (1/4)



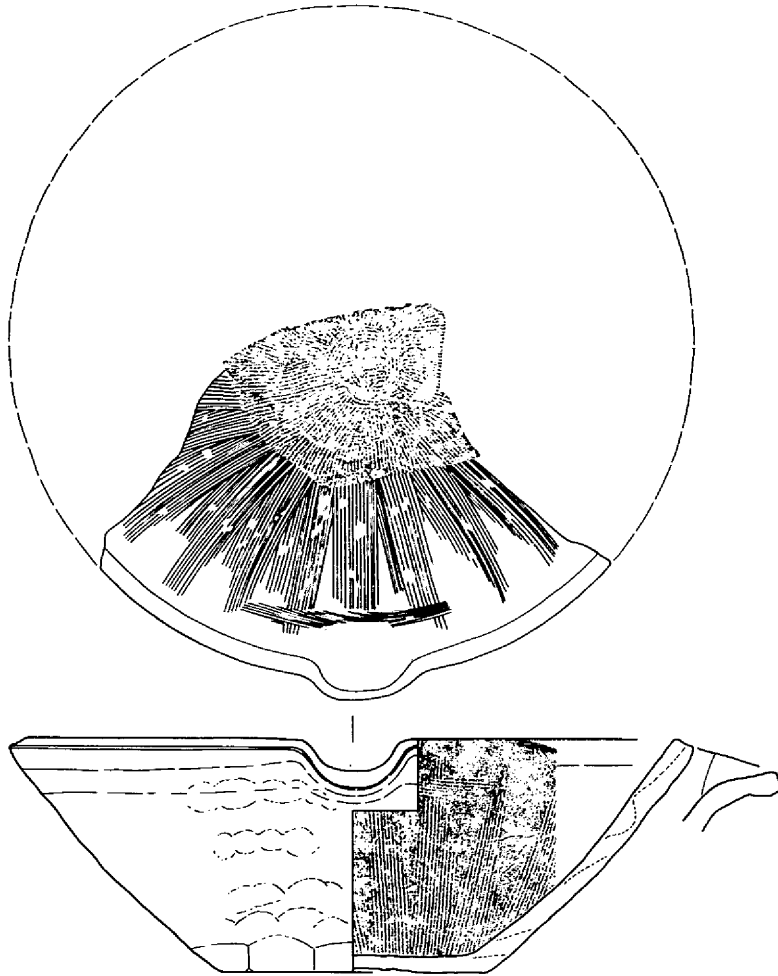


第149図 土器溜り12出土遺物(2) (1/4)

なわれている。焼成は須恵質で、白っぽい淡灰色を呈し、胎土中には石英をはじめとする砂粒が多く含まれている。755は大型珠文を配した軒平瓦で、おそらく中心飾りは唐草文と思われる。くすんだ暗灰色を呈し、軟質の焼成を示す。類似する軒平瓦は、倉敷市浅原所在の安養寺境内から出土しており、関連性が注意される(註8)。756・758は、やや粗大な斜格子タタキが凸面に施された平瓦で、いずれも凹面には布目痕が残される。758は斜格子というより長方形に近い方格を示す。757は平行タタキが凸面に施された平瓦で、側縁に斜行し、交互にタタキ板が移動しているため綾杉状を呈している。側縁は鋭い刃物で切り放されている。759～762は、甕の体部外面に施されているのと同じ格子目タタキが看取され、凹面には布目痕が残る。これらはいずれも外面は暗灰色～灰青色を呈し、器内の中央部は黒色を呈している。これは、器肉



第150図 土器溜り12出土遺物(3) (1/4)



779

の厚い甕や、鉢の体部にもしばしば認められる特徴である。

**鍋 (769~770)**

2点の出土が確かめられた。いずれも体部外面には指頭押圧痕が残され、口縁部は



0 10cm

第151図 土器溜り12出土遺物(4) (1/4)

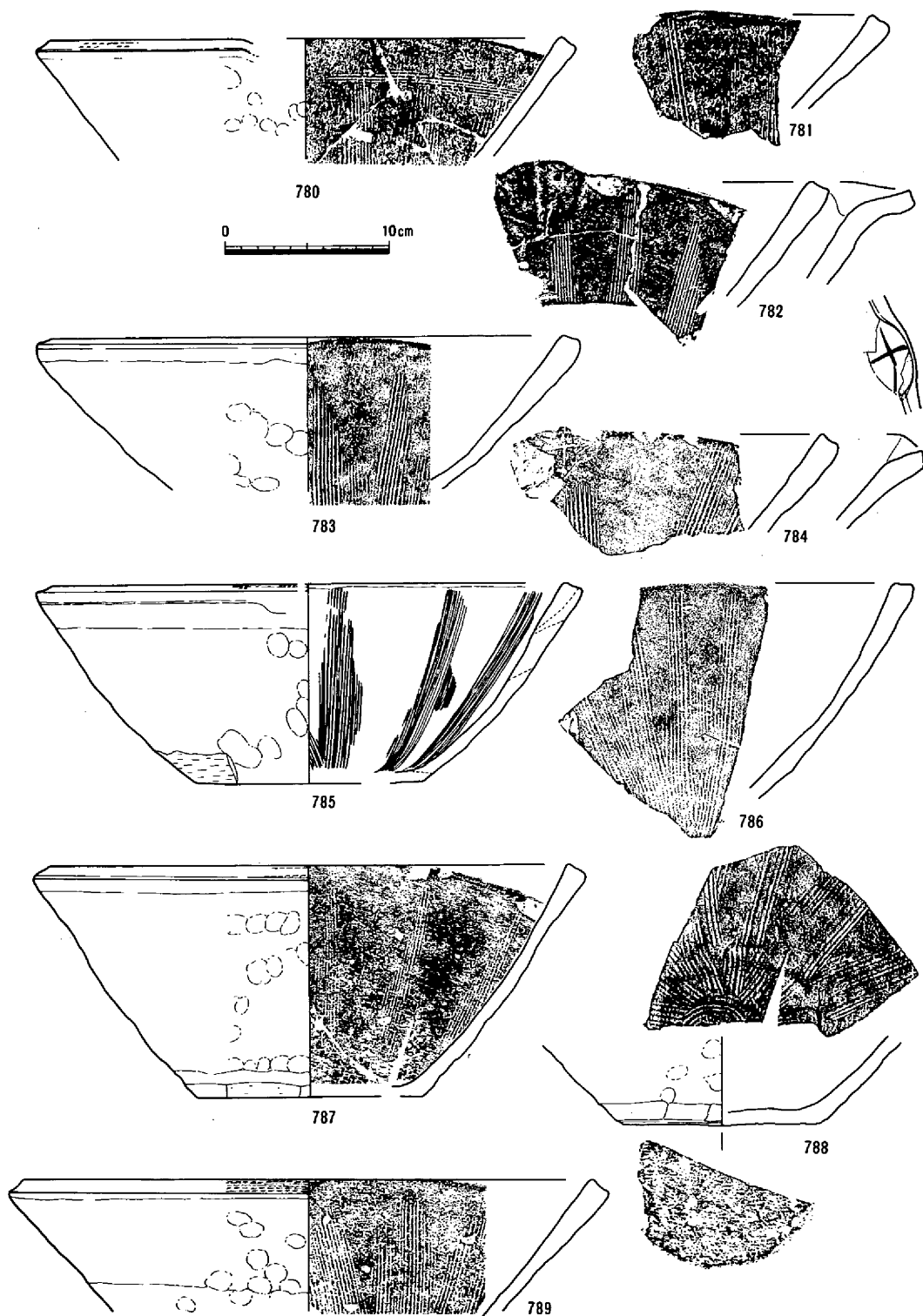
かに肥厚する口縁端部に達する。769には横

位のナデ調整、770には荒い横位のハケ調整が行なわれている。いずれも、淡灰色を呈し、須恵質焼成を示す。

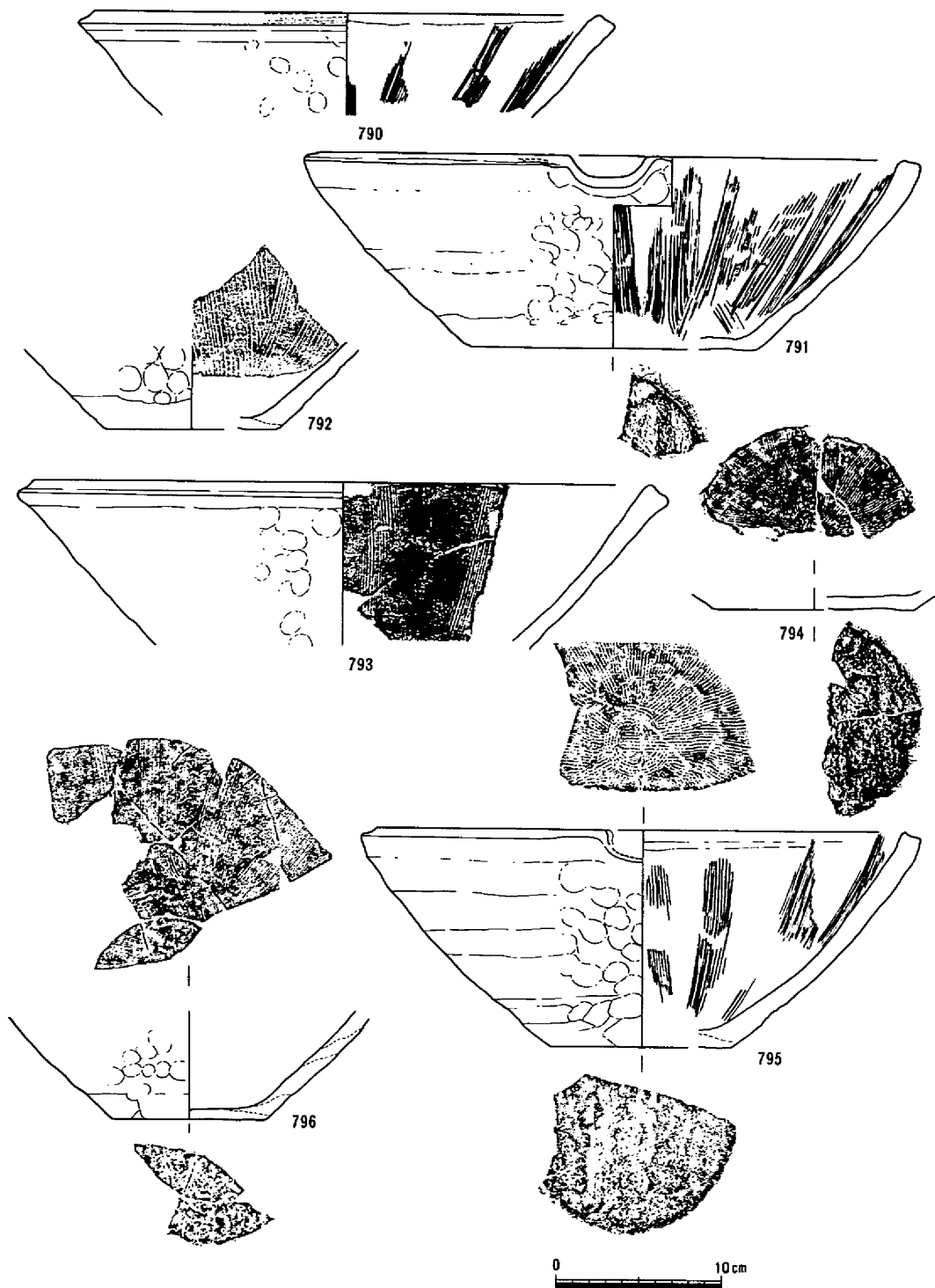
**鉢 (763~768、771~809)**

763~768は捏鉢、771~803は擂鉢、804~809は盤状の鉢である。763は口径17cm、器高6cm、底径7cmを測る小型の捏鉢である。いずれも内面はナデ調整で仕上げられている。体部外面には、

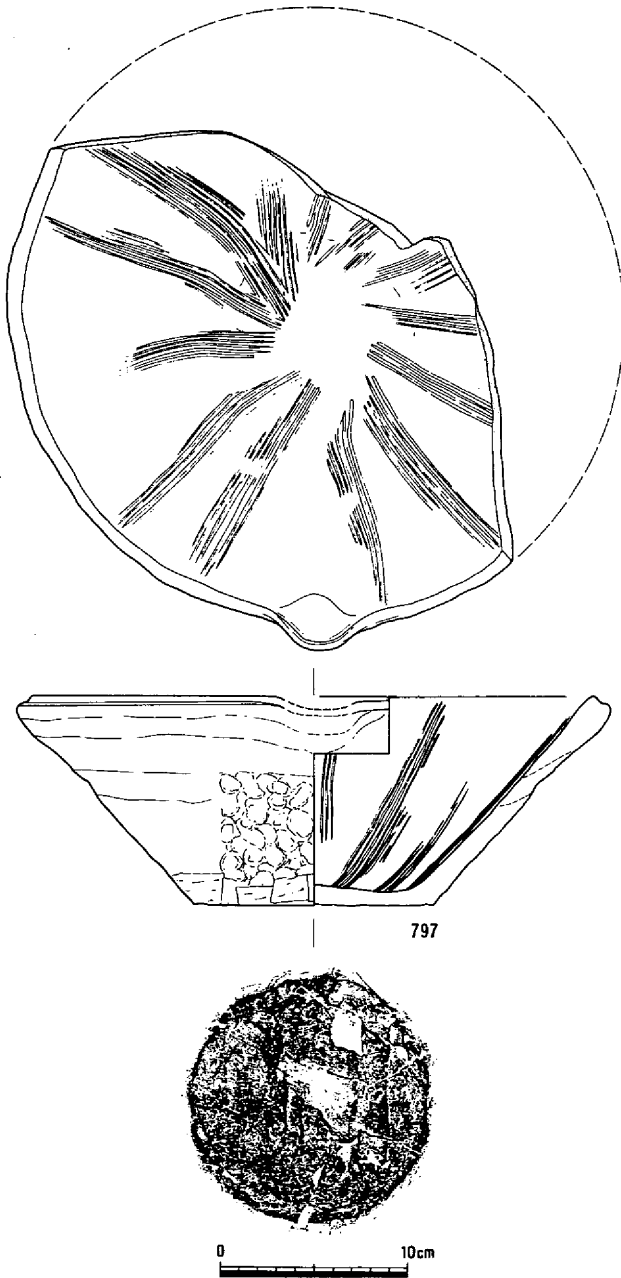




第152図 土器溜り12出土遺物(5) (1/4)



第153図 土器溜り12出土遺物(6) (1/4)



第154図 土器溜り12出土遺物(7) (1/4)

テ調整で仕上げられているが、指頭押圧痕がよく残されている。口縁部は、やや肥厚して端部が窪む甕口縁端部の特徴と共通するものが多いが、丸くおさまる805・806などもみられる。体部外面の下端は、横位のヘラケズリが行なわれる。806の体部上位には、斜方向に穿たれた小孔がみられる。807～809は、外底部に低い脚が付けられ、口縁部と体部が明確にわかれ、「く」字

指頭押圧痕が例外なく認められる。768の片口には、「×」のヘラ記号(カマジルシ)が描かれる。771～795は、体部内面の卸し目が櫛描き状を示し、20～30条ほどの卸し目が施される。縦方向の卸し目のほか、777・779・780など、横位の卸し目に加ええられるものもみられる。また、内底部には、体部からの卸し目が交叉するだけの771・794・797のほかに円弧を加える、779・778などの播鉢も認められる。796～803は、卸し目の1条がやや荒く硬い板状の工具によってつけられたと思われる深くで強い条線となっているものである。この荒い卸し目の播鉢には、横位の卸し目に加えられることは少ないようである。801・802のように、備前焼の播鉢の卸し目を想起させるものも散見する。外底部が残存するものについては、大型・小型を問わずほとんどすべてに下駄印が認められる点が特徴的である。804～806は、浅鉢あるいは盤ともいべき器種で、土器溜り9出土の615などもこれらに類似するものであろう。体部の内外面は、ナ

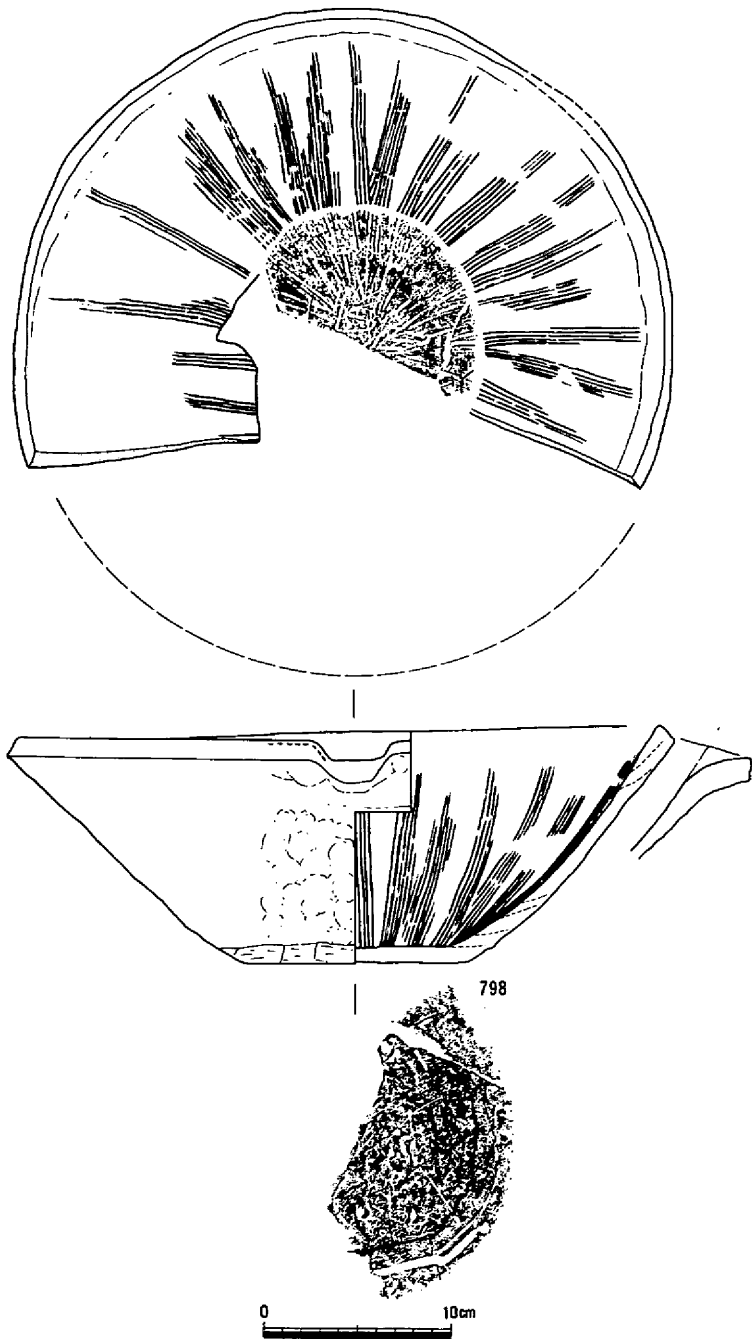
形に屈曲するもので、残存部の間隔等から、3箇所貼り付けられたようである。808には、脚部をも貫通する小孔が穿たれているが、その機能については不明である。809の内底部には、同心円タタキが残されており、甕と同様の手法が用いられている点の特筆されよう。804・805は、白灰色～淡灰色、806～809は黒斑状の黒色部分が目立つ橙褐色を呈している。これらの器種は従来、亀山焼として広く知られていないものである。

**甕 (810～821)**

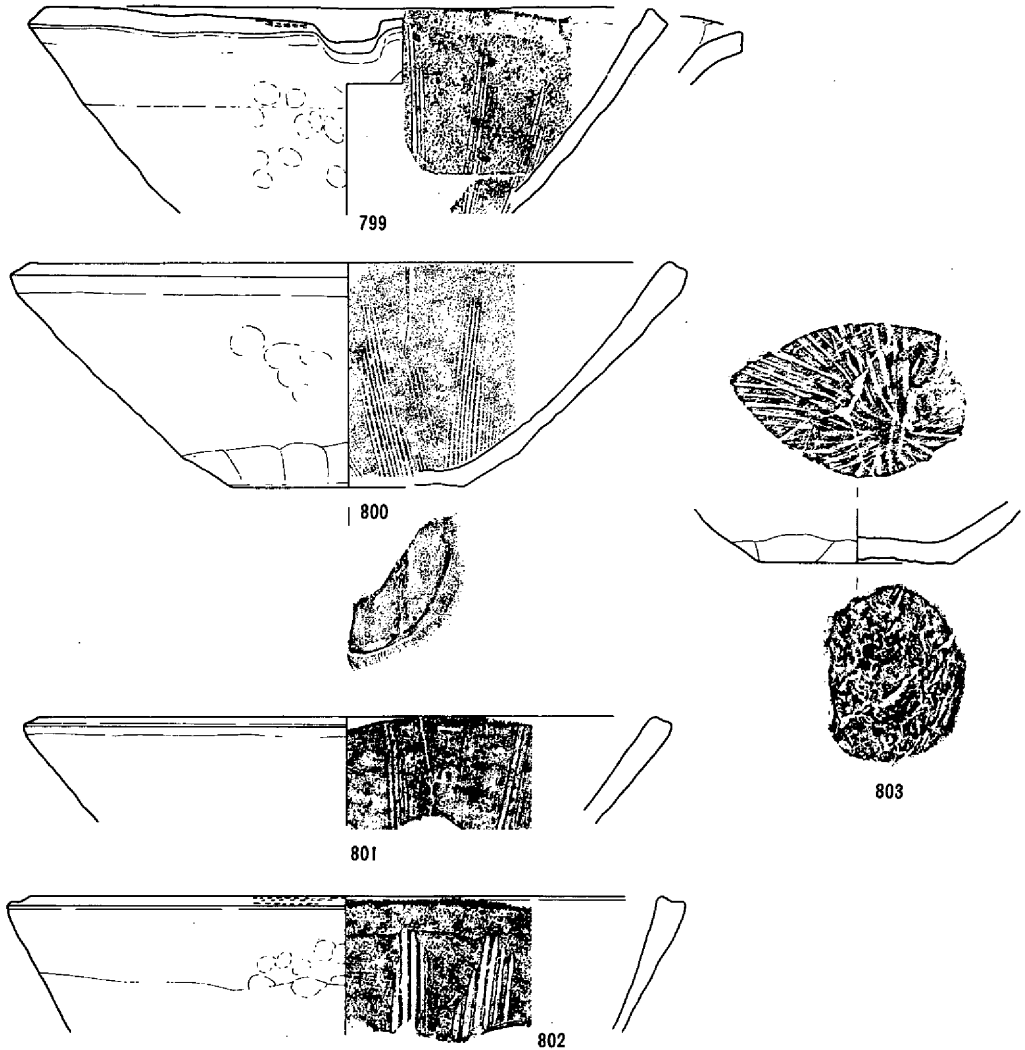
口縁部の外方へ屈曲が弱い810・811のほかは、すべて屈曲の強い形状を示す。いずれも体部外面には、格子目タタキが施されるが、前者はやや方格が不揃いで大きく、後者は小

さい。体部内面は、基本的に同心円タタキが施されるが、810・811はナデ消されている。さらに、813や816や821の大型品まで、丁寧にナデ消されているものが含まれている。同心円タタキは細目のものが多い。815には当て具の先端がヒビ割れて、放射状の細い線が認められる。

818は小型の甕であるいは壺の体部で、外底部には下駄印が残る。819や820には、体部内面に



第155図 土器溜り12出土遺物(8) (1/4)

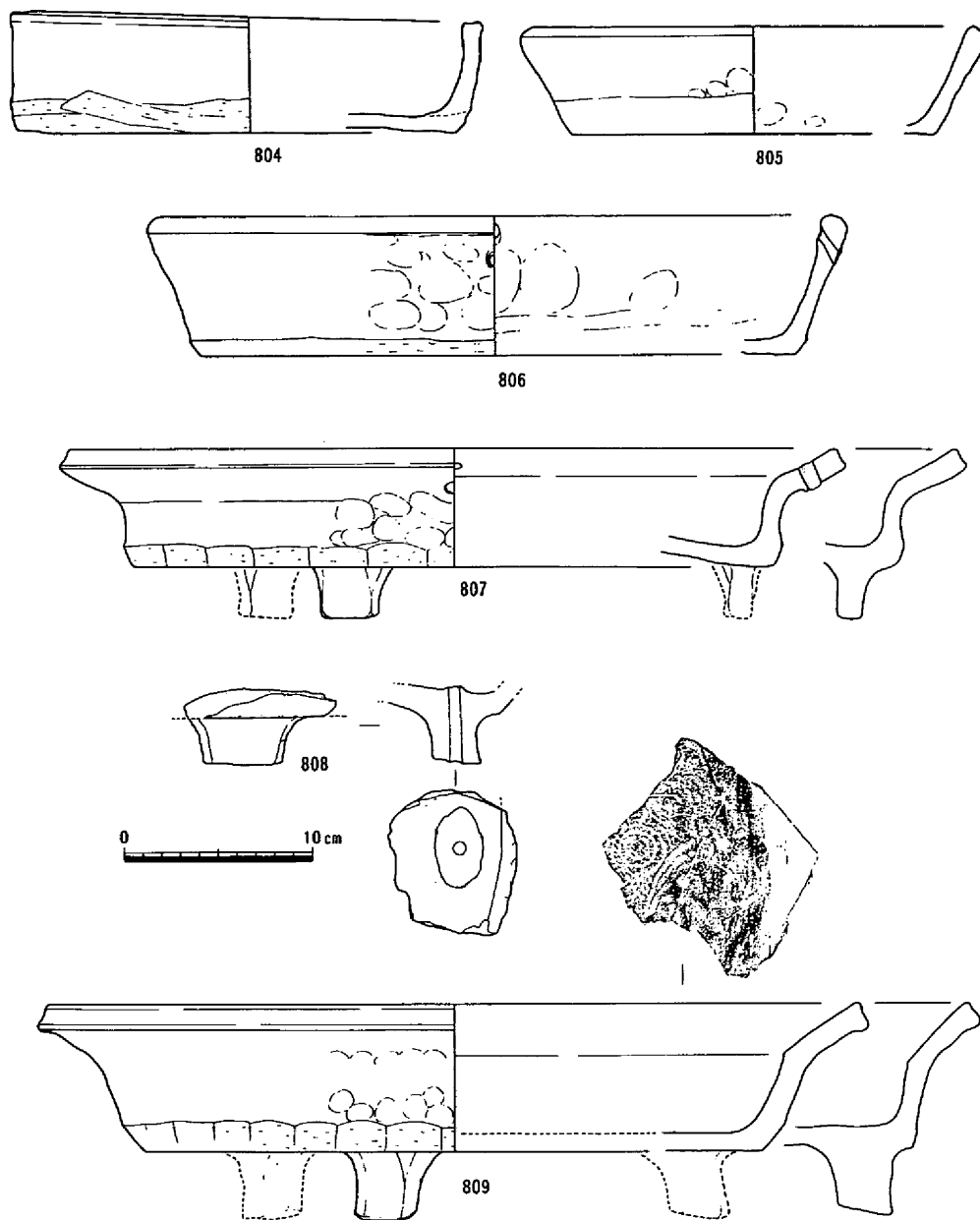


第156図 土器溜り12出土物(9) (1/4)

横位のナデ調整が施されているが、硬目の板状工具が用いられたと考えられる縦方向のエッジが看取される。以上の亀山焼では、甕の口縁部片の出土量は少なく、様々な鉢に見るべきものが多い土器溜りといえよう。

②土師質土器 (822～824)

822は、扁平な小皿である。外底部は、丸味をもっており、ナデ仕上げを行っている。823・824は、鍋と考えられ、それぞれ小型・大型である。いずれも外方する口縁部をもち、口縁端部は丸味をもって肥厚する。体部内面は、横位のハケ調整が施される。外面は、823ではナデ調整痕と押圧痕、824では縦位のハケ調整が施されている。いずれも淡黄橙色を呈し、微砂粒を多く含む胎土が看取される。

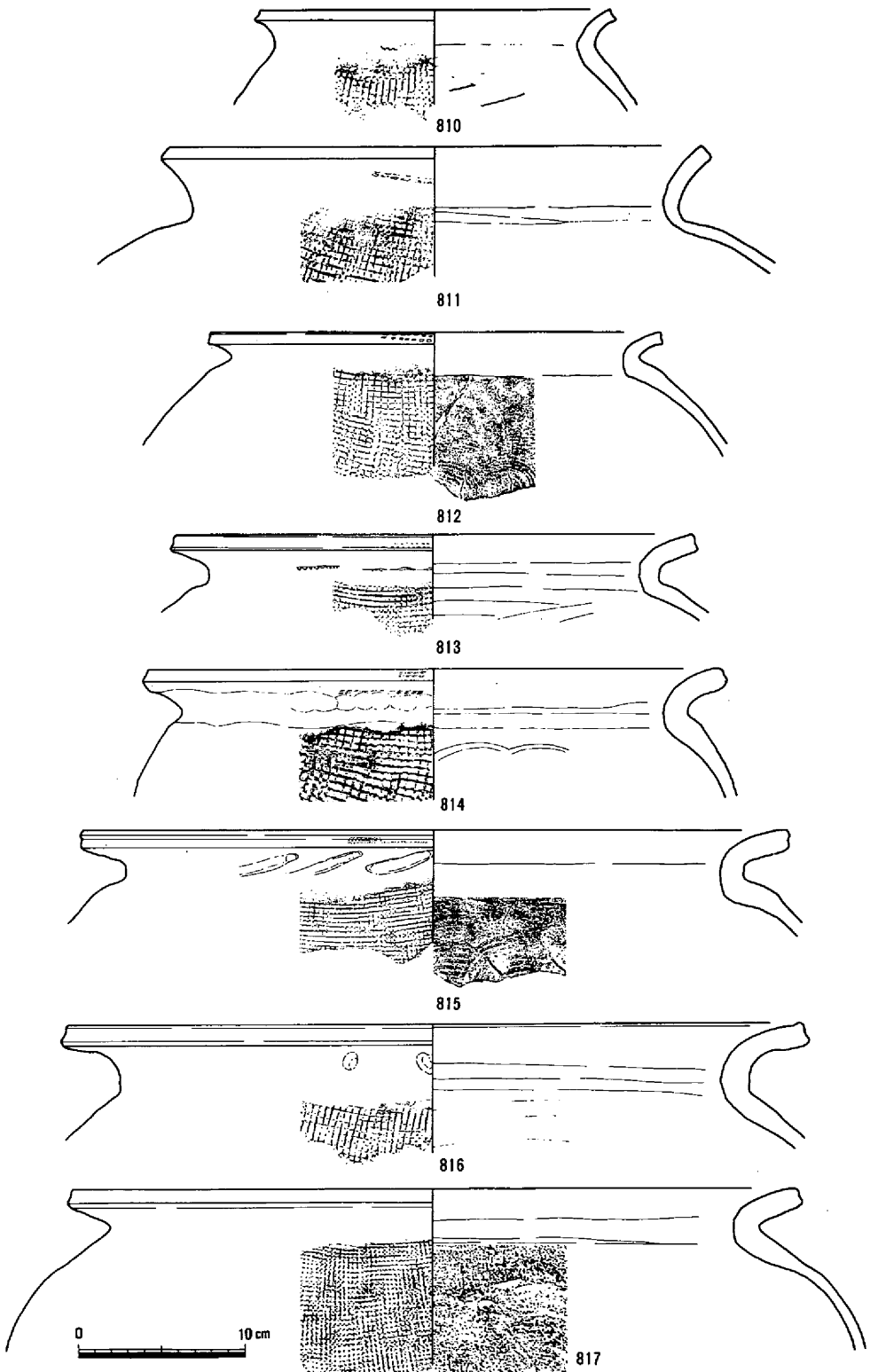


第157図 土器溜り12出土遺物(10) (1/4)

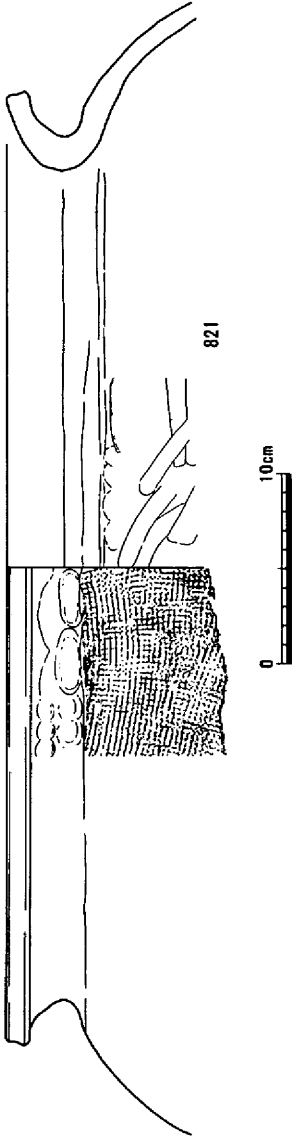
③銭貨 (M-8・M-9)

2枚の北宋銭が出土している。M-8は至道元宝で、初鑄年はA.D995年である。M-9は元祐通宝で、初鑄年はA.D1086年である。いずれも土器溜りの下層で出土している。

以上、出土遺物の概要について述べた。この土器溜りの上面には、すでに触れたハイガイを中心とした小貝塚が存在しており、このハイガイの貝殻によって、 $^{14}\text{C}$ による炭素年代測定を実



第158図 土器溜り12出土遺物(1) (1/4)



第160図 土器溜り12出土遺物(13) (1/4)

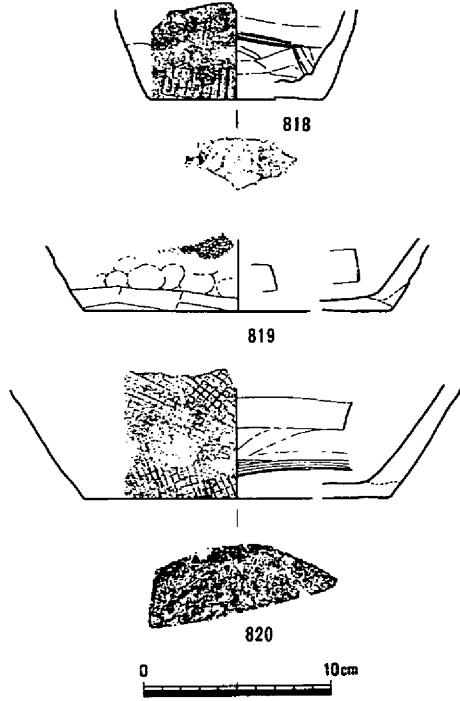


M-8

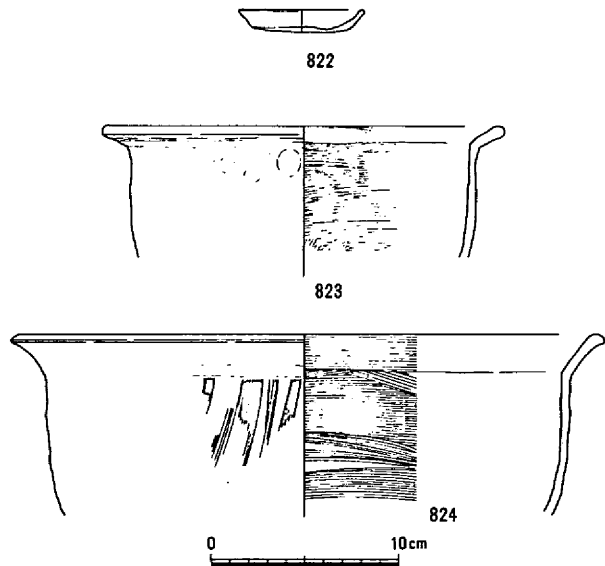


M-9

第162図 土器溜り12  
出土遺物(15) (1/2)



第159図 土器溜り12出土遺物(12) (1/4)



第161図 土器溜り12出土遺物(14) (1/4)



施した。その結果、B.P580±20年、年輪年代に換算するとA.D1350±20年、すなわち14世紀中葉前後という年代が推定されている。対象試料の量も多いこともあって、かなり精度の高い数値と考えられている。

### 小結

以上、亀山焼に深く関わる窯業生産関連遺構の調査結果について述べた。窯はいずれも焚き口から煙突(道)まで完存し、しかも個々の窯に純粹に伴う灰原を検出することができなかった。しかし、勾配の緩やかな窖窯ともいえる窯体は、基本的に登り窯である。1・2・4号窯では、数次にわたる修復が行われたことが確かめられ、そのたびに焚き口がせりあがっていく点が興味深い。1号窯の床面は岩盤をそのまま利用しており、窯体構築には並々なぬ勞力が費されたことが推察される、また3号窯には、分焰柱が遺存していた点は注意される。

規模から考えて、製品の焼成後には、窯体の焚き口部分に近い天井を壊して中の焼造品が取り出されたことが推考される。床面に残された、個々の窯に伴う製品は、多くを発見することはできなかったが、2号窯や6号窯で検出された土手状に残された一括遺物は、その機能と共に、重要な遺物と考えられる。また、1号窯の廃絶後に堆積した多数の亀山焼は生焼けに近いものが多く、上位部の窯で焼成された不良品の一括遺物とも考えられる。窯体のすべてについては、熱残留磁気による年代測定を実施した。窯体の残存度や、形質等の相違により誤差や信頼度は異なるが、一応の成果が得られたことは評価される。

一方、灰原としては、4号窯南西の灰原1のみ検出されたが、これには、伴う窯体が検出されなかった。しかし、出土品は、比較的まとまった一括性が確かめられており、しかも甕の中に平行タタキが施されたものが顕著である点が注目される。幸い、木炭の出土量が豊富で、<sup>14</sup>C年代測定も実施することができた点は、注目に値する。また、土師質土器の混入により、従来続けられている中世土師器の年代比定との比較も可能となった点は、大きな収穫である。

遺跡の各所で検出された、土器溜り・土壙はそれぞれ、二次的な堆積があったり、生活遺構との関わりによって出土遺物の一括性については、均質性を欠く。しかし、日常生活に用いられた遺物と混じっていることで、年代観が形成される場合もあり、混沌とした出土遺物の中にも、新たな知見が含まれている点を強調しておきたい。(岡田)

## 第2節 生活関連遺構の調査

### 1. 建物・柱穴群(第6・7・163~171図、図版45~47・101)

遺跡内の各所で、小規模な柱穴群が検出されている。まず、1号窯の北側の平坦面に数本(第

7 図) 検出されているが、建物それも窯の操業に関わる覆屋などの建築物としてまとまる規模を示さない。このような数本単位で柱穴が検出された箇所は、土器溜り 7 の南東下段(第 6 図)にみられる。特に柱穴が集中して検出された部分は 2 か所で、高位部の B-7 から B-8 にかけての範囲と、C-8 の南側低位部分である。

遺跡の高位部分に位置する B-7 と B-8 間の南側では、比較的柱穴が集中して検出されている。柱穴は、径 15~50cm、深さ 8~35cm ほどの円形を呈するものが大半を占める。土器溜り 8 と土器溜り 9 にはさまれた部分で掘立柱建物が 1 棟検出された。これについて説明を加える。

#### (1) 掘立柱建物

背後の高位部分を掘り切って平坦面を造成し建物の東西側は「コ」字形をなしている。平面規模は 2×3 間の総柱建物である。桁行は、妻側の一間は 8.5 尺前後、中央部分の 1 間は 10 尺弱を測る。梁行は、1 間 7 尺弱~7 尺を測る。棟方向は、N60°E を示す。面積はほぼ 33m<sup>2</sup> を測り、ちょうど 10 坪である。柱穴掘方は円形ないしは不整な円形プランを示し径 25~50cm、深さを 30~60cm を測り、ややバラツキがある。P-10 には明瞭な柱痕跡が看取され、径 20cm を測る柱が用いられたようである。P-8 は建て替えかあるいは、修復されたことをうかがわせ、柱穴掘方が 2 本接続している。底面には、北側には小さな角礫、南側には扁平な角礫が根石として置かれている。

出土遺物は、P-1~P-6、P-9 などで土師質土器や、亀山焼甕片(格子目タタキ)が認められる。825・826 は土師質土器小皿で、外底部はへら切りである。826 は小型の椀で、断面逆三角形を呈する貼付高台が残される。M-10 は、P-3 から出土した北宋銭で、元祐通宝である。初鑄年は A.D1086 年である。

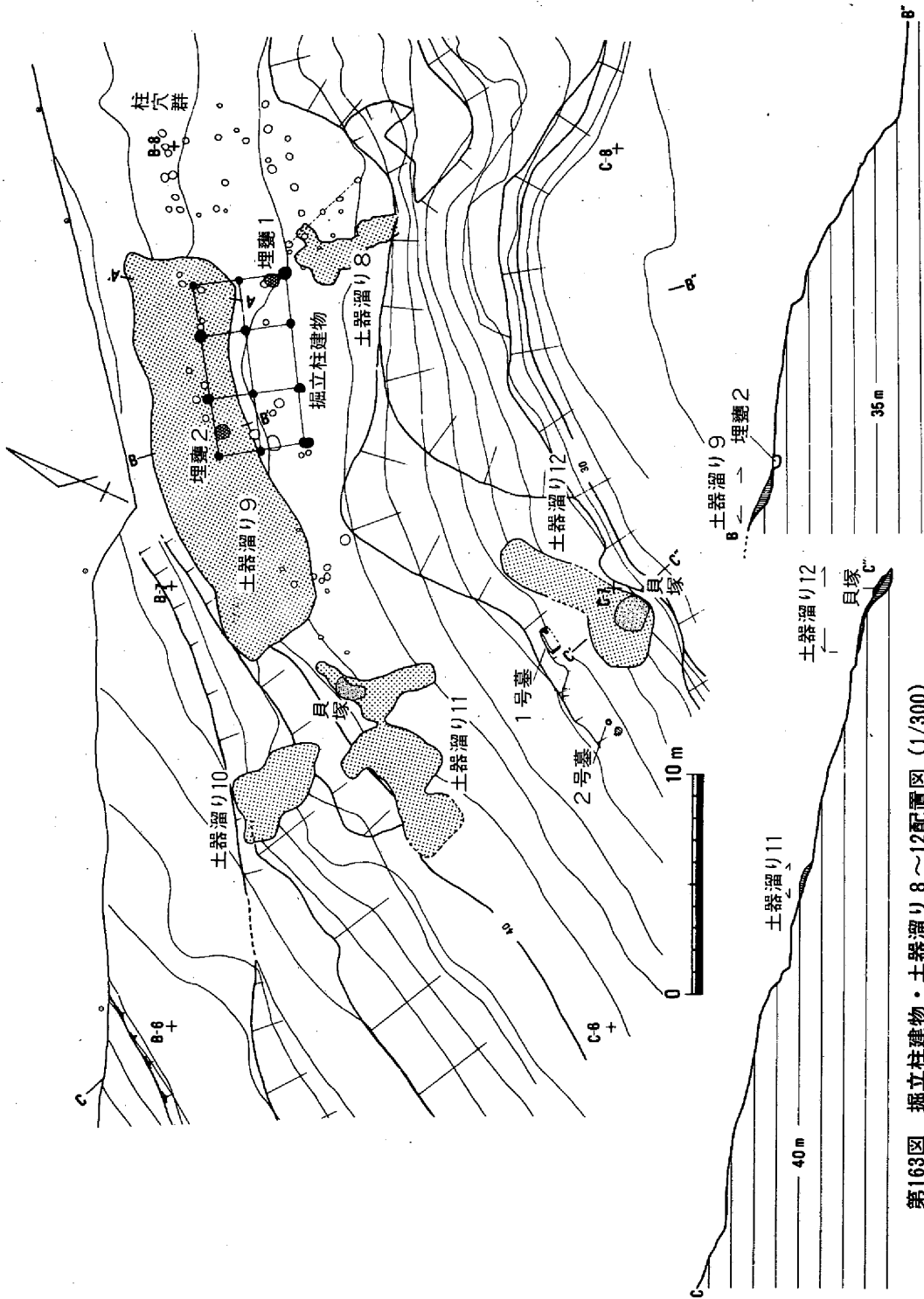
土器溜り 9 との時期的関係は、建物部分の範囲までひろがる土器溜りを除去した後検出されたことから、先行する時期すなわち、13 世紀後半頃と考えられる。

#### (2) C-8 下位柱穴群

比較的平坦に造成された、約 7×30m の範囲に、柱穴群が散在する。柱穴は円形ないしは、不整円形を呈するものが多く、径 15~50cm、深さ 5~30m 前後を測る。P-1 の周囲には、点線で描く掘立柱建物状にまとまるが、いびつであるため、建物としては認定できない。柱穴列-1~3 は、比較的柱間心々距離が等距離を示し、柱穴列-2 では約 2m、柱穴列-3 では約 2.4m を測る。おそらく掘立柱建物の一部か、柵列の可能性もある。また、P-6 には第 168 図のように柱根の一部が残存している。

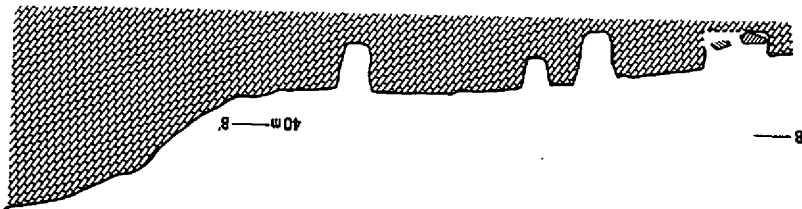
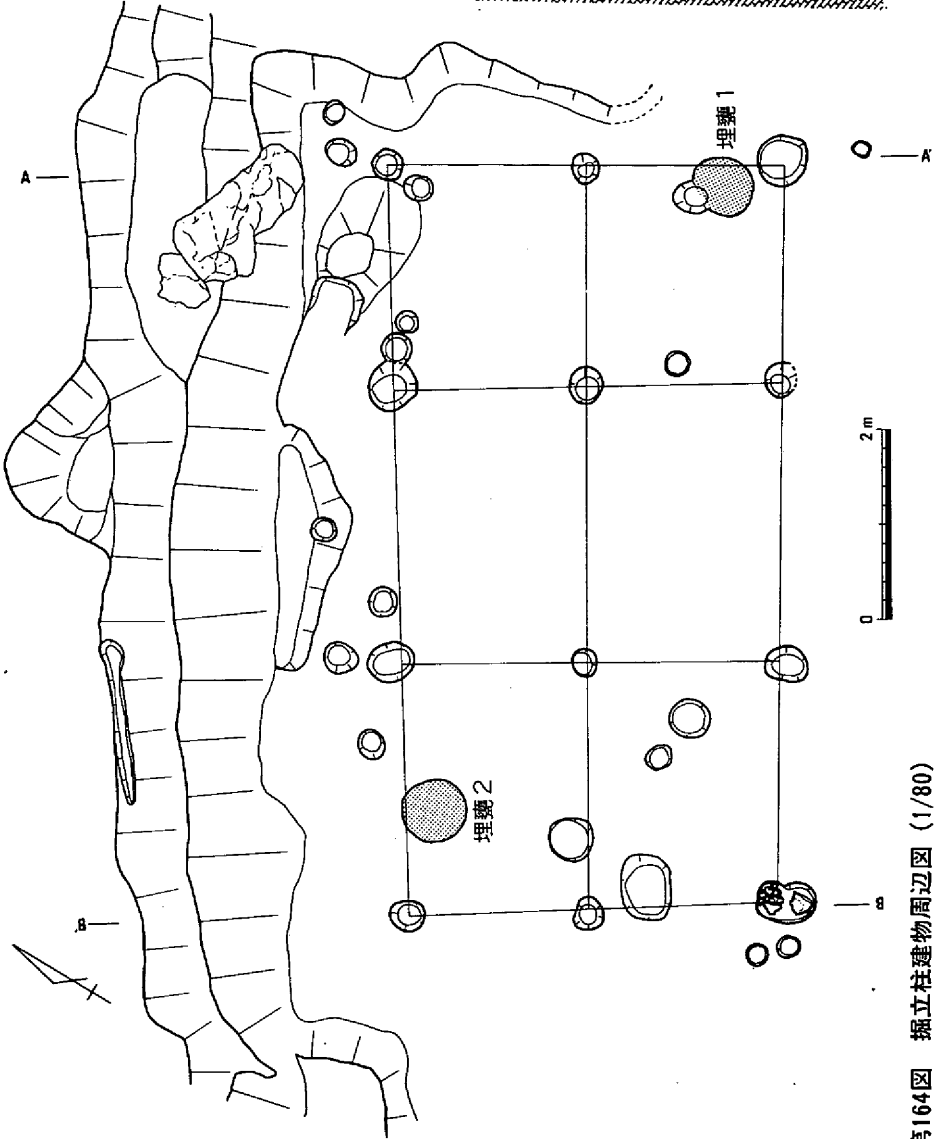
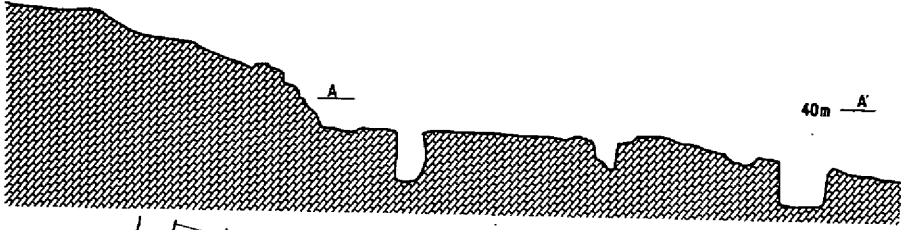
#### 出土遺物 (M-11・828~832)

P-1 からは、銅鏡が出土している、口径 9.4cm 器高 2.2~2.8cm、底径 4.2cm を測る。被熱によってかなり変形し、一部には裂けた部分もある。口縁端部は、平坦面をなし 2 か所に鍍金が

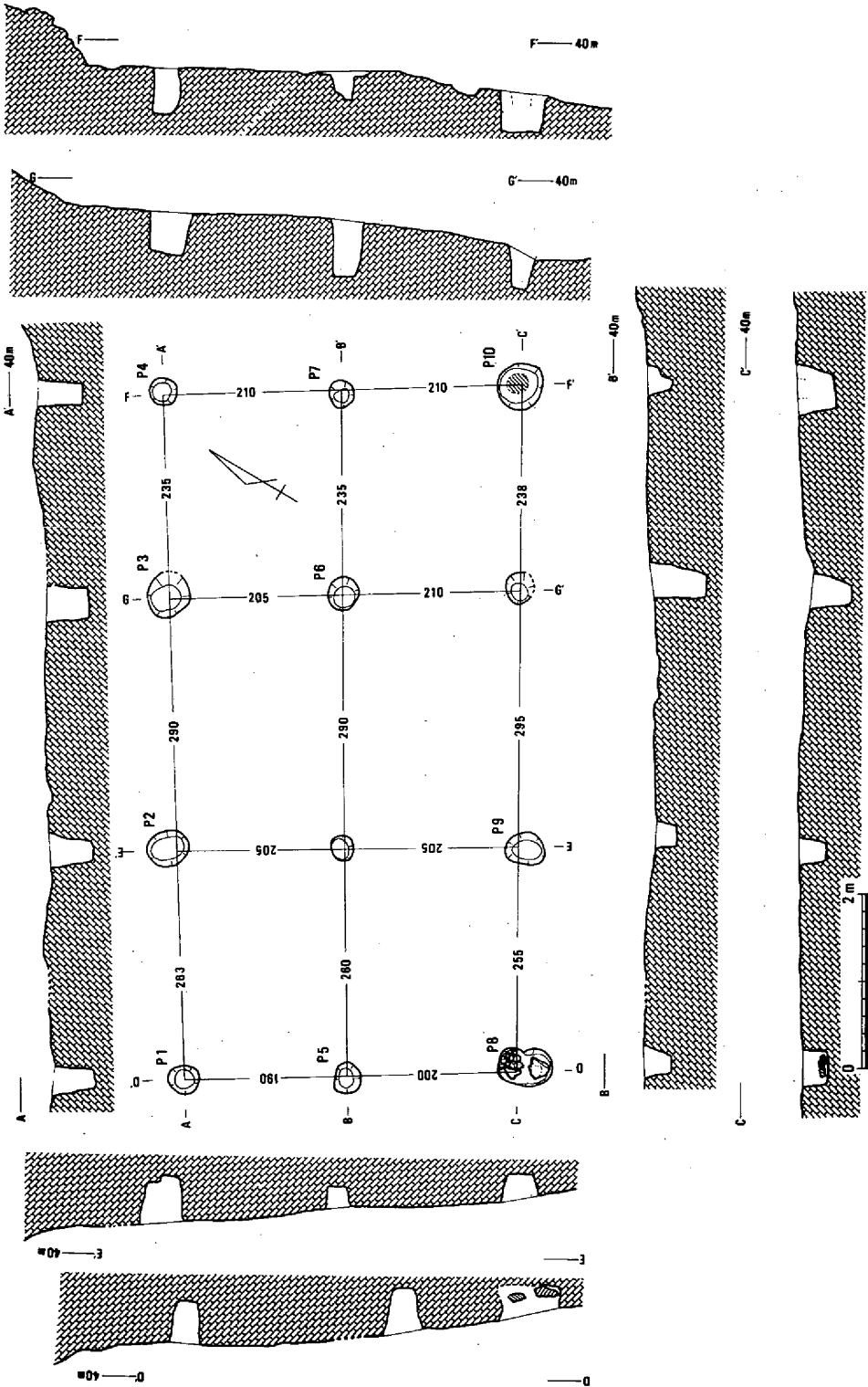


第163図 掘立柱建物・土器溜り8～12配置図(1/300)

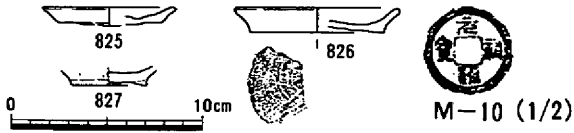
— 龟山遺跡 —



第164図 掘立柱建物周辺図 (1/80)

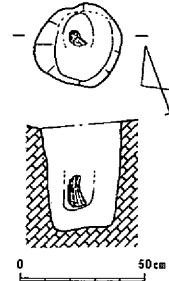
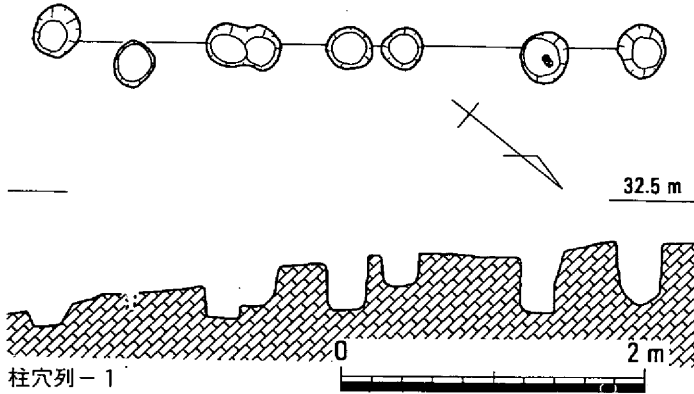


第165図 掘立柱建物実測図(1/80)

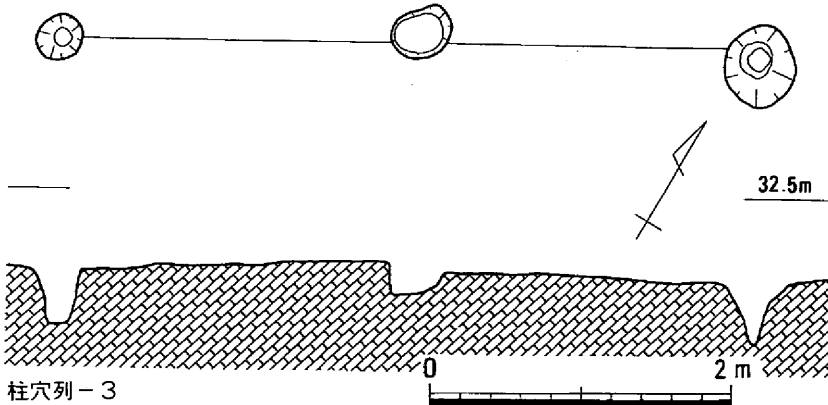
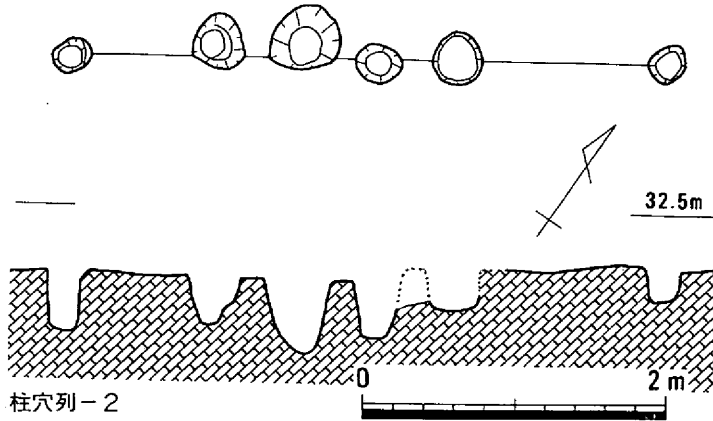


第166図 掘立柱建物出土遺物 (1/4・1/2)

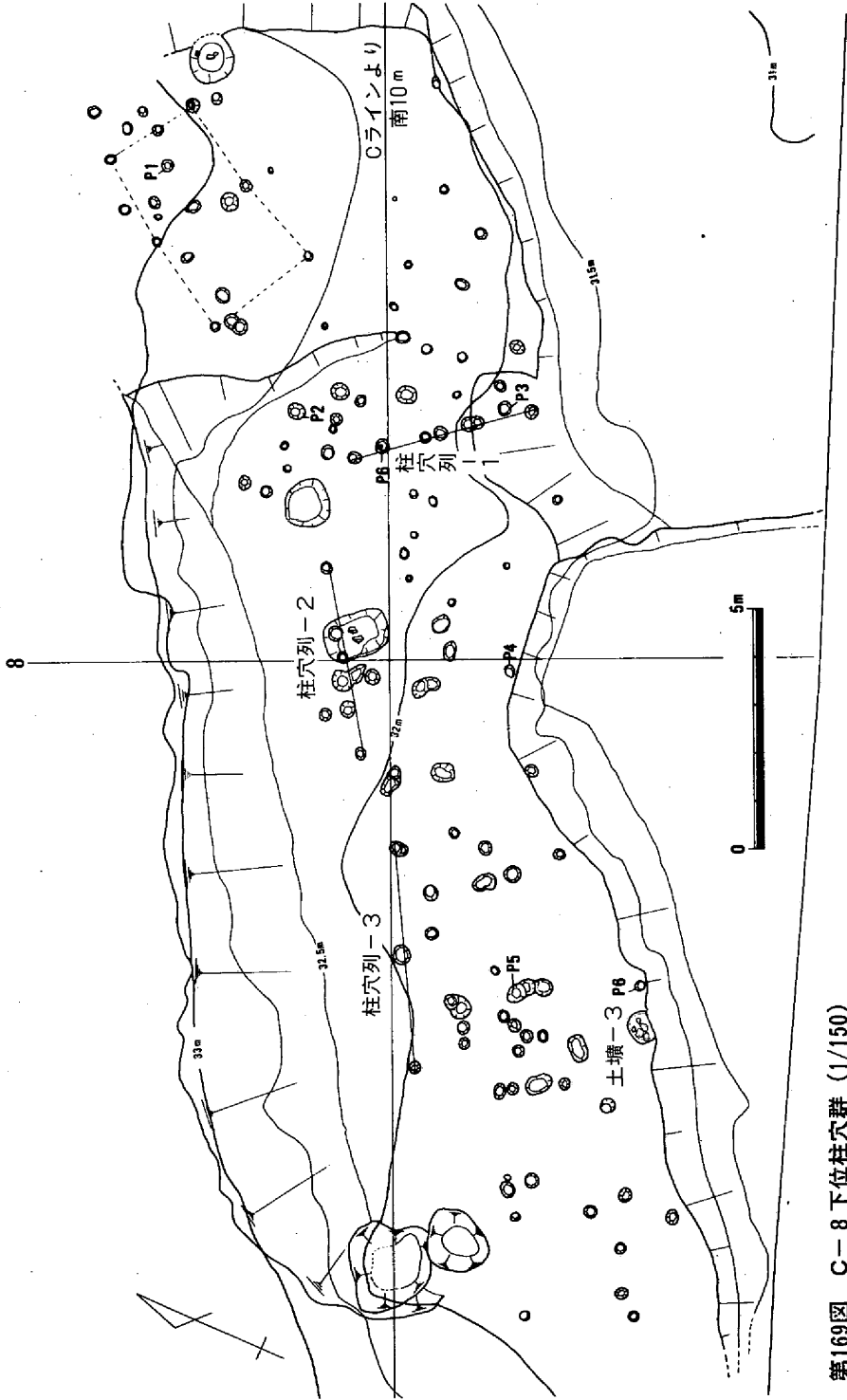
残り、本来は金銅製であったことがわかる。見こみの中央部には径5mmほどの臍状の偏平な突起が残るが、製作の際に必要なものであった可能性もある。外底部にはこの痕跡はみられない。P



第168図 P-6 実測図 (1/30)



第167図 C-8 下位柱穴列 (1/50)

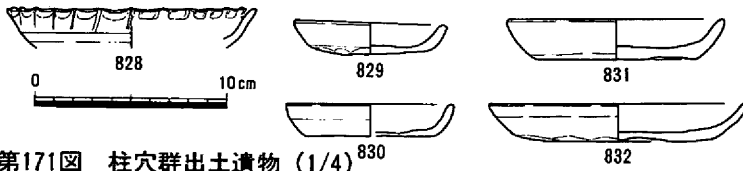
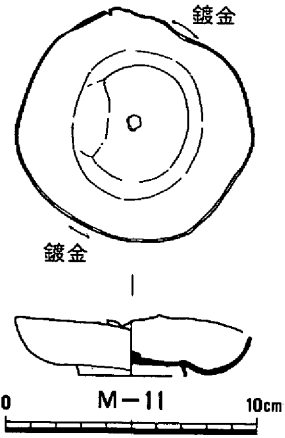


第169図 C-8 下位柱穴群 (1/150)

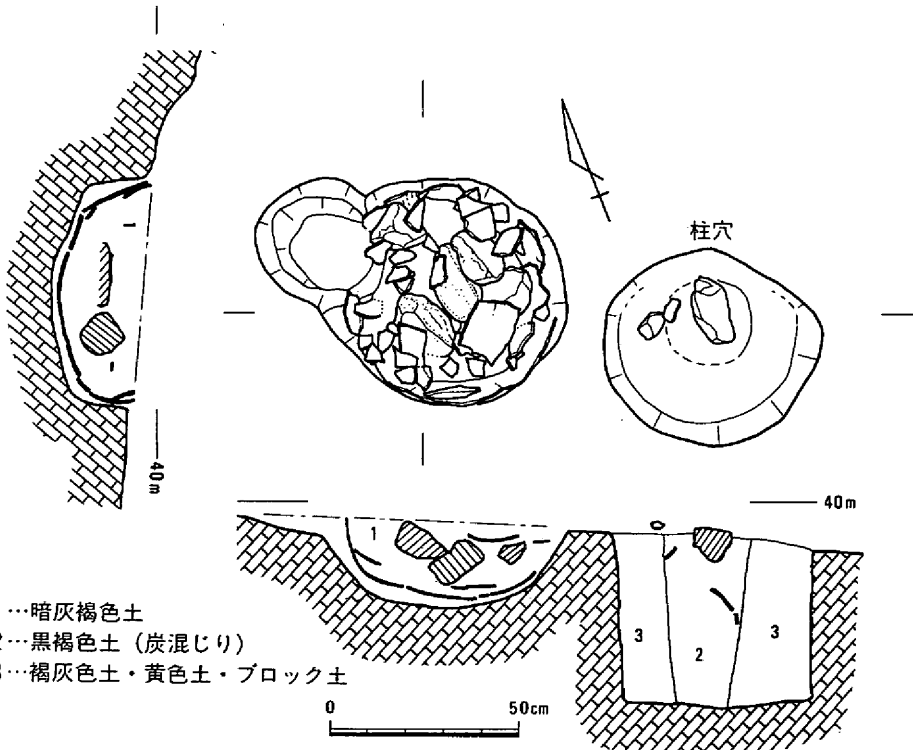
— 2～6からは第171図に掲げる遺物が出土している。828は灰釉陶器の皿で、口縁部は縦方向に、切れこみと押圧によって輪花が表現されている。釉は部分的に剥落しているが淡黄緑色を呈する釉調で、素地胎土は黄白色である。入子皿となる可能性もある。829～832は、土師質土器皿で、いずれも淡橙褐色を呈する。器肉はやや厚く、底部はわずかに揚げ底である。外底部はナデ調整によって仕上げられ、焼成は比較的良好である。

2. 埋甕 (第163・172～176図、図版49～51・101・102)

B-7の東方、掘立柱建物の身舎部分の北側桁行部分と、 第170図 P-1 出土遺物 (1/3)



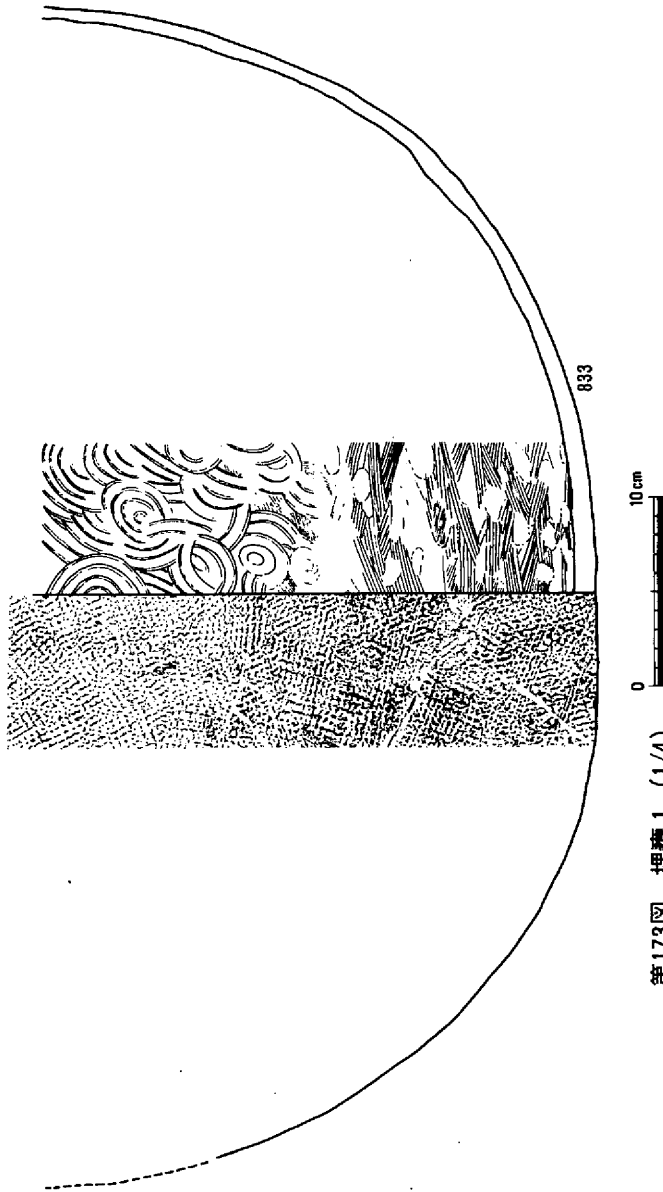
第171図 柱穴群出土遺物 (1/4)



- 1…暗灰褐色土
- 2…黒褐色土 (炭混じり)
- 3…褐灰色土・黄色土・ブロック土

第172図 埋甕 1 実測図 (1/20)





第173図 埋甕1 (1/4)

東側梁行部分の2か所に、約7mを隔てて存在する。

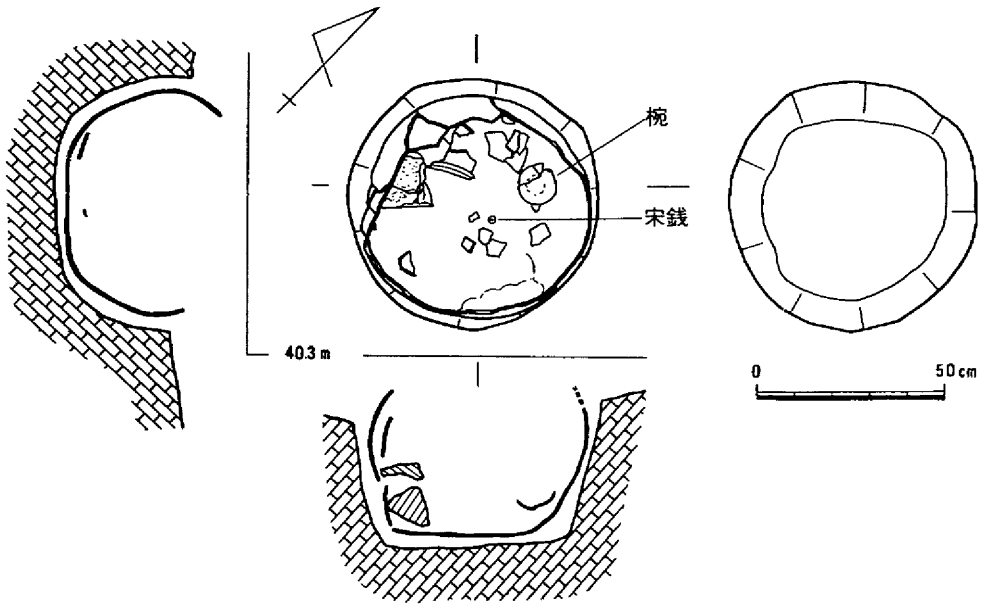
(1)埋甕1 (833)

径65cm、深さ約25cmの、壙底がほぼ平坦な土壌の中に亀山焼の甕が埋置された遺構である。内部には角礫や亀山焼の甕片などが埋積している。おそらく上半部は削平されたものと考えられる。833は完存する甕の丸底部分で、体部外面は小さな方格の格子目タタキが施された後、カキ目調整が加えられる。内面はやや太目の同心円タタキが施され、底面に近い部位からカキ目調整によって押圧痕が消されている。淡青灰色を呈し、須恵質で焼成良好である。丸底ではあるがわずかに平坦で、安定性はよい。

(2)埋甕2 (834~838、M-12)

径65cm、深さ約45cmを測る土壌に亀山焼甕が埋置されている。壙底は、径40~50cmを測り不整形を示す。甕は、

検出状態では体部上位まで残存していたが、数点の口縁部片は内部に転落して出土したものがあ。しかし、大半は、削平によって失われたものと考えられる。本来は、完形の甕が埋置されていたことは、疑いない。834は、口径52.2cm、器高53.5cm、最大体部径61cmを測る丸味をもった形態を示す。底部は中央部がややくぼみ、安定性がある。口縁部は、外方に屈曲し、端部はやや肥厚してくぼみがある。口縁部には格子目タタキの痕跡が残されている。体部は3mm方格の格子目タタキが施され外底部から体部の最下位にかけては833と同様なカキ目調整がめぐ



第174図 埋甕2 実測図 (1/20)

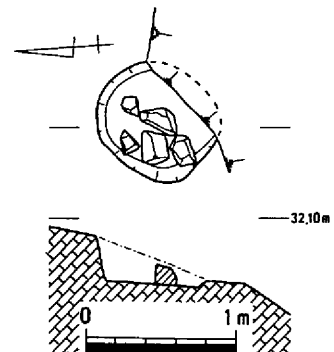
る。内面は太目の同心円タタキが施され、内底部には押圧痕と、それを消した荒いカキ目調整痕が残る。

埋甕中には小礫を多く含む灰褐色土が埋積しており、その中から第176図の遺物が出土している。835～837は土師質土器で、835は小皿、836・837は椀である。837には高台がつけられず、底部はくぼむ。口径は9.8cm、器高3cmを測り、明橙色を呈し軟質の焼成を示す。838は甕で、体部外面には格子目タタキが施される。体部内面には同心円タタキが残される。また、口縁部にも格子目タタキの痕跡が残されている。焼成はやや不良で黒灰色～黒褐色を呈する。M-12は元豊通宝で初鑄年A.D1078年の北宋銭である。

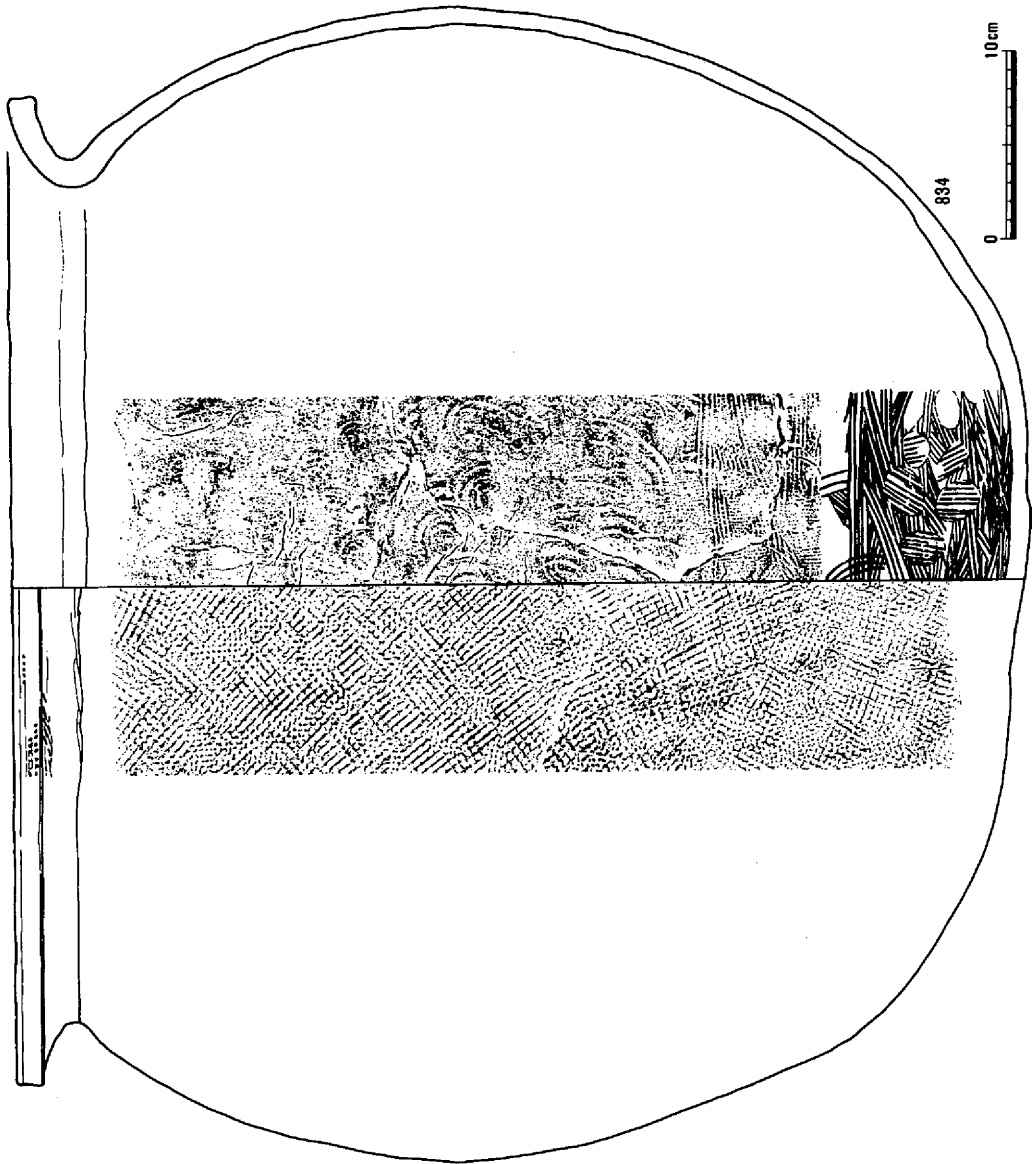
以上の埋甕は、掘立柱建物の身舎に含まれることで、屋内の貯蔵庫のような用途が考えられる。大型の亀山焼が、このような用いられ方をする点が確かめられたことは、注目される。

### 3. 土壇3 (第169・175図、図版46)

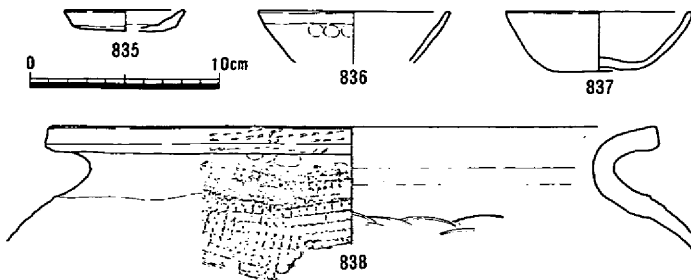
下位柱穴群の一面に位置する最大径80cm、深さ約30cmを測る小土壇である。内部には5個の角礫が平坦な壇底に接して埋置されているが、この用途は不明である。埋積土は、灰黄褐色土で、炭、焼土細片を含む。出土遺物は全くみられず、時期を知る手がかりがないが、ほぼ柱穴群と同時期と考えてよいだろう。このような土壇は、柱穴群中の各所



第175図 土壇3 実測図 (1/50)



第176図 埋甕2 (1/4)



M-12 (1/2)

第177図 埋甕2 出土遺物 (1/4・1/2)

にわずかに散在するが、埋甕などととも、その機能を考える必要があるだろう。 (岡田)

#### 4. 溝状遺構 (第6・178図、図版37)

遺跡中に、溝状遺構は比較的少ない。第178図は、3号窯の下方、9ラインの西側で検出された溝状遺構で、造成された平坦面を緩やかな弧を描くように囲む、半月状を示すものである。溝は、検出全長約11m、巾50cm前後を測り、深さは平均10~15cmを測る。南西端部では扁平な礫を集めて暗渠状とした部分がある。この溝の南側には柱穴などの遺構は認められない。第1層では炭・焼土のほか窯壁片が多く出土しており、第3層でも炭の出土が顕著である。亀山焼がこの遺跡地周辺で生産された時期に存在した溝と考えてよいだろう。なお第1層から第7層にかけては、亀山焼片が含まれている。 (岡田・武田)

#### 5. 墓址 (第179~184図、図版52~54・102・103)

掘立柱建物の南方下位約15mに2基の墓址と考えられる遺構を検出した。C-7の土器溜り12の上方にもあたり、生活遺構に極めて近い位置を占めていることが注目される。1号墓と2号墓はおおよそ5m距離を隔てているものの、同一の等高線上に位置し、巾約1m前後の狭いテラス上に並んでいる。前者は、土壙墓の一種、後者は火葬骨を納めた骨蔵器と推定している。

##### (1) 1号墓

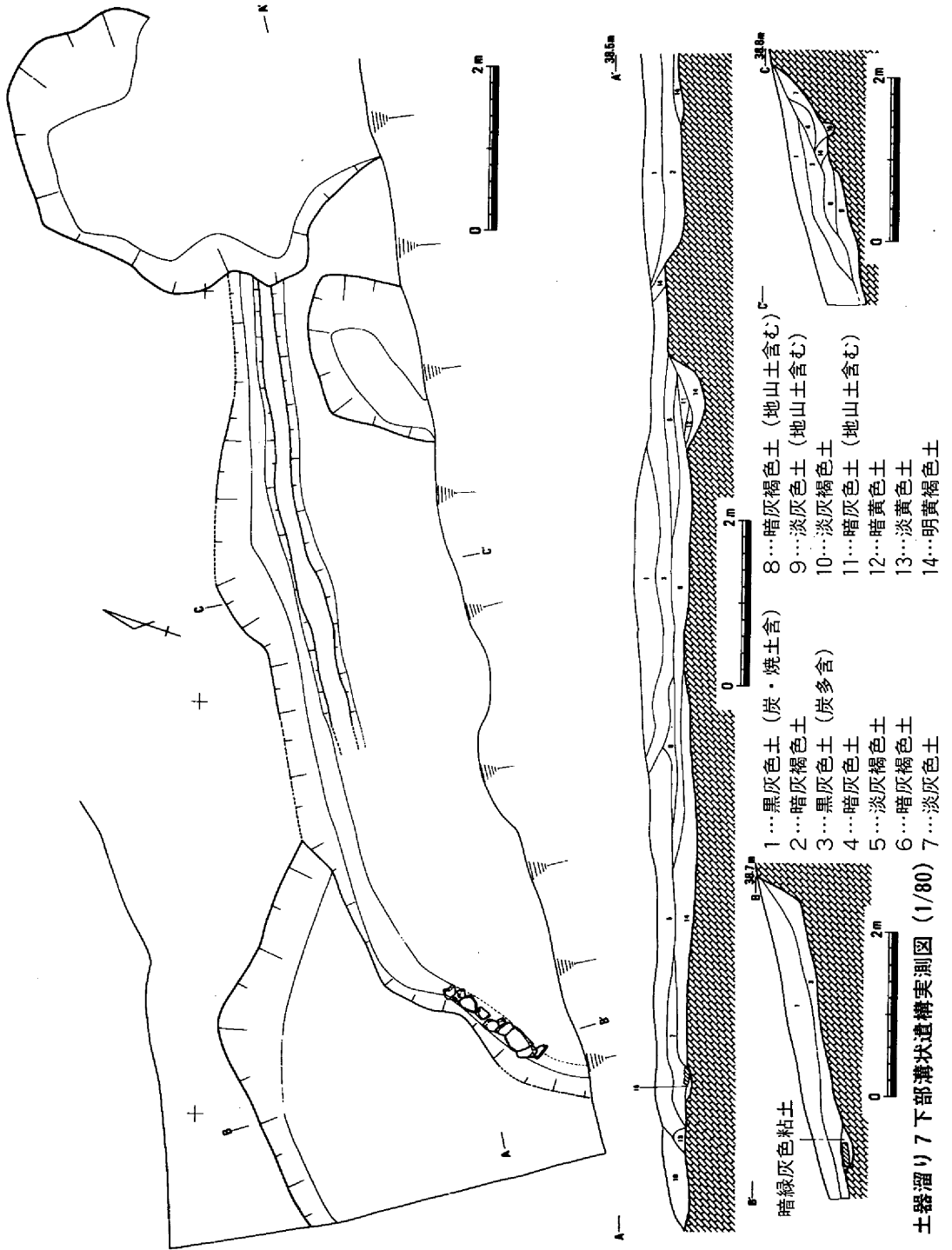
長辺1.25m、短辺約60cm深さ約30cm以上の長方形の墓壙を掘りこみ、小口に亀山焼の平瓦をそれぞれ立てかけて埋葬施設としたもので、北側部分に同安窯系青磁碗が伏せ置かれて副葬されている。おそらくこの部位が頭位と考えられよう。壙底は平坦にならされ、南側部分では、土師質土器碗片がわずかに認められた。規模から推察すると、身長1m足らずの小児の墓と考えられよう。青磁碗は口径16.6cm、器高6.7cm、高台径4.6cmを測り、釉調は淡灰緑色を呈し、にぶい光沢を放つ。露胎部分は暗灰色を呈し、堅緻である。比較的、底部の器肉は薄く、緩やかな弧を描く体部は口縁部に至ってわずかに外反している。体部外面にはへら状工具による片彫りの沈線を飾っている。見込は無文である。時期的には、青磁碗の輸入時期から12世紀後半から13世紀代に比定されるが、土師質土器片の出土を考慮すると13世紀前半に比定される可能性が強い。(註9)

また瓦は東西ともに同一の平瓦で、凸面にはやや小ぶりの斜格子のタタキ目文が施され、凹面には布目が残る。端縁・側縁いずれも鋭い刃物で切り放され、端縁巾26.5cm、側縁長23cm以上を測る。厚さは1.5cm前後を測り分厚いというほどではない。西側の瓦も全く同様の形状を示し、胎土中には石英を主体とする砂粒が多く含まれ、全体に黒っぽい瓦質を呈している。本遺跡から類以する瓦が出土しているので、亀山焼の瓦と理解される。

##### (2) 2号墓

1号墓の南西方約10mに位置する。犬走り状のテラスをわずかに掘りくぼめて据え置かれた

骨蔵器と考えられる亀山焼の甕である。表土除去の際、口縁部が失われたが頸部より下位は完

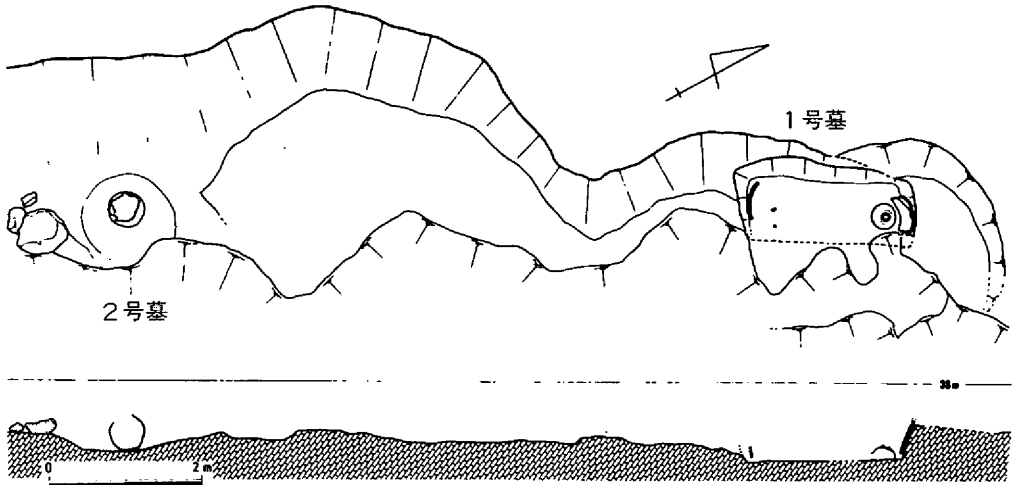


第178図 土器溜り7下部溝状遺構実測図 (1/80)

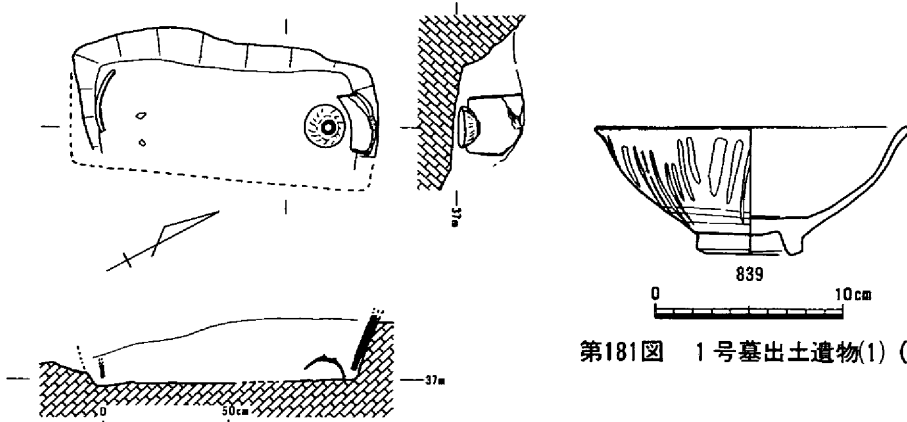
存している。内面には、骨片等の遺物は全く残存していなかったが、検出の状況から骨蔵器の可能性が強いとみてよいだろう。残存器高は21cm、底径15.6cm、最大体部径24cmを測る。底部はやや揚げ底で、外面には「下駄印」が明瞭に看取される。体部外面には格子目タタキが施されるが、方格はやや粗大で浅い。体部下半は、指頭押圧痕がみられる。内面は、ハケ状工具による縦位の調整が施され、同心円タタキを消している。焼成は、全体的に良好で淡青灰色を示すが、部分的に黒っぽい銀色を呈する。遺跡内では、完形に近い亀山焼甕の出土は極めて稀で、発掘によって得られた資料の中に類例はない。従来知られている出土品の中では、口頸部が本例ほどすぼむものはみられず、神前神社のご神体とされる完形品の甕に、むしろ近い形態を示しているといえる。(註10)

6. 貝塚 (第6・184・185図、図版47・48)

7ラインから東方各所で、小規模な貝塚が検出されている。C-9の周辺では特に集中度が



第179図 1・2号墓位置関係図 (1/100)



第181図 1号墓出土遺物(1) (1/4)

第180図 1号墓実測図 (1/30)

高く、厚さ5~40cmにわたっておもにハイガイが多量に出土している。土器溜り3~7などでは貝塚が重複して存在している例も多く、土器溜り12では、上面に貝塚、中位に土器溜り、下位では獣骨(牛)が出土している。県内の瀬戸内沿岸部における中世貝塚の分布は、縄文・弥生時代のそれとしばしば比較され、海進・海退などの自然現象も考慮されなければならないだろう。本遺跡においては、遺跡地の南方がかつて港であるということで、貝は干し貝などに加工して、船舶の航海用の保存食として供給されたことも考えられる。出土した貝については第5章で自然科学的成果として金子浩昌氏の玉稿を収載する。

7. 包含層出土遺物(第187~190図、図版103)

843~873の遺物は、重機によ

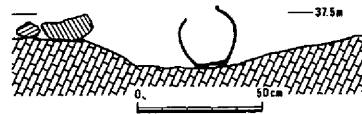
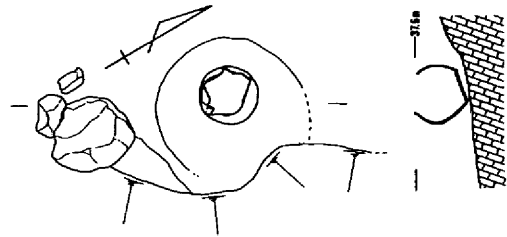


第182図 1号墓出土遺物(2) (1/4)

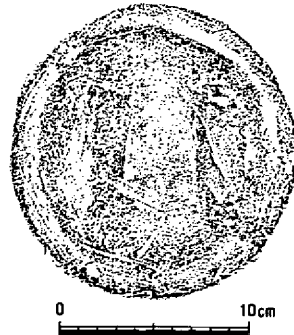
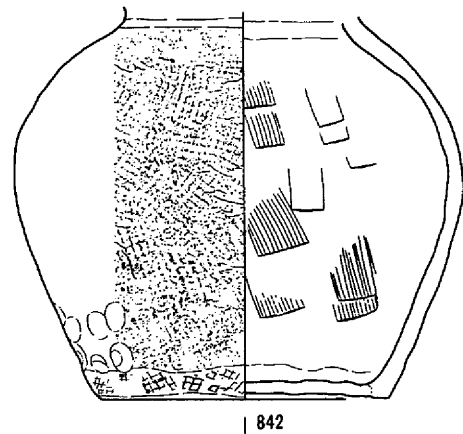
る表土除去あるいは、遺構検出作業中に包含層から出土したものである。亀山焼甕、鉢などはもとより、瓦・備前焼など看過できない遺物もあるので、すでに多くを紹介した甕・鉢類以外のものについて説明を加えたい。

瓦 (843~866)

843は、単弁系の蓮華文軒丸瓦である。筒部と瓦当の接合がよく観察される。淡灰色を呈する須恵質焼成である。844~847は三巴文を瓦当に表出した軒丸瓦である。844は頭部は太く丸味をもち左まわりの三巴文が浅く表出される。瓦当径はやや大きい。845は左まわりの三巴文の尾部が長く延びて接続する。瓦当面は磨滅している。灰褐色を呈しやや焼成不良である。846・847はいずれも右まわりの三巴文が表出される。頭部は丸く、尾部は鋭く終る。周縁との間には、珠文がめぐらされている。848は均整唐草文軒平瓦である。外側に細い界線がめぐらされている。周縁は鋭い刃物で削られ、巾は不揃いである。平瓦部の凸面には小さな格子目タタキが施され、凹面には布目痕が残る。灰青色を呈し、須恵質焼成である。849は三巴文を配した軒平瓦である。850は凸面に平行タタキが施された平瓦である。851・852はやや大きい方格の格子目タタキが凸面に施された平瓦である。853は小さな格子目タタキが施されている。これらはいずれも灰青色を呈する須恵質焼成である。第188図854~862は、おもに土器溜り3付近から出土した瓦である。834~861はいずれも粗



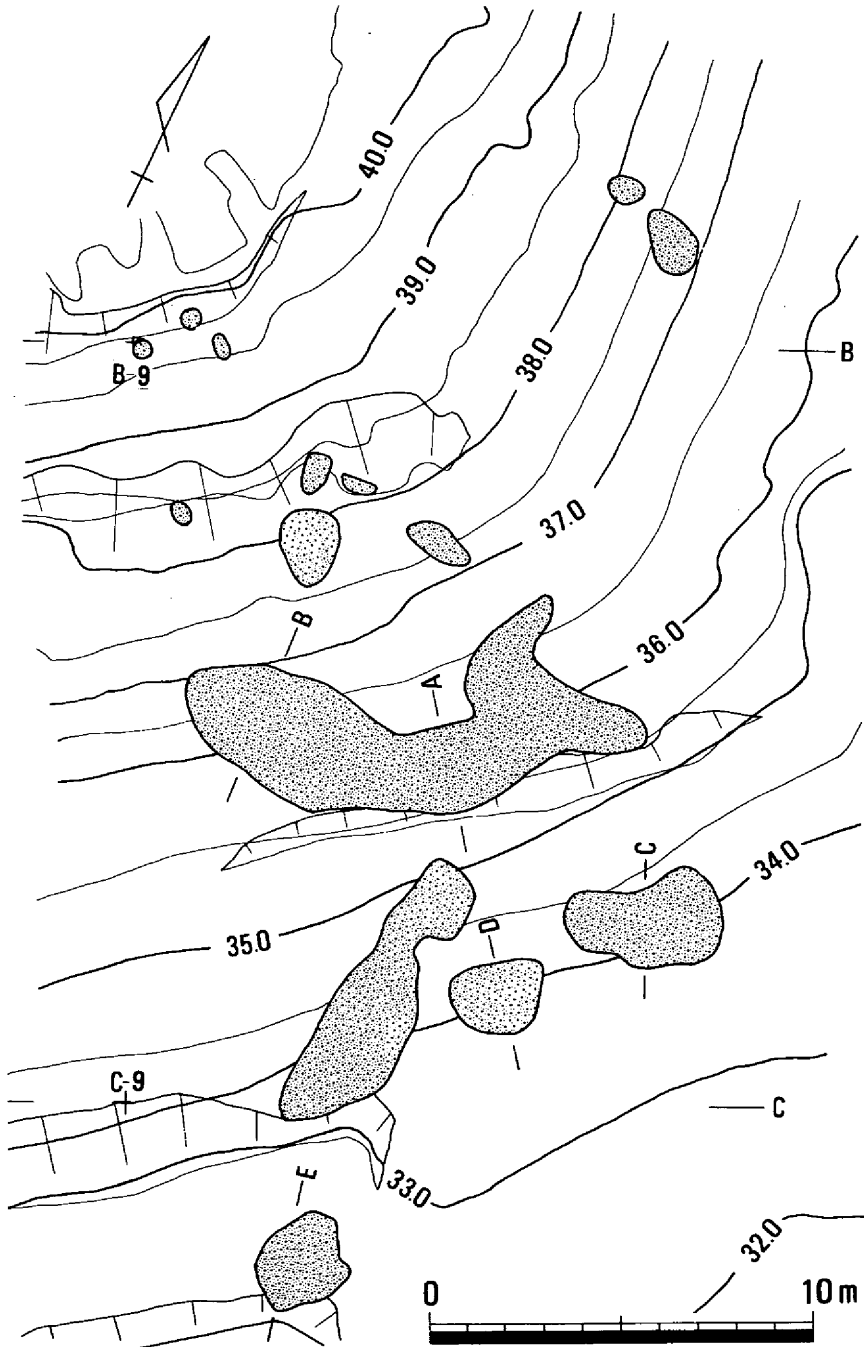
第183図 2号墓実測図 (1/30)



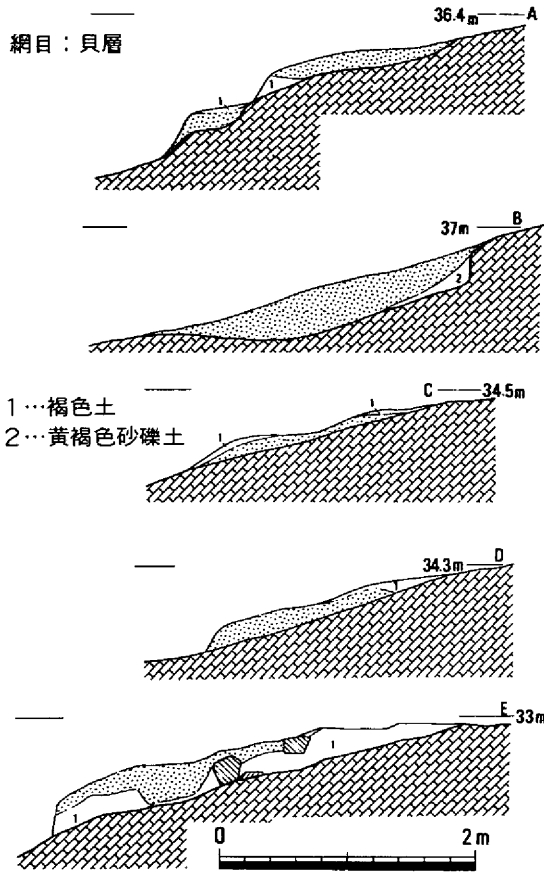
第184図 2号墓骨蔵器 (1/4)



大な斜格子タタキが凸面に施された平瓦で、凹面には布目痕が残る。**854**は側縁が完存しており、34cmを測る。焼成不良で灰黄褐色を呈する。**862**は、小さな斜格子タタキが施された平瓦小片である。**863**は、軸線のやや太い、小さな斜格子タタキが凸面に施された丸瓦である。凹面に



第185図 9ライン東側貝塚群 (1/200)



第186図 第185図貝塚群土層断面図 (1/60)

口縁部より約6cm下がった位置より下半は、使用によって磨滅している。磨滅痕跡から、搗粉木による回転使用が考えられる。遺跡内で使用されたことが明らかなものである。

### 陶磁器 (871~873)

871は備前焼播鉢口縁部片である。口縁部は上下方に拡張している。内面の卸し目は使用によって磨滅している。遺跡中では備前焼は多く出土せず、土器溜り9出土の653・654など数点にすぎない。入手経路や、亀山焼の本場である本遺跡でなぜ使用されたか興味深い。872・873はいずれも龍泉窯系の青磁碗片である。872の内面には片彫りの花文が描かれる。873の見こみは無文である。いずれも淡灰緑色の釉調を示す。 (岡田)

### 註

(註1) 木炭の樹種同定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼して実施した。

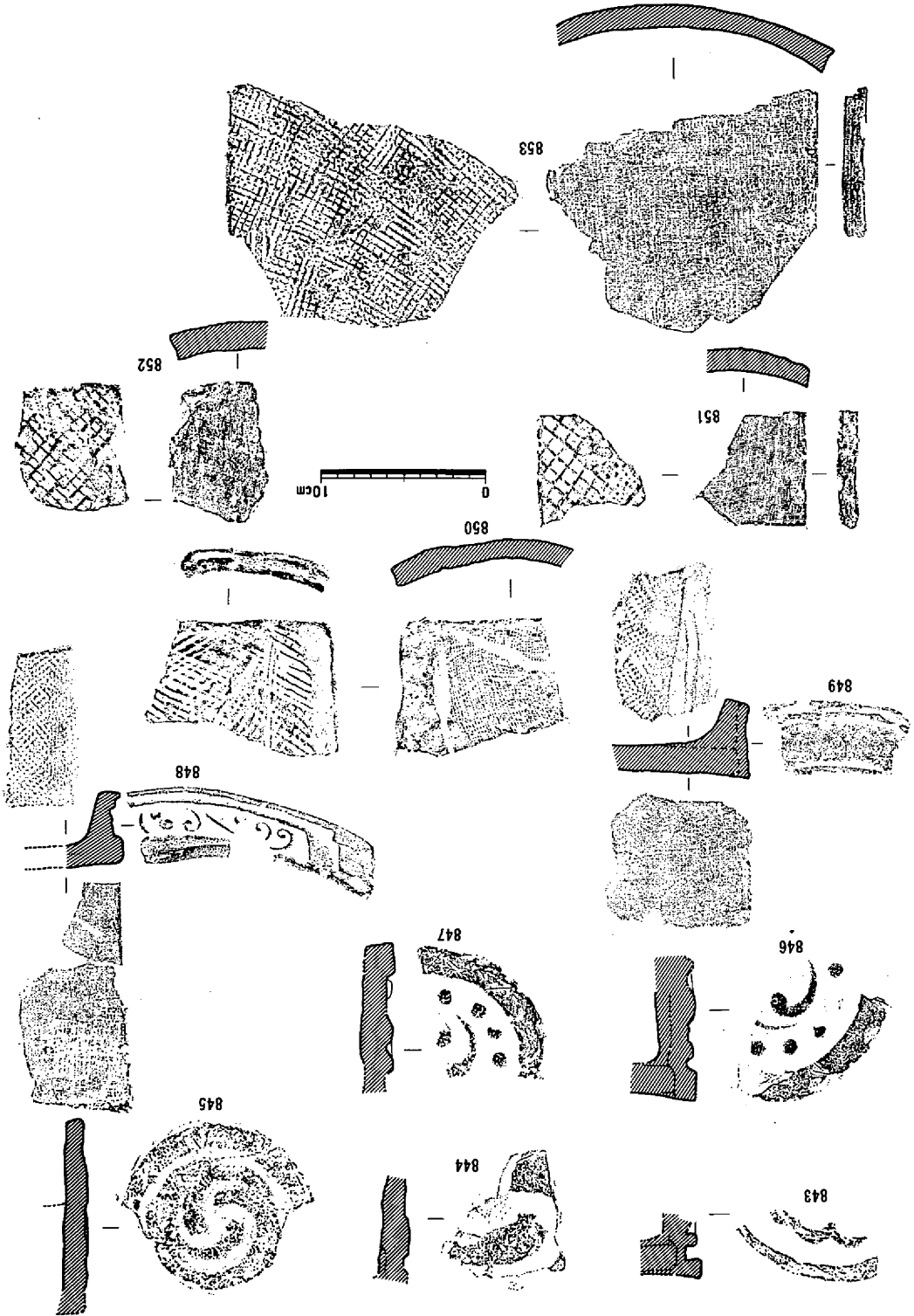
(註2) 狐塚省蔵氏のご教示では、甕の体部外面に平行タタキのみ施された遺物が採集される地点が存在するといわれる。また、同様のご教示を西川宏氏からもうけた。

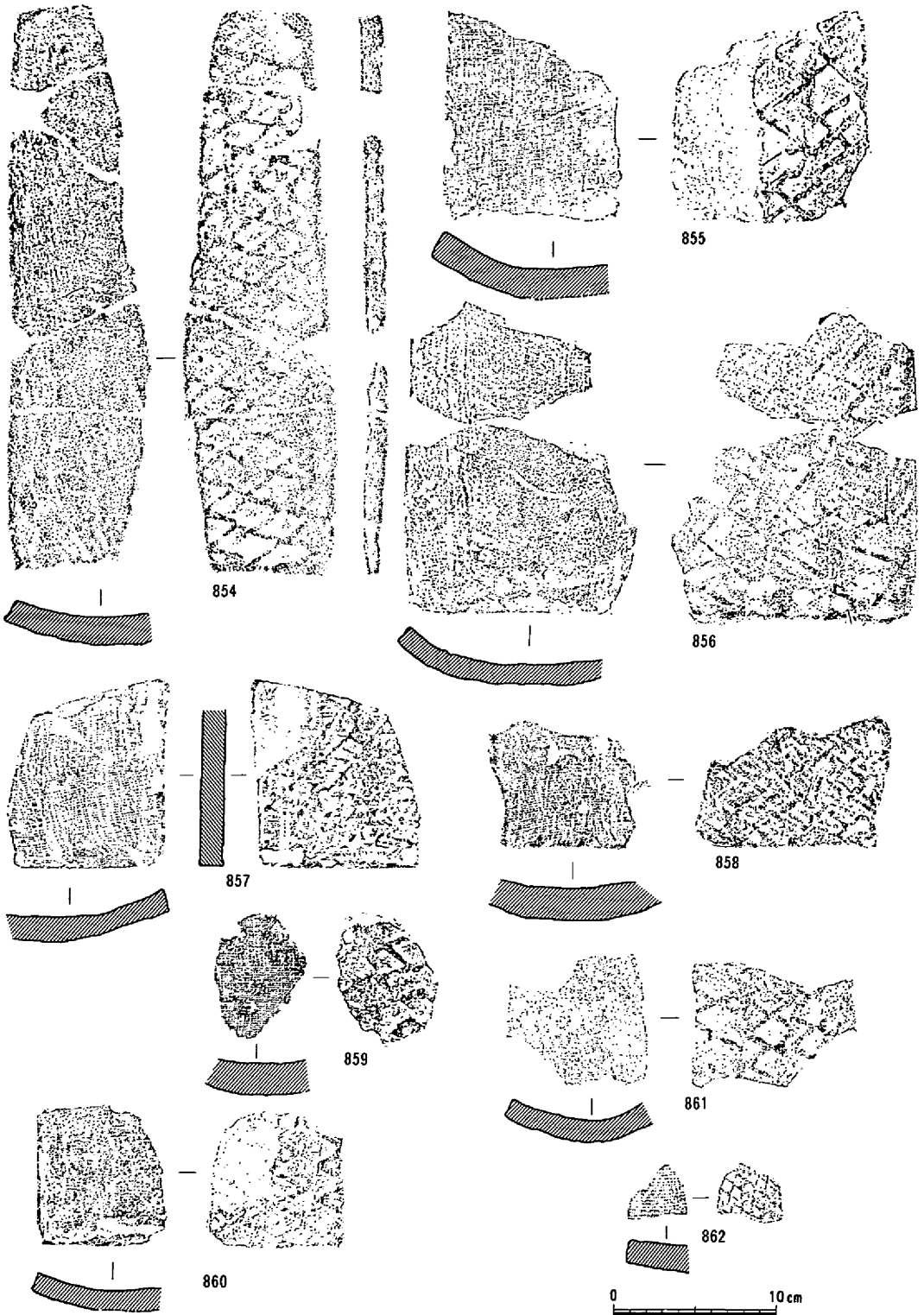
は布目痕が残る。864は、玉縁付の丸瓦で凸面には小さな格子目タタキが施される。凹面には細かな布目痕が残る。865は、やや太目な軸線が「田」字形を示す。格子目タタキが凸面に施された平瓦である。866は、焼けひずんだ行基葺の丸瓦と考えられる。凸面には、小さな斜格子タタキが施され、凹面には布目痕が残る。

### 甕・鉢 (867~870)

867・868はいずれも口縁内面にへう記号(カマジルシ)が描かれている。867は「+」状、868は2本の線を結んで嘴状となっている。869は甕の体部~口縁部片である。口縁部と体部の境が明瞭な段をなす点が注目される。体部外面には小さな格子目タタキが施され、口縁部にその痕跡が観察される。内面は同心円タタキが残される。870は播鉢である。口縁部には格子目タタキの痕跡が残る。体部外面には指頭押圧痕がめぐる。体部内面の卸し目は放射状に施されるが、

第187図 包含層出土遺物(1) (1/4)





第188圖 包含層出土遺物(2) (1/4)



(註3) 好本宗峰氏のご教示による。

(註4) 福本 明「浅原寺跡」(倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第1集) 倉敷市教育委員会 1984年。

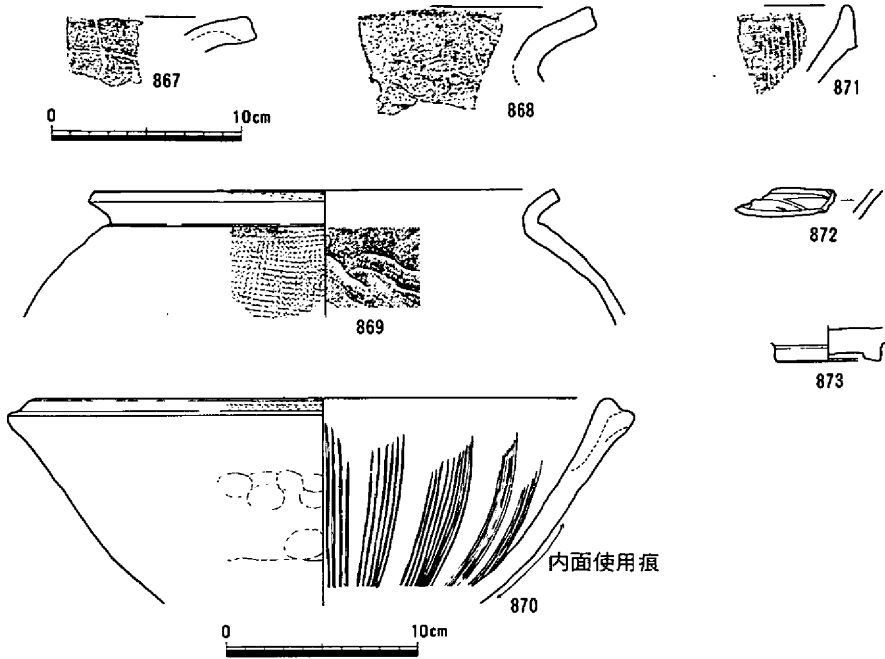
(註5) 間壁忠彦氏のご教示を得た。

(註6) 間壁忠彦・間壁菫子「備前焼研究ノート(2)・(3)」(『倉敷考古館研究集報第2・5号』、倉敷考古館 1966年、1968年) 葛原克人・栗野克己・狐塚省蔵「學術調査報告」(『海底の古備前』一水ノ子岩學術調査記録所収) 山陽新聞社1978年。

(註7) 平井泰男「中世の遺構・遺物について」(『百間川原尾島遺跡2』一岡山県埋蔵

第189図 包含層出土遺物(3) (1/4)

文化財発掘調査報告56—旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査V所収 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1984年。高畑知功ほか「榎本遺跡」(『岡山県埋蔵文化財調査報告65』一総社南高校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—岡山県教育委員会 1987年。高畑知功「田治部氏屋敷址」(『岡山県埋蔵文化財調査報告書67—主要地方道所見勝山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—岡山県教育委員会 1988年。以上の事実報告に基いた報文等を参考にした。



第190図 包含層出土遺物(4) (1/4)

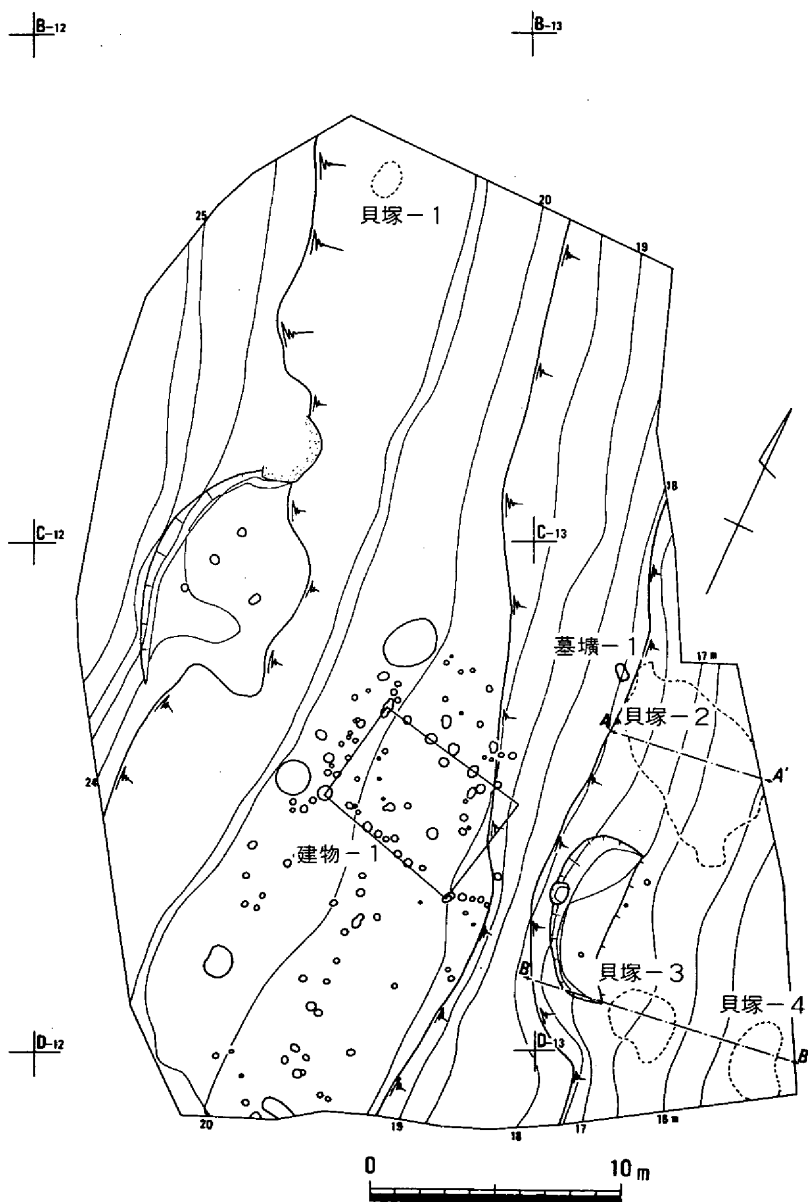
(註8) (註4) 文献に同じ。

(註9) 亀井明德氏のご教示による。また輸入陶磁器については、下記の文献を参考にした。  
横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集4』所収)九州歴史資料館 1978年。

(註10) 白井洋輔氏のご協力による、筆者の計測値は、口径12.3cm、器高23.4cm、底径13.5cm、最大体部径24.8cmを測り、外底部には明瞭な下駄印が看取される。口頸部は細く、白井氏は壺としている。体部外面の格子目タタキは小さ目であるがすり消し痕が目立つ。内面は、指頭押圧痕が残され、部分的に粘土の横位接合痕が看取される。(白井洋輔「日本の古窯」—岡山県立博物館昭和61年度特別展図録—岡山県立博物館 1986年。

### 第4章 東調査区発掘調査の概要 (1984年度)

神前神社の北側に位置する南斜面には、亀山焼窯跡が推定されていたことから、玉島八島地区の用地内全域を対象にトレンチ調査を1983年10月～同年12月に実施した。その結果、窯跡の所在を確認したほか、東斜面においても、柱穴・灰原・包含層を確認したことから、この地域

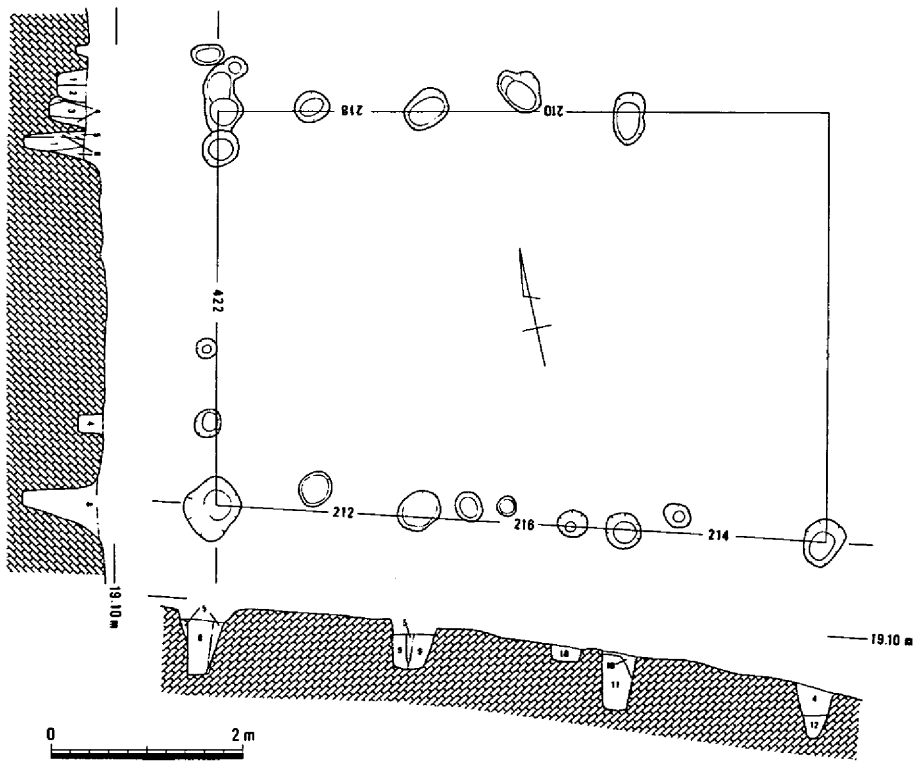


第191図 亀山遺跡東調査区全体図 (1/300)

についても全面調査を実施した。調査は1984年12月から1985年3月にかけて実施し、さらにひきつづいて、窯跡とその周辺部の調査が実施された。神前神社から北の大規模農道へ通じる道が斜面の肩部にあたっていることから、この道より東側を東斜調査区としてまとめている。

山裾部には畑へ通じる道があり、この付近が浅い谷地形を呈している。この谷部の埋土中にも亀山焼の破片を含む堆積層がみられ、地山直上にはほぼ完形に復元される甕なども出土している。しかし、いずれも再堆積によるもので、東側へ寄ると遺物は少なくなる。肩部の道と山裾の道の間は斜面になっているが、3段の平坦面が造成されている。平坦面は中世の造成と近代の水田造成によって形成されたものである。

最上段は上の道付近に連続するもので、上方の窯跡から流れた灰原が北寄りにあり、中央部



- |                  |             |              |
|------------------|-------------|--------------|
| 1. 黄色粘土まじり淡灰褐色粘土 | 5. オリーブ灰色細砂 | 9. 暗灰黄色細砂    |
| 2. 淡灰褐色粘土        | 6. 灰褐色細砂    | 10. にぶい黄褐色細砂 |
| 3. 褐色粘土          | 7. 黒褐色細砂    | 11. 褐色細砂     |
| 4. 灰褐色粘土         | 8. 褐灰色細砂    | 12. 褐灰色粘土    |

第192図 建物-1 (1/80)



には半円形に掘り込まれたやや平坦な造成面があり、4個の柱穴も検出された。中段の平坦面は中世に造成されたもので、建物があり、柱穴群がひろがる。上段との間は3m余りの急崖になっている。北寄りのやや緩やかな斜面上に小貝塚が検出された。最下段は近代の水田南造成によるもので、地山は緩やかに傾斜し、3か所に貝塚が形成されている。この斜面部にも半円形に掘り込まれたところがあり、まとまらないが柱穴も検出された。これらの掘り込みについては性格が明らかでない。

**建物-1 (第192図、図版106-1)**

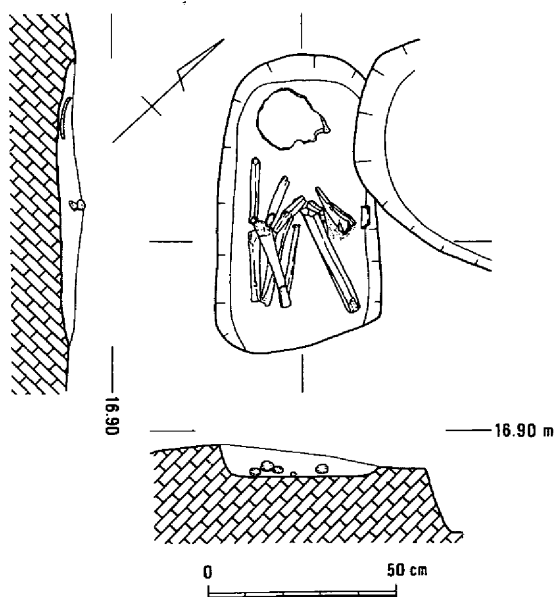
中段の平坦面に位置し、多数存在する柱穴の中で、比較的大きな柱穴を建物としてまとめることができた。この建物の南側には南北方向に並ぶ柱穴もあり、建物の存在が推定されたが、明確な建物としてまとめることはできなかった。

建物1についても、一部柱穴を欠いているが、復元すると、梁間1間、桁行3間と推定される。梁間および桁行についても、柱列上に近い位置に柱穴があり、関連性が予想される。大きさは、梁間422cm、桁行642cmを測る。建物の主軸はN77°Wで、ほぼ東西方向である。

時期については明確にしがたいが、下方の貝塚に含まれている遺物などから室町時代頃に比定されよう。

**墓墳-1 (第193図、図版106-2)**

最下段の斜面部に位置し、貝塚-2に近接している。上部は畑の耕作等で削られ、東側の一



第193図 墓墳-1 (1/20)

部も新しい土壌で一部を削られている。わずかに残った墓墳内から人骨1体が検出された。墓墳は隅丸長方形を呈し、主軸はN48°Wである。南東側は削平されているが、現存する墓墳の大きさは、長さ177cm、幅43cm、深さ10cmを測る。底面はほぼ平坦になっている。人骨は北西側に頭をおき、脚部を胴部方向へ折り曲げてある。人骨の保存状況は悪く、すでに粘土化しているものが多いが、成人であることがわかる。木棺等の痕跡は確認されなかったが、使用されていた可能性が高い。副葬品は検出されなかった。

時期は上部が削平され、副葬品がないことから明らかでないが、周辺の遺構の状況から推定すると、中世～近世に比定されよう。

貝塚— 1 (第194・195図)

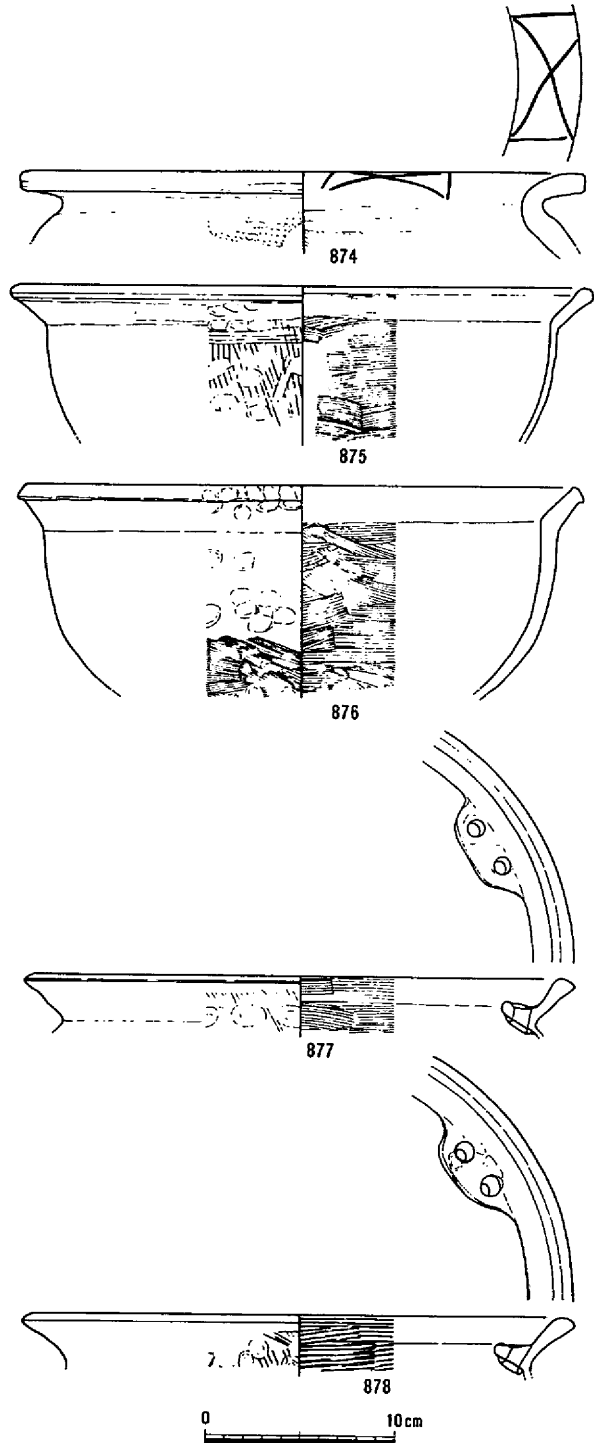
上段から中段への斜面に小貝塚がある。周辺部には上の灰原から流れた亀山焼の小破片が多い。貝塚はハイガイを主体とし、小型のものが多い。貝塚中には亀山焼や土鍋の破片を含んでいる。第194図874は亀山焼の甕で、外反した口縁部の内側にへラガキの記号文がある。横長の×印の両側を縦線で区切っている。

875～880は土鍋で、877・878には口縁部内側に2穴を配したつり手がある。881は鉢で、内面にカキメはみられない。

時期は中世で、新しいものは室町時代に比定されよう。

貝塚— 2 (第196～198図)

下段部の斜面に形成された貝塚で、長さ9m、幅4m、厚さ40cmと比較的大きい。下方3分の1くらいのところは水田造成時の溝で一部切られている。貝はハイガイを主体とし、カキ・サザエ・ハマグリ・アカニシなどを少量含んでいる。ほかに鹿角なども検出された。貝層



第194図 貝塚— 1 出土遺物(1) (1/4)

中からは亀山焼・土師器・鉄器・砥石を出土している。第197図882~884は土鍋、885は亀山焼の播鉢、886は羽釜、887・888は土師器の小皿である。鉄器は扁平な釘と推定されている。第198図S-1は、大型の砥石である。壊れているが、残存する面には使用痕がよく残っている。石材は安山岩である。

貝塚の時期は出土遺物から室町時代頃に比定されよう。

貝塚一3・4 (第199図)

最下段の南寄りに検出された。

貝塚一3は地山直上にあつて、中世の造成土の下になっている。貝

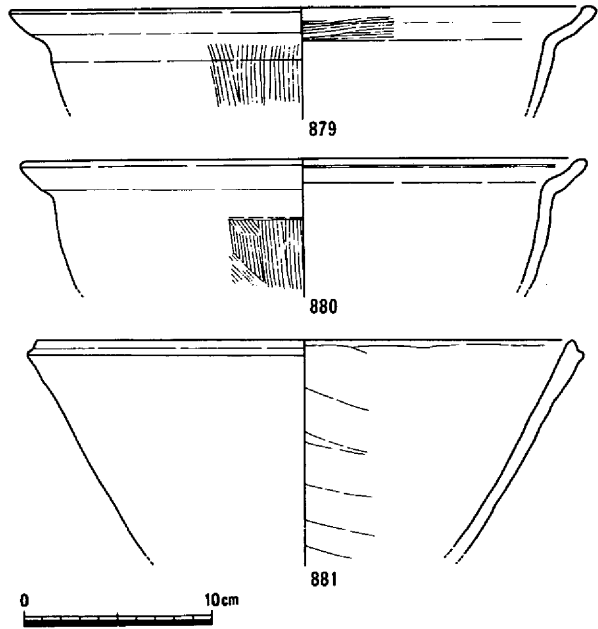
塚一4は中世の造成土の上層に形成されている。貝塚一3は近代の水田造成時の溝で一部切られている。いずれもハイガイを主体とし、ハマグリ等を少量含んでいる。中世の造成土中からは第201図903の播鉢などが含まれていた。

時期は周辺部の遺物からすると、室町時代頃と推定される。

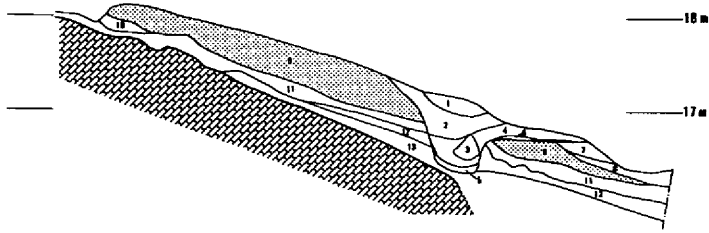
包含層出土遺物 (第200~203図、図版107~109)

東斜面では、表土・堆積土・造成土などから多量の遺物を出土している。最上段の北寄りには灰原の端部がかかり、亀山焼の小破片が堆積していた。表土および堆積土の中にも多量の亀山焼の破片が含まれていた。いずれも再堆積したものである。遺物の大部分は亀山焼の破片であるが、ほかに、土錘・硯・砥石・瓦・銅銭なども出土した。

第200図889は東斜面裾部の浅い谷の下部から出土したもので、ほぼ復元された。口径18.6cm、高さ21.4cm、底径12.8cmを測る。890は亀山焼の甕の口縁部、891・892は土鍋、893・894は土鍋の脚部片、895は把手、896は注口小壺の口縁部、897は上段の灰原中から出土した亀山焼の注口部、898は備前焼の小壺と推定される。底部は糸切り底である。899~902は早島式土器の椀である。903は貝塚一3付近の造成土中から出土した亀山焼の播鉢、904~912は早島式土器の椀・皿である。C-1は亀山焼の硯で、海部の大半を欠失している。現存する大きさは、長さ10.2cm、幅5cm、厚さ2.3cmを測る。上面と側面にはへら描きの格子目・波状文などが粗雑に描かれてい

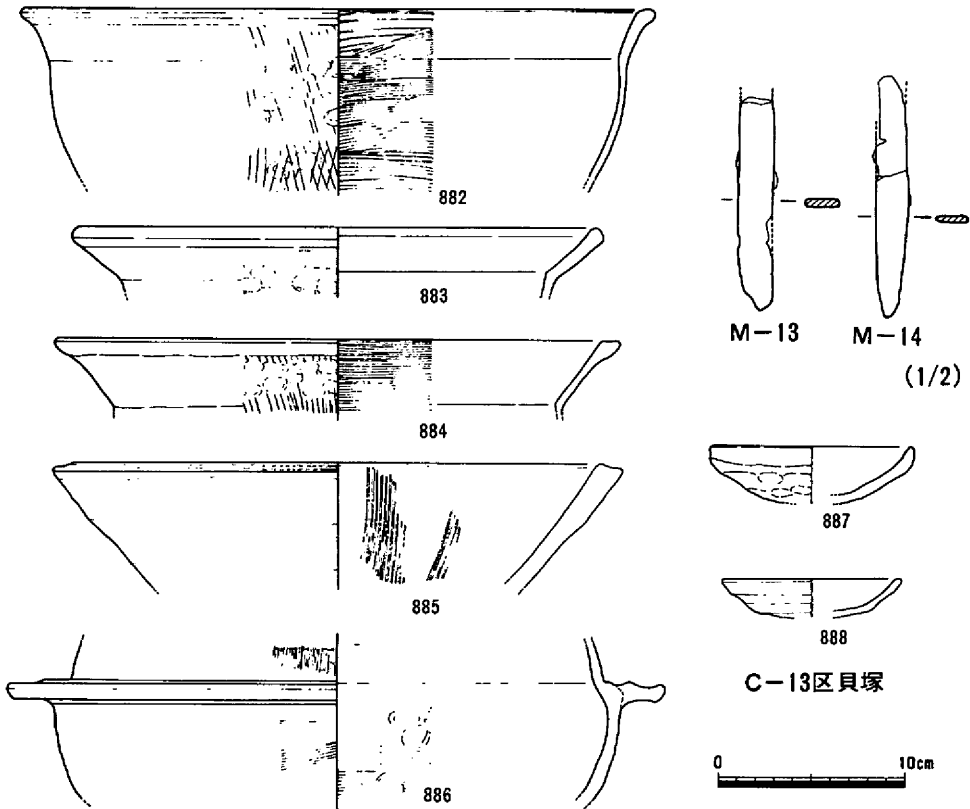


第195図 貝塚一1 出土遺物(2) (1/4)



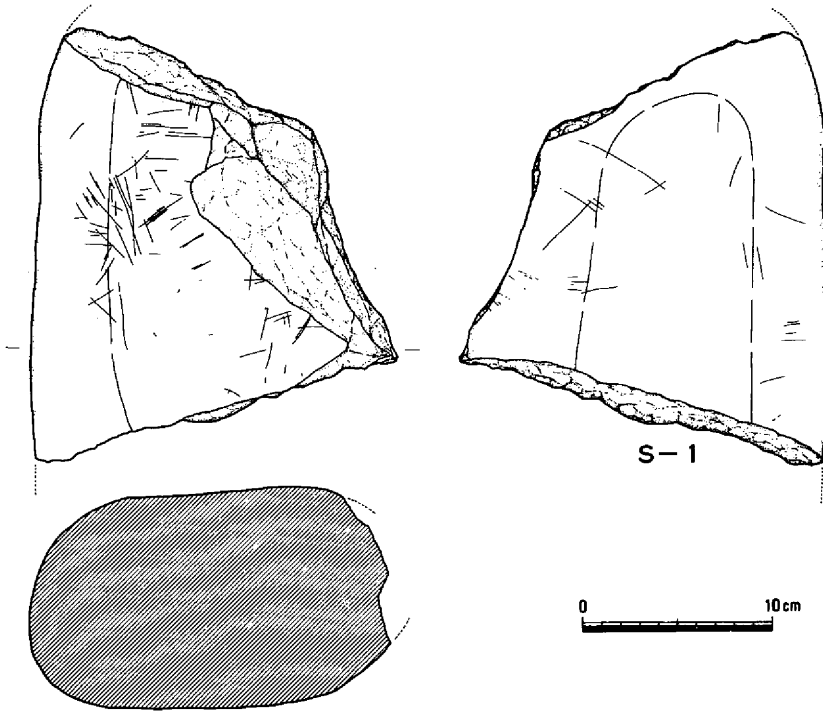
- |                  |             |
|------------------|-------------|
| 1. 灰黄色粘土         | 6. 橙色粘土     |
| 2. 暗灰黄色粘土        | 7. にぶい黄褐色粘土 |
| 3. 橙色粘土まじり暗灰黄色粘土 | 8. 炭まじり褐色粘土 |
| 4. 暗灰黄色粘土        | 9. 貝        |
| 5. 橙色粘土          | 10. 明黄褐色粘土  |
|                  | 11. 暗灰黄色粘土  |
|                  | 12. 黄褐色粘土   |

第196図 貝塚-2 断面図 (1/80)

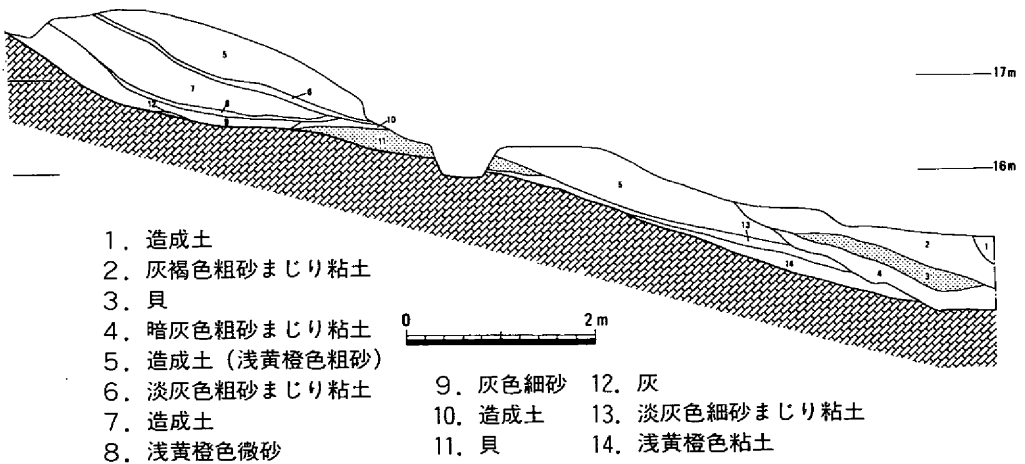


第197図 貝塚-2 出土遺物(1) (1/4)

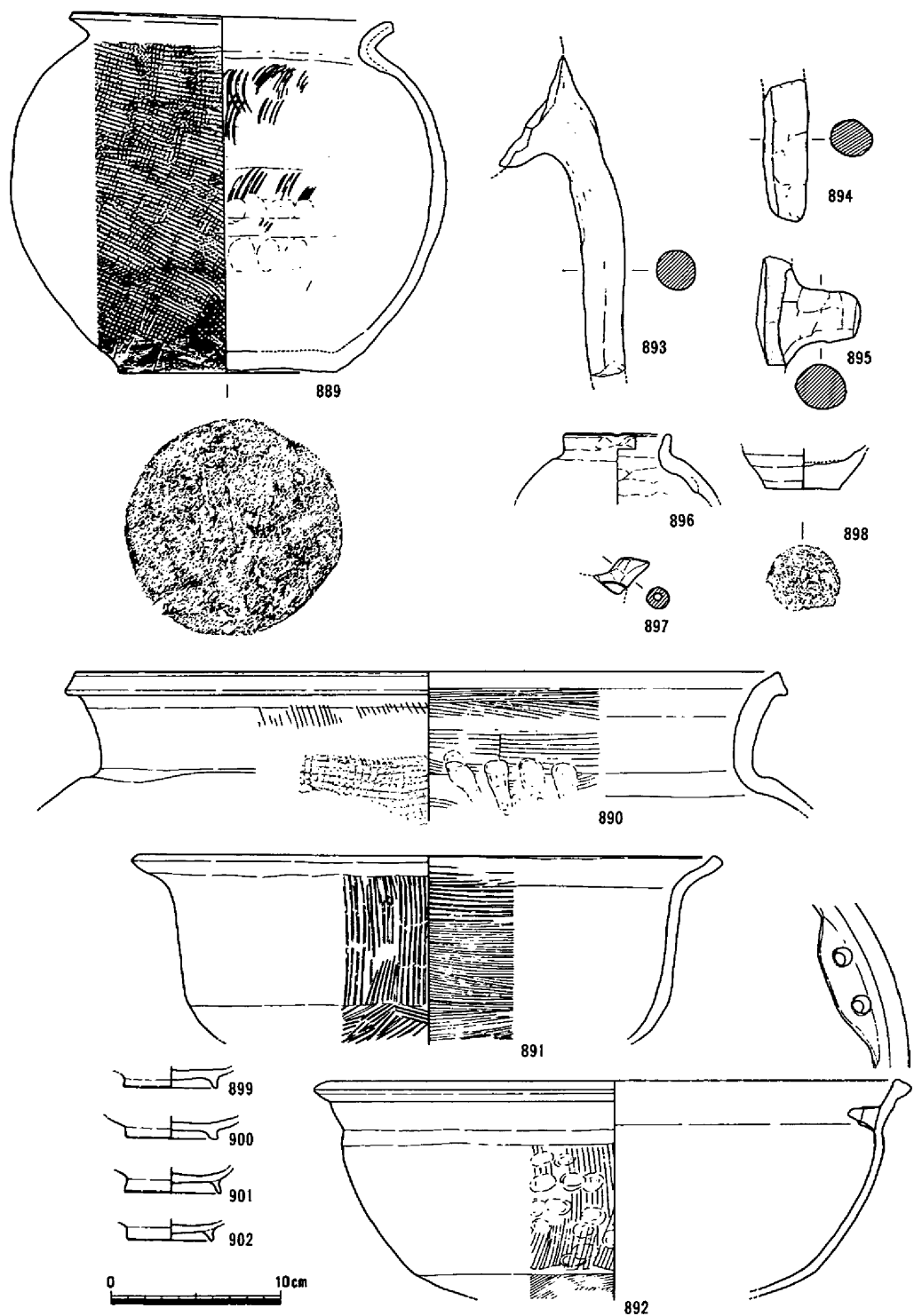
る。胎土には砂粒を多く含み、色調は淡青灰色を呈する。使用痕はなく、焼成後、廃棄されたものと推測される。C-2は有溝土錘で、重さ13.8g、C-3も有溝土錘で、重さ7.0g、C-1



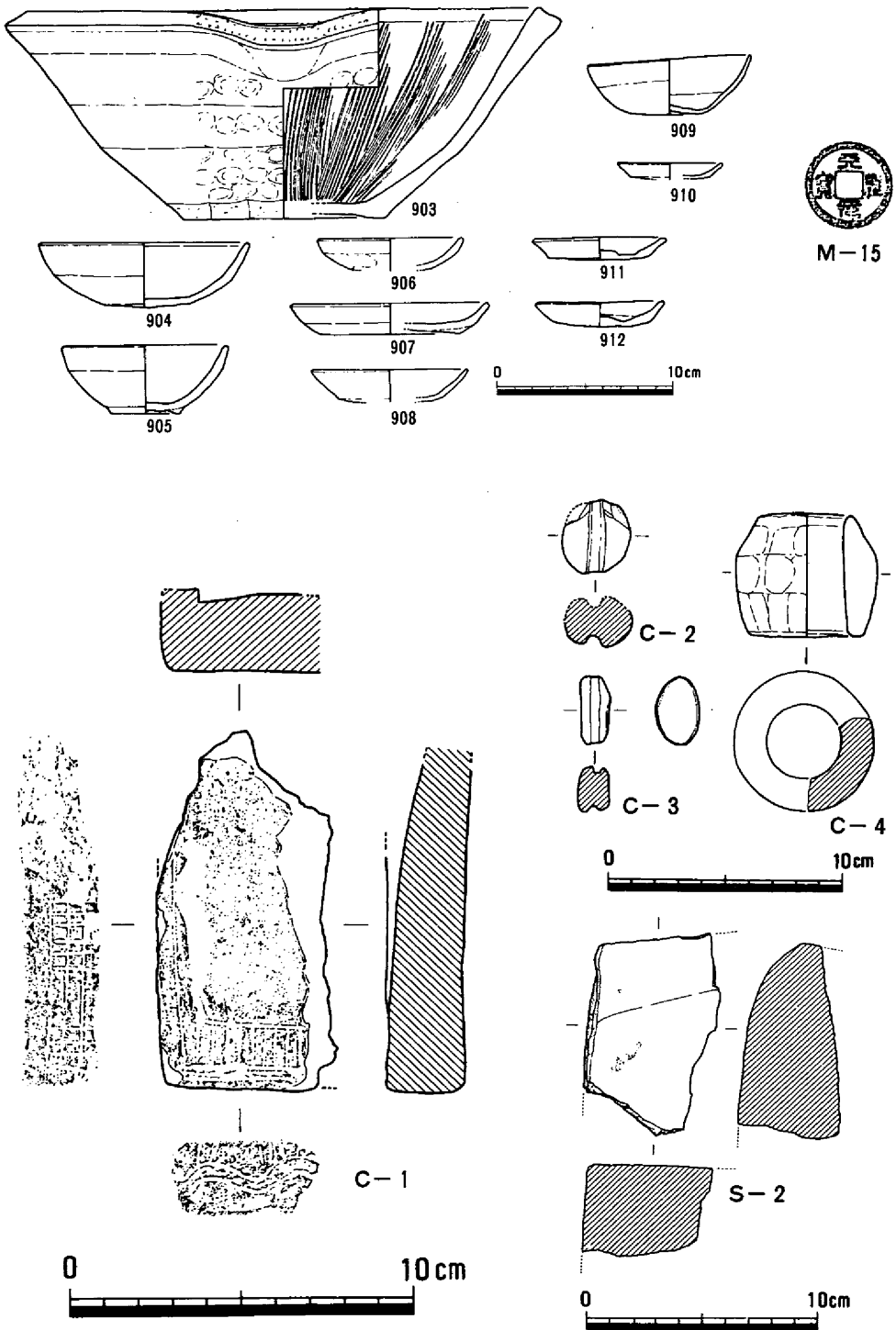
第198図 貝塚-2 出土遺物(2) (1/4)



第199図 貝塚-3・4断面図 (1/80)



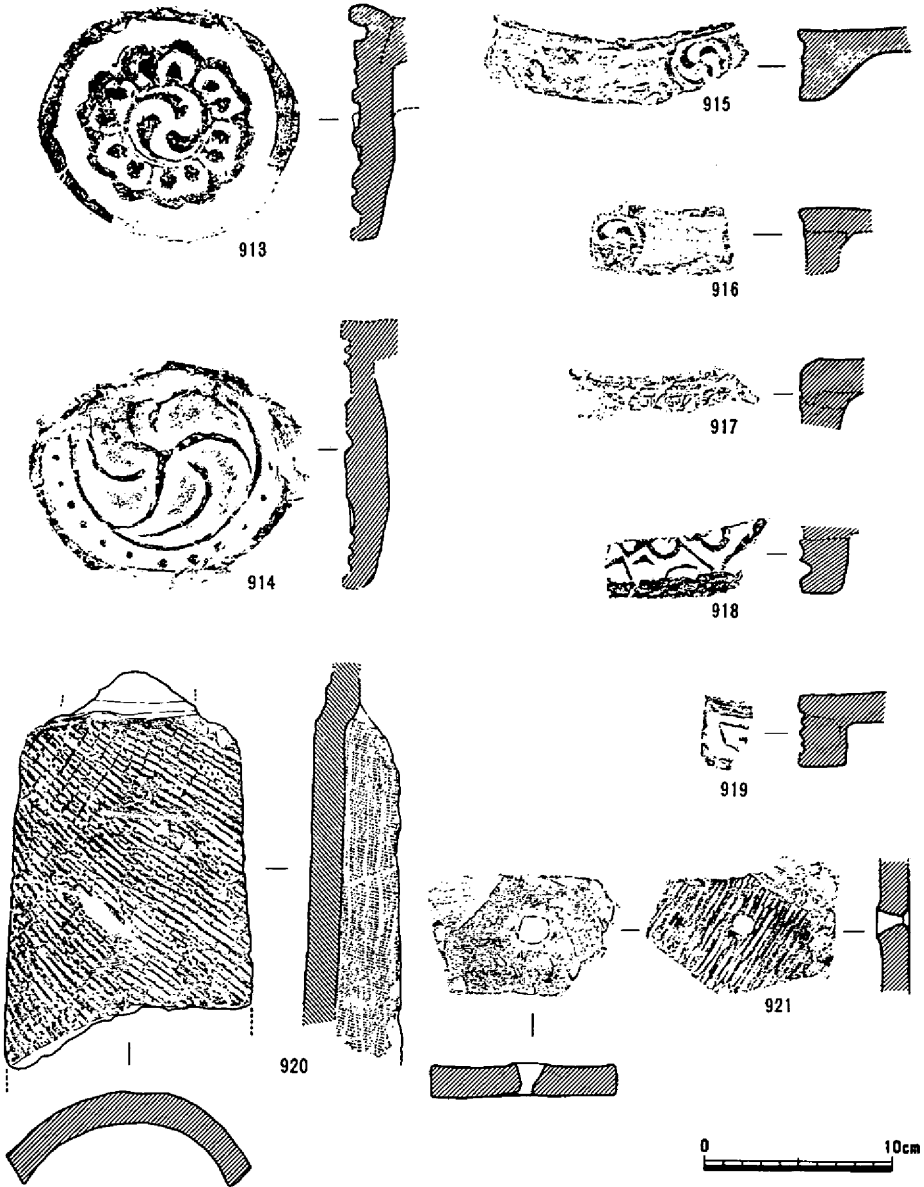
第200圖 包含層出土遺物(1) (1/4)



第201図 包含層出土遺物(2) (1/4・1/2・1/3)

は管状土錘で、4分の1くらいの破片である。S—2は角閃石安山岩製の砥石である。M—15は天聖元宝である。

瓦はあまり多くないが、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。913は軒丸瓦で、中房は三巴文、内区は6葉複弁蓮華文である。上段北寄りの灰原から出土した。914は軒丸瓦で、内区は細かい三巴文、外区は珠文である。915～919は軒平瓦で、915・916には三巴文、918には変形し

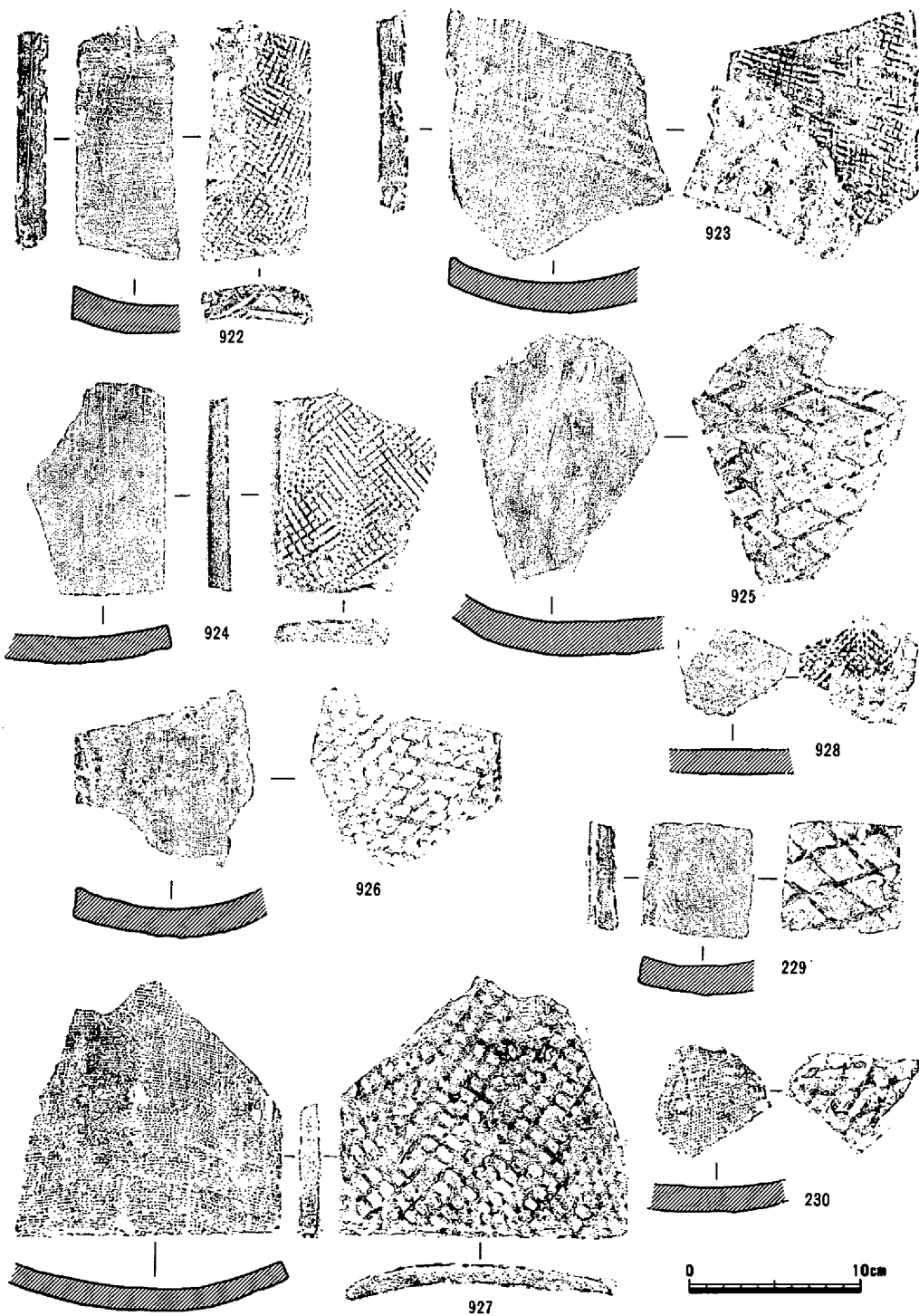


第202図 包含層出土遺物(3) (1/4)



た唐草文を配している。922~930は平瓦である。

(正岡睦夫)



第203図 包含層出土遺物(4) (1/4)

## 第5章 自然科学分野における成果

### 1. 亀山古窯址群の考古地磁気年代

島根大学 時枝克安・伊藤晴明

### 2. 亀山遺跡出土の動物遺存体

早稲田大学 金子浩昌

## 1. 亀山古窯址群の考古地磁気年代

島根大学理学部 時枝克安 伊藤晴明

### 1. はじめに

亀山遺跡（倉敷市玉島八島）から出土した6基の登り窯について、熱残留磁気の方角を地磁気永年変化と比較し窯の最終焼成年代を求めた。遺物は、表面に格子目のたたき模様をもった甕、瓦、播鉢が多く、これらの土器は亀山焼と呼ばれている。亀山焼は平安時代から近世にかけて玉島近辺で作られた須恵器の系統をひく焼物であり、その最盛期は12～14世紀である。ここでは、土器の他に瓦も焼かれており、倉敷市浅原所在の安養寺境内からは三巴蓮華文をもった寺院用の瓦が出土している。なお、亀山焼が出土する岡山県内の遺跡には、兵庫県西部および岡山県の備前焼と一緒に出土する例も多い。

### 2. 地磁気永年変化と熱残留磁気

地磁気の方角は一定でなく、時間が10年以上経過すると目に見えて変化する。このようなゆっくりした地磁気の変化を地磁気永年変化と称している。一方、粘土が地磁気中で加熱されると、焼土は熱残留磁気を帯びる。この熱残留磁気の方角は、加熱時の地磁気の方角に正確に一致し、再加熱されないかぎり、数万年程度の時間が経過しても変化しない。

それゆえ、過去の地磁気の方角が時間とともにどのような変化したかをグラフにすることができれば、このグラフを“時計”として、焼土の年代を推定できる。この“時計”では、地磁気の方角が“針”に相当し、粘土が加熱された時の“針”の位置を、焼土の熱残留磁気が記憶していることになる。日本では、広岡によって西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線が詳しく定められているので、この方法を実際に応用できる。熱残留磁気による年代測定の詳細については、例えば、中島による解説（註1）が参考になる。

### 3. 窯と試料

出土した6基の窯はいずれも半地下式、無階段の登り窯であり、花崗岩の風化した丘陵の斜面に築造されている。1号窯は比較的残りがよいが、2～6号窯は床および壁の一部しか残っていない。なかでも、5号窯の残存面積は小さく、床の状態もよくない。1号窯の焚口と窯尻付近は粘土をはりつけて作られているが、この場所以外の床面では、焼けた花崗岩の岩盤が露出している。しかし、他の窯の壁や床は岩盤ではなく焼土でできている。1号窯と2号窯は3回の改築を受けており、その都度、焚口を上部に移動しているので、古い焚口付近の床面は新しい窯の熱を受けていない。

熱残留磁気測定用の定方位試料採取は、焼土を石膏で固め方位をクリノコンパスで測定する

方法を用いて行った。各窯の試料採取場所について述べると、1号窯については、最も古い窯の焚口近辺のはりつけ粘土の床、および、一番新しい窯灰のはりつけ粘土の床と壁の立ち上がり部の岩盤。2号窯については、最も古い焚口付近の床と一番新しい床。3～6号窯については床面の最上部である。採取した試料数、窯の残存長、残存幅、中軸方向、床面勾配をまとめると次のようになる。

	残 存 長	残 存 幅	中 軸 方 向	床 面 勾 配	試 料 数
1号窯	6.0m	2.0m	NW83	15度	42
2号窯	4.3	1.8	NW58	15	26
3号窯	3.3	1.6	NW45	11	15
4号窯	6.0	1.9	NW54	13	18
5号窯	1.8	1.1	NW48	16	17
6号窯	2.1	1.9	NW48	14	15

#### 4. 測定結果

実験室に持ち帰った試料は、一辺が約3.3cmの立方体状に整形し、それらの残留磁気の方角を無定位磁力計を用いて測定した。図1～6に測定結果を示す。

2、3、4、6号窯の残留磁気の方角は大変まとまりがよいが、1号窯と5号窯の残留磁気の方角は乱れている。しかし、1号窯について、傾動した試料を除外すると、残留磁気の方角はよく揃うようになる。すなわち、図1の円の内外の結果は、それぞれ、焚口の小部分と窯灰、および、焚口の別の部分からの測定値である。このことから、円外の試料は最終焼成後に傾動したことが確実なので、これらを除外すると、残留磁気の方角は全体としてよく揃う。なお、はりつけ粘土と岩盤の残留磁気強度は $\sim 10^{-3}$ emu/grであり、両者には大きい差がなかった。5号窯の残留磁気の方角の乱れは、窯の保存状態が悪く床面が攪乱されているためと考えられ、これらの方向から最終焼成時の地磁気の方角を再現できない。したがって、5号窯について、意味のある考古地磁気年代を推定できないことになる。5号以外の窯について、平均伏角  $I_m$ 、平均偏角  $D_m$ 、Fisherの信頼度係数  $K$ 、95%誤差角  $\alpha_{95}$ 、試料数  $N$  を計算すると次のようになる。なお、 $K$  が大きく  $\alpha_{95}$  が小さいほど測定結果の信頼性が高いと考えてよい。

	Im	Dm	k	$\alpha_{95}$	N
1号窯	57.5度	5.8度E	404	1.4度	27
2号窯	57.3	8.5	473	1.5	20
3号窯	60.2	2.7	718	1.6	12
4号窯	57.2	5.9	411	1.8	18
6号窯	53.5	7.1	372	2.1	14

### 5. 考古地磁気年代

図7に、各窯の残留磁気の平均方向と誤差の範囲を+印と点線の楕円で示している。図中の曲線は広岡による過去2000年間の西南日本における地磁気永年変化(註2)である。考古地磁気年代を求めるには、地磁気永年変化曲線上で、窯の残留磁気の平均方向から近い点を決定し、その点の年代を読み取ればよい。点線の楕円から、年代誤差も同様にして推定できる。さて、亀山古窯跡の残留磁気の平均方向は、地磁気永年変化曲線の中世と弥生時代の二つの部分に近接しているが、亀山焼の操業年代は平安時代～江戸時代と判明しているので、考古地磁気年代値は中世の曲線部分を参照して求めなくてはならない。このようにして決定した考古地磁気年代はつぎのようになる。

1号窯	A.D.1220+15	
2号窯	A.D.1240+15	
3号窯	A.D.1210+15	(信頼性は他の窯より低いと考えられる)
4号窯	A.D.1220+20	
6号窯	A.D.1220+30	

### 6. 考察

3号窯の残留磁気の平均方向は、他の窯に比べて、地磁気永年変化曲線から約3度ほど遠く離れている。この理由は明確には分らないが、3号窯の残存部分が小さいことからみて、消失部分が破壊されたとき残存部が少し傾動したせいかもしれない。それゆえ、3号窯の考古地磁気年代値は他に比べて信頼性が低いと判断している。

さて、3号窯を除くと、各窯の残留磁気の平均方向は、地磁気永年変化曲線の中世の部分にうまく沿っている。また、5号窯以外の窯は、残存面積も大きく安定した地盤の上に構築されているので、最終焼成後の窯体の傾動は考え難い。この意味で、1、2、4、6号窯の考古地磁気年代は信頼できる。ここで、1、2号窯では、新旧の層が重なっているが、前述のように、

これらの層の残留磁気の方向には差が認められず、したがって、年代はほとんど同じということになる。

山田による<sup>14</sup>C年代測定結果(註3)によると、窯中の木炭の測定値では、2号窯は12~13世紀、4号窯は13世紀前半となる。また、4号窯と切り合っている灰原中の木炭の測定値から4号窯の年代を推定すると13世紀中頃となる。このように、<sup>14</sup>C年代と、考古地磁気年代は、大変よく整合している。

中島等による魚住古窯跡の考古地磁気調査(註4)では、5基の窯の考古地磁気年代が報告されており、それらは、A.D.1150(1基)、A.D.1200(1基)、A.D.1220(3基)となっている。これをみると、亀山古窯跡の年代は魚住古窯跡の年代とよく一致しており、亀山焼が出土する遺跡には、兵庫県の明石近辺で作られた土器が重なって出土する例が多いという考古学的事実に矛盾していない。

土器様式比定による考古学的年代は、遺物を欠く3、5号窯以外について、1号窯 14世紀、2号窯 13世紀、4号窯 13世紀、6号窯 13世紀以降と推定されている(註5)。考古地磁気年代と比較をすると、2号窯、4号窯、6号窯は合っているが、1号窯では、土器様式比定年代の方が約100年も新しい。何故、双方の年代にこのような大差が生じているのかははっきりと分らないが、ここでは、まず、考古地磁気年代が真の値からずれる物理的原因について述べ、次に、これらが1号窯に影響した可能性を調べてみる。

窯の考古地磁気年代が真の値からずれる原因には次の三つがある。

- (1)窯のある場所の地磁気永年変化が広岡による西南日本の地磁気永年変化と大幅にずれている。
- (2)窯の近くに鉄のような強磁性体があって地磁気の磁力線が局部的に曲げられている。
- (3)窯体が最終焼成後に傾動した。

さて、最近、畿内から遠く離れたところで、考古地磁気年代と土器様式比定年代が大きくずれる例が報告されている。例えば、九州の須恵器時代では相互の差は約100年にも達している。(註6・7)。しかし、広岡による地磁気永年変化の中世の部分は、主として岡山県の備前焼の測定試料を元にしており、亀山古窯跡は備前に近いので、(1)が問題になることはない。実際に、亀山古窯跡の1号以外の窯について、考古地磁気年代と土器様式比定年代とがよく合っているのはこの判断を裏づけている。次に、1号窯では、互いに約6mも離れた焚口と窯尻の残留磁気が同じ方向を向いている。したがって、もし(2)が問題となるならば、磁性体は2地点の地磁気を同じように曲げなければならないので、その大きさは巨大なものになる。このような状況は現実的に考え難いので(2)は除外される。最後に、仮に1号窯の真の年代は14世紀であるが、窯体が傾動したために、見掛け上、ここで求めた年代A.D.1220+15になっているとすれば、図7より、窯体は北東の方向に約5度傾いたことになる。そうすると、計算では、この傾動によって、

焚口と窯尻は最大約35cmも上下動をしたことになる。1号窯の窯体は固い花崗岩の地山を穿って造られているので、実際にこのような動きがあったとすると、窯の周囲には地盤のずれを示す地質学的特徴が顕著に現れるはずである。しかし、このような特徴は認められなかった。このように、1号窯について、考古地磁気年代が真の値からずれる原因のすべてが否定されるので、1号窯のA.D.1220+15という考古地磁気年代を疑う理由はなにもないことになる。1号窯の考古地磁気年代と土器様式比定年代に生じた約100年という大差の原因の究明は今後の課題である。

結論として、亀山古窯跡の考古地磁気年代は、1号窯について、土器様式比定年代からかなり食い違い、問題を残しているが、総体的に見ると他の年代資料とうまく一致し、合理的な年代であると言える。

最後に、試料採取に便宜を図り、多くの考古学的知識を教示された岡山県古代吉備文化財センター文化財保護主査 岡田 博氏に厚く感謝する。

#### 註

註1 中島正志、夏場信義『考古地磁気年代推定法』、考古学ライブラリー9、ニューサイエンス社

註2 広岡公夫『考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向』、第四紀研究、15巻、200~203

註3 京都産業大学 山田 治教授による測定。

註4 中島正志、牧野智志恵、渋谷秀敏、夏原信義『魚住古窯跡群の考古地磁気による年代推定』魚住古窯跡群、兵庫県文化財調査報告書 第19冊 兵庫県教育委員会、78~84、1979

註5 本報告第6章による。

註6 時枝克安 伊藤清明 『瓦ヶ迫一号窯考古地磁気調査』一般国道バイパス埋蔵文化財発掘調査概要報、上の原遺跡群III、伊藤田窯跡群II、大分県教育委員会、28~29、1984

註7 時枝克安 伊藤清明 『伊藤田城山窯跡A地点2号窯及び3号窯の考古地磁気年代について』、伊藤田城山窯跡群、中津市文化財調査報告第5集、中津市教育委員会、p115~120、1985

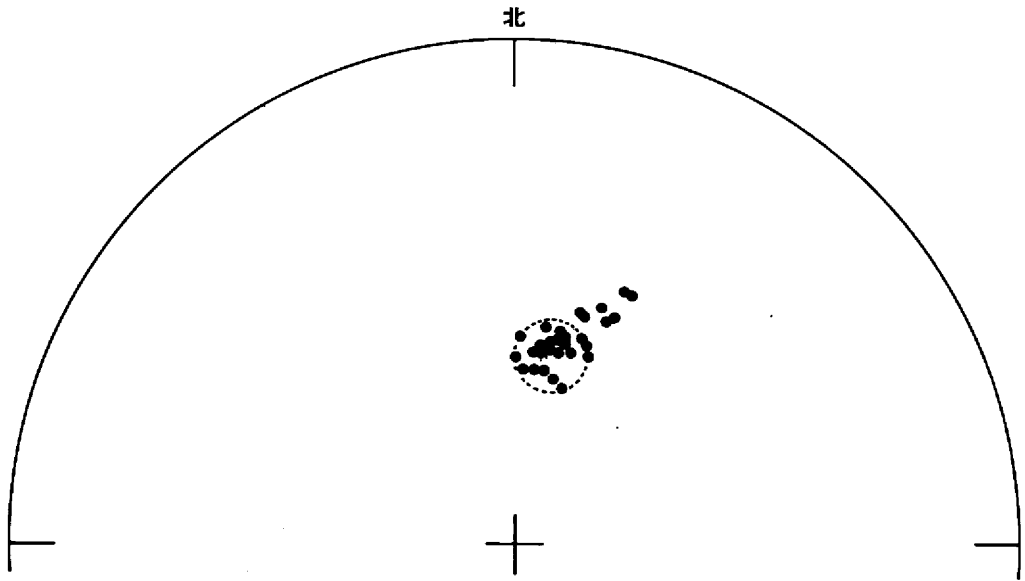


図1 1号窯の残留磁気の方角

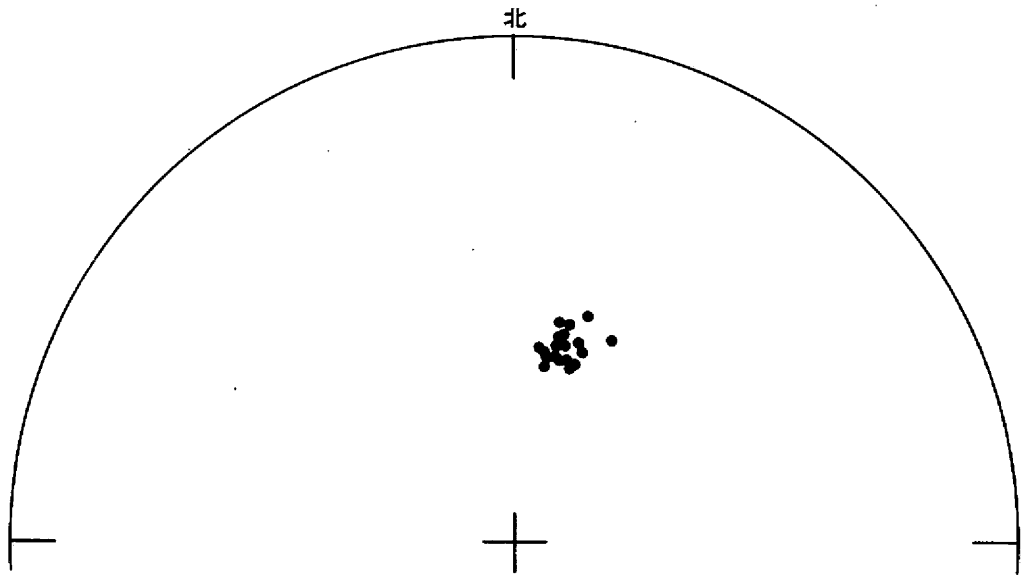


図2 2号窯の残留磁気の方角



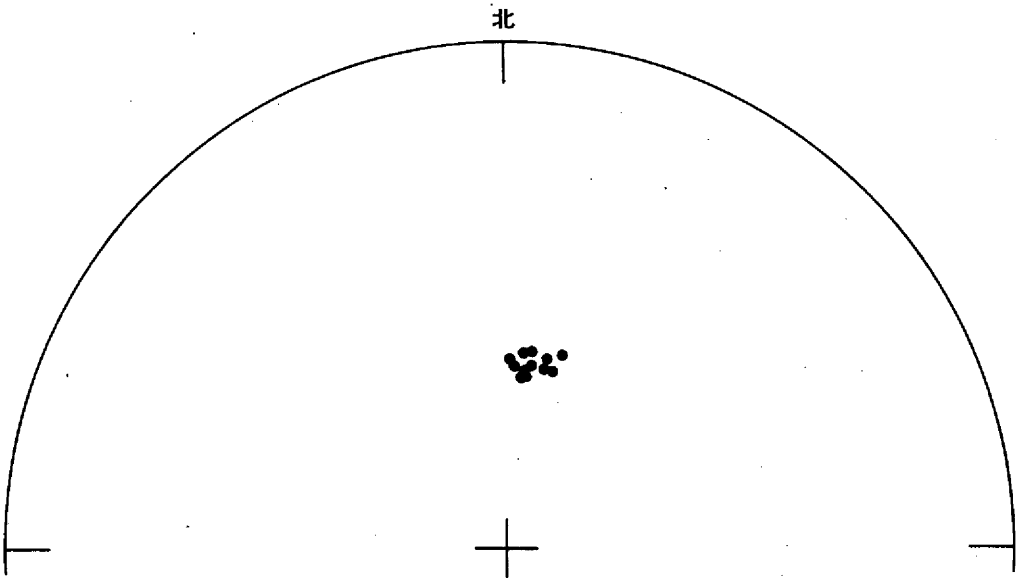


図3 3号窯の残留磁気の方向

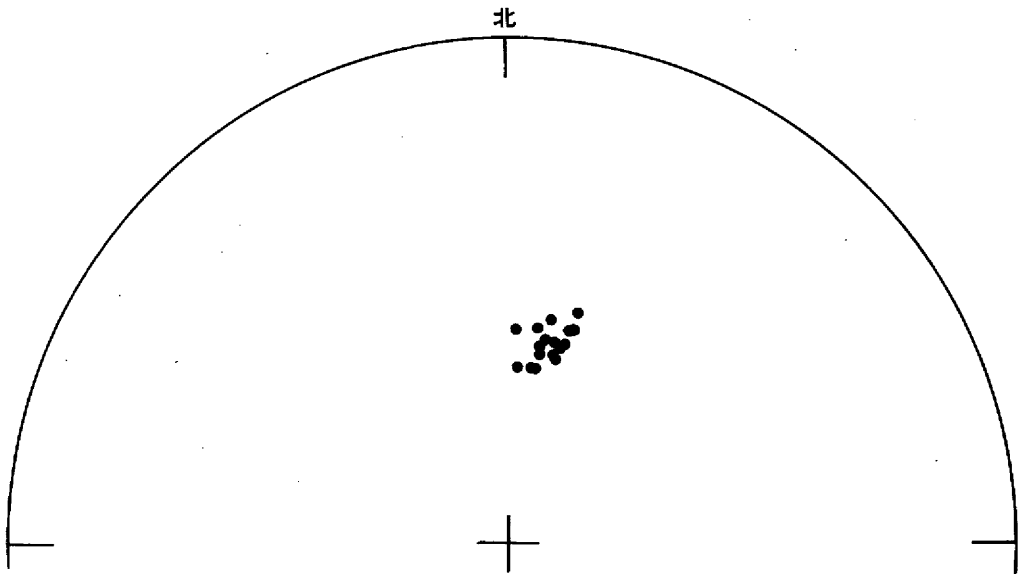


図4 4号窯の残留磁気の方向

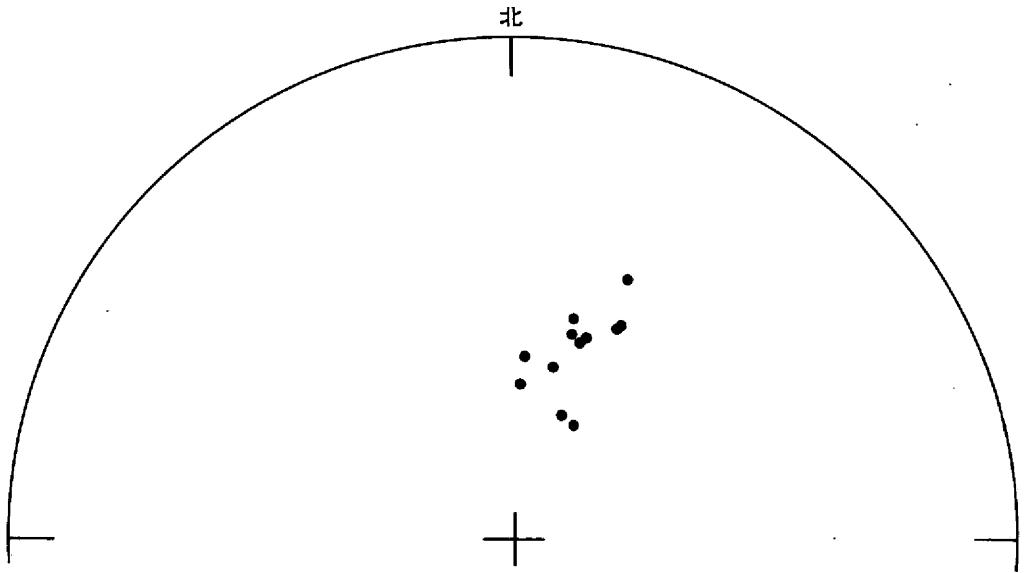


図5 5号窯の残留磁気の方向

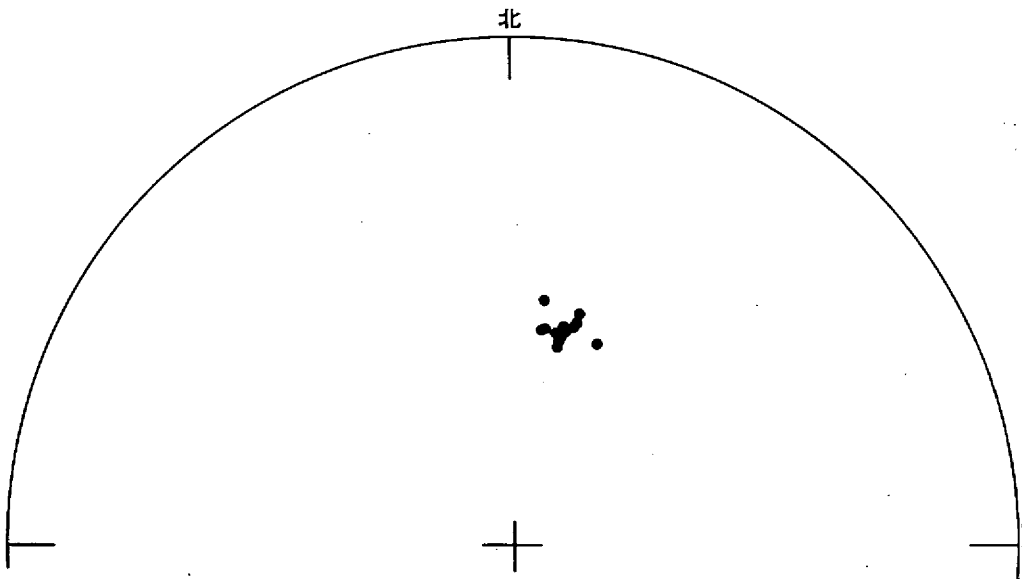


図6 6号窯の残留磁気の方向

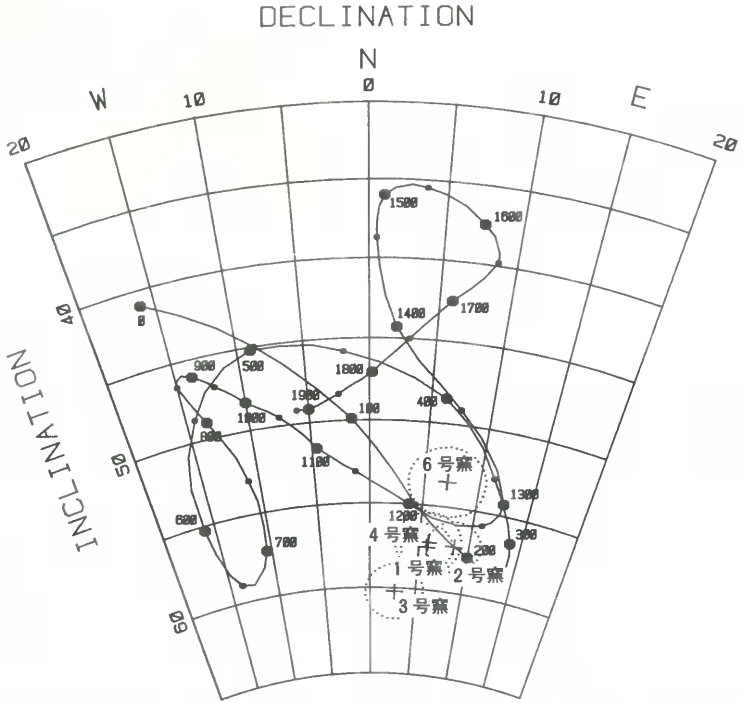


図7 各窟の残留磁気の平均方向と広岡による過去2000年間の西南日本における地磁気永年変化曲線



5号窟熱残留磁気測定試料採取作業

## 2. 亀山遺跡出土の動物遺存体

早稲田大学 金子浩昌

亀山遺跡からは小貝塚が検出され、併せて獣骨の出土があり、それらについての概要を以下に報告する。なお、検出された動物種は次の通りである。

検出された動物の種名

### I 軟体動物門

#### a 腹足綱

##### 前鰓亜綱

##### 中腹足目

ウミニナ科

フトヘナタリガイ

タマガイ科

ゴマフタマガイ

### I Phylum Mollusca

#### Class Gastropoda

##### Subclass Prosobranchia

##### Order Mesogastropoda

##### Family Potamididae

*Cerithidea rhizophorum rhizophorum*

##### Family Naticidae

*Cryptonatica tigrina*

#### b 二枚貝綱

##### 翼形目

フネガイ科

ハイガイ

イタボガキ科

マガキ

##### 異歯目

マルスグレガイ科

ハマグリ

#### Class Bivalvia

##### Order Pteriomorpha

##### Family Arcidae

*Tegillarca granosa*

##### Family Ostreidae

*Crassostrea gigas*

##### Order Heterodonta

##### Family Veneridae

*Meretrix lusoria*

### II 脊椎動物門

#### 哺乳綱

##### 奇蹄目

ウマ科

### II Phylum Vertebrata

#### Class Mammalia

##### Order Perissodactyla

##### Family Equidae

ウマ	<i>Equus caballus</i>
偶蹄目	Order Artiodactyla
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervun nippon</i>
ウシ科	Family Bovidae
ウシ	<i>Bos taurus</i>

### 貝類

検出された小貝塚ではハイガイの出土が最も多い。採集されているハイガイは殻長60.0～30.2mm前後の大きさのものであった。その他の貝は混在する程度であった。マガキは小さなもののみで殻高30.0～40.0mm前後のものである。ハマグリは殻長80.0mmという比較的大型の殻があったが、多くは60.0～40.0mm位の大きさであった。

巻貝ではフトヘナタリガイが多く、比較的良好に生育している殻であった。大部分が殻頂を失っていた。ゴマフタマガイは殻高25.0mm前後のものでやや小さいものであった。

### 哺乳類

#### ウマ

右脛骨 骨体部分

B-9 土器溜り7

ウマは他に橈骨片と思われる4点が出土している。

#### ニホンジカ

右大腿骨骨幹

骨体の中央径 20.5mm

右脛骨遠位端

遠位端最大幅 31.5mm

この脛骨の遠位端つまり下方の骨端近い場所に金属刃による切痕が認められた。切痕は骨の正面から外側にかけてみられ、やや斜めにV状に切痕がつく。深い切痕と浅い擦痕の両方が付けられており、この部分を幾度かにわたり打ったものと思われる。この部分は距骨、踵骨と関節し解体しにくい部分である。骨を切るというより左右両側にあって骨をつなぐ靭帯の切断が目的であったのであろう。このような加工痕は比較的珍しい。

#### ウシ

1) 右下顎骨片

B-8 土器溜り12下部

前臼歯 P<sub>3</sub> から臼歯 M<sub>3</sub> までの歯をのこす下顎骨片である。M<sub>3</sub> の後端が欠損している。

歯牙の計測値は次の通りである。 計測値：mm

	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>
歯冠長	16.6	20.0	22.6	25.7	—
歯冠幅	10.2	11.6	15.2	15.5	15.0

下顎骨体厚 (M<sub>2</sub> ~ M<sub>3</sub> と中間位置 29.0、同位置での体高 52.6)

完全な形をのこしていない標本であるために元の大きさを知ることができないが、やや小型のものであったことが推測される。

## 2) 左大腿骨

近・遠両端を欠損する。骨幹部の中央最小径 32.5mm

## 3) 右距骨

唯一の完存する骨である。全長59.4、最大幅36.9mm

## 4) 左中足骨

土器溜り7 出土

遠位端を欠損する。中央の最小径 23.0mm、近位骨端が骨化して間もない若い個体。

## 亀山遺跡出土の貝と獣骨

本遺跡では凶らずも貝塚の検出があり、当時の貝採集の実際を知る興味ある資料を得た。ハイガイやフトヘナタリなどを多く含むことから、貝採集の環境が内湾奥部にあったことがよくわかるが、おそらくこれは当時の瀬戸内沿岸域で広くみられた状況であったと思う。しかし、これにハマグリが含まれていることに興味を覚えるのである。ハマグリは砂底棲貝種であり、別の地点、つまりさらに湾口に当る地域より運ばれてきた可能性があるからである。そして、それらはこの地に住む人に珍重されていたのではないだろうか。

ウシについては、この時期の家畜として注目される。本遺跡の年代である、つまり「亀山焼」の生産された12~14世紀頃の家牛資料は未だ甚だ少ない。当時のウシはおそらく現在のこる在来牛の祖型なのであろうが、大きさもほぼそれに近い。今後さらに資料を得て、形質についての調査を進めたいと思う。ウマについては残念ながら標本が断片であるために大きさ等の推定は困難であるが、おそらく中型のウマであったと思われる。

図版 1



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18  
フトヘナタリ



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 ゴマフタマガイ



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28  
ハイガイ

図版 2



ハイガイ

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

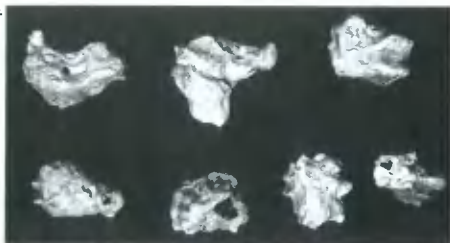


マガキ



ハマグリ

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



ハマグリ

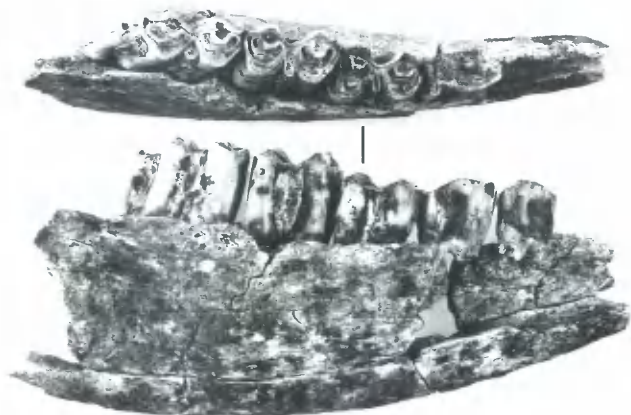
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28





ウマ右脛骨

ニホンジカ右脛骨

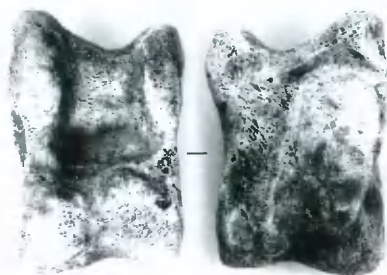


ウシ右下顎骨

図版 4



ウシ左大腿骨



ウシ右距骨

## 第6章 総括

第3章では丘陵部分の窯跡・灰原・土器溜りを中心とする西調査区、第4章では丘陵東斜面から谷部にかけての生活址を中心とする東調査区について、おもに事実報告について概要を述べた。西調査区では、亀山焼を焼成した窯址6基のほか、灰原1か所、土器溜り12か所、土壙等の窯業生産に深く関わる遺構群のほか、柱穴群数か所、掘立柱建物1棟、埋甕2基、土壙、溝、墓址2か所、貝塚多数など、生活に密着した遺構も検出することができた。出土遺物ではコンテナ1000箱を越える亀山焼が出土しており、窯における焼成品のほか、日常生活に用いられたものも含まれている。まず、出土遺物の圧倒的多数を占める亀山焼の焼成年代について若干触れておきたい。(第204図参照)

まず第1段階については、体部外面に平行タタキが施された甕が多く出土した、灰原1の発見によって、この時期がほぼ設定され、土器溜り3などをはじめ、遺跡内の各所からもほぼこの時期に近い亀山焼が散見する。しかし、この灰原1の出土甕はこの平行タタキのみによって構成されているのではなく、すでに格子目タタキのものが出現し始めた時期と考えられる。すなわち、口縁部や体部内面の形状や調整はほとんど同じでも、体部外面のタタキがそれぞれ平行あるいは格子目であったりする時期である。また、口縁部の外方の屈曲は弱く、立ち上がる傾向にある。しかも、口縁部は長目で、口縁端部は内傾するものが多い。共伴出土した土師質土器碗(181~184)から比定すると、12世紀末から13世紀前半に位置付けることができる。(註1) また、出土した多量の木炭から液体シンチレーション<sup>14</sup>C年代測定によると、870±25年(B.P.Y:年輪年代A.D1100年)という若干古い結果が得られている。この時期は参考年代ではあるが、上限と考えてよいだろう。なお灰原1を切って築成された4号窯の熱残留磁気測定による年代は1220+20年である。この時期の甕に用いられる格子目タタキは、器体の大小とは関係なく3~5mm方格のものが多く、やや不揃いである点特徴的である。内面は太目の同心円タタキが施され、後でハケあるいはナデによって消されるものもある。器種構成は、甕のほか瓦・鉢・鍋がみられるが壺も1点出土している。瓦は平瓦のみであるが、粗大な斜格子タタキや格子目タタキが凸面に施された薄手のもののみ出土している。灰原1に近い土器溜り3では、平行タタキの瓦も出土しているので甕と同様の手法が瓦にも用いられたことが推察される。このように古い段階から瓦が焼造されたことは明らかであろう。鉢はすべて捏鉢であるが、楯描き風の横位のハケ目調整が施されたものが含まれている。器肉は薄く、口縁端部は肥厚が目立たない。体部下半に長方形の格子目タタキ痕が残された鍋の出土は特筆される。器壁は薄い、実際に煮沸などに用いられたかどうか、消費遺跡での出土例を待ちたい。

以上の灰原1を中心とする第1段階に比定される亀山焼は、土器溜り3のほか土器溜り7な

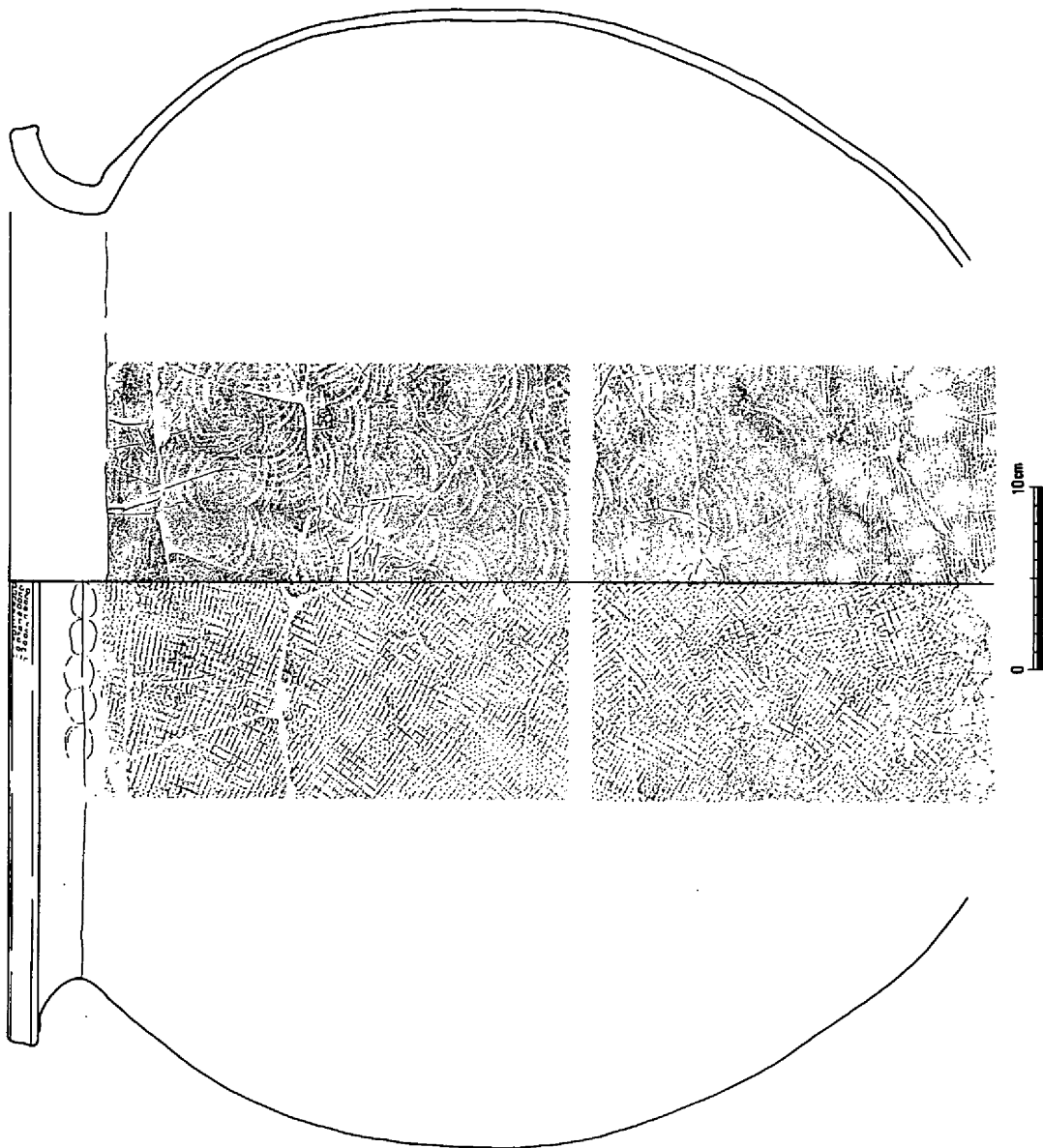
年代	器種	亀山焼			土師質土器	陶磁器
		甕	鉢・鍋	瓦		
A.D 1200年						
1300年						

どでも出土している。この時期に対応する軒丸瓦、軒平瓦はその共伴関係が確かめられないが、前者は蓮華文、後者は唐草文系の時期、すなわち、三巴文（二巴文）が出現する以前か並行する時期が考えられる。また、平瓦では粗大な斜格子タタキや格子目タタキ以外にも、甕の体部外面と同様、平行タタキや、あるいは小さ目な斜格子タタキのものもこの時期に含まれることが推察される。

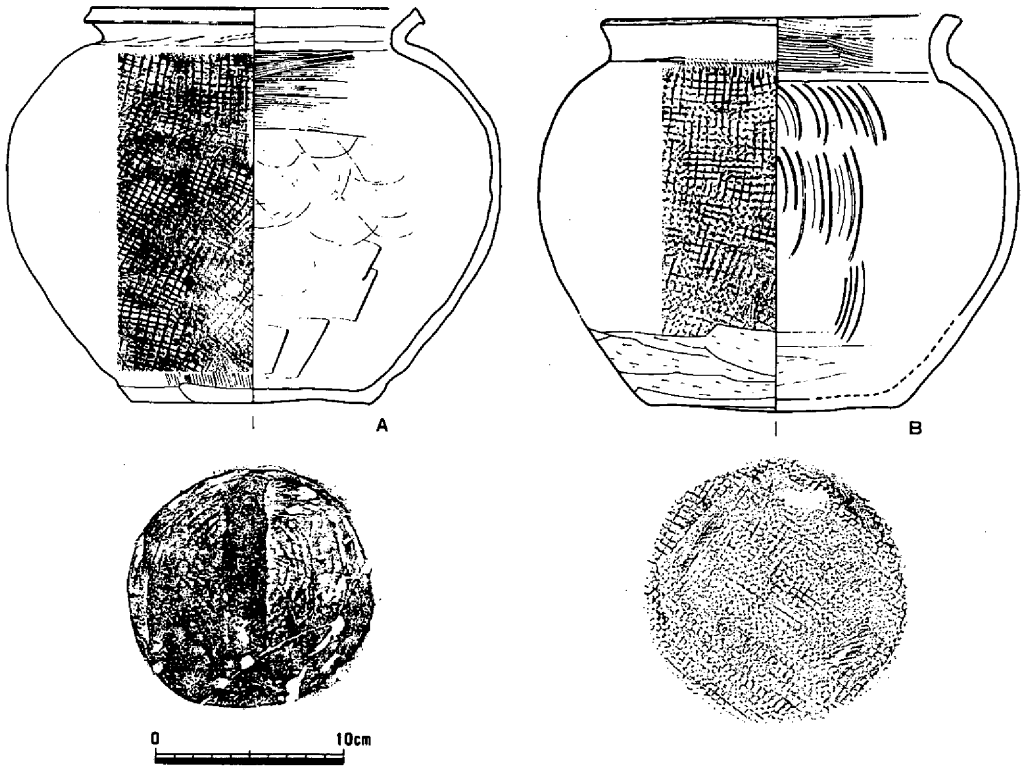
第2段階は、甕の体部外面に格子目タタキのみが用いられ始める時期で、2号窯の時期と考えられる。これは窯体内の土手状に築かれた一括資料から認識される。口縁部の形態は第1段階の形態を継承しており、屈曲は弱く、上方に立ち上がり、口縁端面はやや肥厚してわずかに窪む。体部外面の格子目タタキは3～4mm前後の方格を示すものが多く、浅い。体部の内面は基本的に同心円タタキが施されるが、ハケ調整やナデ調整によって消されるものが多い。同心円タタキはやや太目である。鉢は1点のみ出土しており、捏鉢の可能性が強い破片である。おそらく、擂鉢も出現していると思われるが、出土遺物中にはない。なお、甕の破片の中には、かなり大きい器高をもつものの中でも平底であることが確かめられている。このことは後出する埋甕などに用いられた甕が丸底であることと対照的である。小・中型品では、圧倒的に平底が多いことは、第1段階からすでに観察されており、かなり下の時期でも、その傾向を指摘することができる。なお、瓦との共伴関係は明らかではないが、細かい格子目タタキが凸面に施され始める初期の段階と考えられる可能性が高い。

第3段階は、窯で指摘すると1号窯窯体内の一括遺物があげられる。甕の体部外面には細かな格子目タタキ（3mm方格がもっとも多い）が施され、内面には細めの同心円タタキがみられる。これは、すでに指摘したように播粉木様の心持材が当て具として用いられ、その春材部がそのまま同心円タタキ状をなしているものも含まれているのではないかと考えられる。全体的に、体部内面は同心円タタキが施された後、ナデ・ハケ目などの調整が加えられる比率は減少する。体部の肩と口縁部の外方屈曲の角度は狭まり、40°前後を測るものが多く、口縁部も短かい。口縁端部は、わずかに肥厚して窪み、やや上方につまみ上げられたように、端面が垂直に近いものもある。甕の最小口径18.5cm、最大口径は58cmを測り、量的には口径35～45cm前後のものももっとも多く、これらに対応する底部の多くは共伴遺物から推察すると平底と考えられる（註2）。しかし、この大きさ以上の甕は丸底と考えられ、内面に押圧痕と荒いカキ目を残す破片が、土器溜り-10などからも多く確認されている。鉢では、捏鉢よりも擂鉢の占める割合が高まる。捏鉢は、口径9.3cmを測る小型のものから、擂鉢とほぼ同じ約30cmくらいのものまで多様である。擂鉢の内面には、放射状に櫛描き状あるいは、硬い板状の工具による1本1本の線が備前焼の擂鉢に施されるような条線が描かれるものと大別される。前者では横位だけの卸し目を施す、小型品（口径18.2cm）もみられ、普通のものにも横位の卸し目を加えるものも認

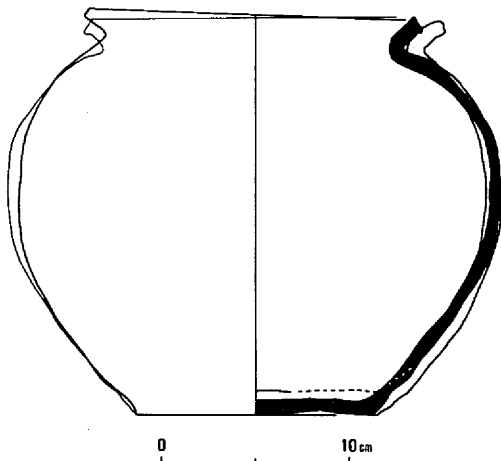
められる。卸し目が徐々に多条化していく傾向は、特に指摘できず、一条の構成する本数は、前者で、後者では4～6本位のものがみられる。また、焙烙状の浅い鉢も出現し、面取りされた低い脚が付けられたものもみられる。後者には屈曲して外方する口縁部が特徴的で、内底部には同心円タタキがみられる。これらは、仕上げはヨコナデあるいはナデ調整によって丁寧仕上げられる点に注意される。鍋は、第1段階のものに比べると器肉は厚く、体部の内外面にハケ調整やヘラケズリの痕跡が看取される。



第205図 亀山焼窯参考図 (1/4)



第206図 笠岡市本谷遺跡出土亀山焼 (1/4)

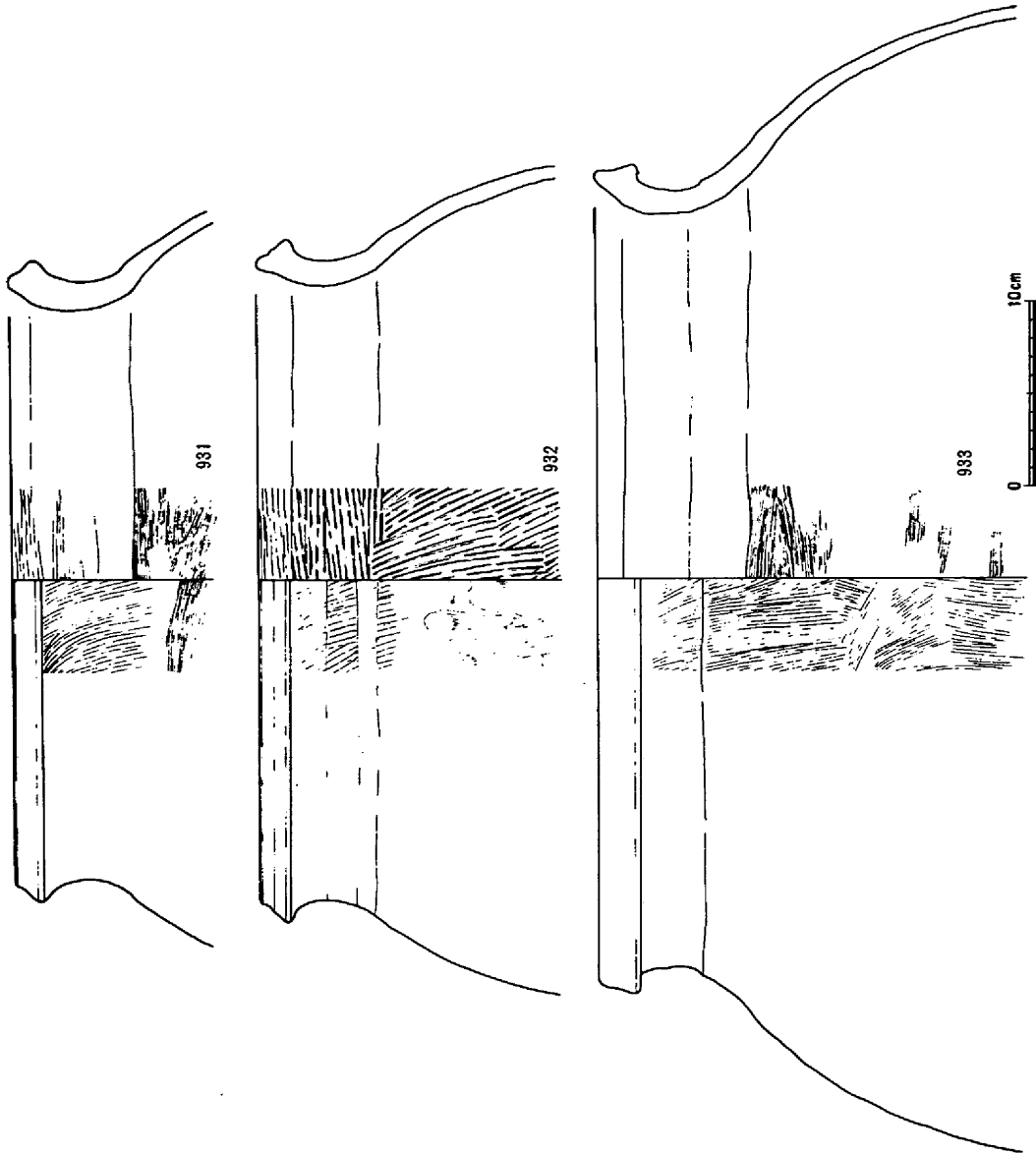


第207図 参考図 (1/4)

以上の第3段階の亀山焼には、北宋銭をはじめ、龍泉窯系の青磁や備前焼擂鉢のほか、土師質土器椀が伴っており、その時期を13世紀後半から14世紀初頭に比定される。瓦では、瓦当文様に三巴文が盛行する時期と考えられる。なお第205図の甕は、出土地不詳の完形に近い大型品である。ほぼこの時期に比定されると考えられるので、紹介しておく。口径48cm、復元推定器高は、約60cmを測り底部は丸底となる。

第4段階は、埋甕<sup>2</sup>によって設定される時期である。内部から出土した高台をもた

ない土師質土器椀によって14世紀前半から中葉にかけての時期が設定される。埋甕に使用された大型の甕は、小さくて、軸線の鋭い格子目タタキが体部外面に施され、口縁部は大きく外方



第208図 土器溜り9上面出土遺物(1/4)

し、口縁端部は垂直に近くなる。全体に淡青灰色を呈し、焼成は良好である。体部の最大径と口径は極めて近接し、前者は後者の約1.2倍、口径と器高の比率は1 : 1.03とずんぐりした球形に近くなる。第3段階の甕では、口径を1とすると体部最大径は1.35となり、さらに口径と器高の比率は、1 : 1.3であり、長胴である点が特筆される。ちなみに第2段階の甕では口径と体部最大径の比率は、1 : 1.5、口径と器高の比率は1 : 約1.33である。

共伴する鉢はないが、ほぼ前段階の形状が踏襲されると考えられる。また、この段階まで、



瓦の生産が続けられたか否かは、明らかではないが、包含層中から肉厚で頭部が丸く肥厚する三巴文軒丸瓦が出土しており、14世紀以降もその生産が続けられた可能性もある。

第206図に掲げる3点の甕は、土器溜り9の上面で出土したものである。形態は、亀山焼甕として知られる草戸千軒町遺跡出土例(註3)などに酷似する。しかし、格子目タタキが体部外面に施されず、荒いハケ目調整で仕上げられている点が、重要な相違点である。色調は橙褐色を呈し、土師質の色調を示すが比較的堅硬な焼きあがりとなっている。格子目タタキがあれば、当然亀山焼とされる甕であるが、器体の形状は、その影響を少なからず受けていると思われる。時期的には、14世紀後半以降と推察される。また、第206図に掲げる遺物は、笠岡市本谷遺跡から出土している亀山焼甕である(註4)。いずれも骨蔵器と考えられており、Aの墓壙をBを伴う墓壙が切っている。いずれも体部外面には格子目タタキ、内面には同心円タタキが残されるが、Bには、外底部にまで格子目タタキが及んでいる。このような例は、皆無である。報告者は、14世紀末～15世紀初頭に比定されている。亀山焼の第4段階以降に比定される参考資料として掲載するが、第207図のように、東調査区出土の甕889と重ねると、その容量・形態に大差ない。わずかに口縁端部の形状が異なるにすぎない。

以上、参考資料を含めて、第1～4段階の亀山焼について述べた。この4段階の変化が、今回の発掘調査によって確かめられた、遺跡地における亀山焼の大きな画期といってよいだろう。限定された範囲の発掘調査のため、これによって亀山焼のすべてが判明したという訳ではなく、今後詳細な遺物の観察を続けていく必要を痛感する。

瓦の供給先は、まず寺院であることに疑う余地はないだろう。亀山焼の初期焼造段階から焼成・生産されていたか否かは明らかではないが、北方の陶古窯址群では、奈良時代に遡って瓦が生産されており、その影響を受けた可能性も理解される。今回の発掘調査で出土した瓦に類似あるいは、全く同種の瓦が出土している遺跡としては、倉敷市浅原所在の浅原寺跡がある(註5)。瓦経の出土でつとに有名な経塚群に近接する寺院址で、1980年の発掘調査で種々の瓦の出土が確かめられている。東調査区の914と同范の軒丸瓦が出土している点は注目される。また、同じく東調査区出土の913の軒丸瓦は、中房に三巴文が描かれ、蓮華文がその周囲をめぐる「向山系」の瓦で(註6)、遠く畿内の瓦生産遺跡や、平安京を中心とする供給先との密接な関わりが考えられる。

一方、甕類に関する文献として看過できないものに、『吉備津宮諸公事注文』の中にみられる「瓶公事ハ亀山定使取候」は、吉備津神社との深い関わり、それも継続的な関係を物語っている(註7)。土器溜り9から出土している614や灰原1から出土している178など、特別な供給先が考えられる遺物として特筆されよう。

県外における亀山焼の出土は、古くから広島県福山市の草戸千軒町遺跡が質量ともに著名で

ある。瓦は出土していないが、甕・鉢などを主体とする日常生活品として、備前焼・東播系の焼物とともに使用されており、年代観を形成する上で今後共に重要な消費遺跡と考えられる。西日本では、長崎県松浦市(註8)のほか、福岡県福岡市の中世遺跡(註9)での出土が知られる。また、東日本では、神奈川県鎌倉市の中世遺跡(註10)からその出土が報告されている。岡山県における中世遺跡では、備前を中心とする南部に多く出土が確められているものの、備前焼の広汎な流通とは比較にならないほど小規模である。備前焼が今なお、そのすぐれた堅牢性と芸術的な造形によって命脈をたもっているのに対し、亀山焼は、すでに存在していない。その衰退の原因に、焼成の劣悪性も一因とされているが、今回の発掘調査資料をみる限り、須恵質のものも多く、瓦質とはいっても器表面はかなり堅緻である。器体が軟弱でもろいために、備前焼などに供給面で押されたというより、むしろ、亀山焼が、その生産地が良港に近いことに頼った商品としてのみ流通したのではなく、飲料水や食料の補給に際し、その容器として広く使用されたが、海岸線の変化や、内海交通の変化などによって港の衰微がもたらされたことにより、亀山焼の生産そのものも、徐々にすたれていった可能性も考える必要がある。さらに、窯業生産遺跡の宿命である陶土・薪材等の燃料資源の枯渇も一つの大きな誘因として考えられるかもしれない。以上の諸問題をふまえて、今後の亀山焼の研究は、従来の編年研究(註11)に加えて、広汎な範囲の消費地遺跡における使用占有率や、瀬戸内海をはさんだ対岸の香川県における中世窯業生産遺跡(註12)あるいは、兵庫県西部の東播系の生産遺跡(註13)との対比が課題になると思われる。

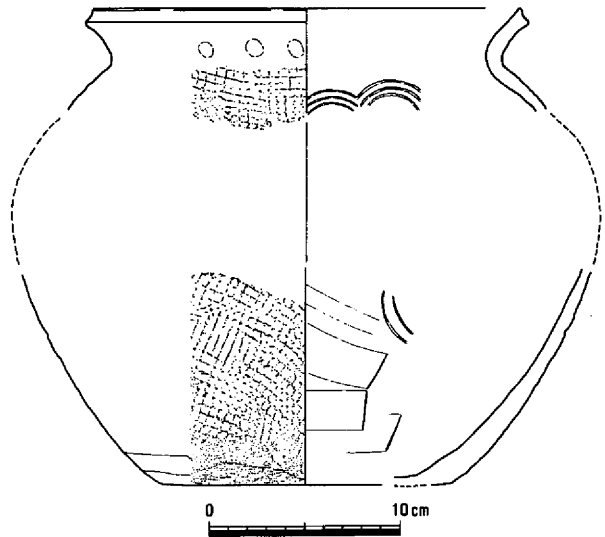
本報告は、出土総数1000箱(コンテナ箱)を越える膨大な量の出土遺物の整理・復元にかかるほんの一部の成果にすぎない。数多くの出土遺物を対象とした実測・手拓・写真撮影に費した期間は、あまりにも短かく、意を尽くせぬ点が多い。瓦をはじめ、図表等によって計測数値を整理し、データをあますところなく掲載する予定も、作成期間・紙数の制約により果たせなかった。他日の整理・検討を期して、擱筆する。(岡田)

#### 註

註1 馬場昌一「岡山県助三畑遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究No.4』所収——日本貿易陶磁研究会 1984年。福田正継「瀬戸内海中中部北岸域の土師質碗について」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985年。鈴木康之「鹿田遺跡出土の中世土器について」『鹿田遺跡I』——岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988年。以上の文献をおもに参考にした。

註2 従来、骨蔵器として出土している完形の甕の計測値によると、口径は底径の1.2~1.5倍の値を示す。したがって、口径・底径がほぼ正確に計測できれば、どちらか一方の近似値を得ることができると。〈参考資料〉①井原市大江町出土甕。口径27cm、器高26.9cm、底部18.4cm。井原市立郷土館蔵。

瓦質を呈する甕で、内部には火葬骨がそのまま残されている。②後月郡芳井町出土甕。口径25cm、器高27.6cm、底径18.2cm。芳井町立郷土資料館蔵。③新見市西方横見墳墓群出土甕。口径22.3cm、推定器高25cm、底径15cm。④広島市佐伯区五日市町月見城遺跡出土甕。口径21.2cm、器高25.4cm、底径15.6cm。以上、①・②は臼井洋輔氏のご協力により計測した。外底部には、いずれも明瞭な下駄印が残されているが、全く同一のものである点が注目される。③は既報の資料であるが下澤公明氏の助言により再実測したものである。(下澤公明ほか「横見墳墓群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15——中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査9』所収。岡山県教育委員会1977年。)④は掲載報告書によった。(向田裕始・加藤光臣ほか「月見城遺跡」『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第54集』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1987年。骨蔵器として使用された甕である。内面・外底部の調整については、「体部内面から底部がナデ」とのみ記されている。さらに14世紀以降の亀山焼と推定されている。)なお、神前神社のご神体とされている完形の甕は、筆者の計測では、口径12.3cm、器高23.4cm、底径13.5cmを測り、口径よりも底径が上わまる。したがって、臼井洋輔氏の判断によるように壺とすべき器種と考えるべきかもしれない。今回の調査では、類品の出土は認められない。(臼井洋輔「日本の古窯」——岡山県立博物館・昭和61年度特別展図録)



第209図 新見市横見墳墓群出土亀山焼甕 (1/4)

現存する最古の亀山焼とされる、菅生神社付近出土の骨蔵器は、平行タタキが体部外面に施された甕で、口径17cm、器高31.5cm、底径13.6cmを測る。共伴する土師器杯によって、平安時代末から鎌倉時代初頭に比定されている。口径は底径の1.25倍である。(間壁忠彦・藤田憲司「倉敷市祐安菅生神社付近出土の骨蔵器」『倉敷考古館研究集報第15号』倉敷考古館 1980年。)

註3 松下正司ほか「草戸千軒町遺跡発掘調査概報」(1968年度以降) 広島県教育委員会・草戸千軒町遺跡発掘調査団・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所。長年にわたる調査成果のほか、篠原芳秀氏より遺跡出土の亀山焼について種々ご教示を賜った。また、出土亀山焼の年代等に関する考察については下記を参考にした。①鈴木康之「草戸千軒町遺跡S D1290出土の土器類について」『草戸千軒町——第31次発掘調査概要』(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1984年。②佐藤昭嗣「S D3190溝出土

— 亀山遺跡 —

- の土器類について」『草戸千軒No162』 1986年。③篠原芳秀「草戸千軒町遺跡出土の亀山焼甕」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』 日本中世土器研究会 1987年。
- 註4 網本善光・岩崎仁司「本谷遺跡」『笠岡市埋蔵文化財発掘調査車報告1』 笠岡市教育委員会 1987年。遺物の実測図については、網本善光氏のご好意により、筆者が再実測したものを掲載させていただいた。
- 註5 鎌木義昌ほか「安養寺瓦経の研究」倉敷市教育委員会内「安養寺瓦経の研究」刊行委員会 1963年。福本明「浅原寺跡」 倉敷市教育委員会 1984年。
- 註6 江谷 寛「河内・向山瓦窯の瓦」『同志社大学考古学シリーズⅠ』同志社大学考古学シリーズ刊行会 1982年。
- 註7 藤井駿・水野恭一郎「岡山県古文書集第2輯」 思文閣出版 1981年。この文献の時期は中世とされている。
- 註8 中田敦之ほか「楼楷田遺跡—松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書」『長崎県文化財調査報告書第76集』長崎県教育委員会・松浦市教育委員会 1985年。体部外面は格子目タタキ、内面はハケ目調整が行われ、底部は平底とされている。
- 註9 井沢洋一ほか「博多VII—博多遺跡群28次調査」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第147集』福岡市教育委員会 1987年。東播系あるいは香川県十瓶山窯の製品も出土している。東播系の鉢は12～13世紀代のものが集中しているといわれる。
- 註10 神奈川県鎌倉市における出土例について、下記の文献で亀山焼とほぼ断定されている。福田正継「千葉地東遺跡の出土遺物を見学して」『中世土器研究第41号』 中世土器研究会 1986年。筆者は実見に及んでいない。
- 註11 ①荻野繁春「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌第3号』所収。福井考古学会 1985年。備中陶Ⅰ～Ⅷ期(11世紀後半～16世紀前半)と、おもに消費地(遺跡)で出土した資料や、骨蔵器をややメカニカルに配列、編年作業が行われている。②伊藤晃「窯業—亀山焼の変遷」『岡山県の考古学』 吉川弘文館 1987年。亀山焼と亀山焼第1～4群に編年している。第4群は、亀山系土器群としている。この標式的な遺跡は浅口郡鴨方町所在の沖の店遺跡である。(伊藤晃・浅倉秀昭「沖の店遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42—山陽自動車道建設に伴う発掘調査2』建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1981年。
- 註12 森浩一ほか「香川県綾南町十瓶山北麓窯跡調査報告」『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』同志社大学 1971年。
- 註13 大村敬通ほか「魚住古窯跡群」兵庫県教育委員会 1983年。寺島孝一「魚住古窯跡群発掘調査報告書」平安博物館。1985年。丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』中世土器研究会 1985年。



鳶山遺跡 昭和60年度調査区遺景（南から）

図版 2



1. 遺跡遠景（昭和60年度調査区；東から）



2. 遺跡から旧玉島市街地を望む（北から）



1. 神前神社（南東から）



2. 倉敷市指定亀山焼窯址（神前神社境内；南から）

図版 4



1. 遺跡付近に残る宝篋印塔  
(北から)



2. 遺跡付近に露出する窠体断面 (北西から)





1. 1号窯検出状況（東から）



2. 1号窯焼き口（矢印は土師質土器椀；東から）



1. 1号窯焚き口南側土層断面（北東から）



2. 1号窯焚き口北側土層断面（南西から）



1. 1号窟体内土器出土状態（西から）



2. 1号窟体内土器出土状態（東から）



1. 1号窟窿体（西から）



2. 1号窟窿体（東から）



1. 1号窯焚き口（東から）



2. 1号窯完掘状況（東から）



1. 2号窟・3号窟とその周辺（南から）



2. 2号窟・3号窟とその周辺（西から）



1. 2号窯検出状態（南東から）



2. 2号窯窯体検出状態（北東から）



1. 2号窯窯体（北東から）



2. 2号窯窯体と土器集中部分（北から）





1. 2号窯窯体（東から）



2. 2号窯土器集中部分（北から）



1. 2号窯窯体内土器集中部分（北から）



2. 2号窯焼き口部分と土器集中部分（南から）



1. 2号窯焚き口付近の窯体（東から）



2. 2号窯窯体（南から）



1. 2号窯窯体断ち割り断面（南東から）



2. 2号窯窯体中央部断ち割り断面（南東から）



1. 2号窟完掘状況（南東から）



2. 3号窟検出状態（東から）



1. 3号窯窯体（北から）



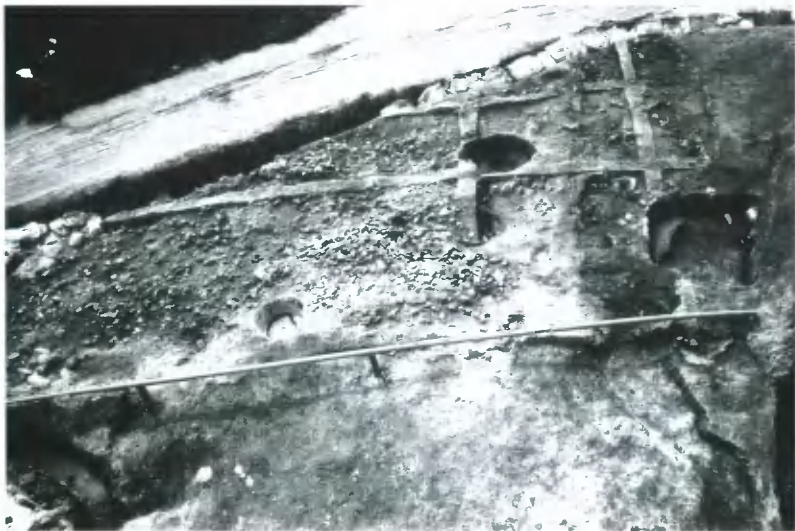
2. 3号窯分焰柱（南から）



1. 3号窟分焰柱（南から）



2. 3号窟断ち割り断面（南東から）



1. 4号窯検出状況（北西から）



2. 4号窯窯体土層断面（東から）





1. 4号窯窯体内土層断面（南東から）



2. 4号窯窯体検出状況（北西から）



1. 4号窯窯体（南東から）



2. 4号窯窯壁（南西から）



1. 4号窯窯体断ち割り断面（南から）



2. 4号窯窯体断ち割り断面（東から）



1. 4号窟一次窟体検出状態（南東から）



2. 4号窟完掘状況（北西から）



1. 5号窯窯体検出状態（南東から）



2. 6号窯検出状況（東から）



1. 6号窯窯体内土器出土状態（東から）



2. 6号窯窯体内瓦並置状態（南東から）



1. 6号窯窯体検出状態（南東から）



2. 6号窯窯体断ち割り断面（北西から）



1. 灰原1土層断面（4号窯西：南東から）



2. 灰原1土層断面（4号窯西：東から）





1. 土器溜り1 (東から)



2. 土器溜り1 青磁出土状態



1. 土器溜り1北側、1号窯下方土層断面（東から）



2. 1号窯下方土器溜り2（東から）



1. 土器溜り2 (南から)



2. 土器溜り2 土層断面 (南から)



1. 4号窟（手前）と土器溜り3（南西から）



2. 土器溜り3土層断面（4号窟東：南から）



1. 2、3号窟と周辺の土器溜り（南から）



2. 土器溜り4（東から）



1. 土器溜り7・3号窟周辺（南西から）



2. 土器溜り5土層断面（東から）



1. 土器溜り7上段部分（南東から）



2. 土器溜り7上段土層断面（東から）



1. 土器溜り7下段土師質土器椀出土状態（東から）



2. 土器溜り7下段軒丸瓦出土状態（南東から）





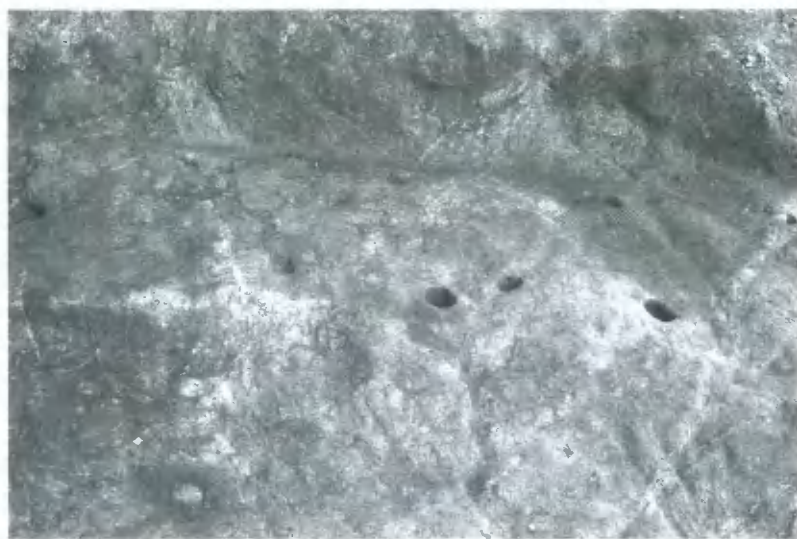
1. 土器溜り7下段土層断面（南から）



2. 土器溜り7下段土層断面（東から）



1. 土器溜り7 除去後の状況 (南東から)



2. 土器溜り7 下位C-9 上位部柱穴群 (南から)



1. 土器溜り8検出作業（東から）



2. 土器溜り8検出状況（東から）



1. 土器溜り8検出状況（南西から）



2. 土器溜り10検出状況（南から）



1. 土器溜り10検出状況（北から）



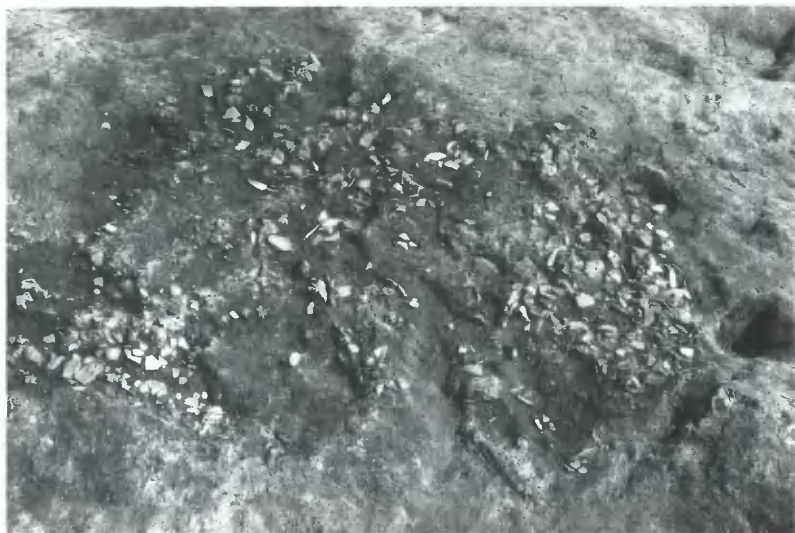
2. 土器溜り11と貝塚（東から）



1. 土器溜り12北側集集中部分（東から）



2. 土器溜り12北側集集中部分（南東から）



1. 土壌1上面検出状況（北から）



2. 土壌1土層断面（北から）

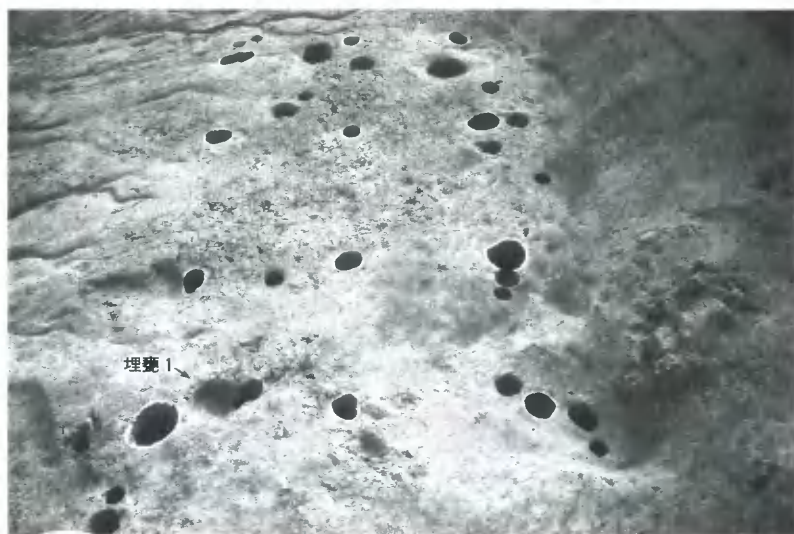


1. 土壇2土層断面 (東から)



2. 土壇2完掘状況 (東から)





1. 掘立柱建物（北東から）



2. 掘立柱建物柱穴内根石（南東から）



1. 下位（7～8ライン）柱穴群（北から）



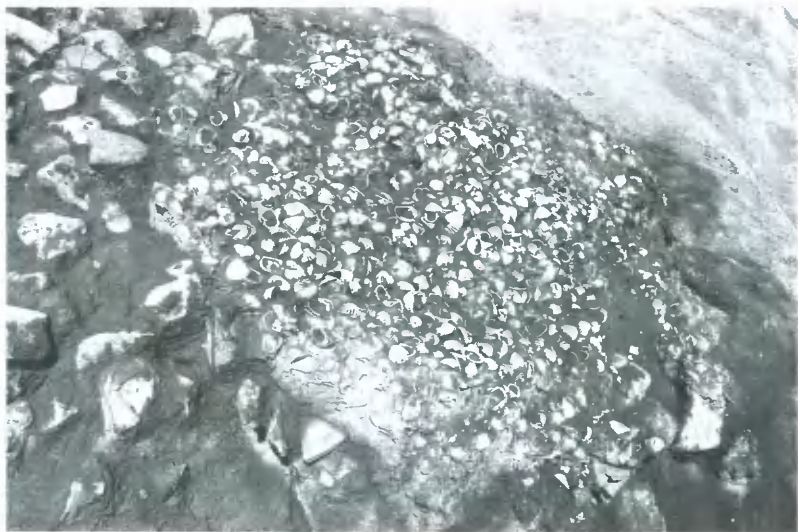
2. 下位柱穴群（東から）



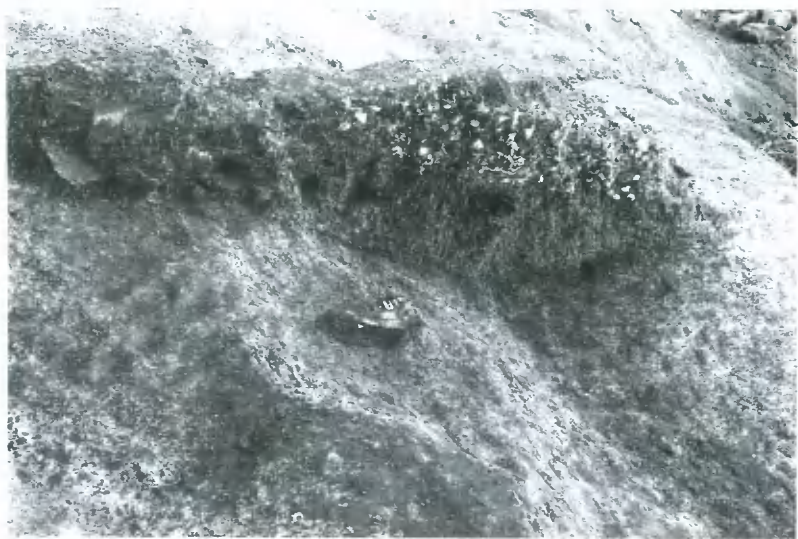
1. 下位柱穴群柱穴内銅鏡出土状態（南から）



2. C-9 付近貝塚検出状況（南から）



1. 土器溜り12上面の貝塚（西から）



2. 土器溜り12上面貝塚土層断面・獣骨出土状態（西から）



1. 埋壙1 検出状況（東から）



2. 埋壙1 完掘状況（東から）



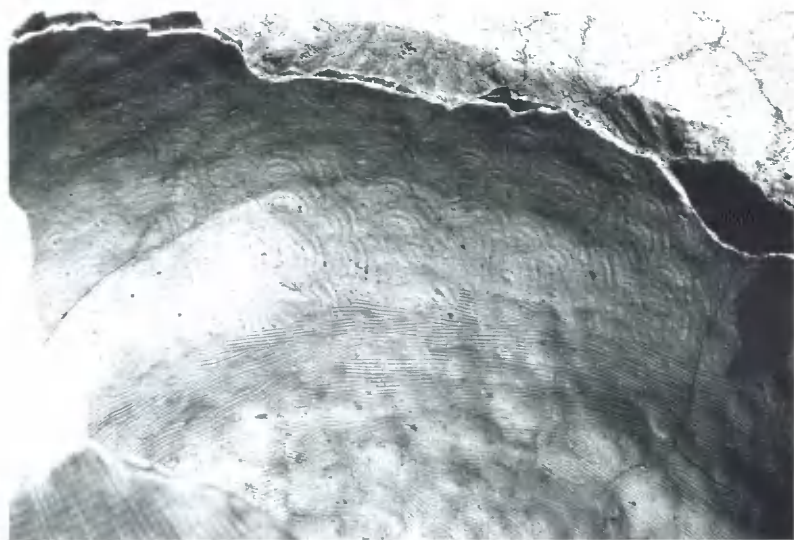
1. 土器溜り8土層断面と埋甕2検出状況（南から）



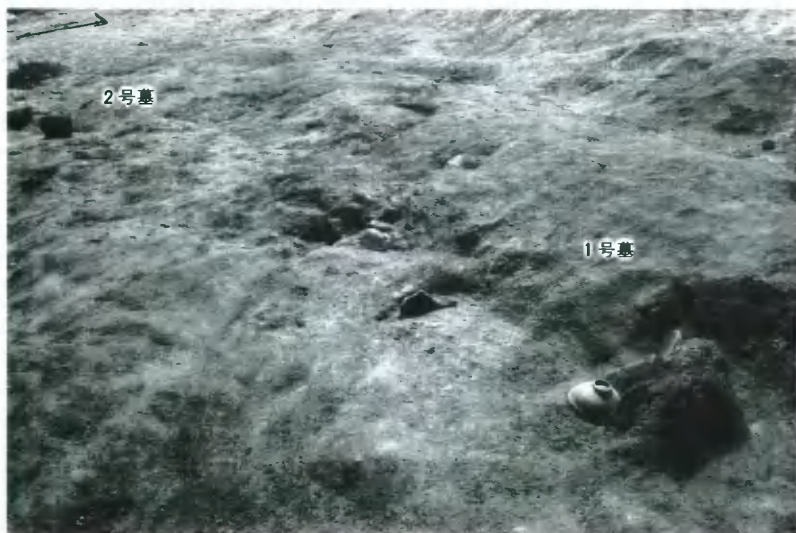
2. 埋甕2内部（南西から）



1. 埋甕2使用の亀山焼体部（南西から）



2. 埋甕2使用亀山焼内面（南西から）



1. 1・2号墓検出状況（東から）



2. 1号墓検出状況（南東から）





1. 1号墓検出状況（北西から）



2. 1号墓青磁碗・平瓦（南西から）



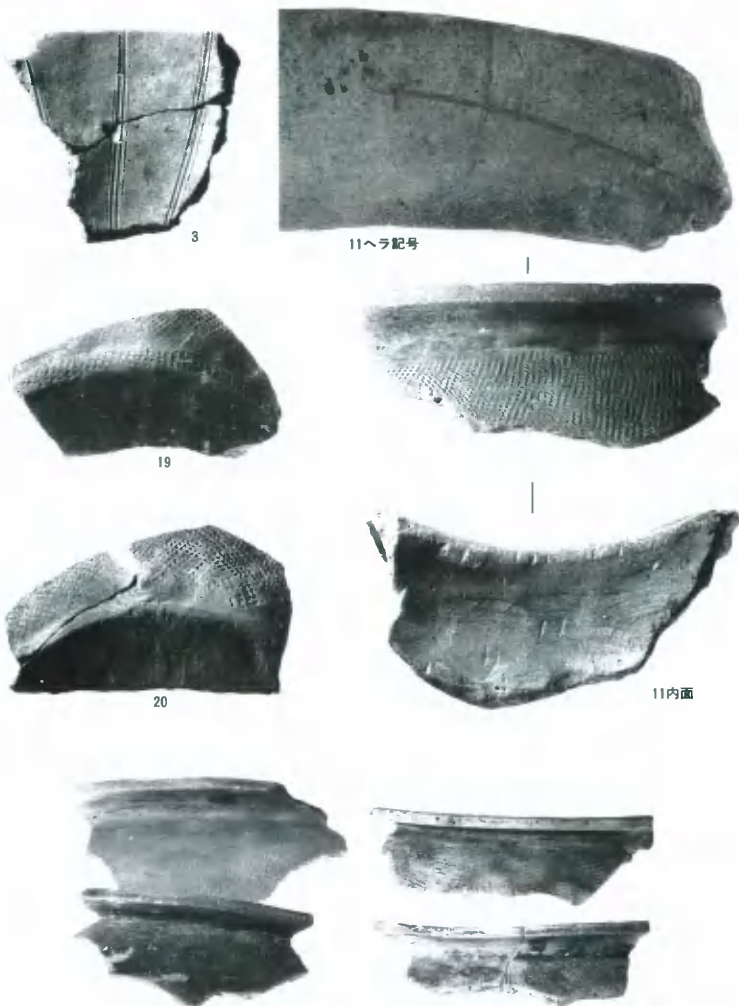
1. 2号墓（北から）



2. 工事用道路建設に伴う追加発掘調査区（Bライン東端；北から）



発掘作業風景



1号窯出土土甕各種



13



21



21外底部



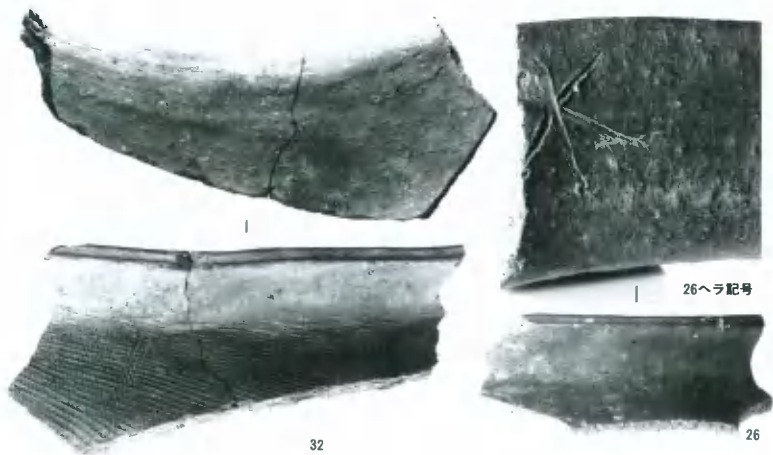
1号窟出土瓷各種

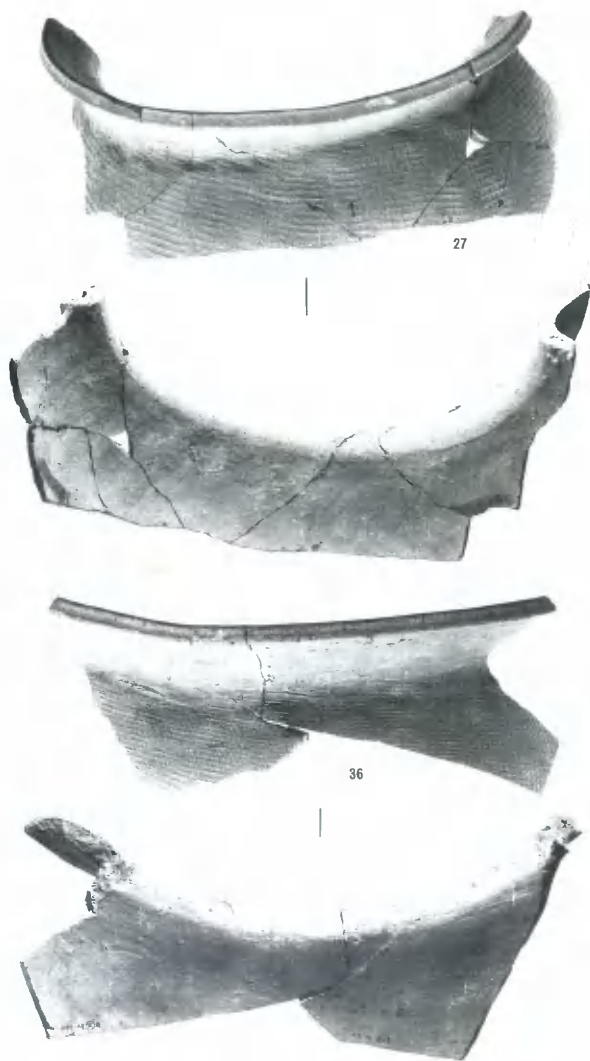


15



2号窯出土壺各種

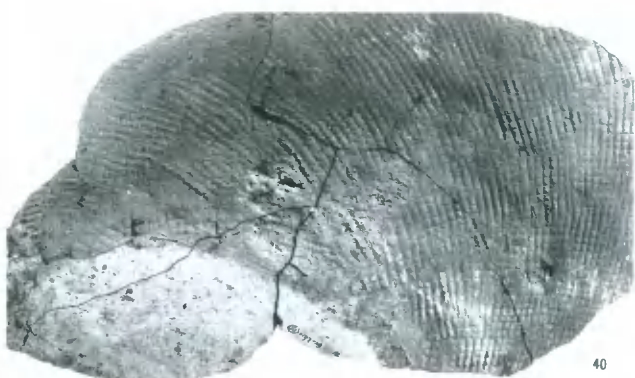




图版60



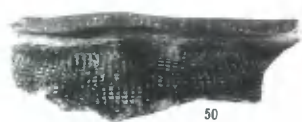
35



40







50



49



52



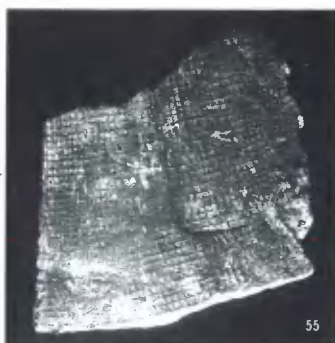
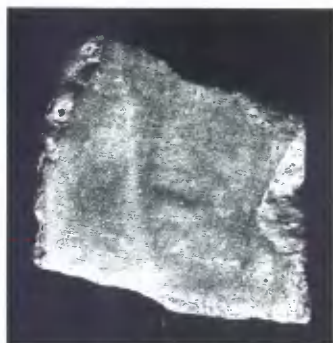
48



52内面

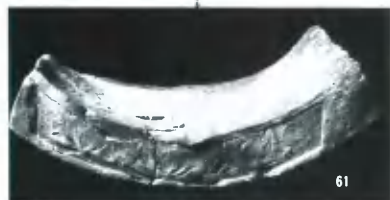
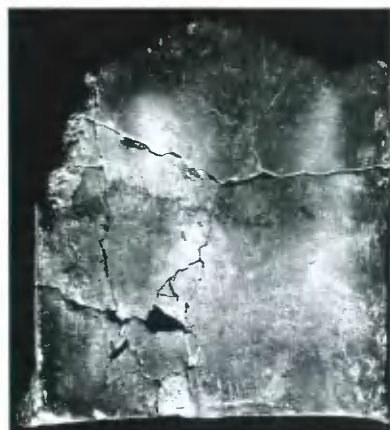
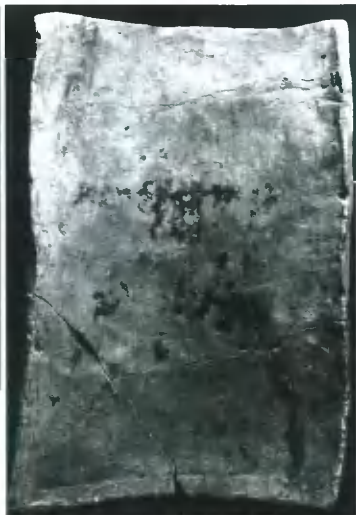


50内面

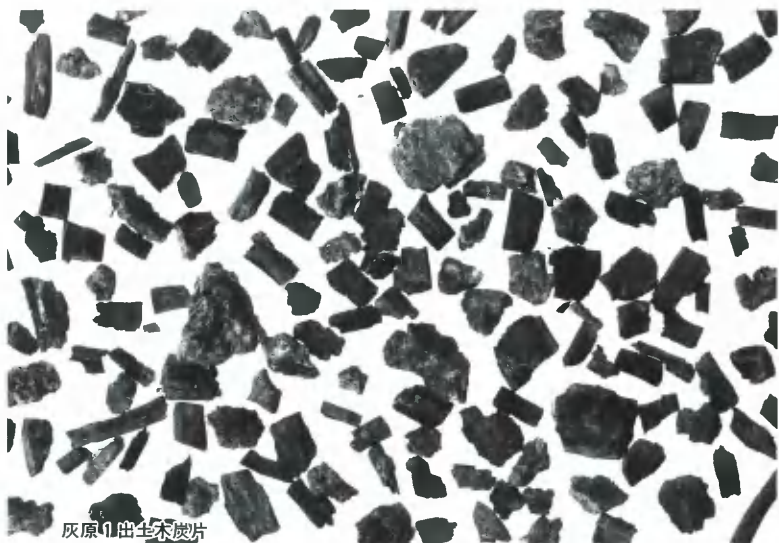


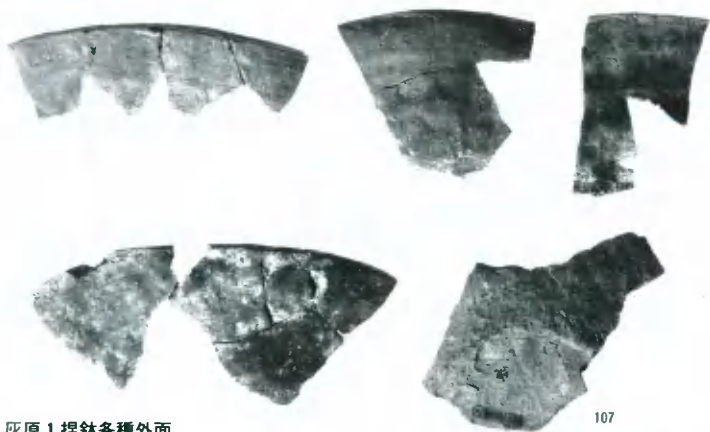
55

图版62



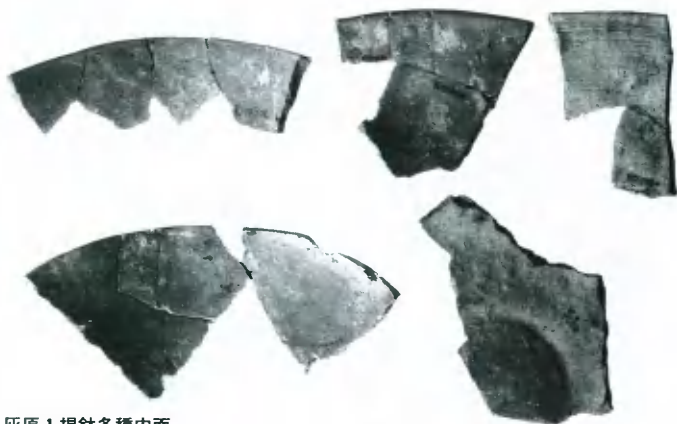
63



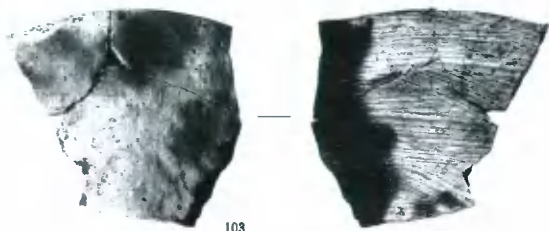


灰原1 捏鉢各種外面

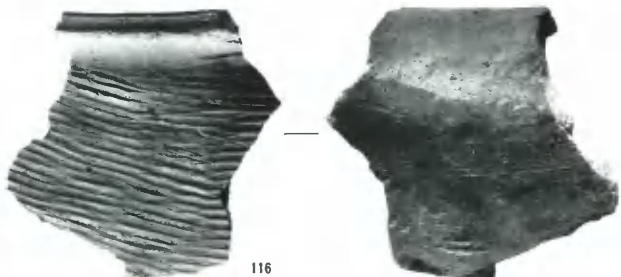
107



灰原1 捏鉢各種内面



108



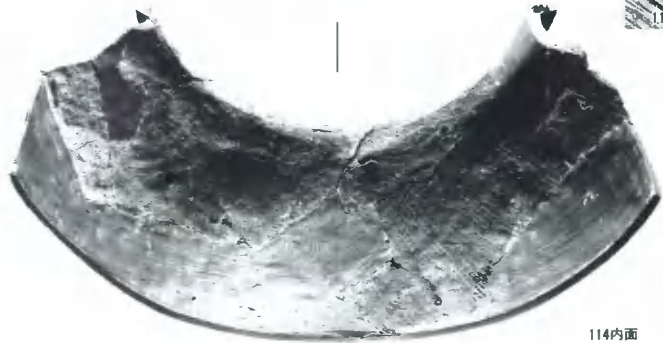
116



114



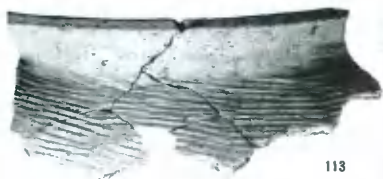
114平行タタキ弧穴



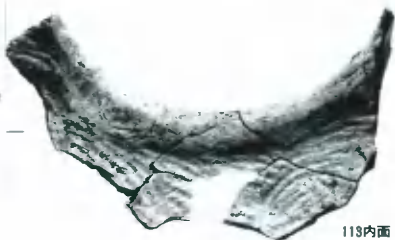
114内面



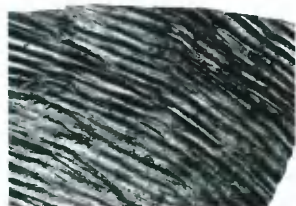
115



113



113内面



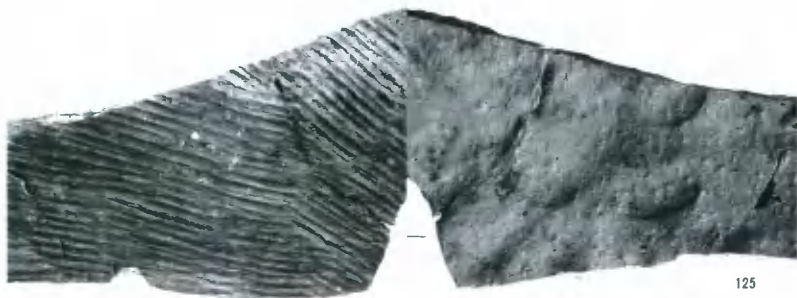
120



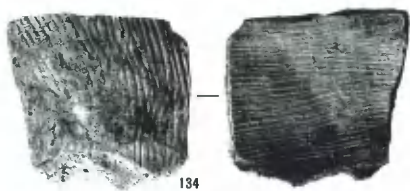
124



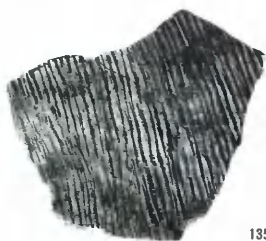
123



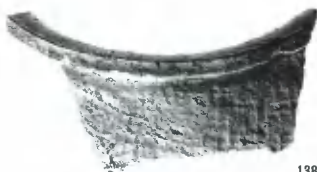
125



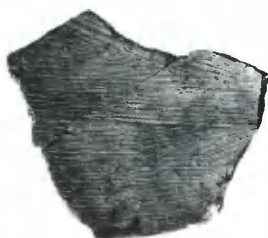
134



135



138



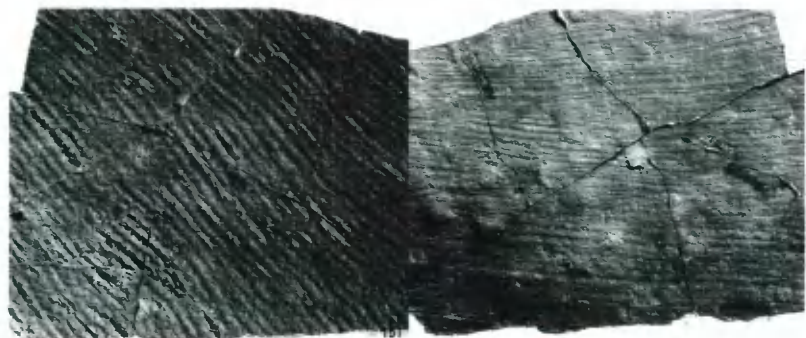
138内面



136



141



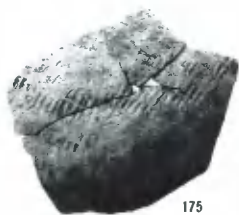




162



162内面



175



174

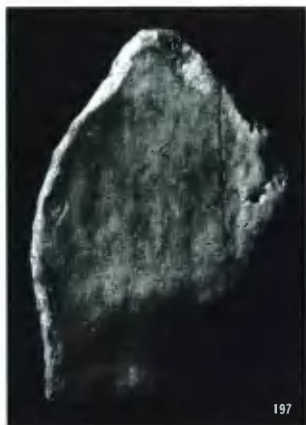


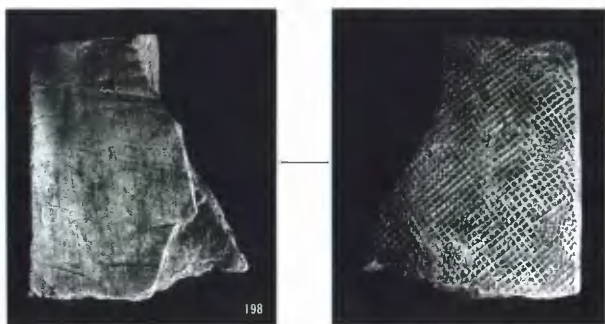
178



172



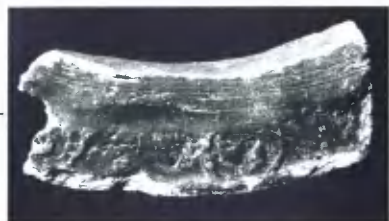
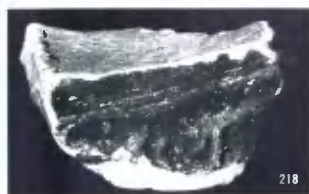




土壙 1 出土甕各種



土壙 1 出土甕各種

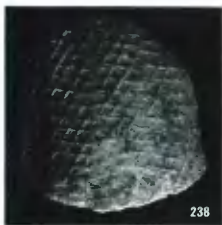




217



228



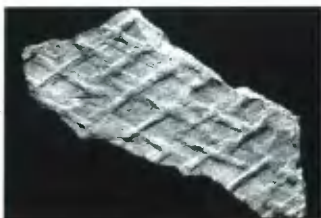
238



242



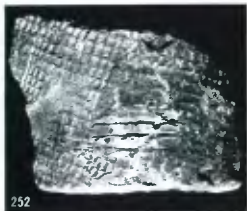
239



250



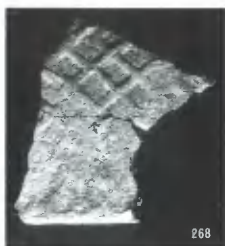
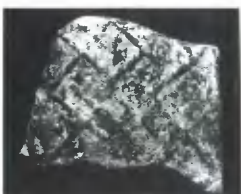
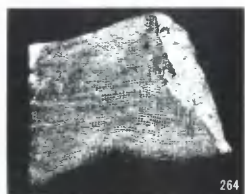
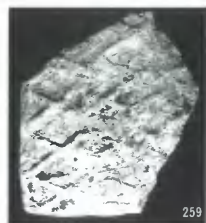
251



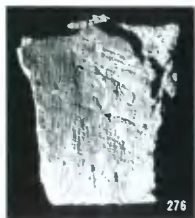
252



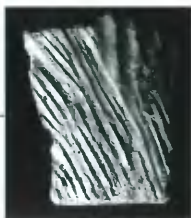
260



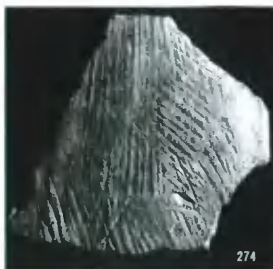
图版74



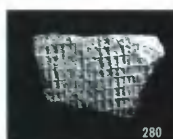
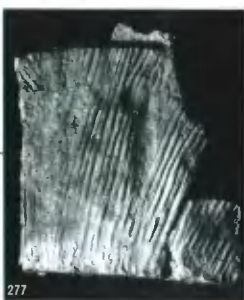
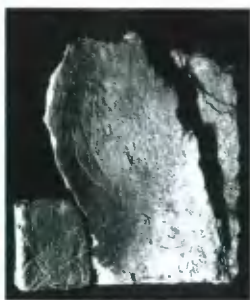
276



277



274



280



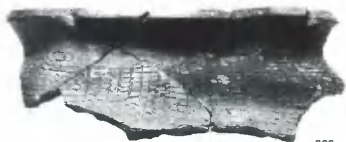
283



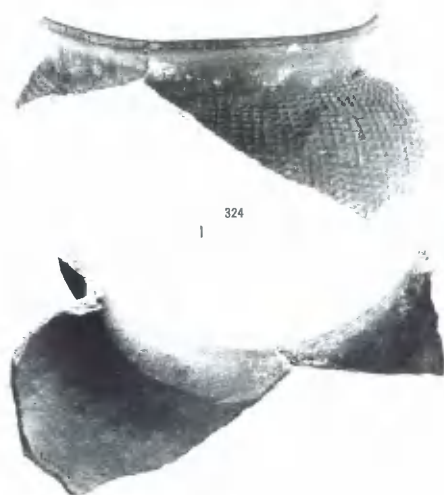
305



315



323



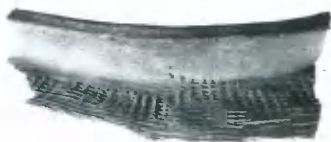
324



337内面



354



353



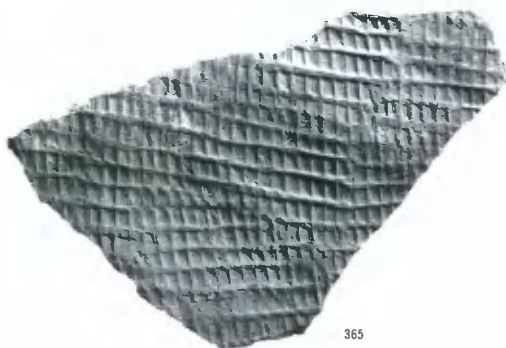
358



373



M-1

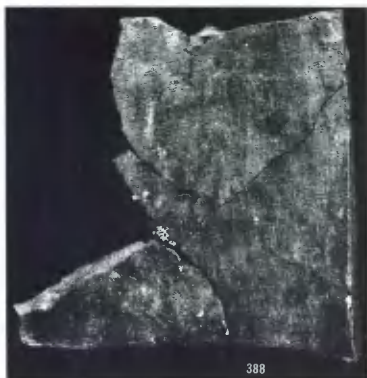
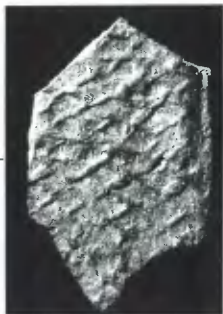


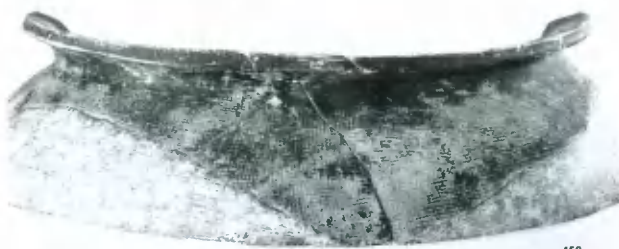
365



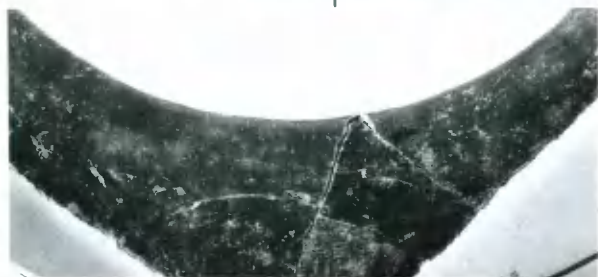
M-2



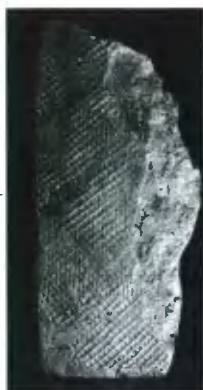




450



429



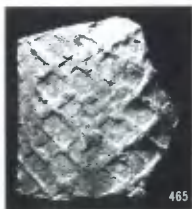
454

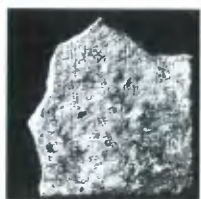
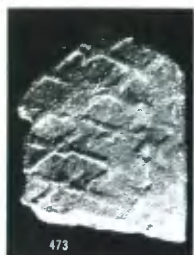
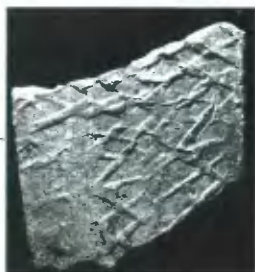
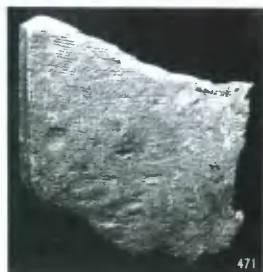
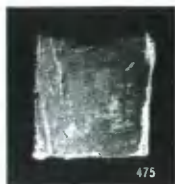


457



455







478



485



493内面

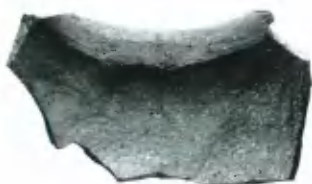


493外面

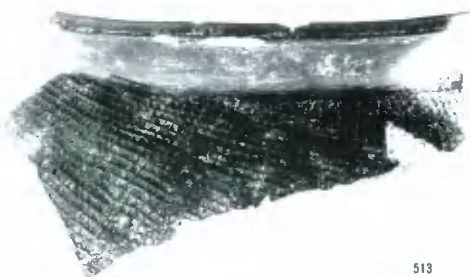
图版82



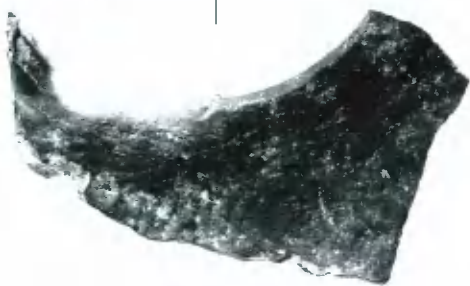
498



508

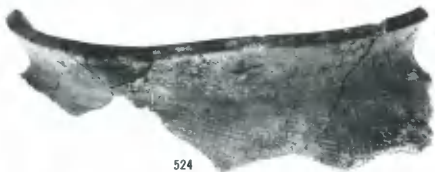


513

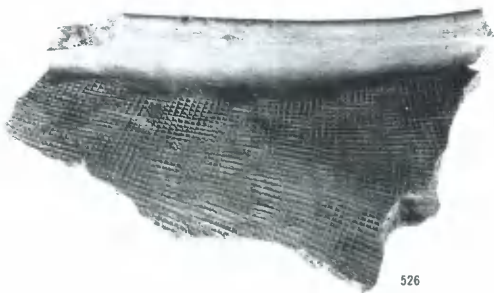




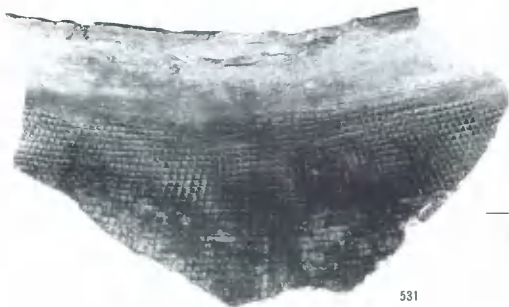
521



524



526



531





534



550



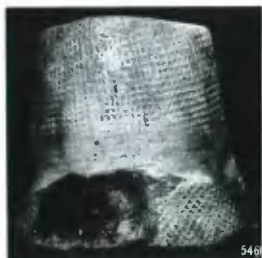
539



M-3



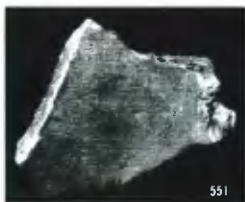
M-4



546



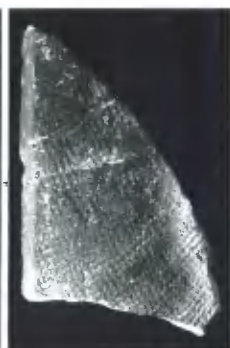
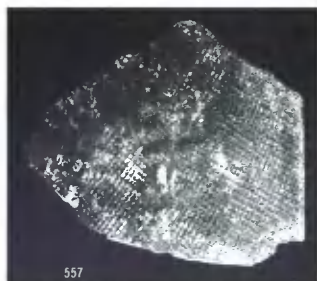
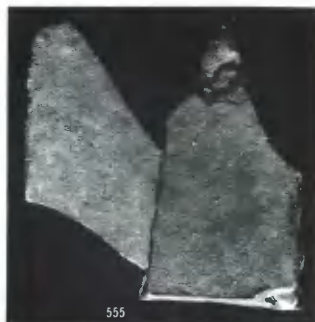
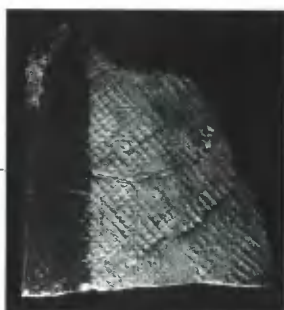
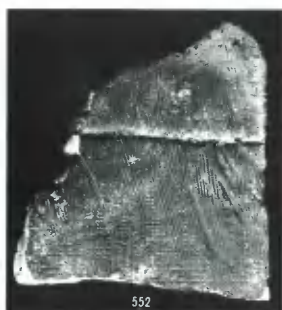
548



551

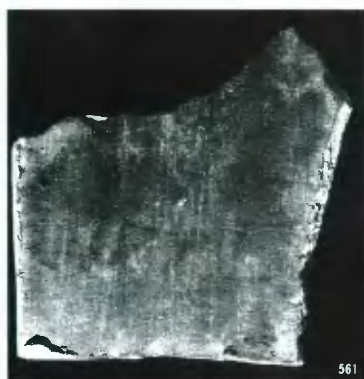




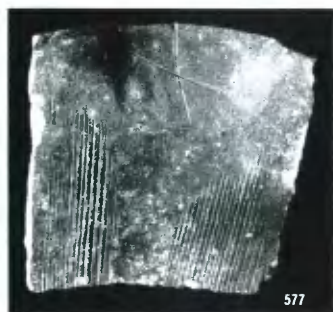
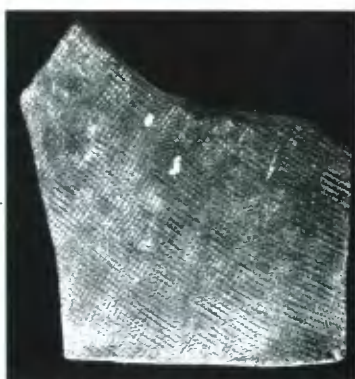




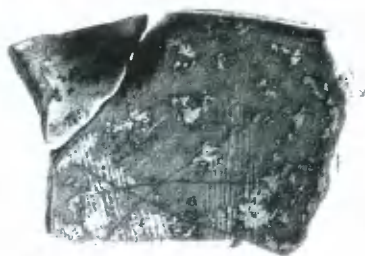
560



561



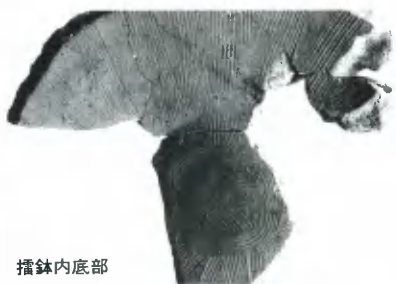
577



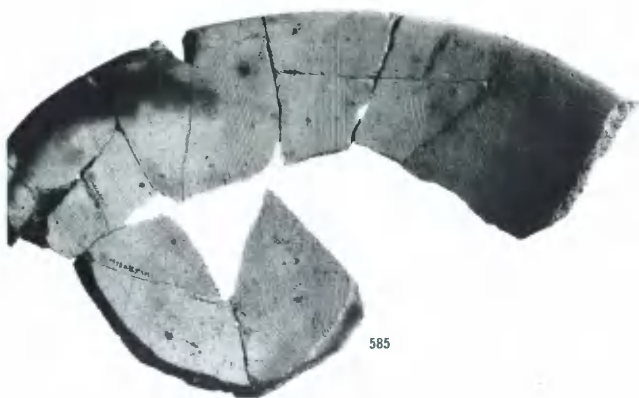
575



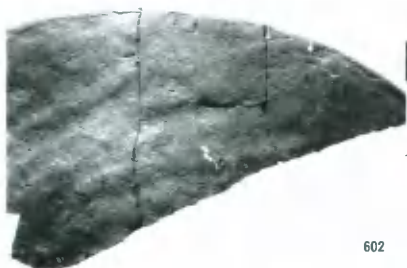
579



播鉢内底部



585



602



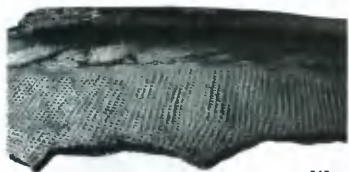
614



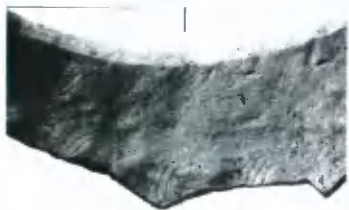
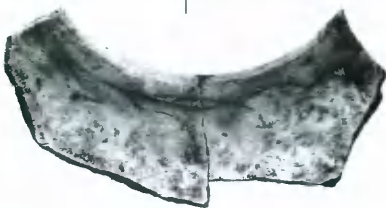
615

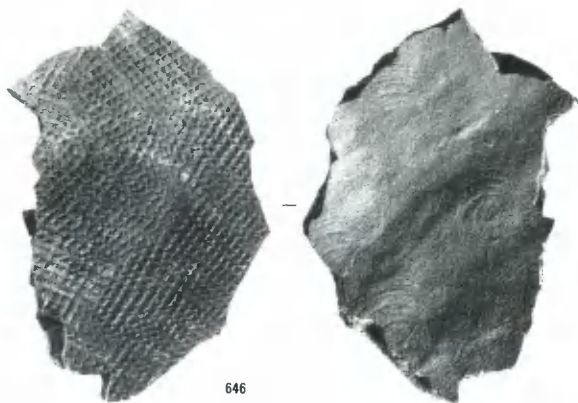


629



643

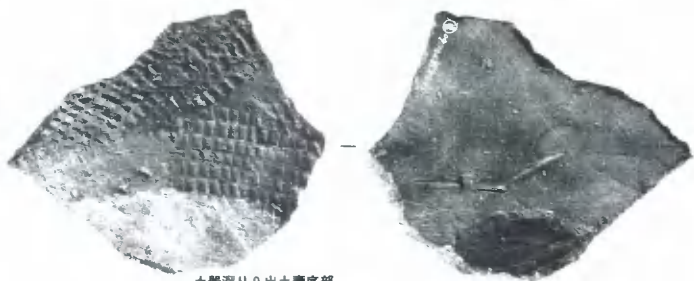




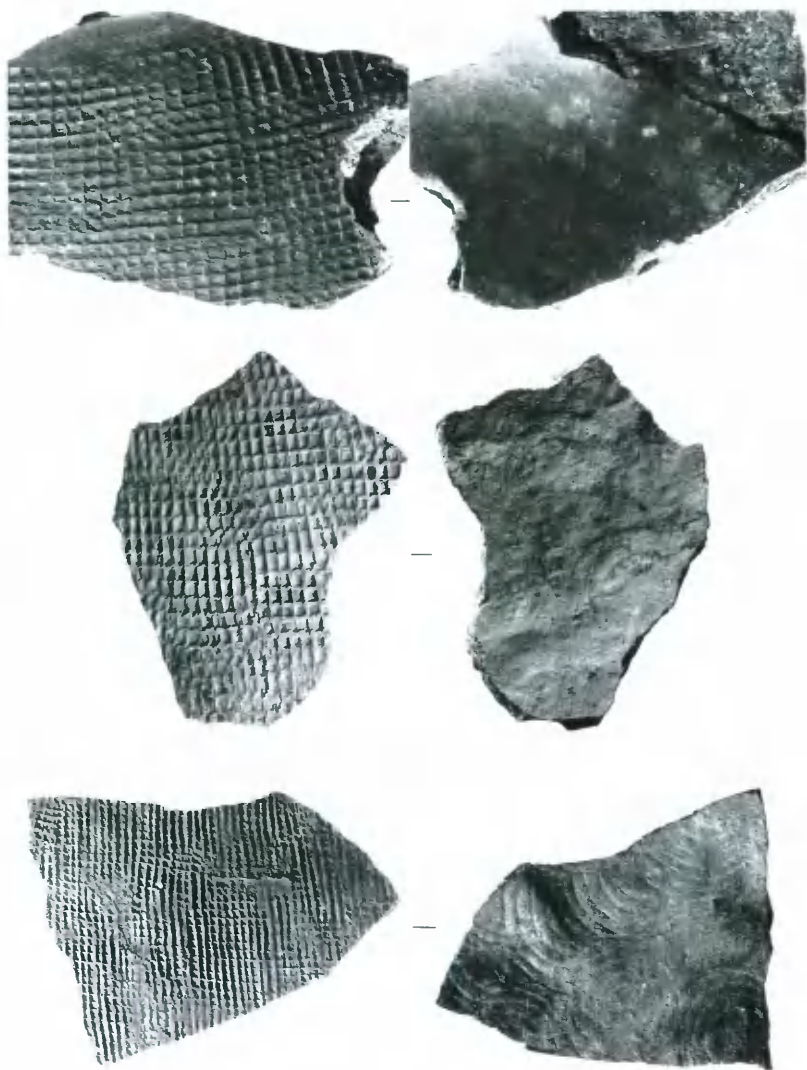
646



647



土器溜り9出土裏底部



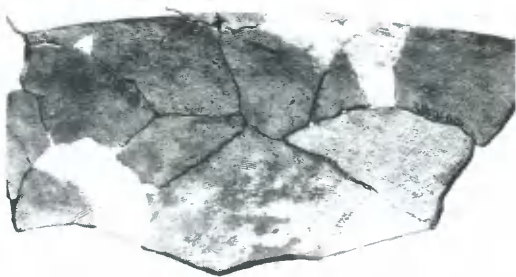
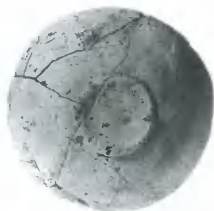
土器溜り9出土甕各種



土器溜り9出土土師質土器碗



664



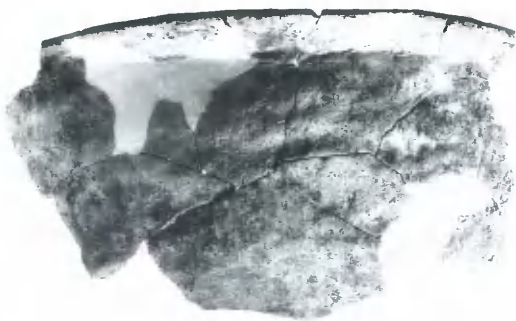
M-5



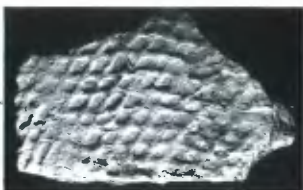
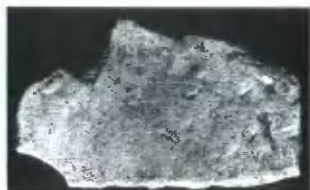
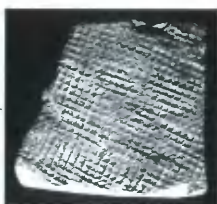
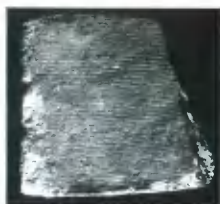
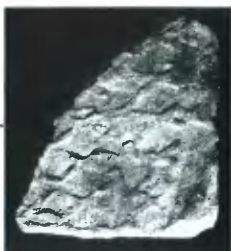
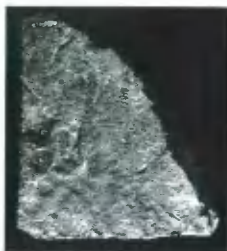
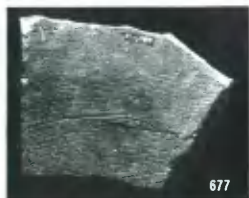
M-6



M-7



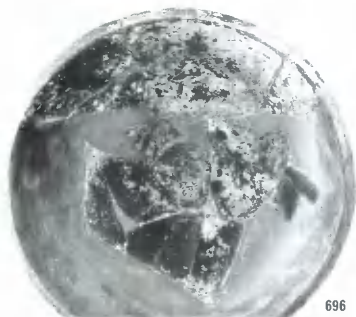
674







685



696



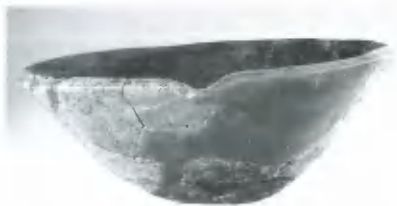
706



710



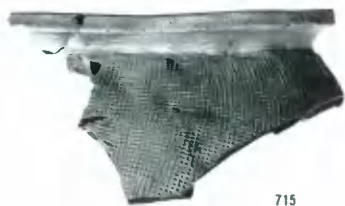
694



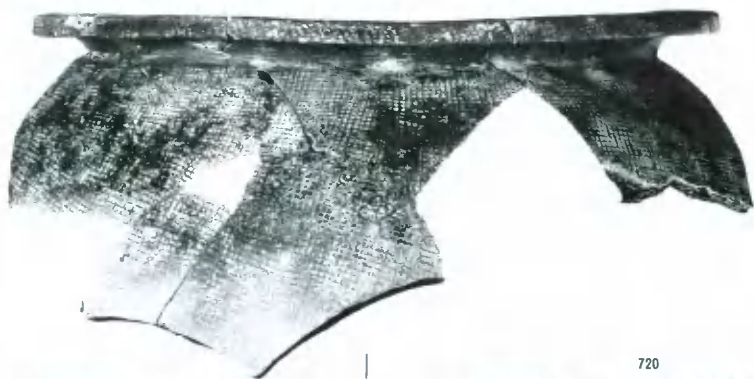
695



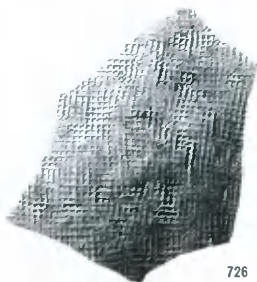
699



715



720



726





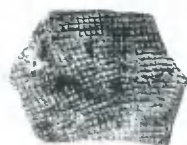
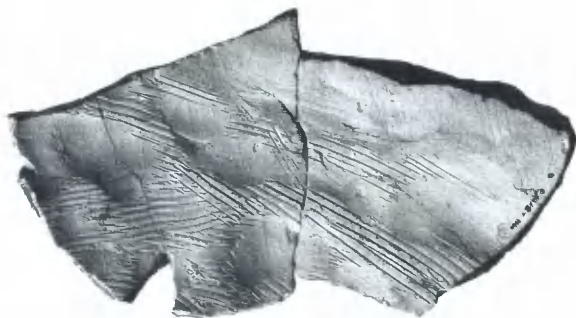
724



727



730



728



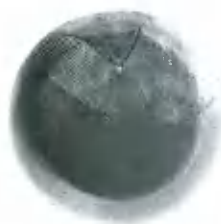


土器溜り9出土壺

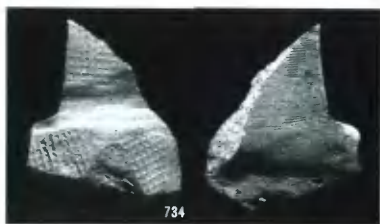
外面



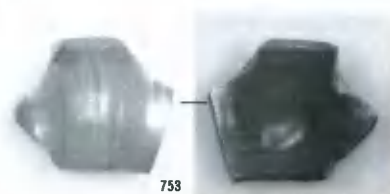
内面



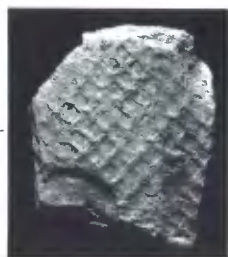
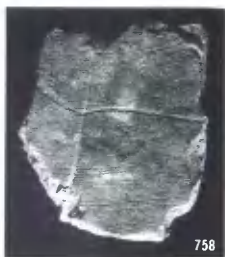
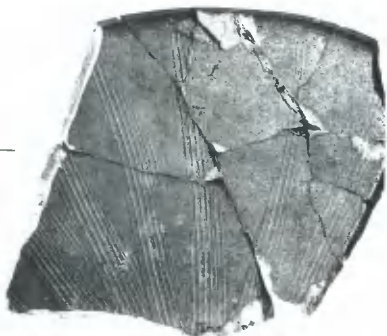
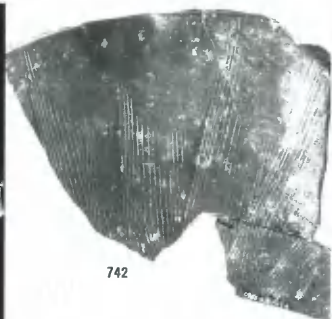
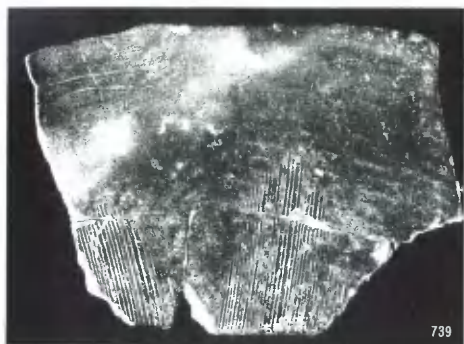
731

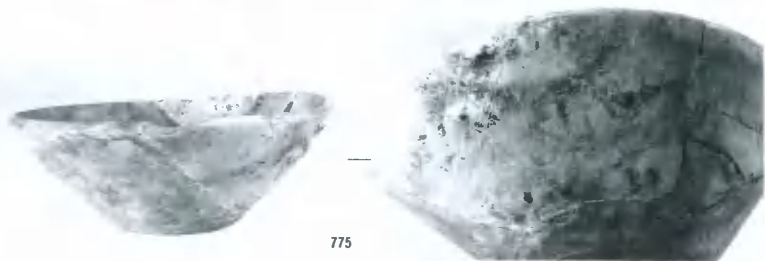
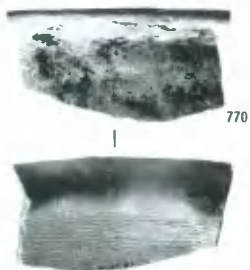
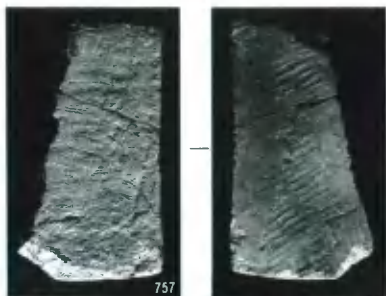


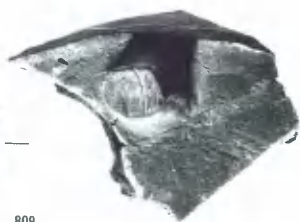
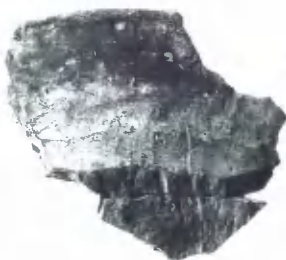
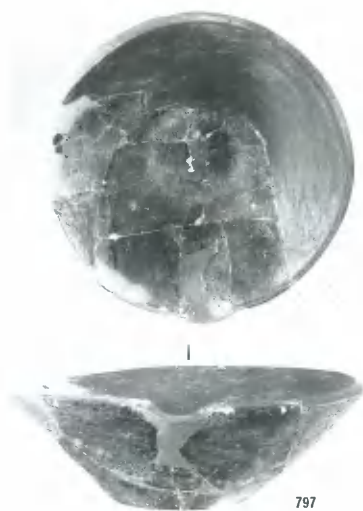
734

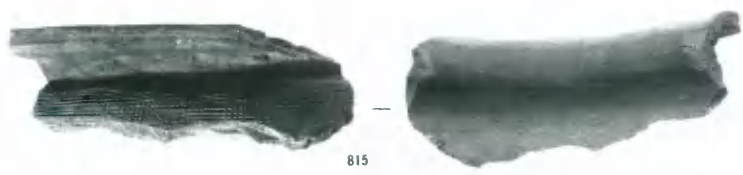


733

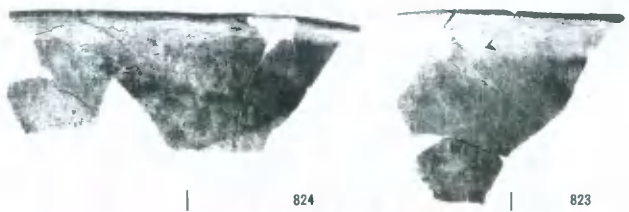






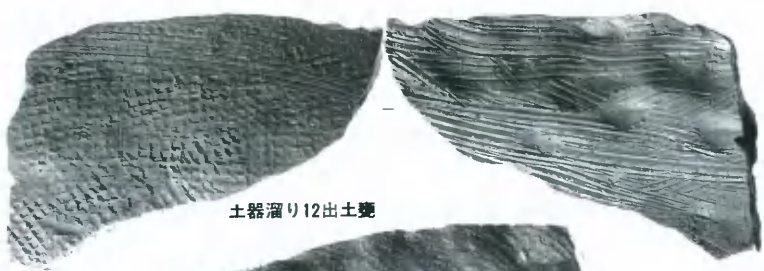
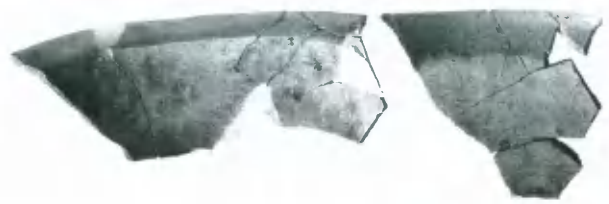


815

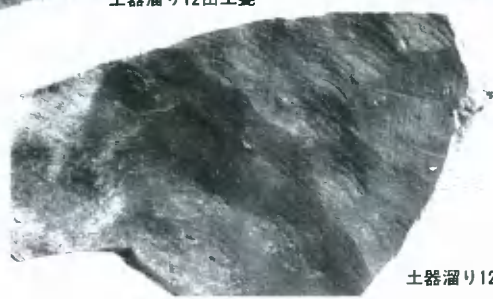


824

823



土器溜り12出土壺



土器溜り12出土壺内面





M-11



M-10



828



832



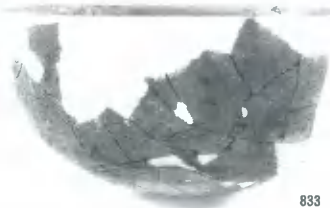
831



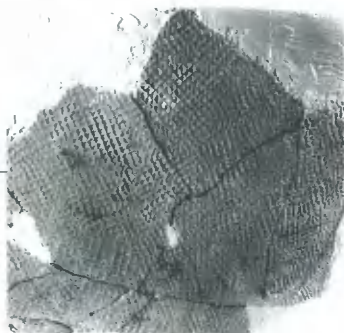
829

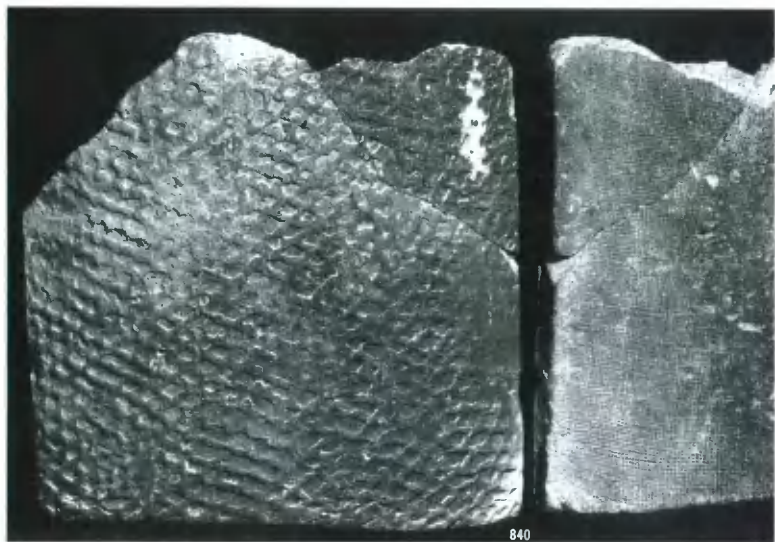
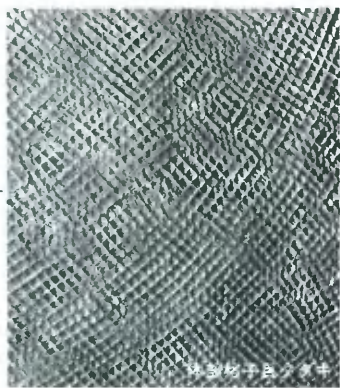


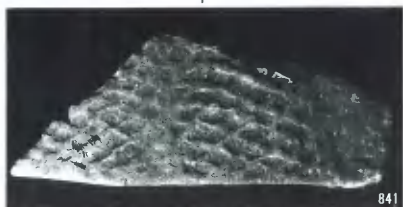
830

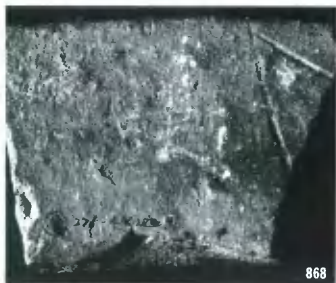


833











1. 東調査区斜面テラス全景（南から）



2. 東調査区斜面テラス南半（西から）



1. 東調査区建物（西から）



2. 東調査区墓壇（南西から）



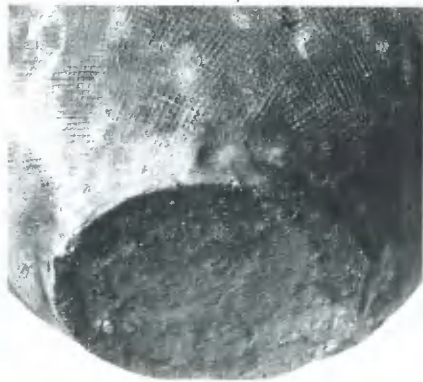
S-1



889



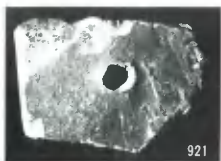
C-1



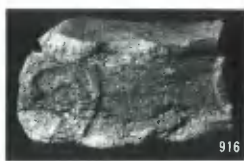
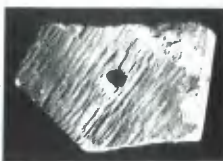
915







921

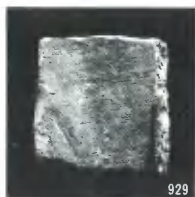


916



亀山焼壺参考品

(第205図)



929



体部外面拡大

さい こう ぼう  
西 光 坊 遺 跡

目 次

1. 遺跡の位置と調査経過 .....355  
2. 遺構・遺物 .....356

図 目 次

第1図 調査位置図 (1/3000) .....355	第4図 土壙—1 (1/20)・ 出土遺物 (1/4) .....357
第2図 遺跡全体図 (1/200) .....356	第5図 包含層出土遺物 (1/4) .....358
第3図 建物—1 (1/80)・ 出土遺物 (1/4) .....357	

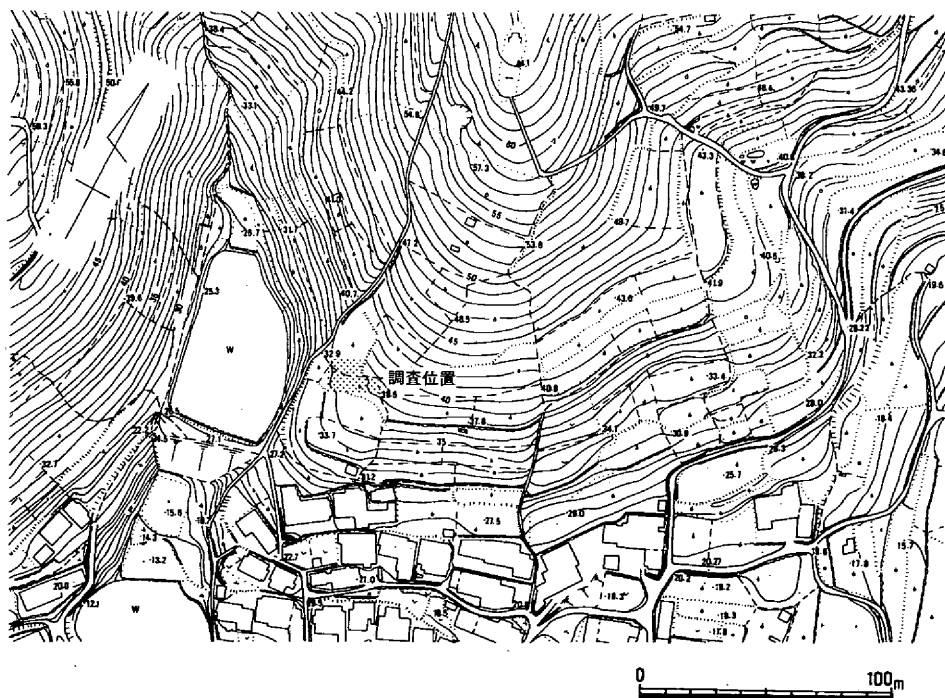
図 版 目 次

図版1—1 遺跡全景 (東から)	図版2—1 建物—1 (東から)
—2 遺跡全景 (北から)	—2 建物—1 (北から)

## 1. 遺跡の位置と調査経過

新倉敷駅の北西方向に位置し、南へのびる小支丘の裾部に立地している。地籍は倉敷市玉島八島3620番地で、その周辺部にもひろがっている。西側には山ノ谷上池がある。1983年10月から同年12月に実施した確認調査によって、柱穴・中世遺物包含層を検出した。山裾部の畑地はやや広い段々畑になっていて、地元の人によると、この地域を「サイコウボウ」とか「セイコウボウ」と呼んでいる。漢字は「西光坊」と記すとのことであり、これを遺跡名とした。一次調査では玉島八島地区全域を亀山遺跡と呼んでいたため、亀山・西光坊遺跡としていた。全面調査は1984年11月から同年12月にかけて実施した。西光坊と呼ばれる北端部に位置し、大部分は南の用地外へひろがっている。調査区域の南半は平坦な畑地で、北側には石垣を築いていた。この平坦地の南端部の地山面で、建物・土壇・柱穴を検出した。

北側は緩やかな傾斜面となっており、調査区域の西寄りに小さな貝塚1か所が検出された。さらに、周辺部に配置したトレンチに小貝塚がかかっていたことから、この部分についても拡張して調査を実施したが、新たな遺構は検出されなかった。



第1図 調査位置図 (1/3000)

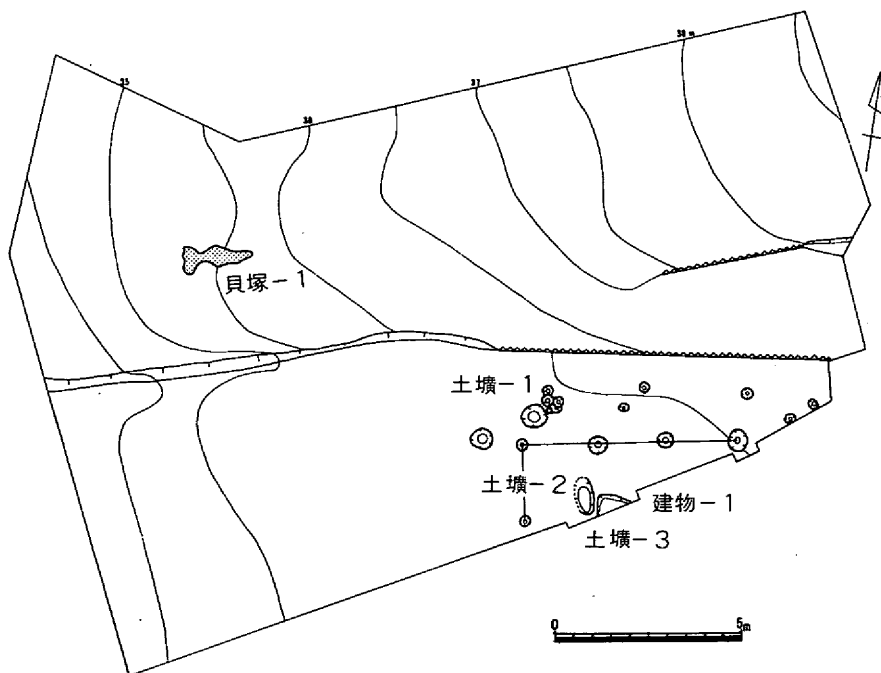
## 2. 遺構・遺物

西光坊と呼ばれる畑地の北端部において、建物1棟、土壇4基、小貝塚1基、柱穴等が検出された。平坦面北端の一部分にすぎないため、遺構の全容は把握できない。上部は畑地のため削平されている。貝塚は北西寄りに1か所と斜面を少し登ったところで、建物の北東40m付近に1か所存在する。

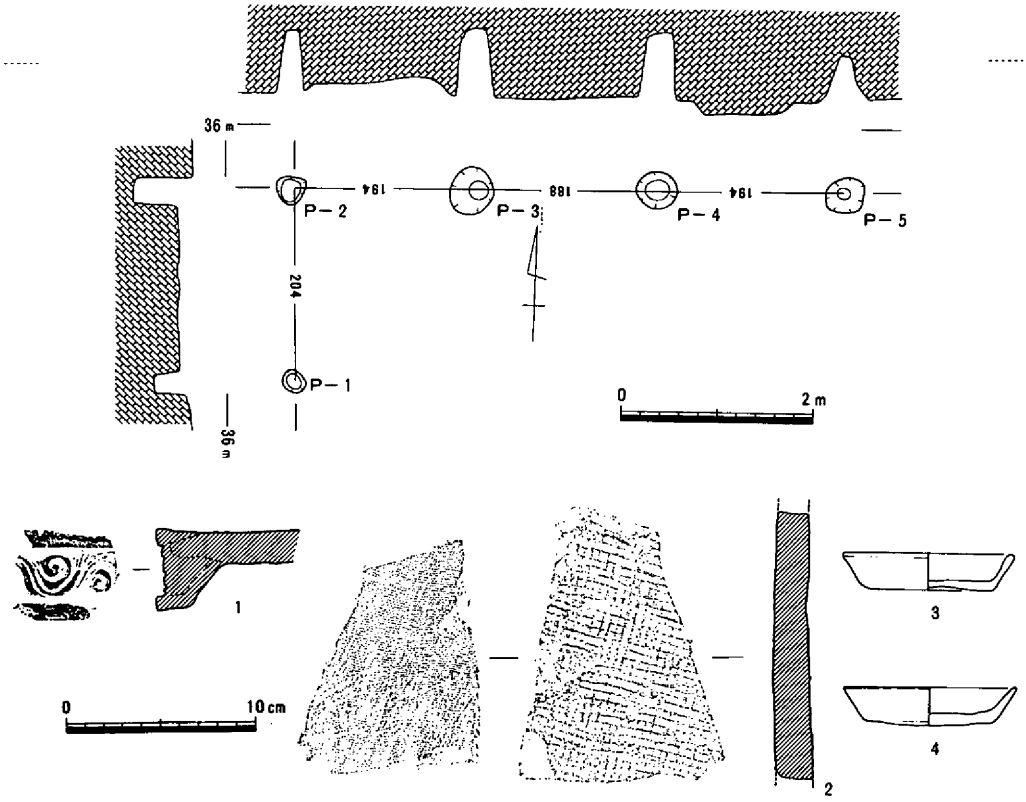
### 建物-1 (第3図, 図版2-1・2)

調査区域の南東端で検出された。用地外へのびており、検出されたのは、桁行3間、梁間1間である。桁行・梁間とも、さらに延長するかどうかは判断しがたい。桁行は3間分で576cmを測り、柱間の平均は192cmである。梁間は204cmである。建物の主軸はN88°Eで、ほぼ東西方向を示す。柱穴は検出面での直径30~40cm、深さ30~70cmである。検出面の標高は49m70cmである。北の柱列より1.4m離れたところに3本の小柱穴が並び、庇になる可能性もある。

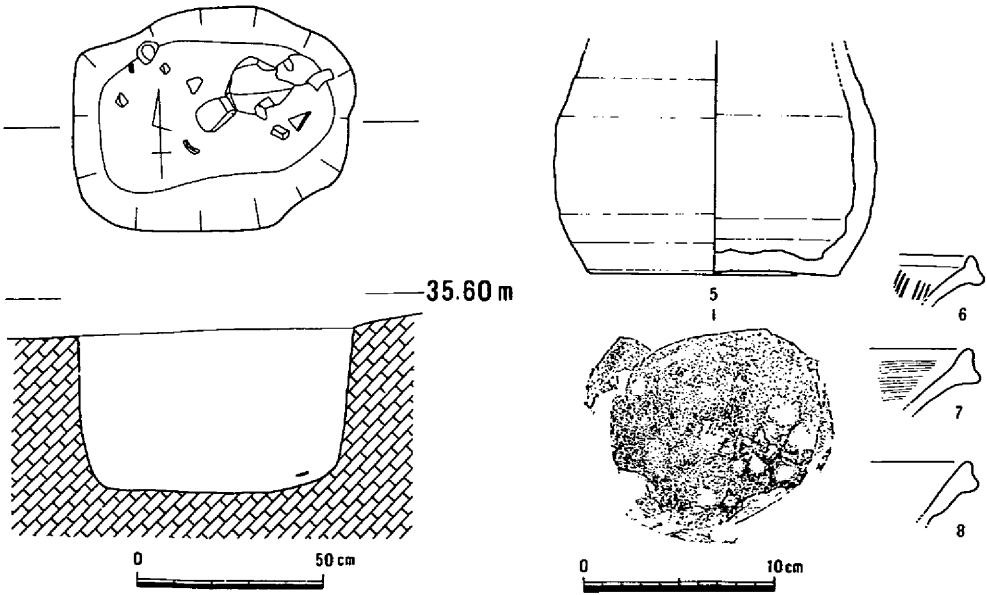
P-2~P-5の柱穴内から土器片が出土している。3はP-2出土の完形品である。口径9cm、高さ1.9cmを測り、色調は浅黄橙色を呈する。胎土には橙色の細粒を多く含む。4はP-4出土で、皿の2分の1片である。復元の口径は9cm、高さ2cmを測り、色調は浅黄橙色を呈す



第2図 遺跡全体図 (1/200)



第3図 建物-1 (1/80) ・出土遺物



第4図 土坑-1 (1/20) ・出土遺物

る。P-5からは唐草文の軒平瓦と平瓦の破片が出土している。平瓦は上面に布目があり、下面には小さな格子目文があり、近くの亀山焼窯の製品と判断される。

建物の年代は出土瓦から鎌倉期に比定されよう。

#### 土壌—1（第4図）

建物—1の北西に近接したところに位置する。東西に長い隅丸方形を呈し、長径75cm、短径58cm、深さ42cmを測る。掘り込みは急で、底面は平坦である。埋土中には備前焼の壺片・瓦質の播鉢片・石片が所在した。備前焼の壺は底部から、胴部へかけて、ほぼ復元できるが、口縁部は残っていない。底部径13cm、胴部径16.7cm、現存高12cmを測る。器壁の厚さは、ほぼ1cm前後で、内外面とも凹凸が多い。色調は、外面が紫茶色、内面が淡灰茶色、断面が淡灰紫色を呈する。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。他に瓦質ないし陶質の播鉢片が3片出土している。

年代は備前焼から近世と推定される。（調査中のP-2）

#### 土壌—2

建物—1の内側に位置する。わずかに残った土壌で、楕円形を呈し、長径100cm、短径50cmを測る。出土遺物はない。

#### 土壌—3

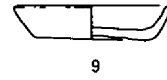
土壌—2に接し、東側に位置する。一部は用地外へのびているが、方形の隅が検出された。出土遺物はない。

#### 貝塚—1

建物—1の北西9mに小貝塚がある。長さ1.9m、幅50cmの不整形を呈した貝のまとまりがある。標高35m50cmにあり、西へ自然に傾斜した斜面に位置し、等高線に直交して、東西に長い。ハイガイの堆積したもので、土器等は出土していない。この小貝塚の西方2.5mにも小ブロックの散布がみられる。

#### 貝塚—2

全面調査区域の北東30mにも小貝塚が検出された。標高44mの地点に所在し、長さ1.3m、幅20cm、厚さ4cmの規模で、土器片等は出土していない。等高線に少し斜行して、北東から南西に長い。貝はハイガイである。



第5図 包含層出土遺物

（正岡）



1. 遺跡全景（東から）



2. 遺跡全景（北から）





1. 建物-1 (東から)



2. 建物-1 (北から)

さわ 寺 遺 跡  
沢 寺 遺 跡

## 目次

1. 遺跡の位置と調査経過 .....	365
2. 遺構・遺物 .....	367

## 図目次

第1図 調査位置図 (1/3000) .....	365	第6図 土壇-1 (1/40)・出土遺物(1/4) 370	
第2図 遺跡全体図 (1/300) .....	366	第7図 貝塚断面図 (1/40)・ 出土遺物 (1/4) .....	371
第3図 建物-1 (1/80) .....	367	第8図 石組遺構 (1/30) .....	372
第4図 建物-1 (1/80)・ 出土遺物 (1/4) .....	368	第9図 包含層出土遺物 (1/4) .....	372
第5図 建物-2 (1/80)・ 出土遺物 (1/4) .....	369	第10図 沢寺北東部遺跡全体図 (1/200) 373	
		第11図 埋甕 (1/20)・出土遺物 (1/4) ...	373

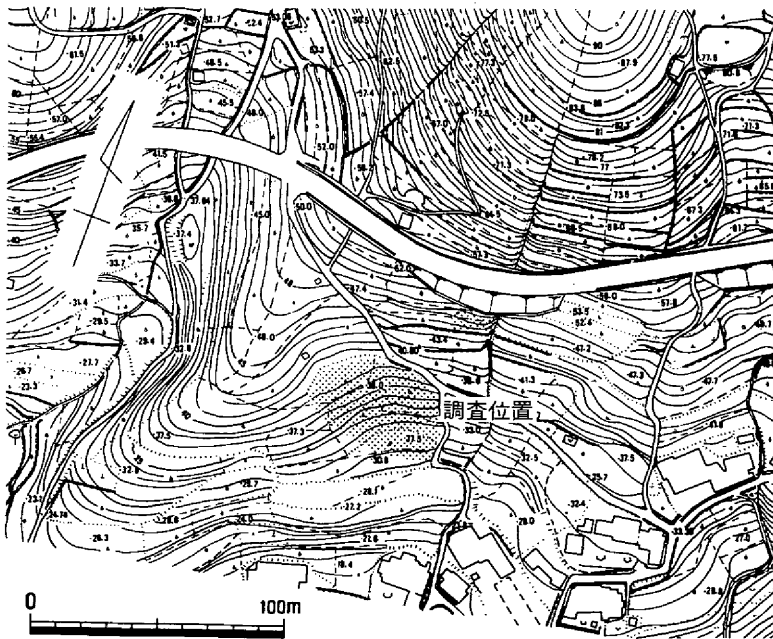
## 図版目次

図版1-1 南東部テラス全景 (西から)	図版3-1 土壇-1 (南から)
-2 南東部テラス西半 (北から)	-2 南東部テラス東半 (北から)
図版2-1 建物-1 (北から)	図版4-1 貝塚 (南から)
-2 建物-2 (北から)	-2 貝塚 (北から)

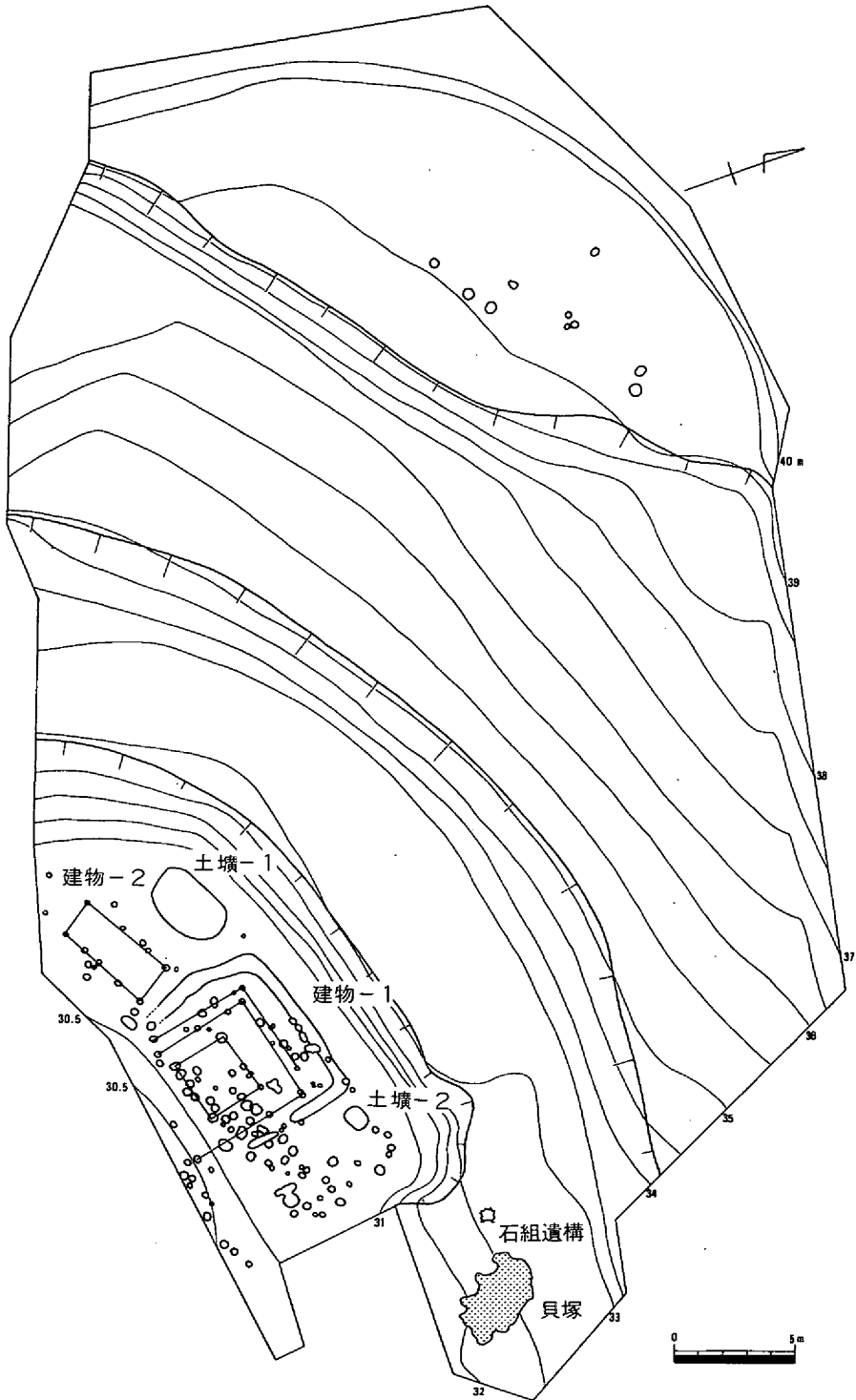
## 1. 遺跡の位置と調査経過

新倉敷駅の北西方向に位置し、南にのびる小支丘の裾部に立地している。地名は倉敷市玉島八島である。山裾下部には民家があり、いくつかの段がみられる。東側の谷を登ったところには西萩上池がある。1983年10月から同年12月に実施した確認調査によって、柱穴・中世遺物包含層を検出した。この地点は急な斜面から山裾に向かって下がったところで、緩やかな谷地形を呈し、3段くらいの平坦面が認められた。いずれも現況は畑地となっていたが、かつて、水田化されていた様子がわかる。この谷の下方にもいくつかの平坦面があり、遺跡は現在の集落へ広がっていると推定される。この谷を地元では「沢寺」と呼んでいることから沢寺遺跡とした。一次調査では玉島八島地区全域を亀山遺跡と呼んでいたため、亀山・沢寺遺跡としていた。全面調査は1984年9月から同年11月にかけて実施した。

この谷の東寄りに斜行しながら登る道がある。この道と大規模農道に挟まれたところの少し平坦になった地点から埋甕1基が確認調査で検出されたことから、周辺部を拡張して調査した。この付近から丘陵の上方に向かう部分を、地元の人は「経塚」と呼んでいる。この地点も沢寺遺跡に含めて報告したい。



第1図 調査位置図 (1/3000)



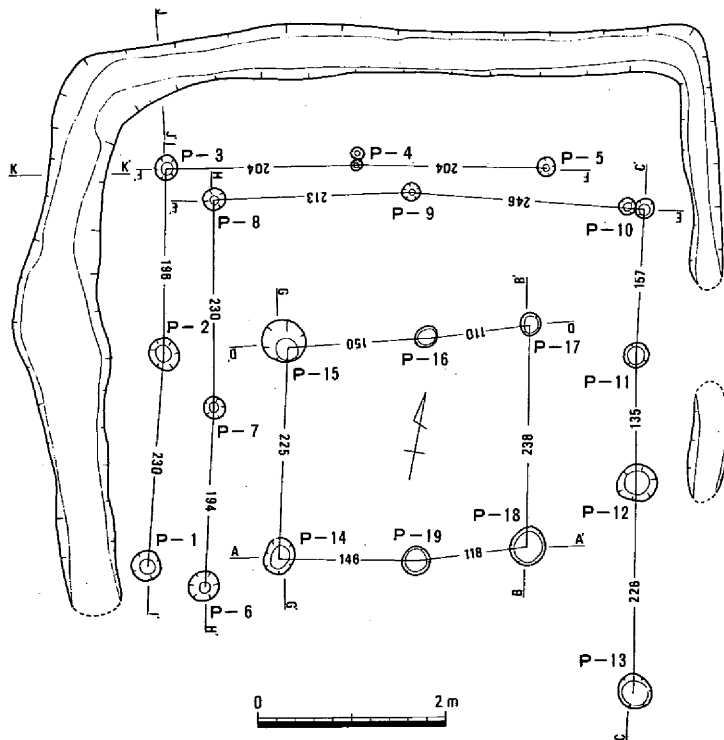
第2図 遺跡全体図 (1/300)

## 2. 遺構・遺物

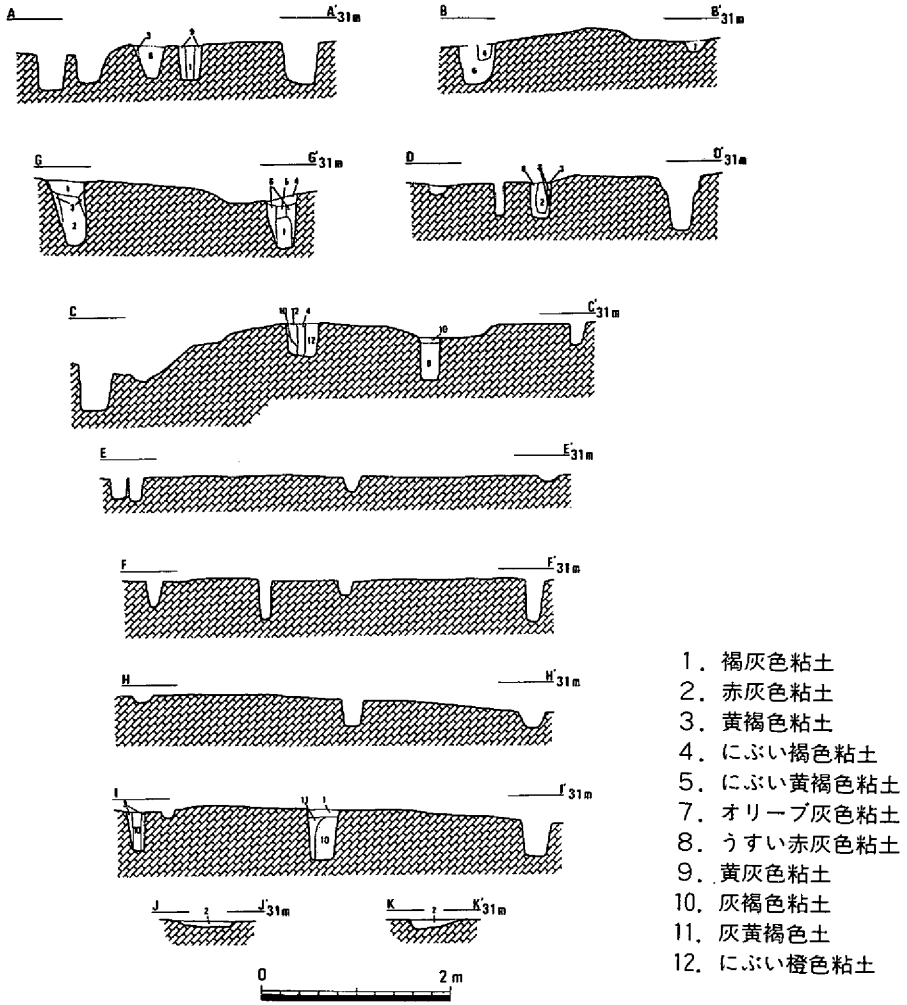
沢寺の北端部に位置し、南へ開く緩やかな谷に3段の平坦面が存在する。近代には水田化されていたところである。下方の平坦面には方形の溝で囲まれた建物1棟、この東に接して、東西に長い建物1棟、この建物の北側に大型の土壌1基、ほかに土壌・柱穴が検出された。下方の平坦面から2mあがったところには東西に細長い段がある。東端部において、中世貝塚1基と石組1基を検出したが、他の遺構は検出されなかった。この段から6mほどの斜面を登ったところにも半円形を呈する平坦面があり、柱穴が検出された。このことから中世に形成された平坦面であることがわかるが、建物にはまとめられなかった。この段からの出土遺物は少ない。

## 建物一1 (第3・4、図版2-1)

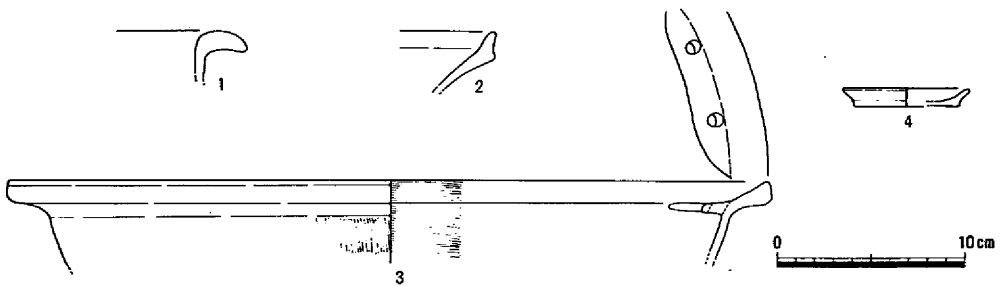
調査区域の南端部で検出された建物である。用地端に接しているが、平坦地は用地外へわずかに広がっているだけである。水田や畑に開墾されているため、かなり削平されている。コの字形にめぐる溝も、深いところで10cmくらいの深さしか残存せず、一部はとぎれている。溝の



第3図 建物一1 (1/80)



1. 褐灰色粘土
2. 赤灰色粘土
3. 黄褐色粘土
4. にぶい褐色粘土
5. にぶい黄褐色粘土
7. オリーブ灰色粘土
8. うすい赤灰色粘土
9. 黄灰色粘土
10. 灰褐色粘土
11. 灰黄褐色土
12. にぶい橙色粘土



第4図 建物-1 (1/80) ・出土遺物

幅は50cm前後である。

コの字形に囲まれた溝の内側は東西6.20m、

南北5.6m以上である。

この溝に囲まれた中央部に桁行2間、梁間1間の身舎があり、3方向に庇がある。南側は削平されているものと推定される。身舎の

主軸はN78°Eを示し、ほ

ぼ東西方向である。大

きさは東西（桁行）

260～263cm、南北（梁

間）225～238cmを測る。

庇の柱列は、北側と西

側には2列あり、建て

替えが行われている。

内側の柱列で測ると東西455cm、南北515cmである。

柱穴内と雨落溝から少量の遺物が出土している。1、2は雨落溝から出土したもので、1の口縁部内側には煤が付着している。2は播鉢の小片である。3はP-2から出土した鍋の小片で、外面には煤が付着している。4はP-18出土の小皿小片で、底面は糸切りの痕跡がみられる。

年代はわずかに出土した遺物からではあるが、室町時代に比定されよう。（調査時の建物-2）

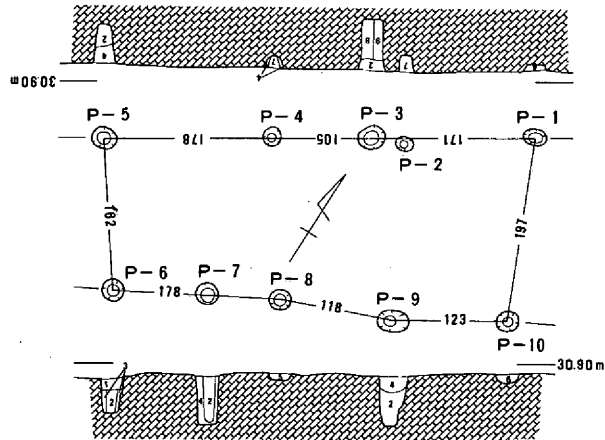
#### 建物-2（第5図、図版2-2）

建物-1の西に接している。主軸はN60°Eである。北側の柱列はさらに西方に並ぶものもあり、西へのびる可能性もあるが、桁行3間、梁間1間とした。桁行は417～454cm、梁間は162～197cmを測り、柱の配列はいびつである。柱穴内から少量の遺物が出土している。5・7はP-7出土の土師器小片であり、6はP-8出土の土師器の皿である。

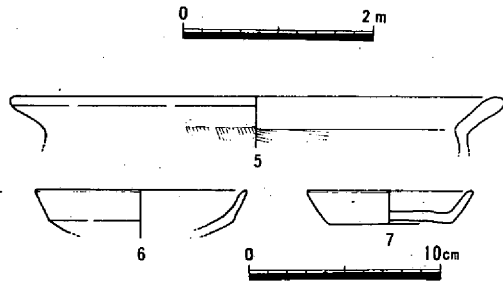
年代は少量の遺物によるが、室町時代に比定されよう。（調査時の建物-1）

#### 土壇-1（第6図、図版3-1）

建物-2の北側で検出された。少し変形しているが、隅丸方形を呈している。主軸はN58°Eを示す。肩部はかなり崩れているが、現状での大きさは長径320cm、短径223cmを測る。下部の

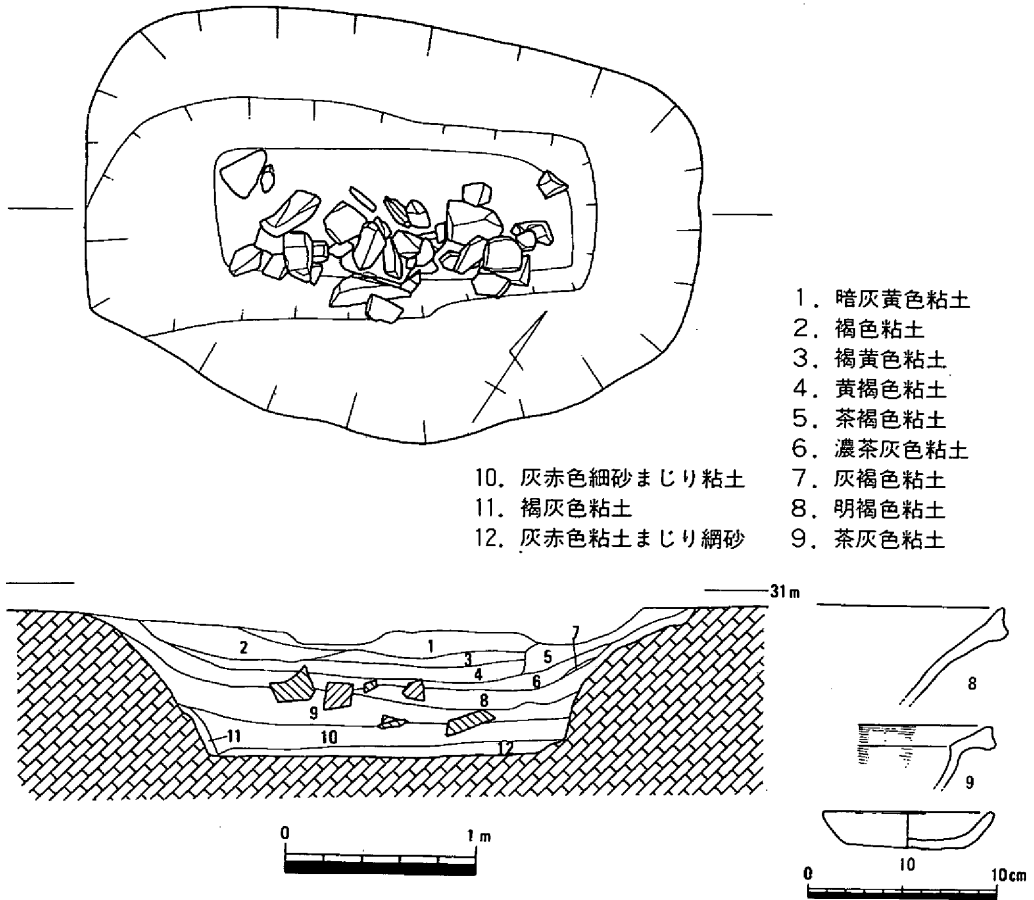


1. 暗灰色粘土
2. 褐色粘土
3. 褐黄色粘土
4. 黄褐色粘土
5. 茶褐色粘土
6. 濃茶灰色粘土
7. 灰褐色粘土
8. 明褐色粘土
9. 茶灰色粘土



第5図 建物-2（1/80）・出土遺物





第6図 土壙-1 (1/40) ・出土遺物

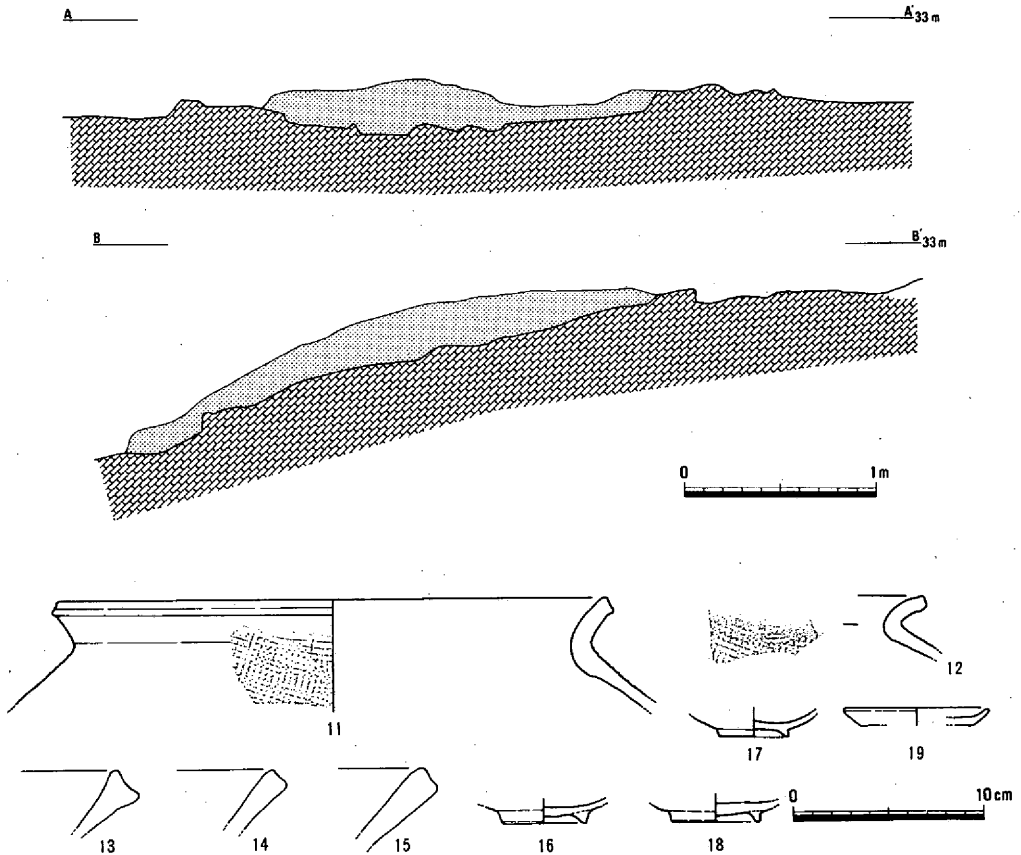
残存している掘り込みは急な傾斜で、底部は長方形を呈し、平坦である。底面の大きさは長さ185cm、幅69cmである。埋土中には、中層部に角礫を多数含んでいるが、下層および上層には少ない。出土遺物には土師器の皿・鉢片がある。10の口縁部には4か所に煤が付着していて、灯明皿として使用されている。ほかに、埋土上層中から土鍋片：皿片・青磁片が出土している。土壙の性格は土壙墓にも類似しているが、明らかでない。

時期は出土遺物から室町時代に比定されよう。

(調査時の土壙墓?)

#### 土壙-2

建物-1の雨落溝の北東角に近接している。東西に長い不整楕円形で、長径110cm、短径82cm、深さ12cmである。埋土は灰色細砂である。埋土中から第9図20の土師器碗の破片を出土しているが、土壙の時期は判断しがたい。



第7図 貝塚断面図(1/40)・出土遺物

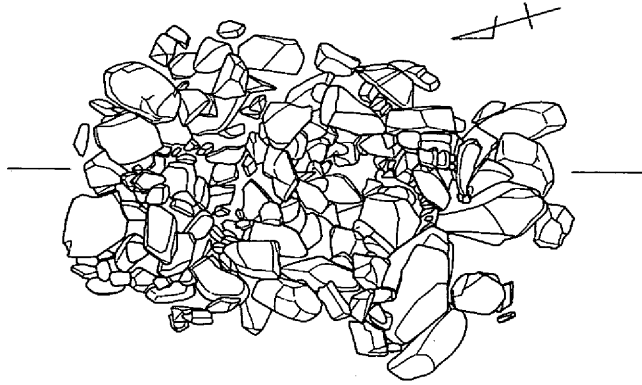
## 貝塚(第7図、図版4-1・2)

建物-1の北北東約10mで、南へ緩やかに傾斜するところに貝塚がある。等高線に直交する方向に少し長くなっている。貝塚は後世の攪乱はほとんどなく、良好な保存状態であった。長さ4m、幅2mの範囲にひろがり、中央部の厚さは30cmを測る。第7図A A'は等高線に平行した断面で、中央部が浅い凹みになっている。第7図B B'は等高線に直交する断面で、緩やかに南へ傾斜している。貝はハイガイを主体とし、カキガイ・ハマグリ等を若干含んでいる。貝層中にはほとんど土を含んでいない。土器類には亀山焼・早島式土器などの破片があるが、量は少ない。貝塚の時期は貝層中に含まれていた土器片から室町時代に比定されよう。

## 石組遺構(第8図)

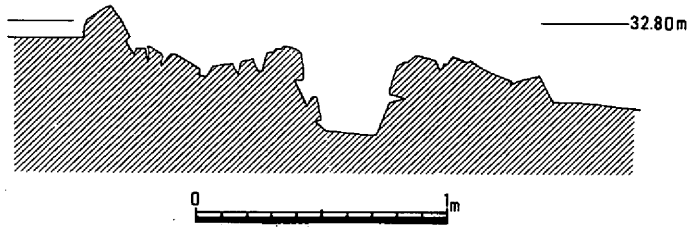
貝塚の西側に接して、角礫の集積がみられる。中央部分に粗雑な石組と判断されるものが検

出された。直径50cm、深さ30cmの穴があり、周辺部には乱雑に石が積みあげられていた。礫のままとまったひろがり、南北2m、東西1.2mである。水汲み場と推定されるが、遺物は検出されず、時期は確定できない。



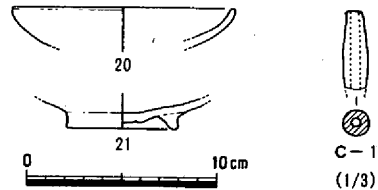
**包含層出土遺物(第9図)**

沢寺遺跡では遺物の量は少ない。亀山焼の甕、早島式土器の椀・皿・土鍋の破片などがある。21は最も高い標高39mのテラス出土の高台付椀である。



第8図 石組遺構 (1/30)

C-1の土錘は、建物-1の雨落溝の東側に接した柱穴からの出土である。細長い紡錘形を呈し、一部を欠失している。現存長3.1cm、直径1cm、中央部には直径3mmの孔がある。



第9図 包含層出土遺物

**沢寺北東部の遺構**

建物のある平坦面の北東寄りに位置し、大規模農道のやや下方に位置する。確認調査で埋甕1基を検出したことから、周辺部を拡張して調査を行った。山陽自動車道のSTA33+0付近にあたる。この付近の斜面を地元の人々は「経塚」と呼んでいることから何らかの関連遺構を追求したが、他には何も検出されなかった。経塚と呼ばれている地域は用地外の上方にも及んでいる。

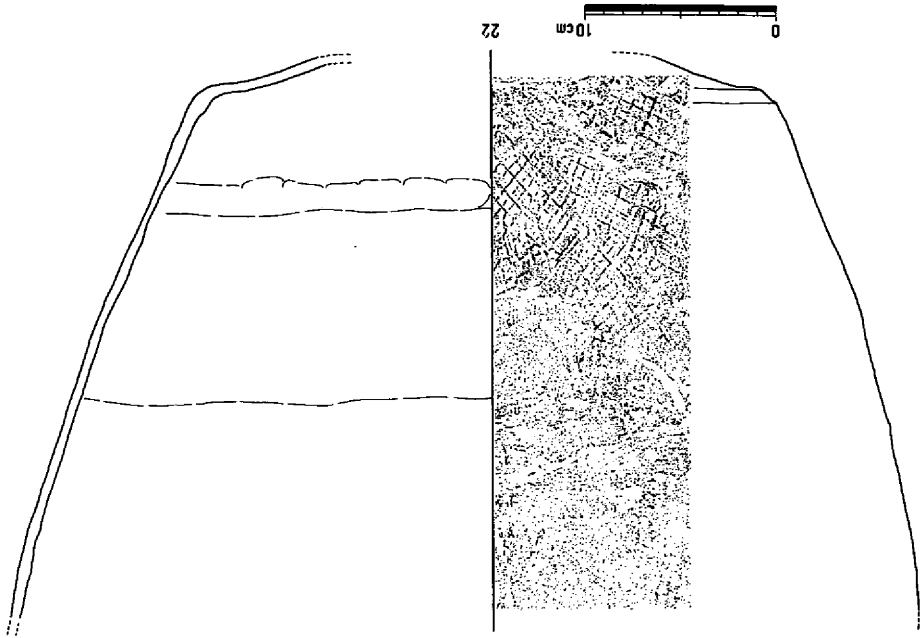
**埋甕 (第11図)**

標高45.8m付近で、直径50cm、深さ37cmの円形土壙へ、亀山焼の甕1個を入れたものを検出した。上部は削平されていて、保存状況はよくない。亀山焼の甕も底部の保存状況は悪い。甕は底部が外湾ぎみの平底で、外面の格子目タタキも粗く、浅い。胎土には砂粒を多く含み、色調は灰黄色を呈する。

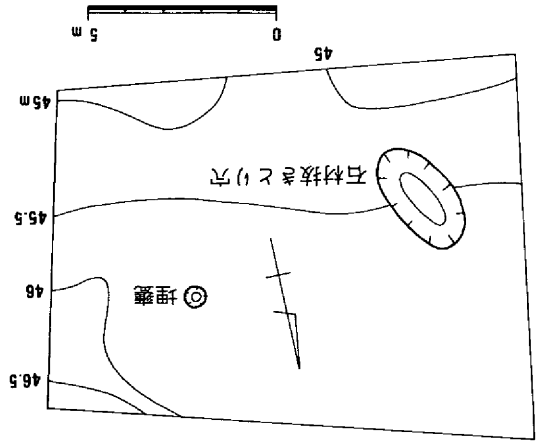
時期は近世に比定されるものであろう。

(正岡睦夫)

第11図 埋葬 (1/20) ・ 出土遺物

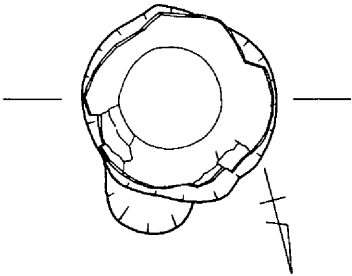
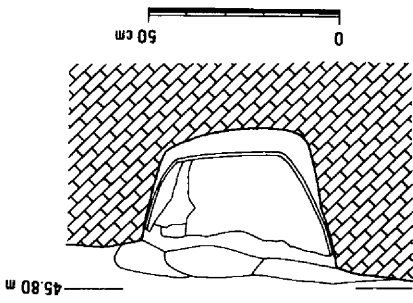


第10図 沢寺北東部遺跡全体図 (1/200)



STA33

+

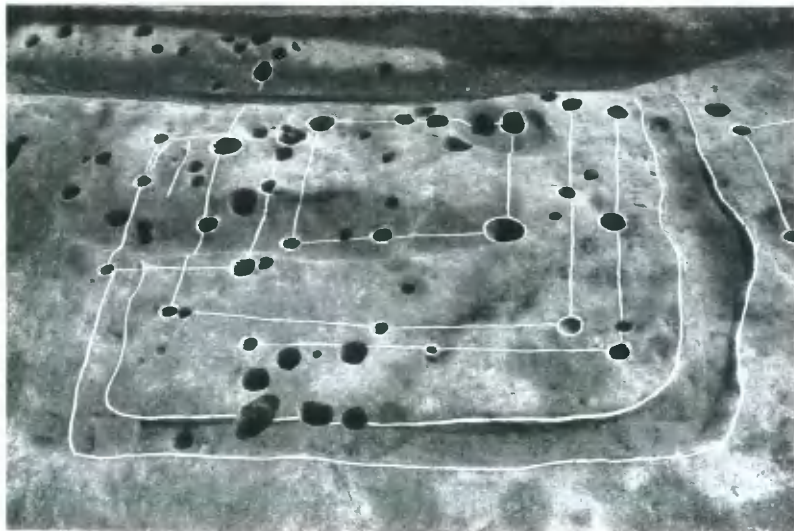




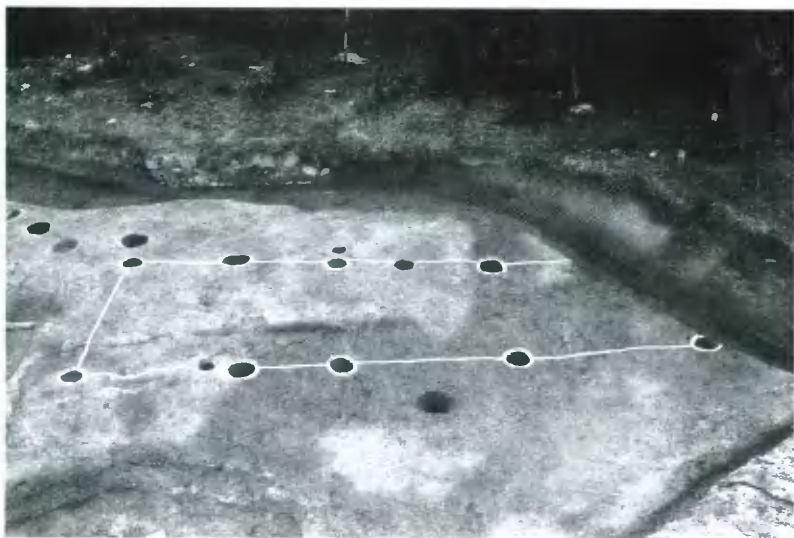
1. 南東部テラス全景（西から）



2. 南東部テラス西半（北から）



1. 建物-1 (北から)



2. 建物-2 (北から)



1. 土壇-1 (南から)



2. 南東部テラス東半 (北から)



1. 貝塚（南から）



2. 貝塚（北から）



みち くち  
道 口 遺 跡

## 目次

1. 遺跡の位置と調査経過 .....	383
2. 遺構・遺物 .....	384

## 図目次

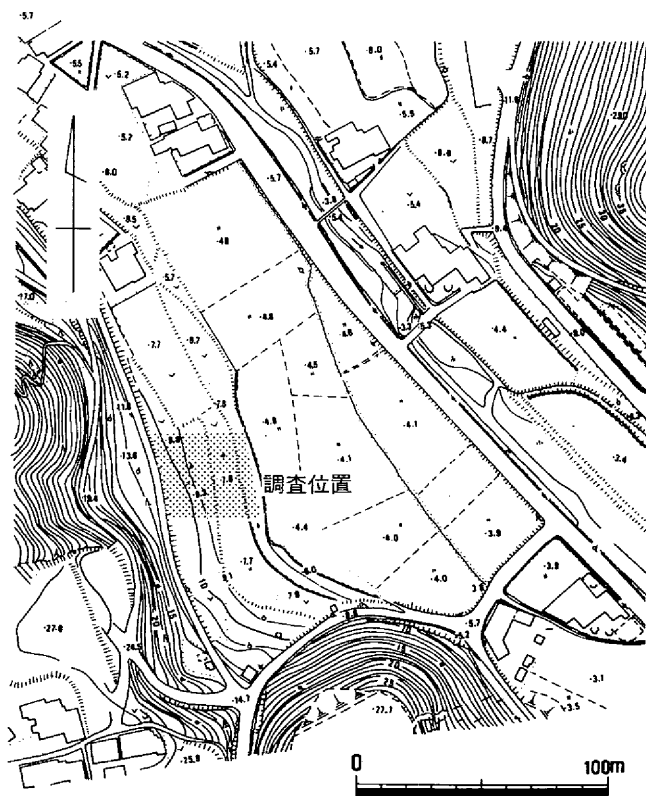
第1図 調査位置図 (1/3000) .....	383	第9図 土壙-4 (1/60) .....	389
第2図 遺跡全体図 (1/400) .....	384	第10図 土壙-5 (1/60) .....	389
第3図 竪穴住居-1 (1/60) .....	385	第11図 土壙-6 (1/60) .....	389
第4図 竪穴住居-1 出土遺物 (1/4) .....	386	第12図 土壙-6 出土遺物 (1/4) .....	390
第5図 建物-1 (1/60) .....	386	第13図 包含層出土遺物(1) (1/4) .....	391
第6図 土壙-1 (1/60) 出土遺物 (1/4) .....	387	第14図 包含層出土遺物(2) (1/4) .....	392
第7図 土壙-2 (1/60) .....	388	第15図 包含層出土遺物(3) (1/2) .....	393
第8図 土壙-3 (1/60) 出土遺物(1/4) .....	388	第16図 包含層出土遺物(4) (1/3) .....	394

## 図版目次

図版1-1 遺跡全景 (南から)	図版3 出土遺物 (1/2)
-2 遺跡全景 (西から)	図版4 出土遺物 (1/3)
図版2-1 竪穴住居-1 (東から)	
-2 土壙-1 (南から)	

## 1. 遺跡の位置と調査経過

新倉敷駅の西方に流れる道口川を溯って、谷に入ったすぐ右岸側の丘陵裾に立地している。地名は倉敷市玉島道口である。道口川に面した畑地にも土器片が散布しているのが確認されたことから、1984年4月に確認調査を実施した。山裾にある道の西方に設定したトレンチでは、須恵器片を1片出土したが、遺構は検出されなかった。この道より2m下がった畑地では古墳時代の竪穴住居跡を検出し、さらに一段下がった畑地でも土壌を検出した。遺物では縄文時代～近世の土器片を出土した。道口川に面した水田中に設定したトレンチは耕土層直下で砂層となり、遺物は検出されなかった。以上の調査結果から山裾より下方の畑地を全面的に調査することにした。調査時は、当初に確認調査を実施したところを道口遺跡としていたことから「道



第1図 調査位置図 (1/3000)

口東遺跡」として区別していたが、同じ道口地内に所在することから全面調査を実施した地区を道口遺跡と呼称している。

当初、道口遺跡と想定した地域は、西方の丘陵上で、大規模農道に面した南側の丘陵である。確認調査は、1984年2月～3月に実施した。東西に長い丘陵で、稜線を中心にトレンチを配し、北側斜面および南側斜面にもトレンチを設定した。稜線上のトレンチでサヌカイト片1片と南側斜面で少量の中・近世土器片を出土したが、遺構は検出されなかったため、こ

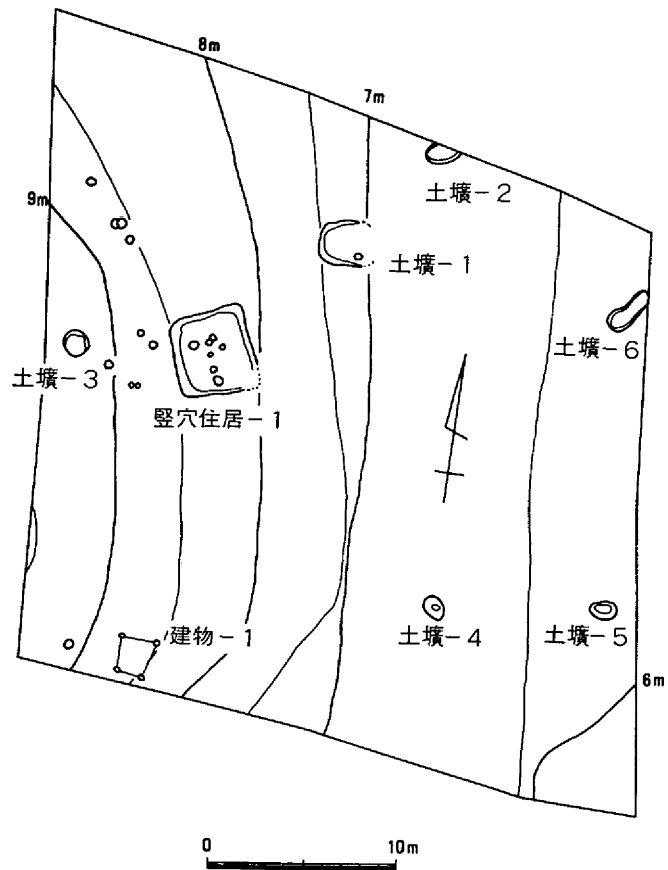
の地域については確認調査をもって終了した。道口遺跡の全面調査は唐津池北遺跡の調査と一部併行しながら1984年6月～7月に実施した。(正岡睦夫)

## 2. 遺構・遺物

道口川右岸の段丘上を32×32mにわたって全面調査を実施したところ、古墳時代の竪穴住居1軒、建物1棟、土壇6基と縄文時代から近世に至る遺物を出土した。地形は緩やかに東へ傾斜しており、西側の丘陵部から流失した花崗岩の風化土の堆積したところである。地山とされる土層は黄橙色粗砂を主体としている。この土層中には遺物は含まれていない。この上層に再堆積した砂層中から縄文時代の土器、石器、黒曜石の原石、弥生式土器、土師器、須恵器などが混在して出土した。畑地の造成のため、大きく2段に成形されていたため、一部削平されている部分もみられた。耕土層とその直下の土層は暗灰褐色粘土まじり粗砂を主体とし、遺構へはこの土が流入していた。

竪穴住居-1 (第3図、  
図版2-1)

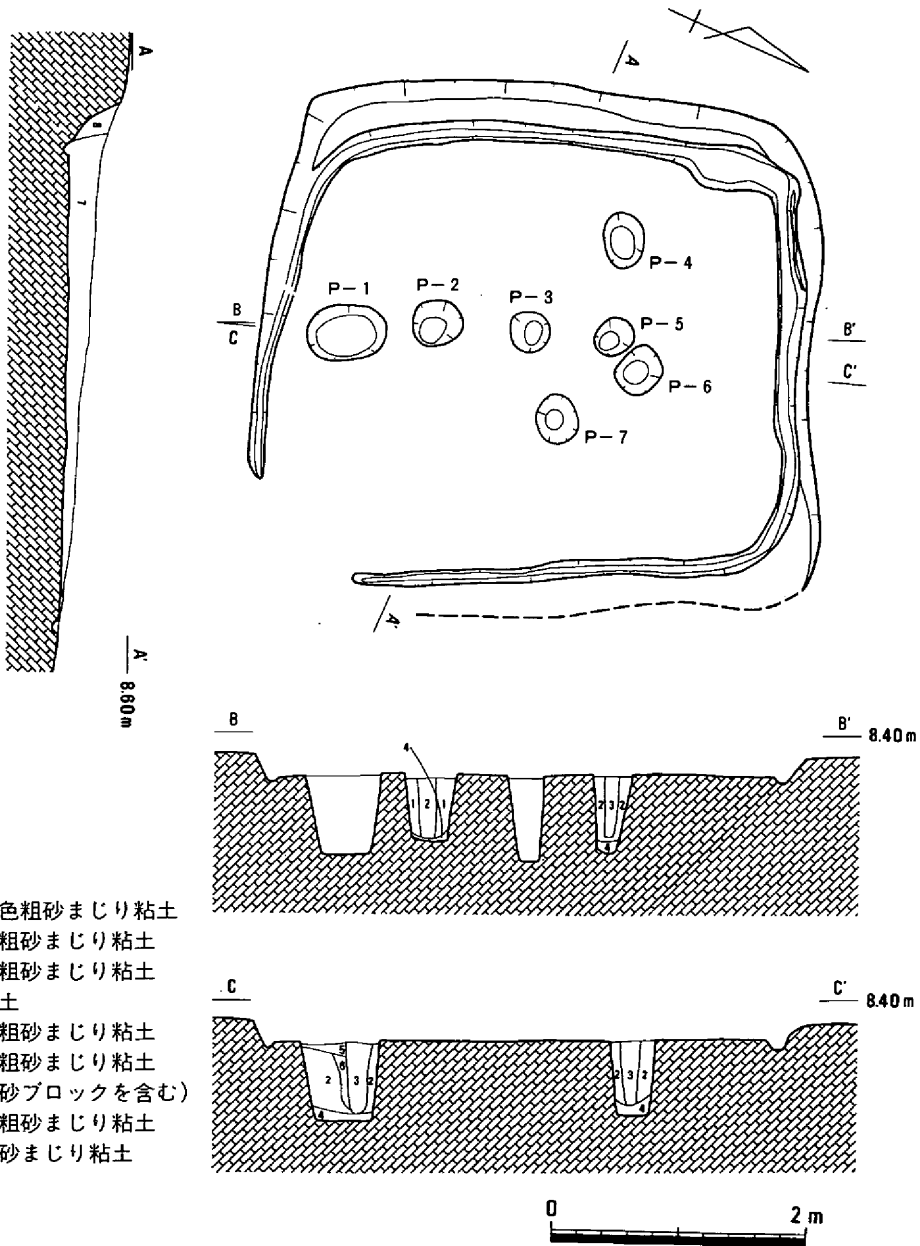
調査区域の西寄りに位置し、東へ緩やかに傾斜しているため、東南隅は一部削平されている。平面形は方形を呈している。壁帯溝がめぐり、隅の形は少し丸くなっている。方形の一辺は南北方向から少し東へふつている。大きさは、南北433cm、東西425cmを測る。床面では南北392cm、東西338cmである。床面で検出された穴は7個である。柱穴の配置からすると、P-2とP-5の2本柱と推定される。P-2とP-5の距離は心々で140cmであり、丁度中間に小穴があるが70cmと深い。他



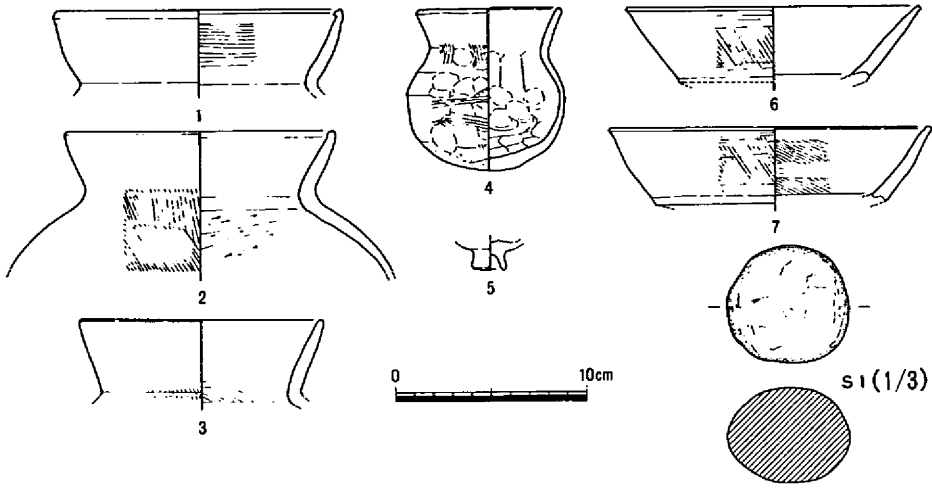
第2図 遺跡全体図 (1/400)

の穴も柱穴であるが補助的に使用されたものと推測され、規則的には並ばない。床面には炉跡と確認できるものが検出されなかった。また、火災にあった状況もみられない。

埋土中からは壺・甕・高杯・台付鉢形土器・敲石が出土している。1～3は甕の口縁部で、1の口縁端部は内側へ肥厚する。4は小型丸底壺で、6・7は高杯の杯部である。5は台付鉢



第3図 竪穴住居-1 (1/60)



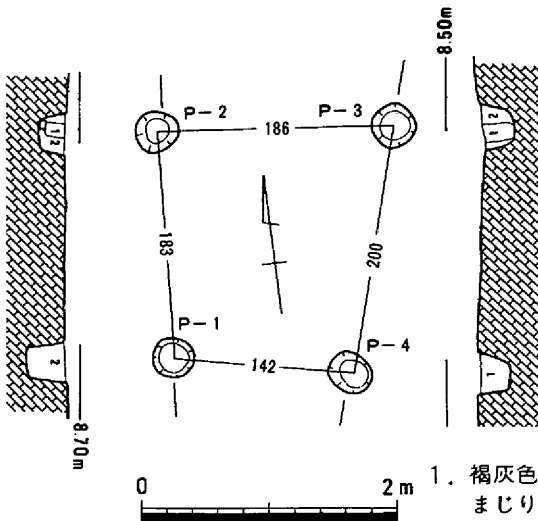
第4図 竪穴住居-1 出土遺物

形土器で、製塩に利用されたものと推測される。

時期は出土遺物から古墳時代中頃に比定されよう。(古谷野寿郎)

建物-1 (第5図)

竪穴住居-1の南12mの用地端近くで4本の柱穴が検出された。柱穴の深さは30cmくらいで、上部が削平されている。柱穴はほぼ東西、南北に並ぶが、北側の柱穴は186cmで南の柱間142cmより長くなっているため、台形状を呈している。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形を呈している。



第5図 建物-1 (1/60)

る。P-2とP-3では柱痕跡が検出された。P-2柱痕跡の直径は12cm、P-3の柱痕跡の直径は14cmを測る。P-2の柱穴の底には径8cmの石が入っていたが、他の柱穴にはない。

柱穴の配置からすると竪穴住居の削平されたものと考えられる。柱穴内からの出土遺物はないが、北側の竪穴住居-1との位置関係や柱穴の埋土等から古墳時代に属するものと推定される。

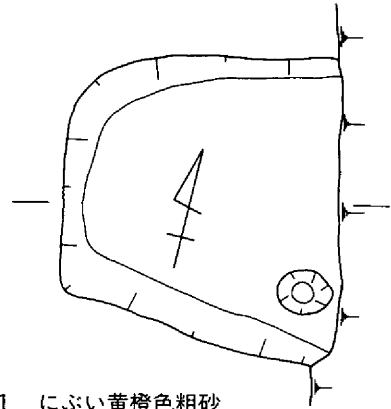
土壇-1 (第6図)

竪穴住居-1の北東7mに位置している。平面形は方形を呈している。東側は畑地のため削られている。現状の

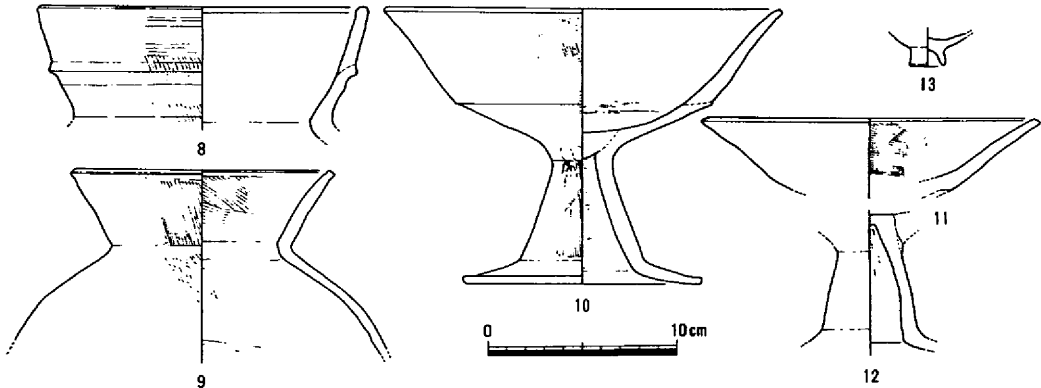
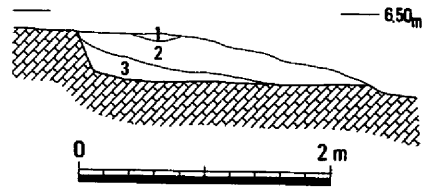
大きさは東端の南北245cm、西側は170cm、東西は220cmを測る。掘り込みはかなり急で、床面は平坦である。現存の深さは40cmである。下層の埋土は地山の土で、その上層には褐灰色の粗砂まじり粘土があり、この土層中に土器が多く含まれていた。床面の南東寄りに柱穴が1本検出された。直径35cm、深さ22cmを測るが、土壌には伴わないものと推定される。

埋土中の出土遺物は土器のみで、器種には壺・甕・高杯・台付の小型土器がある。8は二重口縁の壺の口縁部で、口径17.3cmを測る。口縁部は外反して立ちあがり、その上方に接合した口縁は少し立ちあがりぎみとなる。接合部の外面は横位のへラケズリがみられる。胎土には砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。9は甕の口縁部で、口径13cmである。口縁部は大きく外反し、口縁端部は角張っている。内外面とも斜位のハケメが施されている。胴部では外面に斜位のハケメがうすく施され、内面の上部はユビナデ、中位は横位のへラケズリがされている。胎土には細砂を多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。

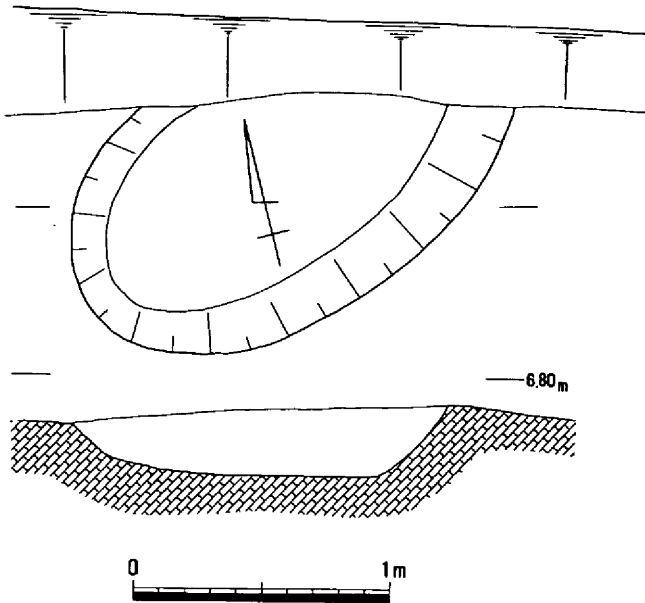
10はほぼ完形に復元された高杯で、杯部の深さはやや深い。口径20.5cm、高さ14.5cm、脚端部径12.4cm、杯部の深さ6.5cmを測る。脚部と杯部下半は連続してつくられ、口縁部は接合されている。杯部の底は小さな円盤充填がなされている。杯部外面は斜位のハケメの後、横位のナデを施している。脚部外面にもハケメがあり、内面は横位のへラケ



- 1. にぶい黄橙色粗砂
- 2. 褐灰色粗砂
- 3. 黄橙色粗砂



第6図 土坑-1 (1/60) ・出土遺物



第7図 土坑-2 (1/60)

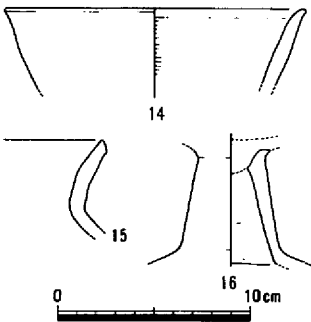
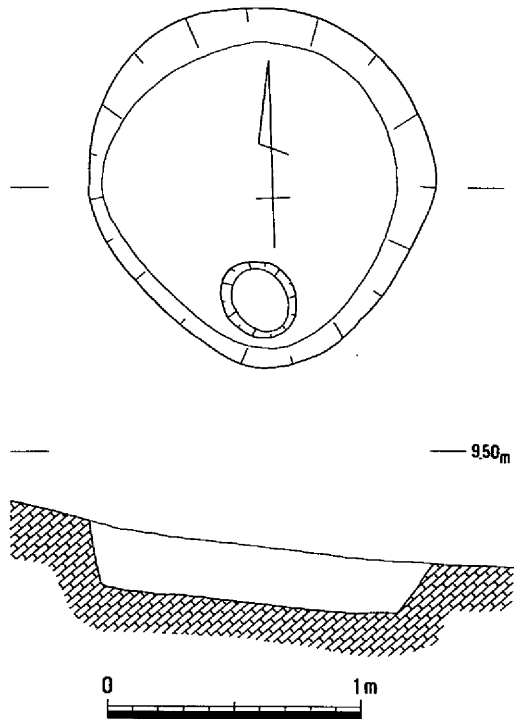
にぶい黄橙色を呈する。

土坑の時期は出土土器から布留式併行期で、百間川遺跡の百・古・IIIに併行する。

土坑-2 (第7図)

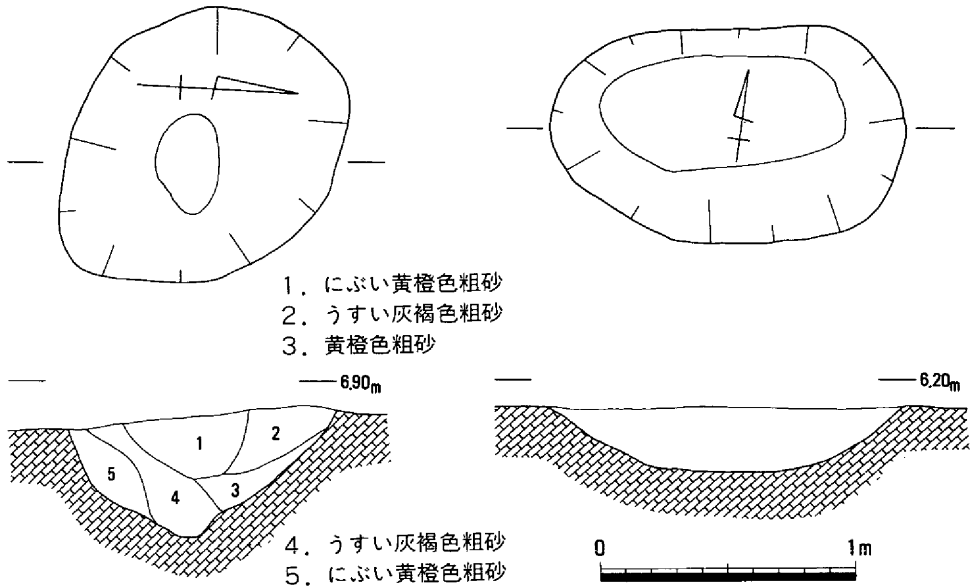
調査区域の北端部に位置し、一部は用地外に及んでいる。平面形は楕円形を呈し、調査範囲内では長径120cm、短径115cm、深さ30cmを測る。埋土は灰褐色粘土まじり粗砂で、遺物は土師器の

ズリがみられる。脚裾部は急に外反し、内面には明瞭な稜線がみられる。胎土には細砂を多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。11と12は同一個体と推測される高杯である。10に比べて杯部は浅い。杯部と脚部は別づくりで、柱状部の上端には接合をよくするための刺突痕がみられる。胎土には細砂を多く含み、色調は明黄褐色を呈する。13は台付の小型手捏ね土器である。脚部の径は1.8cmである。色調は



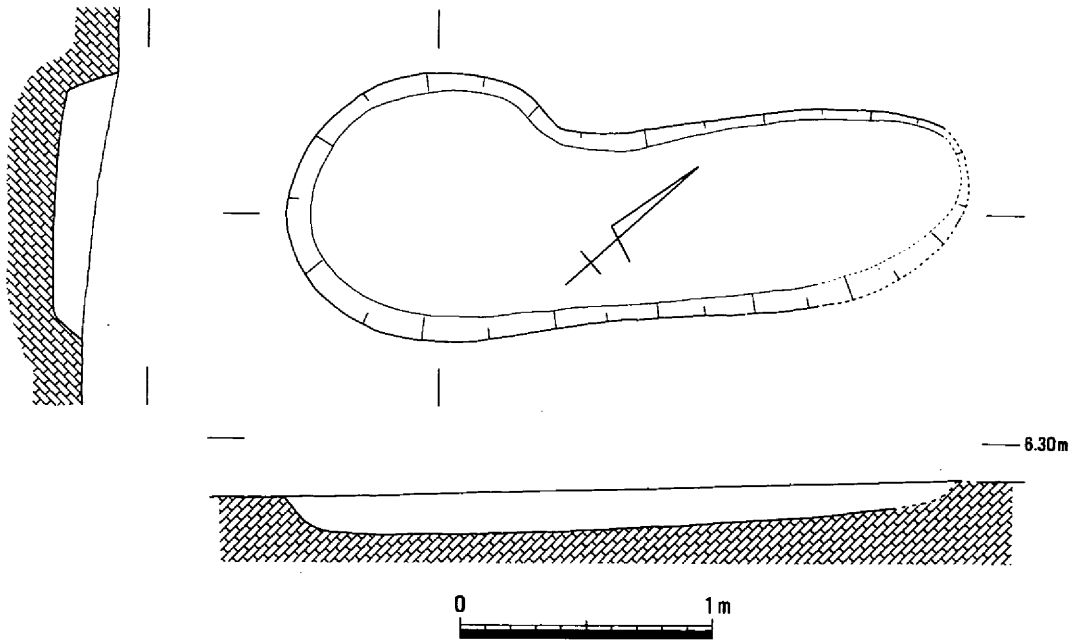
第8図 土坑-3 (1/60)・出土遺物



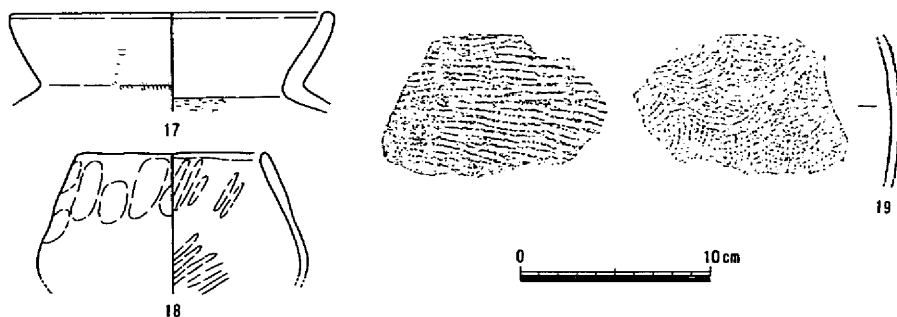


第9図 土坑-4 (1/60)

第10図 土坑-5 (1/60)



第11図 土坑-6 (1/60)



第12図 土坑—6 出土遺物 (1/4)

小片が4片のみで、詳細な時期は明らかでない。周辺部にある土坑が古墳時代であることから同時期のものと推定される。

#### 土坑—3 (第8図)

竪穴住居—1 西方5mに位置する。平面形は不整円形を呈し、145×137cm、深さ23cmを測る。床面は平坦であるが、東へ少し傾斜している。南寄りの床面で直径30cm、深さ12cmの柱穴を検出したが、土坑に伴うものではないと判断される。埋土は灰茶褐色粘土まじり粗砂で、少量の土師器片とサヌカイト片が出土した。14は高杯の口縁部で、杯部は深い。15は甕の口縁部、16は高杯の脚部である。年代は古墳時代中頃に比定されよう。

#### 土坑—4 (第9図)

竪穴住居—1の南東15mに位置している。平面形は不整円形を呈し、130×100cm、深さ47cmを測る。埋土の堆積状況からいわゆる風倒木の痕跡と推定される。出土遺物はない。

#### 土坑—5 (第10図)

調査区域の東端部に位置する。平面形は長楕円形を呈し、長径139cm、短径85cm、深さ25cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土まじり粗砂で、出土遺物は土器細片2点のみで、時期はわからない。周辺部の土坑の状況からすると古墳時代に属するものと推定される。

#### 土坑—6 (第11・12図)

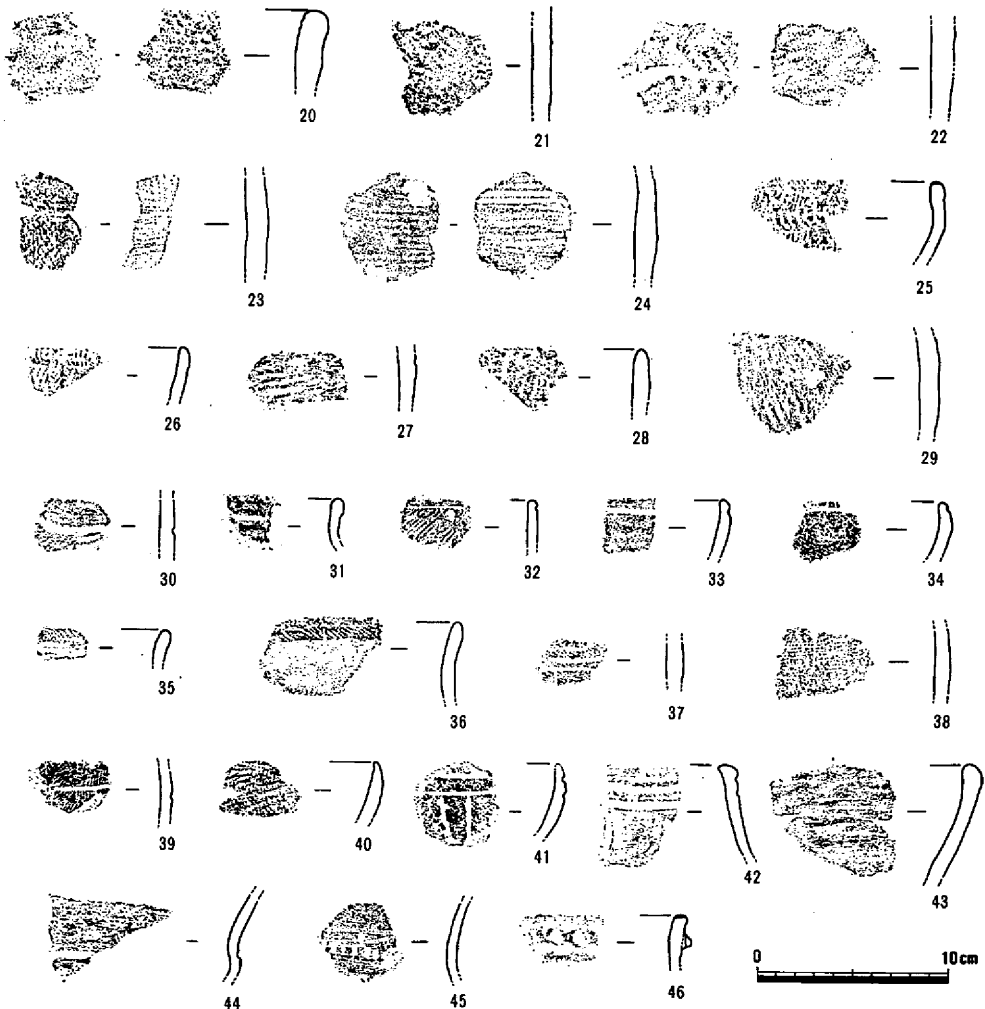
調査区域の北東隅に位置する。北東から南西に長い土坑で、南西側は大きくなっている。長さ270cm、幅75cm、深さ16cm、南西側の大きくなったところは幅105cmを測る。埋土は灰黒褐色粘土まじり粗砂で、須恵器、土師器の破片を出土した。17は甕の口縁部で、口径16.5cmである。18は師楽式土器で、内外面ともにユビオサエの痕が残っている。口径は9.6cmで、胎土には細砂を含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。外面は二次的な火をうけている。19は須恵器の甕片で、外面は平行タタキ、内面は青海波文がみられる。

時期は6世紀後半に比定されよう。

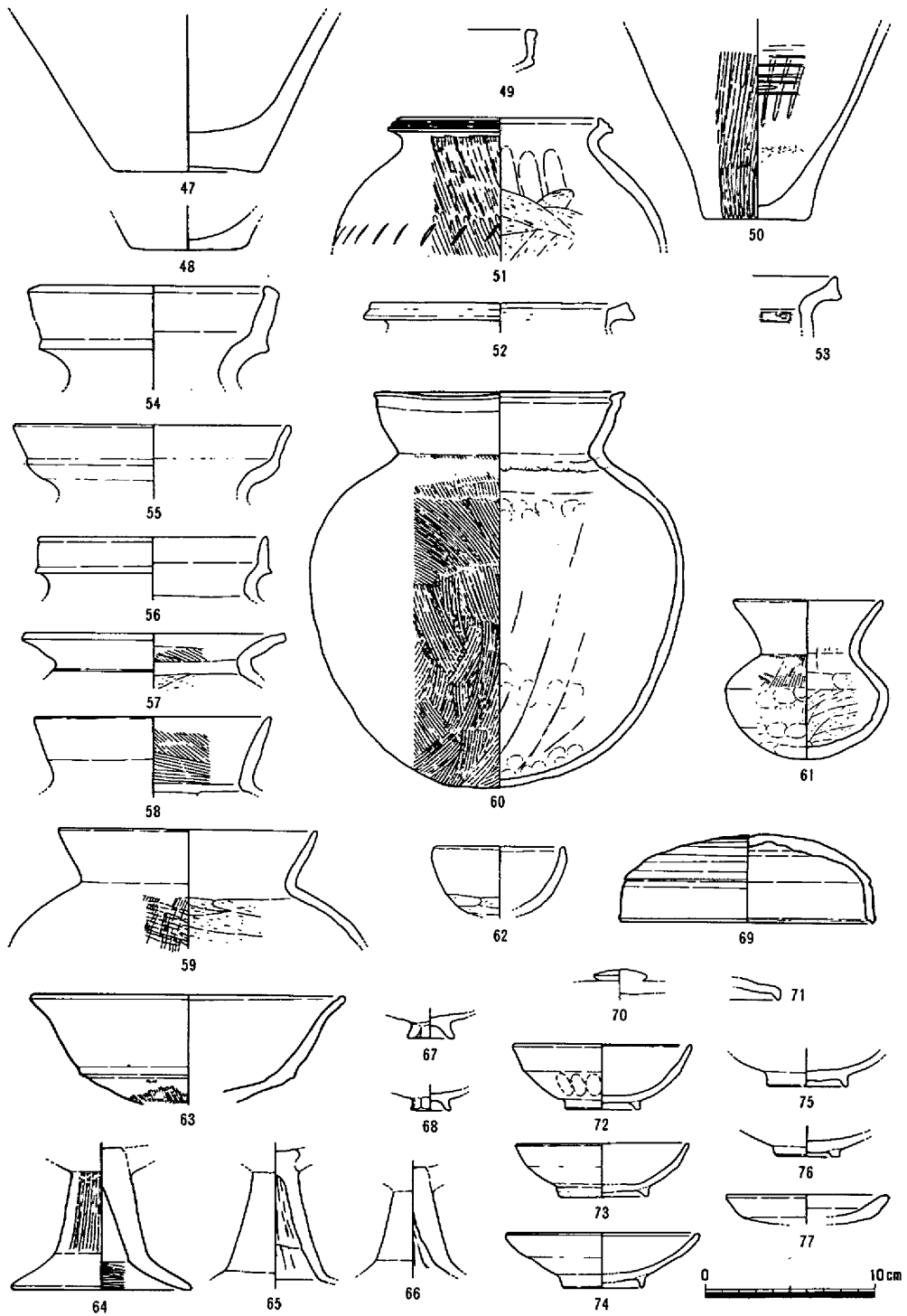
## 包含層出土遺物（第13～16図）

耕土と包含層中には縄文時代から近世の遺物が含まれている。古墳時代の包含層は一部に認められたが、弥生時代以前の遺物は後世の遺構・包含層中の含まれていたものである。

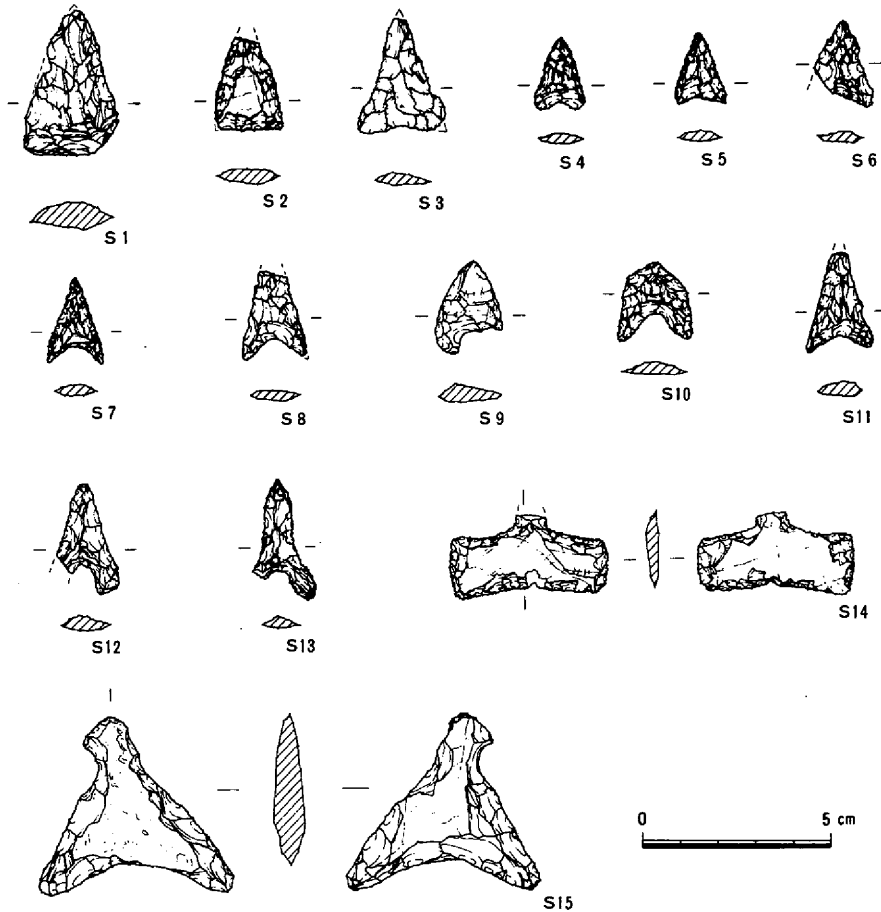
縄文式土器も、すべて後世の遺構・包含層中から検出されたものである。時期は早期から晩期のものまで認められるが、量は少なく、小破片が多い。第13図に図示したものは比較的文様や整形痕の明瞭なものである。20・21は早期の押型文土器で、1には楕円文、2には山形文がみられる。胎土には粗砂粒を含んでいる。22・23は前期の繊維土器で、外面は縄文、内面は条痕文である。24は内外面に条痕文がみられ、前期に属するものであろう。25～29は中期の船元



第13図 包含層出土遺物(1)



第14圖 包含層出土遺物(2)

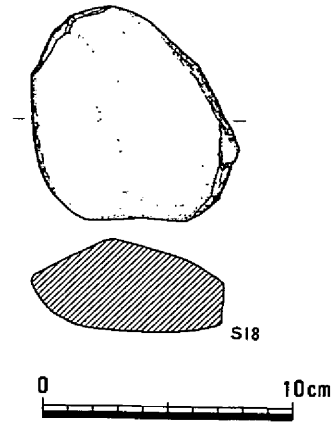


第15図 包含層出土遺物(3)

式土器である。25・26には爪形文、28には沈線文がある。30～43は後期の土器である。32～38は彦崎K II式土器である。39～41は彦崎K II式の可能性のあるものである。口縁部にひかれた沈線・縄文・磨消し縄文がみられる。42・43は福田K II式土器である。44～46は晩期の黒土B II式土器である。44・45は黒土B II式の中では少し古く、46は新しい。43は口縁部外面に大きなキザミメのある突帯を配し、口唇部にもキザミメがある。

第14図47～53は弥生式土器である。47は前期の壺底部であろう。48・50は中期の底部、49は中期後葉に属する高杯の口縁部である。50では内面にもヘラミガキが施されている。また、底部付近には炭化物が付着している。51は後期前半の甕で、口縁部外面には凹線文があり、肩部にはノの字状の刺突文を配する。内面は胴部上半までヘラケズリがみられる。52・53は弥生後期後半もので、52は丹塗りがみられる。

55～68は古墳時代の土師器である。54～56は複合口縁の壺である。57～59は口縁部がくの字状に外反し、58・59では端部がうすくなる。59では外面にタタキメがみられる。60は第1次調査で、竪穴住居—1付近から出土したものである。口縁端部が内側へ肥厚し、胴部は、ほぼ球形を呈している。外面には粗いハケメがあり、内面には指頭圧痕文がみられる。いわゆる布留式併行の土器である。61は北寄りの包含層中から出土した小型丸底壺で、口縁部の一部を欠失している。62は小型の鉢である。63～66は高杯である。67、68は台付鉢形土器の脚部で、製塩土器とされるものである。



第16図 包含層出土遺物(4)

69は6世紀後半の須恵器で、杯蓋である。70・71は同一個体の可能性がある。扁平なつまみのついた須恵器の蓋で、8世紀代と推定される。72～77は早鳥式土器の椀・皿である。時期は室町時代に比定されよう。

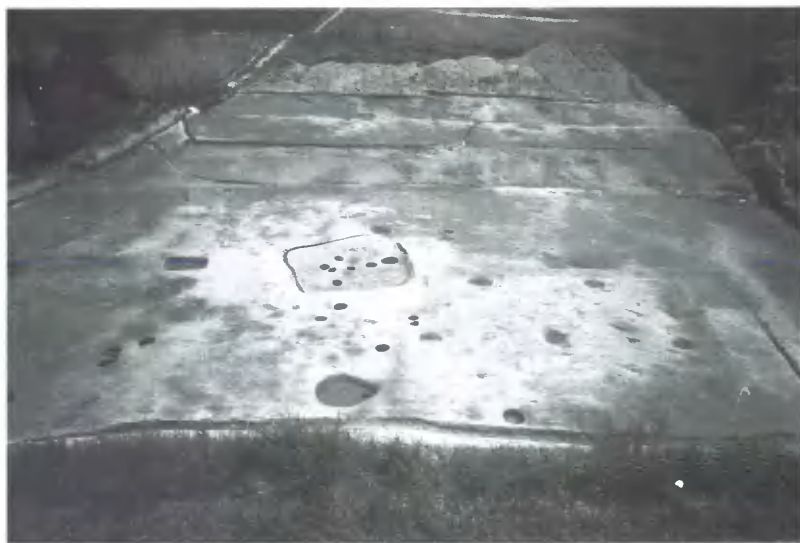
石器は耕土や包含層中から出土した。種類には、石鏃・石匙・敲石がある。S1～S13は石鏃で、S1、S2は平基式のものである。S3～S13は凹基式のもので、S10・S12・S13のえぐりは深く、縄文時代に属するものと推定される。S14・S15は石匙で、S14は横長の長方形を呈し、S15はえぐりの入った三角形を呈している。石材はいずれもサヌカイトである。S18は敲石で、やや扁平な楕円形を呈し、周辺部に敲きの痕が残っている。ほかに、黒曜石の原石が1個出土した。大きさは長さ13cm、幅9cm、厚さ7.5cm、重さ1015gである。色調は黒色を呈し、斑文などはみられない。この地域で、これ程大きな黒曜石の原石が発見された例はない。(正岡睦夫)

表、遺構番号対照表

本報告書記載	発掘調査時
竪穴住居—1	竪穴住居—1
建物—1	建物
土壌—1	土壌—1
土壌—2	土壌—4
土壌—3	土壌—3
土壌—4	土壌—2
土壌—5	土壌—6
土壌—6	土壌—5



1. 遺跡全景（南から）



2. 遺跡全景（西から）

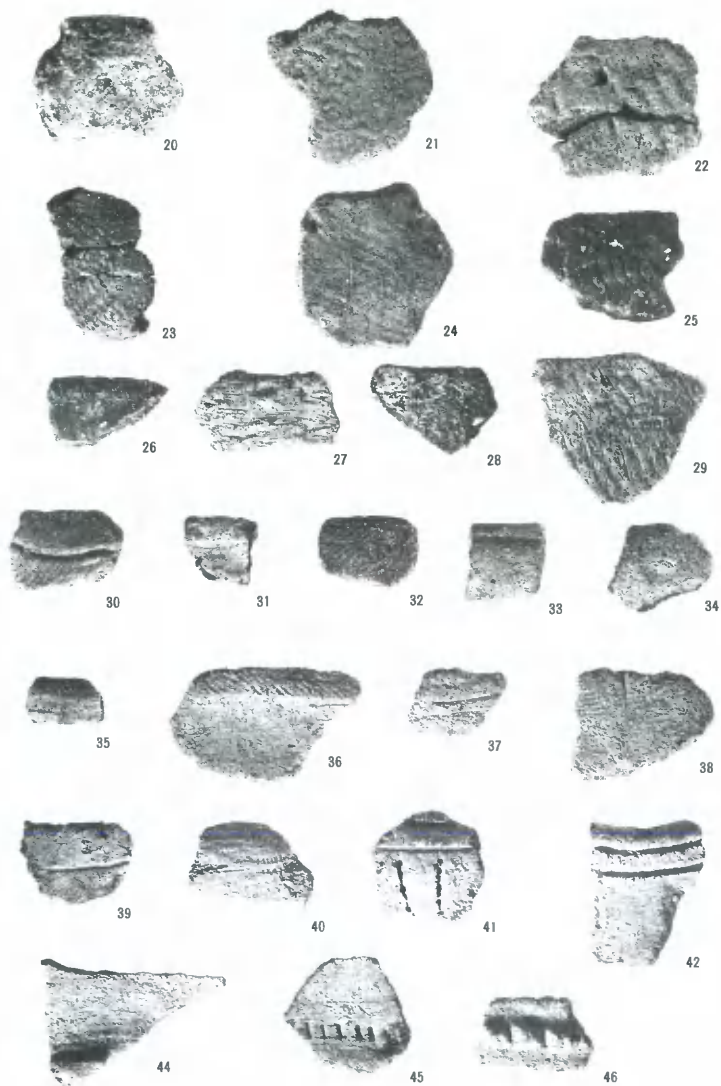


1. 竪穴住居-1 (東から)



2. 土坑-1 (南から)





出土遺物 (1/2)



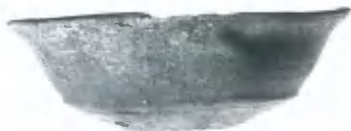
60



4



61



63



69

出土遺物 (1/3)

とう づ いけ きた  
唐津池北遺跡

## 目次

1. 調査位置と調査経過 .....	403
2. 西丘陵部の調査 .....	405
3. 東丘陵部の調査 .....	415

## 図目次

第1図 遺跡位置図 (1/3,000) .....	403	第8図 建物一1 (1/80)・出土遺物(1/4)・	410
第2図 西丘陵部全体図 (1/500) .....	404	第9図 土壙一1 (1/30) .....	411
第3図 竪穴住居一1 (1/80)・ 出土遺物 (1/4) .....	405	第10図 土壙一2・3 (1/60)・ 出土遺物 (1/2・1/4) .....	412
第4図 竪穴住居一2 (1/80)・ 出土遺物 (1/2) .....	406	第11図 包含層出土遺物 (1) (1/4) ..	413
第5図 竪穴住居一3 (1/60) .....	407	第12図 包含層出土遺物 (2) (1/2・1/3) .....	414
第6図 竪穴住居一4 (1/60)・ 出土遺物 (1/4) .....	408	第13図 東丘陵部全体図 (1/600)・ 出土遺物 .....	415
第7図 竪穴住居一5 (1/60) .....	409	第14図 建物一2 (1/80) .....	416

## 図版目次

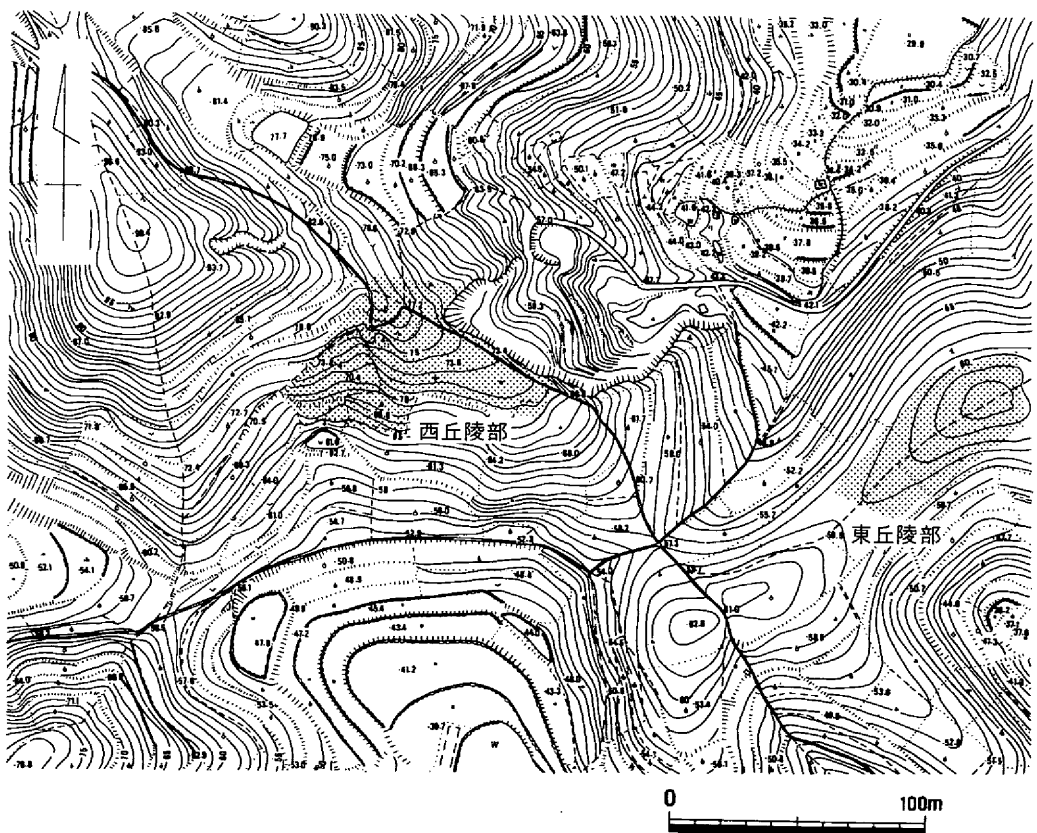
図版1一1 西丘陵部東半 (西から) 一2 西丘陵部東半 (西から)	図版4一1 竪穴住居一4 (西から) 一2 土壙一2・3と周辺の遺構(東から)
図版2一1 竪穴住居一1 (南から) 一2 竪穴住居一2 (南から)	図版5一1 建物一1 (西から) 一2 建物一2 (南から)
図版3一1 竪穴住居一5 (北から) 一2 竪穴住居一5 (西から)	図版6 出土遺物

## 1. 調査位置と調査経過

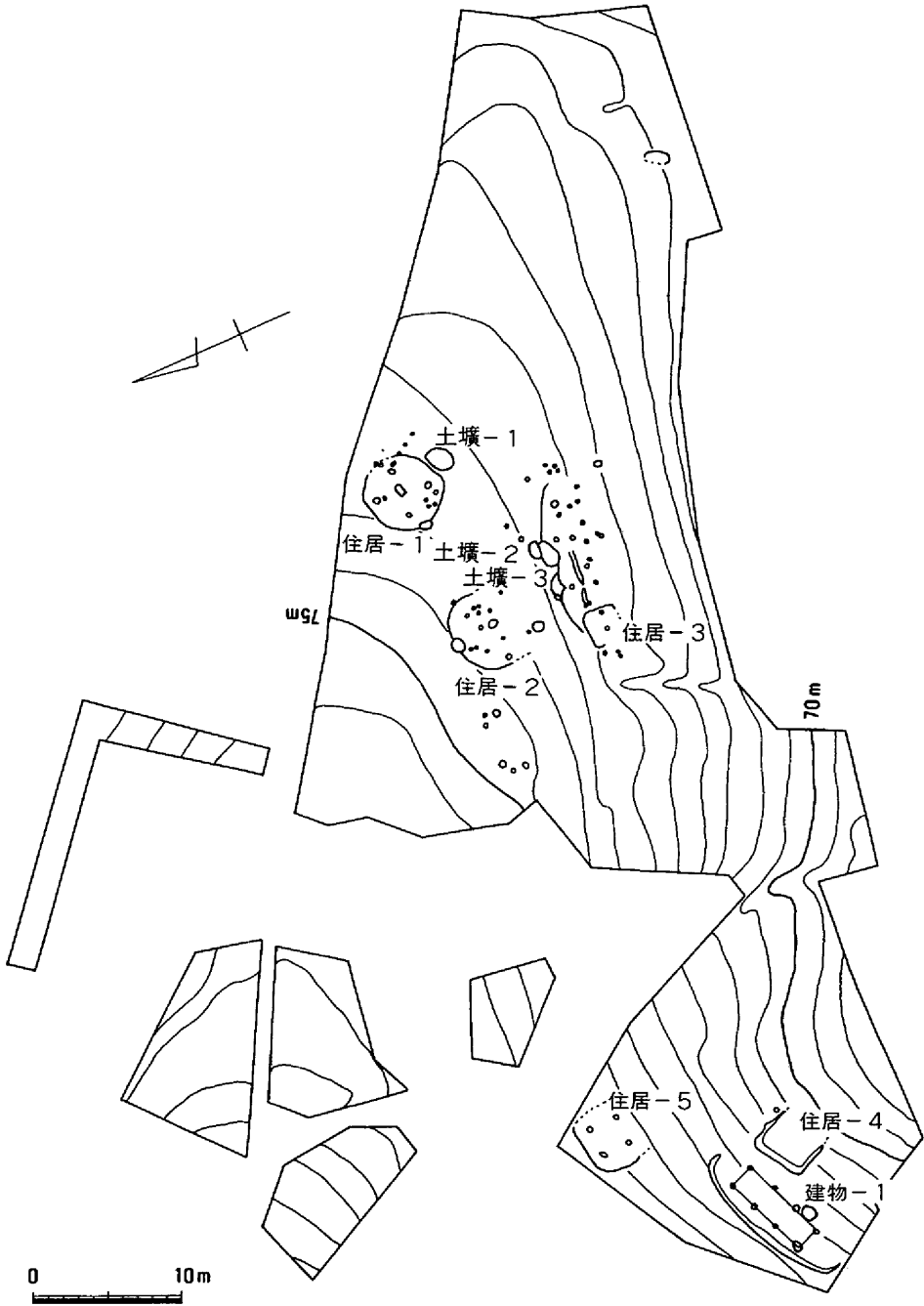
玉島道口から金光町へ通じる大規模農道の北側にひろがる低丘陵部に位置する。第1次調査は1984年1月から同年2月にかけて実施した。東西にのびる丘陵部全域にトレンチを設定したところ、唐津池の北に接する丘陵部と100m東方の丘陵部で遺構が検出された。その他の地点でも若干の土器片の散布はみられたが、遺構は確認されず、遺物の量もわずかであったことから、全面調査は西丘陵部と東丘陵部の2地区とした。

全面調査は1984年4月から開始した。一時、道口遺跡の確認調査のため中断したが、同年6月にすべて完了した。西丘陵部は一段下がった稜線から南斜面に遺構がひろがっている。検出された遺構は竪穴住居5軒、掘立柱建物1棟、土壇3基、柱穴、近世墓1基等である。東丘陵部では稜線上を全面的に調査したが、弥生時代中期の掘立柱建物1棟が検出されたのみで、遺物も少量にすぎない。

(正岡陸夫)



第1図 遺跡位置図 (1/3,000)

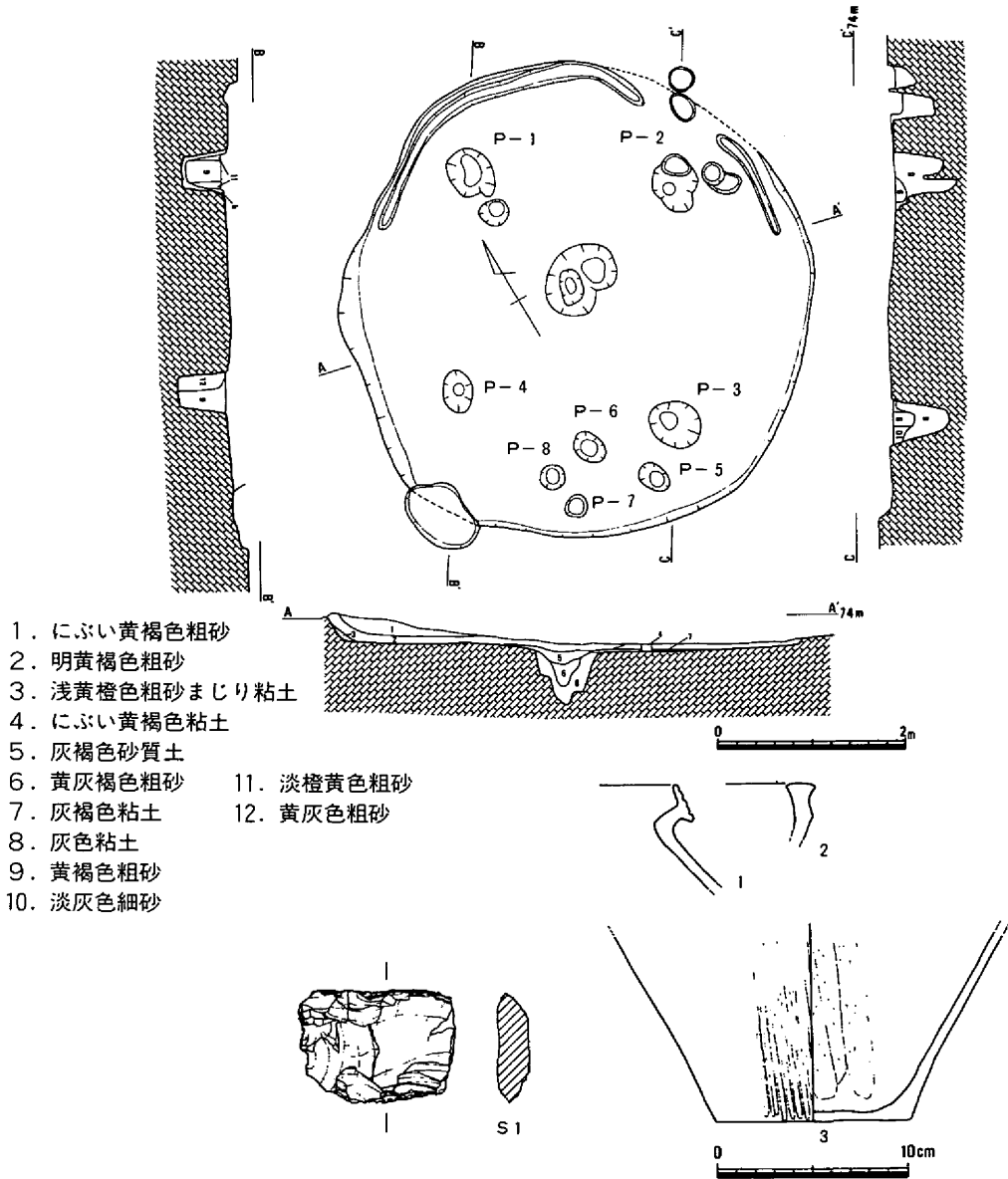


第2図 西丘陵部全体図 (1/500)

## 2. 西丘陵部の調査

### 竪穴住居—1（第3図、図版2—1）

東へのびる稜線上に位置する。上部は畑のため、かなり削平されているが、ほぼ、全容を検



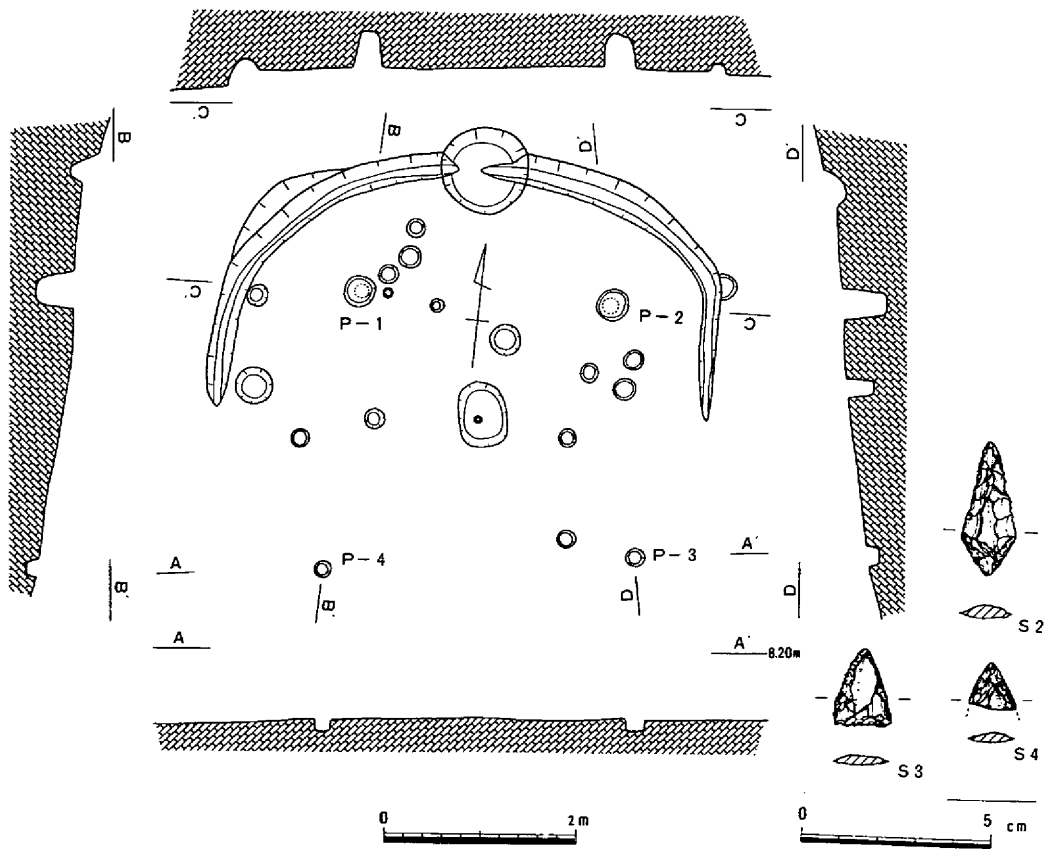
第3図 竪穴住居—1 (1/80) ・出土遺物

出できた。平面形はやや角張っており、6角形に近い形状を示すが、基本的には円形と理解される。中央部には土壇があり、4本柱である。壁帯溝は北側で検出されるが、南側では検出されていない。大きさは、南北510cm、東西495cmである。中央穴には掘り直しがあり、深さは60cmあり、埋土には炭化物を含んでいる。支柱穴の4本もそれぞれ掘り直しがあり、1回の建て替えが行われたと判断される。床面で検出された遺物はきわめて少ない。住居の廃棄時に、ものの搬出が行われたと推測される。上部が削平されていたことから埋土中の遺物が少ないと考えられる。

出土遺物には土器片、サヌカイト片がある。1は甕、2は高杯で、埋土中の出土である。3は中央穴出土の底部である。S1はP-8出土の石器で楔形を呈する。他に、P-7中からはサヌカイトの小破片が多数出土している。

時期は出土遺物から弥生時代中期後半に比定される。

(古谷野寿郎)



第4図 竪穴住居-2 (1/80)・出土遺物



### 竪穴住居—2 (第4図、図版2—2)

竪穴住居—1の西方10mにあり、南へ緩やかに傾斜するところに位置している。自然流失と畑地のため、南半は削平されている。平面形は少し角張る部分もみられるが、基本的には円形と判断される。中央部には土壇があり、4本柱である。壁帯溝は北半分に残っている。大きさは東西530cmで、中央穴は70×50cm、深さ18cmを測る。主柱穴のP—1、P—2では柱痕跡が残っており、これによると直径16cmである。柱間は、P—1～P—2は260cm、P—2～P—3は270cm、P—3～P—4は325cm、P—1～P—4は296cmを測る。主柱穴以外の柱穴もみられるが、明確な建て替えは確認できない。

床面で検出された遺物はきわめて少ない。出土遺物には土器片と石鏃、サヌカイト片がある。S2～S4は埋土中から出土した石鏃である。土器片は細片のみである。床面にはサヌカイトの小破片が多数散布しており、石器製作が行われていたことがわかる。

時期は弥生時代中期後半に比定される。

(福田正継)

### 竪穴住居—3 (第5図)

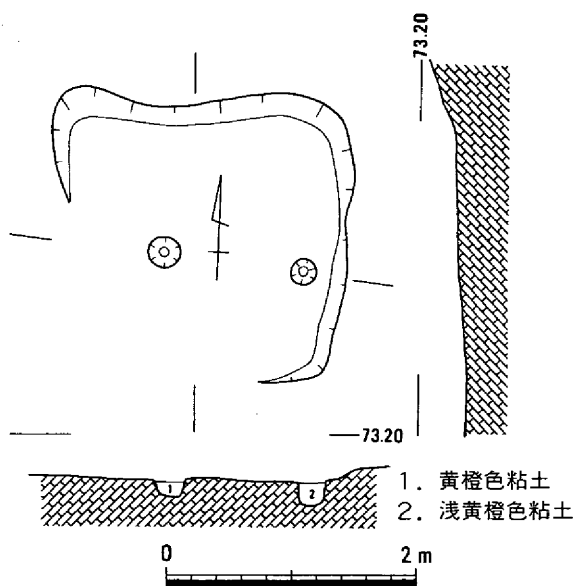
竪穴住居—2の南下方の斜面部に位置する。この付近には等高線に平行して、段状の平坦面があり、壁帯溝状の溝・柱穴・土壇があり、竪穴住居がさらに存在した可能性は高い。南側は一部削平されているが、ほぼ平面は残っており、方形を呈する。壁帯溝はなく、床面で2本の柱穴が検出された。柱穴の位置は少し中央部よりずれており、明確に伴うかどうかはわからない。

床面の中央部には焼土面があり、炉跡と推測される。大きさは東西220cm、南北230cmを測り、壁の方向は、ほぼ東西、南北を示している。

床面で遺物は検出されなかったが、付近から弥生時代中期後半の土器片が出土していることから、同時代に比定されよう。

### 竪穴住居—4 (第6図、図版4—1)

竪穴住居—2の西方35mの斜面部に位置する。周辺の地形はわずかな谷状を呈し、南へ傾斜している。谷状を呈している部分に包含層が形成されている。包含層の一部を掘り下



第5図 竪穴住居—3 (1/60)

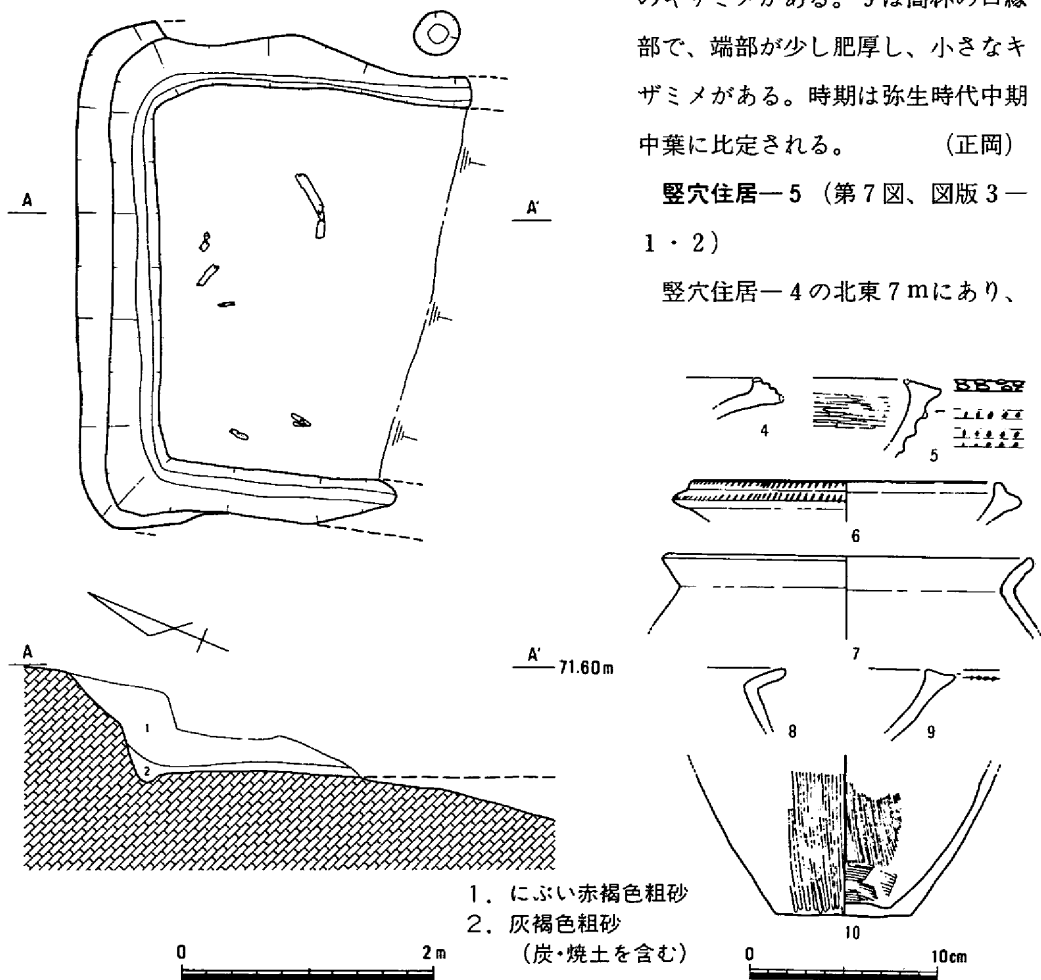
げた地山面において検出された。南へやや急に傾斜するため、南側は削平されている。平面形は方形を呈し、北側の高い方からの掘り込みは75cmである。壁帯溝があり、残存する東西は380cm、床面では305cmを測る。床面は平坦で、床面には炭化材・焼土があり、火災にあった状況を示している。炭化材の残存は少ないが、残存する炭化材には径8cmくらいのものがある。床面で柱穴は検出されていない。東壁付近で、柱穴が1個検出されたが、住居に伴うものか否かはわからない。

床面で検出された遺物は少なく、ほとんど埋土中から出土している。4は壺の口縁部で、口縁端部に凹線文が施されている。5は高杯か鉢の口縁部で、口縁端は拡張し、上面には円形浮文が2列に並ぶ。外面にはキザミメのある突帯がめぐる。6は甕の口縁部で、口唇部には斜位のキザミメがある。9は高杯の口縁部で、端部が少し肥厚し、小さなキザミメがある。時期は弥生時代中期中葉に比定される。

(正岡)

竪穴住居—5 (第7図、図版3—1・2)

竪穴住居—4の北東7mにあり、

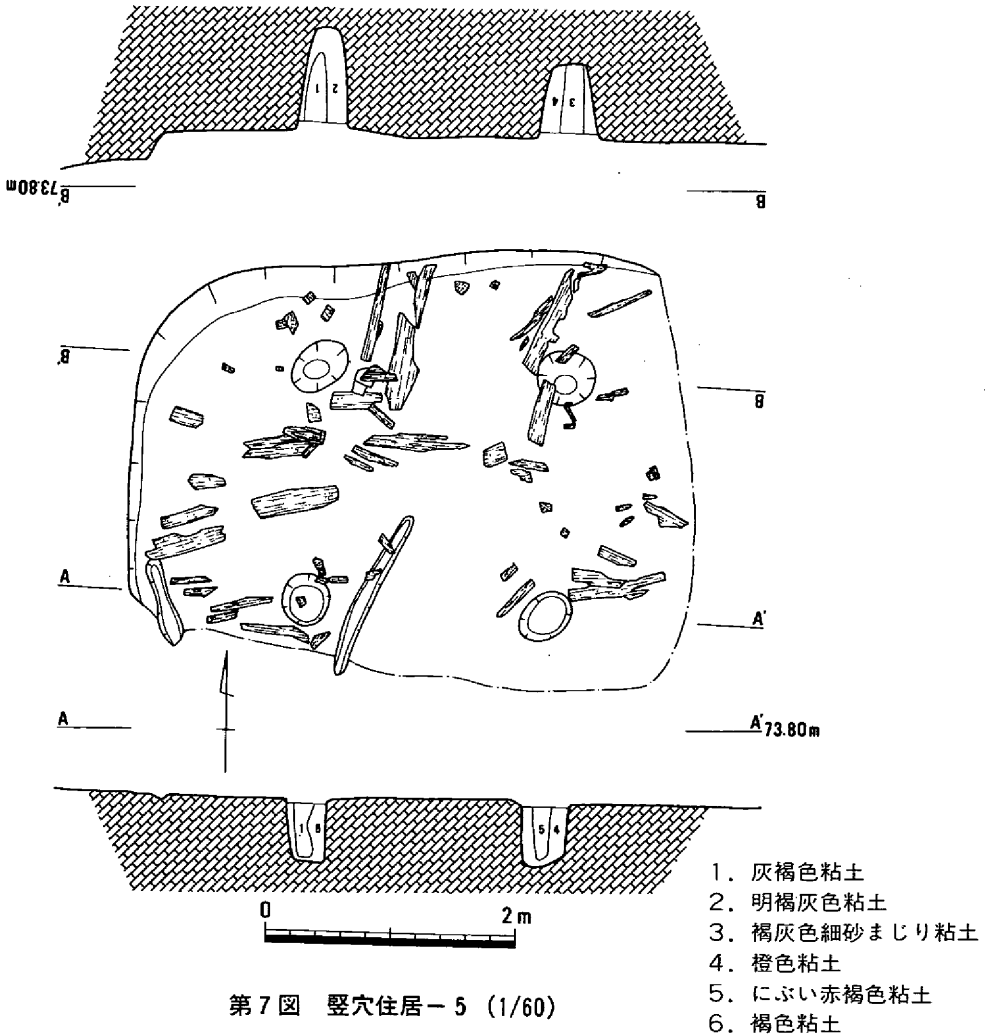


- 1. にぶい赤褐色粗砂
- 2. 灰褐色粗砂  
(炭・焼土を含む)

第6図 竪穴住居—4 (1/60)・出土遺物

南斜面に位置している。そのため、南側と東側の一部は残存していない。平面形は隅丸方形を呈し、4本柱である。現存する大きさは、東西370cm、南北290cmで、復原すると一辺約400cmと推定される。西壁付近に小さく短い溝があるが、壁帯溝は検出されなかった。4本柱は断面観察によると、それぞれ柱痕跡があり、抜き取られていない。床面直上には炭化材と焼土がひろがり、火災にあっていることがわかる。しかし、床面上には土器がまったく検出できなかったことから、使用中とは考えられず、故意に焼いたものと推測される。炭化材は、ほぼ放射状になっている。炭化材には直径7~10cmくらいのものが多い。時期は床面からの出土遺物がないため、明確にしがたいが、南側斜面に堆積している包含層の土器からすると、弥生時代中期中葉~後葉に比定されよう。(古谷野)

建物一1 (第8図、図版5-1)



第7図 竪穴住居-5 (1/60)

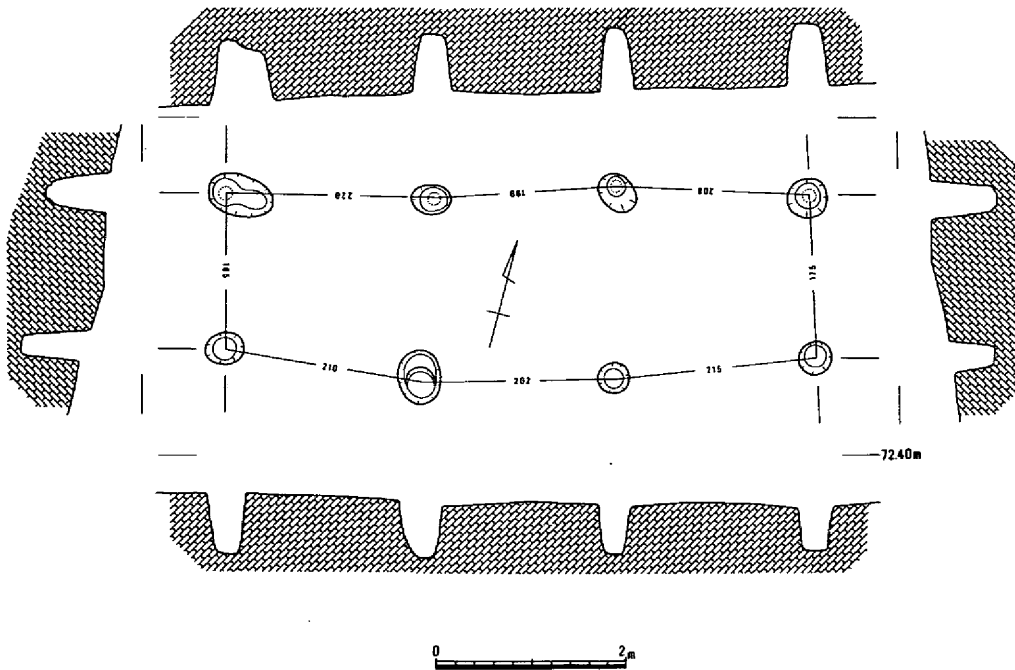
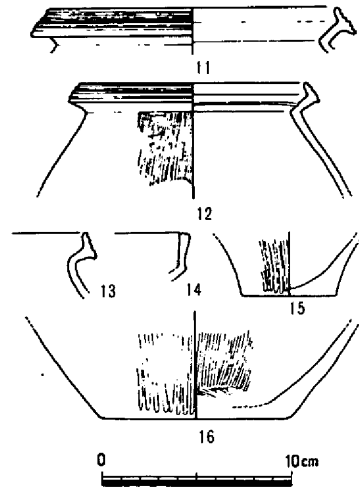
竪穴住居—4の北側に接し、南斜面に位置している。平坦面をつくるため、等高線に沿って、東西方向に長く、コの字形に削平している。掘り込まれた平坦面の大きさは、東西10m60cmで、南側は流失している。平坦面の一部は流失しているが、柱穴はほぼ完存しており、建物の規模は判る。桁行3間、梁間1間で、南側の柱列は少し外へひろがっている。主軸はN75°Eで、ほぼ東西方向を示している。大きさは、梁間165~175cmで、桁行612~620cmを測る。柱痕跡の確認された北側の柱列によると柱は直径15cm前後である。

11~16は建物—1を覆っている包含層出土の土器である。11~13は甕の口縁部で、口縁端部は拡張し、外面に凹線文を施す。14は高杯の口縁部で、皿部からほぼ直立し、外面は無文である。15・16は底部である。これらの遺物から、建物—1の時期は弥生時代中期後半に比定される。

(福田)

**土坑—1 (第9図)**

竪穴住居—1の南側に接して、丘陵の稜線上に位置する。平面形は不整楕円形を呈している。東西方



第8図 建物—1 (1/80) ・出土遺物

向に長く、長径189cm、短径143cm、深さ58cmを測る。床面は擂鉢状を呈しているが、中間に段がみられる。埋土中から土器小片とサヌカイトの小片多数が出土した。時期は弥生時代中期後半に比定される。(古谷野)

**土壙—2 (第10図、図版4—2)**

竪穴住居—3の東4mにあり、緩やかな南斜面に位置している。土壙—2と土壙—3は一部重なっているが、北側の土壙—2が新しいと判断している。平面形は東西方向に長い長楕円形を呈し、長さ128cm、幅47cm、深さ44cmを測る。17・18は埋土中の出土遺物である。ほかに高杯の脚部片などがあり、時期は弥生時代中期後半に比定される。

**土壙—3 (第10図、図版4—2)**

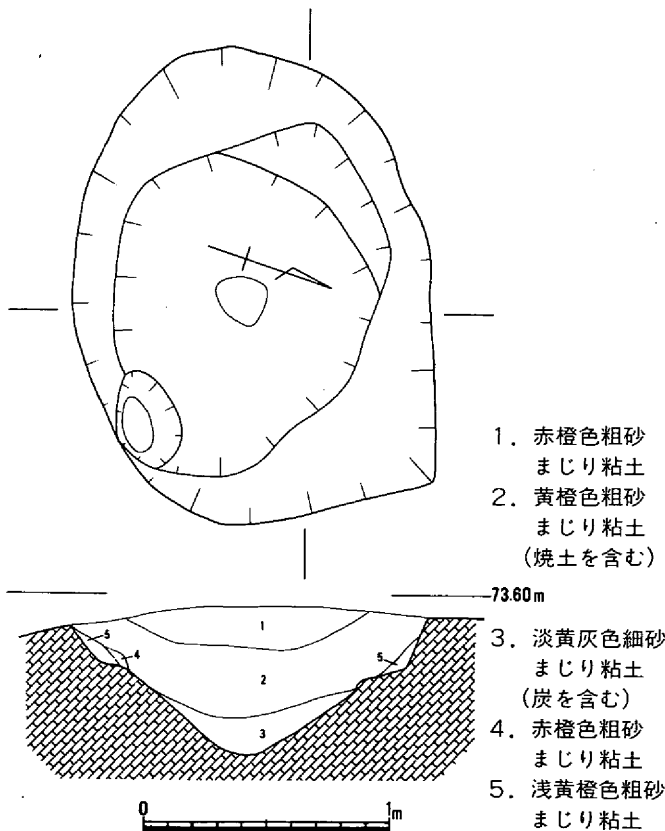
土壙—2に接している。平面形は東西方向に長い長楕円形を呈している。長さ187cm、幅86cm、深さ73cmを測る。19・20・S5～S7は埋土中の出土遺物である。19・20は甕の口縁部、S5は石鏃、S6・S7は楔形を呈するサヌカイト製石器である。他にサヌカイトの小破片が多い。時期は弥生時代中期後半に比定される。

**近世墓**

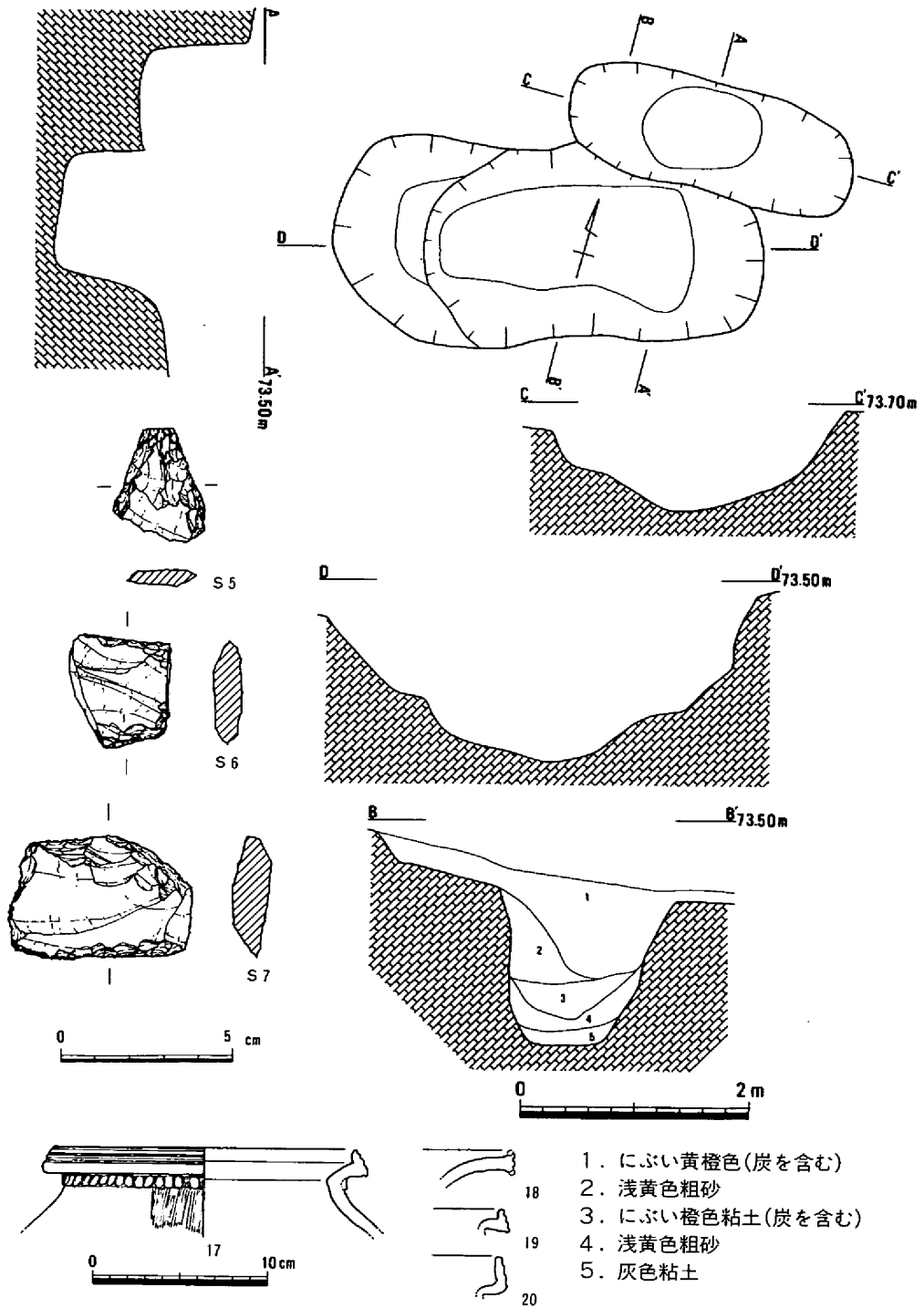
竪穴住居—1から南東25mで、丘陵の南斜面に位置している。全面調査中に現代の石の抜き取り穴に一部削られた状況で検出された。攪乱土中からキセルの一部とM1の寛永通宝1枚が出土した。人骨は出土していない。

**包含層出土遺物 (第11・12図)**

遺物は耕作土中からも少量出土しているが、主として、調査区域の西寄り、竪穴住居—5の南下方に形成された包含層から出土している。包含層はにぶい赤



第9図 土壙—1 (1/30)

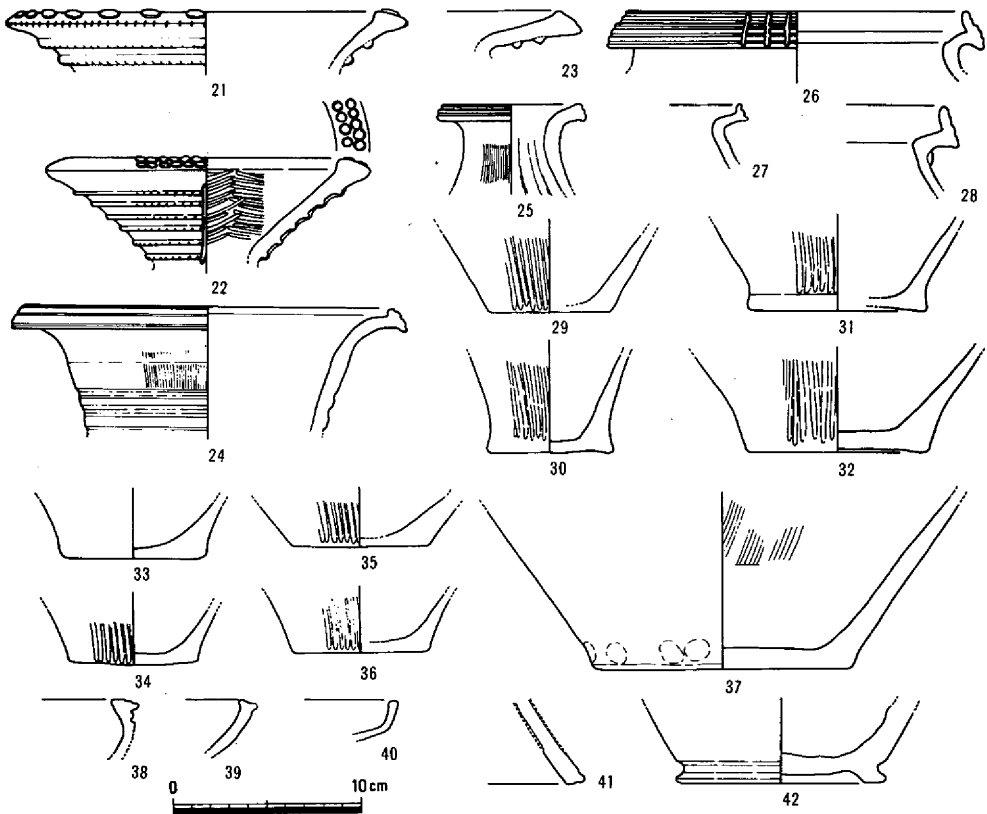


第10図 土坑-2・3 (1/60) ・出土遺物

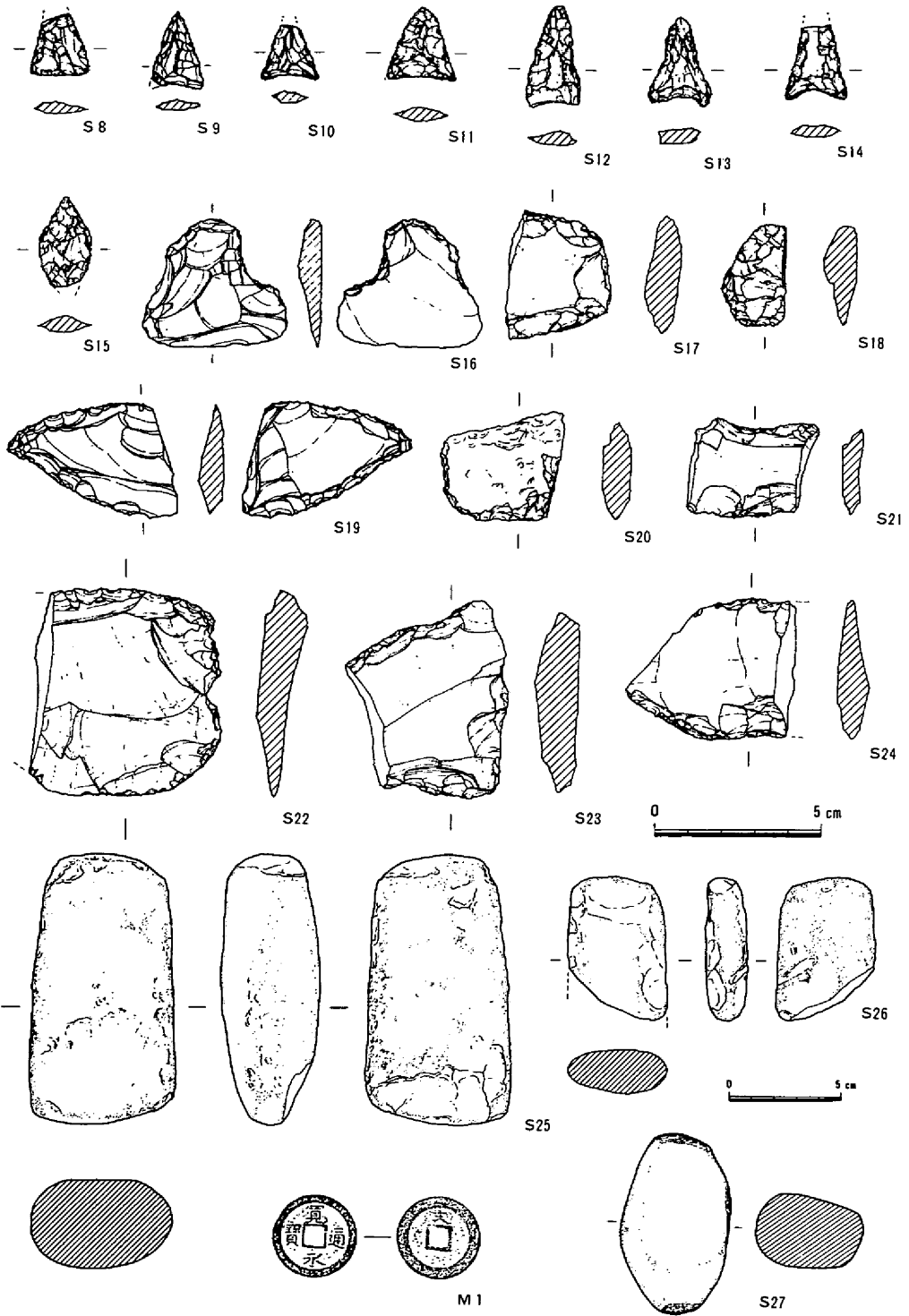
褐色粘土まじり粗砂で形成されており、小さな谷地形を呈している。下部には自然の礫も多く、湧水の流れた跡もみられた。サヌカイト片は竖穴住居—1から南東へのびる稜線上でも多数表採された。

第11図21～25は壺の口縁部、26～28は甕の口縁部、29～37は底部、38～41は高杯、42は8世紀頃の須恵器底部である。21～41は弥生時代中期に属するが、21～23・38・39・41は弥生時代中期中葉、24～28・40は弥生時代中期後葉に比定される。

石器には石鏃・石匙・打製石包丁・太型蛤刃石斧・敲石などがある。S 8～S 15は石鏃、S 16は石匙、S 17・S 18・S 20・S 21は楔形の石器、S 19・S 22～S 24はスクレイパー、S 25・S 26は太型蛤刃石斧、S 27は敲石、S 28は摩製砲丁、S 29は未製品である。時期は伴出している土器から弥生時代中期中葉～同後葉に比定される。 (正岡)



第11図 包含層出土遺物(1)



第12図 包含層出土遺物(2)



## 3. 東丘陵部の調査

1984年1月～同年2月に実施した第1次調査によって、東側の稜線頂部付近で柱穴を検出したことから、稜線部分を全面的に調査した。調査は1984年6月に実施した。しかし、遺構・遺物はきわめて少ない。遺構は掘立柱建物1棟が検出されただけで、遺物としては、第1次調査中に出土したM2の寛永通宝1枚と少量の土器片のみである。

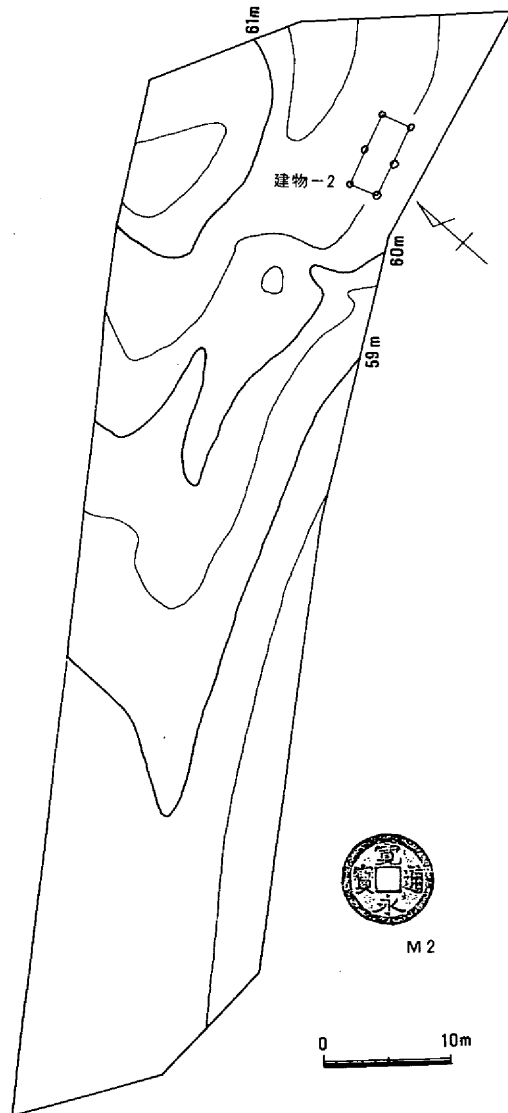
## 建物-2 (第12図、図版5-2)

東西に長くのびる丘陵部から南へ支丘が突出するところの頂上部付近に位置している。北側に山道があって、この部分の土砂が流失し、溝状にえぐられた状況にあるが、本来はほぼ平坦な地形を呈していたものと推測される。

主軸はN74°Eで、ほぼ東西方向である。梁間1間、桁行2間である。大きさは梁間238～245cm、桁行605～621cmを測る。柱痕跡の確認された北側の柱列によると柱は直径20cm前後である。

柱穴内からは弥生時代中期後半の甕底部片が1点出土した。連続する西丘陵部でも少量ではあるが、弥生時代中期後半の甕・高杯の破片を出土していることから、建物の時期も、弥生時代中期後半に比定されよう。

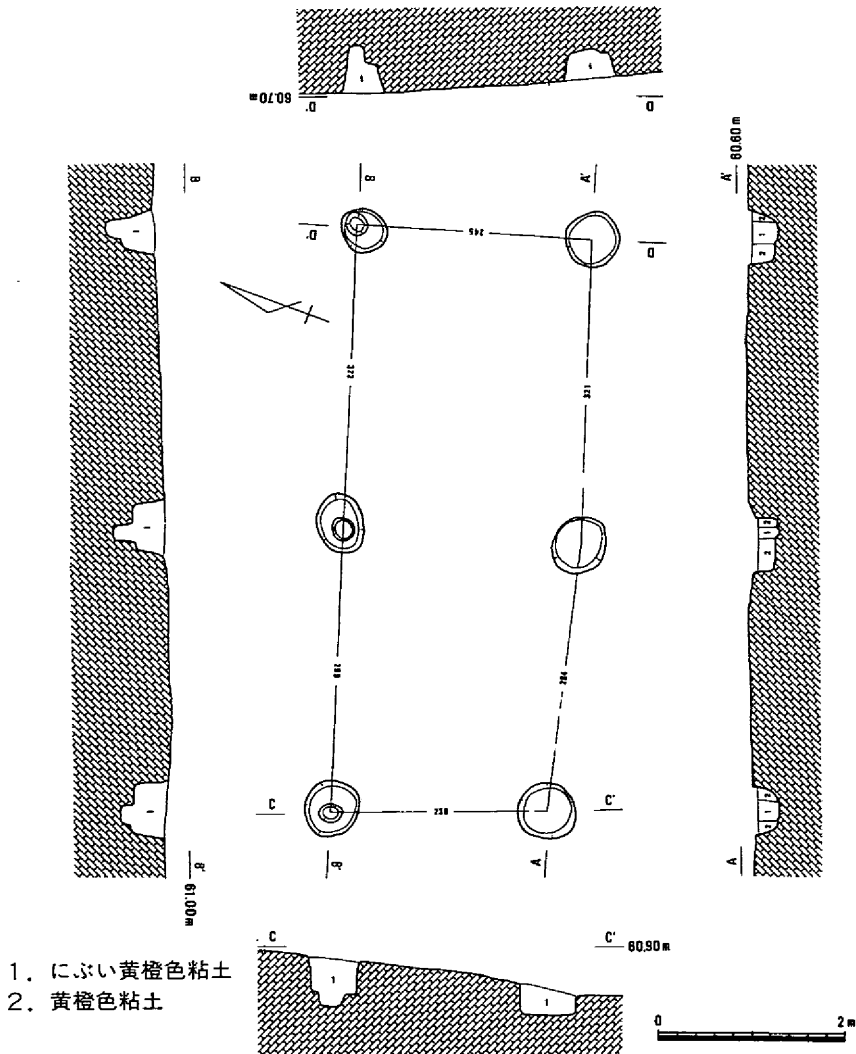
稜線から斜面にかけても多数のトレンチを設定したが、竪穴住居跡や柱穴等も検出されなかった。建物-2から100m余西方にある平坦面は用地外であり調査されていないが、若干の土器片・サヌカイト片が表採される。(正岡)



第13図 東丘陵部全体図 (1/600) ・出土遺物

遺構番号対照表

本報告書記載	発掘調査時	本報告書記載	発掘調査時
竪穴住居—1	竪穴住居—1	建 物—1	No.6 段状遺構
” —2	” —4	土 塙—1	土 塙—1
” —3	” —2	” —2	” —6
” —4	” —7	” —3	” —7
” —5	” —5	建 物—2	建 物—1



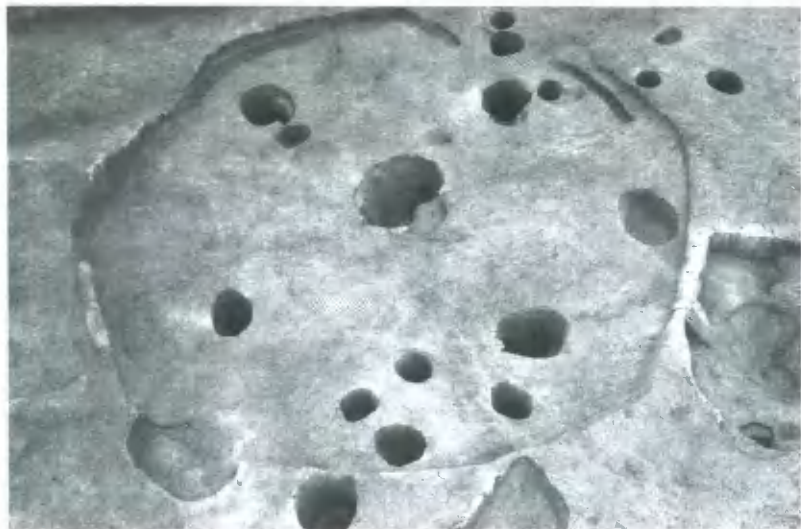
第14図 建物—2 (1/80)



1. 西丘陵部東半（西から）



2. 西丘陵部東半（西から）



1. 竪穴住居-1 (南から)



2. 竪穴住居-2 (南から)



1. 竪穴住居-5 (北から)



2. 竪穴住居-5 (西から)



1. 竖穴住居-4 (西から)



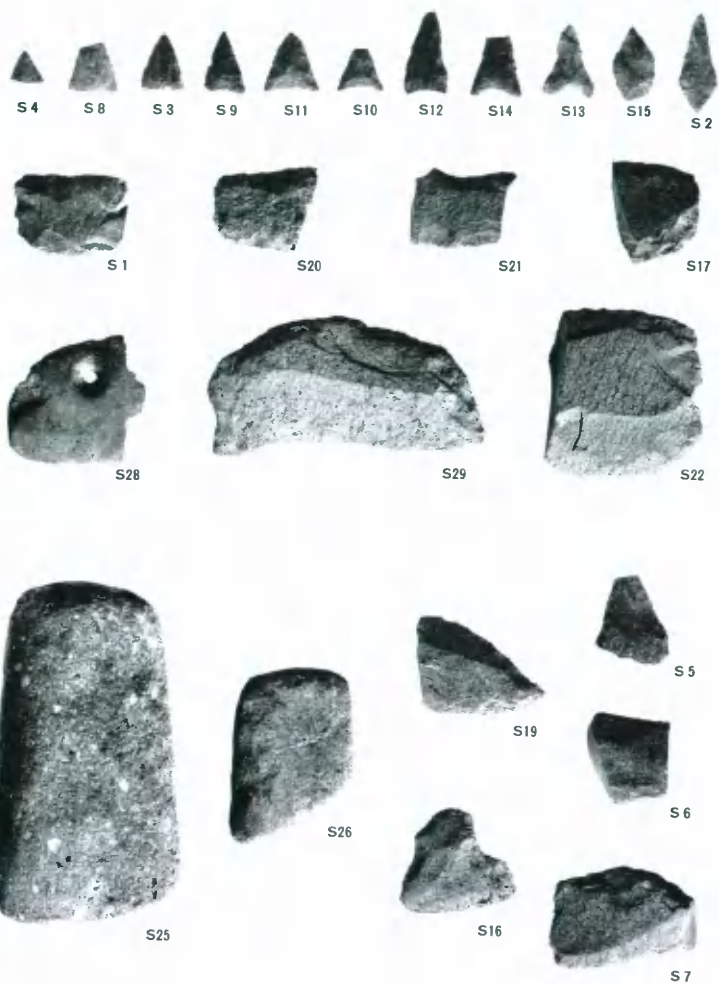
2. 土城-2・3とその周辺の遺構 (東から)



1. 建物-1 (西から)



2. 建物-2 (南から)



出土遺物 (1/2)



かみ たけ にし ぼう  
上竹西の坊遺跡

## 例 言

1. 報告する遺跡は、「上竹西の坊遺跡」で、浅口郡金光町上竹に所在する。
2. 発掘調査は、2次に分けて実施した。1次の調査は、昭和56年10月から昭和57年3月まで井上弘が担当して実施した。2次は、昭和58年4月から、昭和59年3月まで井上弘、武田恭彰が担当して実施した。
3. 熱残留磁気による年代測定は、島根大学理学部伊藤晴明、時枝克安両氏に依頼し、報文は本報告書に掲載している。
4. 掲載する遺物には番号を付した。土器類は数字のみ、土製品にはC、金属製品にはM、石製品にはSを付した。
5. 報告書の作成は、主に岡山県古代吉備文化財センターで行った。遺物の整理・実測等については、当センター職員の協力を得た。
6. 報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行のものと、岡山国道工事事務所作成のものを使用した。
7. 写真、実測図、出土遺物等はすべて文化財センターで保管収蔵している。

## 目次

第1章 歴史的・地理的環境	431
第2章 発掘調査の経緯	435
第1節 発掘調査の経過と概要	435
第2節 日誌抄	436
第3章 発掘調査の概要	441
第1節 弥生時代の遺構と遺物	441
第2節 古墳時代・古代の遺構と遺物	455
第3節 中世の遺構と遺物	504
第4章 まとめ	524
1 上竹西の坊遺跡出土の須恵器について	
2 遺跡のまとめ	
付 編 上竹西の坊遺跡から出土した焼土の熱残留磁気による年代測定	538

## 図目次

第1図 遺跡の位置と 遺跡分布図	432	平面図・断面図、出土遺物	455
第2図 岸名遺跡出土遺物	433	第24図 住居跡2 平面図・断面図	456
第3図 トレンチと調査区	438	第25図 住居跡2 出土遺物	456
第4図 阿坂調査区の位置と 周辺の地形図	439	第26図 埴輪	457
第5図 トレンチ土層断面図	440	第27図 須恵器窯と灰原	458
第6図 住居跡3、4 平面図・断面図	442	第28図 須恵器窯 最終床面平面図	459
第7図 住居跡4 出土遺物	443	第29図 須恵器窯 縦・横断面図	460
第8図 住居跡4 出土石器	444	第30図 須恵器窯 第1床面出土遺物	461
第9図 住居跡5 平面図・断面図	445	第31図 須恵器窯 最終床面出土遺物	461
第10図 住居跡5 出土遺物	445	第32図 須恵器窯 埋土出土遺物	462
第11図 住居跡6 平面図・断面図	446	第33図 須恵器窯 埋土出土遺物	463
第12図 住居跡6 出土遺物	446	第34図 須恵器窯 灰原出土遺物	464
第13図 住居跡7 平面図・断面図	447	第35図 須恵器窯 灰原出土遺物	465
第14図 住居跡 出土遺物	447	第36図 須恵器窯 灰原出土遺物(甕)	466
第15図 住居跡8 平面図・断面図	448	第37図 灰原2 全体図	468
第16図 溝13平面図	449	第38図 灰原2 土壙11、14	469
第17図 溝13出土遺物	449	第39図 灰原2 出土遺物(蓋)	470
第18図 弥生土器	450	第40図 灰原2 出土遺物(蓋)	471
第19図 弥生土器	450	第41図 灰原2 出土遺物(杯)	472
第20図 弥生土器	452	第42図 灰原2 出土遺物(杯)	473
第21図 弥生土器	453	第43図 灰原2 出土遺物(碗、皿、高杯)	474
第22図 出土石器	454	第44図 灰原2 出土遺物(高杯)	475
第23図 住居跡1		第45図 灰原2 出土遺物(平瓶、甕、長頸壺)	476
		第46図 灰原2 出土遺物(壺、蓋、その他)	477
		第47図 灰原2 出土遺物(甕)	478

第48図	灰原 2	出土遺物(甕)	479	第77図	建物 2	出土遺物	506
第49図	灰原 2	出土遺物(甕)	480	第78図	鋤先		506
第50図	灰原 2	出土遺物(甕)	481	第79図	鎌		506
第51図	灰原 2	出土遺物(甕、盤)	482	第80図	建物 2	検出面出土遺物	507
第52図	灰原 2	出土遺物(甕)	483	第81図	土壌35、36	平面図・断面図	508
第53図	灰原 2	出土遺物(硯)	484	第82図	土壌35、36	出土遺物	508
第54図	灰原 2	出土遺物(土師器甕)	485	第83図	土壌101と溝		509
第55図	土壌 1	平面図・断面図	489	第84図	土壌101	出土遺物	509
第56図	土壌 1	出土遺物	490	第85図	溝10	平面図 出土遺物	510
第57図	E 5 区	出土遺物(蓋、杯、皿)	491	第86図	墓壇17	平面図・断面図	510
第58図	E 5 区	出土遺物 (壺、甕、甌、土馬)	492	第87図	建物11	平面図・断面図	511
第59図	E 5 区	出土遺物(土師器甕、杯)	493	第88図	墓壇 1~7	平面図・断面図 出土遺物(1/4)	512
第60図	E 5 区	出土鉄器	493	第89図	阿坂古墓 8~11	平面図・断面図	513
第61図	E 5 区	出土遺物(甌)	494	第90図	阿坂古墓 12~16	平面図・断面図	514
第62図	土壌 2	平面図・断面図	495	第91図	出土遺物(中世)		515
第63図	土壌 2	出土遺物	495	第92図	出土遺物(中世)		516
第64図	土壌4、5、6	平面図・断面図	496	第93図	出土遺物(中世)		517
第65図	土壌 6	出土遺物	496	第94図	出土遺物(中世)		518
第66図	土壌12	平面図・断面図 及び出土遺物	497	第95図	出土遺物(中世)		519
第67図	土壌 8	平面図・断面図 及び出土遺物	497	第96図	仮道調査区出土遺物		520
第68図	土壌13	平面図(1/30)出土遺物	498	第97図	遺構配置図		521
第69図	土師器窯 1	平面図・断面図	499	第98図	I区墓壇配置図		522
第70図	土師器窯 1	全体図	500	第99図	仮道調査区遺構配置図		522
第71図	土師器窯 1	出土遺物	500	第100図	阿坂調査区遺構配置図		522
第72図	鍛冶炉 1(1/30)		501	第101図	須恵器分類図		525
第73図	II区	出土遺物	501	第102図	各焼土の残留磁気の方向		544
第74図	窯状遺構	平面図・断面図	501	第103図	残留磁気の平均方向と西日本における過去2000年間の地磁気永年変化曲線(広岡)		544
第75図	鍛冶炉 2	平面図・断面図	501				
第76図	建物 2	平面図・断面図	505				

## 図 版 目 次

図版 1—1	調査前の遺跡の遠景	図版 5—1	住居跡 5 の全景
—2	自動車道開通後の遺跡の遠景	—2	住居跡 6 全景
図版 2—1	トレンチの土層断面(II区)	図版 6—1	住居跡 2、7
—2	トレンチの土層断面(II区)	—2	住居跡 7
図版 3—1	トレンチの土層断面(III区)	図版 7—1	住居跡 2 と溝状遺構
—2	トレンチ調査の作業風景	—2	住居跡 2 の全景
図版 4—1	住居跡 3、4 の全景	図版 8—1	住居跡 8 の全景
—2	住居跡 4	—2	製塩土器の出土状態

図版9—1	住居跡1の全景	図版27	住居跡4の出土遺物
—2	住居跡1のカマド	図版28—1	住居跡4の出土石器
図版10—1	溝3	—2	石器
—2	溝4	図版29	住居跡5 出土遺物
図版11—1	須恵器窯の検出状態	図版30	弥生土器
—2	須恵器窯の 最終床面の検出状態	図版31	弥生土器
図版12—1	須恵器窯の断面	図版32	須恵器窯出土遺物
—2	須恵器窯最初の床面	図版33	灰原2(1~7) 須恵器窯(8、9)出土遺物
図版13—1	須恵器窯と灰原	図版34	灰原2 須恵器窯出土甗
—2	須恵器窯から見た灰原	図版35	灰原2 出土遺物
図版14—1	灰原2の遺物出土状態	図版36	灰原2 出土遺物
—2	灰原2の排水溝	図版37	灰原2 出土遺物
図版15—1	土師器窯とその前面(西側)	図版38	灰原2 出土遺物
—2	土師器窯とその前面(東側)	図版39	灰原2 出土遺物
図版16—1	土師器窯と遺物の出土状態	図版40	灰原2 出土遺物
—2	土師器窯と土層断面	図版41	灰原2 出土遺物
図版17—1	窯状遺構(北から)	図版42	灰原2 出土遺物
—2	窯状遺構(南から)	図版43	灰原2 出土遺物
図版18—1	土壙4、5、6	図版44	灰原2 出土遺物
—2	土壙7	図版45	灰原2(5~8) 出土遺物、青磁
図版19—1	土壙2遺物の出土状態 (西から)	図版46	住居跡2(9~11)土壙13(7)土壙6 (8)灰原2(1~6)出土遺物
—2	土壙8の全景(西から)	図版47	土壙2(1~9)土壙8(10、11) 出土遺物
図版20—1	土壙16の全景(南から)	図版48	E5区(1~14、17) 土師器窯(15、16)出土遺物
—2	土壙12の全景(北東から)	図版49	E5区 出土遺物
図版21—1	鍛冶炉(南から)	図版50	建物2 検出面の遺物
—2	土壙35、36の全景(南から)	図版51	建物2 検出面の遺物
図版22—1	建物2の全景(北から)	図版52	I区墓壙、II区出土遺物
—2	建物1の全景(北東から)	図版53	仮道調査区出土遺物
図版23—1	中世土壙墓の全景(東から)	図版54	出土遺物(中世)
—2	中世土壙墓の 遺物出土状態(東から)	図版55	出土遺物(中世)
図版24—1	仮道調査区の全景	図版56	出土遺物(中世)
—2	阿坂調査区の全景	図版57	出土遺物(中世)
図版25—1	1区墓壙(1~5)、阿坂調査区墓壙 (6)、仮道調査区土壙(7)	図版58	出土遺物(中世)
図版26—1	調査区の全景(西から)		
—2	須恵器窯の発掘風景		

## 表 目 次

表1 石器一覧表	529	表2 須恵器一覧表	530
----------	-----	-----------	-----

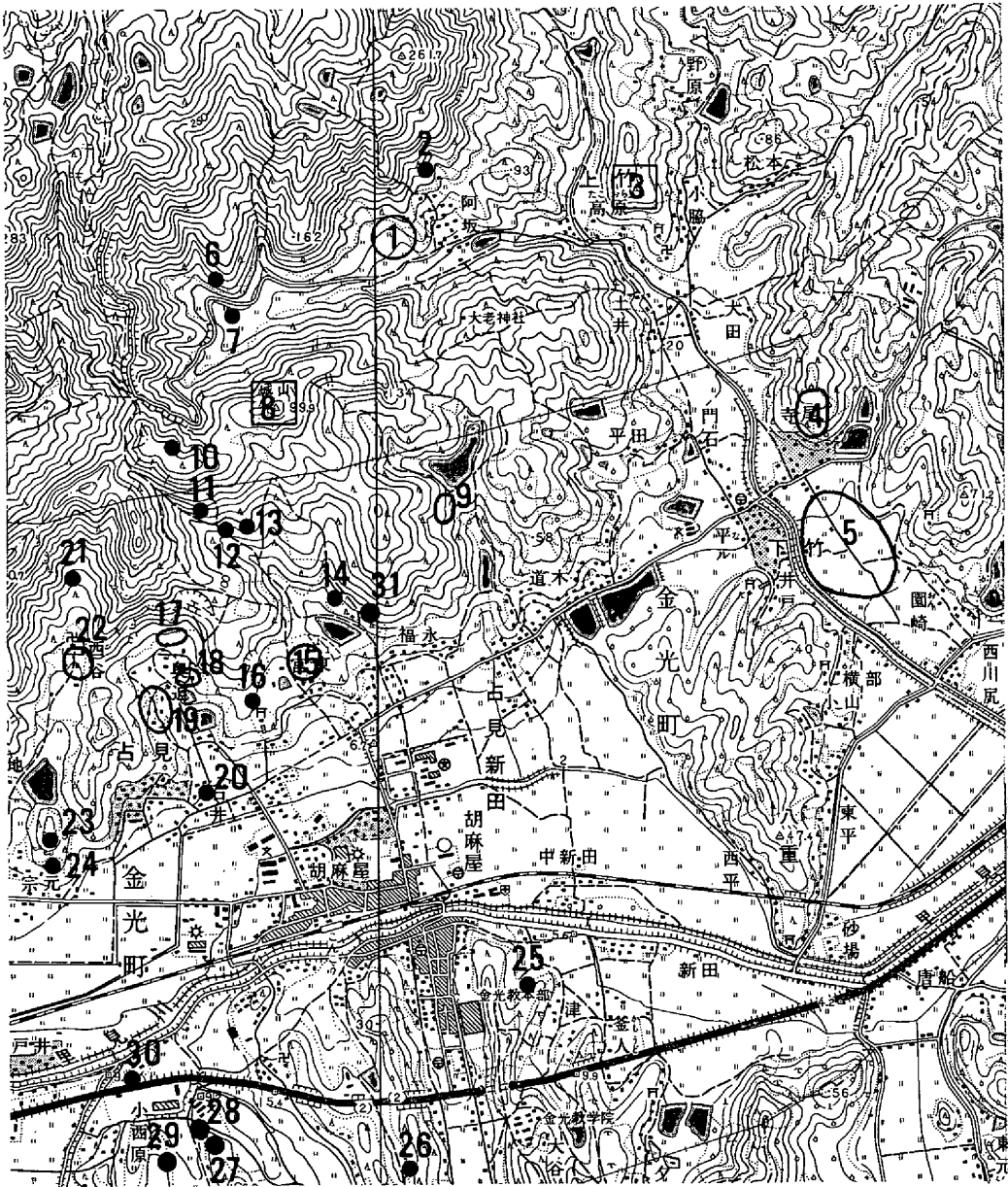
## 第1章 歴史的・地理的環境

上竹西の坊遺跡は、浅口郡金光町上竹に所在するもので、周囲は山に囲まれている。金光町は、岡山県南部のやや西寄りに位置するもので、北は矢掛町、西は鴨方町、東は倉敷市と接する。矢掛町との境は、標高200~300mの遙照山、阿部山等の山が連なり、南は、100~200mの丘陵が連なり、それを越すと海岸に出る。町のほぼ中央に里見川が西から東に流れており、流域は平野をなしている。この平野には、「新田」の地名が見られているように、中近世頃まで海水が湾入していたものと考えられる。また、町域の東側には、竹川が、北から南へと流れており、その周囲も小さな平野を形成している。上竹西の坊遺跡は、この川の上流の北岸に位置するもので、背後の遙照山から南に延びる山裾の南斜面に立地するものである。

金光町内では、現在まで先土器時代の遺跡、遺物は発見されていない。縄文時代の遺跡としては、宮原遺跡が古くから知られている。同遺跡は、町の南部の丘陵部に位置するもので、縄文時代後期の遺跡である(註1)。また新幹線の建設工事に伴い、加賀池遺跡の調査が実施され、縄文土器の出土を見ている。遺跡は、同町占見新田に所在するもので、数片ではあるが、縄文時代早期の山形押型文土器が出土しており、金光町では最も古い遺物となるであろう。この遺跡から出土した縄文土器は、そのほとんどが後期のものである(註2)。同町下竹にあるみなど橋東地点からも縄文土器(後期)が採集されている(註3)。また、同町上竹高原(第1図3)からも縄文土器の破片が出土している。

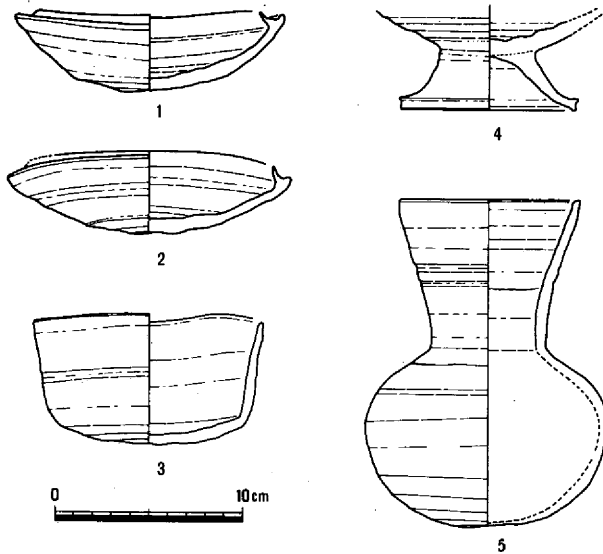
弥生時代の遺跡は、里見川、竹川を望む低丘陵上に発見されている。発掘調査によるものがないため、具体的な遺跡の内容は不明であるが、丘陵上に立地する集落遺跡と考えられる。その中であって東郷遺跡(第1図5)は、竹川流域の沖積地で遺物が発見されており、竹川により形成された微高地上に立地する遺跡の可能性がある。また、この遺跡の西端付近のみなど橋東端では、先に述べたように、縄文土器片も出土しており、縄文時代後期頃には、周辺は比較的安定した沖積地を形成したものと推定される。

古墳時代になると、平野を望む丘陵に古墳が築造される。金光町で発見されている古墳は、そのほとんどが横穴式石室を主体に持つ古墳である。横穴式石室も大規模なものはなく、群集して発見されるものでも数基の単位であることから、古墳時代の集落としては、小さな単位であったと考えられる。同時代の生産遺跡として須恵器の窯跡がある。窯跡が特に集中して発見されるのは、同町須恵を中心とした地域で、現在までに10数基が確認されている。これら窯跡は、表面採集資料によれば、6世紀末から7世紀中頃の時期が考えられる。第2図は、同町須恵岸



第1図 遺跡の位置と遺跡分布図 (1/25000)

- |            |              |           |           |
|------------|--------------|-----------|-----------|
| 1. 上竹西の坊遺跡 | 9. 散布地       | 17. 散布地   | 25. 散布地   |
| 2. 阿坂古墳    | 10. 加賀谷古墳群1号 | 18. 奥迫遺跡  | 26. 窠跡    |
| 3. 上竹古城跡   | 11. 加賀谷古墳群4号 | 19. 奥迫西遺跡 | 27. 窠跡    |
| 4. 寺尾貝塚    | 12. 加賀谷古墳群3号 | 20. 厄神塚古墳 | 28. 道木古墳  |
| 5. 東郷遺跡    | 13. 加賀谷古墳群2号 | 21. 中世墓   | 29. 窠跡    |
| 6. 大石古墳    | 14. 加賀谷古墳群5号 | 22. 散布地   | 30. 小西原貝塚 |
| 7. カナク口田遺跡 | 15. 散布地      | 23. 丸山古墳  | 31. 加賀池遺跡 |
| 8. 加賀山城跡   | 16. 古墳       | 24. 古墳    |           |



第2図 岸名遺跡出土遺物

名に所在する町立吉備小学校の校庭拡張工事に伴って出土した須恵器である(註4)。1、2は、杯身で口径は、14~15cmを測るもので、立ち上り部はあまり高くなく、底部外面には回転ヘラケズリが施されており、焼成は良好であるが歪みが激しい。3は、無台の杯身で、口径は12cmを測り、体部から口縁部はほぼ垂直に立ち上がるもので、体部外面は、回転ヘラケズリが施されている。焼成は良好であるが、口縁部は大きく歪んでいる。4は、

高杯である。5は、壺で、ほぼ球形の体部からわずかに外傾しながら立ち上る口縁部をもつ。底部には、回転ヘラケズリが施されている。これらの遺物には、使用痕が見られる。また、同小学校のプール建設に伴って調査された岸名遺跡(註5)からは、7世紀初頭から中葉にかけての住居跡が11軒確認されている。また隣接して須恵器窯跡が確認されていることもあって、数軒は須恵器の工房の可能性があると指摘されている。これら須恵器窯跡群の一端として、上竹西の坊遺跡発見の須恵器窯跡も存在するものであろう。

奈良時代の遺跡としては、同町地頭下大三宅に所在する占見廃寺がある。周辺からは瓦の出土が知られており、礎石も7個の存在が確認されている。また近くには、数基の瓦窯跡も確認されている。東郷遺跡からは、奈良時代の須恵器も採集されているが、現在では同時代の遺物の発見は少ない。しかし、寺院跡、瓦窯などが発見されていること、『和名抄』に「浅口郡占見郷」の記載が見られ、それが現在の金光町占見に比定されることを考えれば、奈良時代にはまとまった集落が推定される。平安時代には、遙照山の山頂に山岳寺院が建立されている。

中世になると、集落の在方は明らかではないが、安芸守山城跡、竜王山城跡、鬼打城跡といった山城が山陵を利用して築城されている。

金光町内の遺跡の密度は高くはないが、各時代の遺跡が、里見川、竹川の周辺に集中して見られることから、それら河川を見下す丘陵上や台地上は、古くから生活の場所として開かれてきたものと推定される。  
(武田恭彰, 井上弘)



註

- 註1 『岡山県遺跡地図』第1分冊 岡山県教育委員会 昭和48年3月
- 註2 伊藤晃、池畑耕一「加賀池・宮地池遺跡及び益坂散布地の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 岡山県教育委員会 昭和49年3月
- 註3 藤田憲司・中山頼夫「倉敷市玉島地区とその周辺の新発見縄文時代資料」『倉敷考古館研究集報』第18号 1984年4月
- 註4 柳瀬昭彦氏の厚意により、実測、掲載した。
- 註5 柳瀬昭彦 「岸名遺跡発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』9 岡山県教育委員会 1979年3月

## 第2章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査の経過と概要

金光町上竹阿坂に所在する上竹西の坊遺跡は、『岡山県遺跡地図』(昭和41年3月)(註1)によれば「西の坊窯跡群」とし3基が所在する旨が記されている。それが、『岡山県遺跡地図』第1分冊(昭和48年)(註2)によると、遺跡名を「阿坂遺跡」とし、遺跡の種類を窯跡としており、現状で消滅となっている。その後、文化課職員と山陽自動車関連で鴨方町内を発掘中の職員が予定ルート内を踏査したところ土器の散布が認められたため、新たに遺跡地とし確認調査を実施することになった。

確認調査は、昭和56年10月から昭和57年3月まで実施した。確認調査の対象面積は21600㎡あり、その範囲内を西端の丘陵部をⅠ区、斜面の水田部は、中央の川を境に西をⅡ区、東をⅢ区として第3図のようにトレンチを設定した。トレンチ調査の結果は、Ⅰ区では土壌を確認したため第3図アミ目の部分を拡張して調査した。調査の結果、墓壙7個を検出した。Ⅱ区はトレンチ調査の結果、南東に下る斜面を呈しており、土は砂質である。出土遺物もあるが、多くは流入物と考えられる。地形的には中央の川に向かって下っており礫等を含む二次堆積層の様相を呈しているが、最下段において、一部平坦面が見られ、奈良時代末の須恵器を出土する部分があった。そこで、その部分(第3図Ⅱ区アミ目)を拡張して調査した。調査の結果、鍛冶炉1基を検出した。Ⅲ区においては、各トレンチから多くの出土遺物があり、須恵器窯の存在も確認した。トレンチのⅢ-3-4は7層が須恵器窯の灰原層である。またトレンチⅢ-5-1の14層は平坦な造成面であり、中世の遺構の存在を推測させたので、Ⅲ区は全体を調査することとし、昭和58年4月から昭和59年3月まで調査した。

阿坂調査区は、古墳が存在するものとして確認調査に着手したが、古墳は確認されず、方形の土壌を検出した。そこで、第4図のアミ目部分を調査し、墓壙9個を検出した。

#### 註

註1 『岡山県遺跡地図』岡山県教育委員会 昭和41年3月

註2 『岡山県遺跡地図』第1分冊 岡山県教育委員会 昭和48年3月

## 第2節 日誌抄

### 昭和56年

- 10月1日～12日 発掘調査の準備、器材の整備と点検
- 13日～16日 阿坂古墳の調査、土壌の検出
- 19日～23日 土壌の調査、実測、写真撮影
- 24日～29日 上竹西の坊遺跡の調査、墓塚の確認
- 10月30日 III区 窯跡の確認
- 11月4日～9日 III区の調査
- 10日～30日 II区の調査
- 12月1日～14日 III区の調査 須恵器、弥生土器出土、灰原層の確認
- 15日～25日 仮道調査区の調査、柱穴、溝、住居跡、土壌の検出

### 昭和57年

- 1月5日～14日 仮道調査区南西斜面の掘り下げ、住居跡の掘り下げ、II区トレンチの掘り下げ
- 1月18日～30日 II区トレンチの掘り下げ、仮道調査区、実測 写真撮影、III区トレンチ5の設定、掘り下げ、焼土面の確認
- 2月1日～15日 III区トレンチの掘り下げ、I区土壌検出部分の調査 拡張区の排土、墓塚の調査
- 16日～27日 II区拡張区の調査、茶褐色土の掘り下げ
- 3月1日～15日 II区拡張区の調査、鍛冶炉の調査
- 16日～30日 トレンチの埋めもどし、器材の撤収

### 昭和58年

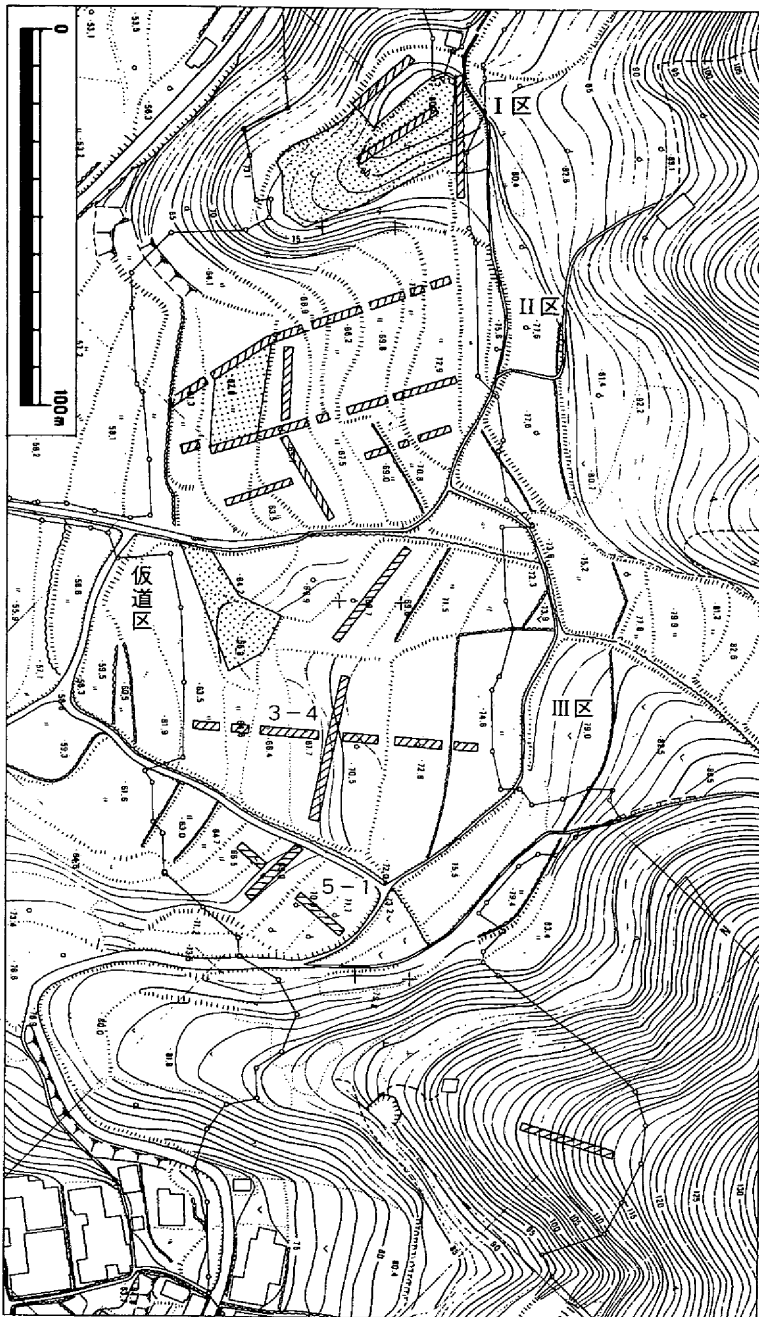
- 4月1日～20日 調査の準備、発掘資材の点検、作業員の募集
- 21日～30日 発掘資材の搬入、南西側斜面から調査に着手
- 5月2日～9日 南西斜面2区の調査
- 10日～15日 南西斜面1区の調査
- 16日～31日 南西斜面2区3区の調査、2区で柱穴、溝の検出
- 6月1日～5日 2区の遺構の調査
- 6月6日～9日 C4区表土除去、窯跡の確認
- 10日～23日 C6区トレンチを設定、確認調査
- 24日～30日 C4区掘り下げ

- 7月1日～9日 B5区表土の排土  
 11日～23日 D5区の表土除去、遺構の検出  
 25日～30日 D5区の遺構の検出、B4区表土除去  
 8月1日～15日 B4区表土除去、D5区遺構の検出作業、窯跡の検出、遺構の掘り下げ  
 16日～31日 須恵器窯の調査、熱残留磁気の調査  
 9月1日～14日 C4区遺物の検出、実測、写真撮影、B3区表土除去  
 16日～30日 C4区遺物の取り上げ  
 10月1日～15日 C4区灰原の調査、遺物の実測、土壌の調査  
 17日～31日 C4区灰原遺物の実測、取り上げ、灰原の下層の調査、土壌、溝、住居跡の検出  
 11月1日～15日 B4区住居跡を確認する。住居跡の調査、住居跡2と周辺遺構の調査  
 16日～30日 土壌11が溝になる。C3区表土除去、須恵器窯灰原の調査  
 12月1日～15日 須恵器窯灰原の調査、C3遺構の検出、掘り下げ  
 16日～27日 C3区遺構の検出、掘り下げ、D4区の調査 遺構の検出。

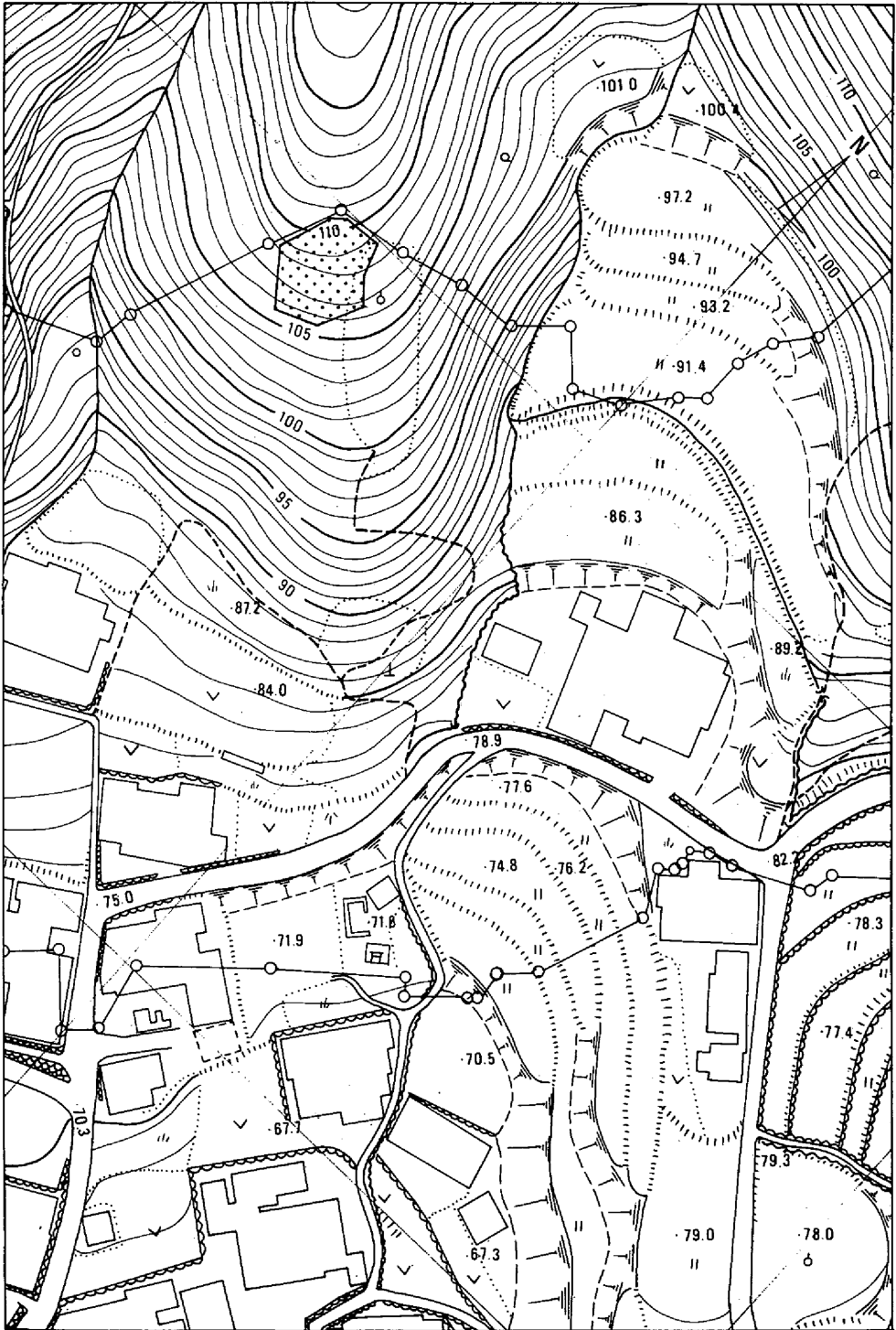
昭和59年

- 1月6日～10日 須恵器窯灰原の調査  
 11日～24日 D4区、土壌の検出、掘り下げ、中世の遺構の検出  
 25日～31日 B3区表土除去、D3区遺構の検出、掘り下げ  
 2月1日～11日 須恵器窯灰原の調査、灰原除去後弥生時代の遺構の検出 住居跡8調査  
 13日～29日 C3区遺構の検出作業、D4区遺構の検出と掘り下げ、D2区表土除去、C4区、D2区遺構の検出と掘り下げ  
 3月1日～14日 C2区遺構の掘り下げ、実測、写真撮影、C4区須恵器窯の実測、B2区掘り下げ、焼土層の検出  
 3月15日～23日 B2区焼土層直下で建物の検出、実測、写真撮影、C4区、須恵器窯写真撮影、B3区土壌の掘り下げ、実測、写真撮影  
 3月26日 発掘調査を完了し、発掘資材等の撤収

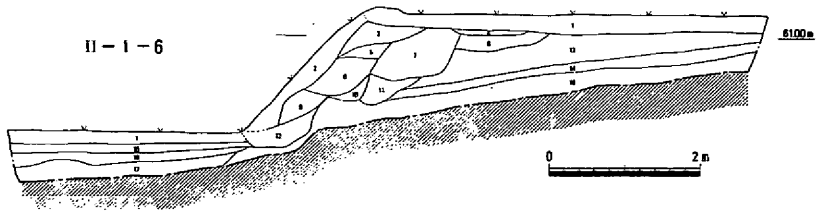
(井上)



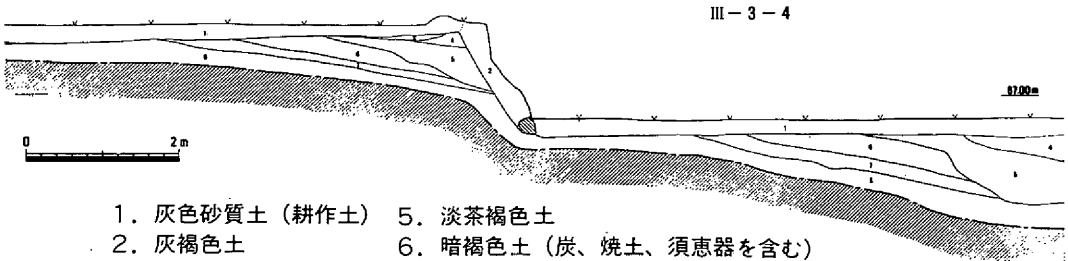
第3図 トレンチと調査区(1/2000)



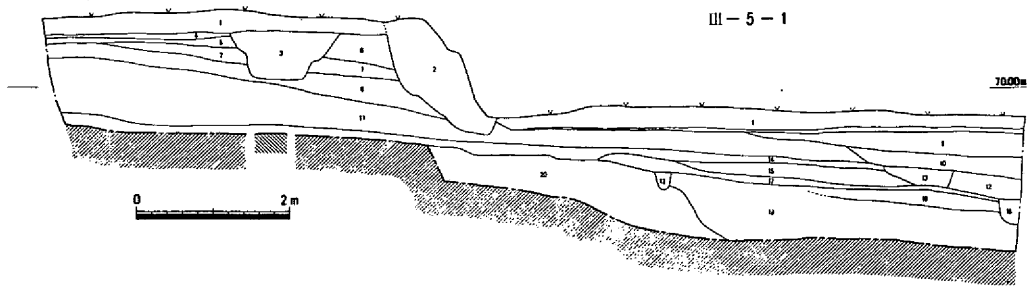
第4図 阿坂調査区の位置と周辺の地形図 (1/1000)



- |                  |                           |
|------------------|---------------------------|
| 1. 灰色砂質土 (耕作土)   | 10. 灰褐色土                  |
| 2. 灰褐色土          | 11. 茶褐色土 (灰褐色土を含む)        |
| 3. 黄褐色土 (花崗岩風化土) | 12. 茶褐色土                  |
| 4. 淡灰色土          | 13. 淡茶灰褐色砂質土 (Fe、マンガンを含む) |
| 5. 茶褐色土          | 14. 茶褐色砂質土 (マンガンを含む)      |
| 6. 黄褐色土 (花崗岩風化土) | 15. 淡灰色砂質土                |
| 7. 茶褐色土          | 16. 黄茶褐色土 (Fe多い)          |
| 8. 淡茶褐色土         | 17. 淡黄灰褐色砂 (Fe、マンガンを含む)   |
| 9. 淡茶褐色土         | 18. 淡茶褐色土                 |



- |                |                       |
|----------------|-----------------------|
| 1. 灰色砂質土 (耕作土) | 5. 淡茶褐色土              |
| 2. 灰褐色土        | 6. 暗褐色土 (炭、焼土、須恵器を含む) |
| 3. 灰茶褐色土       | 7. 黒色土                |
| 4. 暗褐色土        | 8. 茶褐色土               |



- |                       |                    |
|-----------------------|--------------------|
| 1. 灰色～灰褐色土 (耕作土)      | 11. 茶褐色土           |
| 2. 淡茶黄褐色 (少し明るい)      | 12. 淡黄茶褐色          |
| 3. 灰褐色土 (耕土に黄褐色土が混じる) | 13. 黄褐色土           |
| 4. 赤褐色土 (鉄分多い)        | 14. 茶褐色土           |
| 5. 茶褐色土               | 15. 黄茶褐色           |
| 6. 淡茶黄褐色土             | 16. 淡褐色土 (黄褐色土を含む) |
| 7. 淡茶褐色               | 17. 淡黄褐色土          |
| 8. 明茶褐色               | 18. 褐色土 (黄褐色土を含む)  |
| 9. 茶褐色土 (少し明るい)       | 19. 褐色土            |
| 10. 茶褐色土              |                    |

第5図 トレンチ土層断面図 (1/100)

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 弥生時代の遺構と遺物

#### 住居跡3 (第6図)

住居跡の北側と西側の壁体溝の一部をL字状に検出したもので、住居跡全体の規模は不明であるが方形を呈するものである。床面上においても柱穴は検出されなかった。残存する溝の長さは、北辺が2.5m、西辺が3.1mである。住居跡4と重複するものであるが、住居跡4より新しいと考えられる。

#### 住居跡4 (第6図)

住居跡3と同じく南東部分を流失しているため、全体の規模は不明であるが、短辺の最大幅5.5m、長辺は約8mまでを検出した。壁に沿っては幅の広い溝がめぐる。住居跡の平面形は長方形を呈するものである。床面には柱穴は検出されなかったが、2箇所に火所を検出した。

#### 出土遺物 (第7図)

甕(7~8)は、外方に大きく聞き口縁部の端部が少し肥厚するもので、胴部内面にはクシによるヨコナデが見られる。頸部には貼付凸帯の見られるものもある。14は高杯で、杯部の中央は円板充填によるもので、外面にはヘラミガキが見られる。脚部は、端部を欠失するものであるが、欠失面を調整している。17は壺の口縁部で、短かく上方に立ち上るものである。頸部には貼付凸帯がめぐる。20~24は脚端部である。いずれも三角透が見られるが、透しが貫通するものはない。18は土器の胴部と再利用した紡錘車の未成品である。小孔を両側から穿つものであるが貫通はしていない。

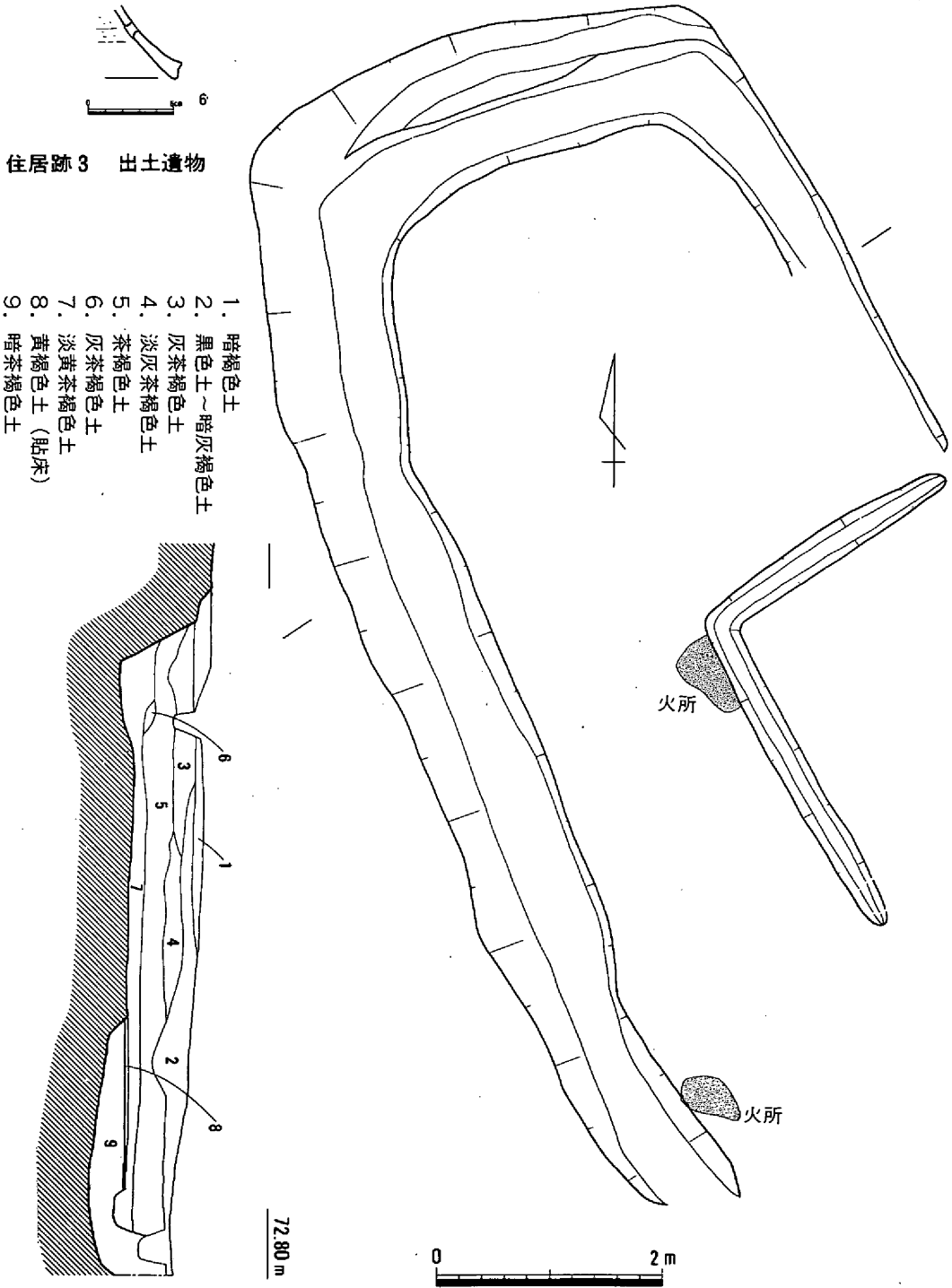
#### 分銅形土製品

3個体が出土した。C1は、上縁に沿って重弧文が施されている。くりこみ部に沿ってはクシ描文とその両側を刺突文で飾った文様が描かれている。上縁部には、裏面に向けて5個の貫孔が穿たれている。また、くりこみ部にも重弧文が施されている。C2は、表面がわずかに凸状である。くりこみ部には、クシ状工具による連続刺突文が見られる。破損する上端部にも同じ刺突文が見られる。C3は、表面がわずかに凸状を呈するものである。くりこみ部にそっては、クシ描文とその両側を刺突文で飾る文様が施されている。

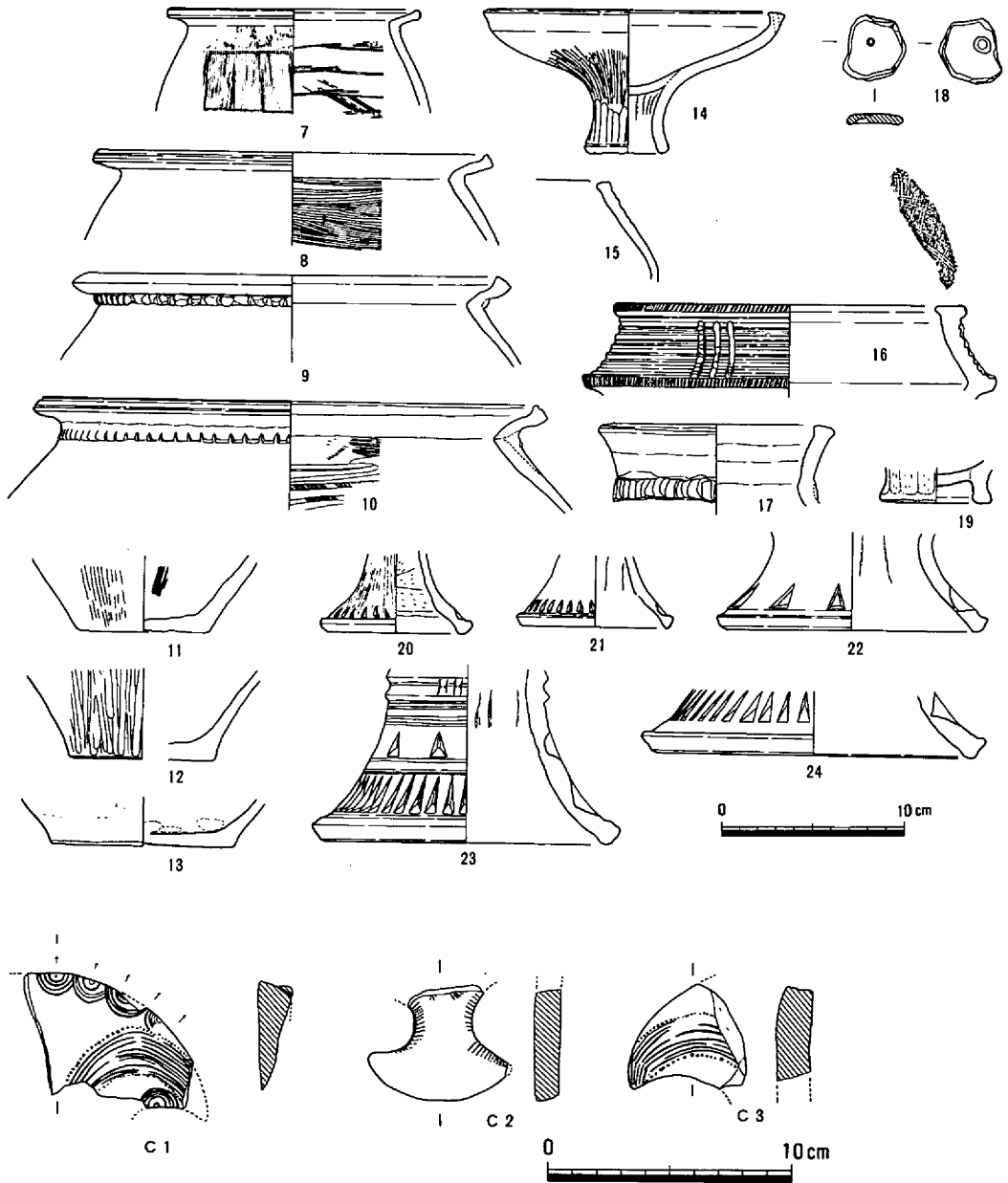
#### 石器 (第8図)

S1は平基式の石鏃で、ほぼ二等辺三角形状を呈する。S2・S3は凹基式の石鏃である。





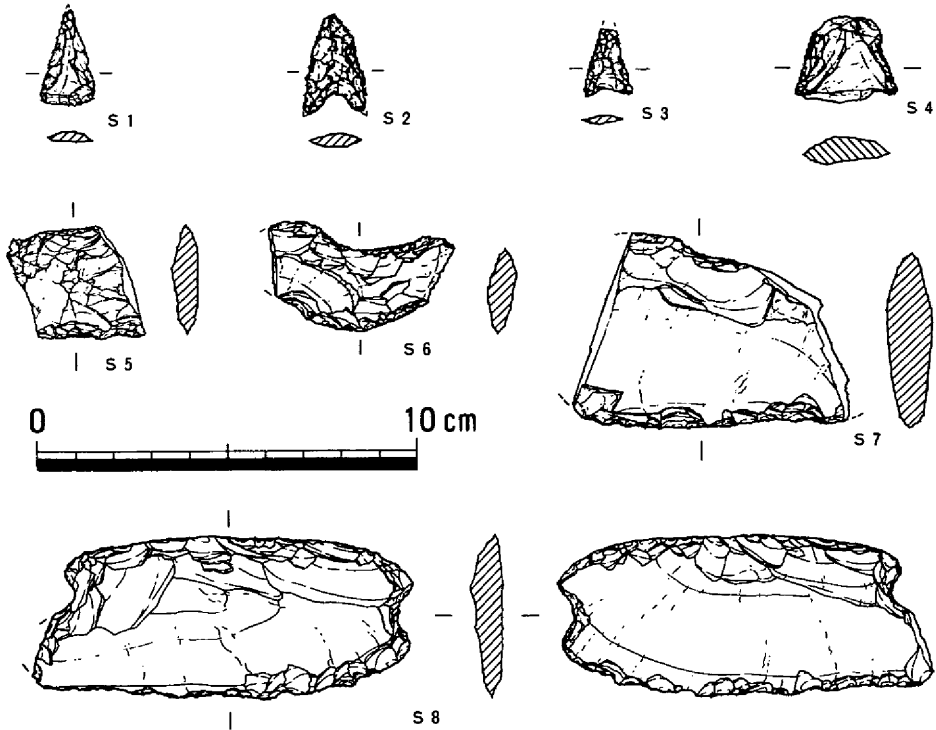
第6図 住居跡3・4 平面図・断面図 (1/60)



第7図 住居跡4出土遺物 (1/4・1/3)

いずれも厚さは薄く作られており、刃部は、両側から敲打が加えられている。S 7、8は石包丁で、S 8は完形品である。両側にえぐりが見られる。大きくはぎ取られた石材の縁にこまかく敲打し刃を付けている。

住居跡の時期は、弥生時代中期の中頃を少し下る時期と考えられる。



第8図 住居跡4出土石器(1/2)

#### 住居跡5 (第9図)

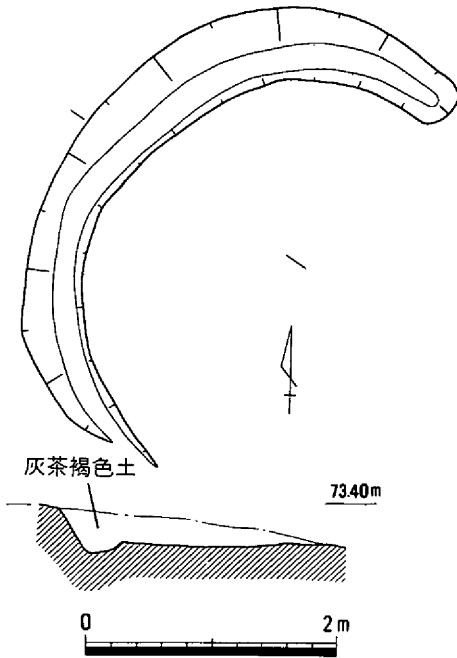
住居跡4の北約8m位置において検出した。直径約4mを測り、円形を呈する住居跡と考えられる。この住居跡も、東半を流失しており全体は不明である。西半側に壁体とそれに沿うやや幅の広い溝を検出した。床面においては柱穴その他のものは検出されなかった。

#### 出土遺物 (第10図)

25は壺である。口縁部が外方に開き、端部が上方に肥厚する。端部外面には3本の浅い凹線が見られる。26は蓋である。「八」字状に開く体部とその端部は面をもつ。体部外面は全体にヘラミガキが見られる。内面も口縁部付近にヨコ方向のヘラミガキが見られる。27、28は脚部である。直線的に開く脚部は、その端部が少し肥厚する。29、30、33は甕である。外方に折れ曲った口縁部は、その端部が上下に肥厚する。33は、外面にタテ方向のハケナデが見られ、肩部を少し下った所にクシ状工具による刺突文が施されている。31、32は底部で、外面にタテ方向のヘラミガキが見られる。住居跡の時期は、弥生時代中期後半と考えられる。

#### 住居跡6 (第11図)

住居跡4と住居跡5の間で検出した。推定径約7mの円形を呈する住居跡で、わずかに立ち



第9図 住居跡5平面図・断面図 (1/60)

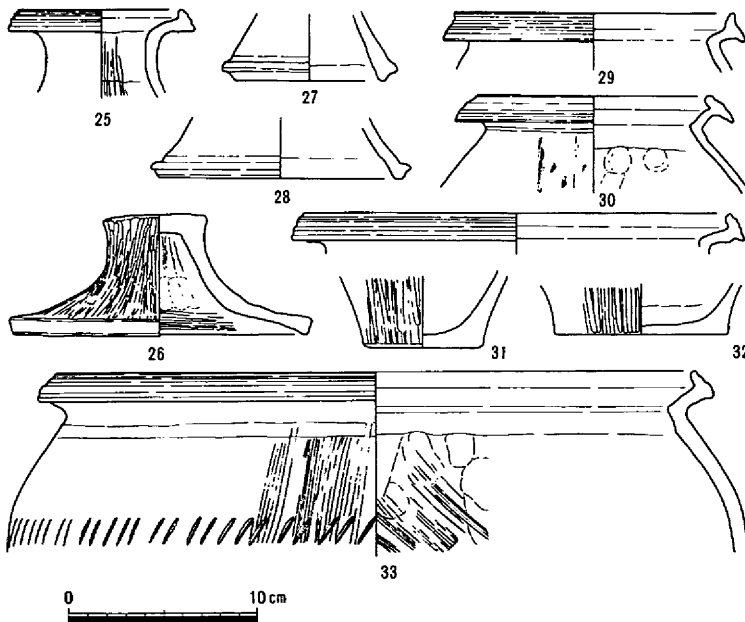
上の壁体とそれに沿う溝を検出した。床面上には柱穴は検出されなかった。住居跡のほぼ中央付近において火所を1個所検出した。東半は斜面のため流失しており、約半分を調査した。

出土遺物 (第12図)

34は皿状のもので大きく外方に開き、直線的に延びる。端部外面は面をもつ。内面にはヘラミガキが見られる。35は甕の口縁部で、外方に開いた口縁端部は上下に肥厚する。口縁端部外面には浅い凹線が見られる。住居跡の時期は、弥生時代中期後半と考えられる。

住居跡7 (第13図)

住居跡と溝とが重なるものと考えられる。住居跡は南半分は欠失しており、溝のみを検出した。北辺において15cm程度に立ち上

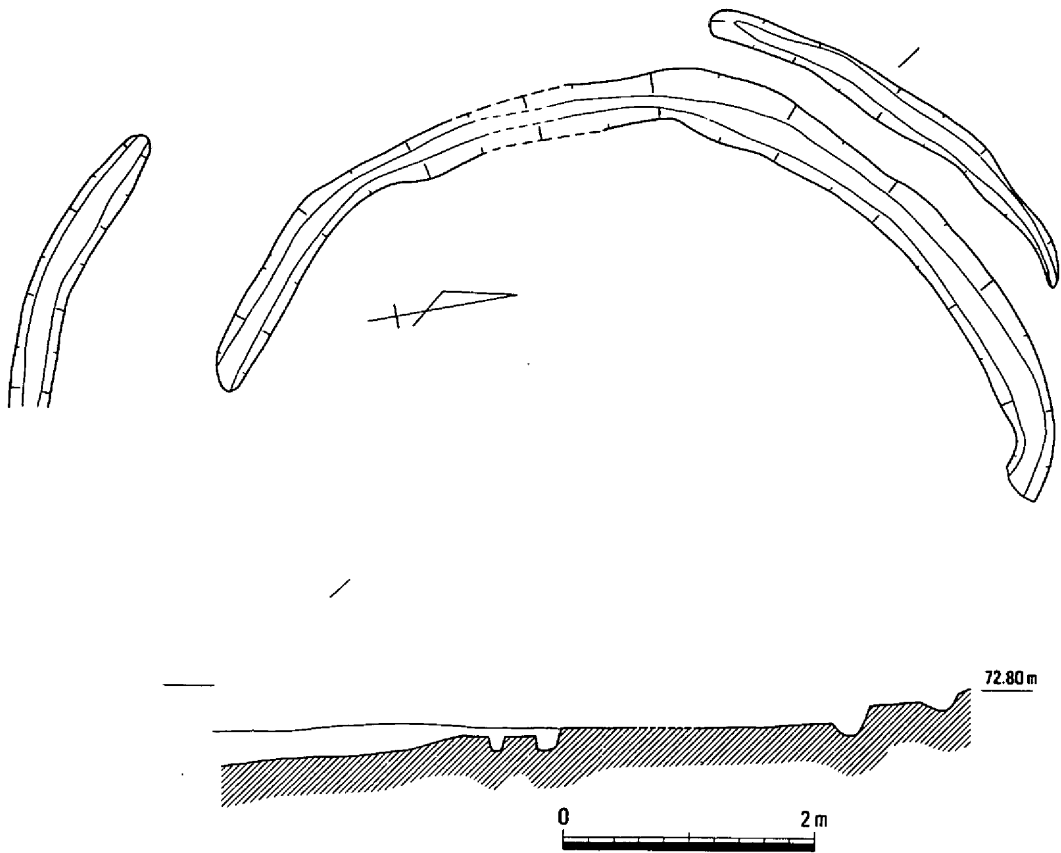


第10図 住居跡5出土遺物 (1/4)

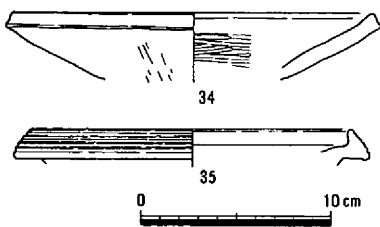
る壁体を検出した。住居跡の最大幅は3.8m、西側の溝は2.8mまでを検出した。床面には住居跡に伴うものは何も検出されなかった。

出土遺物 (第14図)

36は、壺の口縁部である。ほぼ水平に延びた口縁部の端部は



第11図 住居跡6 平面図・断面図 (1/60)



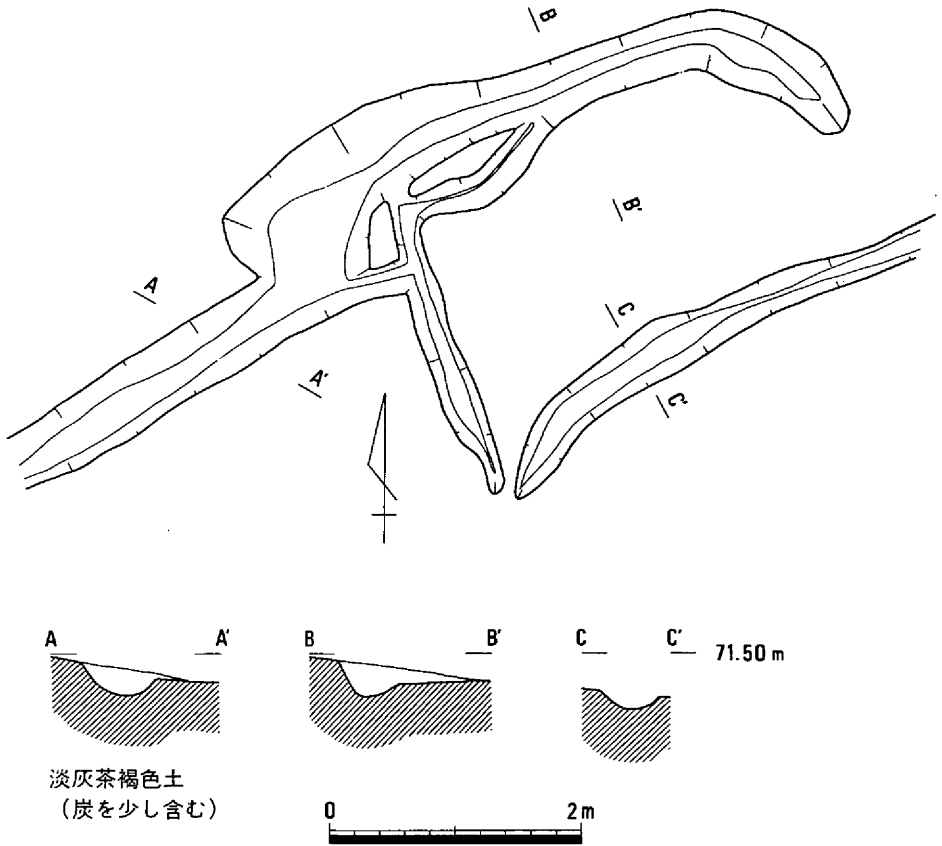
第12図 住居跡6 出土遺物 (1/4)

少し肥厚する。口縁部内面にはへら描による斜格子が施されており、端部外面にはクシ状工具による刺突文が見られる。37は、高杯である。口縁部は外方へ水平に広がるものであるが、欠失している。杯部の内外面はへらミガキが全体に見られる。38は、甕である。外方に開いた口縁部の端部が少し肥厚する。外面には、タテ方向のへらミガキが見られる。住居跡の時期は、弥生時代中期中頃を少し下る時期と考えられる。

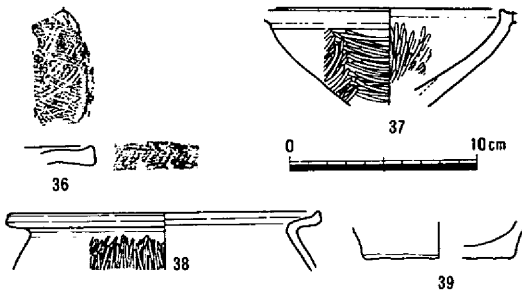
(井上)

住居跡8 (第15図)

住居跡8はD3グリッドの北西隅に位置し段状に削平された平坦部に約半分が残存している。直径約6mを測る円形を呈する住居跡である。壁は最も高い部分で35cmが残り南半分は流出し



第13図 住居跡7平面図・断面図 (1/60)



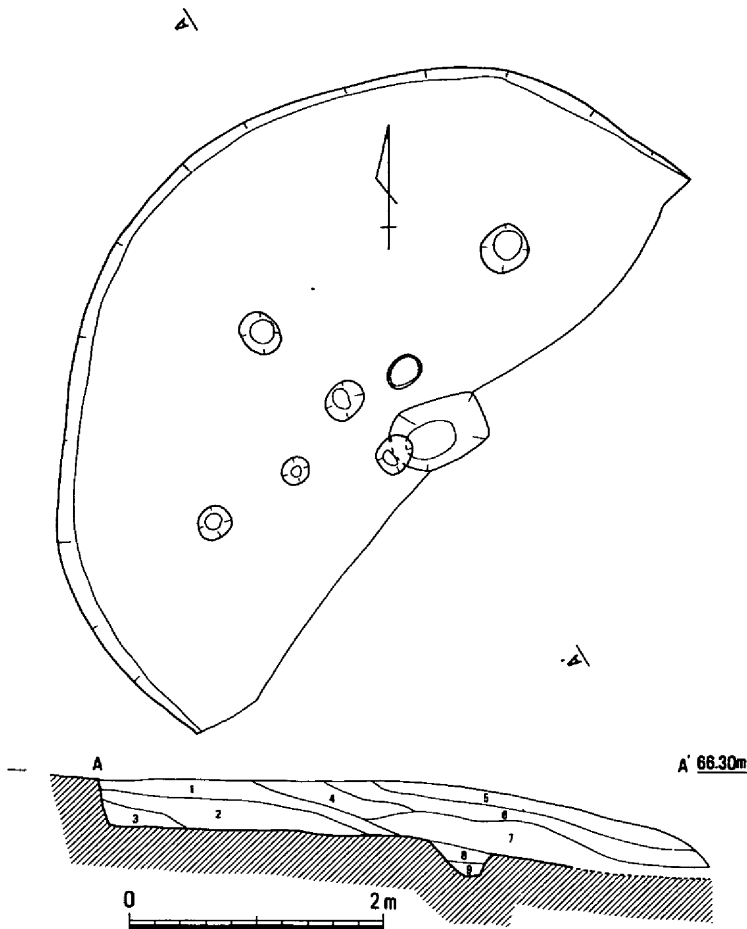
第14図 住居跡7出土遺物 (1/4)

た後、削平されている。柱穴は3本確認でき深さは約30cmである。また中央部には炭、焼土を含む楕円形のピットをもつ。壁体溝は確認できなかった。床面はあまり固く締ったものではなく炭、焼土が若干散っている。遺物はほとんど出土せず図示し得たものはないが、小片の特徴などからこの住居跡の時期としては弥生時代中期が考えられ

(武田)

る。

溝3、4 (第97図)



第15図 住居跡8  
平面図・断面図  
(1/60)

1. 明黄褐色土(淡灰色土のブロックを多量に含む)
2. 暗黄褐色土(淡灰色土、黒色土、炭を少し含む)
3. 暗黄褐色土(黒色土を少し含む)
4. 暗茶褐色土(淡灰色土を少量黒色土を多量に含む)
5. 黒色土(土器、窯壁片、焼土、炭を多量に含む)
6. 黒色土
7. 茶褐色土(黒色土、炭、焼土を少し含む)
8. 茶褐色土
9. 黒灰色土

クシ描の波状文、平行線文が施されている。出土遺物からして弥生時代中頃の溝と考えられる。

包含層出土遺物 (第18、19、20、21図)

43~45は、甕で口縁端部が上方に拡張し、端部外面に数条の凹線文が施される。胴部外面はタテ方向にハケナデが見られる。46~51も甕であるが、口縁端部が上下に拡張するもので、外面には凹線が見られる。49は、頸部に貼付凸帯と、口縁部外面に棒状浮文が施されている。52、53、56、57は壺の口縁部で、外方に開いた口縁端部が肥厚するものである。端部外面には、浅い凹線文が施されている。52、53、57には、口縁端部外面に棒状浮文が施されている。58、59、

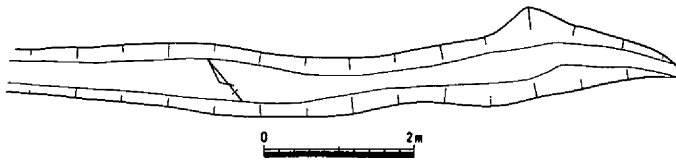
斜面と同じ方向に流れる溝で、ゆるく弧を描くものである。明瞭な出土遺物はないが、検出面からして弥生時代の溝である。溝は両方ともにV字形に近い断面を呈しており、検出した最も深い部分で約80cmを測る。溝3は約20mを調査し、溝4は約21mを調査した。

溝14 (第16図)

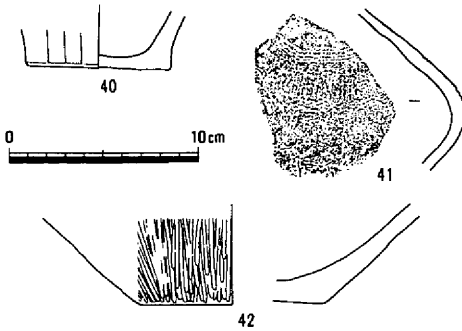
溝4とほぼ同じ方向に流れるものである。中間が削平されているために同一の溝か否かは決めがたいが、同一の可能性はある。溝は約9mを調査した。

出土遺物 (第17図)

40、42は、底部で、いずれも外面にはヘラミガキが見られる。41は壺の胴部で、肩部に



第16図 溝13平面図 (1/100)



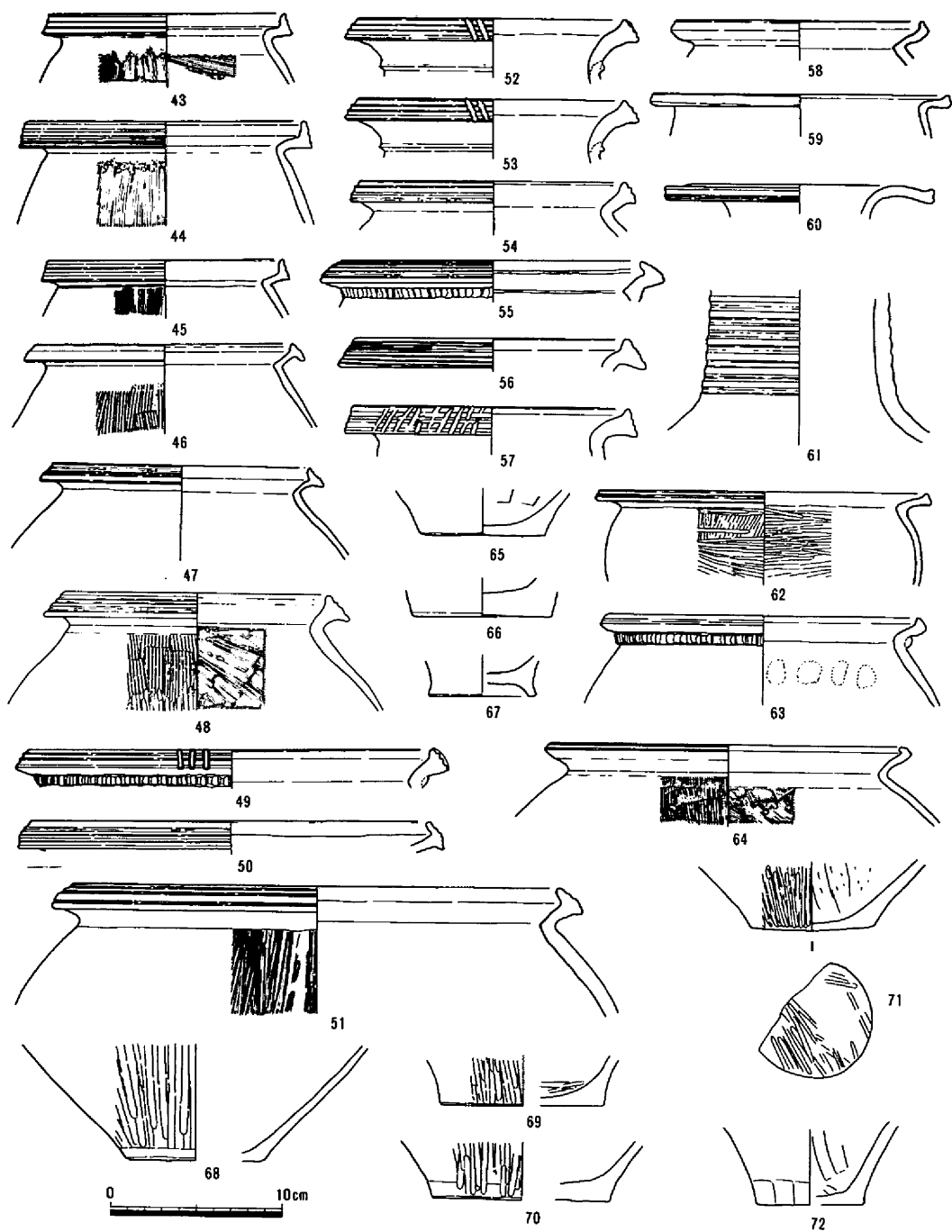
第17図 溝13 出土遺物 (1/4)

62、63は、甕であるが、外方に開いた口縁部の端部が少し肥厚するものである。62は、頸部直下にタテ方向のハケナデ後ヨコ方向のヘラミガキが見

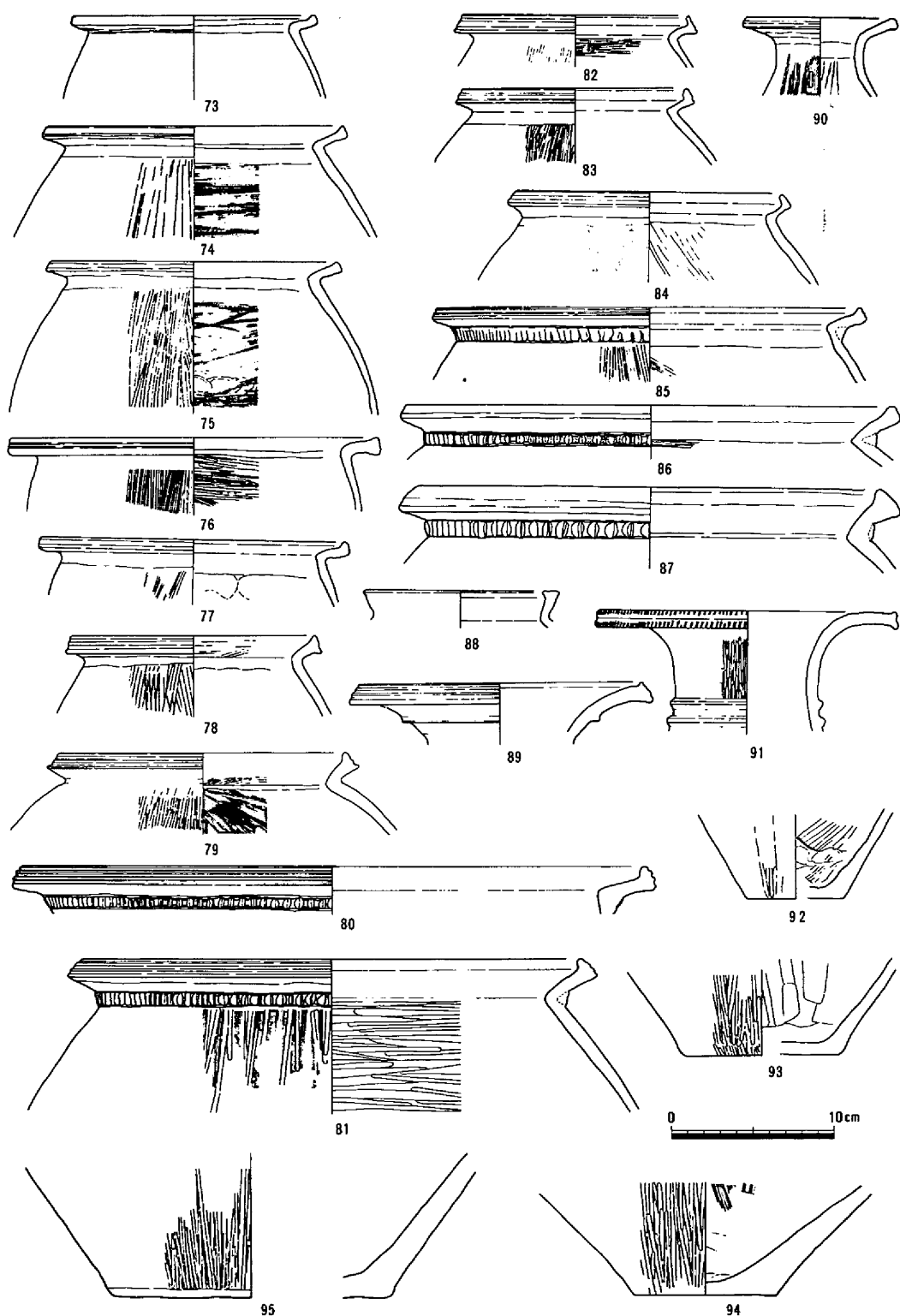
られ、胴部内面もヨコ方向のヘラミガキが見られる。60、61は、壺で、60は口縁部が外方へ少し下りながら広がるもので、端部が少し肥厚する。61は、長頸壺の頸部で凹線文が施されている。68～71は、壺、甕の底部で、外面にタテ方向のヘラミガキが見られる。73～75は、甕の口縁端部がわずかに厚みをもつもので、胴部の外面はタテ方向のハケ目、内面にはヨコ方向のハケ目が見られる。78、79、81、85～87は、口縁端部が少し肥厚するものである。81、85～87は

頸部に貼付凸帯が見られ、81は、胴部の内外面にヘラミガキが見られる。88は、短頸の壺で、89は、口縁部が上方へ開きながら延びるもので端部は少し肥厚する。外面には断面が三角形を呈する凸帯が施されている。91は長頸壺で、口縁部はほぼ水平に開き、端部は少し肥厚する。頸部にはほぼ二本の凸帯が施されており、外面はタテ方向のヘラミガキが見られる。96は口縁部が垂直に立ち上る高杯で、体部の内外面にはヘラミガキが見られる。97は、外方へ開きながら延びる口縁部の端部が上下に拡張するもので、外面には凹線が見られる。100～102は小型壺の口縁部で、口縁端部が少し肥厚する。102は、外面に貼付凸帯が施されている。103は、外方に大きく開きながら延びる口縁部で、端部は上下に拡張する。口縁部外面は、凹線文を施文後に5本1単位の棒状浮文と波状の浮文を貼付している。内面には、クシ状工具による波状文の施文が見られる。104、105は、ほぼ同じ形状を呈する口縁部で、端部外面に棒状浮文を貼付する。105は外面に三角凸帯をそれに直交して棒状浮文が施文される。106、107、110、111は、高杯で口縁部が弧を描きながら立ち上るもので、端部は拡がり面をもつ。口縁部直下に凹線文を施されるものもある。108は壺の頸部で、肩に三角凸帯を貼付し、上はハケ目、下はヘラミガキが見られる。112は脚部で、体部との接合部は円盤充填するものである。体部と脚部の境に貼付凸帯が施される。116は、蓋で、「八」字状に開く体部の外面はタテ方向のハケナデが見られる。117、124～126は、110、111と同じ形態の高杯で、体部の内外面にはヘラミガキが見られる。120

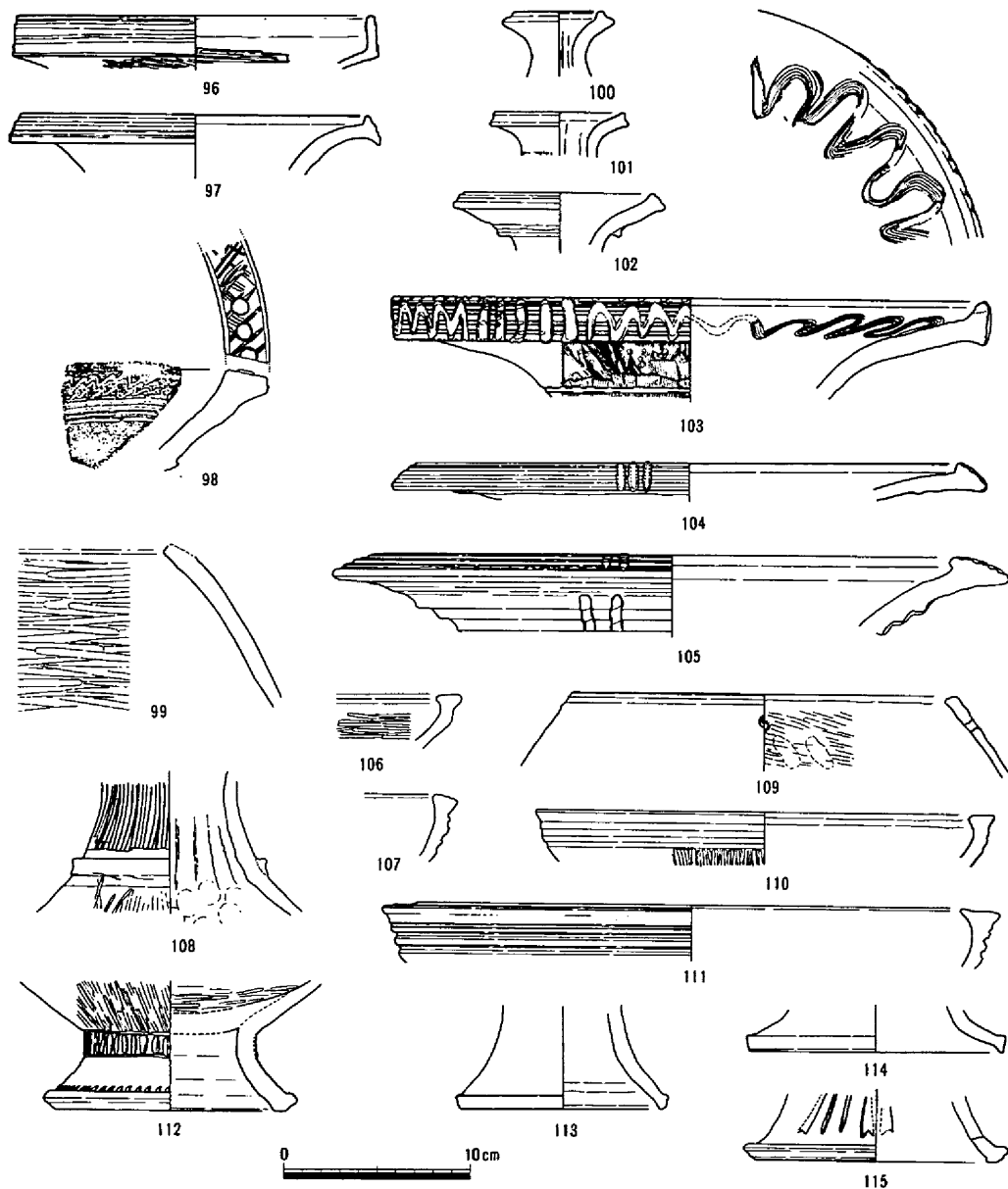




第18図 弥生土器 (1/4)



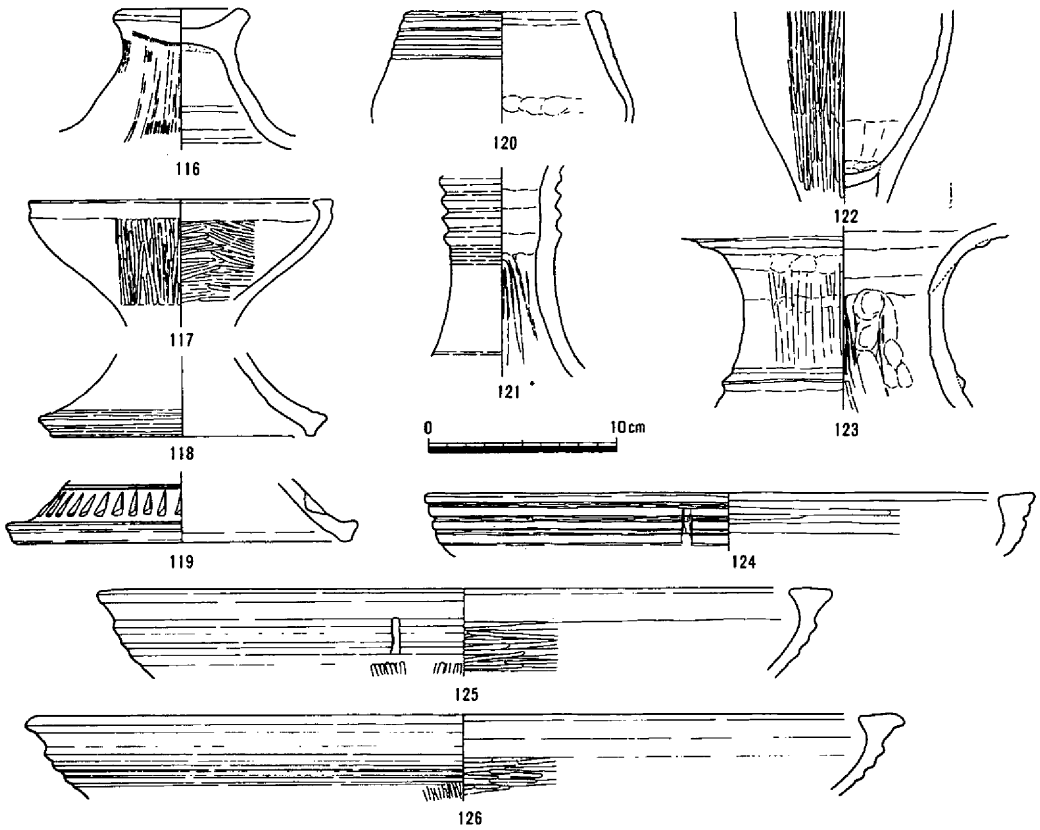
第19図 弥生土器 (1/4)



第20図 弥生土器 (1/4)

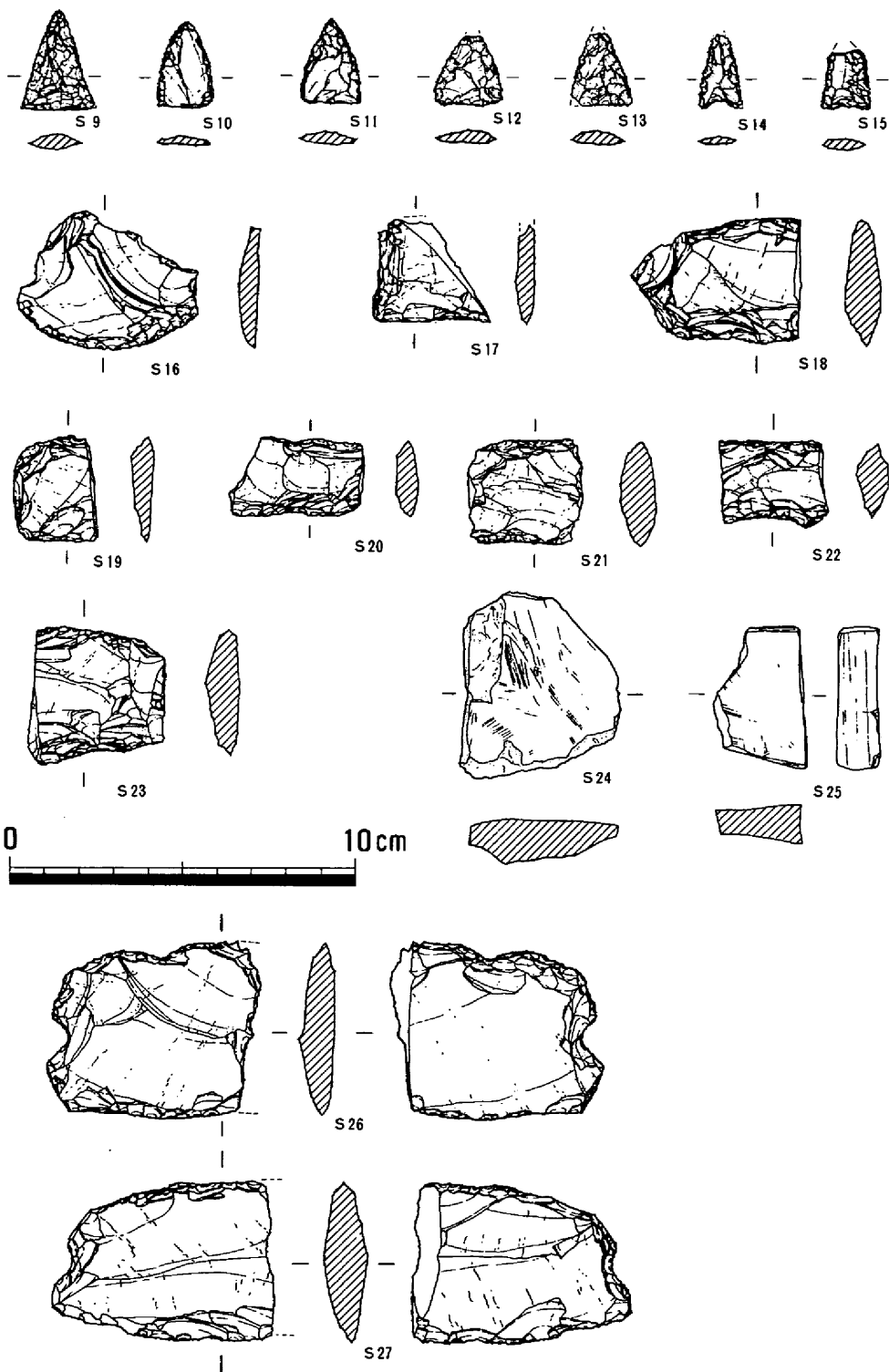
は鉢で、体部が内傾して立ち上る。口縁部直下には5本の凹線文が施されている。122も高杯で、細身で弧を描きながら立ち上る体部をもつもので、外面には、タテ方向のヘラミガキが見られる。123は壺の頸部で、三角凸帯が貼付けられており、その間にハケナデが見られる。

包含層出土石器 (第22図)



第21図 弥生土器 (1/4)

S 9～S13は、基部が平らなもので、S 9、S13は、二等辺三角形を呈する。S10～S12は、側線が少し弧を描く。S10は、大きな剝離面を残すが、他のものは細かく全体を調整している。S14、S15は、凹基式のもので、S15は五角形状と考えられる。S16は、刃部が弧を描くものである。S17は直線的な刃部をもつもので、S16、S17ともにスクレーパーである。S18～S23は、楔形石器である。S24、S25は砥石である。S24は図示した面に使用痕が見られるもので、反対側は欠失している。S25は3面に使用痕が見られる。S26、S27は、石包丁で背部は少し弧状を呈する。側面には抉りを持つものである。石材は、砥石以外はサヌカイトである。



第22図 出土石器 (1/2)

## 第2節 古墳時代・古代の遺構と遺物

### 住居跡1 (第23図)

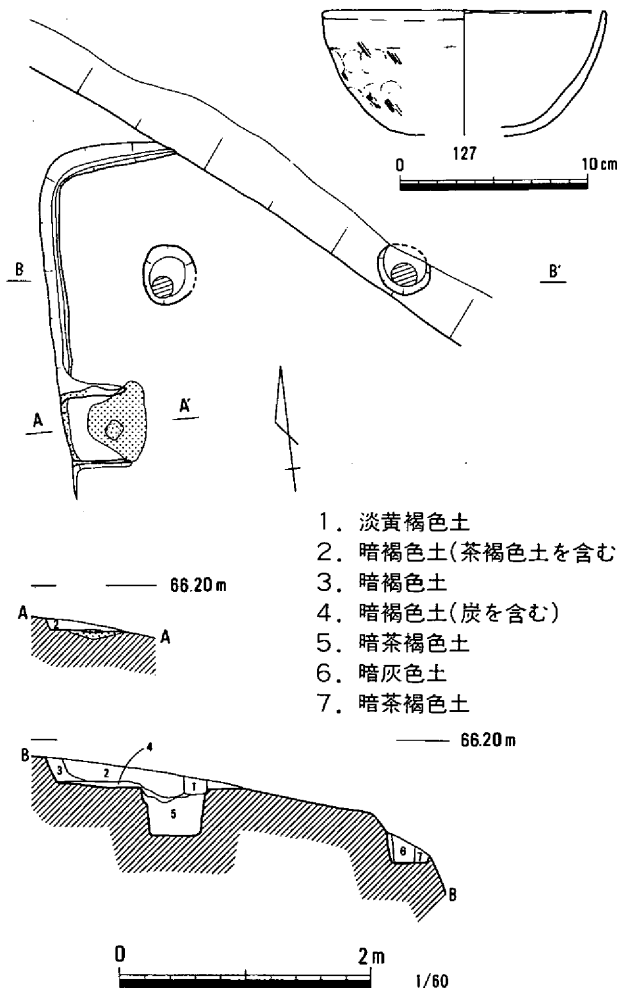
方形を呈する住居跡であるが、そのほとんどは削平されており、一部分のみが残存するものである。検出したのは、北、西壁の一部と柱穴2本である。検出した壁体の長さは、北辺で108cm、西辺で280cmである。西辺には造付けのカマドを検出した。カマドはコ字形に壁が造られるもので、アミ目の部分が赤色に焼けていた部分である。住居跡の壁体に沿っては溝を検出した。柱穴は北側の2本を検出した。柱穴の径は約40cmである。2本とも直径約20cmの柱痕跡が残

っており、その中心間の距離は、140cmを測る。柱穴と壁との距離はほぼ等しいものとし、カマドは西辺のほぼ中央として住居跡の規模を推定すると東西380cm、南北440cm程度と考えられる。

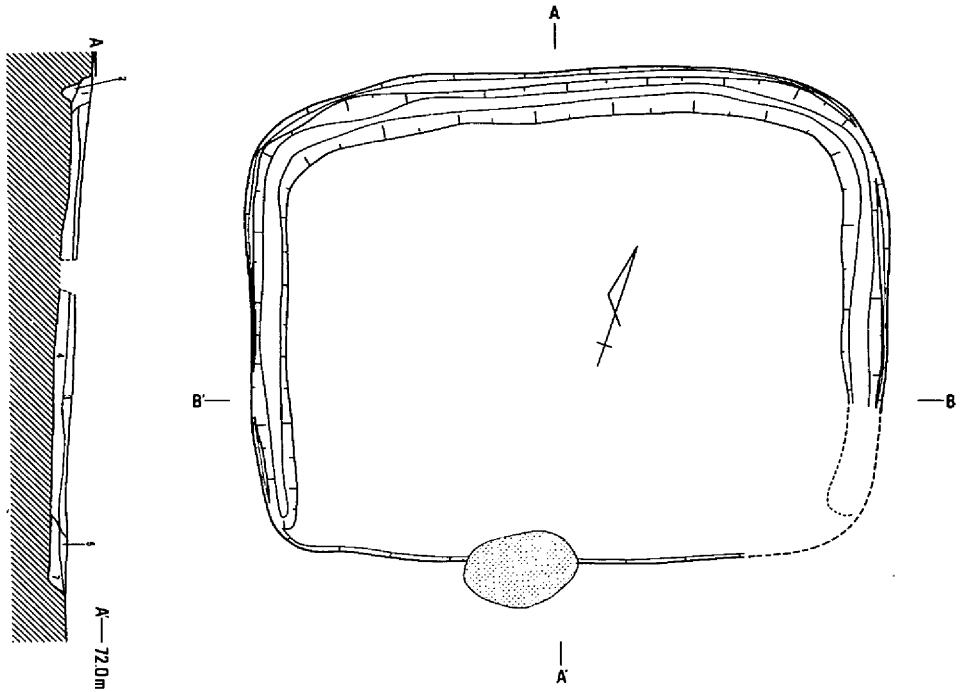
出土遺物としては127の土師器碗が出土している。外面には、ハケ目と指頭圧痕とが見られるもので、住居跡の時期を知る唯一の手掛かりであり、古墳時代の前半期と考えられる。(井上)

### 住居跡2 (第24, 25図)

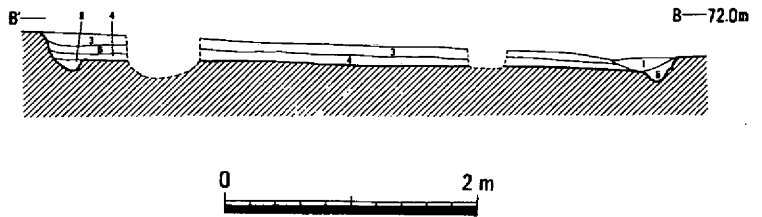
住居跡2はB4グリッドの中央に位置する隅丸方形を呈する住居跡である。規模は約4m×4.7mで土壇11.14に切られている。ほぼ耕土直下で検出され、壁はほとんど削平されており10cm~20cmしか残存していない。特に南壁は地形が南に緩く下がるのでほとんど残っていない。南壁以外は幅約30cm、深さ10cmの壁体溝が巡り床面はよく締った状態であった。



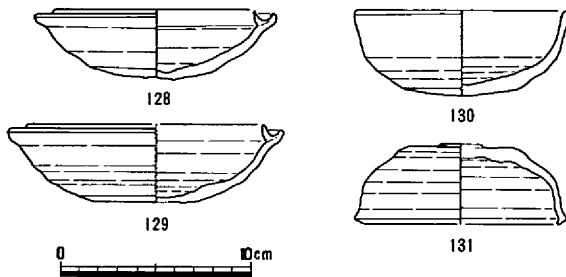
第23図 住居跡1 平面図・断面図 (1/60) 出土遺物 (1/4)



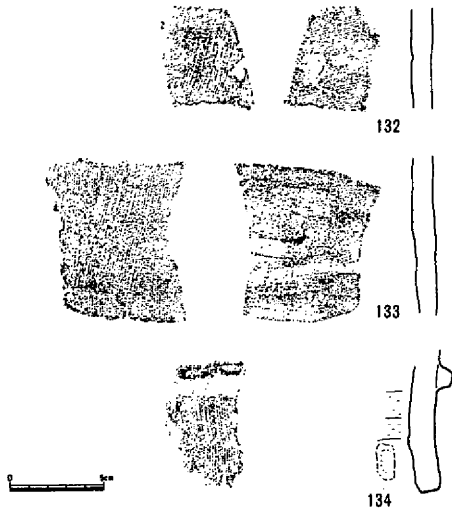
1. 暗黄褐色土(炭を少し含む)
2. 黒褐色土(粒子が細かい)
3. 暗褐色土(黄色土のブロックを含む、焼土、炭を少し含む)
4. 暗黄褐色土(黄色土のブロックを多量に含む)
5. 赤褐色土(被熱土)
6. 焼土(炭を多く含み、暗褐色砂を少し含む)
7. 暗黄色土(炭・焼土を少し含む)
8. 褐色土



第24図 住居跡2 平面図・断面図 (1/60)



第25図 住居跡2 出土遺物 (1/4)



第26図 埴輪 (1/4)

柱穴は床面上にも周辺にも確認できなかった。

また南壁中央には薄い円形の焼土面が確認できカマドとも考えたが、袖などカマド構造の痕跡は確認できなかった。そして付近より置きカマドの小片が出土しており他の遺構の可能性も考えられる。遺物は北西隅の床面上より4個体の須恵器が出土した。128～130は杯身で128は口径12.5cm、器高3.5cmを測る。底部は丸くへら起こしの後ナデを加えている。受け部はさほど肥厚せず立ち上りはやや内傾して短い。

129は口径13.5cm、高さ4cmで128よりも若干大きく立ち上りも高い。底部は平底気味でへら起こしの後ナデを加えている。130は受けをもたない

無台の杯身で若干丸味を帯びた底部から体部は丸く内彎しながら立ち上る。口縁部は直線的にやや外傾し端部は丸く肥厚する。底部はへら起こしの後ナデを加えている。131は杯蓋もしくは、短頸壺の蓋であると考えられる。口径11cm、高さ4cmを測り、へら起こしの後ナデを加えた天井部はほぼ平らである。体部は丸く口縁部はやや外傾し、端部は若干屈曲し短かく内傾している。以上が遺構と遺物の概略である。次にこの住居跡の時期であるが、住居跡2を切る土壌11.14は2号灰原に伴う遺構であると考えられるが、床面上の遺物と、2号灰原の遺物中で最も古い時期の遺物は、ほぼ同時期である。そして130は128や129より若干後出的な器形であるが、同時に生産、使用されていた可能性も十分にある。以上のことから、住居跡2の時期として7世紀前半が考えられる。

またこの住居跡の性格として窯跡に伴う工房的なものを想定したが、窯に関係するような遺構、遺物は確認できなかった。(武田)

#### 埴輪 (第26図)

円筒埴輪の破片で、包含層内への流入物である。三点ともに同一個体とも考えられるもので、外面は、いずれもタテハケを施すのみで、132は内面にヨコハケが見られる。133、134は、横方向のへらケズリが見られる。134は、底部の破片と考えられるもので、断面が台形の凸帯を貼付している。内面の上半はヨコ方向のへらケズリで、下半には押圧後にヨコナデが施されており、6世紀代の埴輪と推定される。(井上)

### 1号窯

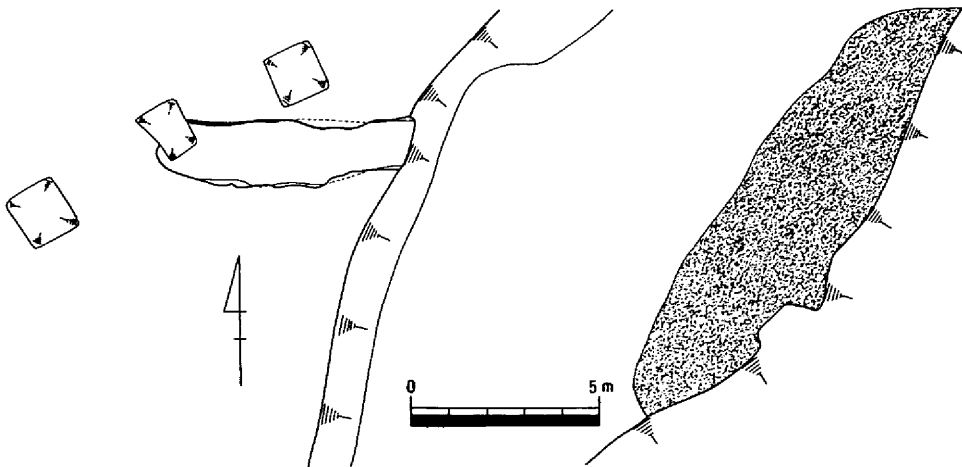
#### 1、窯跡の位置 (第97図)



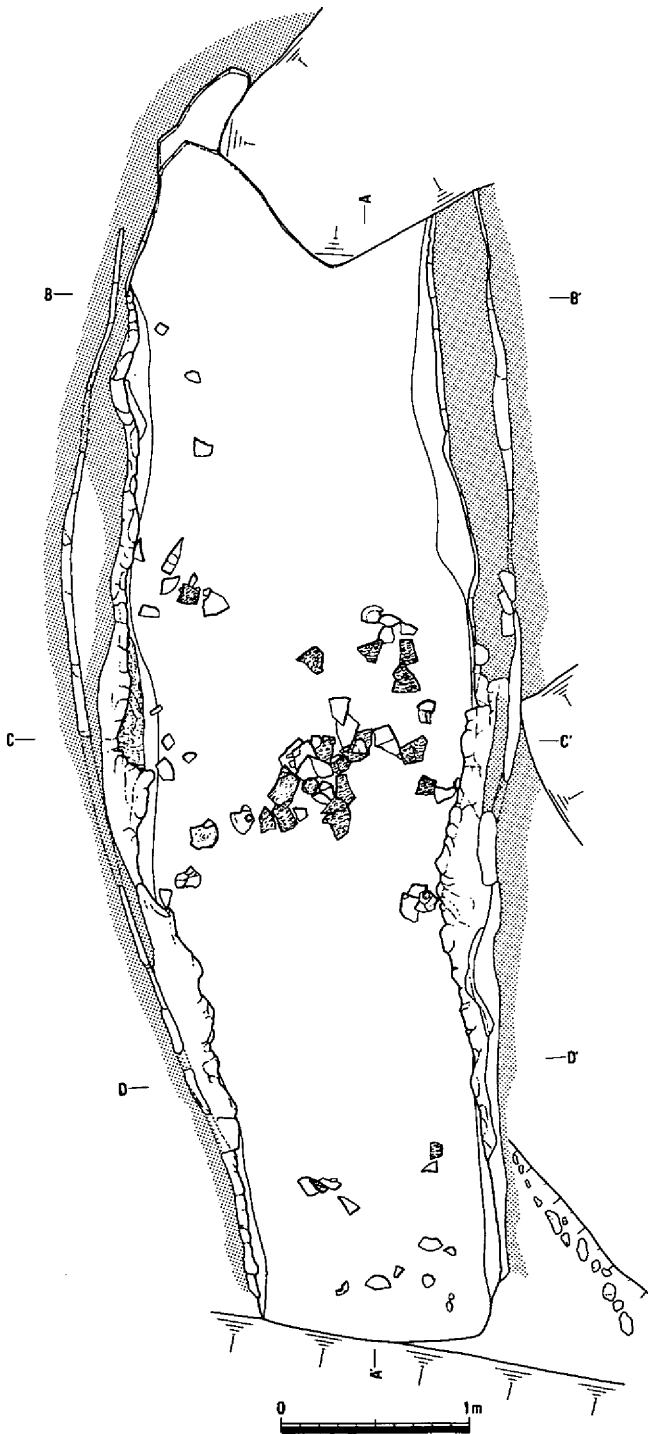
1号窯は調査区のほぼ中央部に位置し、南に緩やかに伸びる斜面の標高70m付近に等高線に直交して東に開口している。窯体部分は試掘によって確認されていたが、窯の位置する斜面より下方は水田の造成によって大きく段状に削平され窯体の焚き口の1部と前庭部、灰原のほとんどが消失していた。

## 2、窯体（第28図）

窯体は約20cmの腐植土を除去後平面を検出し、主軸のA—A'と直交する断面B—B'、C—C'、D—D'を設定した。主軸はN—94°—Eで、畑、水田等の削平、攪乱を受けているが残存状態は良好であった。窯体の残存長は最大6.6m焚口幅1.1m胴部最大幅2.4mで煙道部が果樹の肥料穴によって破壊されているが、推定できる規模は約7mの半地下式斜床窖窯と考えられる。平面形態は煙道部は不明であるが、焚口部分が狭く燃焼部から焼成部にかけて広くなり煙道部に向ってせばまる胴張りを呈している。断面形態は焚口部から燃焼部にかけてやや落ち込み舟底を呈し焼成部は最大斜面18°で立ち上る。次に床面、側壁について断面で観察すると床は燃焼部で2枚、焼成部で3枚確認できた。このうち1次の床面および壁面と考えられるものは地山の花崗岩バイラン土が青灰色に硬く焼きしまった層で粘土による補修痕は認められない。このことから天井部については不明であるが、本窯はすくなくとも最初の構築時には地下式の窖窯であった可能性も考えられる。2次の床面は窯壁片の混じる土で約3cmの厚さでほぼ窯体全面に補修され、一部ガラス質に硬化している。またB—B'では焼成部の1次床面上に2個体の杯蓋が2次床面に埋められた状態で出土した。3次床面は焼成部にのみ窯壁片、炭を含む土で補修されている。次に壁は全体的に1回、部分的には3回の補修が行われ、いずれも硬く焼けしまっている。特にC—C'付近では壁がガラス状に硬化してスサの混じった粘土を指で塗りつけた痕跡が観察



第27図 須恵器窯と灰原 (1/200)



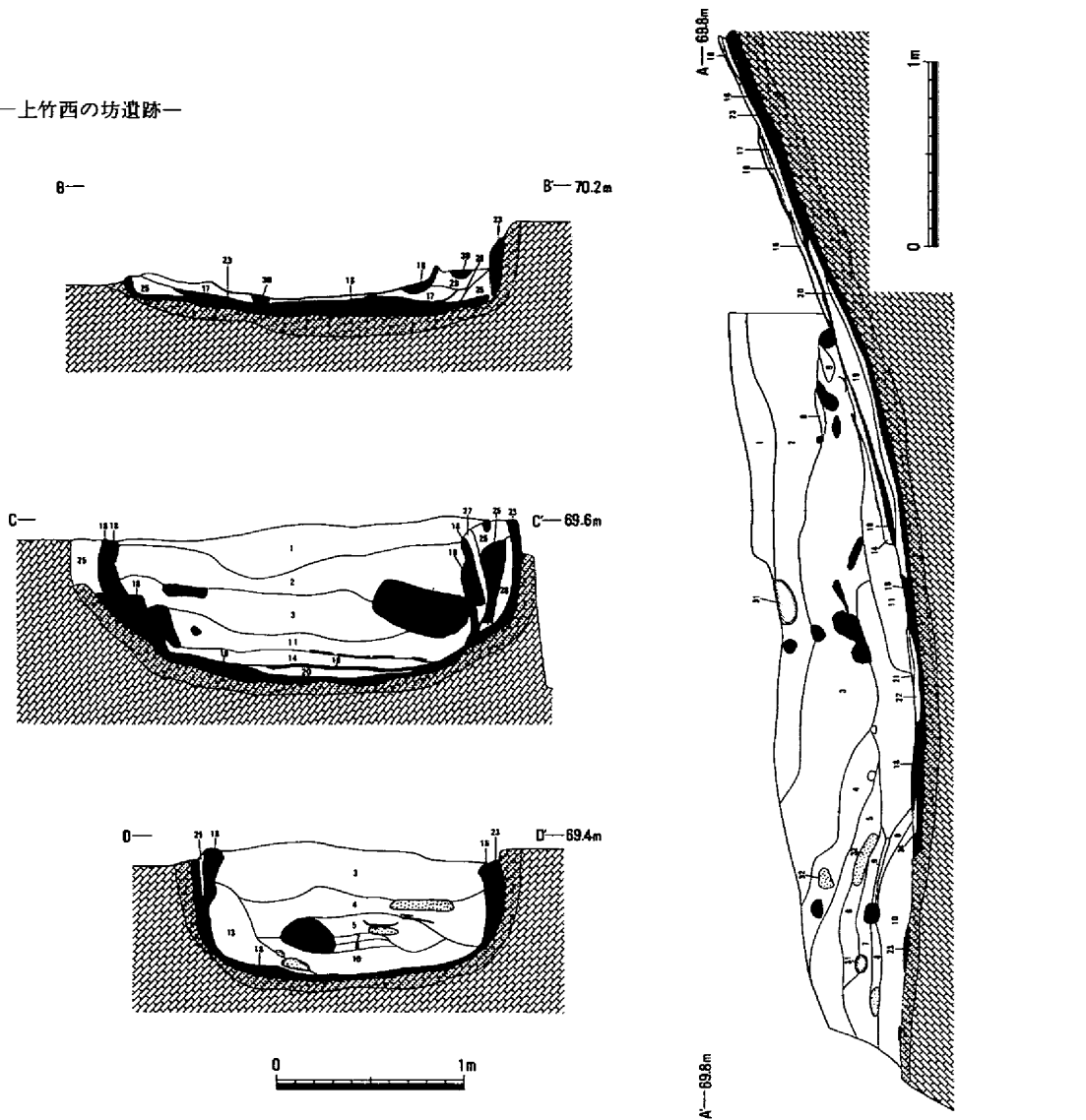
第28図 須恵器窯最終床面平面図 (1/40)

できた。最終床面上には燃焼部と焼成部の境に遺物がかたまって散乱し、一部は二次的な被熱で赤化していることから焼台として使用されたとも考えられる。いずれも破片で破損した製品を遺棄したと思われる状態であった。また焚口付近では掻き出されたと思われる炭、焼土が堆積していた。以上のことから本窯は最低でも3回の火入れがあったと考えられ、1次面が構築時の空焚のものかどうかは不明であるが、少なくとも3回以上の操業があったと思われる。最後に窯体の覆土は焼土、炭、窯壁片を多く含むが、最終操業時以降、天井や壁が崩落したという状態ではなく、終了間もなく天井が削平された、もしくは製品の取り出し時に破壊されたと考えられ、その後周辺の遺物が混入したと思われる。また底部を欠損した土師器の甕(148、149)はあたかも意図的に投棄されたかのような状態で出土した。

### 3、灰原 (第27図)

1号窯に伴うと考えられる灰原は焚口より大方を削平した水田の段状の斜面に薄く残

—上竹西の坊遺跡—



- |                     |                     |                  |
|---------------------|---------------------|------------------|
| 1. 暗褐色土(炭含)         | 11. 暗橙褐色土(炭、焼土多含)   | 21. 暗青灰色土(窯壁片含)  |
| 2. 黄褐色土(炭、焼土含)      | 12. 炭               | 22. 淡褐色土         |
| 3. 褐色土(炭、焼土含)       | 13. 暗黄褐色土(炭、焼土多含)   | 23. 地山が青灰色に還元した層 |
| 4. 淡褐色土(焼土多含)       | 14. 暗灰褐色土           | 24. 窯壁ブロック       |
| 5. 暗褐色土(焼土、地山ブロック含) | 15. 淡青灰褐色土(硬質)      | 25. 赤褐色土         |
| 6. 橙褐色焼土            | 16. 黄褐色土(硬質)        | 26. 赤青灰色土        |
| 7. 黒褐色土(炭多、焼土含)     | 17. 橙褐色土(炭含)        | 27. 淡灰色土(硬質)     |
| 8. 橙褐色土(焼土多含)       | 18. 青灰色土(ガラス質)      | 28. 橙褐色土(窯壁片多含)  |
| 9. 黒灰色土(炭多含)        | 19. 暗黄褐色土(焼土、窯壁片多含) | 29. 淡赤黄色土(硬質)    |
| 10. 赤褐色土(焼土多含)      | 20. 淡青灰色土(焼土含)      | 30. 青灰色土(窯壁)     |

第29図 須恵器窯 縦横断面図 (1/40)

存している。灰層は焼土と炭を含み遺物は小片がわずか残っているだけで図示し得たものは多くない。

1号窯の調査により出土した遺物はほとんどが須恵器で、出土した状態より床面中、最終床面上、窯体覆土、灰原に分けられる。このうち床面中の遺物は最初の操業時、また最終床面上の遺物は最終操業時の遺物と考えられる。このことは灰原の遺物の時期とも矛盾はしないと思

われる。

出土遺物

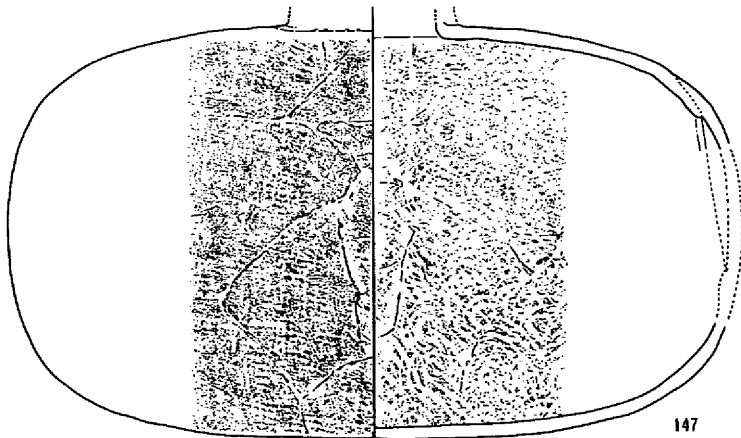
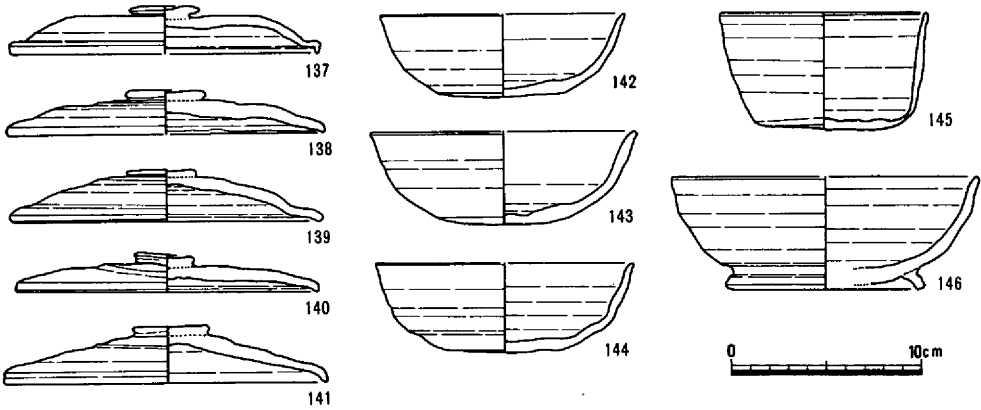
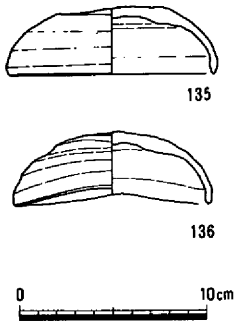
1、床面中 (第30図, 135、136)

口径11cm、高さ3.5cmの杯蓋である。天井部はへら起こしの後ナデが加えられ天井部と体部の境は不明瞭である。口縁部は垂直に下り、端部は丸くおさめられている。2個体とも焼成が非常に良好で1次焼成面と考えられる床面上に伏せた状態で置かれ補修された床面に埋めこまれていた。

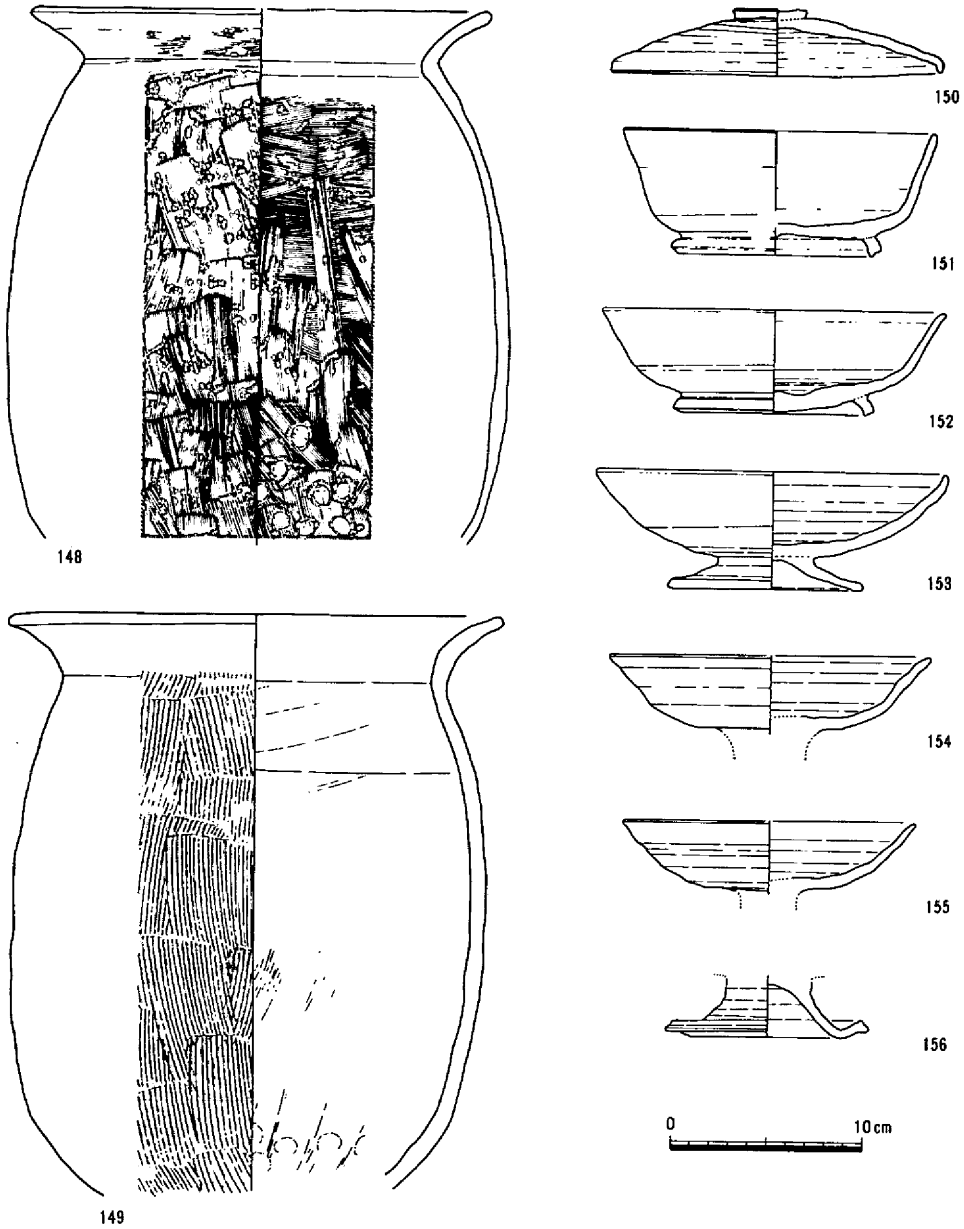
2、最終床面上 (第31図, 137~147)

杯蓋 (137~141) 口径16~17cmで高さ2.5cm~4.5cmのものがあり器壁が比較的うすく口縁部が屈曲する137と体部が厚く口

第30図 須恵器窯  
第1床面出土遺物  
(1/4)



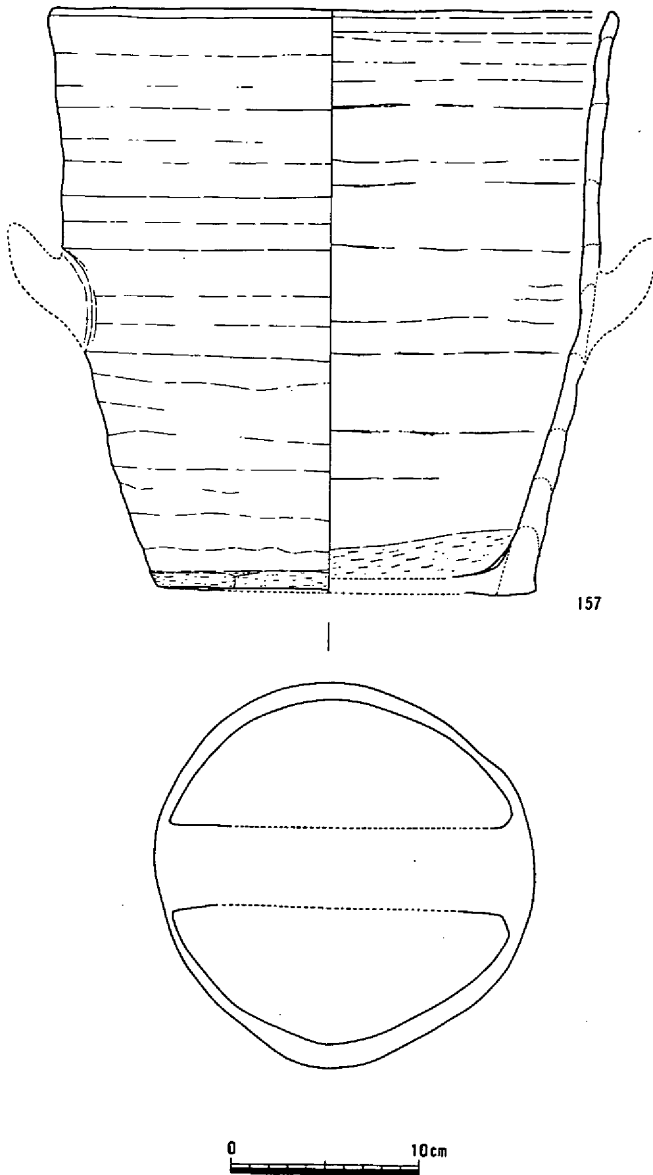
第31図 須恵器窯 最終床面出土遺物 (1/4)



第32図 須恵器窯 埋土出土遺物 (1/4)

縁部が緩やかに折り曲げられている138～141がある。つまみは137は扁平な基石状のものを貼付しているが他は円盤状のものである。

無台杯身 (142～145) 142～144は口径13cm～14cm、高さ4.5cm～5cmで底部はヘラ起こしの後



第33図 須恵器窯 埋土出土遺物 (1/4)

ナデを加えている。いずれも体部は緩やかに内彎して立ち上り口縁部は直線的に外反している。145は口径11 cm、高さ6 cmで非常に器壁がうすく体部は直線的に立ち上がる。底部はヘラ起こしの後未調整である。

**有台杯身 (146)** 口径16 cm、高さ6 cmである。体部は緩やかに立ち上り口縁部はやや外反する。高台はやや内彎気味に貼付され体部と底部の境がはっきりせず無台杯身に高台を付けたような器形である。

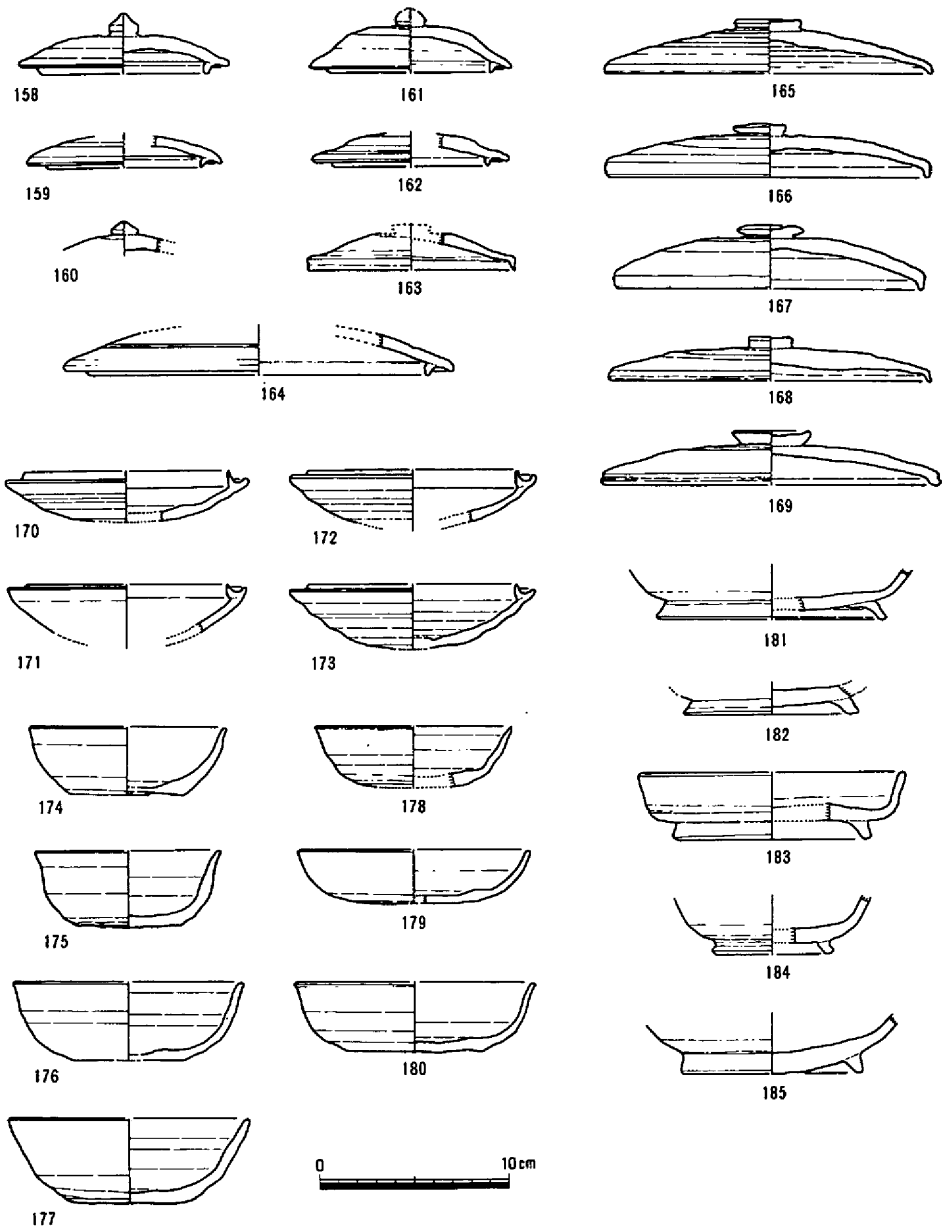
**横瓶 (147)** 胴部の破片のみであるが、成形の際の開口部を塞いだ円盤が残っている。外面は平行タタキの後、縦方向と横方向のカキ目調整が施され、内面は同心円タタキである。

### 3、窯体覆土 (第32、33 図)

**土師器壺 (148、149)** いずれも底部を欠損している。胴部は内外とも縦方向のハ

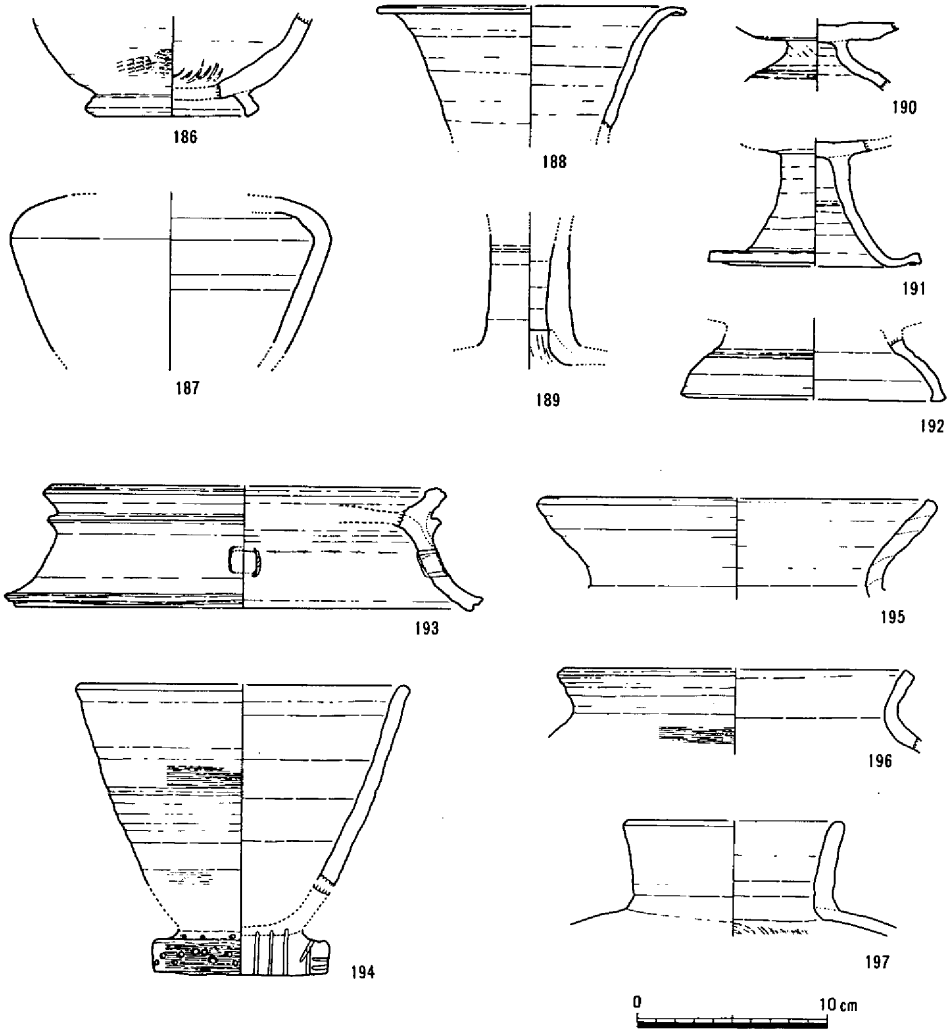
ケが施され底部近くには指頭圧痕がある。148の口縁部にはヨコナデの後横方向のハケが施されている。

**杯蓋 (150)** 口径17 cm、高さ4.5 cmで、体部は直線的に伸び口縁端部で垂直に折れる。つまみは円盤状のものが回転ヘラケズリの後貼付されている。



第34図 須恵器窯 灰原出土遺物 (1/4)

有台杯身 (151、152) 151は口径17cm、底径10cm、高さ6.5cmを測る。口縁部は水平な底部から直線的に斜めに立ち上り、やや内彎する比較的高い高台が付く。17は口径18cm、底径10cm、高さ5.5cmを計り丸底気味の底部から口縁部は外反気味に立ち上る。

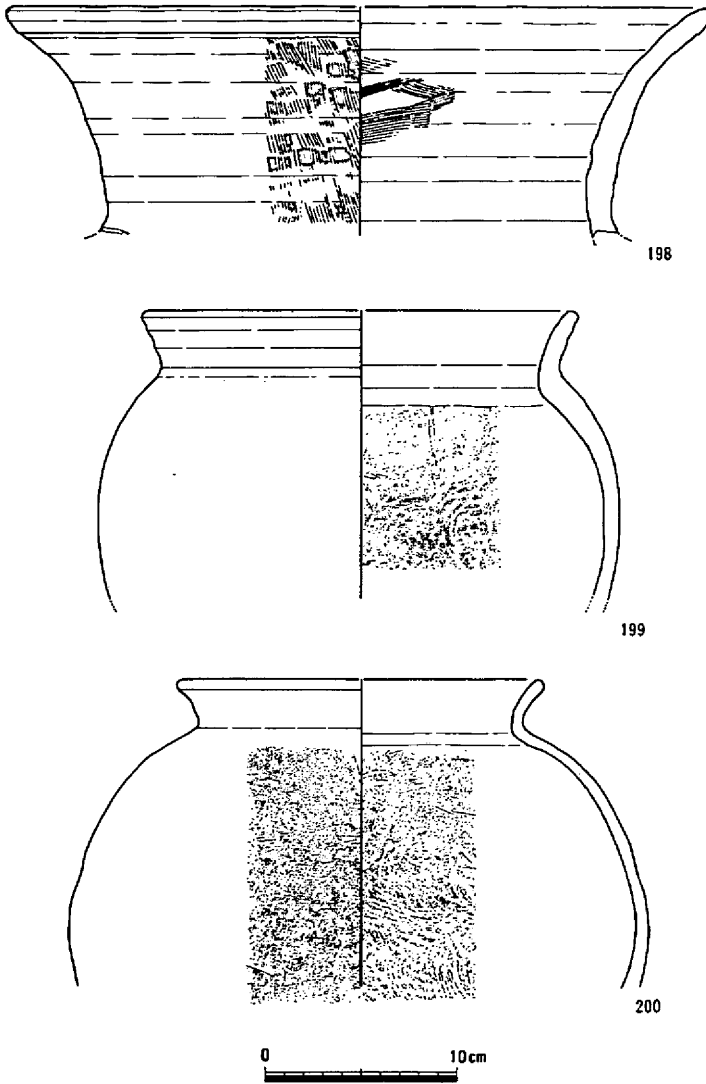


第35図 須恵器窯 灰原出土遺物 (1/4)

高杯 (153~156) 153は口径18cm、底径10cm、高さ6.3cmを測り、杯部の体部は内彎気味に緩やかに立ち上り比較的低い脚が貼付されている。154、155は杯部のみであるが高脚部が付くと思われる。156は脚のみであるが小型の直線的に立ち上る杯部が付くと考えられる。

甌 (157) 口径30cm、底径22cm、高さ30.5cmを測る。把手は欠損している。体部はほぼ直線的に立ち上り口縁部でやや外反する。体部の内外面とも粘土帯の痕跡がよく残り下端は横方向のヘラケズリによって面を整えている。底部には幅約4cmの粘土板が渡されていたと思われるが





第36図 須恵器窯 灰原出土遺物（甕）（1/4）

返されている。166、167、169は口径16～18cmでつまみは基石状のものがついている。体部はなだらかにのび、口縁端部は逆三角形もしくは丸く折り返されている。

#### 無台杯身（170～180）

無台の杯身は受けがつくものと、つかないものがある。170～173は口径13cmで底部から体部にかけては丸くなだらかである。口縁部の立ち上りは低くあまり内傾していない。底部はへら起こしの後ナデを加えている。174～176は口径が10cm前後で高さ3.5～4cmである。底部はへら

ほとんど欠落している。

#### 4、灰原（第34、35、36図）

##### 杯蓋（158～169）

杯蓋は内面にかえりがつく小型のものと、かえりのつかない比較的大型のものがある。158～162は、口径10cm～11cmで擬宝珠状のつまみがつく。そして内面のかえりは、口縁端部より下方にあまりつき出さない。161は比較的器高が高く天井部がなだらかに丸味を帯びている。163はかえりがつかず基石状のつまみがつくと思われる。164は口径が大きく内面に低いかえりが付く。165、168は口径17cmで円盤状のつまみをもち体部が比較的直線的にのびて口縁端部はやや外傾気味に短かく折り

起こし未調整である。177～180はやや口径が大きく12～13cm、器高は179が低く3cm、他は4cm～5cmである。底部はやはりへら起こし未調整で体部は緩やかに内彎し口縁部はやや外反気味である。

#### 有台杯身 (181～185)

底部のみの破片がほとんどなので、全体の器型を知り得るのは183のみである。181は底径12cmで内面には不整方向のナデが加えられている。182と185は底部が9～10cmで底部と体部の境が明瞭でなく口縁部は緩やかに立ち上ると思われる。183は口径14cm、底径11cmを測り平らな底部から低い口縁部がやや外傾しながら直線的に立ち上る。184は底径6cmで内面にはナデが加えられ、小さな台形状の高台が貼り付けられていて、他のものより大きさと高台の形状が異なっている。

#### 長頸壺 (186～189)

186は底部のみの破片である。底径9cmで外面は平行タタキの後回転へラケズリを一部に加えている。内面は同心円タタキの後ヨコナデを加えている。高台は外傾し端部がやや肥厚する。本遺跡出土の須恵器の中で長頸壺と考えられるものはいずれも破片で多くはないが、タタキで成形したと考えられるのは186のみである。187は肩部の破片で内外ともヨコナデで平滑に仕上げられている。188は口縁部の破片で端部は緩やかに大きく外彎して薄く垂れ気味に仕上げられている。189は頸部の破片で内面には接合の時のナデが残っている。

#### 高杯 (190、191)

190は小型の高杯で外面に沈線の稜をもつ。191は脚部のみの破片であるが、比較的高い脚で接地部から端部がやや肥厚してゆるやかに屈曲する。内外面ともにヨコナデである。

#### 台付椀 (192)

脚部のみで椀部の形は不明であるが、外面に沈線の稜をもち八の字に内彎して端部は面をもって短く内傾している。

#### 円面硯 (193)

$\frac{1}{6}$ ほどの破片のため正確な透しの数は不明である。台部にはへら状工具によって正方形の透しが穿孔されている。陸と海の大部分は欠損している。全体的に雑なヨコナデで端部の稜線はつぶれている。また内面には粘土帯の痕跡がある。

#### 擂鉢 (194)

口径18cm、底径9cm、器高15.5cmを測る。体部は直線的に外傾しながら立ち上り、外面はヨコナデの後、カキ目調整を加えている。底部の内面は器壁が剥離しているため不明であるがヨコナデで丸く仕上げられていたと思われる。底部は厚さ約2cmの円盤で底面はナデの後、外面はカキ目調整の後、面に直角に、クシ状のもので刺突して多数の孔をあけている。

—上竹西の坊道跡—



第37図 灰原2全体図 (1/100)

甕 (195、196、198~200)

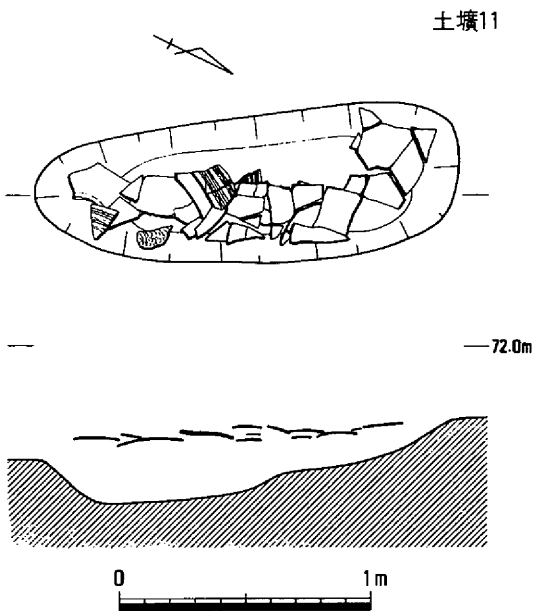
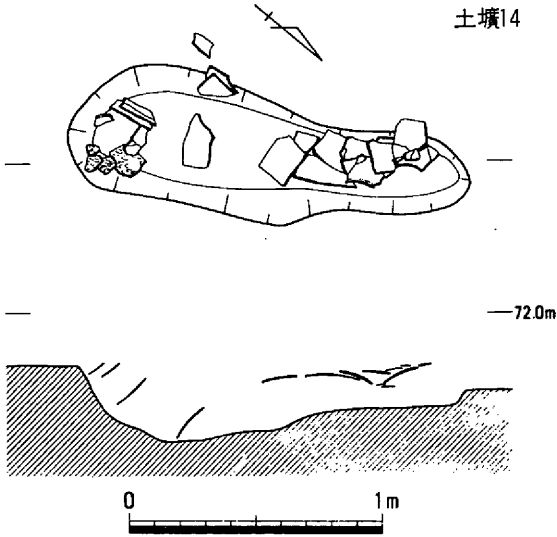
198は中型、他は小型の甕である。198はヨコナデの後、外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を加えている。196は直線的な短い口縁部で外面はウキ目調整、内面はヨコナデである。199、200はやや外反する口縁部で肩から体部は丸く内彎している。199は外面がナデによってタタキを消しており、内面は同心円タタキである。200は比較的器壁が薄く、外面が平行タタキの後カキ目調整、内面は同心円タタキである。

横瓶 (197)

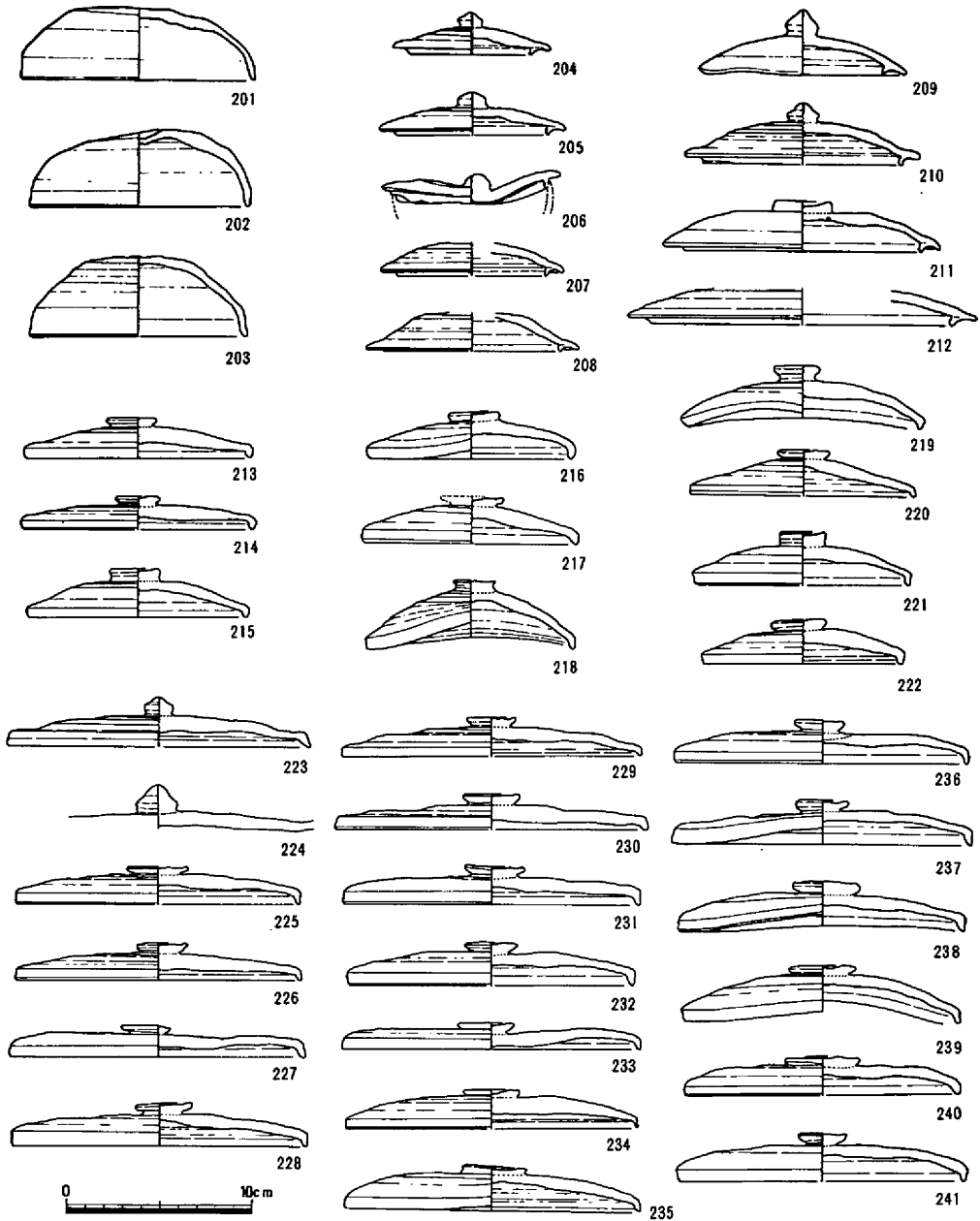
横瓶の口縁部の破片である。口縁部はやや外傾しながら直線的に立ち上り、端部は丸く仕上げている。内外ともにヨコナデで、体部の外面は、接合時のヨコナデ、内面は同心円タタキである。

灰原2 (第37図)

2号灰原はB4~C4グリッドにかけて南に向いた緩斜面に広がる。窯体は畑の造成時に削平され痕跡はまったく認められないが、排水溝と思われる溝状の土壌(土11、土14)が並行して検出されその下方に灰原のみが広がっている。遺物や窯壁片、焼土、炭を多量に含む層は耕作土直下に検出されたが相当削平を受けたと思われる非常に薄い。遺物はほとんどが須恵器であるが、周辺の住居跡から流入したと思われる土師器の甕もある。



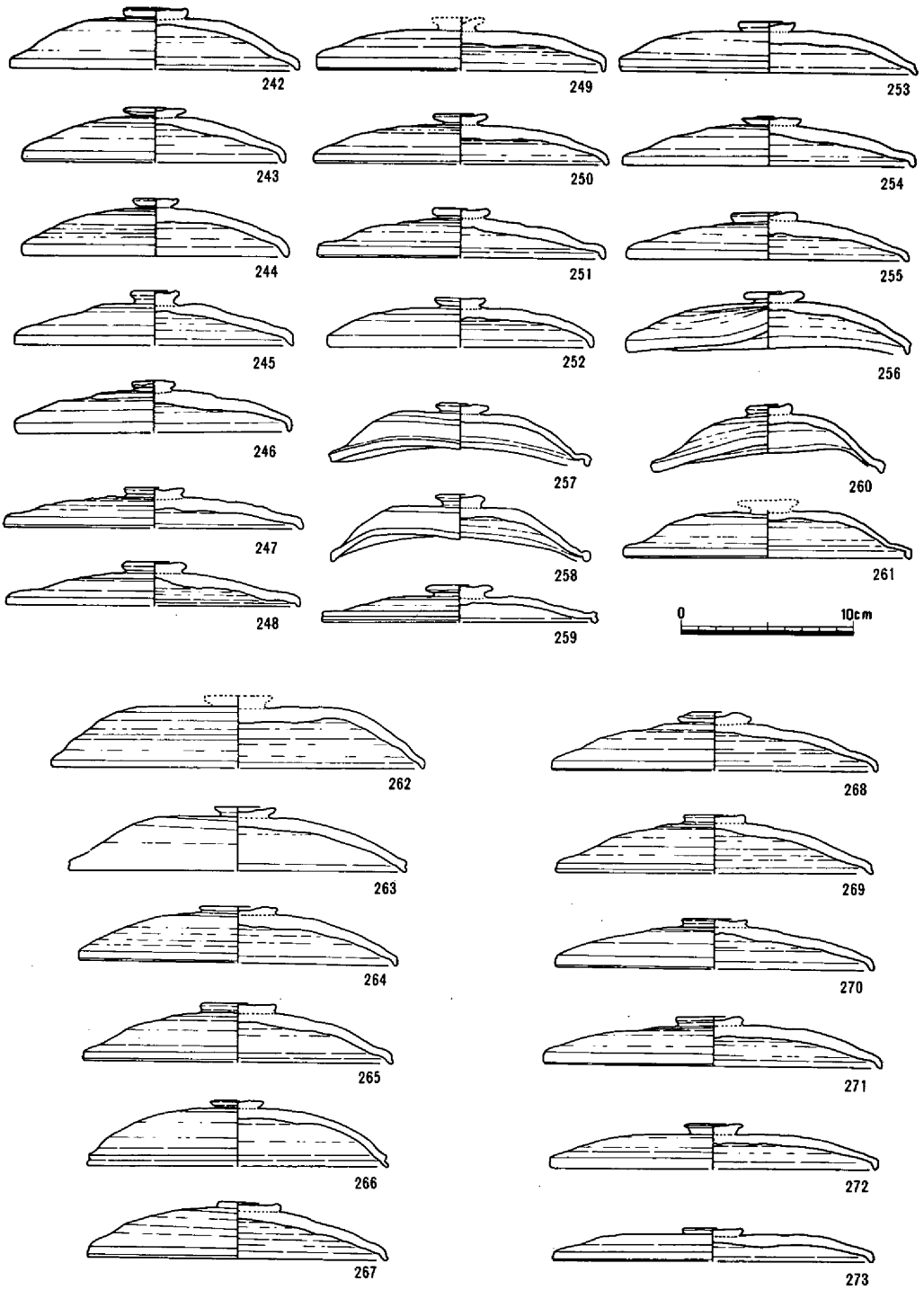
第38図 土壌11・14 (1/30)



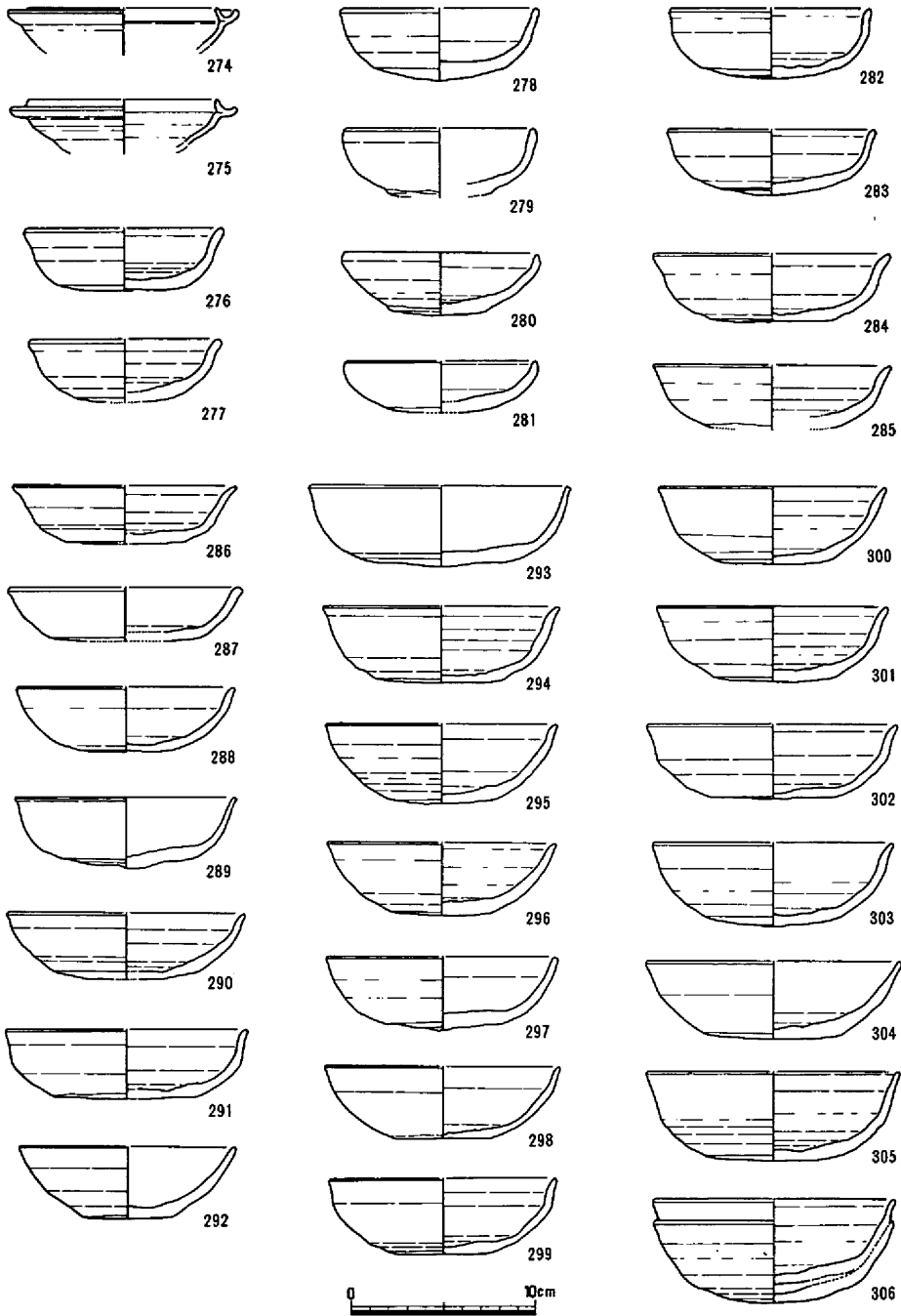
第39図 灰原2出土遺物(蓋)(1/4)

土壌11 (第38図)

土壌11はB4グリッドの中央に位置し、住居跡2を切っている。長軸160cm最大幅50cm深さ10~30cmを測る溝状の土壌である。覆土は暗褐色土で、須恵器の甕の体部の破片が水平に並べ



第40図 灰原2出土遺物(蓋)(1/4)

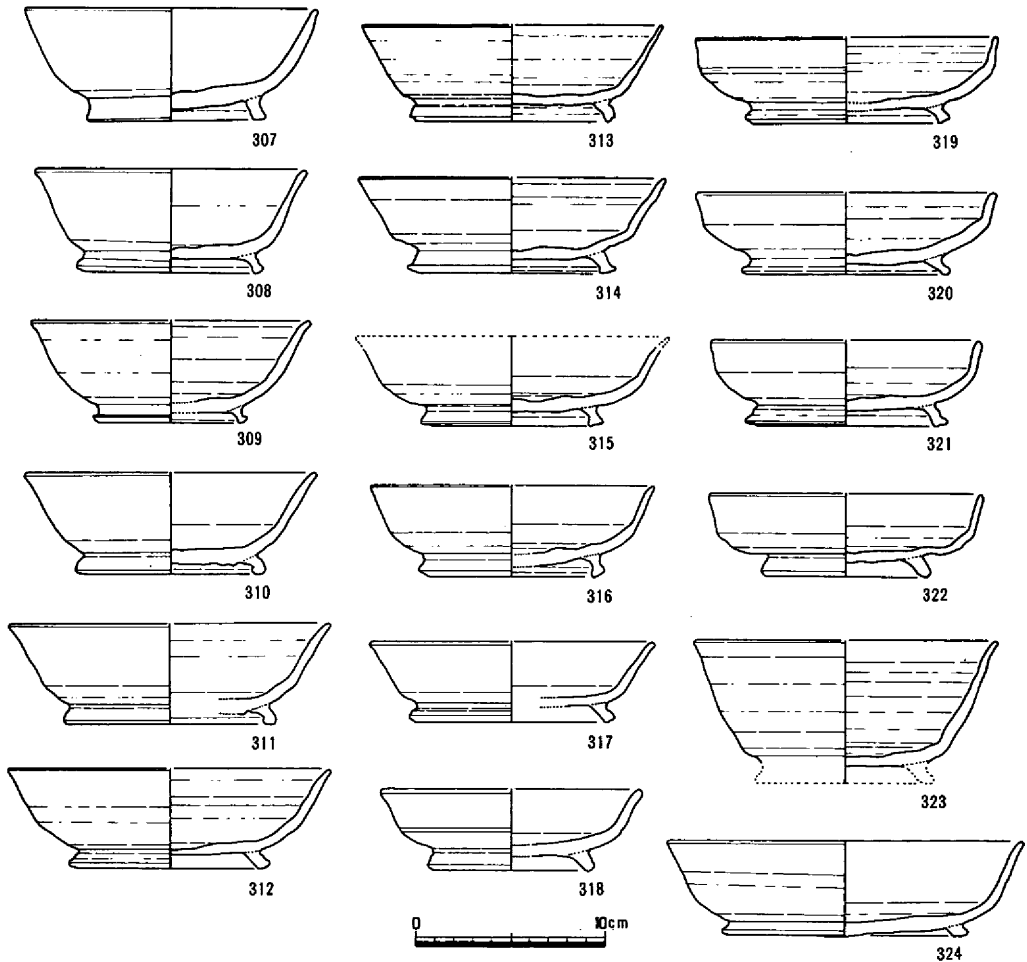


第41図 灰原2出土遺物(杯)(1/4)

られたような状態で出土した。遺物はほとんどが同一個体で焼成が不良で軟質であったが、体部が球形を呈した小型の甕と思われる。

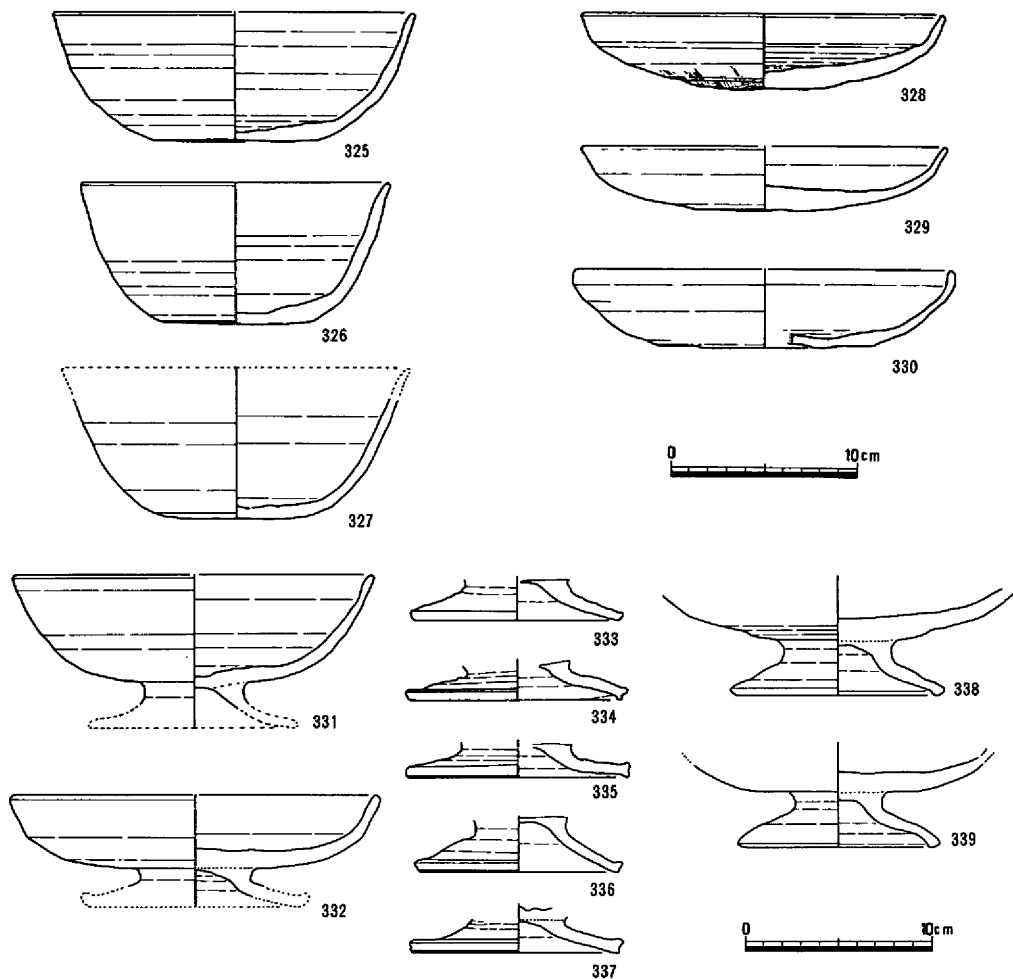
土壌14 (第38図)

土壌14は11と同じく住居跡2を切って3m東に平行する位置にある。長軸160cm最大幅60cm、深さ10~30cmを測り平面形は溝状を呈する。覆土は暗褐色土で11と同様に須恵器の大甕の破片を外面を土にして若干重ねるように水平に並べている。遺物は2号灰原から出土したものと接合した。(391)この2つの土壌は類例(「天観寺山窯跡群」北九州市埋蔵文化財調査会1977)から考えて須恵器窯の前庭部に設けられた排水溝(註1)の可能性が考えられる。両方とも検出されたのは耕土直下であり大きく削平され一部が残存したと思われる。また2号灰原はこの土壌の下方8mから遺物が多く堆積し、その間は削平されているが若干遺物が散乱している。



第42図 灰原2出土遺物(杯)(1/4)





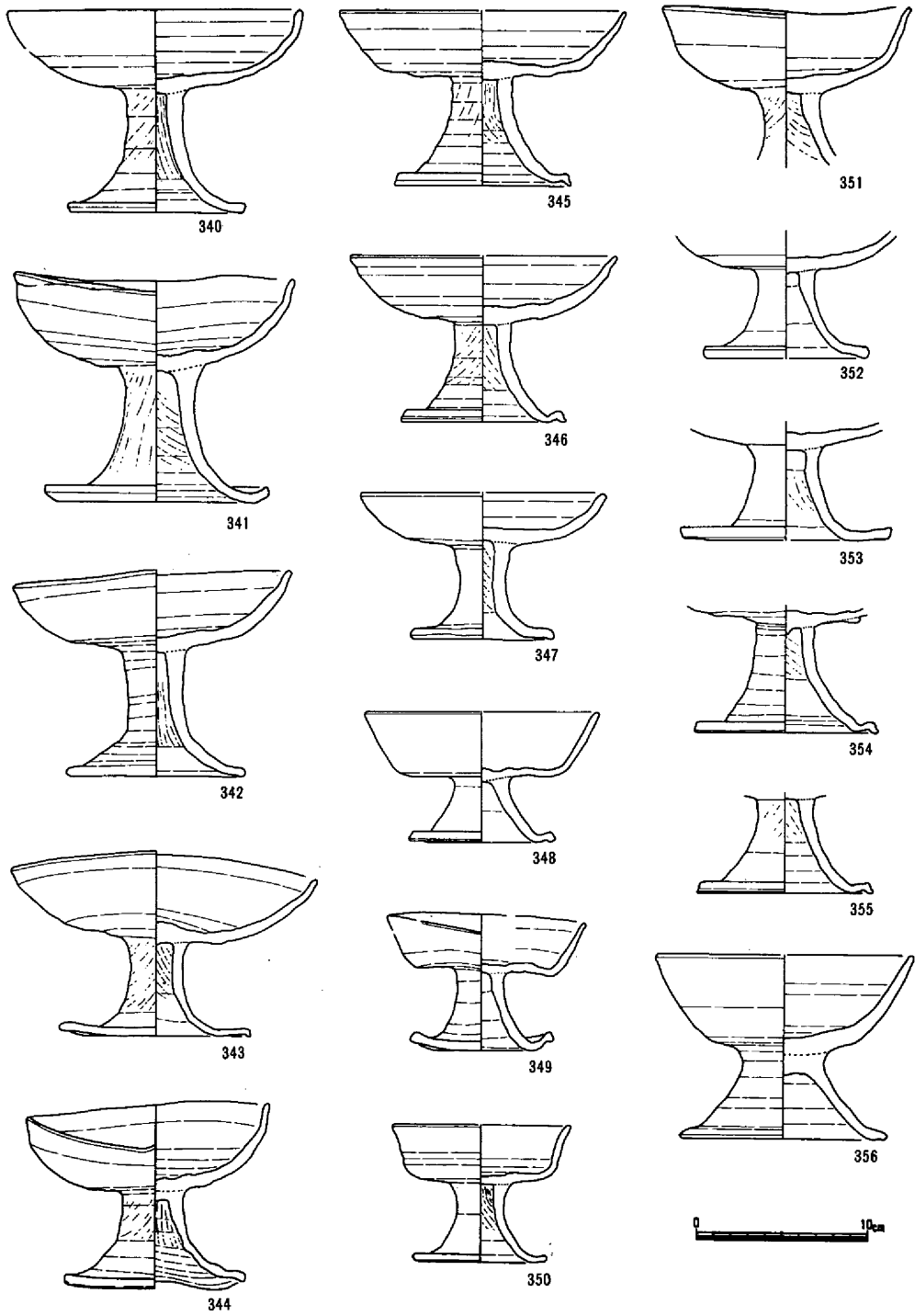
第43図 灰原2出土遺物（椀、皿、高杯）（1/4）

遺物（第39～54図）

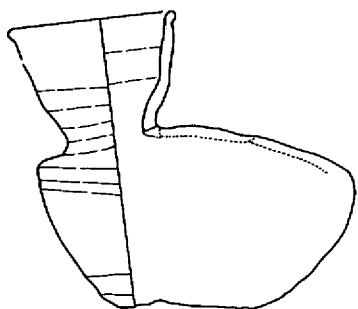
出土した遺物は須恵器の杯、杯蓋、皿、高杯、平瓶、甗、長頸壺、短頸壺、横瓶、甕、盤、甑、円面硯、土師器の甕である。以下その概要を記す。

杯蓋（201～273）

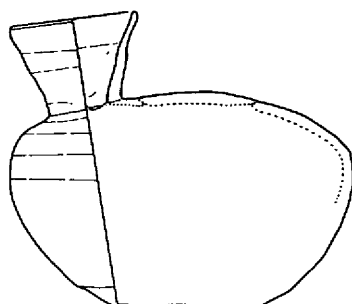
201～203は口径12cm前後で高さ4cmを測る。天井部はへら起こし未調整で口縁部がやや垂直に屈曲している。204～207は杯蓋ではなく壺の蓋の可能性が考えられる。口径8.5～10cmを測り、つまみはやや丸味を帯びた擬宝珠状で、器高が低くやや扁平な体部である。内面には小さなかえりが付く。208～210は無台杯身の蓋で口径12～13cmで天井部から体部にかけて丸味を帯びていて、天井には擬宝珠状のつまみが付き、内面には若干下方に突き出すかえりが付き、内



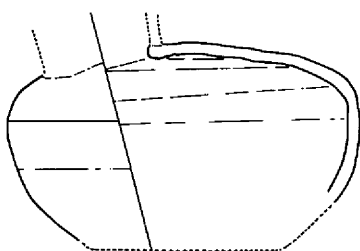
第44図 灰原2 出土遺物（高杯）（1/4）



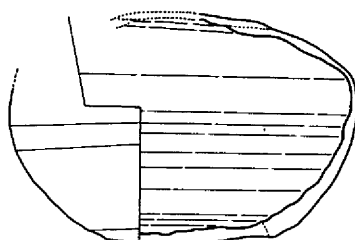
357



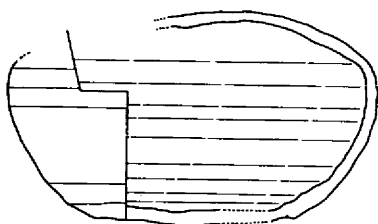
360



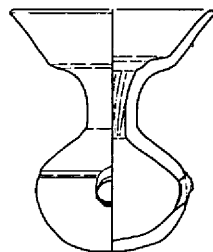
358



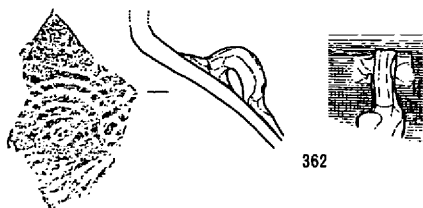
361



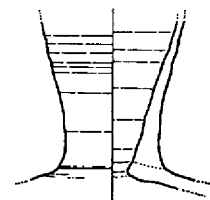
359



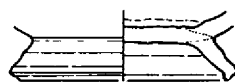
363



362

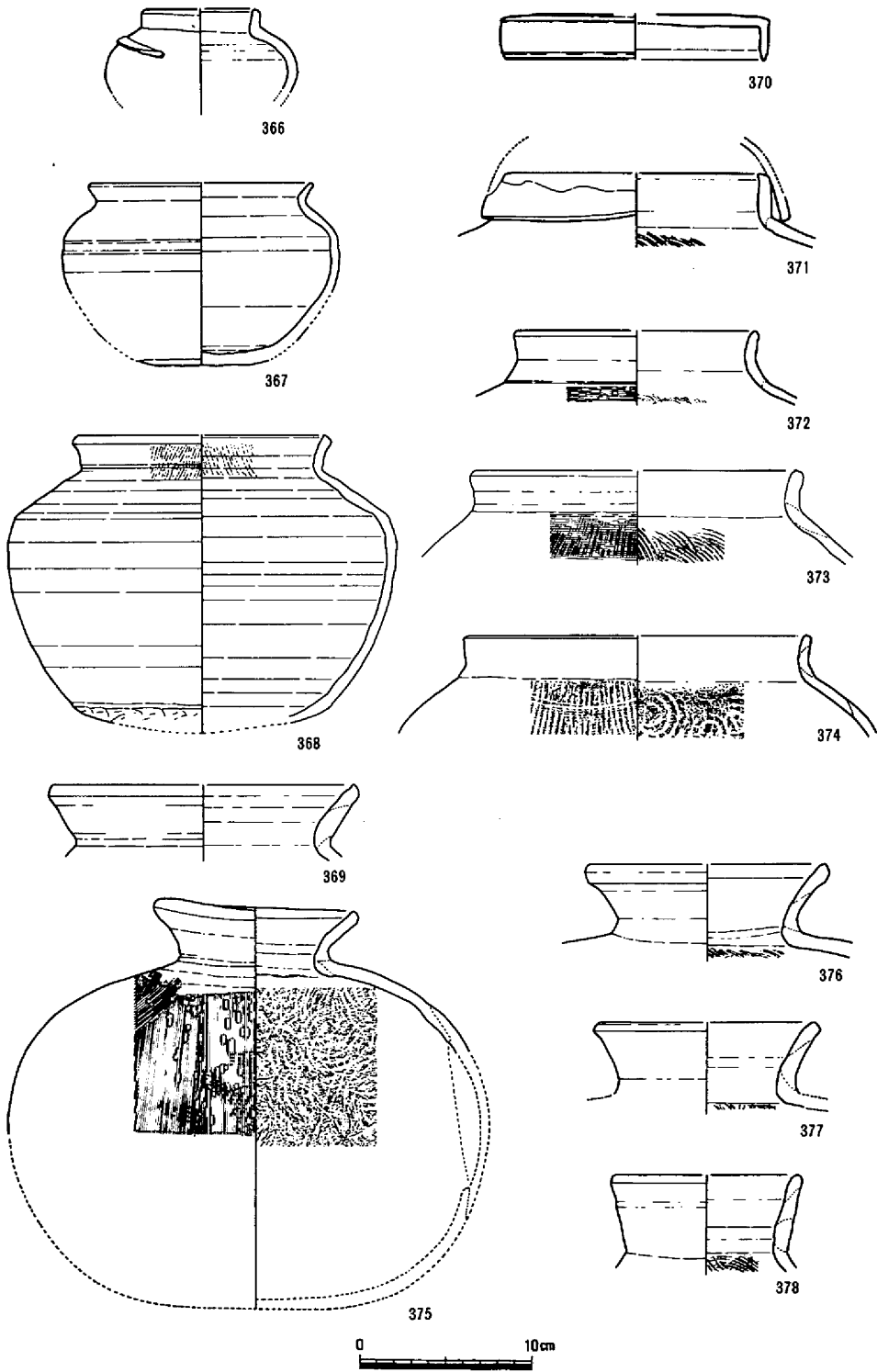


364

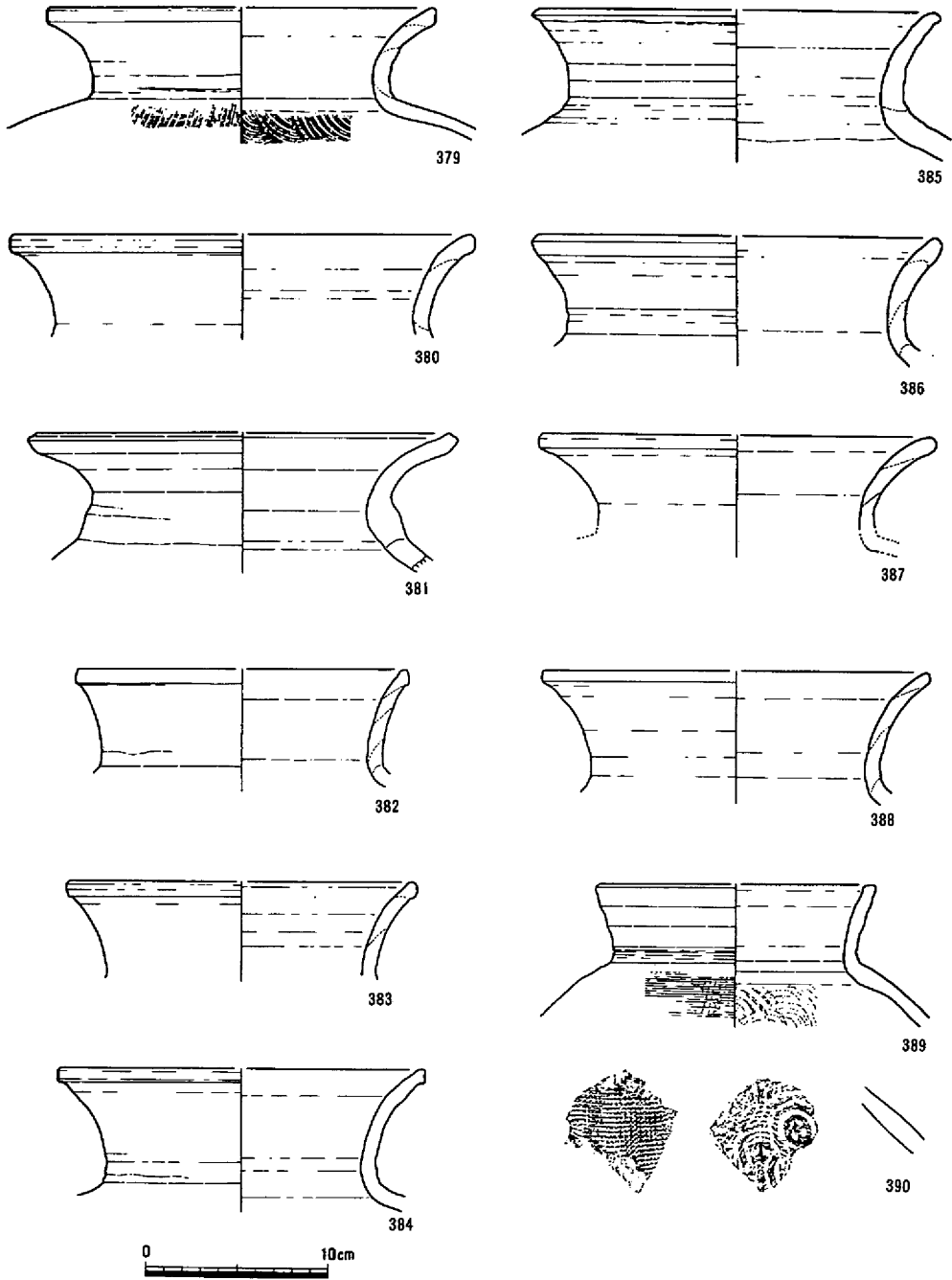


365

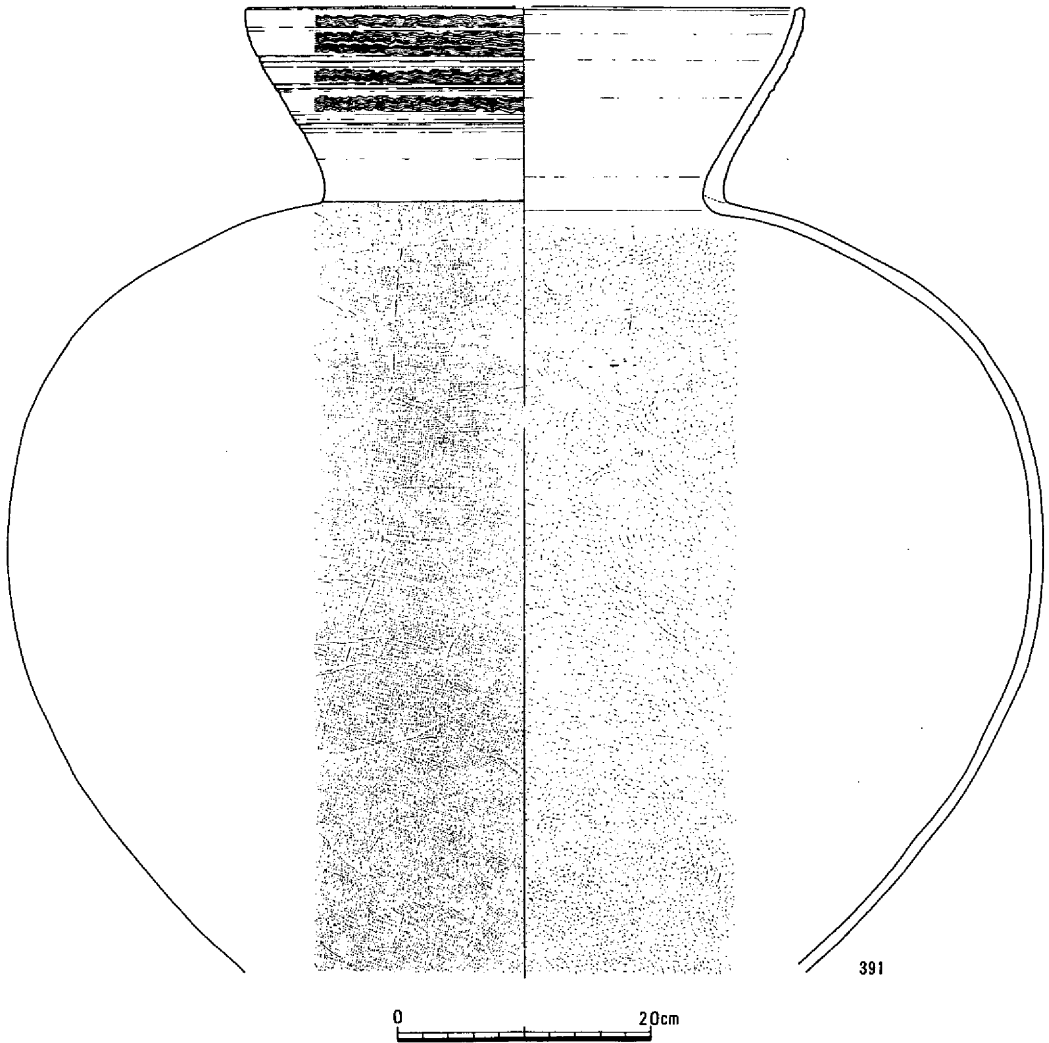
第45図 灰原2 出土遺物 (平瓶、甗、長頸壺) (1/4)



第46図 灰原2出土遺物（壺、蓋、その他）（1/4）

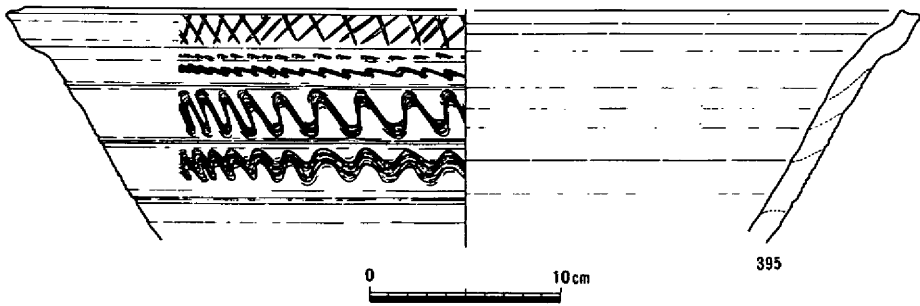
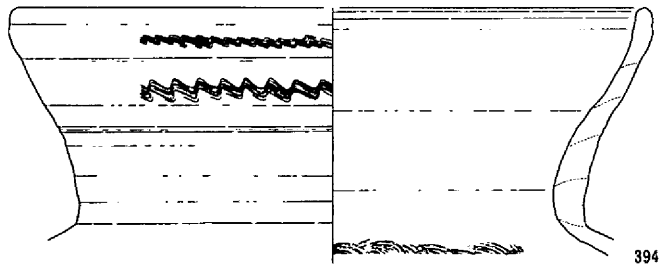
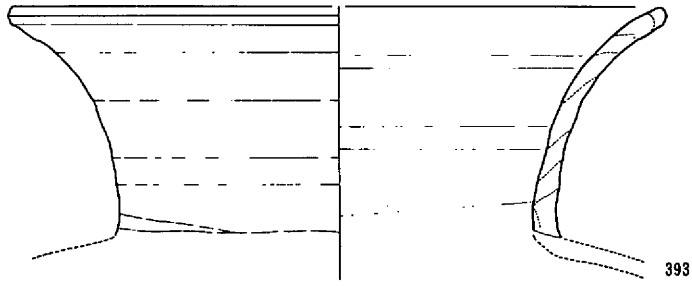
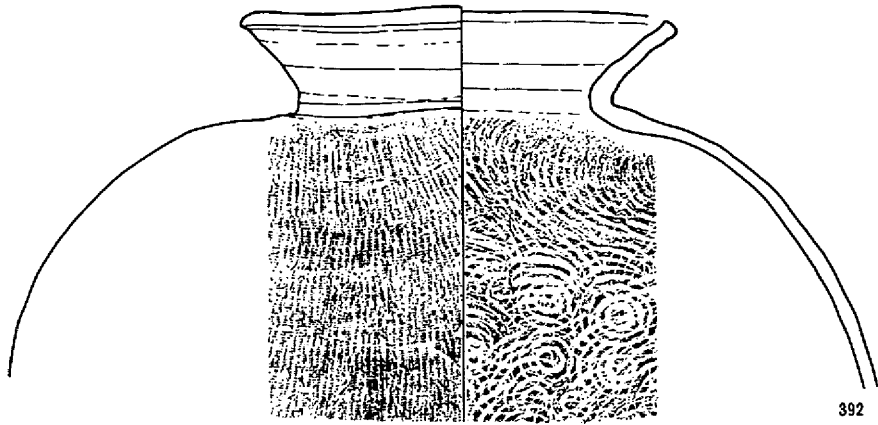


第47図 灰原2出土遺物(甕)(1/4)

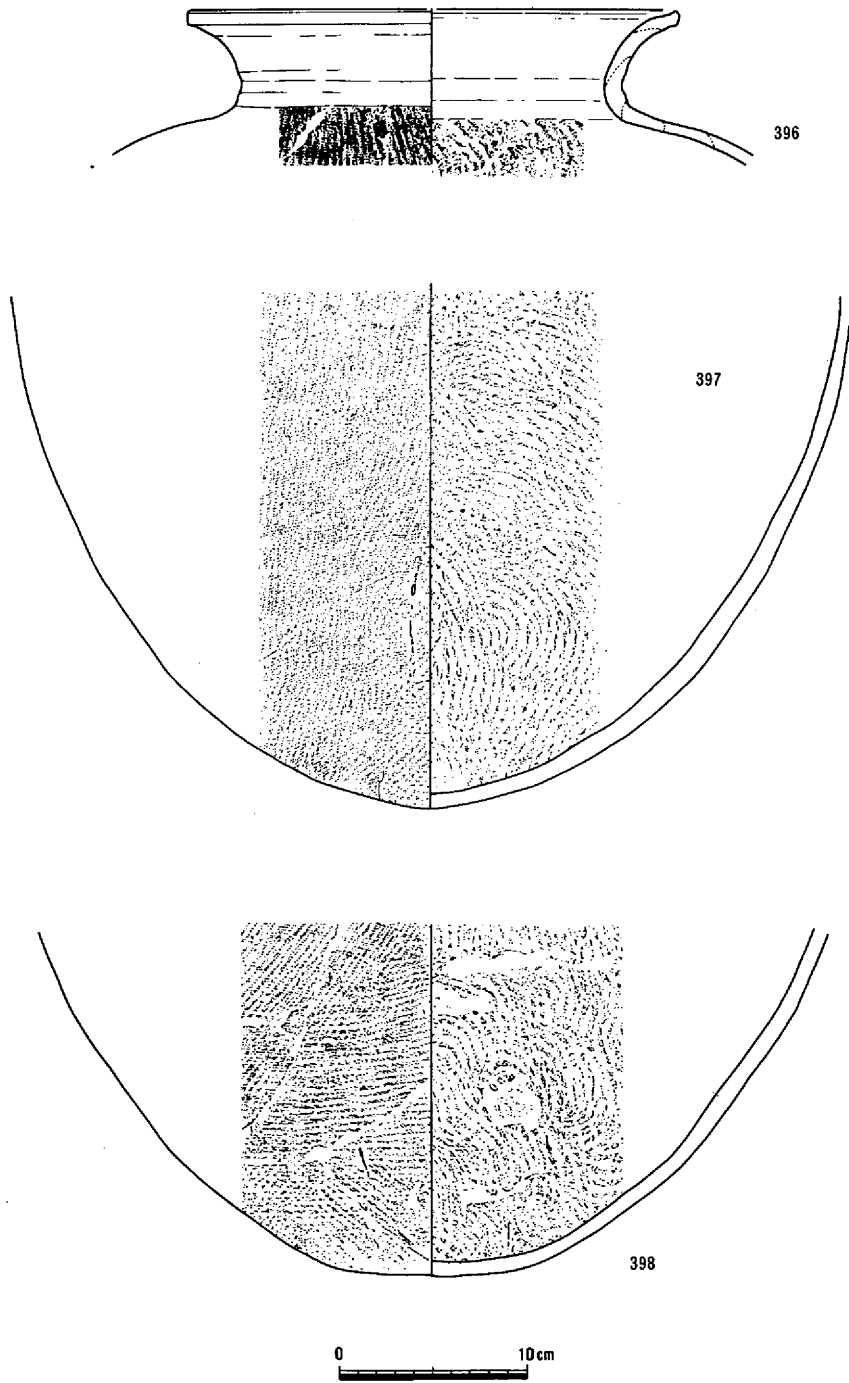


第48図 灰原2出土遺物（甕）（1/6）

面には若干下方に突き出すかえりがつく。211・212は有台杯身の蓋で口径15～19cmを測る。体部はなだらかに伸び211は天井部に円盤状の低いつまみが付く。内面には若干突き出るかえりが付く。212はつまみを欠損しているが、擬宝珠状のつまみが付くと想定される。213～222は無台杯身の蓋で口径11～13cmである。天井部は回転ヘラケズリの後基石状のつまみが貼付され、体部は直線的に伸び口縁端部を直角に折り返している。223～241は口径15～16cmを計る。天井部はヘラ起こしの後ナデが回転ヘラケズリで、223、224は擬宝珠状のつまみ、他は基石状のつまみが貼付されている。つまみの形状は仕上げが雑で中心に位置しないものもある。天井部から

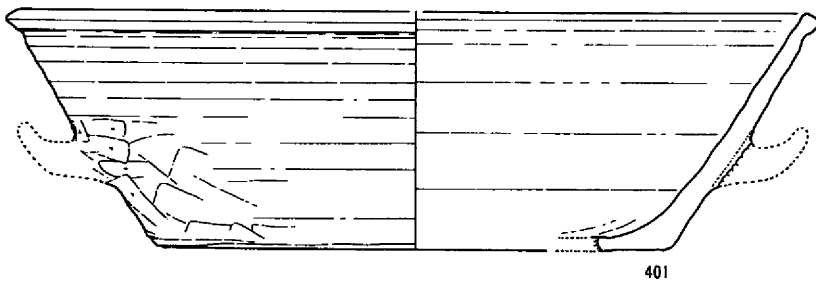
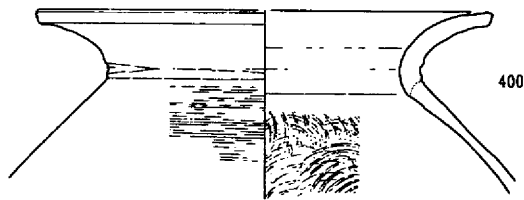
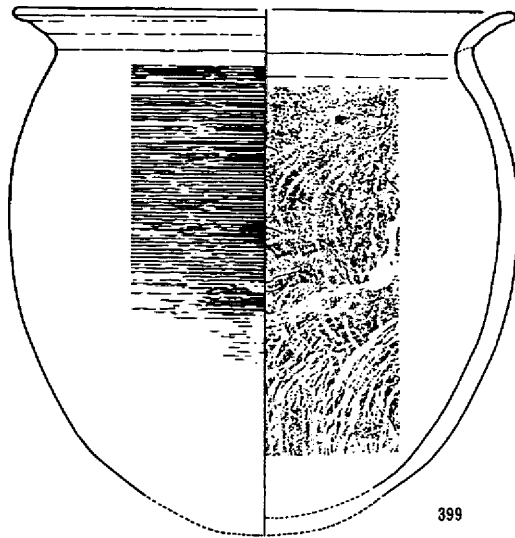


第49図 灰原2出土遺物(甕)(1/4)

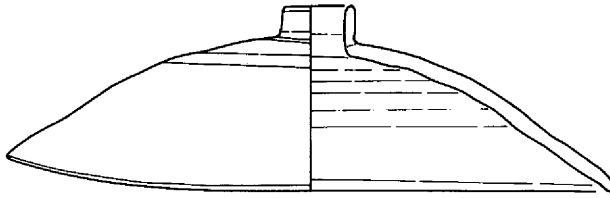


第50図 灰原2出土遺物(甕)(1/4)

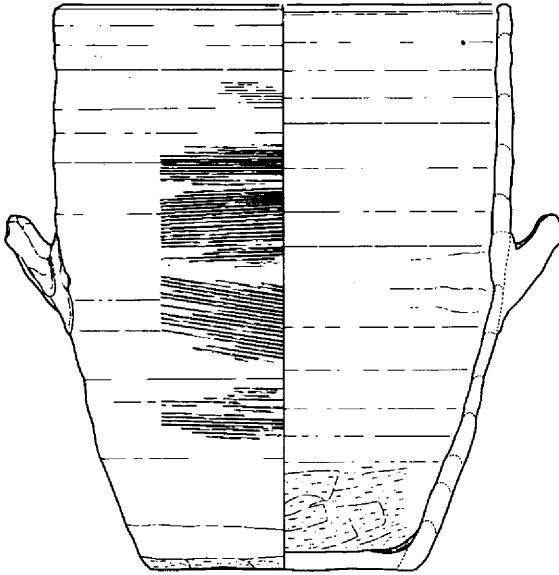




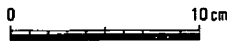
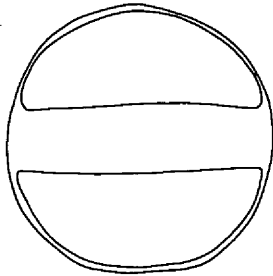
第51図 灰原2出土遺物（甕、盤）（1/4）



402



403

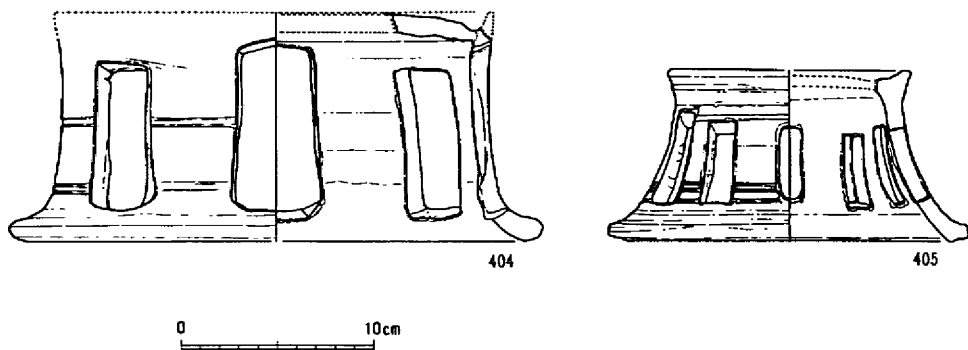


第52図 灰原2出土遺物(甑)(1/4)

蓋と思われる。

杯身 (274~306)

体部はほぼ水平で全体的に扁平な器形である。口縁端部はほぼ直角に折り返されている。242~256は口径16~17cmで天井部から体部にかけて丸味を帯び口縁端部は緩やかに下方に折り返されている。天井部は回転ヘラケズリの後基石状のつまみが貼付されているが、その形は一定ではなく扁平なものもある。257~261は口径16cm前後で体部は丸味をもち口縁部でやや屈曲し端部は丸く折り返されている。つまみは回転ヘラケズリの後にやや扁平な基石状のものが貼付されている。内面には不整方向のナデが加えられている。262は口径22cmで天井部から体部にかけて屈曲し口縁部はほとんど折り返していない。263~269は口径18~20cmで天井部から体部にかけて緩やかに丸味を帯びて口縁端部は凹をもって折り返されている。天井部は回転ヘラケズリの後、基石状もしくは円盤状のつまみが貼付されている。270~279は口径19~20cmで体部は緩やかに伸び口縁部はやや外傾して折り返されている。全体的に扁平な器形である。天井部は回転ヘラケズリの後、円盤状のものが付く。223~273はすべて有台杯身の



第53図 灰原2出土遺物(硯)(1/4)

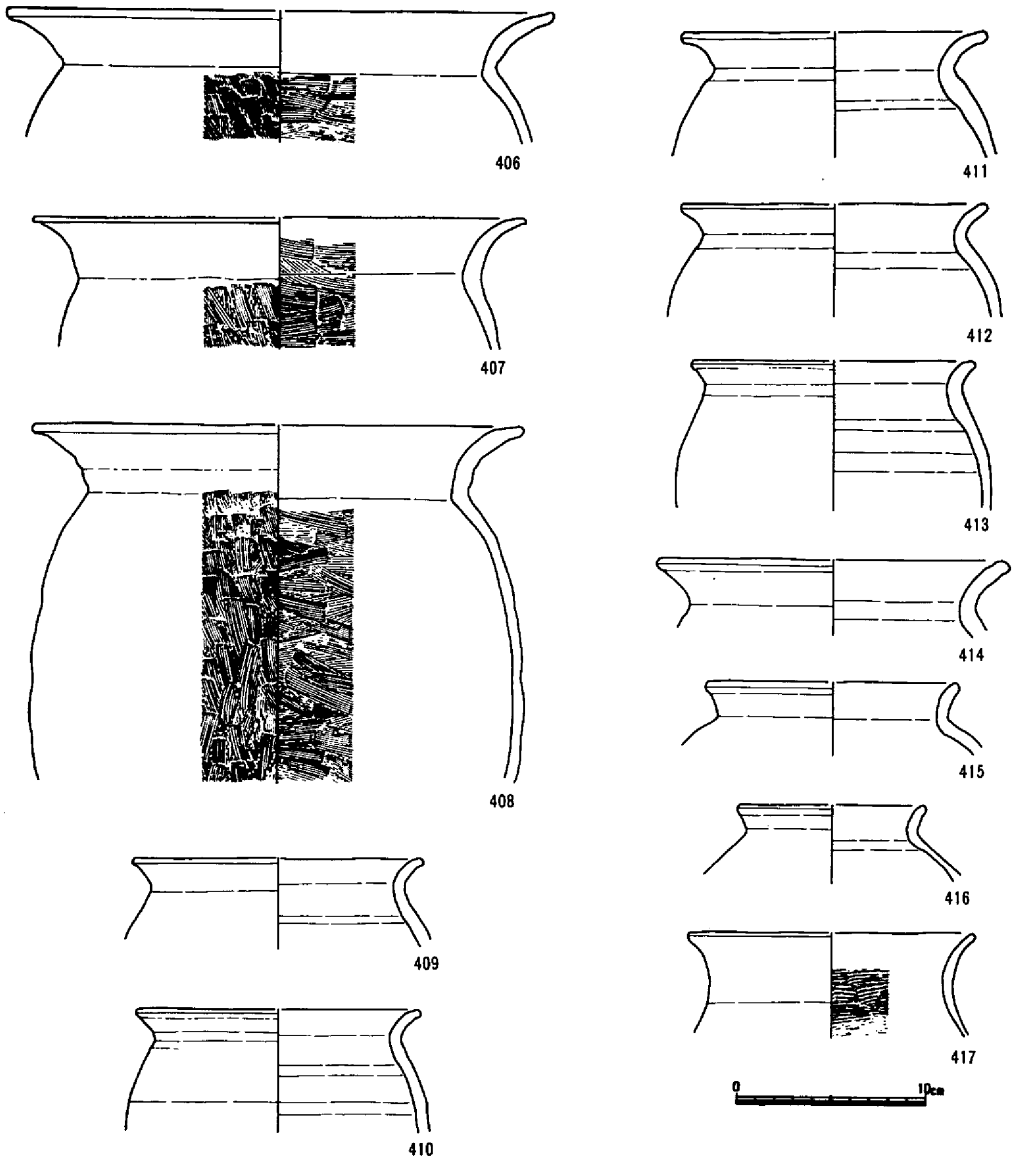
274~275は口径12cmで体部は丸味を帯びて立ち上り受け部は内彎気味に立ち上る。立ち上り部は低くわずかに突き出す。276~283は口径10~11cmで底部はやや丸底気味でへら起こしの後未調整のものが多い。体部は丸く口縁部はやや外反気味である。289は口径がやや大きく12cmである。290~306は口径13~14cmで器高も比較的高い。底部はへら起こしの後ナデで平底気味のものが多い。底部から体部は外傾気味に立ち上り口縁部は直線的にやや外反する。306は重ね焼きの状態のままで溶着している。

#### 有台杯身(307~324)

307~310は口径13cm前後底径9~10cmを測る。比較的ふ厚い底部と体部の境は明瞭ではなく体部は丸味をもって立ち上り、口縁部はやや外反する。底部はへら起こしの後ナデで「八」の字状に開く高い高台が貼付されている。311~315は口径16~17cm、底部11cmで口縁部と体部の境が緩く屈曲している。底部はへら起こしの後ナデで外傾もしくは内彎する高い高台が貼付されている。316~318は比較的小型で口径14~15cm底径10cm前後で器高も低い。319~322は口径15~16cmで底径9~10cmを測る。底部から体部は緩やかに立ち上り口縁部は短くやや外傾気味に立ち上る。底部はへら起こしの後ナデで外傾する高台が付く。323は高台を欠損しているが口径16cm器高は他のものより高く9cm前後と思われる。底部はへら起こしの後ナデで体部は緩やかに外傾し口縁端部がやや外反する。324は口径19cm底径13cmを測り比較的大型である底部はへら起こしの後ナデで中央部が高台より若干突出する。体部は緩やかに屈曲して口縁部はやや外傾する。高台は低く小さなものが外傾して貼付されている。

#### 椀(325~327)

口径17~19cm、高さ7~8cmを測る無台の椀である。底部はへら起こしの後ナデで丸味をもった体部との境は明瞭ではなく、口縁部はやや外反する。



第54図 灰原2出土遺物（土師器壺）(1/4)

皿 (328~330)

口径20cm前後で底部は丸底で器壁の厚いものと薄いものがある。口縁部は緩やかに屈曲し端部は丸く仕上げられている。底部の外表面はヘラ起こしの後ナデで328はハケ調整が施されている。

高杯 (331~356)

331~329は低脚の高杯である。杯部は口径19cm前後で、口縁部が丸味をもって立ち上るものと緩やかに屈曲するものがある。脚部は底径11cm前後で高さ2~3cmを測り端部に面をもち上

方につまみ上げたものもある。340～356は長脚の高杯である。340～352は比較的大型で杯部の体部が丸味を帯びて立ち上る。脚部も6～7cmで高く端部が屈曲して折り返されたものと、なだらかに丸く仕上げられたものがある。外面はヨコナデの後縦方向のシボリが加えられている。353～355は小型の高杯で杯部は口縁部が屈曲して直線的に立ち上る。脚部も比較的低く4cm前後で、端部が屈曲して短く折り返されている。356は口径15cm高さ10cm底径12cmを測り杯部は底部が厚く、口縁部は緩やかに屈曲して直線的に立ち上る。脚部は厚い天井をもちラッパ状になだらかに開き、端部は丸く仕上げられている。

#### 平瓶 (357～361)

357は体部から肩部が鋭角に屈曲し、比較的大きい注口部が付く。358～361は体部から肩部へ緩やかに屈曲し器高が高い。注口部は直線的に開き底部はいずれも指頭圧痕が残る。357、360、361は天井中央にやや盛り上った円板で塞がれている。358、359は天井部に円板充填がなくヨコナデが残っているため、底部から塞がれた可能性が考えられる。

#### 把手付甕 (362)

肩部に把手の付く小型の甕と思われる。把手は板状の粘土を折り曲げ貼付している。外面はカキ目調整、内面は同心円タタキである。

#### 甕 (363)

口径11cm高さ13cmを測り口径が体部最大径を上まわる。頸部は細く口縁部はラッパ状に開く。体部には凹線が巡りやや斜めに穿孔されている。

#### 長頸壺 (364～365)

364は頸部の破片で、口縁部は薄く開くと思われる。内外面ともヨコナデである。365は底部の破片で外傾する高い高台が付く。

#### 短頸壺 (368～370)

366は小型で口径7cmを計る。内外面ともヨコナデで垂直に立ち上る短い口縁部が付く。肩部には焼成時に蓋が溶着している。367は口径13cmを計り口縁部はやや開き内外面ともヨコナデである。368は口径15cmを測り体部から肩部がやや鋭角に屈曲する。内外面ともヨコナデであるが口縁部の外面には縦方向のハケ調整が施され底部にはヘラケズリが加えられている。369はやや外傾する口縁部の破片である。370は壺の蓋で口径15cmを測り口縁部は直角に屈曲する。内外面ともヨコナデでつまみは欠損している。

#### 甕 (371～374)

口縁部がまっすぐに立ち上る短頸の甕である。頸部は緩やかに屈曲するのが特色である。外面は平行タタキの後カキ目調整で371は蓋が溶着している。

#### 横瓶 (375～378)

375は体部上半の破片である。ほぼ球形の体部で口縁部は「く」の字状に屈曲する。外面は平行タタキの後カキ目調整、内面は同心円タタキである。また開口部を塞いだ円板が一部残存する。376～378は口縁部の破片で「く」の字状に開くものと外傾するものがあり、いずれもヨコナデである。

#### 甕 (379～400)

379～379はいずれも中型の甕である。口縁部は389以外は緩やかに外反しながら立ち上り、端部が丸く仕上げられたものと面をもち凹線が巡るものがある。いずれもヨコナデで389は口縁が外傾気味に直線的に立ち上る。390は体部の破片で内面には車輪状のタタキが残る。391は大型の甕で口径44cm体部最大径82cmを測る。体部はほぼ球型で外面が平行タタキ、内面が同心円タタキである。口縁部はやや内彎しながら立ち上り6～7条の浅いクシ描沈線の波状文を5列巡らしている。内面はヨコナデである。この甕は口縁部の破片が主として土壌15から出土し、体部はほとんど灰原から出土した。焼成時の焼き歪みがはげしく亀裂を生じている。392は「く」の字状に外反する口縁部をもち体部はほぼ球型で外面は平行タタキ内面は同心円タタキである。393は緩やかに外反する口縁部で内外面ともヨコナデである。394は口縁部がやや内彎気味に立ち上り端部は丸く仕上げられている。外面には2列のクシ描波状文を巡らし内面はヨコナデである。395は大型の甕で口縁部は外傾気味に立ち上り端部には段をもちわずかにつまみ上げている。外面にはヘラ状工具による斜格子分、3列のクシ描波状文が巡っている。396は緩やかに外反する口縁部で内外面ともヨコナデである。体部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキである。また焼成、胎土などから397か398のいずれかと接合する可能性が高い。397、398は甕の底部の破片である。ほぼ丸底を呈し外面は平行タタキ、内面は同心タタキである。399はなだらかな体部から口縁部は「く」の字状に外反し端部は丸く仕上げられている。体部は外面がカキ目調整、内面が同心円タタキである。底部は丸底気味になっていたと思われる。器形的には土師器の長甕に似たもので他に例はない。400はなだらかな肩部からの口縁部が緩やかに外反する。体部は外面がカキ目調整、内面は同心円タタキである。

#### 盤 (401)

破片であるが口径43cmを測り平らな底部から体部は外傾して立ち上る。口縁部はやや肥厚する。把手は欠損しているが貼付された基部はヘラケズリを加えている。体部は内外面ともヨコナデである。

#### 甗 (402、403)

402は甗の蓋と思われるが甕の蓋の可能性もある。体部は内外面ともヨコナデでラップ状に開き端部は丸く仕上げられている。天井部は回転ヘラケズリが施され、直径4cmの小さな口が貼付されている。403は口径24cm底径14cm高さ30cmを測る。体部は底部にかけてしばむ円筒形で中

程に扁平な把手が貼付されている。底部は幅約3.6cmの粘土板が中央に渡されて貼付されている。また底部の内外面には横方向のヘラケズリが加えられている。体部の外面はヨコナデの後カキ目調整、内面はヨコナデである。

#### 円面硯 (404、405)

404は陸の部分をほとんど欠損し脚部は緩やかに開き端部は丸く仕上げられている。透しは長方形で破片のため正確には不明であるが8個穿孔されていたと思われる。焼成は良好であるが1～2mm大の砂粒を多量に含む。405は陸部を欠損している。脚部は肥厚しながら広がり端部は面をもち、上端はつまみ上げられている。内外面ともヨコナデで推定で12コと思われる方形の透しが穿孔されている。

#### 土師器甕 (407～417)

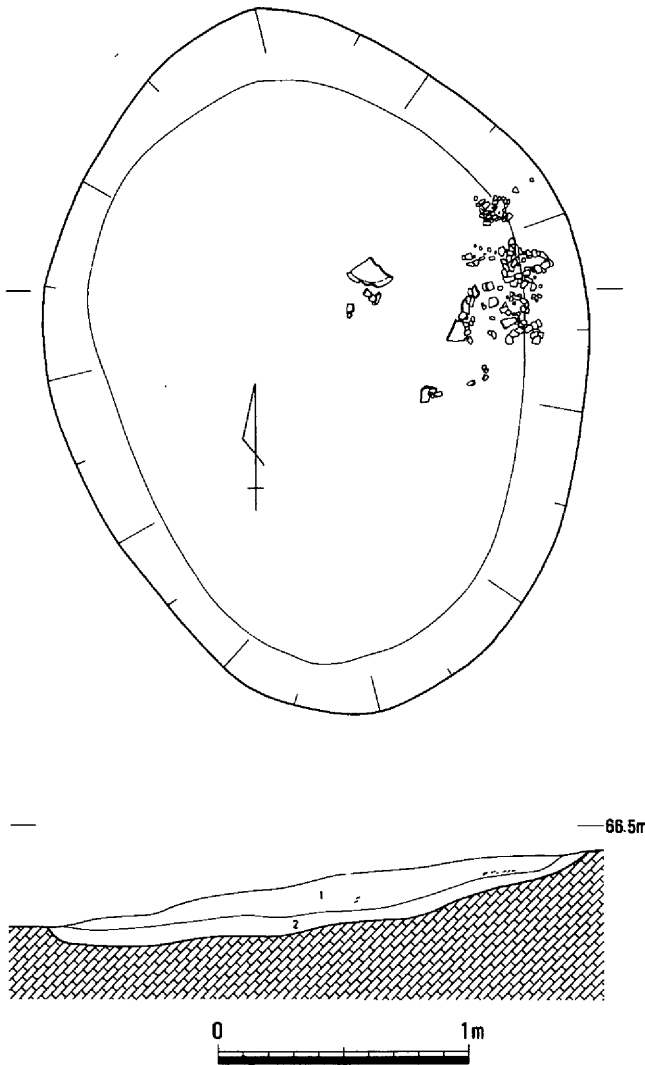
406～408は長甕の破片で口縁部はヨコナデで「く」の字状に緩やかに外反し、体部は外面が縦方向、内面が横方向のハケ調整である。409～416は小型の甕で土壌2の505と同じものである。体部はほぼ球型で口縁部は緩やかに外反する。内外面ともヨコナデであるが外面は被熱による風化でカキ目調整は不明である。417は口縁部がわずかに外反し内面はハケ調整である。

#### 土壌1 (第55、56図)

土壌1はE5グリッドの北西隅の緩斜面に位置する。規模は長軸2.8m、短軸2.2m、深さ20cmを測る楕円形の土壌である。覆土中より須恵器杯、杯蓋、皿、土師器杯、甕、そして製塩土器の細片が多量に出土した。418は須恵器の杯蓋で口径15cmを測り、平らな天井部には回転ヘラケズリが施され基石状のつまみが貼付されている。419～421は無台の杯身で口径14～14.5cmを測り、底部はヘラ起こしの後ナデを加えている。422は皿で口径20cmを測り底部はヘラ起こし未調整で体部との境は鋭く屈曲して立ち上る。内面には仕上げナデが施されている。423は土師器の甕である。頸部は「く」の字状に鋭く屈曲し、内面はナデ、外面は縦方向のハケを加えている。424は土師器の杯で底部はヘラケズリが施されている。内外面とも体部はヨコナデで赤橙色の丹が塗られている。425～435は製塩土器でいずれも破片のため口径が復元できたのは2点のみである。いずれも熱を受け器面が風化している。口縁部はやや直線的に内傾して立ち上るものと内彎するものがあり、内外面とも指頭圧の後ナデのものと、外面が横、斜め方向の平行タタキの後ナデのものがある。436～438は底部の破片で砲弾状を呈し、内外面とも指頭圧の後にナデを加え内面はヘラ状の工具によってナデ上げている。以上が遺物の概要であるが、この土壌が土器製塩に関係するというような痕跡は確認できず、土壌の周辺の包含層の遺物同様、使用后、破損した土器を遺棄したと思われる。また須恵器から考えてこの土壌の時期は8世紀の中頃と思われる。

#### E5区包含層 (第57、58、59、60、61図)

遺物はE5グリッドの南西に緩かに下がる斜面上から出土した。遺物を含む土は淡褐色土で炭・焼土を含む。杯蓋(439~444、466~468)口径が14~15cmのものとして19~23cmのものがあり天井部が水平で体部が屈曲するものは口径に関係なくやや扁平なつまみが付き、体部が緩やかに伸びるものは、基石状の丸味を帯びたつまみが付く。天井部は回転ヘラ削りが施され、内面はヨコナデであるが、439はヘラケズリではなくカキ目が天井部から体部にかけて施されている。また焼成は不良なものが多く白色を呈する。有台杯身(445~456)、445~454は、口径11~14cm、高さ4cm前後である。底部はほぼ水平で体部との境より直線的に外傾して立ち上り、端部がやや外反するものもある。

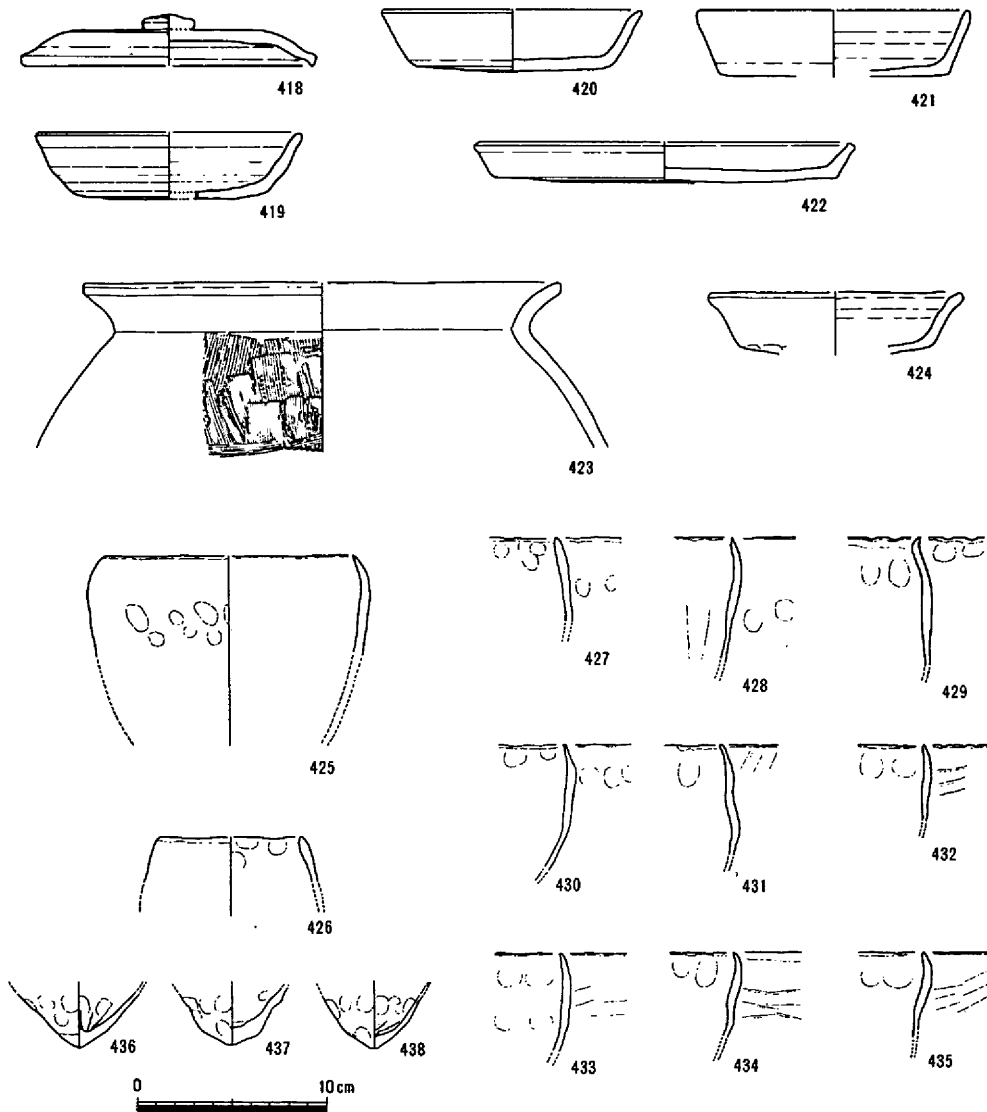


1. 明茶褐色土(焼土、炭を少し含む)
2. 暗褐色土(焼土、炭を多量に含む)

第55図 土壌1 平・断面図(1/30)

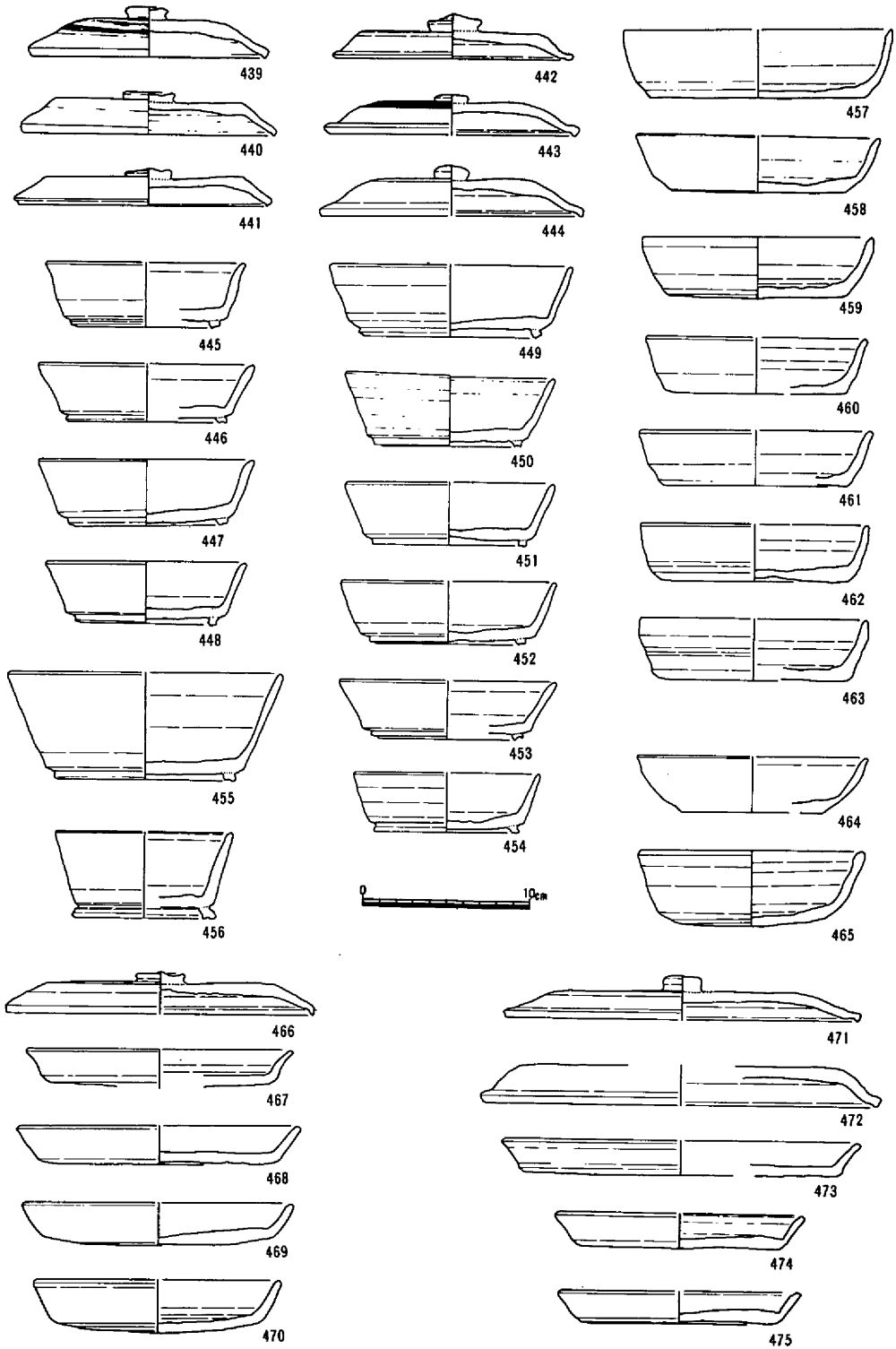
底部は回転ヘラケズリの後、小さな方形の高台が貼付され内面の底部は仕上げナデが施されている。455は大型の杯で口径16cm、高さ10.5cmを測り形態、技法は小型のものと同じである。456は比較的器壁が厚く、底径よりも外に出張るしっかりとした高台が貼付されている。無台杯身(457~465)口径13~16cmで水平な底部から体部は鋭く屈曲してやや外傾しながら立ち上る。口縁部はやや内彎気味で端部は丸く取められている。底部は465以外全面回転ヘラケズリもしくは外周回転ヘラケズリである。465はヘラ起こし未調整で口縁部と底部の形状が異なる。いずれも



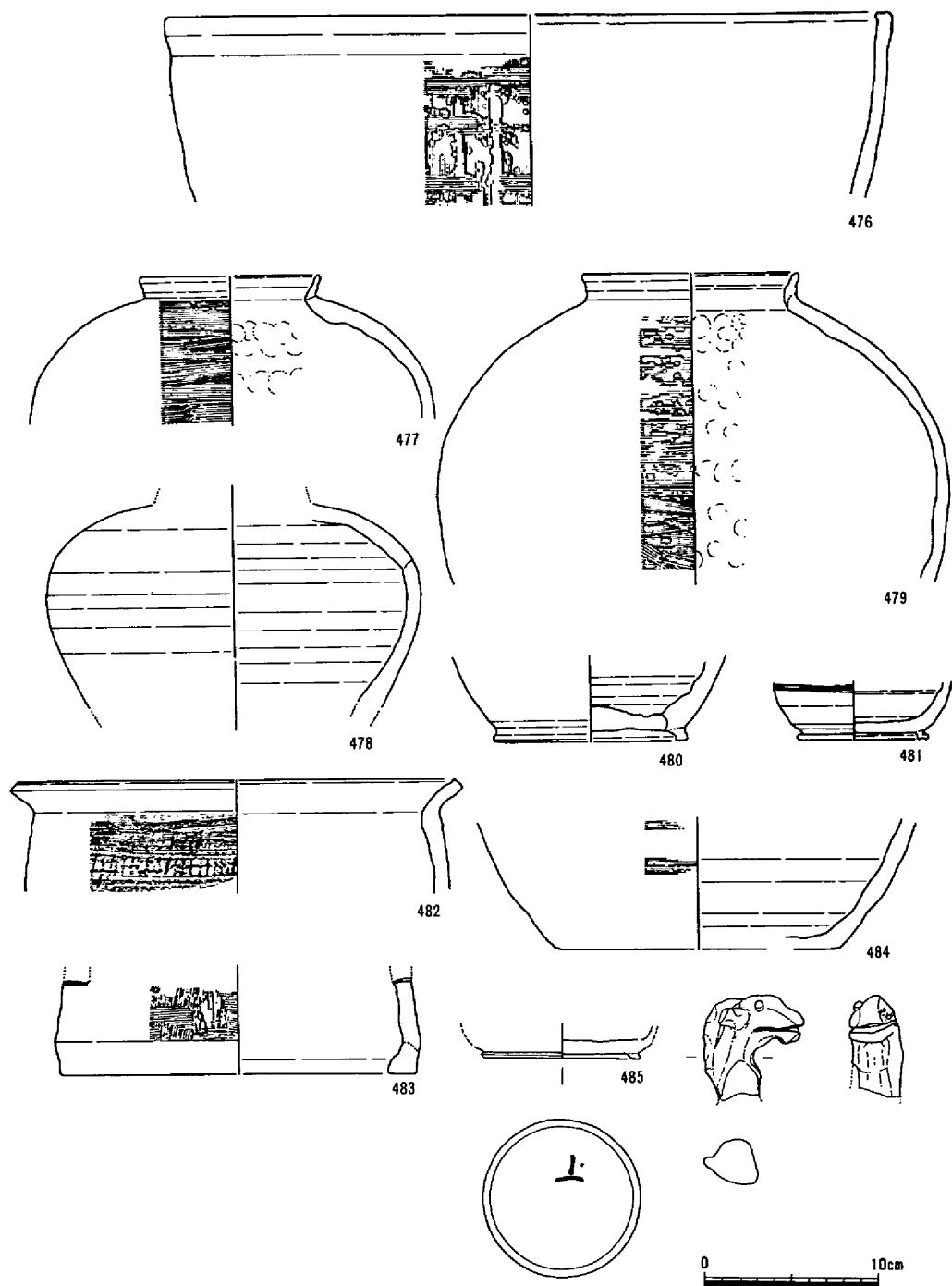


第56図 土坑 1 出土遺物 (1/4)

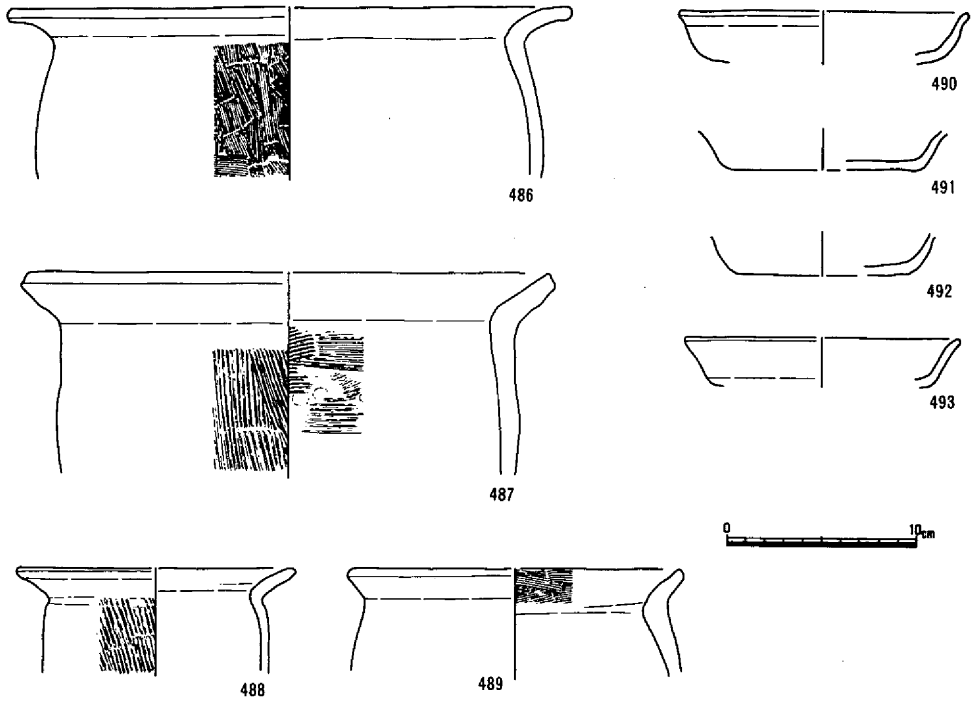
焼成は不良で軟質なものが多い。皿(469~475)、口径14~16cmのものと21cmのものがあり、底部は水平なものと若干丸味を帯びたものがあり、口縁部が外反気味に立ち上るものと直線的に立ち上るものがある。底部は回転ヘラケズリかヘラ起こしの後ナデを加えている。いずれも焼成は不良で、使用時の磨滅が見られるものもある。467、468は杯蓋ではなくこの皿の大型のもの蓋の可能性も考えられる。476は須恵器の甑の口縁部の破片である。口径41cmを測り外面は



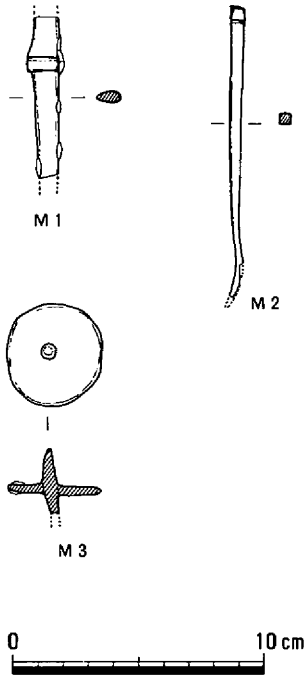
第57図 E 5区出土遺物(蓋、杯、皿)(1/4)



第58図 E 5区出土遺物(壺、甕、甌、土馬)(1/4)

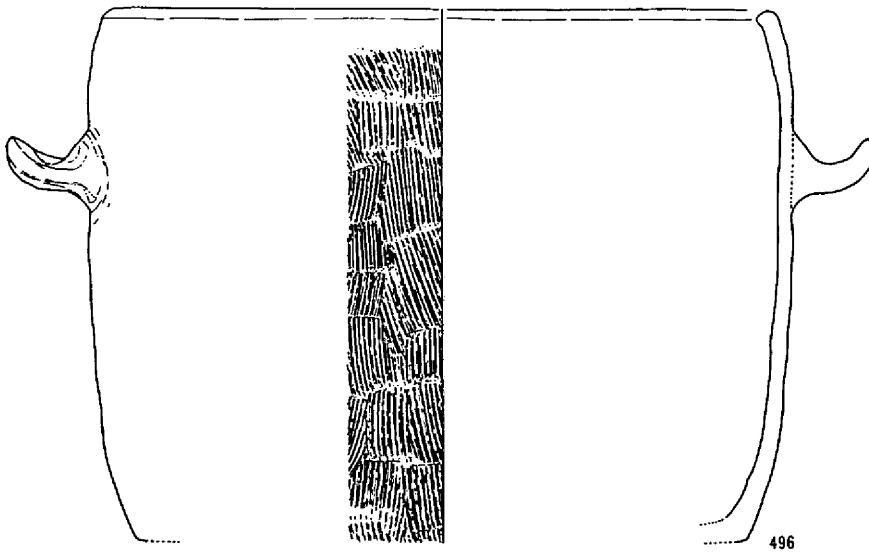
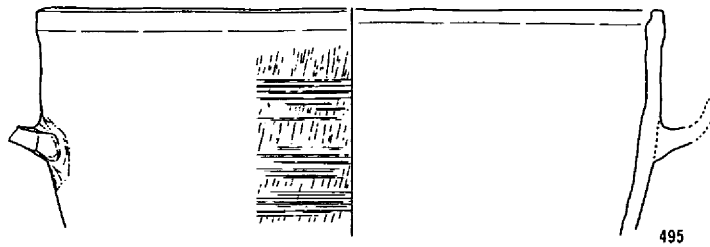
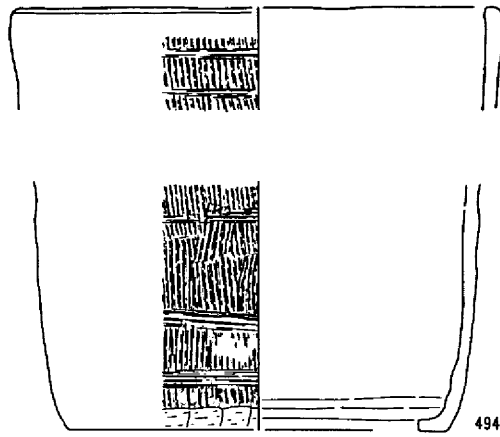


第59図 E 5区出土遺物（土師器甕、杯）(1/4)

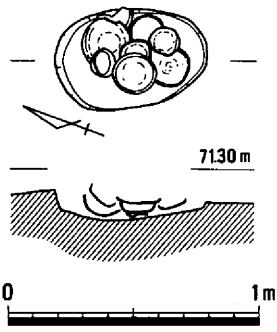


第60図 E 5区出土鉄器 (1/3)

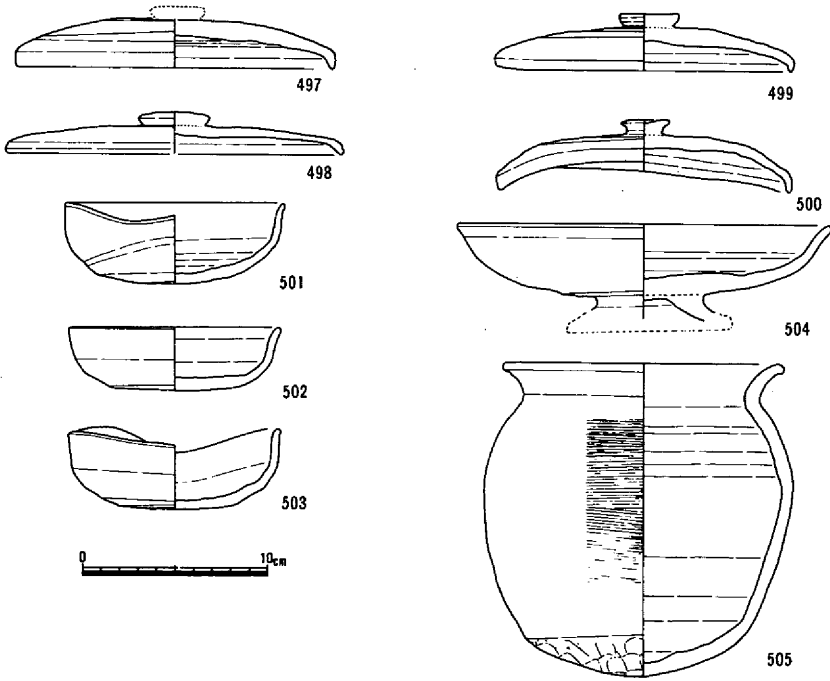
縦方向のカキ目の後にヨコ方向のカキ目が施され内面はナデである。焼成は不良で白色を呈する。477、478は須恵器の短頸壺である。体部はほぼ球型で口縁部は短かくやや外傾している。外面は横方向のカキ目が施され、内面は指頭圧の後ナデである。479～481は長頸壺の破片である。479はなだらかに丸い肩部で内外面ともヨコナデである。480は底部のみであるが、やや外傾する小さな高台が付く。481は小型で外面はカキ目が施されている。482、483は甕である。482は頸部が緩やかに屈曲し、外面は格子目タタキの後、カキ目が加えられ、内面はヨコナデである。483は底部の破片で水平な底部から体部は内彎気味に立ち上る。底部はヘラケズリが施され体部外面はヨコナデの後カキ目、内面はヨコナデである。484は器種が不明で円筒状を呈し方形の透しが付く外面は、甕と同様のカキ目が施され内面はヨコナデである。485は須恵器の有台杯身の底部である。底径9cm



第61図 E 5区出土遺物（甑）(1/4)



第62図 土壌2  
平・断面図 (1/4)



第63図 土壌2出土遺物 (1/4)

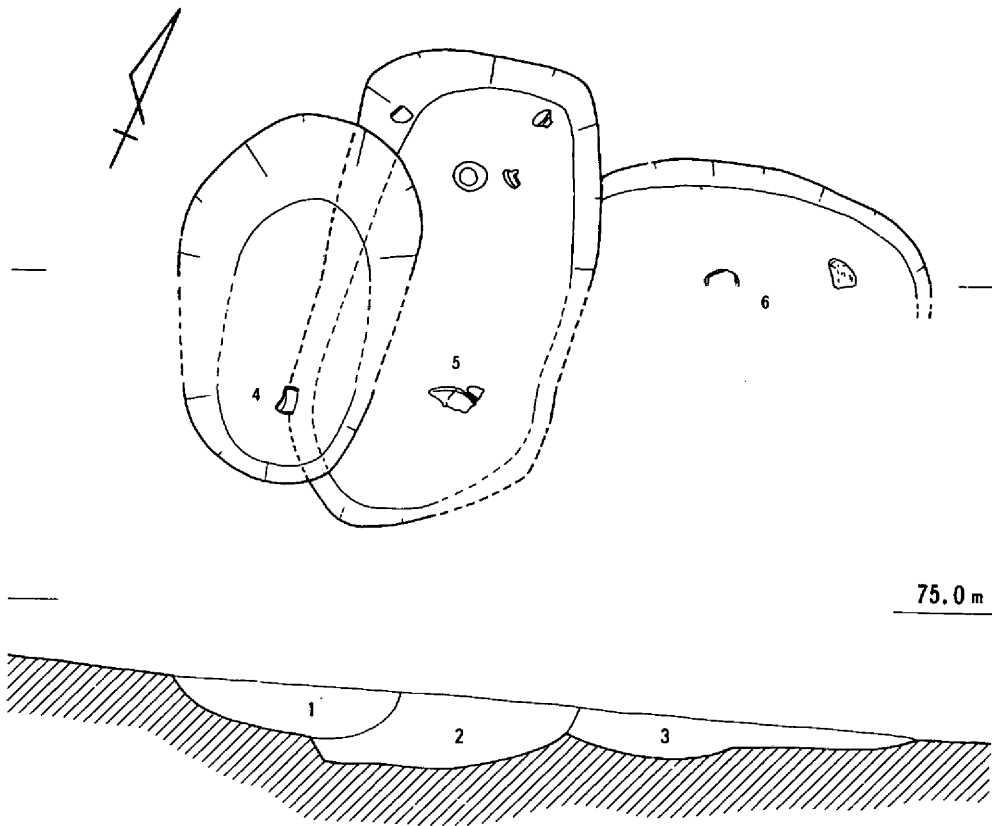
を測りへら状の工具により「上」と描かれている。これはへら記号とも考えられるが、線の最初と止め方が文字を意識した描き方と思われるので「上」の字の可能性が高い。他にへら記号をもつものはない。C4は土師質の土馬である。首から頭にかけての破片で、全体的にナデと指頭圧で成形され、その後耳と目を貼付したと思われる。口はへらによって切っている。胎土は砂粒を含まず赤褐色を呈する。487～490は土師器の甕である。口縁部が「く」の字状に屈曲するものと、やや端部が垂れ気味なものがある。

外面はいずれも縦方向のハケで口縁部はヨコナデである。内面は横方向のハケを加えるものとナデのものがある。

491～494は土師器の杯で、口縁部はいずれもやや外反する。底部はへラケズリで体部はヨコナデである。内外面とも赤褐色の丹が塗られ、胎土は砂

粒を含まず水漉した粘土を使用したと思われる。495～497は土師器の甑である。495は把手を欠損し、体部から口縁部はやや外傾する。

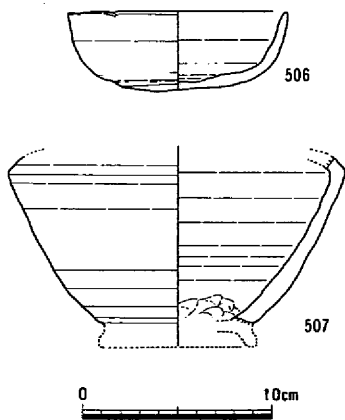
底部の端部はへラケズリが加えられ水平に屈曲する。外面は縦方向のハケの後、横方向のハケがカキ目状に巡っている。496は扁平な把手が付き縦方向のハケの後やはり横方向のカキ目状



1. 黄茶褐色土
2. 淡黄茶褐色土(炭を少し含む)
3. 黄茶褐色土



第64図 土壌4・5・6 平・断面図 (1/30)

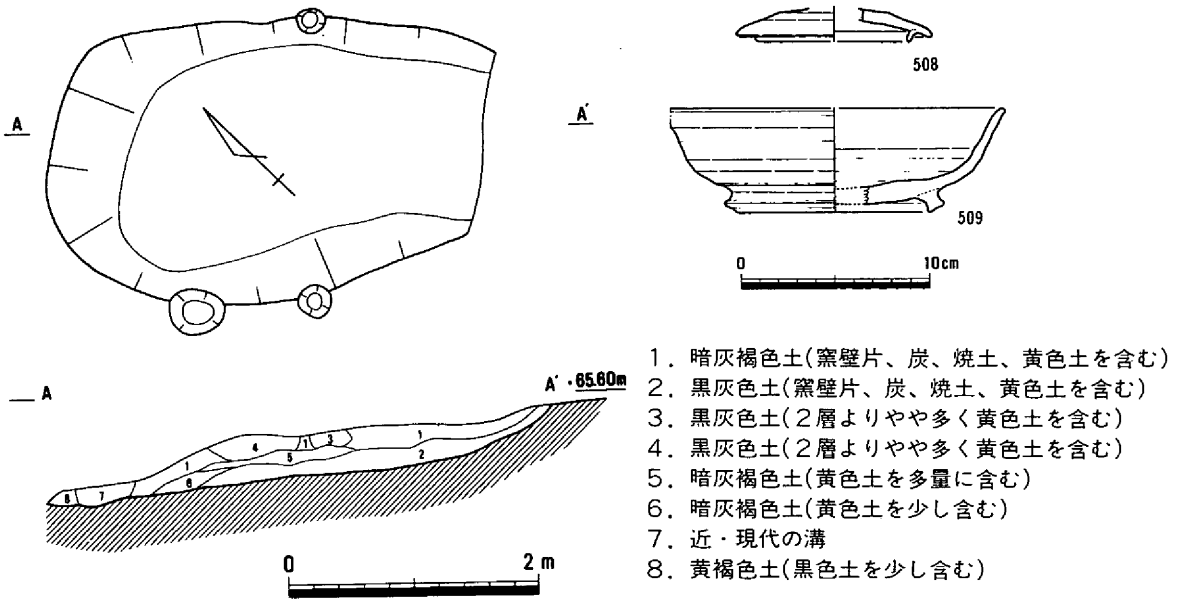


第65図 土壌5 出土遺物 (1/4)

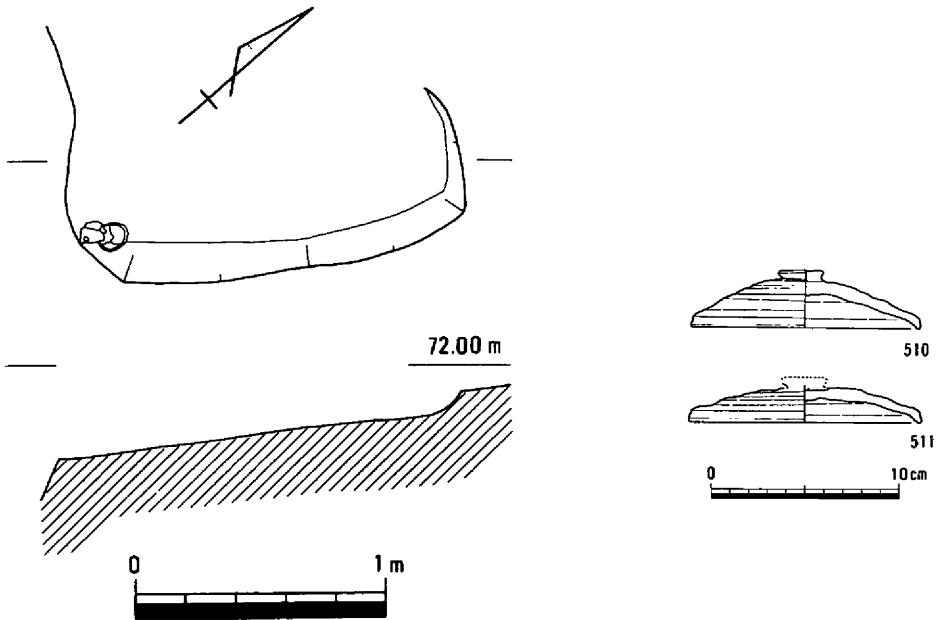
のハケが施され、内面はナデである。497は底部の端を欠損している。体部はほぼ垂直で口縁部がやや内彎し、端部は肥厚する。把手は扁平なものが貼付され外面は縦方向のハケ、内面はナデである。以上が遺物の概略であるが、この包含層の遺物はほぼ同時期のものと考えられることから、土壌1と同様、破損、廃棄されたものと思われ、時期としては8世紀中頃が考えられる。

土壌2 (第62、63図)

土壌2はC4グリッドの北西に位置し平面は楕円形を呈する浅い土壌である。長軸60cm、短軸30cm、深さ10cm

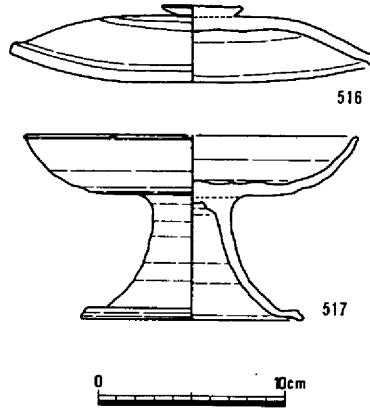
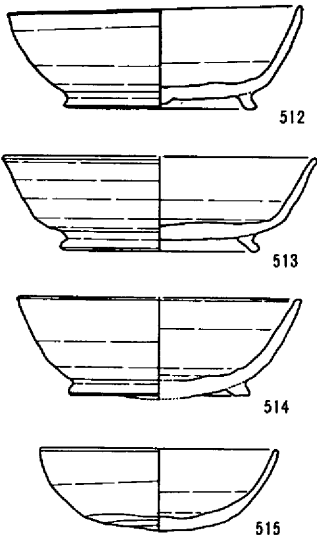
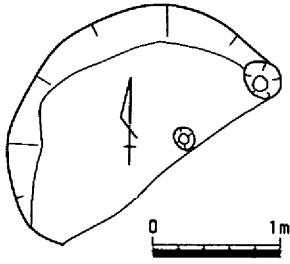


第66図 土坑 12 平・断面図 (1/30) 及び出土遺物 (1/4)



第67図 土坑 8 平・断面図 (1/30) 及び出土遺物 (1/4)





第68図 土壌13 平面図(1/30)、出土遺物(1/4)

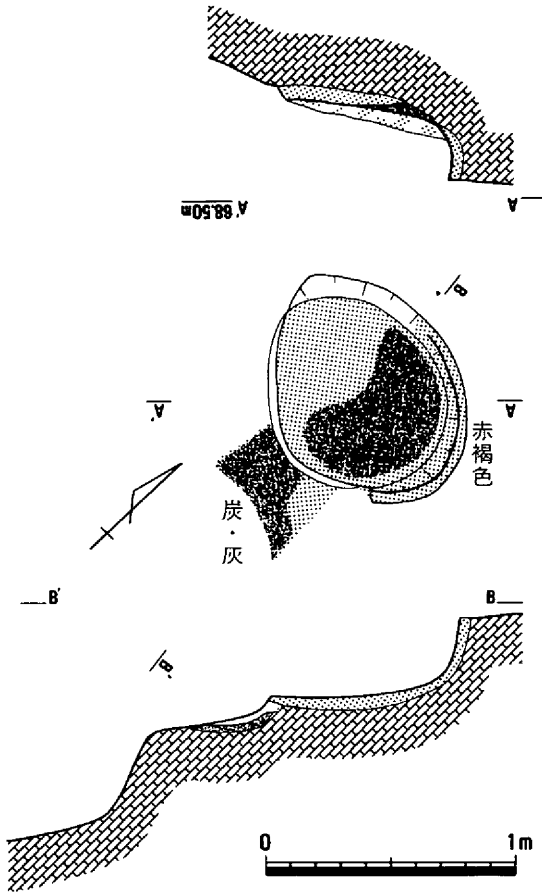
を測る。遺物は重なった状態で出土した。497~500は須恵器の杯蓋で498は口径18cm、他16~17cmを測る。498は器高が低く碁石状のつまみが他より大きく体部も薄い。497、499、500は碁石状のつまみをもち、体部は天井から緩やかに伸び端部を短かく折り返している。501~503は須恵器の無台杯身で501と503は焼成時の歪みが生じている。口径11cm~12cm、器高4~3.5cmを測り底部はへら起こしの後未調整である。底部はほ

ぼ平らで体部は緩やかに内彎し口縁部はやや外反する。504は須恵器の高杯で焼成は不良で軟質である。脚部は低く開くものが付くと思われる。口径は20cmでやや肥厚した平らな底部から体部は緩やかに立ち上り口縁部はやや外反する。505は土師器の甕である。口径15cm、

器高16.5cmを測る。頸部は「く」の字状に屈曲し口縁部はやや外反する。体部は球型であるが底部近くで直線的に屈曲し丸底状になっている。口縁部と体部はヨコナデで外面はカキ目調整が施されている。底部は内面がナデで外面は不整方向のへら削りを加えている。外面にはススが付着している。この土器は、器形と焼成は土師器であるが、その成形と調整は須恵器の技法が用いられていることから、須恵器工人が工房で使用するために作られた可能性も考えられ、その場合、この土壌自体も住居跡に関係する土壌であったと思われる。

土壌4・5・6 (第64、65図)

切合う状態で検出したもので、6が古く、5、4と新しくなる。4は長径148cm、短径95cmを測るもので、楕円形を呈する。6も楕円形を呈するものであるが、土壌5と新しい溝に切られているため規模は不明である。



第69図 土師器窯 1 平・断面図 (1/30)

土壙5はC4グリッドの1号窯の北に位置し楕円形を呈する土壙である。規模は長軸1.9m、短軸1m、深さ30cmを測り土壙4に切られ土壙6を切っている。出土遺物は無台杯身と長頸壺である。506は、口径11.5cm、高さ4cmを測り底部はへら起こしの後ナデを加えている。507は長頸壺の体部の破片で、内面底部近くに指頭圧痕が残る。外面はヨコナデの後、体部下端に回転へらケズリが施されている。

**土壙12 (第66図)**

土壙12はD4グリッドの東辺に位置し南辺が削平されているため正確な規模は不明であるが長軸3.5m、短軸2.3m、深さ3.5cmを測る。覆土は地山ブロックや炭を含む黒灰色土で1号窯の灰原の流入土と思われる。遺物は須恵器が2個出土している。508は杯蓋で内面にかえりが付き天井部を欠損しているが宝珠状のつまみが付くと思われる。509は有台杯身で口径18cm、底径10cmを測り底部は比較的厚く体

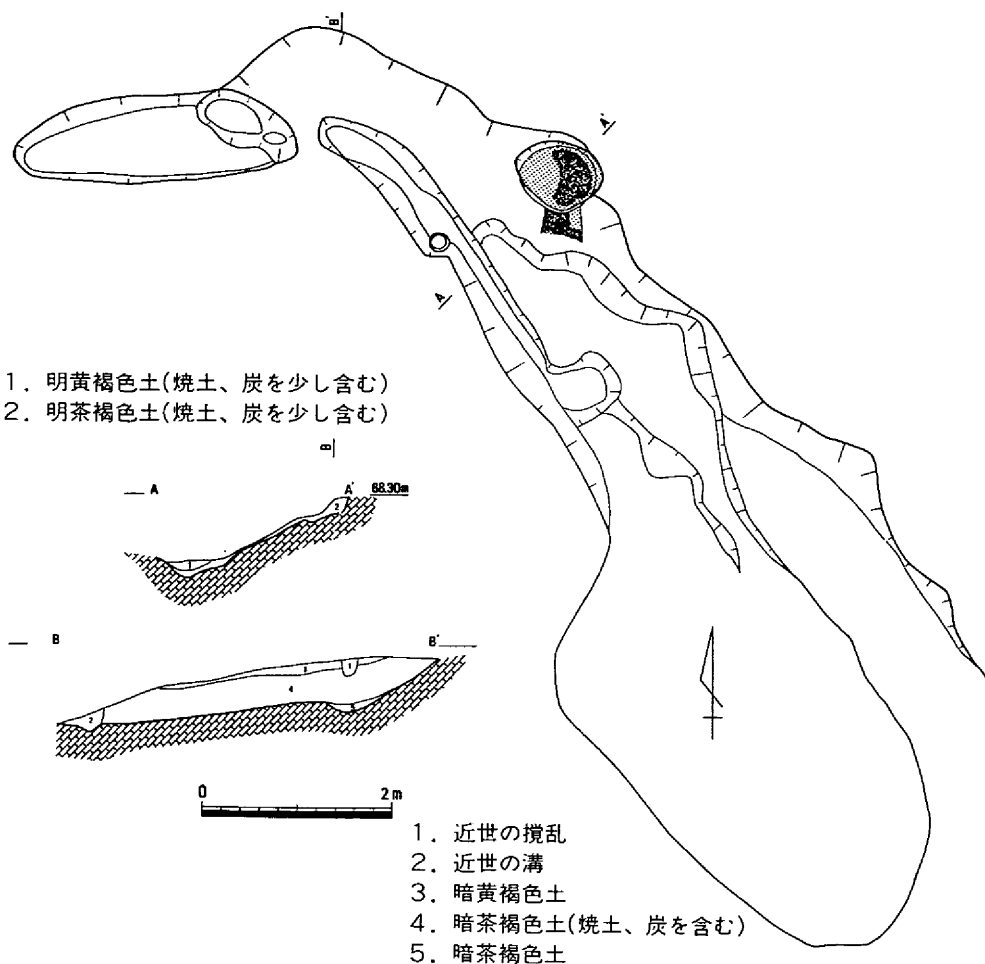
部は緩やかに立ち上り口径部は直線的に外傾する。高台は稜線をもち短かく外傾している。杯の内面には仕上げナデが加えられている。これらの遺物も灰原からの流入と思われる。

**土壙8 (第67図)**

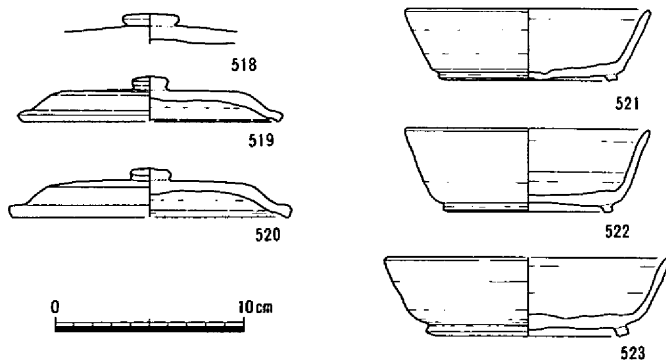
土壙8はC6グリッドの北に位置し西辺と南辺を削平されているため規模は不明である。深さは10~15cmで覆土は灰褐色土である。遺物は須恵器の杯蓋が2個出土した。510は口径12cm、高さ3cmを測り、基石状のつまみが貼付されている。511は若干器高が低く口径は12cmである。

**土壙13 (第68図)**

土壙13はD4グリッドの東辺・土壙12の西に位置する。南辺を削平されているため規模は不明であるが、半円形に深さ約20cmを測る。覆土は1号窯の灰原の流入土と考えられる。遺物はいずれも須恵器である。512~514は有台杯身で口径15~16cm、底径10cm、高さ5~5.5cmを測

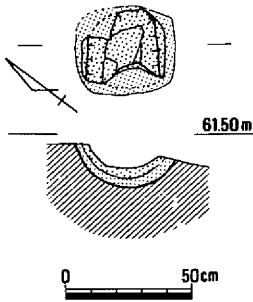


第70図 土師器寮 1 全体図 (1/80)

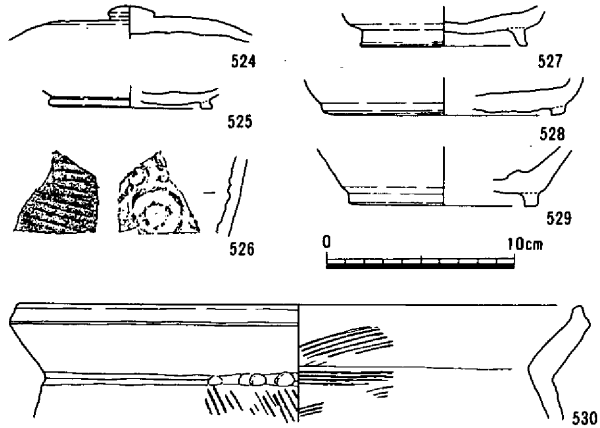


第71図 土師器寮 1 出土遺物 (1/4)

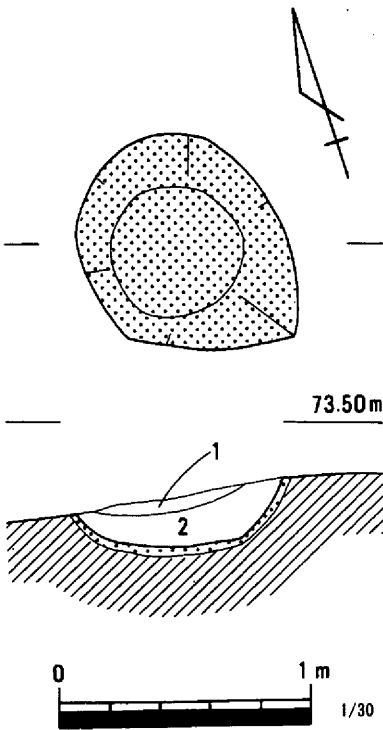
る。いずれも内面には仕  
上げナデが加えられ514  
は底部と体部の境が明瞭  
ではなく底部が高台より  
も下に突き出る。515は無  
台杯身で口径12.5cm、高  
さ4.5cmを測る。底部は丸  
底気味でへう起こし未調



第72図 鍛冶炉1 (1/30)

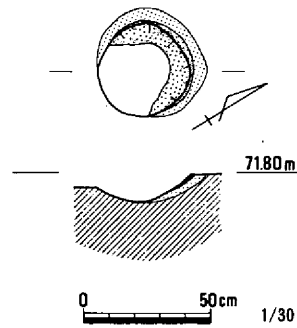


第73図 II区出土遺物(1/4)



第74図 窯状遺構 平・断面図 (1/30)

1. 淡灰茶褐色土
2. 茶褐色土(焼土、炭を少し含む)



第75図 鍛冶炉2平・断面図 (1/30)

整である。516は杯蓋で口径19.5cm、高さ4cmを測る。基石状の扁平なつまみが付き体部は直線的に伸び端部をほとんど折り返さない。517は高杯で口径18cm、底径12cm、高さ10cmを測る。杯部は比較的浅く体部は緩やかに立ち上り口縁部はやや外反する。脚部はラッパ状に緩やかに開き端部を若干折り返している。(武田)

土師器窯1 (第69、70図)

楕円形を呈するもので、長径96cm、短径75cmを測る。底面は、ほぼ平面であるが、南に向けて少し下る傾向が見られる。床面と壁面は赤褐色に焼けており、東半分には、炭、灰が見られ

た。壁面は、ほぼ垂直に立ち上り、約24cm残存していた。壁は一部削平されている。窯跡の南側に焼土面と炭灰の堆積する部分が見られた。この部分は、窯跡内部からの焼土の続き等から推測して、焚口と考えられる。

窯跡は、南に下るゆるやかな斜面に造られているもので、斜面を切り下げ段差を造ると同時に、下段に平坦面を造る。窯は切り下げられた段の上端に造られるもので、窯跡の底面から下段の平坦面までは56cmである。段の裾には溝状の掘込みが見られる。段の全長は、10mを測り、下段の平面は、窯跡に関連した作業場と考える。窯跡の埋土及び焚口下方の平面から須恵器が出土した。(井上)

#### 出土遺物 (第71図)

518～520は須恵器の杯蓋である。518はつまみの破片で他のものより若干大ぶりである。519、520は口径14～15cmを測り天井部は水平で回転ヘラケズリが施され端部は緩やかに屈曲して小さく折り返されている。つまみはやや丸い基石状のものが貼付されている。521～523は須恵器の有台杯身である。口径13～15cm、底径9～11cmを測る。いずれも平らな底部から口縁部が直線的に外傾しながら立ち上り、断面が方形を呈する低い高台が貼付されている。以上の遺物はいずれも焼成が不良で土師器と同じぐらい軟質であり、器形的には須恵器であるが、焼成は意図的に土師器を目的としたものの可能性が考えられる。遺物の特色から、これらの土器の時期としては、下に広がる包含層と同じ8世紀の中頃が考えられる。(武田)

#### 鍛冶炉1 (第72図)

II区で検出したもので、径40cm程度のものである。炉跡は、椀状にくぼむもので、内面は青灰色に焼けており、外方は赤褐色の焼け色を呈している。検出面から炉底部までは9cmある。

#### II区出土遺物 (第73図)

鍛冶炉を検出した基盤層の直土から出土したもので、524は、杯蓋で、宝珠つまみをもつ。525、528～529は、須恵器の杯で、いずれも貼付高台が付くもので、高台の断面は方形を呈する。527は、土師器の椀で貼付高台がつき、外面は赤褐色、内面は黒色を呈する。526は、甕の破片で、外面は平行タタキで、内面は同心円のタタキが見られる。530は土師器で、外反する口縁部の端部が少し上方に拡張する。頸部には、指頭圧痕が見られ、タテ方向のハケ目が見られる。内面は、斜め、もしくは横方向のハケ目が見られる。

#### 窯状遺構 (第74図)

南側が一部削平されているが、楕円形を呈するもので、長径96cm、短径84cmを測る。全体に皿状にくぼむもので、内面全体に赤褐色に焼けている。検出した深さは23cmである。伴出した出土物がないため、時期決定はできないが、周辺の遺構との関連から奈良時代と考えられる。

熱残留磁気の測定では、土師器窯2号として年代値を得ているが、780+30A.Dが遺構の年代

に近いものと考えられる。

**鍛冶炉 2** (第75図)

溝4の上層で検出したもので、径36cm程の円形を呈する。焼土は一部に残るのみで、ほとんど残存していない。焼土面は、内面は青灰色で外面は赤褐色を呈している。検出した深さは9cmである。伴出遺物がないため、明確な時期決定は出来ないが、検出面からして、古墳時代よりは新しく、中世よりは古い。熱残留磁気の測定値として、 $790+50A.D$ もしくは $990+80A.D$ が同じ重みであるとされるが、遺跡内における他の検出遺構の中に後者の時期に近いものがないことから、前者をその年代と考えたい。

(井上)

### 第3節 中世の遺構と遺物

#### 建物2 (第76図)

梁間1間、桁行3間の建物で、南北方向に長い掘立柱の建物である、柱穴は8本を検出した。柱穴の直径は50cm前後で、約65cm残存していた。建物の母屋の内側からは、柱穴は検出されなかった。柱穴の中心間の距離は、梁間で510cm、桁行は北から210cm、210cm、320cmを測る。この様に北側の2間は同じ幅であるが、南側の1間は広がっている。建物の東側には、建物に平行して溝を一本検出した。北側には160cm離れた位置に建物に平行に石列を検出した。建物と石列との間で、径72cm程度の扁平な石を1個検出した。地形的には、北側と東側には丘陵がせまっており、南西方向に下る。そのため、北側の柱列と東側の柱列は地山面から掘り込まれているが、西側列は造成面から掘り込まれている。柱穴を検出した面の上層には焼土層が存在し、建物は火災により消失したことを推測させる。

#### 出土遺物 (第77～80図)

531～532は壺の口縁部で、少し外に開く口縁部の端部は丸く玉縁になる。器形は、備前焼にも似るが、胎土は灰色を呈し備前焼とは異なる。538は、瓦質の播鉢で、口縁端部は下方に拡張する。535、539、540は土鍋で、内面はヨコ方向のハケ目が見られる。541は瓦質の香炉で、外面に花文の押型が施されている。542は、口縁端部が玉縁となる壺である。543は壺の底部である。いずれも、備前焼に似るが、胎土は異なり他の地方の製品と考えられる。544～547は瓦質の播鉢で、いずれも口縁端部が下方に拡張する。548は瓦質の播鉢の底部である。549～553は内側に把手をもつ土鍋で、551以外は2対の円孔が見られ、外面はタテ方向の、内面はヨコ方向のハケ目が見られる。554は、把手の付く浅い瓦質の土鍋で片口がつく。把手は中空であり、木もしくは竹を差込んで使用するものと考えられる。青磁としては、蓮弁の施されるもの、雷文の施されるもの等が出土している。M4は鉄製の鋤先で、M5は鎌である。

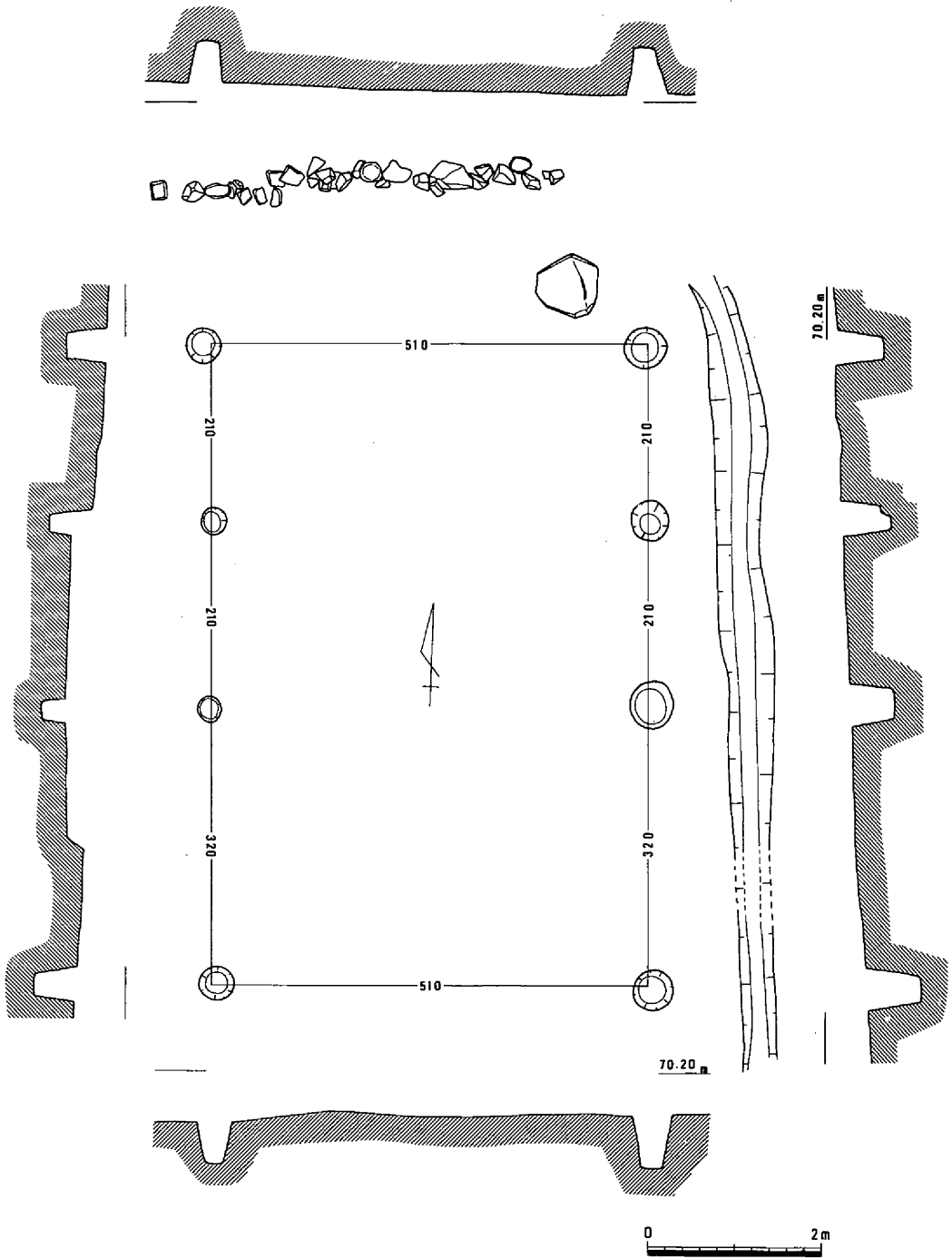
#### 土壌35 (第81図)

最大幅93cmの不整形な土壌で全長264cmを調査した。西側は削平されているため全長は不明である。土壌は、検出面からの深さは30cmで、底面はほぼ平面をなす。土壌内には長径20～30cmの石を不規則な状態で検出した。

#### 出土遺物 (第82図)

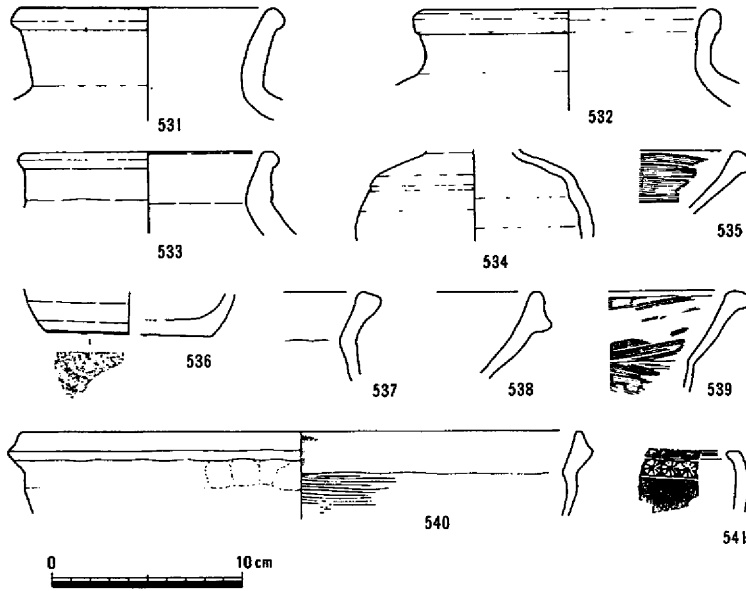
555は乳白色を呈する土鍋で、口縁端部が少し拡張する。556は瓦質の甕の底部で外面にタテ方向のハケ目が見られる。557、558は、土壌36の出土遺物で、土鍋の口縁部である。557は口縁部が少し肥厚する。

#### 土壌36 (第81図)



第76図 建物2 平・断面図 (1/80)





第77図 建物 2 出土遺物 (1/4)

土壌35と切り合うもので、35が新しい。この土壌も西側を削平されている。検出した最大長は250cm、最大幅136cmを測るもので、ほぼ楕円形を呈する。検出面からの深さは17cmで、底面はほぼ平面をなす。

出土遺物 (第82図)

出土遺物は少なく、小破片が少量出土している。557、558ともに土鍋の口縁部で、外方に開きながら延びる口縁部の端部が少し肥厚する。

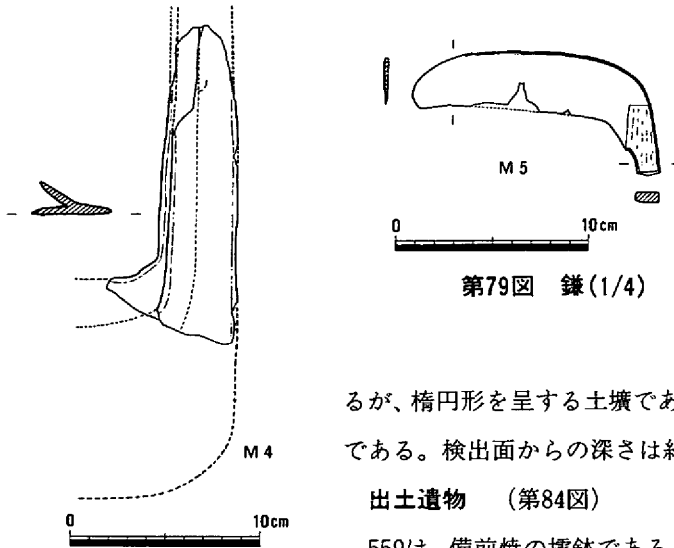
土壌101 (第83図)

調査区の端に検出したため、全体の規模は不明であるが、楕円形を呈する土壌である。判明している最大幅は200cm

である。検出面からの深さは約60cmで、底面は平面に近い。

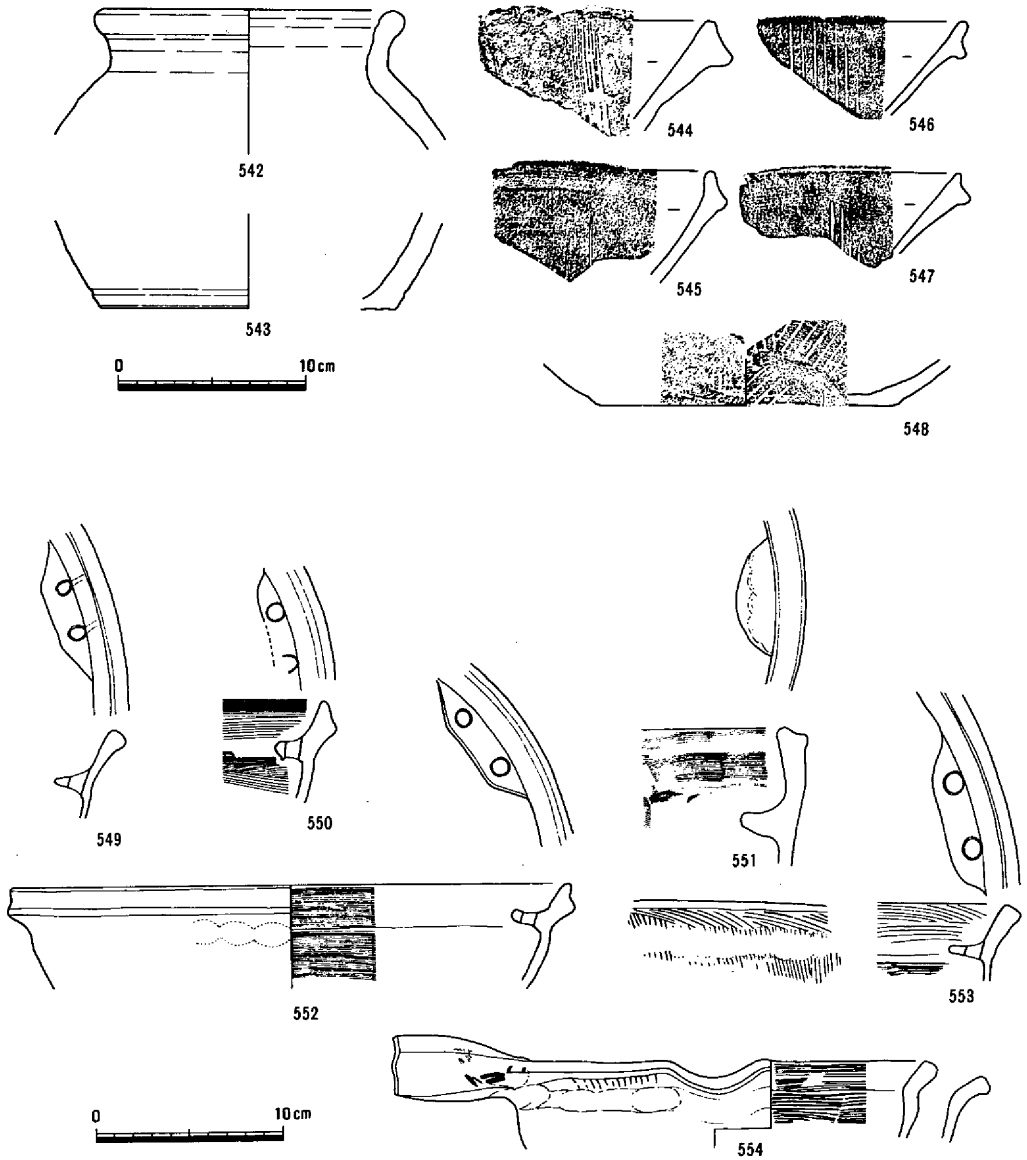
出土遺物 (第84図)

559は、備前焼の播鉢である。口縁部外面に2本の凹線が施され、内面の条線は全面に施されている。560、561は土製の羽釜で、560は球形の体部から、少し内傾して立ち上り、口縁端部は



第78図 鋤先 (1/4)

丸い。肩部には、釣手が付く。外面にはわずかにハケ目が見られ、内面には指頭圧痕が見られる。561は、丸い胴部に鏝が貼り付けられたものである。出土遺物からして土壌の時期は江戸時代の初頭の頃と考えられる。



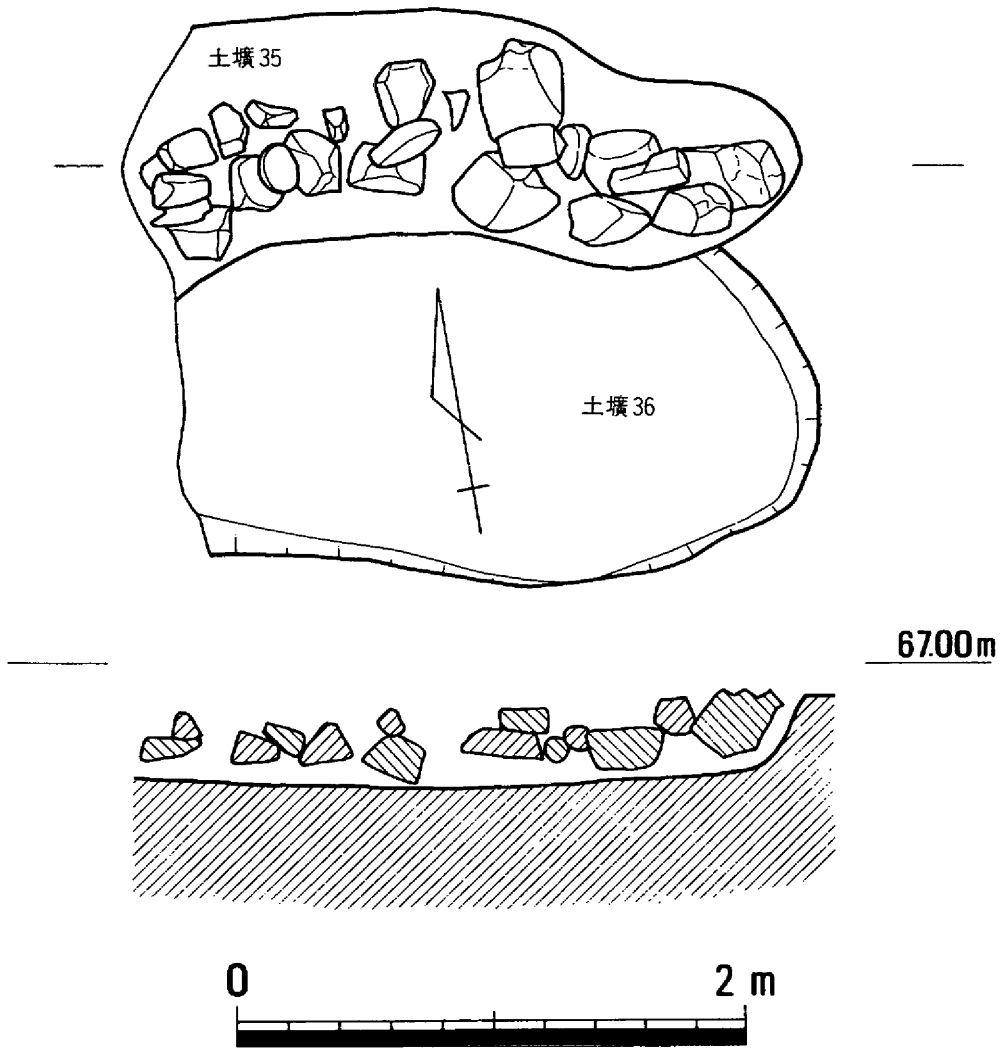
第80図 建物2 検出面出土遺物(1/4)

溝101 (第83図)

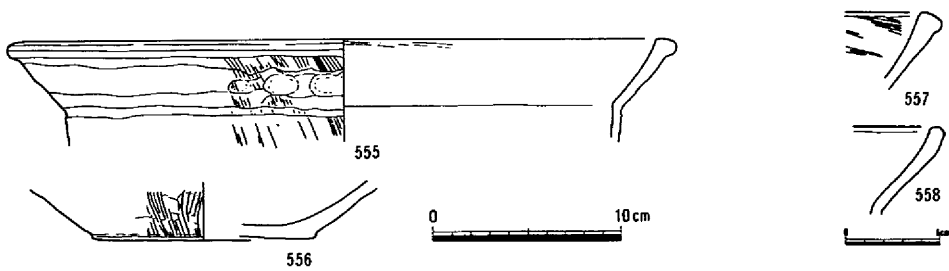
2本の溝が合流するものであるが、前後関係は不明である。北側の溝はゆるく弧を描くもので、全長6.5mを調査した。検出した最も深い部分で30cmを測る。

溝102 (第83図)

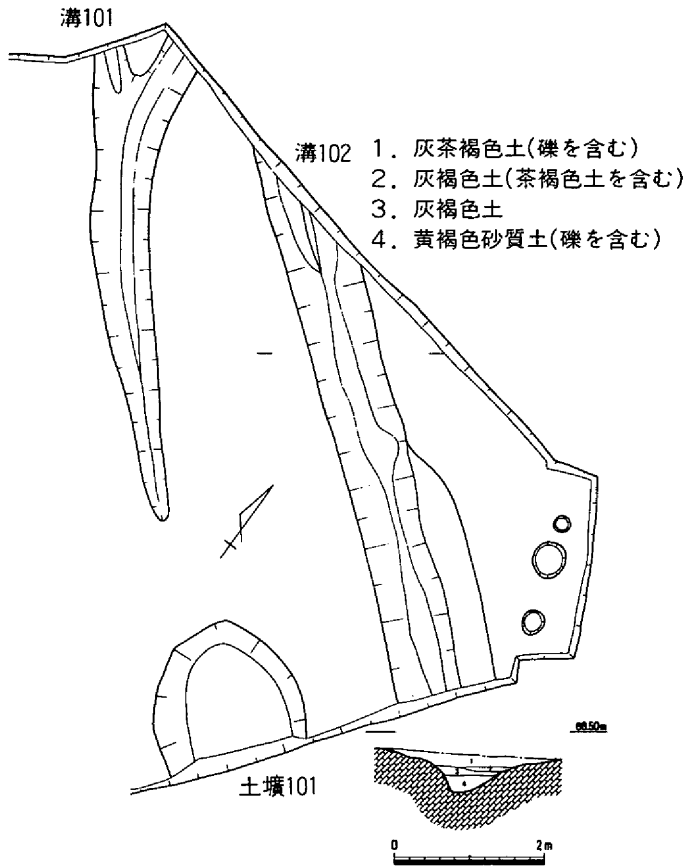
溝101の北側で検出したもので、直線的に流れる。検出した最大長は7.8mを測る。検出した幅は100cmで、検出面からの深さは45cmで、北西から南東へ流れる。時期については不明である



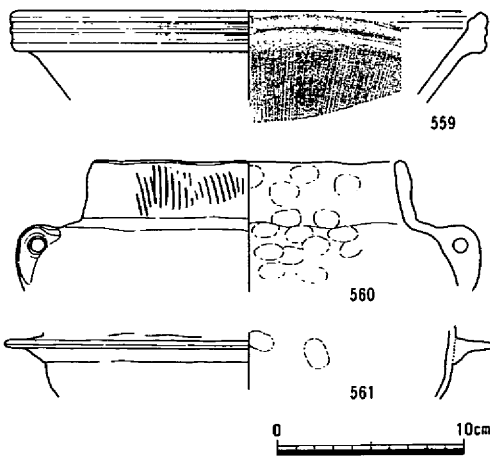
第81図 土壌35・36平面図・断面図(1/30)



第82図 土壌35・36出土遺物 (1/4)



第83図 土壌101と溝(1/100)



第84図 土壌101出土遺物(1/4)

が、溝101、102ともに埋土等からして土壌101に近い時期と考えられる。

溝10、11 (第85図)

2本の溝が切り合うもので、溝10が新しい。10は、L字状に検出したもので、最大幅70cmを測る。検出面からの深さは16cmで、北が高く西向けて流れる。11は、東西方向に直線的に検出したもので、最大幅90cm、検出面からの深さは7cmを測る。両方の溝とも西側を削平されている。

出土遺物

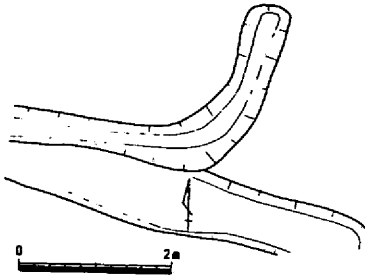
溝10から土鍋片が出土している。562は、体部から折れ曲った口縁部がほぼ直線的に延びるもので、端部まで厚さの変化は見られない。563は、体部から折れ曲った口縁部が少し弧を描くもので、端部は少し肥厚する。両者とも外面にはハケ目が見られる。

墓壇17 (第86図)

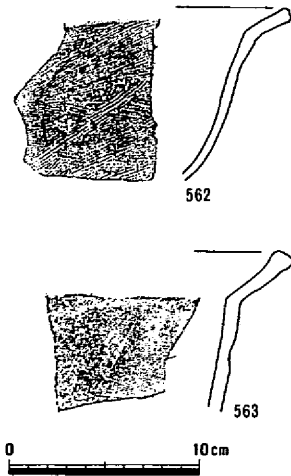
長径100cm、短径68cmを測る楕円形を呈する土壇で、検出面からの深さは10cmである。底面はほぼ平坦である。墓壇の北西部には、土師器椀と小皿2点、鉄刀1点がまとめて出土した。

建物1 (第87図)

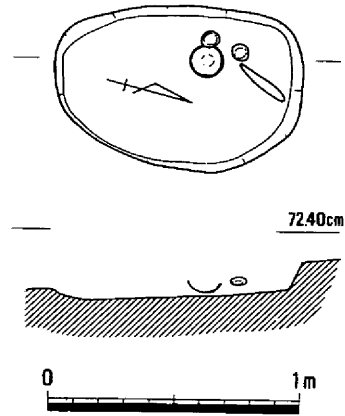
柱穴4本を検出したもので、南北



方向に長い建物である。柱穴の中心間の距離は短辺170cm、長辺390cmを測る。南側柱穴列の東にさらに1個の柱穴を検出しており、東側に大きかった可能性もあるが、この周辺において検出した柱穴は、この5本のみである。建物に関する出土遺物がないため、時期を確定することはできないが、この西側に検出した土師器窯の埋土と、柱穴の埋土とは明らかに異なり、窯跡よりは新しく、土壌101に近い時期と考えられる。



第85図 溝10 平面図 (1/100)  
出土遺物 (1/4)



第86図 墓壙17平・断面図 (1/30)

### 墓壙1 (第88図)

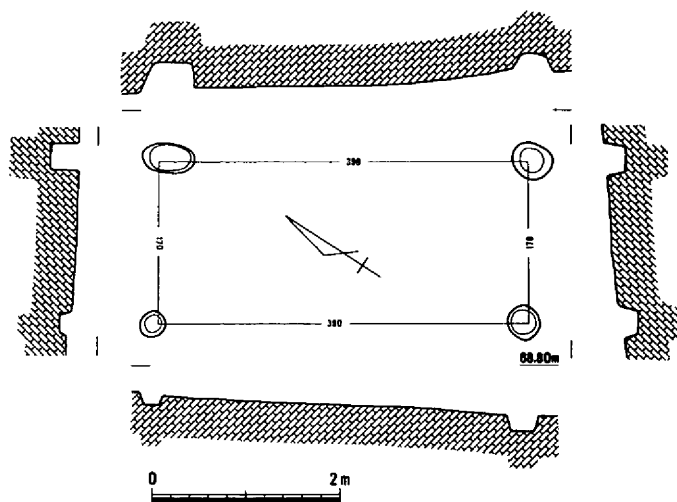
ほぼ円形を呈するもので、長径92cm、底径68cmを測る。検出面からの深さは40cmで、底は平らである。

### 墓壙2

ほぼ円形を呈するもので、長径72cm、底径68cmを測る。検出面からの深さは28cmで、底は平らである。底面からは、骨の小片が出土した。墓壙1と墓壙2は、切り合うものであるが、前後関係は不明であり、時期的には、近いものと考えられる。

### 墓壙3

ほぼ円形を呈するもので、検出面での径76cm、底径64cmを測る。検出面からの深さは18cmで



第87図 建物1 平・断面図 (1/80)

ある。墓壙内に1個の平扁な石を検出したが、この石は、墓標とした石が落ち込んだものと考えられる。

#### 墓壙4

円形を呈するもので、検出面での径は68cm、底径62cmを測る。底面は平らで、壁面もほぼ垂直に掘られている。検出面からの深さは42cmを測る。墓壙内からは、腕もしくは脚の骨が出土した。出

土遺物としては564、565がある。564は、口径9.2cmの小皿で、565は口径12.2cmを測るもので、底部から体部へは明瞭な屈曲線をなす。

#### 墓壙5

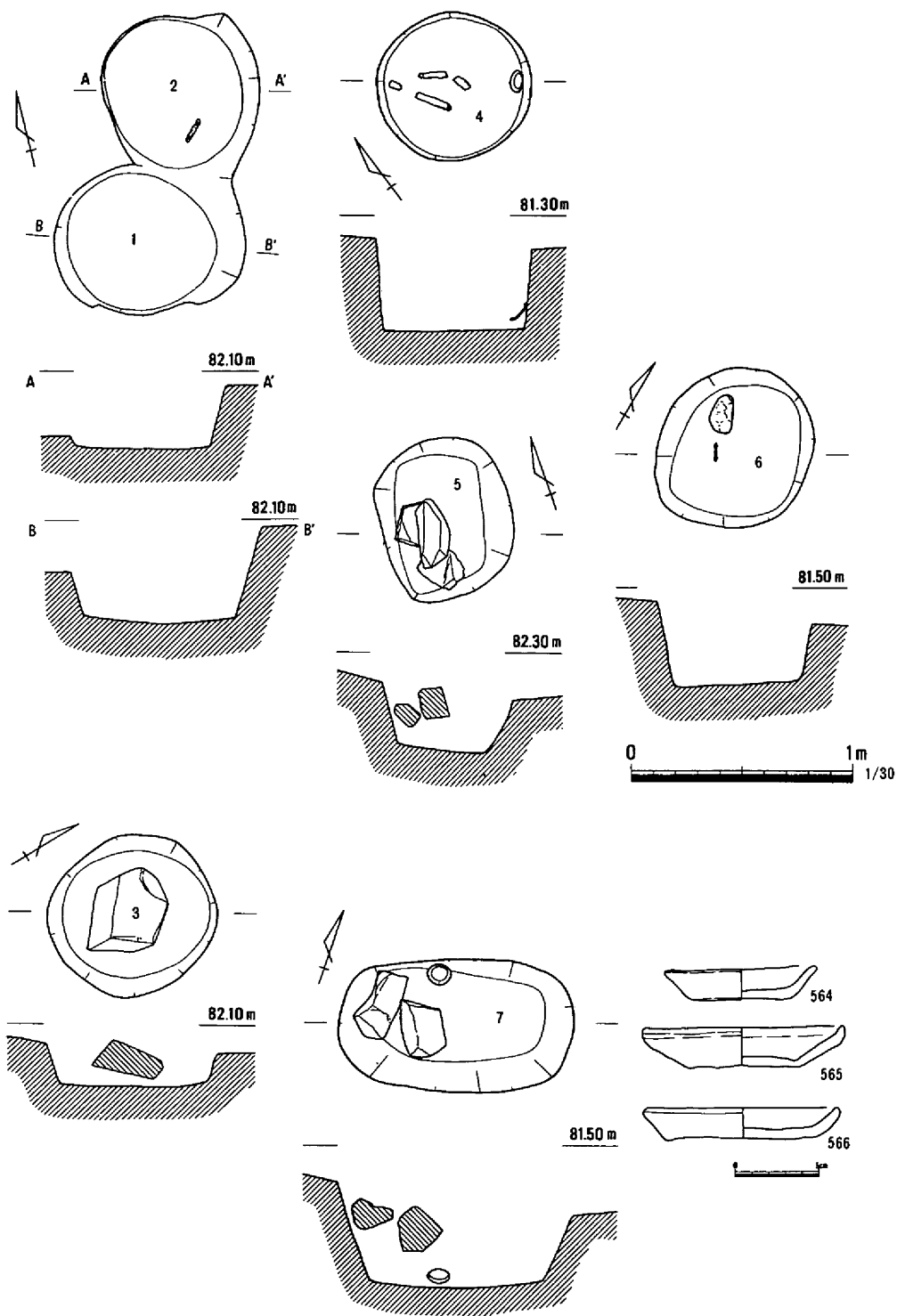
本来は方形を呈するもので、検出面で長径71cm、短径58cmを測る。検出面からの深さは、24cmを測り、底面は、東へ向けて下る。底面はほぼ方形を呈しており、長辺58cm、短辺38cmを測る。墓壙内から3個の石を検出したが、この石は、墓標として置かれていたものが落ち込んだものと考えられる。

#### 墓壙6

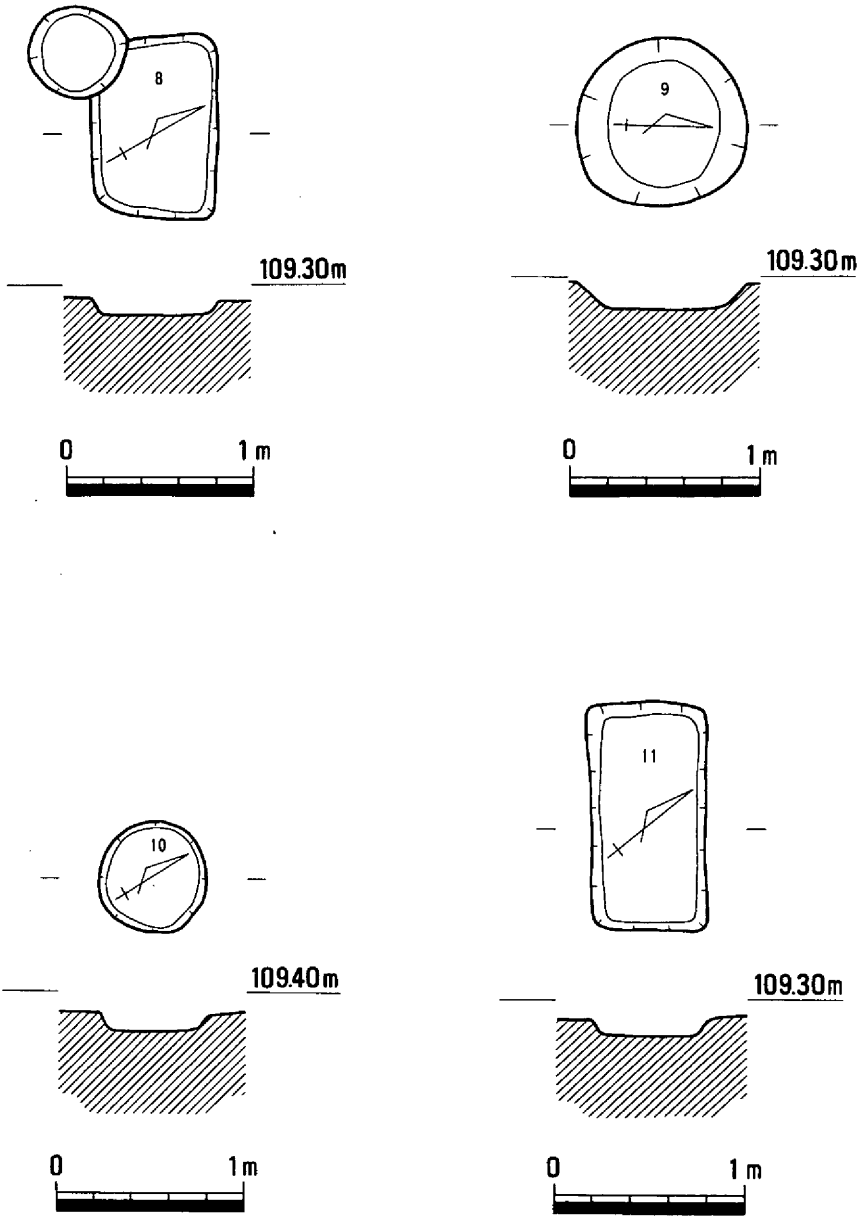
検出面での平面形は円形を呈するもので、径70cmを測る。検出面からの深さは38cmを測り、底面は平坦である。底面の平面形は、東側、南側に直線的なものもみられるが、元は円形であったと考えられる。墓壙内からは、頭骨の一部と五鈷杵が出土した。五鈷杵は長さ8.8cmで小型のものであり、鈷の部分が全体に細みである。把は、中央に楕円形の鬼目を刻み、その両側には、蓮弁を意識した線刻がみられる。

#### 墓壙7

長方形を呈するもので、検出面での規模は長辺104cm、短辺50cmで、深さは45cmを測る。底面の規模は、長辺76cm、短辺40cmを測り、ほぼ平坦である。墓壙からは2個の石が出土したが、それらは、墓標としての石が落ち込んだものと考えられる。底面から、小皿1点が出土した。566がそれで、最大口径12cmを測るものである。

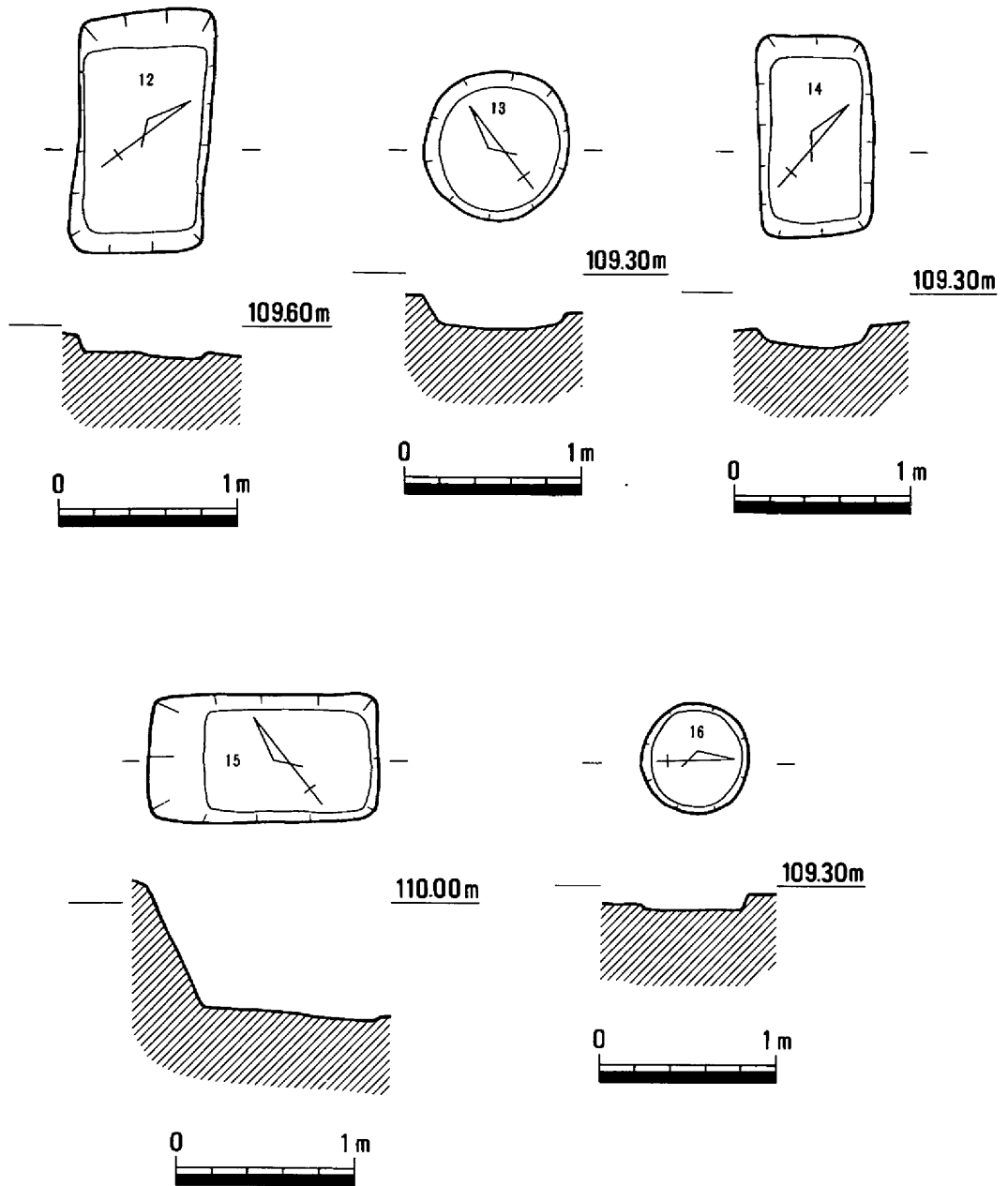


第88図 墓塚1～7平・断面図(1/30)出土遺物(1/4)

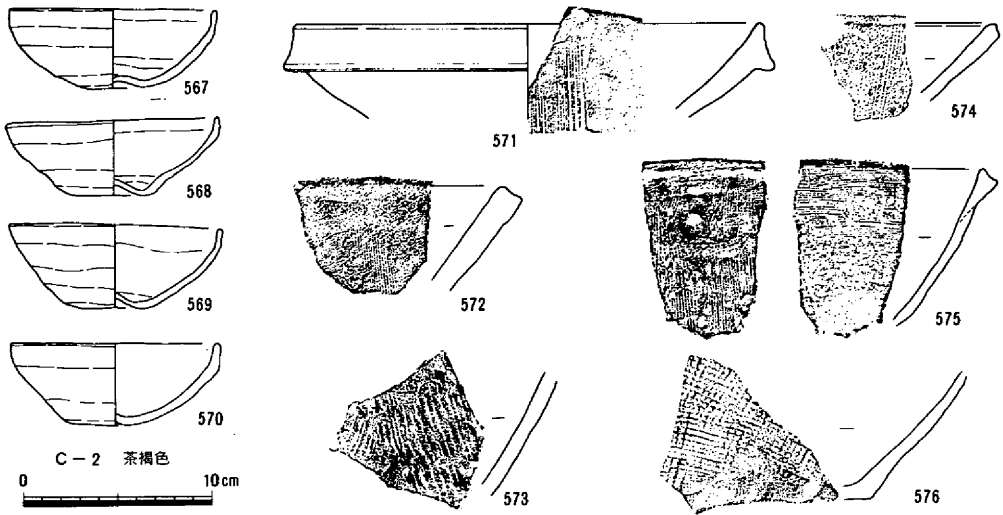


第89図 阿坂古墓8～11 平・断面図 (1/30)





第90図 阿坂古墓12~16 平・断面図 (1/30)



第91図 出土遺物（中世）(1/4)

墓壙8～16は、阿坂調査区で検出したものであり、そのほとんどは果樹園のため大きく削平されており、わずかに遺存するものである。

**墓壙8**（第89図）

長方形を呈するもので、長辺72cm、短辺50cm、検出面からの深さ8cmを測る。底面での規模は長辺60cm、短辺43cmを測る。

**墓壙9**

円形を呈するもので、径44cm、検出面からの深さ7cmを測る。底面での径は38cmを測る。

**墓壙10**

円形を呈するもので、径68cm、検出面からの深さ9cmを測る。底面での径は、44cmを測る。

**墓壙11**

長方形を呈するもので、長辺91cm、短辺45cm、検出面からの深さ8cmを測り、底面での規模は長辺82cm、短辺38cmを測る。

**墓壙12**（第90図）

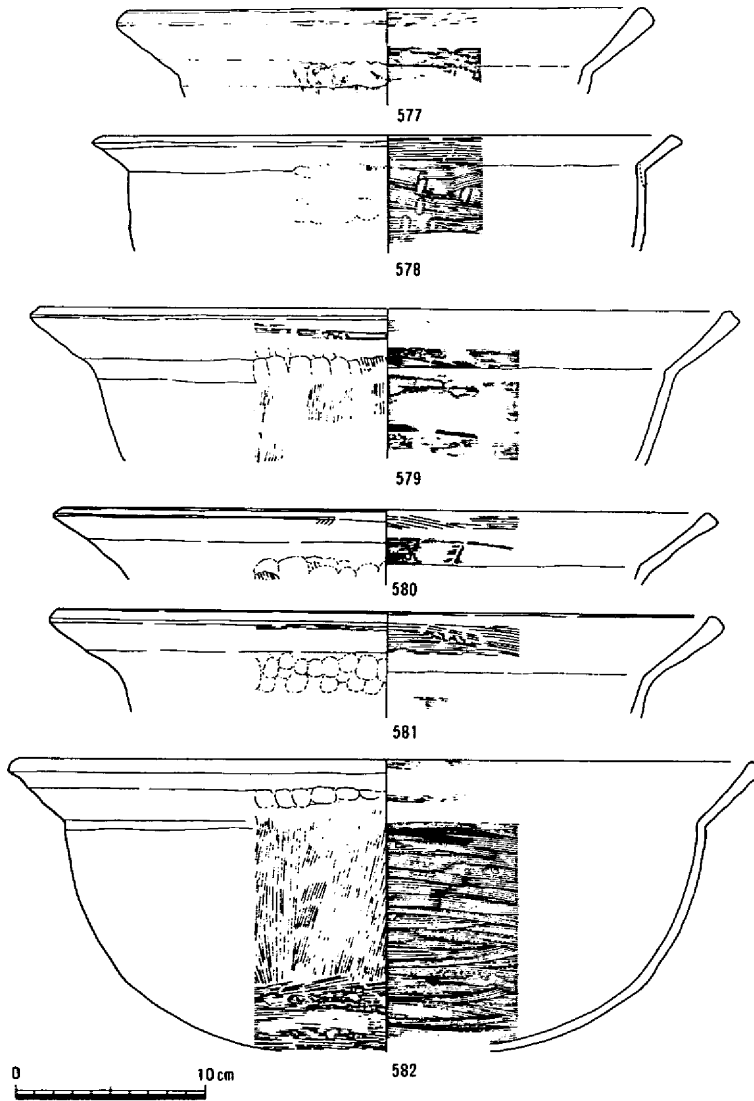
長方形を呈するもので、長辺102cm、短辺56cm、検出面からの深さ8cmを測り、底面での規模は長辺78cm、短辺48cmを測る。

**墓壙13**

円形を呈するもので、径61cm、検出面からの深さ12cmを測り、底面での径は50cmを測る。

**墓壙14**

長方形を呈するもので、長辺84cm、短辺49cm、検出面からの深さ8cmを測る。底面での規模



第92図 出土遺物（中世）(1/4)

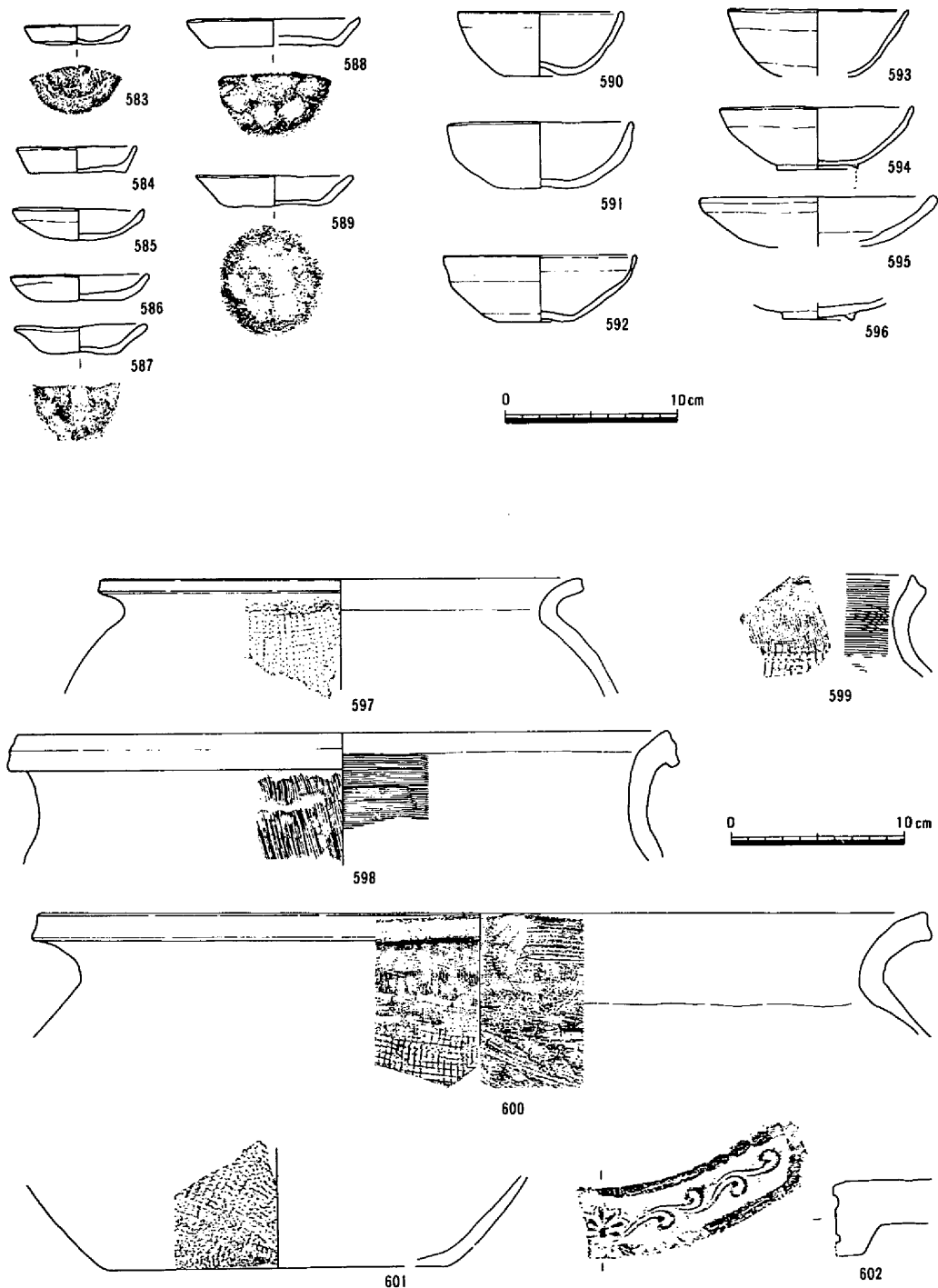
は長辺80cm、短辺38cmを測る。

**墓壇15**

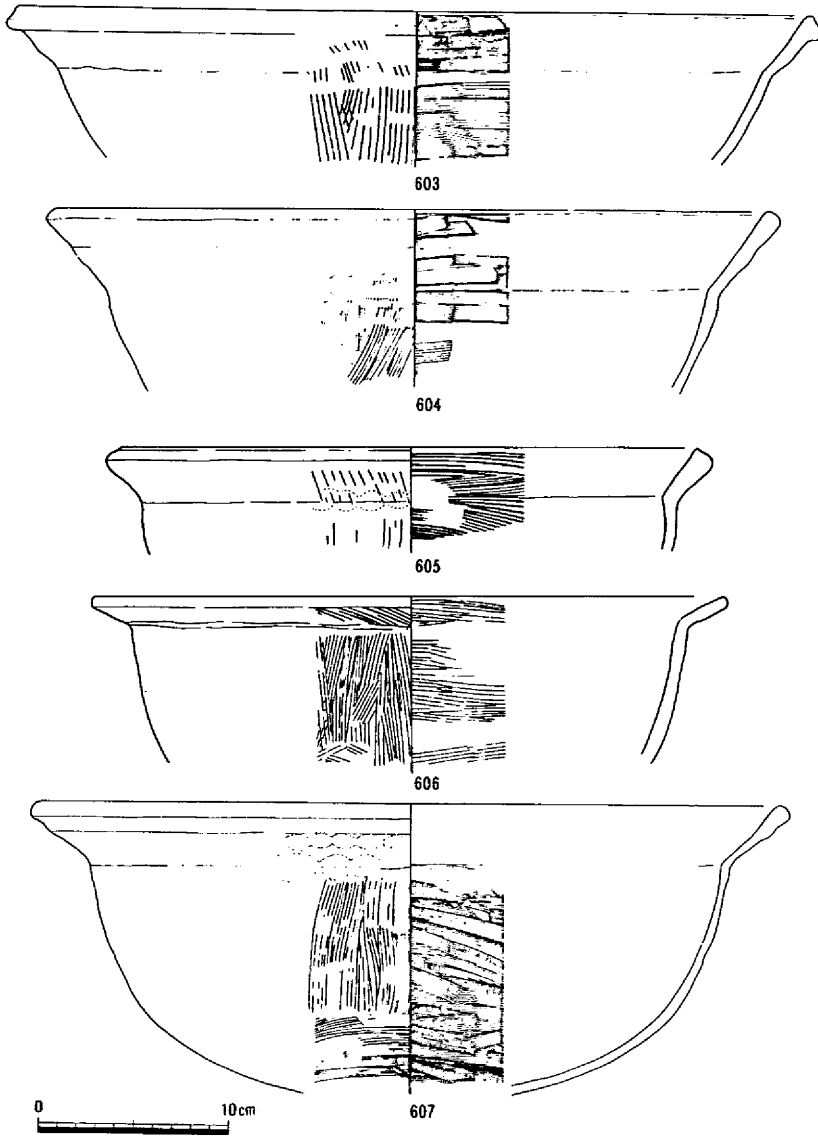
長方形を呈するもので、長辺96cm、短辺53cm、検出面からの深さは深い方で53cm、浅い方で3cmを測るものである。底面での規模は、長辺70cm、短辺42cmを測る。

**墓壇16**

円形を呈するもので、径46cm、検出面からの深さ6cm、底面での径は38cmを測るものである。



第93図 出土遺物 (中世)(1/4)

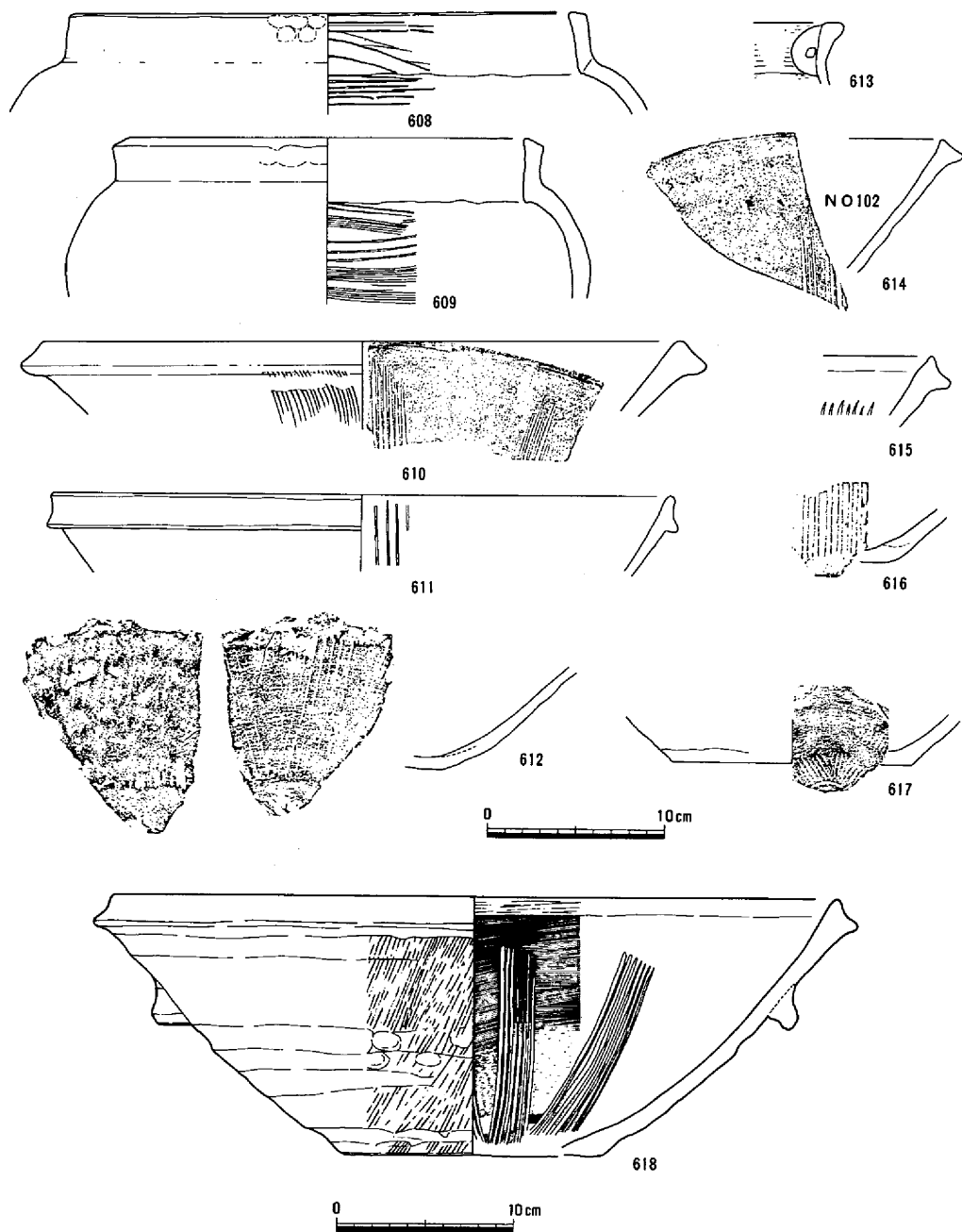


第94図 出土遺物（中世）(1/4)

阿坂調査区からは、時代を確定できる遺物は出土していないが、染付片、瓦片の小片が出土しており、概略江戸時代と推定されるものである。

**包含層出土の遺物（第91～95図）**

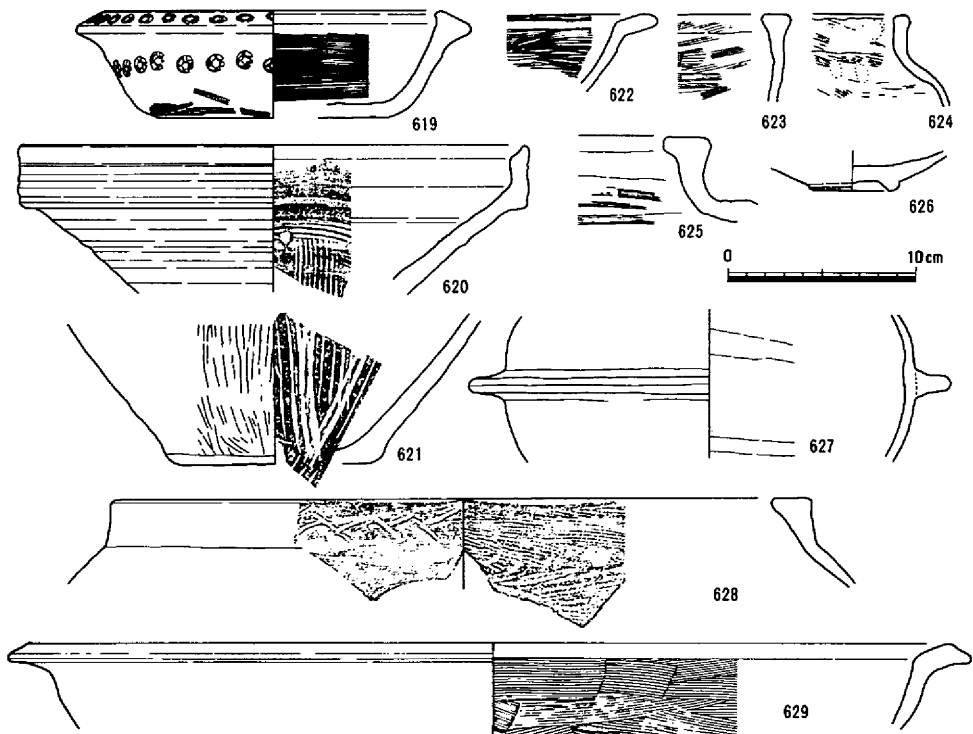
567～570は、底が上げ底になる土師器碗である。ゆるやかに弧を描きながら立ち上る体部が、口縁直下で少し屈曲する。口径は10.6cmある。571は、口縁端部が下方に拡張するもので外面に



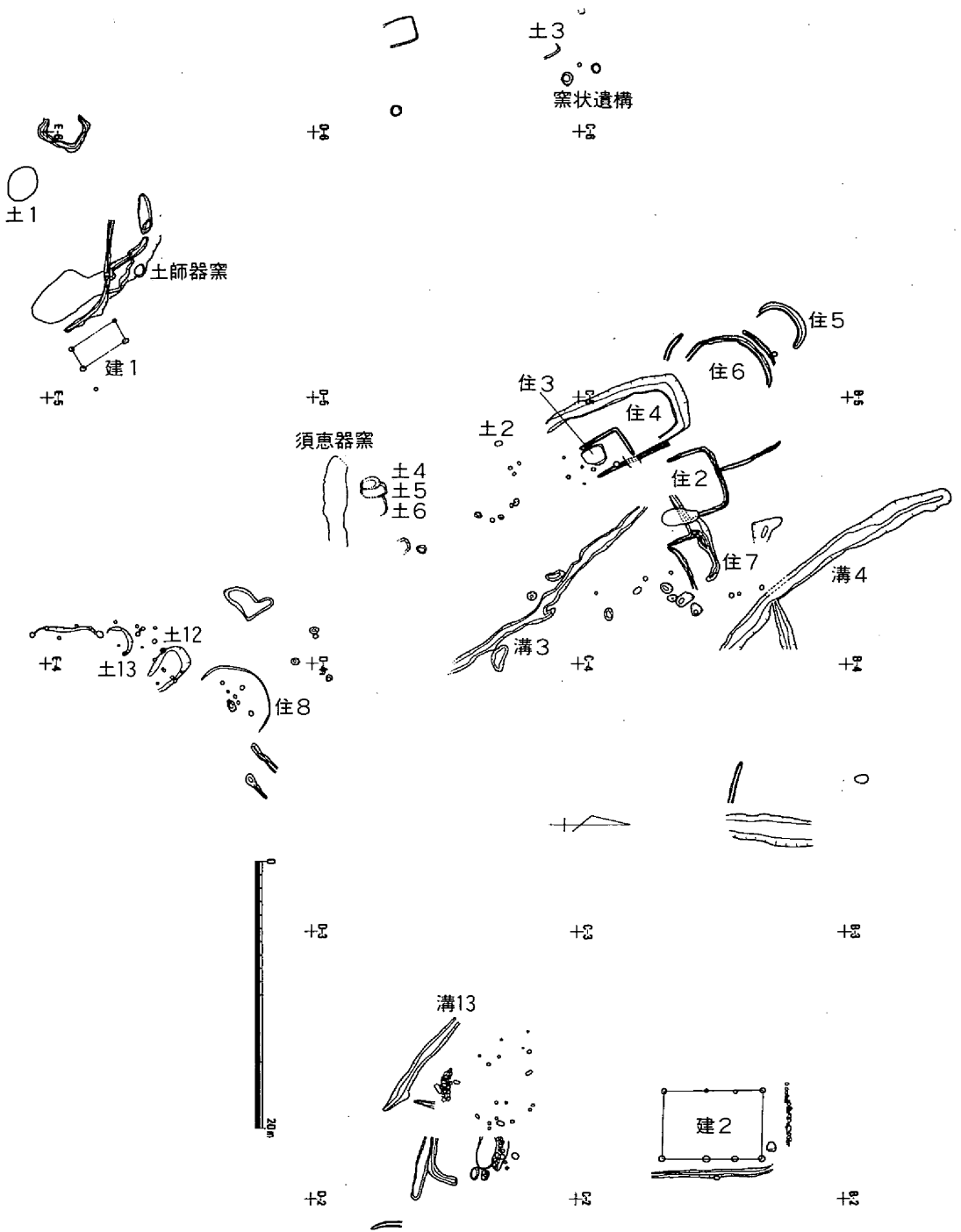
第95図 出土遺物(中世)(1/4)

面をもつ播鉢である。572、574は、直線的に延びた体部が、厚さにほとんど変化を見せないもので、口縁端部が平坦な播鉢である。575は口縁端部が少し拡張する土鍋である。573、576は陶

質の甕の体部である。577～582は土鍋である。体部から大きく開いた口縁部は、端部が少し肥厚する。内面はヨコ方向、外面はタテ方向のハケ目が見られる。583は底部に糸切痕を残す小皿である。584は、底部は平らであり、体部は直立する小皿である。585、587は全体に弧を描くものである。587～589は、底部外面に指頭圧痕のみられる小皿である。590～593は、底部が上げ底になる椀である。594は、断面三角形の高台の付く椀である。597は、体部から外反した口縁部で、端部外面に面をもつ。体部外面には格子の叩目が見られ、内面はヨコナデが見られる。598は、口縁端部が下方に拡張するもので、外面はタテ方向の、内面はヨコ方向のハケ目が見られる。600は、口縁端部が少し肥厚するもので、体部外面は格子叩き、内面はヨコ方向のハケ目が見られる。601は、甕の底部で、外面に格子の叩きが見られる。603～607は、土鍋である。603は、口縁端部が下方に少し拡張するもので、605、607は、口縁端部が少し肥厚するものである。いずれも、外面はタテ方向のハケ目、内面はヨコ方向のハケ目が見られる。608～609は羽釜である。球形の体部から直立する口縁部の端部は面をもつ。内面にはヨコ方向のハケ目が見られる。610、615は、口縁端部が外方へ少し拡張するもので、内面には、7～9本単位の条線が施される。614は、器壁の薄い播鉢で、口縁端部は、上下に少し拡張する。611は、口縁端部が下

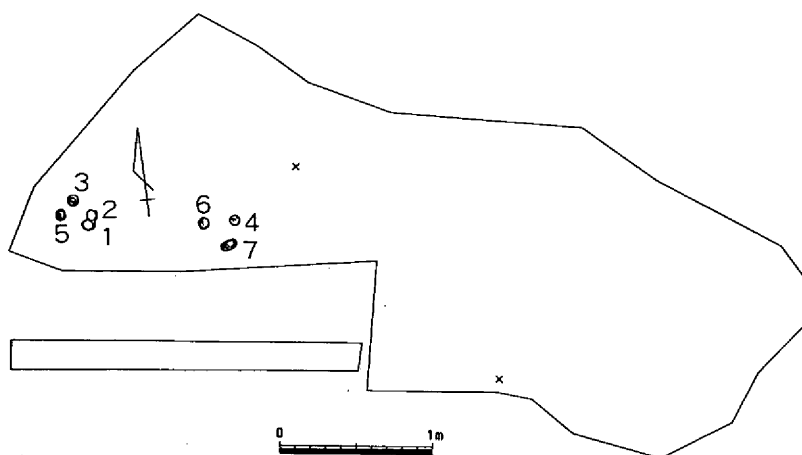


第96図 仮道調査区出土遺物(1/4)

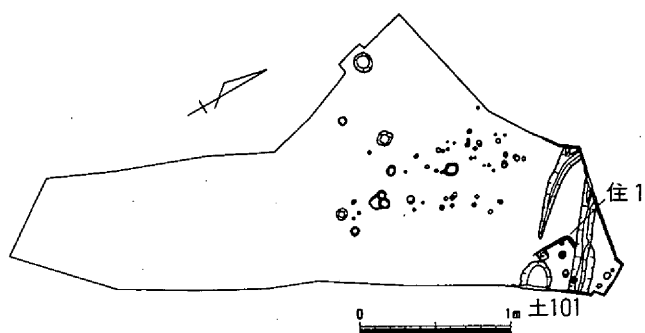


第97図 遺構配置図(1/500)

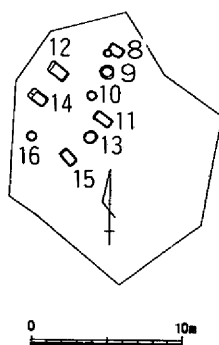




第98図 I区墓域配置図 (1/500)



第99図 仮道調査区遺構配置図 (1/500)



第100図  
阿坂調査区  
遺構配置図 (1/500)

方に大きく拡張する播鉢である。612、617は、播鉢の底部である。618は、大型の播鉢で、口縁端部は少し肥厚する。内面は、ヨコ方向のハケナデ後に条線が施されている。外面にはタテ方向のハケ目が見られ、把手が付く。

以上は、包含層から出土した中世の遺物の概要であるが、椀、小皿は土師質であり、土鍋は乳白色を呈するものがほとんどである。甕は、須恵質のものと瓦質のものがある。播鉢はすべて瓦質のものである。

#### 仮道調査区出土遺物（第96図）

619は香炉で、内面にはヨコ方向のハケ目が見られ、外面には花を模した押型の文様が施される瓦質の土器である。620は、備前焼の播鉢で、口縁端部は上方に大きく立ち上る。621も播鉢で、不規則に条線が施されるもので瓦質の土器である。622は、土鍋で、口縁部はほぼ水平に外方に開く。623は、火鉢状の土器で、内面はヨコ方向のハケ目が見られる。624は瓦質の羽釜である。627も瓦質の羽釜で、胴部に鏝を貼り付けるものである。628は瓦質の土器で、外面にはへら描きの文様が施され、内面はヨコ方向のハケ目が見られる。629は土師質の焙烙で、体部内面にはヨコ方向のハケ目が見られる。

以上は、仮道調査区出土の遺物であるが、建物2付近より出土する遺物よりは新しい様相をもつものと考えられる。

(井上)

## 第4章 まとめ

### 1 出土須恵器について

上竹西の坊遺跡より出土した須恵器は、窯、灰原、土壌、住居跡、包含層などからであるが、このうち1号窯、2号灰原に関係すると思われる遺物から本遺跡の須恵器生産について検討を加えてみたい。須恵器のうち最も普遍的に認められ器形の変化が捉えやすい蓋杯を中心に分類した。この分類にあたっては形態・法量・技法的特色・セット関係を県内の他の窯跡の編年に対比してA～D類に大別した。以下各類ごとに特色を概説する。

#### 杯蓋A類 (135、136、201～203)

口径11～12cm器高3.5～4cmを測る。天井部は丸味を帯びへら起こしの後ナデを加え口縁部が垂直に下る。

#### 杯身A類 (135、136、201～203)

口径10.5～11cm、受部径12～13cm高さ3cm前後を測り受け部の立ち上りは1～3mmと低く底部はへら起こしの後ナデでやや平底気味を呈す。

#### 杯蓋B類 (158～162・204～210)

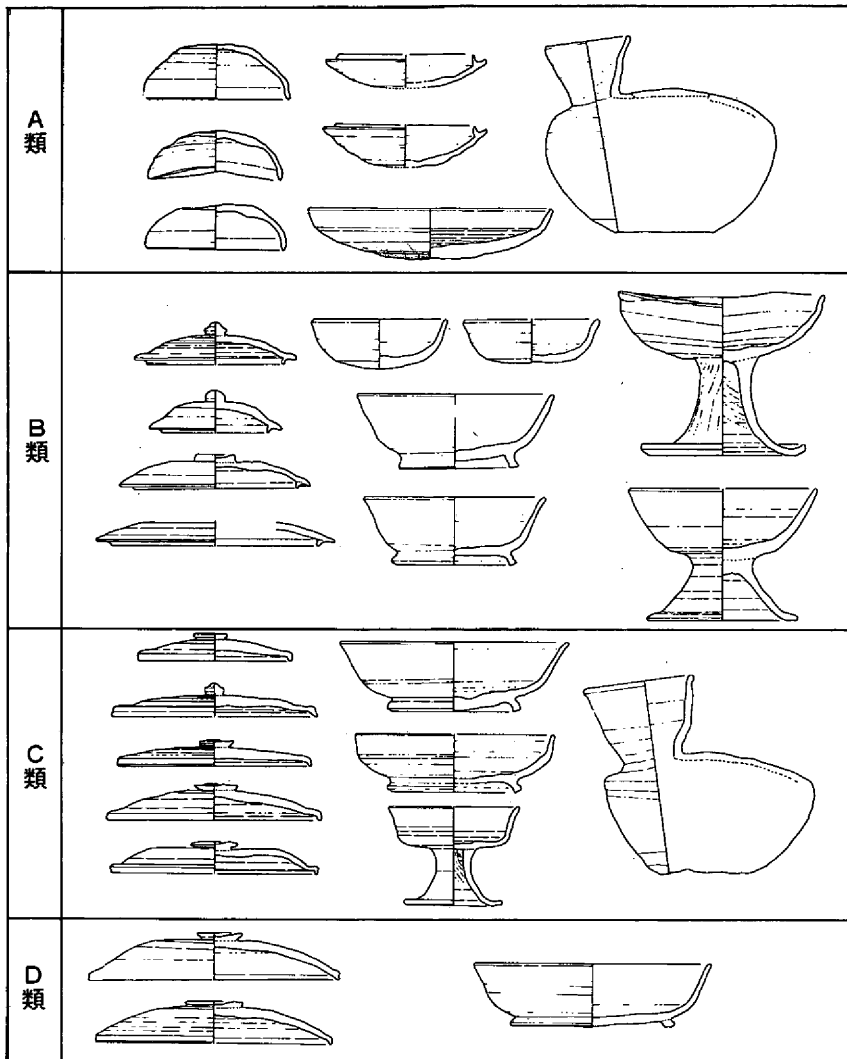
無台杯身の蓋は口径11～13cmかえり径9～10cm前後、高さ3～3.5cmを測る。天井には擬宝珠状のつまみが付き、かえりはほとんど突出しないものもある。有台杯身の蓋は口径15cmのものと20cm前後のものがあり、かえりが3mm程下方に突き出る。つまみは大型のものは不明であるが擬宝珠状のものが付くと思われ小型のものは扁平な円盤状のものが付く。

#### 杯身B類 (174～176、276～283、151、307～310、512)

無台杯身は口径10cm前後、高さ3.5～4cmを計り、底部はへら起こしの後ナデで平底気味である。口縁部は緩やかに立ち上りやや外反する。有台杯身は口径15～16cm、底径8～10cm、高さ6cm前後で比較的口径の割には器高が高く、高台は大型で外傾するものが付く。口縁部は直線的に立ち上るものが多い。

#### 杯蓋C類 (163、137～141、150、165～169、213～261、497～500、510、511)

この段階は口径、高さによって4タイプに分けられるが、数量的に最も多く、胎土が砂粒を多く含むようになり全体的に雑な仕上がりである。無台杯身の蓋は口径12cm前後、高さ1cm～3cmである。体部は直線的に伸び端部はほぼ直角に折り返される。天井部には基石状のつまみが付く。有台杯身の蓋はすべて口径16cm前後で高さは2cm前後で扁平なものと3cm前後のものが



第101図 須恵器分類図 (1/6)

ある。直線的に伸びるものと、やや丸味を帯びるものがあり端部は下方へほぼ垂直に折り返すものと屈曲して折り返すものがある。天井には基石状のつまみが付くが、扁平なものとやや丸いものがある。また擬宝珠状のものも若干ある。

杯身C類(142~144、152、177~180、284~306、311~322、501~503、506、509、513~515)

無台の杯身は口径12cm前後、高さ3~4cmのものと口径14cm前後、高さ4~5cmのものがある。底部はへら起こしの後ナデのものが多く平底気味である。体部は丸く口縁部はやや外反気味に立ち上る。有台杯身は口径17cm前後、高さ5cm底径10~11cmのものと口径14~15cm、高さ4cm、底

径9～10cmのものがある。底部は平底で、口縁部の立ち上りはあまり明瞭ではなくやや外反気味のもの、短かく外傾気味に立ち上るものがある。高台は比較的高く外傾している。

#### 杯蓋D類 (262～273)

口径18～22cm高さ2～4cmを測り体部は丸味をもって伸びるものと扁平なものがある。端部はわずかに折り返されている。天井には円盤状のつまみが付く。

#### 杯身D類 (324)

口径19cm、高さ5cm、底径13cmを測る比較的大型で扁平な杯である。底部は高台より若干突き出し口縁部は緩やかに立ち上る。高台は小さく低く外傾するものが貼付されている。

次にこれらの須恵器を県内の他の窯跡の出土遺物と比較してみるとA類は亀ヶ原1式(註1)、宮嶋古窯跡の1類(註2)、寒田5号窯のA類(註3)に類似している。B類は寒風B類(註4)、土橋窯(註5)の古相を示すものに類似しC類は土橋窯の新しい様相のもの、寒風C類(註4)の古いものに類似している。D類は宮嶋古窯跡(註2)の3類と寒風C類(註4)に類似していると考えられるが細部に於いて完全に比定できない要素もある。例えばB・C類の有台杯身は新器形の導入時の試行、模作を思わせるほど個体差が大きく他の窯跡の同じ様相をもつものと若干異なっている。このことが当窯又は備中南部に於ける地域的な特色なのかどうかは調査例が乏しく断言はできない。最後に遺物の時期であるが、他の窯跡との対比によってAB類は7世紀前半、C類は中頃から後半、D類は、7世紀末が考えられ各類が重複して存在した可能性も十分考えられることなどから実年代は幅をもたせて考えたい。最後に窯の操業時期であるが、1号窯の床面中の杯蓋は灰原・2のものより若干小型化し新しい様相を示しているためA類の段階では灰原・2の窯の方が早く操業を開始したことが考えられる。またD類は1号窯の灰原からは出土していないので灰原・2の窯が1時期長く存続したと思われる。しかしながらA～C類の時期に於いては2基の窯が同時に存在したことは確実であり、それが並行して操業したものか、交互にしたものかは遺物からは判断しかねるもので、備中南部の須恵器編年と共に今後の課題である。(武田)

#### 註

- 註1 西川宏「備前の古窯」『古代の日本』 1970
- 註2 伊藤晃「新林(宮嶋)窯跡の調査報告」 邑久町教育委員会、東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会 1974
- 註3 柳瀬昭彦ほか「黒土・寒田窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』31 岡山県教育委員会 1979
- 註4 山磨康平「寒風古窯跡群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27 岡山県教育委員会 1978
- 註5 岡田博「土橋窯跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告』13 岡山県教育委員会 1983

## 2 遺跡のまとめ

上竹西の坊遺跡では、弥生時代から中世までの各時代の遺構を調査した。ここでは、それを概観してまとめに代えたい。

弥生時代のものとして、住居跡を6棟調査した。住居跡は、方形のものと円形を呈するものの2種類ある。住居跡は、8以外からは、床面において柱穴は検出されなかった。4、5の住居跡からは、その埋土からまとめて土器が出土している。その土器からすれば、住居跡の年代は、弥生時代中期の中頃を少し下る時期と考えられる。熱残留磁気による年代測定で、住居跡4の床面に検出した焼土を測定した。その結果は、現在判明している磁気の移動曲線からすれば、1600年となるが、それはありえないことであり、今後の研究課題である。

古墳時代の住居跡を2棟調査した。1棟は、前期のものであり、他は後期のものである。前期のものは、大きく削平されているため、2本の柱穴しか検出されなかったが、4本柱を持つ方形の住居跡で、造りつけのカマドをもつ。遺存状態が悪いため、出土遺物も少なく、時代の判明するものは土師器碗1点のみで、須恵器の出土はなかった。後期のものも方形を呈するものである。この住居跡の床面からは柱穴は検出されなかった。床面上からは須恵器の杯と蓋杯が出土しており、7世紀前半と考えられる。住居跡は、灰原2に伴うと考えられる溝状遺構に切られており、灰原2とするものより古い。

須恵器窯は1基を調査した。水田の造成のため焚口が削平されているのと、果樹園のため、煙道部分が削平されていた。窯は無段の登り窯であり、数回の修理が見られる。調査区内に検出した須恵器窯は1基のみであるが、C4区で検出した須恵器群は、やはり灰原の一部と考えられる。調査した須恵器窯より高い位置にあることから、他にもう一基の須恵器窯のあった可能性は大きいものとする。この窯跡は、金光町須恵から玉島陶にかけて点々と発見される古窯跡群の一部をなすものであろう。窯跡は、熱残留磁気による年代測定を行ったが、報告される年代（6世紀末～7世紀初頭）よりは少し新しい年代に考えたい。灰原2としたものは、それに伴う窯体の発見はないが、この一群の上方で溝状遺構を検出し、その中より出土した須恵器片と灰原2からの出土遺物が接合されることから、この溝状遺構は、灰原2と同一と考えられるものである。さらに、この溝状遺構が、須恵器窯の排水溝の一部と考えれば、溝状遺構の上方に須恵器窯が存在した可能性は大きい。

土師器窯であるが、焚口のみを調査であるため、上半部の形状は不明である。窯の焚口的位置からすれば、窯を造るため斜面を削り平坦面を造成していることは明らかである。とすればその平面は、窯に伴う作業場とすることができるであろう。窯の作られた年代であるが、窯の埋土から出土した須恵器、焚口付近から出土した須恵器からして、8世紀中頃と考えられる。

熱残留磁気による年代測定では、8世紀後半とするものであり、ほぼ近い結果が出ている。

中世の遺構としては、建物と土壙墓がある。建物は2棟を調査したが、年代の確かなのは、建物2とされるものである。建物2は、斜面を整地して、屋敷地を造成して建築している。建物としては、これといった特徴はなく、長方形を呈する側柱の建物である。本文でも述べたがこの建物は、火災により消滅したもので、造成面上から焼土を検出した。その焼土を含む層から雷文の施された青磁片が出土している。土器としては、土鍋、播鉢、椀の類である。特に注目したいのは、壺の破片に、色、形態は備前焼に似るも、胎土の違うものがあり、備中、備前以外の地方から持ち込まれた物と考えられるものがある。遺物を通じて推定される年代は、概略15世紀頃と考えたい。中世墓としては、土壙墓17が最も古いと考えられる。I区で調査した土壙墓は、中世末から近世初頭頃と考えておきたい。阿坂調査区の土壙墓は、出土遺物がないため、確定的な年代は不明であるが、一応近世と考えておきたい。

(井上)

表1 石器一覧表

番号	遺物	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	出土遺構	備考
S1	石 鏃	サヌカイト	26	14	2.5	0.96	住 4	
S2	"	"	26	16	3.5	1.17	"	
S3	"	"	18	13	2	0.45	"	
S4	楔形石器	"	23	27	7	5.25	"	
S5	"	"	29	29	7	8.72	"	
S6	スクレーパー	"	49	25	7	8.46	"	
S7	石包丁	"	74	52	12	59.25	"	
S8	"	"	97	43	8.5	47.24	"	
S9	石 鏃	"	29	22	4.5	1.80		
S10	"	"	25	16	2	1.04		
S11	"	"	25	17	4	1.55		
S12	"	"	20	19	4	1.48		
S13	"	"	21	19	4	1.47		
S14	"	"	22	13	2	0.56		
S15	"	"	17	14	3	0.91		
S16	スクレーパー	"	52	40	5.5	11.11		
S17	"	"	34	30	5.5	5.64		
S18	楔形石器	"	50	36	10	24.31		
S19	"	"	23	31	7	6.46		
S20	"	"	38	23	6	8.43		
S21	"	"	33	30	10	17.21		
S22	"	"	31	25	9	9.03		
S23	"	"	39	40	10	20.32		
S24	砥 石		52	45	12	43.43		
S25	"		26	42	11	17.70		
S26	石包丁	サヌカイト	59	51	10	38.92		
S27	"	"	64	46	12	41.56		



表2 須恵器一覧表

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考	
		口径	底径	器高						
128	杯身	12.8	—	3.4	○底部へラ起こしの後ナデ。ロクロ右回転。	淡灰色	精良	良好	○須恵器完存。	
129	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/3残存。	
130	"	11.2	0	4.6	"	青灰色	"	"	○須恵器完存。	
131	杯蓋	—	—	—	○天井部へラ起こしの後ナデ。端部に面をもつ。	淡灰色	"	"	○須恵器1/2弱残存。	
135	"	10.8	—	3.4	"	暗青灰色	細砂わずか	"	○須恵器完存。	
136	"	10.7	—	3.2	"	"	"	"	"	
137	"	—	—	—	○回転へラ削りの後ナデ。	淡灰色	砂粒が多い	"	○須恵器1/3残存。	
138	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/2弱残存。	
139	"	16.6	—	2.6	"	青灰色	"	"	○須恵器1/2弱残存。	
140	"	16.2	—	2.0	"	"	"	"	○須恵器完存。	
141	"	17.0	—	3.0	"	"	"	"	○須恵器1/2弱残存。	
142	杯身	—	—	—	○へラ起こしの後ナデ。	黒色	砂粒多い	不良	○須恵器1/3残存。	
143	"	—	—	—	"	黒色	"	"	"	
144	"	—	—	—	"	暗青灰色	"	良好	"	
145	"	11.0	—	6.0	○へラ起こし未調整。	"	"	"	○須恵器完存。	
146	"	—	—	—	○へラ起こしの後ナデ。	白灰色	砂粒多い	不良	○須恵器1/3残存。	
147	横瓶	—	—	—	○外面平行タタキ。内面同じ円タタキ。	青灰色	"	良好	○須恵器1/3残存。	
148	甕	—	—	—	○内外面ともハケ調整。口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色	細砂含む	"	○土師器1/2弱残存。	
149	"	26	—	—	"	"	"	"	○土師器完存。	
150	杯蓋	17.6	—	3.4	○回転へラ削り。ロクロ右回り。	淡灰色	砂粒多い	良好	○須恵器完存。	
151	杯身	16.6	10.2	6.6	○口縁部ヨコナデ。	淡灰色	"	"	"	
152	杯身	18.2	10.0	5.4	"	黒色	"	不良	"	
153	高杯	18.4	9.6	6.2	○口縁部ヨコナデ。内彎気味。	黒褐色	"	"	○須恵器2/3残存。	
154	"	—	—	—	"	青灰色	"	良好	○須恵器1/3残存。	
155	"	—	—	—	"	"	"	良好	"	
156	"	—	—	—	○端部が屈曲。	"	"	"	"	
157	瓶	30.4	20.2	30.6	○内外面ともヨコナデ。下端はへラ削り。	褐色	"	不良	○須恵器把手を欠損。	
158	杯蓋	—	—	—	○回転へラ削り。ロクロは右回り。	淡灰色	細砂含む	良好	○須恵器1/3残存。	
159	"	—	—	—	"	"	"	"	"	
160	"	—	—	—	○擬宝珠状のつまみ。	黄褐色	"	不良	○須恵器つまみ残存。	
161	杯蓋	—	—	—	○回転へラ削り。ロクロは右回り。	淡灰色	細砂含む	良好	○須恵器2/3を欠損。	
162	"	—	—	—	"	"	"	良好	○須恵器天井を欠損。	
163	"	—	—	—	"	淡褐色	砂粒多い	不良	"	
164	"	—	—	—	○体部に凹線。	淡灰色	"	"	"	
165	"	—	—	—	○回転へラ削り。ロクロは右回り。	淡褐色	"	"	○須恵器1/3残存。	
166	"	17	—	2.8	"	"	"	良好	○須恵器1/2弱残存。	
167	"	—	—	—	"	"	"	不良	○須恵器2/3を欠損。	
168	"	—	—	—	"	ロクロは左回り。	白灰色	"	"	
169	"	—	—	—	"	ロクロは右回り。	淡黄褐色	"	"	
170	杯身	—	—	—	"	淡灰色	細砂含む	良好	○須恵器1/3残存。	
171	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/4残存。	
172	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/3残存。	
173	"	—	—	—	"	"	"	"	"	
174	"	—	—	—	○へラ起こしの後ナデ。	青灰色	砂粒多い	良好	○須恵器1/2弱残存。	
175	"	—	—	—	"	淡灰色	"	"	○須恵器1/3残存。	
176	"	—	—	—	"	淡黄色	"	不良	○須恵器1/3残存。	
177	"	—	—	—	"	白灰色	"	"	"	
178	"	—	—	—	"	器高が高い。	"	"	"	
179	"	—	—	—	"	淡褐色	"	"	○須恵器1/4残存。	
180	"	—	—	—	"	淡灰色	"	良好	○須恵器1/3残存。	
181	"	—	—	—	"	黄褐色	"	不良	○須恵器小破片。	
182	"	—	9.2	—	"	"	"	"	"	
183	"	—	—	—	"	口縁部が短く立ち上がる。	淡灰色	"	良好	"
184	"	—	—	—	"	"	"	"	"	
185	"	—	—	—	"	底部が突き出る。	"	"	"	

須恵器一覽表

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
186	長頸壺	—	—	—	○外面平行タタキ。内面同心円タタキ。	淡灰色	砂粒多い	良好	○須恵器1/3残存。
187	〃	—	—	—	○肩部は丸味を帯びて屈曲。	〃	〃	〃	○須恵器小破片。
188	〃	—	—	—	○口縁部はラッパ状に開く。	〃	〃	〃	〃
189	〃	—	—	—	○外面に凹線が巡る。	〃	〃	〃	〃
190	高杯	—	—	—	○脚部に凹線が巡り、しぼりが残る。	〃	〃	〃	〃
191	〃	—	—	—	○脚端が屈曲し、折り返している。	淡灰色	砂粒が多い	良好	○須恵器1/3残存。
192	台付椀	—	—	—	○内彎気味に開く。	青灰色	〃	〃	○須恵器小破片。
193	円面硯	—	—	—	○小型の方形透しが穿孔させている。ヨコナデ。	淡灰色	〃	不良	〃
194	擋鉢	—	9.2	—	○内外面ヨコナデ。外面カキ目調整。	〃	〃	〃	○須恵器1/3残存。
195	甕	—	—	—	○内外面ともヨコナデ。	〃	〃	〃	〃
196	〃	—	—	—	○外面カキ目調整。	〃	〃	〃	〃
197	横瓶	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部同心円タタキ。	〃	〃	〃	〃
198	甕	—	—	—	○ヨコナデの後、ハケ調整。	青灰色	〃	良好	○須恵器1/4残存。
199	〃	—	—	—	○外面ナデ。内面同心円タタキ。	淡灰色	〃	〃	○須恵器1/3残存。
200	〃	—	—	—	○外面平行タタキ。	〃	〃	〃	〃
201	杯蓋	12.6	—	3.8	○天井部へら起こしの後ナデ。	〃	細砂含む	〃	○須恵器2/3残存。
202	〃	11.8	—	4.0	〃	〃	〃	〃	○須恵器1/2残存。
203	〃	—	—	—	〃	暗青灰色	〃	〃	○須恵器1/2弱残存。
204	〃	8.4	—	2.4	○天井部回転へら削り。ロクロは右回り。	淡灰色	〃	〃	○須恵器2/3残存。
205	〃	—	—	—	〃	淡灰色	〃	〃	○須恵器1/3残存。
206	杯蓋	—	—	—	○杯が溶着している。	青灰色	細砂含む	良好	○須恵器完存。
207	〃	—	—	—	○天井部回転へら削り。ロクロは右回り。	淡灰色	〃	〃	○須恵器小片。
208	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
209	〃	11.2	—	3.6	〃	〃	〃	〃	○須恵器完存。
210	〃	—	—	—	〃	淡青灰色	〃	〃	○須恵器1/3残存。
211	〃	15.2	—	2.8	〃	白灰色	砂粒多い	不良	○須恵器完存。
212	〃	—	—	—	〃	淡灰色	〃	〃	○須恵器小片。
213	〃	12.2	—	2.2	〃	〃	〃	良好	○須恵器完存。
214	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	○須恵器1/2残存。
215	〃	11.8	—	2.6	〃	〃	〃	〃	○須恵器1/2強残存。
216	〃	11.0	—	2.6	〃	〃	〃	〃	○須恵器完存。
217	〃	11.2	—	—	〃	〃	〃	〃	○須恵器つまみ欠損。
218	〃	11.2	—	2.8	〃	淡青灰色	〃	〃	○須恵器完存。
219	〃	13.0	—	2.8	〃	〃	〃	〃	○須恵器完存。
220	〃	—	—	—	〃	淡灰色	〃	不良	○須恵器1/3残存。
221	杯蓋	—	—	—	〃	〃	砂粒多い	良好	○須恵器1/3残存。
222	〃	11.0	—	2.4	〃	〃	〃	〃	○須恵器1/2残存。
223	〃	—	—	—	〃	淡青灰色	〃	〃	○須恵器1/3残存。
224	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	○須恵器1/4残存。
225	〃	—	—	—	〃	淡黄灰色	〃	不良	○須恵器3/4残存。
226	〃	15.4	—	2.0	〃	淡灰色	〃	良好	○須恵器完存。
227	〃	16.0	—	1.8	〃	〃	〃	〃	〃
228	〃	15.9	—	2.4	〃	〃	〃	〃	〃
229	〃	—	—	—	〃	〃	〃	不良	○須恵器1/3残存。
230	〃	—	—	—	〃	〃	〃	良好	〃
231	〃	16.2	—	2.0	〃	〃	〃	〃	〃
232	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃
233	〃	16.2	—	1.6	〃	〃	〃	〃	○須恵器完存。
234	〃	—	—	—	〃	淡黄灰色	〃	不良	○須恵器1/3残存。
235	〃	16.0	—	2.4	〃	淡灰色	〃	良好	○須恵器完存。
236	〃	16.0	—	2.4	〃	淡青灰色	〃	〃	○須恵器1/2残存。
237	〃	16.4	—	2.4	〃	〃	〃	〃	〃
238	〃	15.8	—	2.4	〃	〃	〃	〃	〃
239	〃	15.4	—	2.0	〃	〃	〃	〃	○須恵器完存。
240	〃	—	—	—	〃	淡灰色	〃	〃	○須恵器1/2弱残存。

—上竹西の坊遺跡—

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
241	杯蓋	—	—	—	○天井部回転へう削り。ロクロは右回り。	淡灰色	砂粒多い	良好	○須恵器1/2残存。
242	—	—	—	—	—	—	—	不良	○須恵器1/3残存。
243	—	—	—	—	—	—	—	—	—
244	—	15.8	—	3.2	—	—	—	良好	○須恵器完存。
245	—	—	—	—	—	—	—	不良	○須恵器1/3残存。
246	—	—	—	—	—	—	—	—	—
247	—	—	—	—	—	—	—	—	—
248	—	—	—	—	—	—	—	—	—
249	—	—	—	—	—	—	—	良好	—
250	—	—	—	—	—	—	—	—	—
251	—	—	—	—	—	—	—	不良	○須恵器1/3残存。
252	—	—	—	—	—	—	—	—	—
253	—	17.4	—	2.8	—	淡青灰色	—	良好	○須恵器2/3残存。
254	—	17.0	—	2.8	—	淡灰色	—	不良	—
255	—	16.5	—	2.6	—	淡青灰色	—	良好	—
256	—	16.4	—	3.0	—	—	—	—	○須恵器完存。
257	—	—	—	—	—	—	—	—	—
258	—	—	—	—	—	—	—	—	—
259	—	—	—	—	—	青灰色	—	—	○須恵器1/3残存。
260	—	—	—	—	—	—	—	—	○須恵器完存。
261	—	16.8	—	—	—	—	—	—	—
262	—	—	—	—	—	淡灰色	—	—	○須恵器1/3残存。
263	—	—	—	—	—	—	—	—	—
264	—	—	—	—	—	—	—	—	—
265	—	—	—	—	—	—	—	—	—
266	—	—	—	—	—	—	—	良好	○須恵器1/3残存。
267	—	17.8	—	3.0	—	—	—	—	○須恵器完存。
268	—	—	—	—	—	淡黄灰色	—	不良	○須恵器1/3残存。
269	—	—	—	—	—	—	—	—	○須恵器1/4残存。
270	—	—	—	—	—	—	—	—	○須恵器1/3残存。
271	—	19.8	—	2.8	—	淡灰色	—	良好	○須恵器1/2残存。
272	—	—	—	—	—	淡黄色	—	不良	○須恵器1/3残存。
273	—	—	—	—	—	—	—	—	—
274	杯身	—	—	—	○底部へう起こし。未調整。	淡青灰色	細砂含む	良好	○須恵器小片。
275	—	—	—	—	—	—	—	—	—
276	—	—	—	—	○底部へう起こしの後ナデ。	淡灰色	砂粒多い	—	○須恵器1/3残存。
277	—	—	—	—	—	—	—	—	—
278	—	—	—	—	—	—	—	—	—
279	—	—	—	—	—	—	—	—	—
280	—	10.6	—	3.2	—	—	—	—	○須恵器2/3残存。
281	—	—	—	—	—	淡青灰色	—	—	○須恵器1/3残存。
282	—	—	—	—	—	—	—	—	—
283	—	—	—	—	—	淡灰色	—	—	—
284	—	—	—	—	—	淡青灰色	—	—	○須恵器1/4残存。
285	—	—	—	—	—	—	—	—	○須恵器1/3残存。
286	—	—	—	—	—	—	—	—	—
287	—	—	—	—	—	暗灰色	—	—	—
288	—	—	—	—	—	—	—	—	—
289	—	11.8	—	3.6	—	青灰色	—	—	○須恵器完存。
290	—	—	—	—	—	—	—	—	○須恵器1/3残存。
291	—	—	—	—	—	淡灰色	—	—	—
292	—	—	—	—	—	灰色	—	—	—
293	—	—	—	—	—	—	—	—	—
294	—	—	—	—	—	赤褐色	—	不良	—
295	—	—	—	—	—	淡灰色	—	良好	—

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
296	杯身	—	—	—	○底部へラ起こしの後ナデ。	青灰色	砂粒多い	良好	○須恵器1/3残存。
297	"	—	—	—	"	淡灰色	"	"	"
298	"	—	—	—	"	"	"	"	"
299	"	—	—	—	"	淡青灰色	"	"	"
300	"	12.6	—	4.2	"	淡灰色	"	"	○須恵器1/2残存。
301	"	12.8	—	4.0	"	"	"	"	○須恵器2/3残存。
302	"	—	—	—	"	淡黄色	"	不良	○須恵器1/4残存。
303	"	—	—	—	"	淡灰色	"	良好	○須恵器1/3残存。
304	"	—	—	—	"	淡青灰色	"	"	"
305	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/4残存。
306	"	—	—	—	"	青灰色	"	"	○須恵器1/3残存。
307	"	17.5	9.5	5.8	○底部へラ起こしの後ナデ。高台貼付。	淡灰色	"	不良	○須恵器完存。
308	"	14.4	9.8	5.2	"	白灰色	"	"	"
309	"	—	—	—	"	淡青灰色	"	良好	○須恵器1/3残存。
310	"	—	—	—	"	青灰色	"	"	"
311	"	—	—	—	"	白灰色	"	不良	○須恵器1/3残存。
312	"	—	—	—	"	"	"	"	"
313	"	—	—	—	"	淡青灰色	"	良好	"
314	"	—	—	—	"	"	"	"	"
315	"	—	9.6	—	"	"	"	"	○須恵器口縁部欠損。
316	"	—	—	—	"	灰色	"	"	○須恵器1/4残存。
317	"	—	—	—	"	青灰色	"	"	○須恵器1/3残存。
318	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/4残存。
319	"	—	—	—	"	灰色	"	"	○須恵器1/3残存。
320	"	—	—	—	"	白灰色	"	不良	"
321	"	—	—	—	"	青灰色	"	"	"
322	"	—	—	—	"	灰色	"	"	"
323	"	—	—	—	"	"	"	"	"
324	"	18.8	4.9	13.0	"	茶褐色	"	"	○須恵器完存。
325	椀	—	—	—	"	白灰色	"	"	○須恵器口縁部4/5欠損。
326	"	—	—	—	○底部へラ起こしの後ナデ。	黒色	"	"	○須恵器1/3残存。
327	"	—	—	—	"	"	"	"	"
328	皿	19.3	—	3.8	○底部へラ起こしの後ナデ。ハケ調整。	白灰色	"	"	○須恵器完存。
329	"	—	—	—	○底部へラ起こしの後ナデ。	淡黄褐色	"	"	○須恵器1/3残存。
330	"	—	—	—	"	"	"	"	"
331	高杯	—	—	—	○杯部ヨコナデ。	茶褐色	"	"	○須恵器1/3残存。
332	"	—	—	—	"	黄褐色	"	"	"
333	"	—	11.0	—	○脚部ヨコナデ。	"	"	"	○須恵器脚部2/3残存。
334	"	—	11.2	—	"	"	"	"	"
335	"	—	11.4	—	"	"	"	"	"
336	"	—	10.4	—	"	"	"	"	"
337	"	—	10.8	—	"	"	"	"	○須恵器完存。
338	"	—	10.6	—	"	"	"	"	○須恵器脚部1/2残存。
339	"	—	10.0	—	"	"	"	"	"
340	"	—	10.8	11.8	○杯部ヨコナデ。脚部ヨコナデの後しぼり。	青灰色	"	良好	○須恵器杯部1/3残存。
341	"	16.4	12.9	12.6	○杯部ヨコナデ。脚部内外面しぼり。	"	"	"	○須恵器完存。
342	"	16.2	10.3	11.8	"	"	"	"	"
343	"	—	11.0	—	"	"	"	"	"
344	"	—	10.2	—	"	"	"	"	"
345	"	—	—	—	"	淡灰色	"	"	○須恵器1/3残存。
346	"	—	—	—	"	灰色	"	"	"
347	"	—	—	—	"	青灰色	"	"	"
348	"	14.2	—	—	"	黄灰色	"	不良	○須恵器杯部完存。

—上竹西の坊遺跡—

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
349	高杯	—	—	—	○杯部ヨコナデ。脚部内外面しほり。	青灰色	砂粒多い	良好	○須恵器1/3残存。
350	"	—	—	—	"	"	"	"	"
351	"	—	10.3	—	"	"	"	"	○須恵器脚部完存。
352	"	—	10.0	—	"	"	"	"	"
353	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/2弱残存。
354	"	—	8.2	—	"	"	"	"	○須恵器杯部1/3残存。
355	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/3残存。
356	"	—	—	—	○杯部脚部ヨコナデ。	淡灰色	"	良好	○須恵器1/2弱残存。
357	平瓶	—	7.0	15.0	○天井部に円板充填。	"	"	"	○須恵器ほぼ完存。
358	"	—	—	—	○天井部に円板なしヨコナデ。	青灰色	"	"	○須恵器肩部残存。
359	"	—	10.0	—	"	"	"	"	○須恵器注口部欠損。
360	"	6.8	7.6	15.0	○天井部に円板充填。	"	"	"	○須恵器完存。
361	"	—	8.4	—	"	"	"	"	○須恵器注口部欠損。
362	甕	—	—	—	○肩部に把手が貼付されている。	"	"	"	○須恵器小片。
363	觶	—	—	—	○内外面ヨコナデ。頸部内面しほり。	淡灰色	"	"	○須恵器口縁部1/3残存。
364	長頸壺	—	—	—	○内外面ともヨコナデ。	"	"	"	○須恵器頸部残存。
365	"	—	—	—	○内外面ヨコナデ。底部へう起こしの後ナデ。	暗灰色	"	"	○須恵器高杯部1/3残存。
366	短頸壺	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	青灰色	"	"	○須恵器1/3残存。
367	"	—	—	—	"	白灰色	"	不良	○須恵器1/2弱残存。
368	"	—	—	—	○内外面ヨコナデ。口縁部ハケ調整。	"	"	"	"
369	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/3残存。
370	壺蓋	—	—	—	"	暗青灰色	"	良好	○須恵器1/2弱残存。
371	甕	—	—	—	○外面平行タタキの後カキ目。内面同心円タタキ。	暗青灰色	"	"	○須恵器1/3残存。
372	"	—	—	—	"	黄灰色	"	不良	○須恵器1/4残存。
373	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/3残存。
374	"	—	—	—	"	"	"	"	"
375	横瓶	11.8	—	—	" 内板充填。	青灰色	"	良好	○須恵器体部1/2残存。
376	"	—	—	—	"	黄灰色	"	不良	○須恵器1/3残存。
377	"	—	—	—	"	淡灰色	"	"	"
378	"	—	—	—	"	"	"	"	"
379	甕	—	—	—	○体部外面平行タタキ。内面同心円タタキ。	青灰色	"	良好	○須恵器1/4残存。
380	"	—	—	—	○口縁部内外面ともヨコナデ。	"	"	"	○須恵器1/3残存。
381	"	—	—	—	"	"	"	"	"
382	"	—	—	—	"	淡灰色	"	"	"
383	"	—	—	—	"	青灰色	"	"	○須恵器1/4残存。
384	"	—	—	—	"	"	"	"	"
385	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/3残存。
386	"	—	—	—	"	黄灰色	"	不良	"
387	"	—	—	—	"	青灰色	"	良好	"
388	"	—	—	—	"	"	"	"	"
389	"	—	—	—	○体部外面タタキの後カキ目。内面同心円タタキ。	淡灰色	"	不良	"
390	"	—	—	—	○内面車輪文タタキ。	青灰色	"	良好	○須恵器小片。
391	"	—	—	—	○口縁部描波状文。外面平行タタキ。内面同心円タタキ。	"	"	"	○須恵器体部1/2欠損。
392	"	21.6	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部外面平行タタキ。内面同心円タタキ。	"	"	"	○須恵器土半残存。
393	"	—	—	—	○口縁部内外面ともヨコナデ。	"	"	"	○須恵器1/3残存。
394	"	—	—	—	○口縁部外面描波状文。体部内面同心円タタキ。	淡灰色	"	不良	○須恵器1/4残存。
395	"	—	—	—	○口縁部外面斜格子文。波状文。内面ヨコナデ。	黒灰色	"	良好	○須恵器1/6残存。
396	"	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部外面平行タタキ。内面同心円タタキ。	淡青灰色	"	"	○須恵器1/3残存。

遺物番号	器種	法 量 (cm)			形 態 ・ 手 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
397	甕	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部外面平行タタキ。内面同心円タタキ。	淡青灰色	砂粒多い	良 好	○須恵器底部残存。
398	"	—	—	—	"	"	"	"	"
399	"	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。体部外面カキ目調整。内面同心円タタキ。	茶褐色	"	不 良	○須恵器1/3残存。
400	"	—	—	—	"	灰色	"	良 好	"
401	盤	—	—	—	○内外面ともヨコナデ。把手貼付。	青灰色	"	"	○須恵器1/6残存。
402	蓋	30.3	—	9.4	○内外面ともヨコナデ。天井部回転ヘラ削り。	黄灰色	"	不 良	○須恵器完存。
403	甌	—	14.0	29.6	○外面はヨコナデの後カキ目調整。内面ヨコナデ。	茶褐色	"	"	○須恵器体部完存。
404	円 面 甌	—	—	—	○内外面ともヨコナデ。	青灰色	"	良 好	○須恵器1/6残存。
405	"	—	—	—	"	"	"	"	"
406	甕	—	—	—	○口縁部ヨコナデ。内外面ともハケ調整。	黄褐色	細砂含む	"	○土師器1/3残存。
407	"	—	—	—	"	"	"	"	"
408	"	—	—	—	"	"	"	"	○土師器1/4残存。
409	"	—	—	—	○内外面ともヨコナデ。	"	"	"	"
410	"	—	—	—	"	"	"	"	"
411	"	—	—	—	"	"	"	"	"
412	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/3残存。
413	"	—	—	—	"	"	"	"	"
414	"	—	—	—	"	"	"	"	"
415	"	—	—	—	"	"	"	"	"
416	甕	—	—	—	○内外面ともヨコナデ。	黄褐色	細砂含む。	良 好	○土師器1/4残存。
417	"	—	—	—	○外面ナデ。内面ハケ調整。	"	"	"	○土師器1/3残存。
418	杯 蓋	—	—	—	○天井部回転ヘラ削り。	白灰色	"	不 良	○須恵器1/3残存。
419	杯 身	—	—	—	○底部回転ヘラ削り。	"	"	"	○須恵器1/3残存。
420	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/4残存。
421	"	—	—	—	"	"	"	"	"
422	皿	—	—	—	○ヘラ起こし未調整。	"	"	"	○須恵器1/6残存。
423	甕	—	—	—	○外面ハケ調整。内面ナデ。	黄褐色	砂粒多い	良 好	○土師器1/4残存。
424	杯	—	—	—	○底部ヘラ削り。赤褐色の丹塗り。	赤褐色	砂含まず	"	"
425	製 埴 土 器	—	—	—	○内外面指頭圧の後ナデ。	黄白色	"	"	"
426	"	—	—	—	"	"	"	"	○土師器1/3残存。
427	"	—	—	—	"	"	"	"	○土師器1/8残存。
428	"	—	—	—	"	"	"	"	"
429	"	—	—	—	"	"	"	"	"
430	"	—	—	—	"	"	"	"	"
431	"	—	—	—	○外面平行タタキの後ナデ。内面指頭圧の後ナデ。	"	砂粒含まず	"	○土師器1/8残存。
432	"	—	—	—	"	"	"	"	"
435	"	—	—	—	"	"	"	"	"
436	"	—	—	—	○指頭圧の後ナデ。	"	"	"	○土師器底部残存。
437	"	—	—	—	"	"	"	"	"
438	"	—	—	—	"	"	"	"	"
439	杯 蓋	18.8	—	3.0	○天井部回転ヘラ削り。ロクロは右回り。	黄白色	細砂含む	不 良	○須恵器完存。
440	"	15.0	—	2.4	"	"	"	"	"
441	"	14.6	—	2.1	"	"	"	"	"
442	"	13.9	—	2.6	"	"	"	"	"
443	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/3残存。
444	"	—	—	—	"	"	"	"	"
445	杯 身	—	—	—	○底部回転ヘラ削り。体部ヨコナデ。	淡灰色	"	良 好	"
446	"	—	—	—	"	黄白色	"	不 良	"
447	"	12.6	8.6	3.8	"	淡灰色	"	良 好	○須恵器完存。
448	"	11.8	7.6	3.4	"	淡灰色	"	"	"
449	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/3残存。
450	"	12.4	8.6	3.8	"	"	"	"	○須恵器1/2残存。
451	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/3残存。

—上竹西の坊遺跡—

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手注の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
452	杯身	—	—	—	○底部回転ヘラ削り。体部ヨコナデ。	淡灰色	細砂含む	良好	○須恵器1/3残存。
453	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/4残存。
454	"	—	—	—	"	"	"	"	"
455	"	—	—	—	"	黄白色	"	不良	○須恵器1/3残存。
456	"	—	—	—	"	淡灰色	"	良好	"
457	"	—	—	—	"	黄褐色	"	不良	"
458	"	—	—	—	"	淡灰色	"	良好	"
459	"	13.6	10.2	3.4	"	黄褐色	"	不良	○須恵器完存。
460	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/3残存。
461	"	—	—	—	"	"	"	"	"
462	"	—	—	—	"	"	"	"	"
463	"	—	—	—	"	"	"	"	"
464	"	—	—	—	"	黄白色	"	"	"
465	"	13.4	—	4.6	"	"	"	"	○須恵器完存。
466	杯蓋	—	—	—	○天井部回転ヘラ削り。体部ヨコナデ。	"	"	"	○須恵器1/3残存。
467	"	—	—	—	"	"	"	"	"
468	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/4残存。
469	皿	—	—	—	○底部回転ヘラ削り。体部ヨコナデ。	"	"	"	○須恵器1/3残存。
470	"	—	—	—	"	"	"	"	"
471	"	—	—	—	○底部ヘラ起こしの後ナデ。	"	"	"	"
472	"	—	—	—	"	"	"	"	"
473	"	—	—	—	○底部回転ヘラ削り。体部ヨコナデ。	"	"	"	"
474	"	—	—	—	"	"	"	"	"
475	"	—	—	—	"	"	"	"	"
476	甌	—	—	—	○外面ハケ。カキ目調整。内面ナデ。	白灰色	"	不良	○須恵器1/6残存。
477	短頸壺	—	—	—	○外面カキ目調整。内面ナデ。	淡灰色	"	良好	○須恵器1/3残存。
478	短頸壺	—	—	—	○外面カキ目。内面ナデ。	"	砂粒含む	"	"
479	長頸壺	—	—	—	○内外面ヨコナデ。	"	"	"	"
480	"	—	—	—	"	"	"	"	"
481	"	—	—	—	"	"	"	"	"
482	甕	—	—	—	○外面タタキ。内面ナデ。	"	"	"	○須恵器1/4残存。
483	"	—	—	—	○外面カキ目。内面ナデ。	白灰色	"	不良	"
484	不明	—	—	—	○外面ハケ調整。内面ナデ。	"	"	"	○須恵器1/6残存。
485	杯身	—	—	—	○底部外面にヘラ文字。	"	"	"	○須恵器底部残存。
486	甕	—	—	—	○内外面ハケ調整。	黄褐色	"	良好	○土師器1/3残存。
487	"	—	—	—	"	"	"	"	"
488	"	—	—	—	"	"	"	"	○土師器1/4残存。
489	"	—	—	—	"	"	"	"	"
490	"	—	—	—	"	"	"	"	"
491	杯身	—	—	—	○底部ヘラ削り。赤橙色の丹塗り。	赤橙色	"	"	"
492	"	—	—	—	"	"	"	"	"
493	"	—	—	—	"	"	"	"	"
494	甌	—	—	—	○外面ハケ調整。内面ナデ。	淡黄灰色	"	"	○須恵器1/3残存。
495	"	—	—	—	"	"	"	"	"
496	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/4残存。
497	杯蓋	16.8	—	—	○天井部回転ヘラ削り。	淡褐色	砂粒多い	不良	○須恵器完存。
498	"	—	—	—	"	黄灰色	"	"	○須恵器1/3残存。
499	"	15.6	—	2.8	"	"	"	"	○須恵器完存。
500	"	—	—	—	"	青灰色	"	良好	"
501	杯身	11.6	—	4.2	○底部ヘラ起こしの後ナデ。	"	"	"	"
502	"	11.2	—	3.2	"	"	"	"	"
503	"	—	—	—	"	"	"	"	"
504	高杯	19.8	—	—	○杯部ヨコナデ。	黄褐色	"	不良	○須恵器脚部欠損。
505	甕	15.0	—	16.4	○体部外面カキ目。ヘラ削り。内面ヨコナデ。	茶褐色	"	良好	○土師器完存。
506	杯身	11.4	—	4.0	○底部ヘラ起こしの後ナデ。	暗青灰色	"	"	○須恵器完存。

須恵器一覧表

遺物番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高					
507	長頸壺	—	—	—	○内部面ヨコナデ。	淡灰色	砂粒多い	良好	○須恵器1/3残存。
508	杯蓋	—	—	—	○体部ヨコナデ。	"	砂粒多く含む	"	"
509	杯身	—	—	—	○底部回転ヘラ削り。体部ヨコナデ。	"	"	"	"
510	杯蓋	12.0	—	3.0	○天井部回転ヘラ削り。ロクロは右回り。	"	"	"	○須恵器完存。
511	"	12.0	—	—	"	"	"	"	"
512	杯身	15.3	—	5.2	○底部回転ヘラ削り。体部ヨコナデ。	淡青灰色	"	"	"
513	"	—	—	—	"	青灰色	"	"	○須恵器1/3残存。
514	"	—	—	—	"	黄灰色	"	不良	"
515	"	12.3	—	4.4	"	淡灰色	"	良好	○須恵器完存。
516	杯蓋	—	—	—	○天井部回転ヘラ削り。ロクロは右回り。	淡灰色	"	不良	"
517	高杯	—	—	—	○体部、脚部ヨコナデ。	青灰色	"	良好	○須恵器1/3残存。
518	杯蓋	—	—	—	○天井部回転ヘラ削り。体部ヨコナデ。	黄褐色	細砂含む	不良	○須恵器つまみ残存。
519	"	—	—	—	"	"	"	"	○須恵器1/3残存。
520	"	—	—	—	"	"	"	"	"
521	杯身	13.2	8.8	3.6	○底部回転ヘラ削り。体部ヨコナデ。	"	"	"	○須恵器完存。
522	"	13.0	8.6	4.2	"	"	"	"	"
523	"				"	"	"	"	○須恵器1/3残存。



## 上竹西の坊遺跡から出土した焼土の 熱残留磁気による年代測定

島根大学理学部 時枝克安 伊藤晴明

### 1. はじめに

上竹西の坊遺跡（岡山県金光町）からは、須恵器窯1基、土師器窯2基、鍛冶炉1基、住居跡炉跡1基が出土している。ここでは、これらの焼土の熱残留磁気の方向を過去の地磁気の方向と比較して推定した焼土の最終焼成年代について述べる。このようにして求めた年代を考古地磁気年代と呼ぶ。

さて、考古地磁気年代を推定する仕組みを簡単に説明すると次のようになる。地磁気の方向は一定ではなく、時間が10年以上経過すると、目に見えて変化する。他方、粘土が地磁気中で加熱されると熱残留磁気を帯びる。熱残留磁気の方向は正確に加熱時の地磁気の方向に一致し、一度帯磁すると、再加熱を受けない限り、数万年程度の時間がたっても変化しない。それゆえ、年代既知の焼土の熱残留磁気を測定して、過去における地磁気の方向と時間との関係を確立できれば、逆に、年代未知の焼土の熱残留磁気の方向から焼土の最終焼成年代を推定できるようになる。この場合、地磁気の方向が時計の針に相当し、針の位置を焼土の熱残留磁気が記憶していることになる。日本では、広岡によって西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線が定められてから、焼土の簡単な年代測定法としてこの方法が実際に適用できるようになった。なお、考古地磁気年代測定法の詳細については中島による解説(註1)を参考にしてほしい。

### 2. 焼土の状態と考古学的年代、熱残留磁気測定用定方位試料

#### (1)須恵器窯

この窯は細長い登り窯であり、丘陵の東落ちの斜面に長軸をほぼ東西にして造られている。焚口と窯尻は残っていない。どの部分の焼土も灰色の還元色をしており、高温度で焼成されたことがわかる。この窯の年代は出土した須恵器の様式から7世紀中頃と考えられている。定方位試料は、こぶし大の試料を石膏で固めクリノコンパスで方位を測定するやりかたで、窯尻に近い急斜面（勾配約20度）の所と、焚口に近い平坦部から10個ずつ、計20個を採取した。なお、試料採取法は他の焼土についても同じである。

## (2)土師器窯 1号

南西落ちの緩斜面にある窯跡はほとんど原型をとどめていない。残存するのは床の一部および床を半円形にとりかこんでいる壁の一部だけである。平坦な円形の床（直径約60cm）は、壁際でゆるやかに立ち上がり、垂直な壁（高さ約20cm）へと続いている。壁の焼土は土質が粗く剥がれ易かったが、立ち上がり部の焼土は緻密で地山にしっかりと密着していた。また、壁に続く地表面には数多くのひび割れが走っていた。焼土の焼成度はどの部分も低い。この窯の考古学的年代は、窯の中と周辺から出土した須恵器片から、奈良時代末と推定されている。定方位試料は、焼色が悪い床の平坦部を除き、立ち上がり部から6個、壁から15個を採取した、

## (3)土師器窯 2号

窪み状、円形の窯（直径約80cm）である。東側半分の焼土表面（深さ5mm）はよく焼けて固くなっているが、対照的に、それより下部の土質は軟弱である。このため、表面の焼けのよい部分は薄く剥がれやすかった。この窯からは年代の決め手となる遺物は発見されていない。採取した定方位試料は31個であるが、焼成度のよい表面の試料は2個のみである。

## (4)鍛冶炉

窪み状、円形（直径約45cm）の焼土である。還元色を帯びた金くそが数点出土したことから、この焼土遺構は鍛冶炉と考えられている。また、この鍛冶炉の年代は、鍛冶炉包含層が7世紀の住居跡包含層と中世の土層にはさまれていることから、7世紀末～中世と考えられている。定方位試料は、焼成度が低い炉の中央部をさけ、比較的よく焼けた周縁部から10個を採取した。

## (5)住居跡 4、炉跡

この焼土は、平坦な住居跡床面が40×65cmの範囲にわたって焼けたものである。焼土中心部の小範囲（15×15cm）は、他に比べて非常に強く焼けており、表面から1cmの厚さにわたって石のように固くなっていた。炉跡の年代は、炉跡包含層のすぐ上から弥生時代中期頃の土器が、またさらに上部の土層から須恵器が出土していることから、弥生中期と考えられている。定方位試料は、固く焼けた部分から4個、他から9個、計13個を採取した。

## 3. 測定結果

採取した試料を整形してから、それらの残留磁気の方角を無定方位磁力計を用いて測定した。第102図に測定結果をまとめてある。

### (1)須恵器窯

試料はいずれも強い残留磁気を帯びており、その方角を正確に測定できた。残留磁気の方角は非常によくまとまっているので、これらの平均方角は最終焼成時の地磁気の方角を代表していると考えてよい。

## (2)土師器窯1号

焼土の残留磁気強度は低焼成度を反映して弱かったが、残留磁気の方法は正確に測定することができた。図において、三角と四角は二つの異なる壁部ブロックからの結果であり、丸は立ち上がり部からの結果である。残留磁気の方法をくらべると、壁部と立ち上がり部では明らかに違った分布をしている。壁は剥がれやすく、また、地表のひび割れのために不安定であるため、このような残留磁気の方法のずれは最終焼成後の壁部の傾動によるものと考えられる。念のために、粘性残留磁気の影響を除いて残留磁器の方法にまとまりを改善するため、1000 eの交流消磁を試みたが、残留磁気の方法はかえって大きく分散してしまった。以上のことから、土師器窯の最終焼成時の地磁気の方法を代表しているのは立ち上がり部の残留磁気の平均方法であると結論できる。

## (3)土師器窯2号

3個の試料は壊れ、2個は磁性鉱物粒子の非均一分布のために残留磁気の方法を測定できなかった。残留磁気の方法のまとまりはよくない。図において、三角の測定点と同じブロックから採取された試料のものであるが、全体として他から離れ、かつ分散している。これはこのブロック全体が攪乱を受けているためと考えられる。実際、このブロックのある西側床面の土質は軟弱であった。また、四角の測定点の偏角は30度以上西偏し、この値は過去2000年間における地磁気の最大西偏度(15度)をはるかに越えているので、これらの試料も攪乱によって動かされていると判断できる。以上の測定結果を除外した残りについても、焼成度が低いためか、残留磁気の方法のまとまりは良くないが、それぞれを省略する正当な理由がないので、これらの平均方法を最終焼成時の地磁気の方法と考えることにする。

## (4)鍛冶炉

2個の試料は壊れたので測定していない。測定数は少ないが、残留磁気の方法のまとまりは比較的良好である。方法が離れた一点を除外した測定結果の平均方法を最終焼成時の地磁気の方法と考える。

## (5)住居跡炉跡

試料数は少ないが、残留磁気の方法のまとまりは非常に良い。弥生時代の住居跡炉跡は焼成度が低く、熱残留磁気の方法はかなり分散しているのが普通である。この測定結果は古い時代の貴重な地磁気資料となる。

それぞれの焼土の選択された残留磁気の方法について、平均伏角 ( $I_m$ )、平均偏角 ( $D_m$ )、Fisherの信頼度係数 ( $k$ )、95%誤角 ( $\alpha_{95}$ )、採用した試料数 ( $N$ ) を計算すると次のようになる。

	Im	Dm	k	$\alpha_{95}$	N
須恵器窯	54.1	11.9w	484	1.5	20
土師器窯 1号	49.9	8.9w	544	3.3	5
土師器窯 2号	52.9	16.5w	134	3.6	13
鍛冶炉	49.5	12.1w	173	4.6	7
住居跡 4、炉跡	37.4	7.9E	167	3.2	13

#### 4. 見掛けの考古地磁気年代

第103図に、それぞれの焼土の残留磁気の平均方向を+印で、また誤差の範囲を点線の楕円で示し、同時に広岡による過去2000年間の西南日本の地磁気永年変化曲線(註2)を示す。それぞれの焼土の考古地磁気年代を求めるには、地磁気永年変化曲線の上に、残留磁気の平均方向から近い点を求め、その点の年代値を読み取ればよい。年代誤差も同様にして見積ることができる。このようにして形式的に求めた年代値は次のようになる。なお、同一の焼土について複数の年代値が可能な場合、地磁気永年変化曲線に近い順に並べてある。

須恵器窯	740+15	590+20 A.D
土師器 1号	1040+60	770+35 A.D
土師器 2号	580+30	760+30 A.D
鍛冶炉	790+50	990+80 A.D
住居跡 4号, 炉跡	1600+50A.D	

#### 5. 焼土の年代の決定

##### (1) 須恵器窯 1号窯

土器様式から推定された7世紀中頃という考古学的年代とを比べると、590+20 A.Dは若干異なるものの近い年代であるが、740+15 A.Dは約100年も新しい方へずれた年代となる。土器様式の変遷は多数の遺物にもとずいて詳細に研究されているので、土器編年に100年という大きなくらいが生じることはまず考えられない。一方、考古地磁気学的には、地磁気永年変化曲線に近いという意味で740+15 A.Dという年代を選択すべきかのように見える。しかし、残留磁気の方角と地磁気の方角との距離は両年代で大差なく、残留磁気の平均方向が僅か2度西偏すると、どちらの年代も同じ重みで可能性をもつようになる。また、採取試料の数が増えると、平均方向が2度ずれることは十分ありうる。これらの考慮から、この窯の年代として590+20 A.Dを採用する方が合理的であると考えられる。

##### (3) 土師器窯 1号窯

奈良時代末という考古学的年代と比較すると、770+35 A.Dは整合しているが、1040+60 A.Dは問題にならない。一方、地磁気永年変化曲線に近いという意味では、1040+60 A.Dをこの窯の年代として選ぶべきかもしれない。しかし、壁からの測定結果を傾動のため省略した結果、年代決定に有効な試料数がきわめて少なくなり、それに伴って95%誤差角も大きくなっていく。有効な試料数が増加すると、残留磁気の平均方向が奈良時代末の地磁気の方向に近づくことは十分ありうる。以上のことから、この窯の年代として770+35 A.Dを採用するのが正しいと考えられる。

### (3)土師器窯2号窯

この窯について、最終焼成後の傾動が確実である試料は年代決定に用いる試料から除いてある。省略した試料の数は13個におよび、これは採取個数の約半分にも相当する。それにもかかわらず、残った試料の残留磁気の方向は依然として分散している。おそらく、この中にも多少動いたものがあるだろう。このように残留磁気の方向に不確実性があるので、この窯の考古地磁気年代値の精度は落ちており、考古地磁気法だけから唯一の年代を決定できない。この窯から約3m離れたところの土壇から、土師器窯1号から出土したのと同じ須恵器破片が見つかったことを積極的に評価すると、年代はどちらも可能であるが、第一候補として760+30、第二候補として580+30とするのが妥当であろう。

### (4)鍛冶炉

この遺跡の考古学的年代（7世紀末～中世）は幅が広く、790+50、990+80 A.Dのどちらの考古地磁気年代をも含むので、正しい年代値を選択する目安とはならない。一方、考古地磁学的にみても、年代決定に有効な試料数が少なく95%誤角が大きいので、どちらかを選択する強い理由はない。それゆえ、現状では、この遺跡の年代は790+50 A.Dも990+80 A.Dも同じ重みで可能性があるとしか言えない。唯一の年代値を決定するには他の情報を必要とする。

### (5)住居跡炉跡

考古学的年代が弥生時代中期であるのに比べて、考古地磁気年代は1600 A.Dとあまりにもほど遠い。炉跡包含層の上部にある須恵器包含層に乱れがなかったことから、須恵器時代以降にこの炉で火が燃やされた可能性はない。また、焼土の傾動によって見掛けの年代が生じることは実際にありうるが、この住居跡炉跡は安定な地盤上の平坦な床面が焼けたものであり、焼土が最終焼成後に動いた形跡は全くない。そうすると、年代の矛盾を合理的に説明するには、炉跡の年代は紀元前であり、広岡による過去2000年間の地磁気永年変化曲線には適合しないとするのが最も自然である。もし、この遺跡の実年代が紀元前の弥生時代中期とすると、その絶対年代は0～100 B.Cの間に入るので、地磁気の方角の移動速度は第103図から紀元前後で特に大きくなるのがわかる。これは地球物理学的に大変興味深いことである。古い時代の地磁気の研

究は、堆積物(註3)や鍾乳石の残留磁気をもとに行なわれているが、それらの結果は年代決定に使用出来るほど精度がよいとは言えない。紀元前～先史時代の地磁気永年変化曲線を最も精密に決定する方法は、焼土について、熱残留磁気の測定と物理的な方法による年代決定を同時に行うことである。このような基礎的な作業は、考古地磁気年代測定法の適用限界を拡大し、新しいデータをもとに地磁気変動を解析するために、考古学と地球物理の両分野にとって大変重要な仕事である。

### まとめ

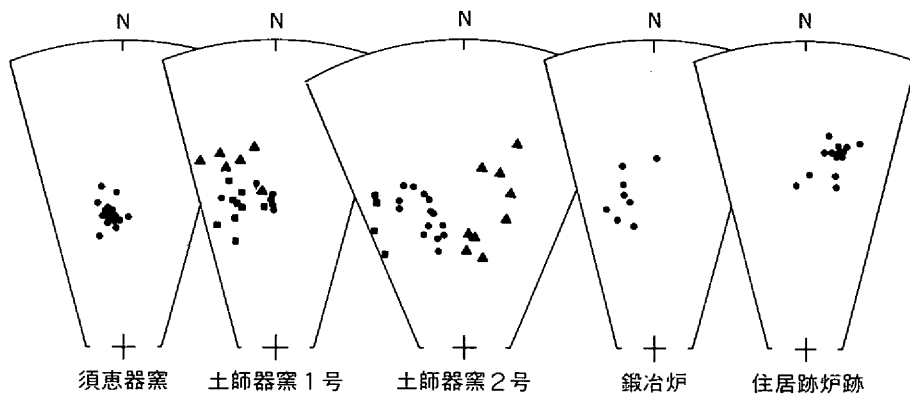
考察によって決定した年代は次のようになる。

須恵器窯	590+20 A.D
土師器窯1号	770+35 A.D
土師器窯2号	780+30 A.D (1位), 580+30 A.D (2位)
鍛冶炉	790+50 A.D または 990+80 A.D (同じ重み)
住居跡炉跡	紀元前 (年代値は不明)

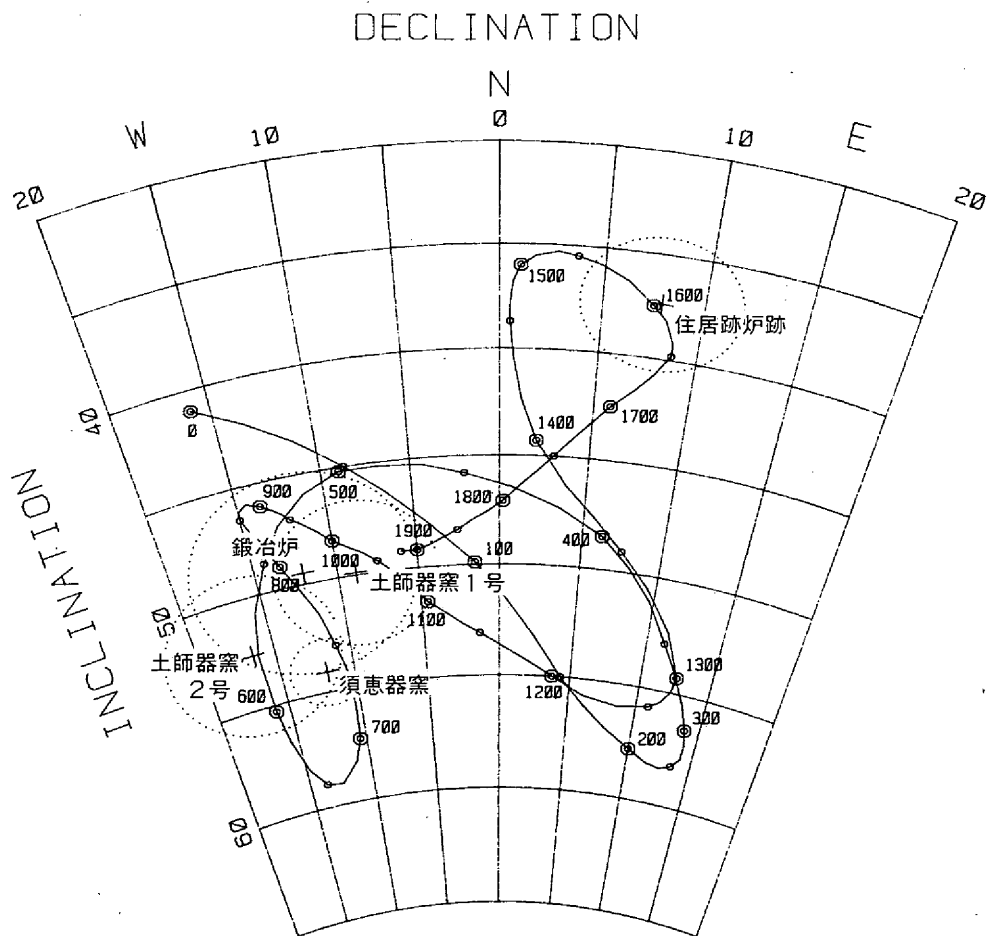
最後に、試料採取にあたって便宜を図っていただいた岡山県教育委員会 井上 弘氏に感謝する。

### 註

- 註1 中島正志、夏原信義 考古地磁気年代推定法 考古学ライブラリー9 ニューサイエント社
- 註2 広岡公夫(1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15巻、200～203
- 註3 広岡公夫(1984) 先史時代の地磁気永年変化 古文化財の自然科学的研究 古文化財編集委員会編 同朋社出版、812～816



第102図 各焼土の残留磁気の方



第103図 残留磁気の平均方向と西南日本における過去2000年間の地磁気永年変化曲線 (広岡)



1. 調査前の遺跡の遠景



2. 自動車道開通後の遺跡の遠景





1. トレンチの土層断面 (II区)



2. トレンチの土層断面 (II区)



1. トレンチの土層断面 (Ⅲ区)



2. トレンチ調査の作業風景



1. 住居跡3・4の全景



2. 住居跡4の土層断面



1. 住居跡5の全景



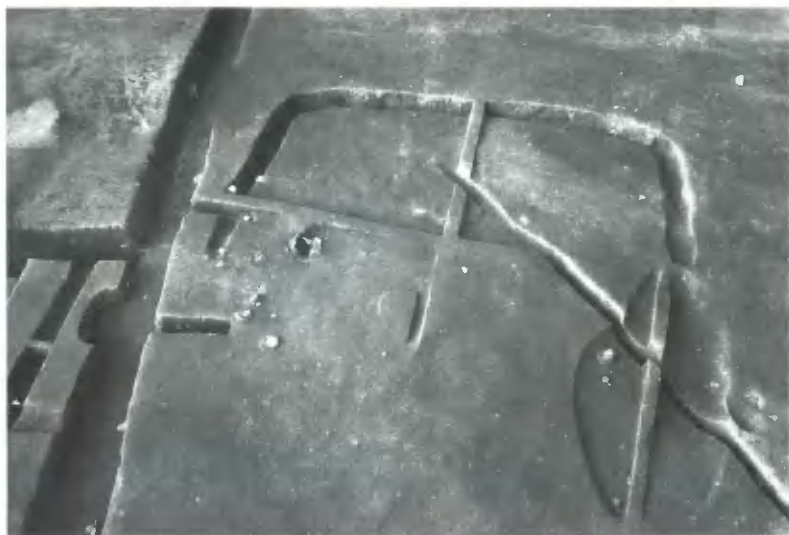
2. 住居跡6の全景



1. 住居跡 2・7



2. 住居跡 7



1. 住居跡 2 と溝状遺構



2. 住居跡 2 の全景

図版 8



1. 住居跡 8 の全景



2. 製塩土器の出土状態



1. 住居跡1の全景



2. 住居跡1のカマド





1. 溝3



2. 溝4



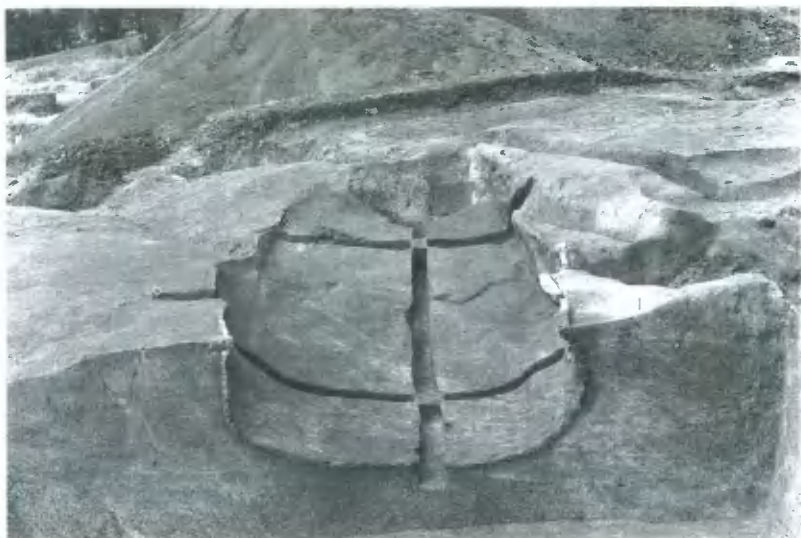
1. 須恵器窯の検出状態



2. 須恵器窯最終床面の検出状態



1. 須恵器窯の断面



2. 須恵器窯最初の床面



1. 須恵器窯と灰原



2. 須恵器窯から見た灰原



1. 灰原2の遺物出土状態



2. 灰原2の排水溝



1. 土師器窯とその前面（西側）



2. 土師器窯とその前面（東側）



1. 土師器窯と遺物の出土状態



2. 土師器窯の土層断面



1. 窯状遺構（北から）



2. 窯状遺構（南から）





1. 土坑 4·5·6



2. 土坑 7



1. 土壙2遺物の出土状態（西から）



2. 土壙8の全景（西から）



1. 土壙16の全景（南から）



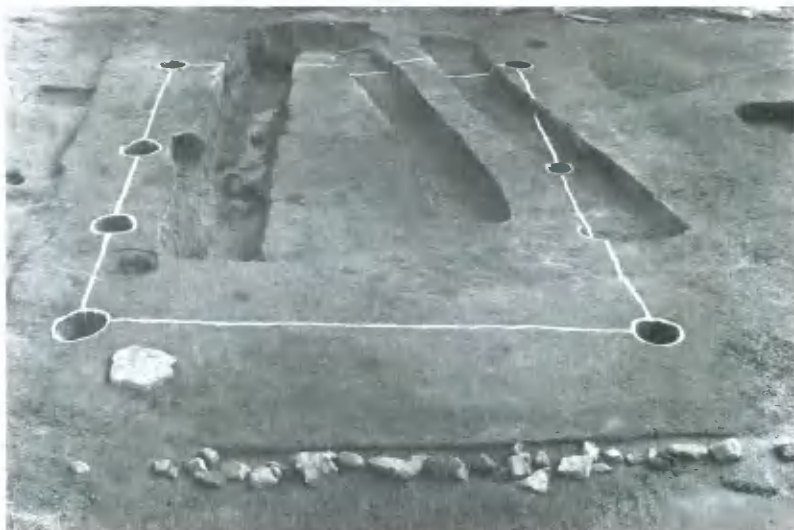
2. 土壙12の全景（北東から）



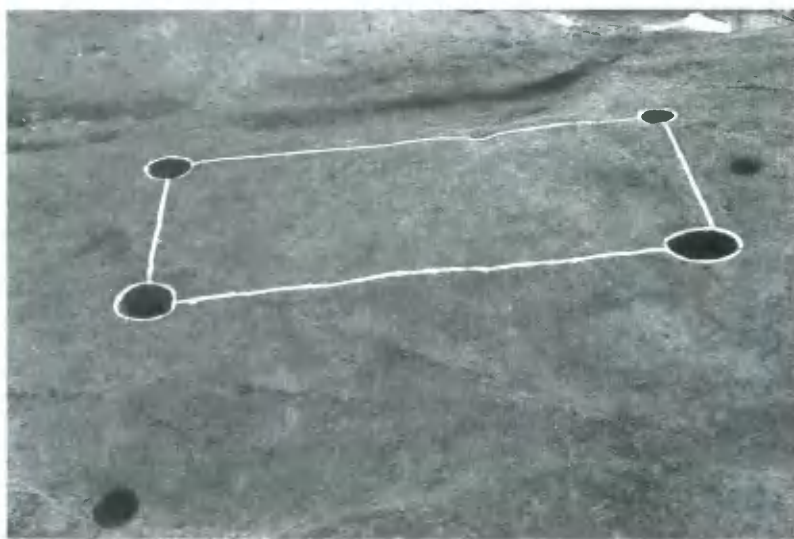
1. 鍛冶炉2 (南から)



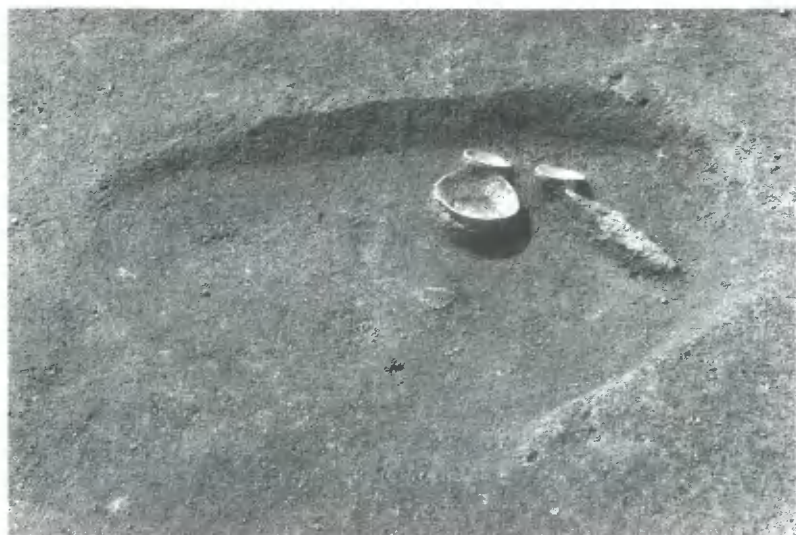
2. 土壇35・36の全景 (南から)



1. 建物2の全景（北から）



2. 建物1の全景（北東から）



1. 墓塚17の全景（東から）



2. 墓塚17の遺物出土状態（東から）



1. 仮道調査区の全景



2. 阿坂調査区の全景



1



5



2



6



3



4



7

1区墓坑(1~5)阿坂調査区墓坑(6)仮道調査区土坑(7)





1. 調査区の全景 (西から)



2. 須恵器窯の発掘風景



住居跡4の出土遺物



1. 住居跡4出土石器



2. 石器



住居跡5出土遺物

图版30

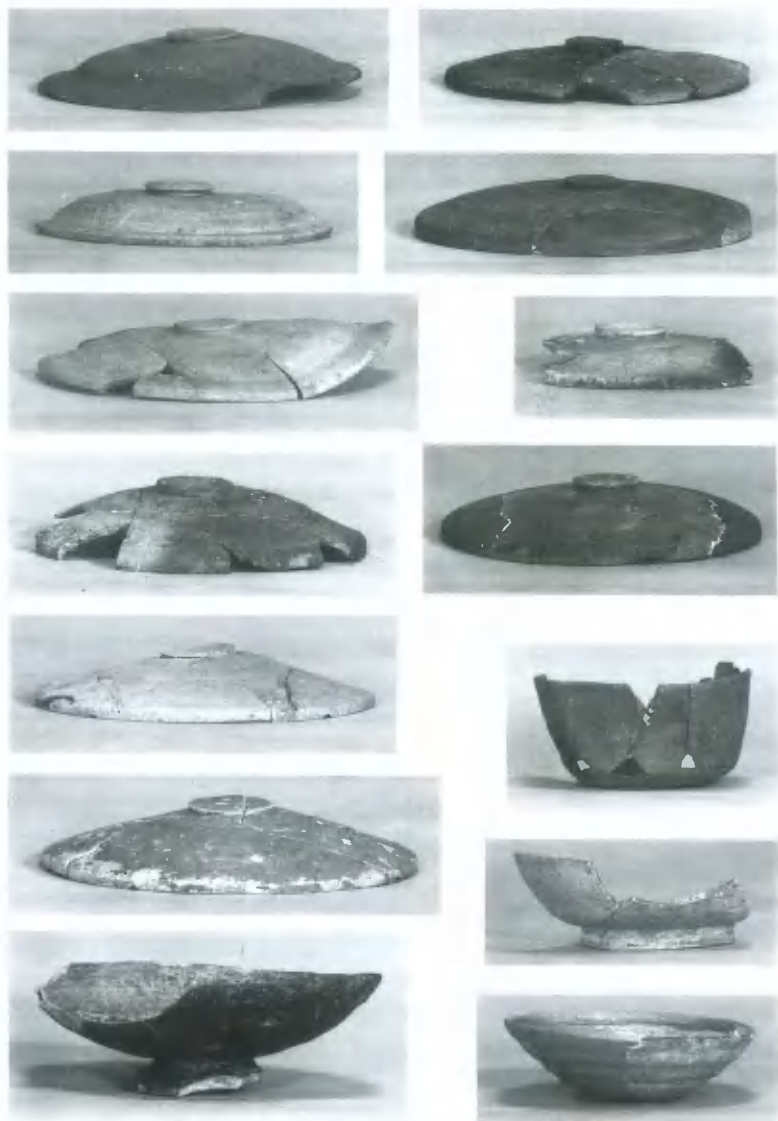


弥生土器

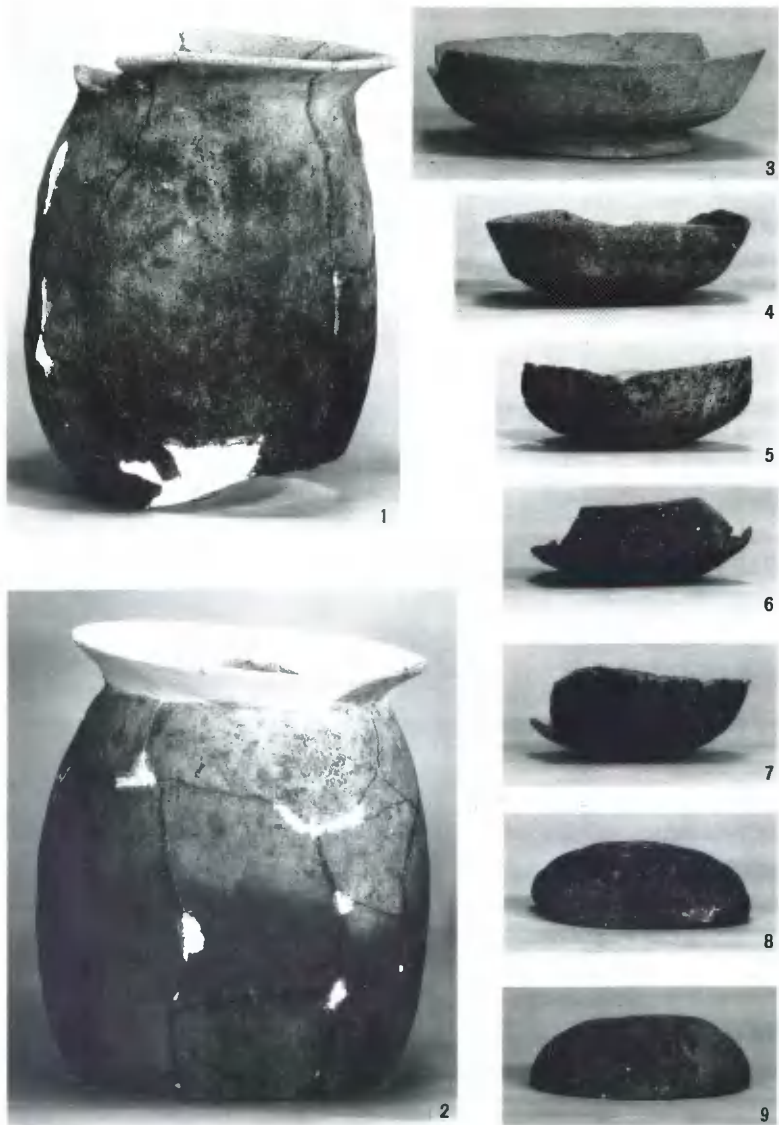


弥生土器

図版32



須恵器窯出土遺物

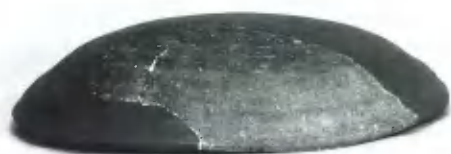


灰原2 (1~7)、須恵器窯 (8・9) 出土遺物





灰原 2, 須惠器窯出土甗



灰原 2 出土遺物

图版36



灰原 2 出土遺物



灰原2出土遺物

图版36



灰原 2 出土遺物



灰原 2 出土遺物

图版40



灰原 2 出土遺物



灰原 2 出土遺物





灰原2出土遺物



灰原 2 出土遺物

图版44



灰原 2 出土遺物



1



5



2



6



3



4



7



8

灰原 2 (5~8) 出土遺物 青磁 (1~4)

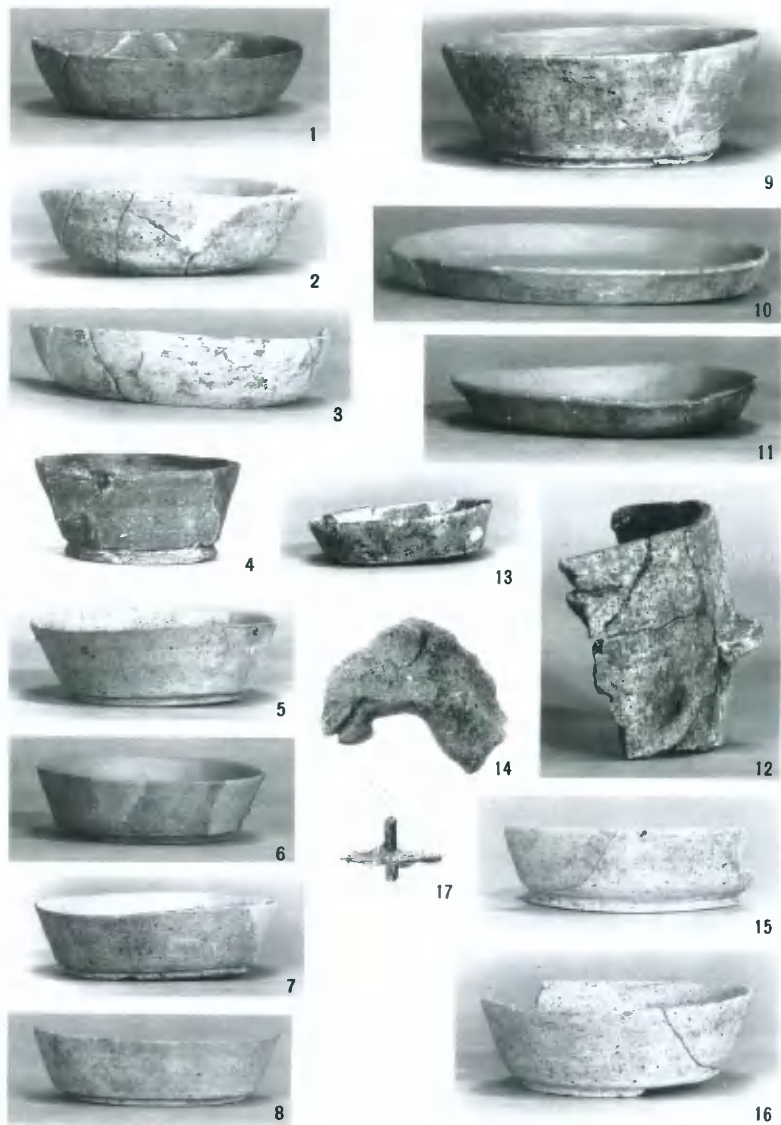


住居跡2 (9~11) 土壇13 (7) 土壇6 (8) 灰原2 (1~6) 出土遺物

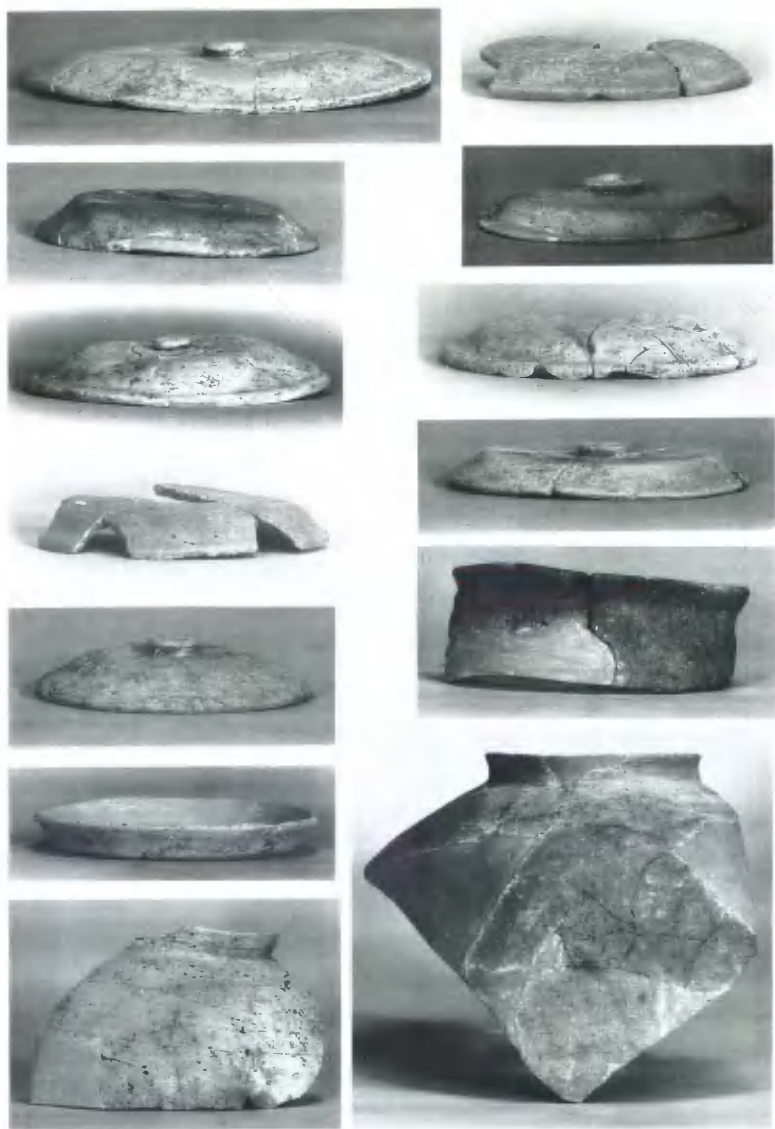


土壙2 (1~9) 土壙8 (10、11) 出土遺物

図版48



E 5 区 (1~14・17) 土師器窯 (15・16) 出土遺物



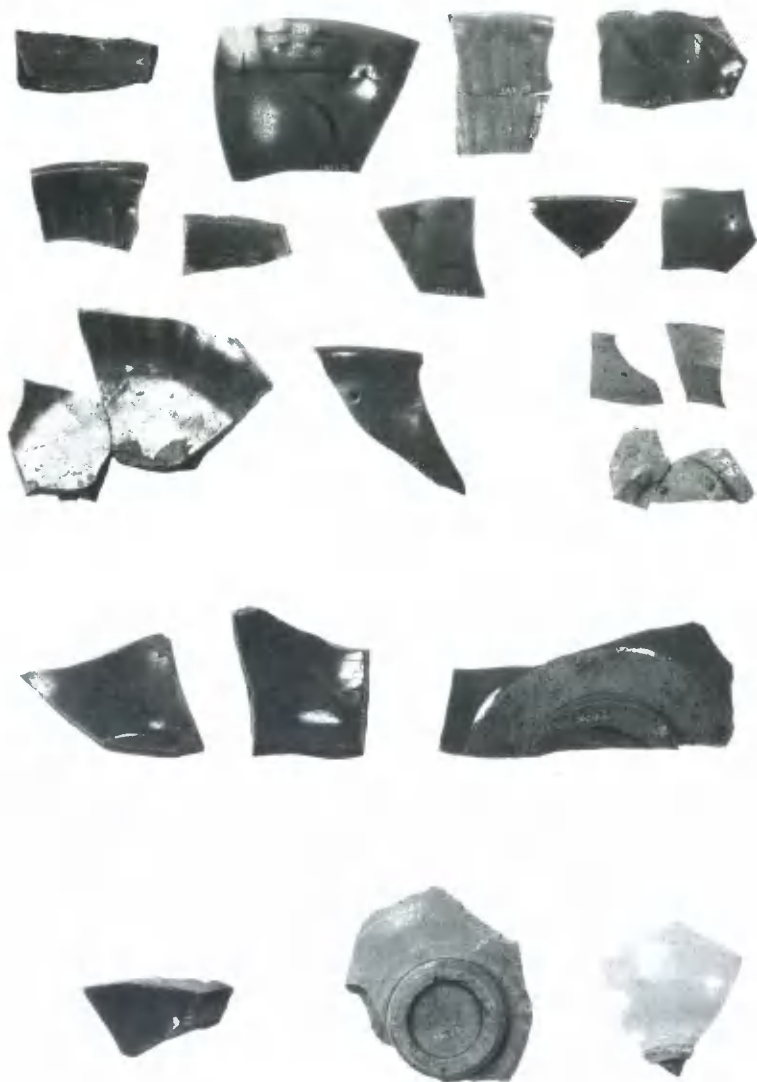
E 5 区出土遗物



図版50

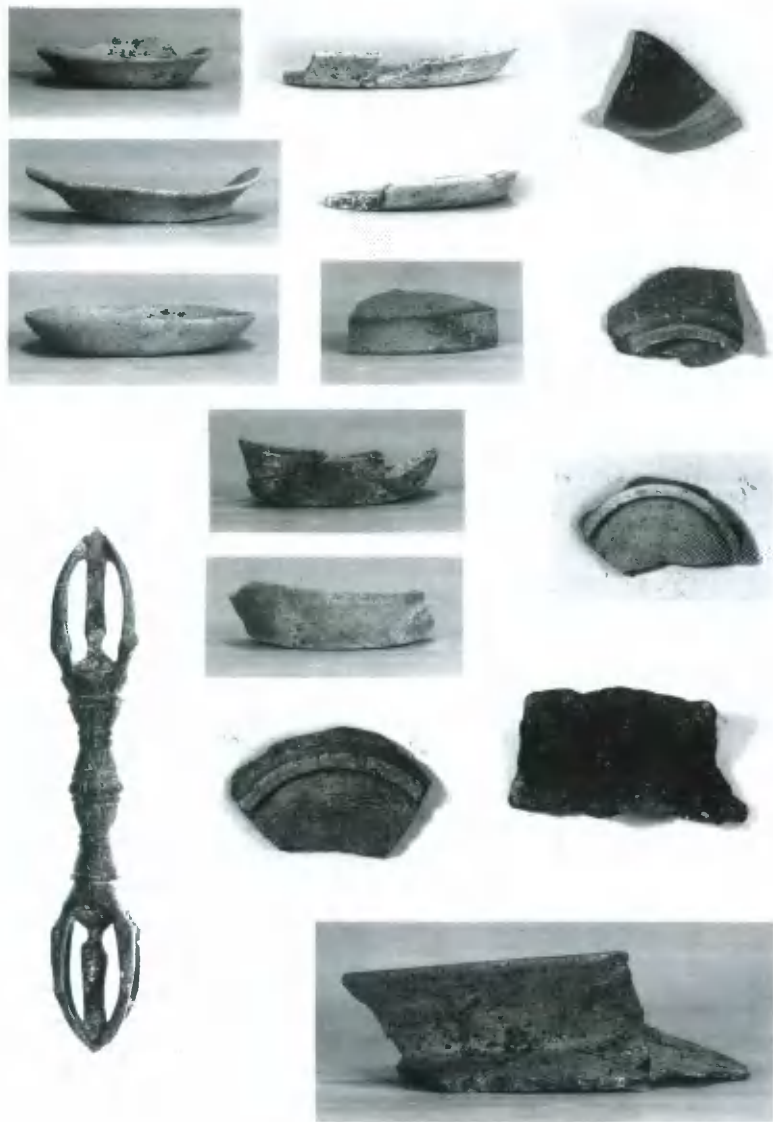


建物2 検出面の遺物



建物2 検出面の遺物

图版52

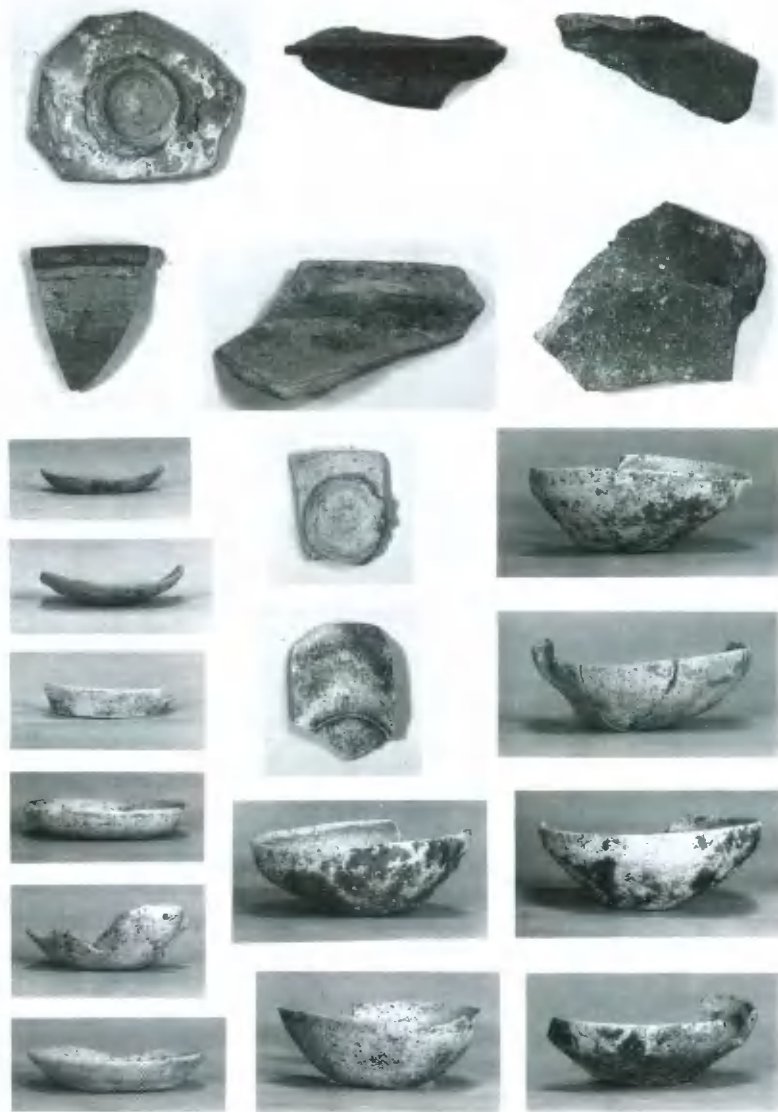


I区墓坑、II区出土遗物



仮道調査区出土遺物

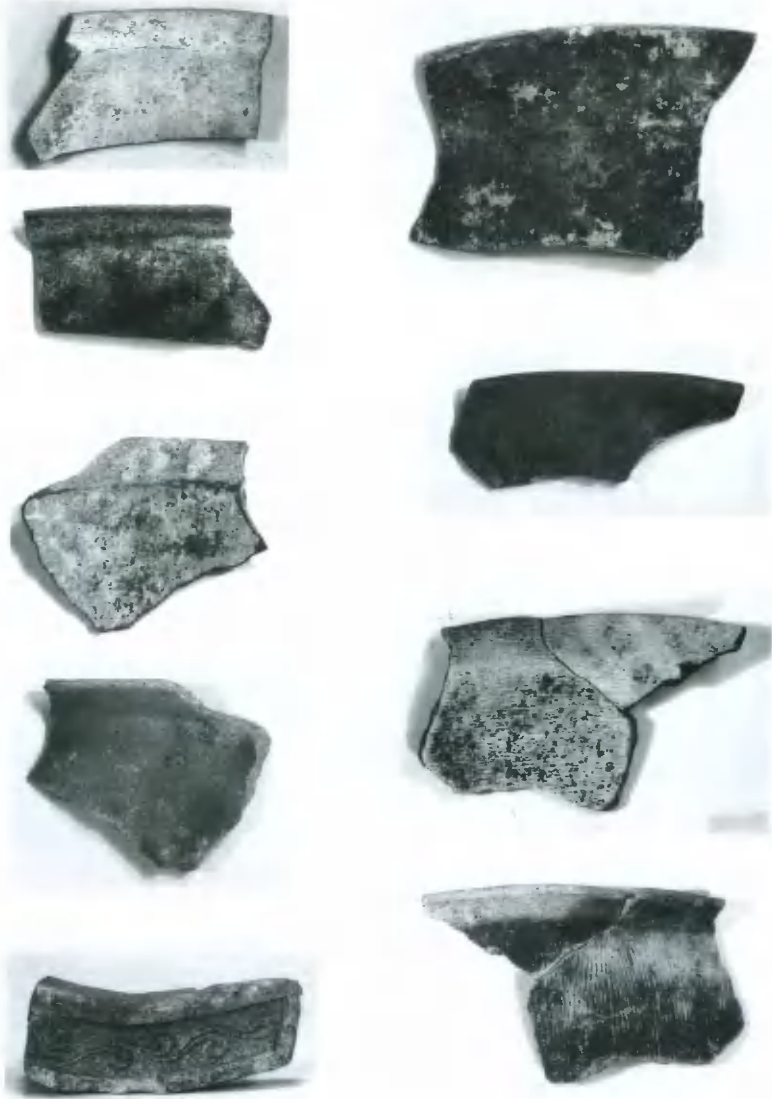
图版54



出土遺物（中世）



出土遺物 (中世)



出土遺物（中世）



出土遺物（中世）





出土遺物（中世）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 69  
山陽自動車道建設に伴う発掘調査 3

1988年10月25日 印刷

1988年10月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター

発行 建設省岡山国道工事事務所  
岡山県教育委員会

印刷 友野印刷株式会社